

遊戯王VRAINS 幻影の咆哮～青き天使との日常～

kajoker

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ファントム遊矢をリスペクトしている少年、神薙 侑哉（かななぎ ゆうや）はある日、目を覚ますと遊戯王VRAINSの世界にいた、そこで自分の義理の姉を名乗る神薙 花恋（かななぎ かれん）と出会い、遊戯王VRAINSの世界で生きていく。

アニメが始まる前にこの世界にトリップしてしまった主人公に待ち受けるものとは？

この小説は遊戯王VRAINS 幻影の咆哮を設定などを少し変えて、書き直したものです。

オリジナル展開が多めになるかもしれませんが、それでもよろしければご覧になってください。

目次

プロローグ	1
第1話 侑哉 VS 葵	8
第2話 ライバル登場!?	18
第3話 入部テスト	25
第4話 侑哉と葵	34
UA3500突破記念!美月の心	41
第5話 原作介入?	46
第6話 スピードデュエル	56
第7話 オッドアイズイリユージョン	67
UA1万突破記念!〜葵の看病〜	76
第8話 葵とのデート	84
第9話 対決!リボルバー!	92
第10話 エース対決!	103
第11話 決着、リボルバー戦!	112
第12話 お家デート	123
第13話 お泊まりフェイズ	130
第14話 姉弟のひととき	139
第15話 決戦!Phantom対playmaker	146
第16話 ペンデュラム対サイバース	156
第17話 新たな力	165
UA3万5千突破記念!お家デート 侑哉編	175
第18話 デュエル部によるこそ	185
第19話 兆し	191
第20話 絶望	201

第21話	受け継がれる力	213
特別編	初詣に行こう!	220
第22話	侑哉救出作戦?	228
第23話	希望	234
第24話	君臨する霸王竜	242
第25話	V S 霸王烈竜	254
第26話	バトルロワイヤル	265
第27話	天火の牢獄	273
第28話	消失するサイバース	282
第29話	降臨する守護竜	292
特別編	バレンタインの甘いひととき	303
第30話	鎮魂の竜	312
第31話	邂逅	330
第32話	ショッピングデート	338
第33話	潜入! SOLテクノロジー	347
第34話	データバンクでの邂逅	358
特別編	花恋との出会い	366
第35話	遊作の闇	373
第36話	侑哉の記憶	385
第37話	大切な人	396
第38話	異世界	404
第39話	怒りのブルーエンジェル	411
第40話	帰還	421
第41話	再びサイバース世界へ	433
第42話	サイバース世界での激闘	440

第43話	勝利への一手	449
第44話	リンクアクセス	463
第45話	側に居てくれる人	471
第46話	始動するハノイの塔	478
特別編	夏祭りに行こう！	487
第47話	ブルーエンジェル	498
第48話	強い想い	506
第49話	月夜に眠る姫	519
U A 1 0 万突破記念	くある世界の物語く	528
第50話	脱出	538
第51話	殺意	550
第52話	リボルバーとの邂逅	558
第53話	依頼	567
第54話	くある世界の物語 続(前編)く	574
第54話	くある世界の物語 続(後編)く	586
第55話	不穏な影	595
第56話	来訪者	601
第57話	知るための戦い	610
第58話	彼女の名	618
第59話	裕香の真実	627
第60話	怪盗見参！	635

プロローグ

LINK VRAINS、ここでは多くのデュエリストがVR空間で行われるデュエルに熱中していた。

その中で最近、注目されている一人のデュエリストがデュエルが行っていた。

アカウント名Phantom、フード付きのマントと首に下げているペンデュラムが特徴的なデュエリスト

「お楽しみはこれまでだ！オッドアイズ・ファントム・ドラゴンで攻撃！夢幻のスパイラルフレーム！」

幻影の竜が咆哮を上げとどめの一撃を放つ。

放たれた一撃は彼の対戦相手のライフを0にした

「いいデュエルだったよ、またやろう！」

彼は対戦相手に労いの言葉をかけて、その場を後にした。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ふう、楽しかったな…デュエルを見ている人達にも楽しんでもらえたかな？」

「お疲れ、Phantom！今日も快勝だったわね」

「あ、ブルーエンジェル！お前も見えてくれたの？」

「もちろん！」

先程のデュエルが終わり、今回のデュエルについて振り返っているとブルーエンジェルに声をかけられ、そんな会話を交わした。

ブルーエンジェルはLINK VRAINSのカリスマデュエリストでまさにアイドルといった感じの美少女で、多くの人から人気がある少女だ。

使うデッキも可愛い見た目のモンスター達のデッキ、トリックスターを使用している、だが、その見た目とは裏腹に鬼畜な効果を持つカードが多いデッキがトリックスターだ。

正直、何で俺が勝てたのか不思議なくらいだ。

「今、頭の中で失礼なこと考えてたでしょ？」

「いや、そんなことは考えてないよ…ただ、トリックスターは鬼畜だな

と」

思考の海に沈んでいたところから現実へと引き戻され、思わず、その口にしていた。

やばい、地雷踏んだかも…

「ま、その鬼畜なデュッキに高い勝率を誇っているPhantomが言っても説得力ないけどね」

「そう言われちゃ返す言葉がないよ…それよりもそっちは大丈夫なのか?」

「大丈夫よ、今日はデュエルはしないつもりだから」

「ほう、じゃあブルーエンジェルはわざわざ俺のデュエルを見るためにこっちに来てくれたのか…嬉しいな」

「そ、そんなわけないでしょ!私はあるたとデュエルしてきたのよ!」
「デュエルしないと発言してなかったか?」

「他の人とはやらないってことよ」

「お、おう…」

必死にまくし立ててくるブルーエンジェルに思わずまぬけな返事を返してしまった。

半分、冗談のつもりで言ったけどこうも否定されると割りとはこむな…

「それじゃ、さっそく始めるか…」

「ええ、始めましょう!」

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ふう、疲れた…」

ブルーエンジェルとのデュエルが終わり、俺はLINK VRAI NSからログアウトしてきていた。

デュエルの勝敗的にはギリギリで、俺の勝ち。

本当、毎度毎度ギリギリで勝つことが多いからな…たまには楽に勝ちたいもんだな…

「お帰り、侑哉、お疲れみたいね」

ホッとひと息をついている俺に声をかけたのは、栗色の長い髪に黒の瞳、そして、白のインナーに黒の上着に水色のフレアースカートと

いう服装のスレンダーな美少女、神薙 花恋（かんなぎ かれん）

俺の義理の姉だ

といつても、俺には彼女と過ごした日々の記憶はない。

なぜなら、俺は元々この世界の人間じゃないからだ。

目が覚めたら、この世界にいた…いわゆるトリップというやつだろう。

そのことを話したら、意外なことにすぐに信用してくれて俺の方がびっくりしたぐらいだ。

「まあ、肉体的というよりは精神的に疲れた…」

「そうなの、それでこっちの世界には慣れた？」

「まあ、そこそこね」

こんな風に俺が別の世界から来たことをまるで気にしないで受け入れてくれている。

まあ、花恋曰く『どの世界の侑哉も変わらないから気にしない』というこつらしいが

「いよいよ、明日から学校ね…」

「だな、友達できるかな？」

「侑哉なら大丈夫！自信持って！」

「ありがとう…」

俺は花恋の気遣いに感謝しつつ、一日を終えた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

翌日、早朝から学校へと向かい、教室へと入った。

「いくらなんでも早すぎたよな…って、あれ？」

教室に入ると、見覚えのある少女の姿が目に入った。

その少女はブルーエンジェルの正体である財前 葵…その人だった。

教室の窓際の席に座っている彼女はうつすら差し込んでいる朝日と相まってとても綺麗だった。

「お、おはよう…早いね、まさかこんなに早く教室に来てる人がいるなんて、まあ俺も人のことは言えないけどさ」

どう、話しかけたらいいかわからずそう声をかけつつ葵の隣へと

座った。

「おはよう、確かに随分と早いわね…えくと」

「侑哉、神薙 侑哉（かんなぎ ゆうや）、君は？」

「私は、財前 葵（ぎいぜん あおい）よ…よろしくね」

「よろしくー」

それにしてもラッキーというか何とかというか、まさか、葵の隣の席になるとはな…せっかくだし何か話したいな

「財前さんってデュエルするの？」

「え…？」

葵は面食らった表情をしながら、俺の方を見つめている。

バカか、俺は！ 出会って開口一番がデュエルするの？ ってなんだよ！ それ以外に話題がなかったとはいえ、もうちよつと上手い言い方があつたらあ！

「えっと、ほら、腕に着けてあるのってAI搭載型の新型デュエルディスクだろ？ だから、デュエルするのかな」と

苦しまぎれに話題をつなげる。ちなみに新型デュエルディスクの情報は花恋から聞かされた。

この世界に来るまで、遊作の使っているデュエルディスクがデッキ収納型の旧型だなんてまるで知らなかったからそれを聞かされたときは驚いた。

まあ、アニメが始まる前にこの世界に来ちゃったから知らなくて当然かもしれないが…

「するわよ、そういうあなたは？」

「もちろん、するに決まってるよ！ 俺はデュエルが大好きだからな！ デュエルを通して色んな人と出会ってき、その人達と最高のデュエルが出来たら本当に楽しいに決まってるし！」

そう、最高に楽しいに決まってる、デュエルってそういうものだと思うし。

「ふふっ…」

俺がそんなふうにデュエルについて話していると、葵から笑みが零

れた。

「あ…」

その頬笑みを見た瞬間、そんな声を溢してしまった。その頬笑みがとても可愛いものに見えて…もつと見てみたいな、なんてことを思っ
てしまって…

「どうかした?」

「あ、いや…急に笑うから、変なことでも言っちゃたのかなと思って…」

慌てて適当な理由をつけて、誤魔化した。

でも、この理由は嘘じゃない…実際変なことでも言ってしまったのか気にはなっていたし。

「ううん、そうじゃなくて…神薙君って本当にデュエルが好きなんだなって思っ…」

「まあ、そりゃね…」

なにせ、小さい頃からずっとデュエルを続けてるからな…

デュエルは俺の生きた証といつても過言じゃないかもしれない。

「ねえ、神薙君…良かったらデュエル部に入ってみない?」

「デュエル部?そんなのあるの!入る入る、絶対入る!」

「そんなに嬉しそうな顔をされるとは思っ…なかつたわ…まあ、嫌がられるよりはましだけど」

「俺からしたら、嬉しいよ…だって、デュエルが好きの人達とデュエルしたり、話したり出来るんだよ、それってすごい良いと思わないか?」

「そうね…良いと思う」

そう言っ、葵は小さく笑った。

「それじゃあ、放課後に私と一緒に行きましょう」

「ああー!」

その後、予鈴が鳴り出すまで葵と他愛ない会話を交わした。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ようやく、終わった…」

今日の授業がすべて終わり、大きくけのびする。

といつても、今日はほとんどかオリエンテーションみたいなもの

で、軽く自己紹介と授業の内容の説明だけで終わった。

自己紹介をした中に遊作の姿もあつて、改めて遊戯王 V R A I N S の世界に来たのだと実感した。

「それじゃあ、行きましようか!」

「おう!」

そう、答えて俺は葵の後に続いた。

「そーいや、デュエル部ってどの辺にあるんだ?」

「それは、今から決めるのよ」

「どういうことだ?」

「私達でデュエル部を設立するのよ」

「はい?」

悪戯っぽい笑みを浮かべて葵が口にした衝撃の事実思わず、そう聞き返す。

え、どゆこと?つまり、まだデュエル部はなくて俺達で設立するってこと?

「あ、職員室に着いたわね、神薙君もついてきて」

「あ、ああ…」

失礼します、そう一言言つて中に入る葵に続いて、俺も職員室の中へと入る。

職員室に入ると葵が、先生と話し始めた。

デュエル部の設立に関する交渉だとは思うけど、いまいち頭に会話が入ってこなかった。

というのも、さつき葵が言っていたことを未だに考えていたからだが…

「さ、神薙君、戻りましようか」

「え、お、おう…」

どうやらいつの間にか話し合いが終わっていたらしく、そのまま職員室を後にした。

「どうしたの?ポーっとして」

「いや、まじで俺達で設立するんだなあと思つてさ」「嫌なの?」

「いやいや、むしろその逆…楽しみなんだよ！こういうのってさ、わくわくしないか？」

「ふふっ、そうね…私も楽しみかな？」

そう呟く葵はどことなく楽しそうで、見ているこっちもますます、楽しみになってきた。

「部屋は明日、先生が手配してくれるって」

「そっか、明日かく楽しみだな！」

「そうね」

「部員、たくさん集まると良いな…」

「あんまり多すぎても困るけどね…」

「ははっ、確かにな」

そんな他愛ない会話を葵と交わしながら帰路につく、ずっとこんな風に話していたい…そんなことを思うほど心地よい。

「それじゃあ、私はこっちだから…神薙君、また明日！」

「ああ、また明日な！」

葵と別れ、そのまま自分の家へと帰る。

「明日、楽しみだな…」

そう呟いて歩を進める、明日の日を楽しみにしながら…

第1話 侑哉 VS 葵

「ふあゝあ、眠い…なんでこんなに早く学校に来ちゃったんだ、俺…」
って、言わなくてもわかるな…葵に会いたいがためだな、絶対…
昨日、葵と一緒にデュエル部の設立について話してからわくわくして、なかなか寝つけずに軽く寝不足に陥っていた。

おかげで、朝から何回目かわからないあくびをしていた。

「とりあえず、教室入るかな…」

そう呟き、教室の扉へと手をかける。

「おはよう、神薙君、今日も早いわね」

教室に入ると、昨日と同じように葵が挨拶をしてくれた。

「おはよう、財前さん…そっちこそ今日も早いな」

正直、今日も葵がこんな時間に学校に来ているとは驚きだった、まあ若干嬉しいけどさ…

そんなことを思いながら、葵の隣の席へと座った。

「この時間に来れば、あなたがいると思っていただけ、まさか本当にいるとは思わなかったわ」

「俺も…財前さんがこの時間にいるとは思ってなかったよ…まあ、少しは期待してたけどさ」

「期待してたの？私がいるって…」

「あゝ、うん…居てくれたら良いなって思ってた…」

正直に思っていたことを口にした、だって、実際にそう思っていたから。

「そ、そう…私……」

「最後の方だけよく聞き取れなかったんだけど、なんて言ったの？」

「な、なんでもないわ…あ、そうそう放課後にデュエル部の部室に案内してくれるって」

「そうなんだ！いやゝ、今日の放課後も楽しみだな…」

何だかはぐらかされたような気がしつつも、楽しみなのは本当だから、そう答えた。

「そうね、でも楽しみにしすぎて授業に集中できないっていうのはな

しよ」

「…善所します」

実に痛いところをついてくる、俺の場合はそんなふうになる可能性が高いから、尚のことだ。

「わかればよろしい!」

「お、おう…」

あれ、葵ってこんな性格だっけ?

まあ、葵の性格を完璧に知ってるわけじゃないもんな…可愛い一面を見れたしラッキーと思うことにするか

俺はそんなことを思いながら葵との会話を続けた。

／／／／／／／／／／／／／／

「ほら、神薙君…もう放課後よ、起きなさい!」

「はっ…!もうそんな時間?」

結局、授業が始まるまで葵と会話を続け、授業に望んだ。途中までの授業はちゃんと受けていたが、後半からうとうとしながら授業を受け続けていた。

そのたびに葵に起こされては、寝そうになりながら授業を受けて、放課後になる直前についてに撃沈して今に至る。

「まったく、行くわよ…神薙君…」

「ごめん、ごめん!今行くよ!」

葵に謝罪しつつ、教室を出る。

「神薙君、あなた昨日徹夜でもしたの?」

「徹夜というか、今日が楽しすぎてなかなか寝つけなくてさ…」

「なるほどね…なんというかあなたらしいわね」

「どういう意味!?!」

いや、まじでどういう意味?俺らしいってなにが!?

「ふふっ、教えない!」

「財前さん、なんか今日テンション高くないか?」

今日の葵はなんだかテンションが高い気がするのは多分、気のせいじゃないよな…

それだけ葵もデュエル部の設立を楽しみにしてるってことかな？

「そうかもね…神薙君は？」

「そりゃ、もちろん！俺もテンションMAXだよ！」

そんな会話を交わしながら、気づけば職員室の前に着いていた。

そのまま先生に連れられてデュエル部の部室の前へと移動した。

扉にはDUEL CLUBの文字が刻まれていて、なんとというか感慨深かった。

「開けるわよ…」

「お、おう…」

葵が扉に手をかけると自動的に扉が開き、妙にハイテクだなと思いつつ、部室へと入っていった。

中に入ってみると、思ったより広い部屋だった。

それなりの人数が座れそうな長方形のテーブルに、映像を写しだすことができる大きなスクリーン、後は黒板らしきものと、人が座ることができる机がちらほらとあった。

「へえ、けっこう広いんだな…」

「そうね、このぶんなら部員がたくさん来ても大丈夫そう」

「確かに…さすがに100人とかは無理そうだけど」

「さすがにそれは無理ね、でも思ったよりちゃんとした部室で良かった…」

葵はホツと胸を撫で下ろして、そんなことを言った。

まあ、俺達はどんな部室か知らなかったわけだしな、これで部室がとんでもない部屋だったらショックどころの話しじゃないもんな…

「それにしても、よくこんな良い教室余ってたよな」

「先生達に感謝しないとね」

「ははっ、そうだね」

そんな会話を葵と交わしつつ、近くのテーブルへと腰かける。

「なあ、財前さん…せっかくだしデュエルしていかない？俺、一回財前さんとデュエルしてみたいし」

「いいわよ、受けて立つわ！」

「よし、そうこなくっちゃ！」

予想以上に乗り気な葵の言葉を受けて、カバンからデッキを取り出す、葵とはLINK VRAINSの中では何度もデュエルしているが、現実でデュエルするのは初めてだ…

正直、葵がどんなデッキを使うのか想像もつかない、だけど…だからこそ面白い！

「最高に楽しいデュエルにしようぜ！財前さん！」

「…っ！」

「……どうかした？」

少し、頬を赤くしながらこちらを見つめる葵に思わずそう質問する。

「なんでもないわ……さあ、始めましょう！」

「わ、わかった……それじゃあ、始めよう！」

「デュエル!!!」

侑哉LP4000

VS

葵LP4000

「ジャンケン、ポン」

侑哉 グー

葵 パー

先攻、後攻を決めるジャンケンは俺の負けだった。

本当、俺ジャンケン弱すぎだろ…

「それじゃ、先攻はもらうわね」

「どうぞ」

ジャンケンは負けたけど、葵のデッキを知るにはむしろちょうど良いか…俺はそう考え、葵にターンを進めるよう促した。

「私のターン、私はスケール2のEMドラミングゴングとスケール8のEMオッドアイズ・ユニコーンでペンデュラムスケールをセットイング！」

「なっ…!?!」

思わず、驚きの声が漏れる…

ペンデュラムだって?!いくらなんでも予想外すぎる…

まさか葵がペンデュラムを使うなんて…

「驚いた？でもここからが本番よ！私はEMドロバット・ジョーカーを召喚！」

EMドロバット・ジョーカー攻撃表示（ATK1800）

「このカードが召喚に成功した時、デッキからこのカード以外のEM、魔術師Pモンスター、オッドアイズモンスターのいずれかを手札に加える！私はEMペンデュラム・マジシャンを手札に加えるわ」

見た感じ、葵のデッキはEMデッキってところかな？もしかして、俺に影響されたとか？

いや、ないな…まず、ないな

「そして、私は永続魔法、補給部隊を発動！これで準備は整ったわ！ペンデュラムスケールは2と8、これでレベル3から7のモンスターが同時に召喚可能！ペンデュラム召喚！来て、私のモンスター達！手札からEMペンデュラム・マジシャン、そしてEMセカンドンキー！」

EMペンデュラム・マジシャン攻撃表示（ATK1500）

EMセカンドンキー攻撃表示（ATK1000）

おっと、ボーっとしてる場合じゃなかったな…集中しないと…

俺はそう頭を切り替え、葵のターンの行動に目を向けた。

「ペンデュラム・マジシャンとセカンドンキーの効果発動！まずはセカンドンキーの効果、このカードが召喚、特殊召喚に成功したとき、デッキからEMモンスターを墓地に送る、ただし、Pゾーンにカードが2枚存在する場合は墓地に送る代わりに手札に加えることもできる！私はEMレインゴートを手札に！」

さすがはEM、サーチ力高いな…まあ、でもこんなの序の口だよな…さて、どうするか…

「さらに、ペンデュラム・マジシャンの効果でペンデュラム・マジシャンとセカンドンキーを破壊し、デッキからEMパートナーガとスライトハンドマジシャンを手札に、そして、補給部隊の効果、自分の場のモンスターが破壊された場合、デッキからカードを1枚ドロウできる！」

手札0↓4

すごい、一瞬で手札が初期枚数近くに復活したよ…さすがだな…
葵、きつとたくさん練習したんだろうな。

「私は、カードを1枚伏せてターンエンドよ」

侑哉LP4000

手札5

場なし

伏せなし

Pゾーンなし

葵LP4000

手札3 (EMレインゴート、EMパートナーガ、EMスライトハン
ドマジシャン)

場 メインモンスターゾーン EMドロバット・ジョーカー攻撃
表示 (ATK1800)

EXモンスターゾーンなし

伏せ2 (内、1枚、補給部隊)

Pゾーン EMドラミングゴング (スケール2)

EMオッドアイズユニコーン (スケール8)

「面白くなってきた！いくぞ、俺のターン、ドロー！」

さて、どうしたものか…レインゴートがあるからドロバット・
ジョーカーは倒せないだろうな……とりあえず、ダメージを与えるだ
け与えるか。

「俺は手札から魔法カード、おろかな埋葬を発動！このカードの効果
でデッキからE・HEROネオスを墓地に送る、そして、魔法カード
Oーオーバーソウルを発動！このカードは墓地のE・HEROの通常
モンスターを特殊召喚できる！甦れネオス！」

E・HEROネオス攻撃表示 (ATK2500)

「神薙君のデッキはE・HEROデッキなのね…」

「そういう財前さんはEMデッキなんだな、正直、意外だったよ…」

「まあ、最近作ったばかりのデッキだしね…」

「それをここまで使いこなしてるのか、さすがだな」

本当にすごい、ここまで使いこなせるようになるには結構なテストプレイを重ねる必要があるんだから。

「まあ、私の場合は見本になる人がいたから…」

「それって…?」

「Phantom、神薙君も名前ぐらい知ってるでしょ?」

「そ、そりゃあね…」

だって、俺、本人だし…とはさすがに言えるわけもなくそう、言葉を濁した。

「あ、ごめん…話しが逸れちゃったわね、続けて!」

「オツケー、それじゃあ行くよ!」

さてと、行きますか!

「俺はさらに、手札からE・HEROエアーマンを召喚!このカードが召喚、特殊召喚に成功した時デッキからHEROモンスターを手札に加える!俺はE・HEROオネスティネオスを手札に加える!」

待てよ、この手札なら運が良ければこのターンで勝てるぞ…よし、やるか!

「俺は手札から魔法カードRーライトジャスティスを発動!このカードは自分の場のE・HEROモンスターの数までフィールドの魔法、罠カードを破壊する!俺の場のHEROは2体、よって俺は伏せカードとドラミングコングを破壊する!」

「なら、破壊される前に伏せカードを発動!エンタメ・フラッシュ!このカードの効果で相手フィールド上の全てのモンスターを守備表示にするわ!」

E・HEROネオス攻撃表示(ATK2500) ↓守備表示(DE
F2000)

E・HEROエアーマン攻撃表示(ATK1800) ↓守備表示(D
EF300)

「これで、あなたはこのターンこれ以上追撃できないわよ!」

「いいや、お楽しみはこれからさ!」

「…っ！その台詞は…」

葵が、驚いた表情を浮かべそう口にする。

「というか、おもいつきりPhantomの時みたいにやっちゃってるんだけど大丈夫かな…」

まあ、でもこれが俺だからな…誤魔化す方法は後で考えるか。

「俺は手札から永続魔法、魂の共有ーコモンソウルを発動！俺はネオスを選択して効果を発動する、その効果で俺は手札のN・フレア・スカラベを特殊召喚！」

N・フレア・スカラベ攻撃表示（ATK500）

「そして、コモンソウルの効果で呼び出したモンスターの攻撃力分、選択したモンスターの攻撃力をアップする！」

E・HEROネオス（ATK2500↓3000）

「でも、今さら攻撃力を上げてても意味がないわよ…何を狙っているの？」

俺に、そう尋ねる葵はどことなく楽しそうな表情を浮かべていた。

まるで、俺がこれから何をするのか楽しみでしようがない、そんな表情で

「いいね、楽しんでもらえてるみたいだ…なら、その期待に応えないとね！いくよ！俺はネオスとフレア・スカラベをデッキに戻し、コンタクト融合！」

「コンタクト融合？」

「N（ネオスペーシアン）とネオスをデッキに戻し、ネオス融合モンスターを特殊召喚する融合召喚だよ、そして、俺が呼び出すモンスターはE・HEROフレア・ネオス！」

E・HEROフレア・ネオス攻撃表示（ATK2500）

「そんな融合モンスターがいるなんて…」

「まあ、知らなくてもしょうがないかな？」

だって、前の世界でも遊戯王GXを知らない人からしたら多分、コンタクト融合なにそれおいしいの？状態になりそうだしな。

「ともかく、このままいかせてもらうよ！フレア・ネオスはフィールド上の魔法、罫カードの数×400ポイントアップする！フィールド上

にはオッドアイズユニコーンと補給部隊、コモンソウルの3枚、よつてフレア・ネオスの攻撃力は1200ポイントアップする!」

E・HEROフレア・ネオス攻撃表示(ATK2500↓3700)
「いくぞ、バトラー!」

「その前に手札のレインゴートの効果!私は自分の場のEMドロバット・ジョーカーを選択して効果発動!このターン、ドロバット・ジョーカーは戦闘、効果では破壊されないわ」

「構わない、バトルだ!フレア・ネオスでドロバット・ジョーカーに攻撃!そして、この瞬間手札のオネステイネオスの効果!このカードを墓地に送ることで自分のHEROモンスターの攻撃力を2500ポイントアップする!」

E・HEROフレア・ネオス攻撃表示(ATK3700↓6200)
「攻撃力、6200!」

「いけ!フレア・ネオス!バーン・ツー・アッシュ!!」
葵LP4000—4400—400

「私の負けよ、神薙君:強いわね」

「みんなが俺に力を貸してくれたからだよ:」

「そういえば、神薙君に聞きたいことがあるんだけど」

「うん、なんだ?」

「あなたが、Phantomなの?」

「え:」

「しまった!誤魔化す方法考えてなかった!

いやいや、こういうときこそ落ち着くんだ!俺!

「いや、実は俺さPhantomの大ファンで、Phantomの真似をよくするんだよ:」

「それにしては、随分と板についてたみたいだけど?」

「何回か真似してるからね、そういや、財前さんもPhantomのファンなのか?」

もつともらしい理由を述べて、さりげなく話題を変える。

「まあ、私の場合はファンというか:なんというか:」

「何だよ、歯切れが悪いな:言いにくい感じなのか?」

俺がそう言うと、葵は同意するように頷いた。

何なんだ？すごい気になるんだけど…まあ、無理に聞くのも悪いよな。

「そっか、それなら無理には聞かないよ…それじゃ、もう一度デュエルしようぜ！財前さん！」

「なんだか、はぐらかされた気がするけど…まあ、いいわ、やりましよう」

そう言って、葵はデュエルを受けてくれた。

その後、俺と葵は日が暮れるまでデュエルを続けた。

第2話 ライバル登場!?

「結局、今日もこんな時間に来ちゃったわね…」

まだ、誰も来ていない教室で一人そう言葉を溢す。

私が、こんなに朝早くの教室に来ているのは理由がある。

それはある一人の男の子を待ったため。

普段、この時間に来るからといって、今日も来るとは限らないのに、気がつけばこんな時間に教室の自分の席に座って彼が来るのを待っていた。

私がしばらく窓の外の空を眺めながら、彼のことを待っていると教室の扉が開く音がした。

その音がする方を見ると、ちよつと癖つ毛のある黒髪の少年が目に入った。

「おはよう、神薙君」

「おはよう、財前さん」

そうして、いつも通りの挨拶を交わして神薙君は私の隣へと座った。

こんな、何でもないやりとりが最近の私の密かな楽しみになりつつある。

私がこんな時間に教室に来ているのも、ほとんどが神薙君と、話したいがためだったりする。

「財前さん、いつもどれくらいに家を出てるんだ？いつも俺よりも早く学校に来てるし…」

「それは、教えられない」

「だよな…そういえば、なかなかデュエル部の部員増えないな」

「確かにそうね、まあでも出来たばかりの部だしそう簡単に部員も増えないわよ」

「それもそうか…ま、気楽にいくか！」

「うん！」

神薙君とそんな会話をしながら、このなにげない時間を心地よく感じる。

部員は確かに増えてほしいけど今はこのままで良いかな…だって、今は神薙君のことをもつと知りたい、そう思う自分がいるから。

私は、そんなことを思いながら神薙君との会話を続けた。

／／／／／／／／／／／／

今日、最後の授業も終わりに差し掛かろうとしている中、私は過去へと思いを馳せていた。

それは、私がLINK VRAINSでPhantomに出会ってしばらく経ったときのことだった。

あの時の私は、ブルーエンジェルとしての私と現実の私とのギャップで本当の自分がどっちなのかかわからなくなっていた。

「どうしたんだよ、なんか悩みごとか？俺で良ければ相談に乗るけど？」

そんなとき、そう声を掛けてくれたのがPhantomだった。

最初は話そうかどうか悩んだけど結局はPhantomに今の自分の悩みを打ち明けた。

私の話しを彼は否定するでもなく、頷くわけでもなくただ黙って話を聞いてくれた。

「ふむ、なるほどな…よくわかんないけどさ、そんなことで悩む必要はないんじゃないか？」

「どういうこと？」

「だってさ、ここにいるお前も、現実のお前もさ、結局はお前自身であることに変わりはないだろ？」

「あ…」

そのなにげない一言がどれほど嬉しかったか、きつと彼は知らないだろう…

初めて私という人間が認められた気がして、私という一人の人間を見てくれた気がして…

「それにさ、俺は現実のお前のことは知らないけど、現実のお前ともこんなふうにデュエルしたり、楽しく話したりして一緒に過ごせる気が

するんだよ…だから、大丈夫だ!」

「何が大丈夫なのか…わからないわよ…」

「まあ、長々と話したけど、結局言いたいことはさ…ブルーエンジェルとしてのお前も、現実のお前も、両方ひっくるめてお前自身だってこと!どっちが本物とかないって!」

その言葉を聞いた瞬間、感情が爆発し、抑えきれなくて気づけば涙を流していた。

でも、それは悲しみとかじゃなくてむしろ――

「え、ちよつと待て!なんで泣いてるんだ?俺、なんか悪いこと言っちゃったか?だったら謝るけど…」

「うんうん…そうじゃなくて…嬉しくて…」

嬉し泣きといった方が正しかった。

「そんなふうに言われたこと、なかったから…まあ、私が誰にも相談したことがなかったからかもしれないけど…」

「じゃあ、俺に相談してくれたってことは、それだけ信用してくれてるってこと?」

「そうかもね…本当になんであなたには相談できたんだろう…?」

「お、おう…そう返されるとは思ってたから返答に困るな…まあ元気になったなら良いか…」

「…ありがとう、Phantom…」

「良いよ、別に気にしなくて…」

そう言いながら、彼は私を背にして歩き始めた

「あ、そうだ…一つ言い忘れてた」

「うん?」

「やっぱり、ブルーエンジェルには笑顔の方がよく似合ってるよ!」

最後に、そんな爆弾発言を残して…

／／／／／／／／／／／／

「おーい、財前さん!デュエル部に行こうぜ!」

神籬君の私を呼ぶ声に現実を引き戻される。

何で私、あの時のことを思い出してるんだろ…?

まあ間違いなく目の前にいる神薙君のせいなんだろうけど。

「わかってる、今行くわ！」

そうして、いつも通り放課後のデュエル部へと歩を進める。

「そういや、さっきブーツとしてたけど考え事でもしてたの？」

「まあね、ちよつと考え事してたの……」

「そっか……何を考えてたんだ？」

「それは秘密！」

「だよな、わかっちゃいたけどさ……」

そんな会話をしながら、気づけばデュエル部の部室の前へとたどり着いていた。

「部室に入ったら部員がいた、みたいなことにならないかな？」

「さすがにそれは難しいと思うわよ」

「そう、即座に返されるとへこむんだけど……」

そんなやりとりをしながらデュエル部の中に入ると、人影が見え
た。

「え、嘘……」

まさか神薙君の言った通りになるとは思っていなくて、思わずそう
声を上げた。

神薙君も半分放心状態になっていて、驚いているのが目に見えてわ
かった。

「あのく、すみません……ここってデュエル部の部室ですよね？」

私達にそう尋ねてきたのは私と同じぐらいの身長のショートポ
ニーの少女だった。

「そうだけど……君は、あれ？見たことあるような……」

「もしかして、神薙君と財前さんですか？ほら、私、同じクラスの葉山

美月（はやま みづき）ですよ！」

「ああ、そんな人がいたような気がする」

「ごめんなさい、私もあなたのことは見たことがあるような気がする
程度の認識しかないんだけど……」

私と神薙君の言った言葉を聞くと見るからに落ち込んでいるのが
よくわかった。

「しよすがないですよ、まだ学校が始まってそんなに経ってませんし…それにお二人とは話したことなんてほとんどありませんから」

「まあ、それはさておき葉山さんは何でデュエル部に？」

なんとなく暗い雰囲気になったのを変えるためか神薙君が葉山さんにそう声を掛けた。

「はい、実は私、デュエルが大好きで！ぜひ、デュエル部に入りたいなって思ってます！」

「へえ、そうなんだ！もちろん、こっちとしては大歓迎さ！な、財前さん！」

「ええ、歓迎するわ…よろしくね、葉山さん」

口ではそう言ったけど、なぜか彼女が部員になることを素直に喜べない自分がいた。

部員が増えるのは良いことのはずなのにそれを拒みたい、そんなことを思ってしまう…

なんでだろう？

「大丈夫か？財前さん…なんか様子が変だけど」

「そ、そう？よくわかるわね…」

「一応は、ね…まあ話したくないならそれでもいいし、無理に聞いたりしないよ」

「ありがとう、神薙君…」

どうやら、神薙君にはお見通しだったみたいだ…まあ私が何を考えていたかはわかってないと思うけど。

「神薙君と財前さんって仲が良いんですね、まるで恋人同士みたいですー！」

「はい!？」

葉山さんのいきなりの発言に思わず神薙君とハモリながら聞き返す。

「こ、こ、こ、恋人!?わ、私と神薙君はそんな関係じゃ…」

「そ、そうだよ…俺と財前さんはそんな関係じゃないって！」

「むう…」

「なんで、そこで俺を睨むんだよ？」

「教えない…」

確かに事実だけど、ここまでハッキリと言われるとそれはそれで嫌…

はあ、私ってこんな面倒くさい女だったかな…

「そ、それはそうと葉山さんはどんなデツキを使ってるんだ？」

この空気に耐えかねたのか、神薙君が葉山さんに問いかけた。

「私はですね、青眼デツキを使ってるんです！しかも、このデツキ、Phantomさんにもアドバイスしてもらったんですよ！おかげで最近、調子がいいんですよ！」

「そ、そうなんだ…」

「葉山さんはPhantomと、どういう関係なの？」

「実は、PhantomさんがLINK VRAINSに初めて来たときにLINK VRAINSの中を案内したんですよ！それで、お礼にっことでデツキのアドバイスをしてくれました！」

「へえ、そうなの」

「ちよつと待て、なんでそんなジト目でこっちを見るんだよ、財前さん…」

自分は関係ないと言わんばかりの態度の神薙君をおもいつきりジト目で見つめる。

だって、神薙君がPhantomだとしたら葉山さんの正体も勘づいているだろうし…

まあ神薙君がPhantomだとは限らないけど…可能性は充分にある。

でも、まだ確証が持てない…なにか確証を持てるようなものがあればいいんだけど…

「神薙君、私とデュエルしましょうよ！」

「もちろん、受けて立つよ！葉山さん！」

私が一人思考の海に沈んでいるなか、神薙君と葉山さんのそんな会話が聞こえてきた。

「それじゃあ、さっそくー！ー！」

「待って！」

気づけば私は声を上げていた、なぜかはわからない、ただ、神薙君と葉山さんがデュエルするのはなんだか嫌だった。

本当にどうしちゃったんだろう…私

「財前さん、もしかして、葉山さんとデュエルしたいのか？なら、先にデュエルしても良いよ！俺も財前さんと葉山さんのデュエル、見てみたいし」

「私も構いませんよ」

「ええ、そうさせてもらおうわ…あなたがデュエル部に入る資格があるか、入部テストといきましょう…」

「え、デュエル部にそんなの無くないか？」

それはそうだ、だってこれは私のわがままで、私が勝手にやっていることだから…でも、こうなった原因である当の本人にはもう少し自覚をもってほしい。

「と、とにかく！葉山さん、デュエルよ！」

「なんだか、よく分かりませんが受けて立ちます！」

こうして、私と葉山さんのデュエルが始まった。

第3話 入部テスト

「デュエル!!」

ジャンケンの結果、先攻は葉山さんになった。

葉山さんのデッキは青眼だったわね…どう出てくるのかしら？

私は警戒しながらターンを進めるように促した。

「私の先攻ですね、いきます！私は手札から魔法カードドラゴン・目覚めの旋律を発動！このカードの効果で手札を一枚墓地に送り、デッキから攻撃力3000以上守備力2500以下のドラゴン族を2体まで手札に加えることができます！」

まずは、必要なカードをサーチするカード…葉山さんの手札なかなか良さそうね。

「私は青眼の白龍（ブルーアイズ・ホワイトドラゴン）と青眼の亜白龍（ブルーアイズ・オルタナティブ・ホワイト・ドラゴン）を手札に加えます！そして、オルタナティブの効果！手札のブルーアイズを公開してこのカードを特殊召喚します！」

青眼の亜白龍攻撃表示（ATK3000）

「さらに、魔法カード、トレードインを発動！手札のブルーアイズを墓地に送って2枚ドロウ！さらに、もう一枚トレードインを発動！手札のブルーアイズを墓地に送って2枚ドロウ！そして、魔法カード死者蘇生を発動！このカードの効果で墓地のブルーアイズを特殊召喚！」

青眼の白龍攻撃表示（ATK3000）

レベル8のモンスターが2体ということは…！

「レベル8のモンスターが2体…来るぞ！葵！」

「わかってるわ…って、今、葵って…」

「き、気のせいだよ…」

わざとらしく口笛を吹きながら、神薙君はそう言った。

間違いなく私のことを名前で呼んでくれた、その事が嬉しくて、笑みが零れた。

「いきますよ！私は青眼の白龍と青眼の亜白龍でオーバーレイ！エク

シーズ召喚！来て、神竜騎士フェルグラント！」

神竜騎士フェルグラント攻撃表示（ATK2800）

そうだった、今はデュエル中だった…神薙君に名前を呼ばれただけでこんなに嬉しいなんて…

「私はカードを一枚伏せてターンエンドです」

美月LP4000

手札2

場 メインモンスターゾーン なし

EXモンスターゾーン 神竜騎士フェルグラント攻撃表示（A

TK2800）ORU2

伏せ1

Pゾーンなし

葵LP4000

手札5

場 なし

伏せなし

Pゾーンなし

「私のターン、ドロー！」

「この瞬間、永続罨発動！虚無空間（ヴァニティー・スペース）このカードが存在する限り、お互いに特殊召喚ができなくなります！」

「へえ、フェルグラントに虚無ってなかなか厄介な布陣だな…」

神薙君のいう通り、この布陣はなかなか厄介ね…

でも、神薙君はそんなことを言いつつ、私の方を見つめる、まるで『お前なら突破できるだろ？どんなふうに突破するか見せてくれ！』

——と、言わんばかりに

「ふっ…」

そんなふうに期待されたなら、やるしかないじゃない…

幸いにもこの状況を打開できるものはすでに揃っている、神薙君が

見てくれてるなら負ける気がしない！

「あのく、お二人が仲が良いのは知ってますけどいつまで見つめあっているんですか？」

「あ、ごめん、ごめん！…続けてくれ」

葉山さんにそう言われ、慌てて神薙君が視線を逸らす。

私もそれに釣られるように視線を戻す。

本当に何なんだろう？この、こそばゆい感じ…でも、なんだか嫌じゃない…

むしろ…とにかく、今はデュエルに集中しないと、この気持ちについてでは後で考えよう。

「えっと、それじゃ、いくわよ！まずは魔法カードサイクロンを発動！このカードの効果で虚無空間を破壊！」

これで、特殊召喚ができるようになった、後はフェルグラントだけ！

「私はスケール6のEMギタートルとスケール6のEMリザードローでペンデュラムスケールをセッティング！さらにギタートルのペンデュラム効果！もう片方のPゾーンにEMモンスターがセットされた時、デツキからカードを一枚ドロウできる！さらに、リザードローのP効果！このカードを破壊してさらに一枚ドロウ！」

葵 手札5↓3↓5

よし、これなら！

「さらに私はスケール3のEMシルイルをセット！そして、シルイルのP効果！神竜騎士フェルグラントの効果をターン終了時まで無効にする！」

「なら、その前にフェルグラントの効果を発動します！ORUを1つ取り除き、フェルグラント自身の効果を無効にし、このカード以外の効果を受けないようにします！」

「でも、これでフェルグラントの効果は使えないわ！いくわよ！ペンデュラム召喚！来て、私のモンスター達！手札からEMシルバークロウ、ペンデュラム・マジシャン、パートナーガ！」

EMシルバークロウ攻撃表示（ATK1800）

EMペンデュラム・マジシャン攻撃表示（ATK1500）

EMパートナーガ守備表示（DEF2100）

「ペンデュラム・マジシャンとパートナーガの効果発動！まずは、パートナーガの効果！シルバークロウを対象に効果発動！シルバークロウはターン終了時まで私のフィールド上に存在するEMモンスターの数×300ポイントアップする！私のフィールドのEMは3体、よって、シルバークロウの攻撃力は900ポイントアップする！」

EMシルバークロウ攻撃表示（ATK1800↓2700）

「そして、ペンデュラム・マジシャンの効果！私のフィールド上のカードを2枚まで破壊し、その数だけデッキからEMモンスターを手札に加えるわ！私はパートナーガとギタートルを破壊し、デッキからEMドクロバット・ジョーカーとEMオッドアイズユニコーンを手札に加えるわ！」

葵 手札4↓1↓3

「おう…まさにEMって感じだな！やっぱりすごいぜ！財前さん！」

「むう…」

さつきは名前で呼んでくれたのに…

そんな不満をぶつけるように神薙君を睨み付ける。

「なんか、俺、変なこと言ったか？」

「別に…」

「ああ、うん…なんかごめんな…」

「あ、謝らなくてもいいわよ…」

「何なんですか、本当に何なんですか？この雰囲気…私、完全に除け者じゃないですか！」

私と神薙君の何ともいえない雰囲気、葉山さんのツツコミに似た叫びが木霊する。

「え!?葉山さんを除け者にした覚えなんかないんだが…」

「うるさい！神薙君は少し黙っててください！」

「あ、はい………」

葉山さんの剣幕に圧されたのか、神薙君が少し、しよぼんとした様

子で黙り込んだ。

「えつと…進めるわね、私はさらにEMドロバット・ジョーカーを召喚！さらに、この瞬間ドロバット・ジョーカーの効果発動！このカードが召喚に成功した時、デッキからこのカード以外のEM、魔術師Pモンスター、オッドアイズモンスターのいずれかを手札に加えることができる！私はEMレインゴートを手札に！」

EMドロバット・ジョーカー攻撃表示（ATK1800）

葵 手札3↓2↓3

「さあ、いくわよ！バトル！EMシルバークロウで神竜騎士フェルグランに攻撃！この瞬間、シルバークロウの効果発動！このカードが攻撃する時、私のフィールドのEMモンスターの攻撃力をバトルフェイズ終了時まで300ポイントアップできる！」

EMシルバークロウ（ATK2700↓3000）

EMペンデュラム・マジシャン（ATK1500↓1800）

EMドロバット・ジョーカー（ATK1800↓2100）

「これで、攻撃力はシルバークロウの方が上！神竜騎士フェルグラントを破壊できるわ！」

美月LP4000→2000≡3800

「さらに、ペンデュラム・マジシャンでダイレクトアタック！」

「…通します！」

美月LP3800→1800≡2000

「ドロバット・ジョーカーでダイレクトアタック！」

これが、通れば！

「私は墓地の虹クリボーの効果を発動！私がダイレクトアタックを受ける時、このカードを墓地から特殊召喚できます！」

虹クリボー守備表示（DEF100）

最初の手札コストで墓地に送っていたのね…

「くっ、なら虹クリボーを破壊するわ！」

「この効果で特殊召喚したこのカードは除外されます…」

凌がれた…葉山さん、なかなかやるわね…

「私はカードを一枚伏せてターンエンドよ！」

美月LP2000

手札2

場 なし

伏せなし

Pゾーンなし

葵LP4000

手札2 (EMオッドアイズユニコーン、EMレインゴート)

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン EMシルバークロウ攻撃表示(ATK1800)

EMペンデュラム・マジシャン攻撃表示(ATK1500)

EMドクロバット・ジョーカー攻撃表示(ATK1800)

伏せ1

PゾーンEMシールイールスケール3

なし

「いきますー！私のターン、ドロー！私は手札から魔法カードおろかな埋葬を発動！このカードの効果でデッキから3体目の青眼の白龍を墓地に送ります！」

おろかな埋葬、そういえば神薙君も使ってたわね…まあ好きなカードを墓地に送れるわけだから多くの人達に採用されて当然かもしれないけど…

待つて、このタイミングで3体目のブルーアイズを墓地に送るってことは…まさか！

「私は手札から魔法カード、龍の鏡(ドラゴンズミラー)を発動します！このカードの効果でドラゴン族融合モンスターによって決められたモンスターを私のフィールド、墓地から除外してエクストラデッキから融合モンスターを特殊召喚できます！私は墓地の青眼の白龍を3体除外してエクストラデッキから青眼の究極竜(ブルーアイズ・アルティメットドラゴン)を特殊召喚します！」

青眼の究極竜攻撃表示（ATK4500）

「さらに、私は手札から装備魔法、巨大化をアルティメットドラゴンに装備します！このカードの効果で装備したモンスターの攻撃力は元々の攻撃力の2倍になります！」

青眼の究極竜攻撃表示（ATK4500↓9000）

「攻撃力、9000！」

なんとなく予測はしていたけど、いぎ、その状況になってみると目の前のモンスターがとてつもなく強大に見える…ただ、もう手は打つてある、後は…

「バトルです、青眼の究極竜でEMドクロバット・ジョーカーに攻撃！アルティメットバースト！」

「させない、罨発動！エンタメ・フラッシュ！このカードは私のフィールドにEMモンスターがいるときに発動できる！相手フィールド上の表側攻撃表示モンスターを全て守備表示にする！さらに、そのモンスターは次のターン終了時まで表示形式を変更できない！」

青眼の究極竜攻撃表示↓守備表示（ATK9000↓DEF3800）

「防がれた…！私はこれでターンエンドです…！」

「私のターン…！」

準備は整った、後はあのカードを引くだけ…

ふと、神薙君の方へ視線を飛ばす…神薙君は私の視線に気づいたのか、私の方を見てくれた。

それだけなのに、なぜか負ける気がしなくなる…

私は、ふっ…と笑ってカードを引いた。

「…来たわ！まずは空いているPゾーンにEMオッドアイズユニコーンをセット！これで私のPスケールは3と8、つまり、レベル4と7のモンスターが同時に召喚可能！ペンデュラム召喚！来て、私のモンスター！オッドアイズ・ドラゴン！」

オッドアイズ・ドラゴン攻撃表示（ATK2500）

「でも、そのモンスターでは私のアルティメットドラゴンは倒せませんよ！」

「お楽しみはこれからよ！バトル！オッドアイズ・ドラゴンで青眼の究極竜に攻撃！この瞬間、オッドアイズユニコーンのP効果を発動するわ！自分のオッドアイズモンスターが攻撃するとき、自分のフィールドのEMモンスターの元々の攻撃力分、そのモンスターの攻撃力をアップする！私はドクロバット・ジョーカーの攻撃力分、オッドアイズ・ドラゴンの攻撃力をアップするわ！」

オッドアイズ・ドラゴン（ATK2500↓4300）

「これは、通すしかないですね…」

「さらに、オッドアイズ・ドラゴンが相手モンスターを戦闘で破壊し、墓地に送ったとき、そのモンスターの元々の攻撃力の半分のダメージを相手に与えるわ！」

美月LP2000—2250—250

「ま、負けました…」

「いいデュエルだったわよ、葉山さん」

正直、結構危ない状況だったしね…

本当に一歩間違えれば負けていたかもしれない、でも…それでも勝てたのはやっぱり…

「いや、本当にすごいデュエルだったな！見てるこっちもハラハラしたし…」

神薙君が居てくれたからかな…？

「それは、良かったですけど…これで私はデュエル部に入れなくなりましたよね…はあ…」

「なに言ってるの？葉山さん、確かに入部テストとは言ったけど、私に勝て、とは一言も言っていないわよ」

「え…？」

そう、確かに入部テストとは言ったけど、私に勝てなければ入れない、なんて言った覚えはない。

それに、あれは個人的な感情で勝手に進めたことで、デュエル部に入部テストなんて今のところはない。

「それじゃあ、私デュエル部に入れるんですか！」

「もちろんよ、よろしくね葉山さん」

「やったー！！良かった、やりました！」

「良かったじゃんか！これからよろしくな、葉山さん！」

「はい、よろしくお願いしますね！神薙君！財前さん！」

そう言っつて、葉山さんは神薙君とハイタッチをしながら跳んで喜んでいた。

……………やっぱり、デュエル部に入部テスト作ろうかしら？

私は、葉山さんの加入に複雑な感情を覚えながらデュエル部の活動を再開した。

第4話 侑哉と葵

「ふう、終わった…」

授業がすべて終わり、今日も今日とでデュエル部の部室へと向かう。

俺と葵がデュエル部を設立して、なんだかんだで1週間が経った、今のところ、俺と葵、そして葉山さんの3人がデュエル部の部員だ。

「さてと、財前さんを誘って、デュエル部に行くか…」

俺はそう呟いて、隣の葵へと声を掛けた。

「財前さん、デュエル部に行こうぜ」

「え、あ、うん…」

「どうかした？元気なさそうだけど…」

「ちよつとね…さ、行きましよう」

「あ、ああ…」

明らかに元気がなさそうな葵と一緒に教室を出た。

でも、このまま葵をほっとけるわけがなく、意を決して葵へと声を掛けた。

「なあ、財前さん…俺で良ければ相談に乗るけど？」

「え…？」

「ほら、一人で溜め込むよりは誰かに話す方が気が楽になるかもしれないし…」

実際、悩み事は誰かに話した方が気が楽になる、それは俺も経験したことあるから間違いない。

まあ、俺が基準なのもおかしな話しただけだな

「そうね、そうする…今日、私に話しかけてきた人達がいたでしょ」

「そういえば、色んな人達に声掛けられてたな、財前さん…」

「その人達が話しかけてきた理由がね、新型デュエルディスクを優先的に回してほしいとか、SOLテクノロジー社に推薦してほしいとかそんなのばかりで…」

そう話しをする葵は見るからに気持ちが悪んでるのがわかった。そりやそうだな、自分に話しかけてきた人達がほとんどそういう

目的で話しかけてきたら、テンション下がるよな……うん？

「ちよつと待って、なんでそんな話しが財前さんに関係あるんだ？」

「私の兄さんがSOLテクノロジー社のセキュリティ部門の部長をやってるから……って、神薙君知らなかったの？」

「全くもって知らなかった、財前さんに兄さんがいることは知ってたけど……」

キャラクター紹介で葵に兄さんがいることは知ってたけど、詳しくは見てなかったし、葵からもそんなことは聞いてないし……

「そ、そうなの……これじゃあ、私がバカみたい……」

「どういうこと？」

「もしかしたら、神薙君もそういう目的で私に声を掛けたのかなって……そんなわけないのにね……」

少し、自嘲気味に笑いながら葵はそう言った。

「それで、そんな風に思った自分に自己嫌悪して、勝手に落ちこんで……本当にバカみたい……」

「それでもないさ、実際、そんな風になったら他人を信じられないのも無理ないって……俺も人間の醜さをまざまざと見せつけられた気分だし……」

「……ただ、ひとつだけ言わせてもらおうと

俺は最後にそう付け足して、言葉を紡ぐ。

「俺は財前さんの兄さんが偉い人だからって見方を変えたり、接し方を変えたりなんかしないよ……だって、財前さんは財前さんだろう？」

「うん、そうだよね……ありがとう神薙君」

「それにさ、俺は財前 葵っていう一人の女の子を好きになったんだからさ……」

「……へっ!?え、えつとそれってどういう？」

俺がそう言い終わると葵がなぜか、あたふたしながら俺に声を掛けた。

なんか、変なこと言ったかな……俺

「財前 葵っていう一人の人間として好きだったこと」

「あ、ありがとう……」

葵は頬を少し朱色にそめながら、そんなことを言った。

その姿が可愛くて、思わずからかってしまいそうになったが、やめておいた。

だって、今はこれで充分かな…なんて思ったから。

「それじゃ、財前さん、今日も張り切ってデュエル部に行こうぜ！」

「……………葵」

「ん？」

「だから、葵…私のことは葵って呼んで！」

「はい？」

思わずそう聞き返した、だって名前で呼んでほしいなんて言われるとは思ってなかったから…

「何度も言わせないですよ…！」

「…わかった、じゃあ、そっちも俺のことは侑哉で」

「うん、改めてよろしくね…ゆ、侑哉」

「ごっちこそ、あ、葵…」

いざ、名前を口にする顔が熱くなってくる、やっぱり実際に名前で呼ぶと恥ずかしさが増してくるな…

「これは、思ったより照れるな…」

「そうね…私も兄さん以外の男の子から名前で呼ばれたことなんてなかったし…」

「そうなのか…それはちょっと嬉しいな」

「何が？」

「うーん、内緒だ…さ、早く行こうぜ、葵」

「そうね、早く行きましょうか…侑哉」

そんな会話を交わしながら俺達はデュエル部の部室へと歩を進めた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「それじゃ、また明日な！葵」

「また明日、侑哉！」

デュエル部の活動が終わり、侑哉と共に帰路へと着いて、別れの挨拶

撈を交わした。

本当はまだ離れたくなんかない、侑哉ともつと一緒に居たい、でも侑哉にも用事があるだろうし、そういうわけにもいかない。

「はあ、最近なんだかおかしいな、私…」

暇さえあれば、侑哉のことばかりを考えてる、会えない時間が寂しくてしょうがない。

多分、こういうのを恋って言うんだろうな…

学校で同じクラスになって初めて出会ったはずなのになぜか、初めて会った気がしなくて…

うんうん、実際初めて会ったわけじゃない。

多分、Phantomの正体は侑哉だ…だって、言動とか性格とかまるで一緒だもん…それに、デュエルを心から楽しんでいる姿も…

といっても気づく人はLINK VRAINSで彼に関わった人だけだと思うけど。

もしかして、葉山さんも侑哉の正体に気づいて…？

だとしたら、彼女が私にとっては一番の敵だ。

それでも、負けるわけにはいかない…

でも、今はそれよりも…

「また明日、侑哉に会えるの、楽しみだなあ…」

明日なんて、言わずに、今すぐ会いに行こうか？

「さすがに、それは難しいかな…？」

そうになったら、私が自分の気持ちを抑えきれないし…

家に帰ったら電話してみようかな？それぐらいなら大丈夫そうだし…

うん、そうしよう！電話なら侑哉の顔を見ながら話せるし

「でも、どんな話しをすれば良いのかしら？侑哉が喜びそうな話し…：…デュエルしか思い浮かばないわね」

でも、侑哉のことだからデュエルの話しじゃなくても聞いてくれるんだろうな…

それなら、私が侑哉と話したいことを話そう。

「なんだか、楽しみになってきた！早く家に帰ろう」

侑哉は私との会話を楽しんでくれるかな？もつと話していたいて思ってくれるかな？

私はそんなことを思いながら、家へと早足で駆けていった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「うん？」

家に帰って、デツキを編成していると携帯が鳴り始めた。

誰だ？え〜つと着信者は…あ、葵!?

着信者を確認し、すぐさま、電話に出る。

すると、画面に少し気恥ずかしそうにしている葵が映った。

『ねえ、今大丈夫？』

「大丈夫だよ、デツキ編成してただけだから」

『帰って、すぐにデツキ編成なんて、さすがは侑哉ね』

「それは、誉めてるのか？」

それにしても、まさか葵の方から電話がかかってくるなんてな…正直、嬉しいな…

電話番号を交換してはいたけど、デュエル部の活動以外のことでは話したことがなかったからな。

「そういえば、葵の方から電話してくるなんて珍しいな…何か用事か？」

『用事がないと、連絡しちやダメなの？』

「あ、葵…？」

上目遣いをしながら、そう言う葵に思わず動悸が跳ね上がる。

「ダメじゃないって、むしろそっちから連絡してくれるならいつでも大歓迎さ！まあ、さすがに寝てる時に電話されるのは困るけど」

『ふふっ、さすがにそんな非常識なことはいわよ…でも、良かった…これでダメだって言われたらしばらく立ち直れなかったわ…』

「そんなに!?!まあ、俺も葵の立場だったら結構へこむしな…」

実際、そうだったら…なんてことは想像したくもないな。

『落ち込んでいる侑哉か…一度見てみたいわね』

「待って、わざとへこまそうとしないでくれよ？葵…」

『しないわよ、そんなこと…ふふっ!』

「なら、いいけどさ…」

葵と、こんな風に電話でやりとりするのが楽しくて、ずっと話していたい…そんなふうには思わずにはいられなかった。

葵がそう思ってくれてるかはわからないけど…

そんなことを思いながら、俺は葵と他愛ない会話を続け、気がつけば1時間ほどが経っていた。

「もう、こんな時間か…楽しい時間ってあつという間に過ぎるって聞くんけど本当だな」

『本当ね、もう…こんな時間…』

そう呟く、葵はどこか寂しそうだった。

俺ともっと話していたいって思ってくれてるんだらうか? だとしたら、嬉しいけど…

さすがに、それはうぬぼれすぎだよな。

「そろそろ、夕飯の時間だな…」

『そうね、本当はもっと話していたいけど、しょうがないわね…』
「だな…」

『ねえ、侑哉…またこんなふうには電話しても良い?』

「言ったら? 大歓迎だってさ! まあ気が向いたらいつでも連絡くれば、葵と話するのは楽しいしさ!」

『ありがとう、侑哉…』

葵は心の底から安心したような表情を浮かべ、そう呟いた。

「良いよ、別に…それじゃ、また明日な! 葵!」

『また明日! 侑哉!』

笑顔でそう言う葵を見ながら、俺は葵との通話を終えた。

「へえ、侑哉にこんな可愛い彼女がいたなんてね」

「フアツ!」

急に後ろから響いてきた声に思わず素っ頓狂な声をあげた。

恐る恐る後ろを振り返ってみると栗色の長い髪をなびかせているスレンダーな美少女、俺の義理の姉である花恋が立っていた。

「ちよっ！いつからいたんだよ！ビックリするだろ！」

「さつき来たんだけど、お取り込み中みたいだったから電話が終わるまで待ってたの」

「さつきって、いつ？」

「えっと、侑哉が電話始めたあたりからかな」

「それって最初じゃんか！全然さつきじゃないか？」

「ほら、侑哉も言ってたじゃない、楽しい時間はあっという間に過ぎるって」

「がつつり聞いてたよこの人！というか、1時間も気づかないって……俺、どんだけ夢中になってたんだ。」

「で？彼女との馴れ初めは？」

「いや、俺と葵はそういう関係じゃないって！そういえば、義姉さんはなんで俺の部屋に？」

「侑哉、義姉さんじゃなくて花恋でしょ？」

「……花恋はなんで俺の部屋に？」

「なぜかはわからないけど、花恋は自分のことを名前で呼んでほしくらしく、義姉さんと言うたびにこんなふうに注意される。」

「って、今はそんなことは良いか……」

「今日の夕飯ってなにかなくて気になってね」

「ああ、そういうこと……今日の夕飯は豚のしょうが焼きにしようかなって思ってるよ」

「味噌汁もついてる？」

「もちろん」

「そっか、今日の夕飯も楽しみだわ！侑哉の彼女についてはその時に、じっくり聞くわね！」

「はあ!?ちよっと待って、まだ聞くのか？それ……」

「俺のそんな叫びは花恋には届かなかったらしく、そのまま花恋は階段を下りて、リビングへと向かってしまった。」

「今度から電話するときは周りに注意しないと……」

「俺はそう心に決めて、リビングへと歩を進めた。」

UA3500突破記念！美月の心

「まったく、買い物ぐらい自分で行けば良いのになあ…」

そうぼやきながら、今日の夕飯の買い物に来ている私こと、葉山美月は私にお使いを頼んだ両親に文句を言いながら、夕飯の材料を買い物かごに入れている。

ちなみに今日の夕飯はシチューらしい、シチュー自体は私の大好物だからそこは問題ないのだが…

「せっかく、Phantomさんのデュエルをもう一度見直そうと思つてたのに…タイミングが悪すぎるよ…」

私の日頃の習慣ともなりつつある、というか、すでになっている撮りだめしてあるPhantomさんのデュエル視聴を邪魔されたのが嫌だったため、文句を言いながら買い物をしていた。

「……むっ、この気配は！Phantomさんが近くにいる！」

そんな風買い物をしているなか、ふと、私のPhantomセンサーが反応を示す。

ちなみに、Phantomさんセンサーとは近くにPhantomさんがいればその気配を感じることができるといふものである。

言つておきますが、決して盗聴器とかGPSを悪用するとかそんな犯罪めいたものは使用してませんよ！

言うなれば、女の第六感つてやつです！

つて、私は誰に説明してるんでしょう…まあそんなことは良いとして…

私は、誰に対しての説明かわからない説明を頭の隅へと追いやり、Phantomさんの気配を感じた方へと歩を進めた。

「あれ、もしかして葉山さんか？」

そこにいたのはちよつと癖つ毛のある黒髪の少年、神薙侑哉君だった。

「神薙君？まさかこんなところで会うなんて…奇遇ですね！」

「そつちも夕飯の買い出しか？」

「はい、神薙君もですか？」

神薙君は同意するように頷いた。

それにしても、神薙君ってPhantomさんに雰囲気似てるんですよね…私のPhantomさんセンサーにも反応したわけですから…

デュエルした時も、Phantomさんと同じ言動をしていましたし…もしかして？

「どうしたの？俺の顔になんかついてる？」

「い、いえ…！そういうわけでは…」

どうやら、少し観察しすぎてしまったみたいです。

「そうなのか？まあいいけどさ…」

「そういうえば、神薙君の夕飯は何ですか？」

「今日は無難にカレーにしようと思ってるよ…作るほうも楽だし、色々別の料理にも応用できるからな」

「今の言い方だと神薙君がいつも料理をしているふう聞こえるんですけど…神薙君が料理してるんですか？」

「そうだけど？」

「へ？」

不思議そうに首をかしげながら、そう答えた神薙君に思わず間拔けな返事をしてしまった。

「俺、義姉さんと二人暮らしんだけど、義姉さん頭良いし、機械方面にめっぽう強いんだけど家事だけは苦手でさ…俺が基本的に家事を担当してるんだよ」

「へ、へえー、そうなんですか…」

驚きました、神薙君って家事得意なんですね…なんか、負けた気分です…

「そういや、葉山さんは買い物済んだのか？」

「え、はい…終わりましたけど…」

「それじゃ、レジに行こうか！」

神薙君に促され、私は神薙君の後に続いた。

レジに向かう途中で、神薙君と他愛ない会話をしながら歩き続け、気づけば私のレジの番になった。

そして、そのままレジでの買い物済ませ店を出た。

「荷物持とうか？」

「大丈夫です…」

神薙君からの提案は嬉しいけど、自分の荷物ぐらいいは自分で持つべきだし、何より私の荷物を神薙君に任せるのは何だか申し訳ない。

私は、そう考えて神薙君の気遣いを断った。

「そっか」

それにしても、神薙君って現実でもこんな感じなんですね…これだから、Phantomさんに女性ファンが増える一方なんですよ！

こんなの財前さんが見てたら、嫉妬ものですよ！

「うん？どうしたんだよ」

「いえ、神薙君はもう少し女心をわかった方が良いんじゃないかと思
いまして…」

「え、どういうこと？」

「いえ、やっぱり何でもないです」

「そんなこと言われたら気になるじゃんか！教えてくれよ」

「ダメです」

「わ、わかったよ…」

そんな会話をしながら、ふと、私は神薙君のことをどう思っている
んだろう…？

そんなことを思った。

Phantomさんの正体は多分、神薙君だ…特に確証があるわけ
でもないけど、直感的にそう思う。

私にとってPhantomさんは憧れの人で、そんな人が今隣にい
ると思うだけで心臓が早鐘を打つ…

————でも

これはファンとしての好きなのかな？それとも…

財前さんは間違いなく神薙君のことが好きだ、だって、神薙君と一
緒にいるときの彼女はすごく楽しそうで、心の底から笑っていて…

そして、神薙君に名前と呼ばれるたびに嬉しそうな表情をしてい
る。

他にも挙げていくとキリがない…財前さんの好意に気づいてないのって多分、神薙君だけじゃないかな…

「さつきからボーっとしてどうしたの？考えごとか？」

「ま、まあそんな感じですよ…ところで神薙君の家ってこっち方向なんですか？」

いきなり、話しかけられ、慌てて話題を逸らす。

「そうだよ、葉山さんも？」

「はい、私もこっち方向です」

「へえー、奇遇だな…ああ、でもこのスーパーを利用してるんだから当然といえば当然か」

神薙君は一人納得したように頷いていた。

…それにしても、私は神薙君とどうなりたいんでしょうか…？このまま大ファンのままでいたいのか、それともそれ以上の……って何を考えてるんでしょうか私は…

ああもう!!何なんですか！この感じ！モヤモヤします!!

「あ、俺の家、向こうだから、それじゃまた学校で！じゃあな葉山さん！」

私が一人悩んでいると神薙君の家の近くに着いてしまったみたいで、神薙君が私にそう声を掛けた。

このまま、帰っていいんでしょうか？

いや、ダメですよ！ここで行動しないと、このモヤモヤは晴れない気がする。

「神薙君」

「どうしたの？」

「これからは、私のことも名前で呼んでくれませんか？」

「え…？いや、それは構わないけど…どうしたんだよ、急に」

「財前さんは名前で呼んでるのに、私だけ呼ばれないのは何か嫌です」私のなけなしの勇気を振り絞って言った言葉は顔から火が出るほど恥ずかしくて、思わず俯いてしまう。

「わかった…それじゃ、改めて、じゃあな美月！また学校で！」

「…あ！はい、また学校で！侑哉君！」

侑哉君は私に別れの挨拶をして、家へと駆けていった。

「美月、か……LINK VRAINS以外で名前で呼ばれることになるなんて……」

私のLINK VRAINSのアバター名はミズキ、普段からPhantomさんに本名で呼ばれているに等しいんですが……まさか、現実でも呼ばれるようになるなんて……

何だか天にも昇る気分です……なけなしの勇気を振り絞った甲斐がありました。

まだ、自分の気持ちはよくわからないけど、それは徐々に理解していけば良いですよね……!

私はそんなことを思いながら、家へと歩を進めた。

第5話 原作介入？

運命の歯車は回り始める、俺達の知らないところで徐々に、しかし確実に…ただ、それでも日常は続く、運命の

歯車が動き始めるまで…

／／／／／／／／／／／／／／／／

「もう、この時間に登校するのが当たり前になってるな」

まだ、誰も来ていない廊下でいつものように教室へと歩を進める。学校が始まってかれこれ1ヶ月が経った、デュエル部の部員も増え、楽しい学校生活を送っている。

まあ、そんな風に思えるのは葵が居てくれたからなんだろうけど…俺はそんなことを思いながら、教室のドアを開けた。

そこには、いつも通り自分の席に座っている葵の姿があった。

「おはよう、葵」

「おはよう、侑哉」

そうやっていつも通りの挨拶を交わし、葵の隣の席へと座った。

「何か、こんなふうに葵と話すのが当たり前になってきてるよな」

「そうね、たまたま早めに学校に行ったら侑哉が入ってきて、そこから仲良くなつて…」

そう言う葵は、どこか懐かしそうな表情をしていた。

「そうそう、あの時は葵が居てビックリしたよ…」

「私も…だって、第一声が『財前さんデュエルするの?』だったもんね」

「そこ!?!いや、あの時はあれ以外に話題が思いつかなくて…」

「ふふっ!」

俺の反応が面白いのか、葵は笑みを溢した。

そういえば、初めて会ったときもこんなふうに笑ってたっけ…本当、何回見ても可愛いよな…

「どうかした?侑哉」

「いや…葵の笑った顔って可愛いなって思ってたさ」

って、何言ってるんだよ俺! いや、本心だけどさ!

このタイミングで言うか!?

そんなふうになんか自分が思わず口にしてしまったことを後悔しながら、恐る恐る葵の方を見る。

「そ、そう…？」

葵は少し照れたような表情を浮かべながら、俺を上目遣いで見つめていた。

そんな顔されたら、ちゃんと答えないわけにはいかないよな…

「うん…すごく可愛いと思うよ」

「あ、ありがとう…何か、照れるわね…」

葵は頬を少し赤らめて、そう言った。

いや、自分で言っただけで、かなり恥ずかしいな…これ

「そ、そうだなあ、葵…デツキ編成に付き合ってくれないか？」

「え、うん…良いけど…」

あまりの恥ずかしさに無理矢理話題を変え、鞆からデュエルディスクを取り出す。

「そういえば、侑哉はデツキ収納型の旧型を使ってるのよね」

「まあね、俺としてはこっちの方がデュエルディスクって感じがして好きだしな」

それに、花恋がディスクのアップデートを色々としてくれてるおかげで、かなり高性能になってるから使いやすい。

「それで、どこを悩んでるの？」

「えっと、これなんだけど…」

そうして、授業が始まるまで葵にデツキ編成を手伝ってもらいながら他愛ない会話を交わした。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「それじゃ、また明日！侑哉」

「また明日！葵」

授業とデュエル部の活動も終わり、葵と別れの挨拶をして帰路へとつく。

さてと、今日の夕飯どうするかな？

家に何かあったっけ…？卵はあったよな、玉ねぎもあった気がする

し、今日はオムライスにするか！

そんなふうな今日の献立について考えていると、どこからか香ばしい匂いが漂ってきた。

「何か、良い匂いがするな…ちよつと行ってみよつと！」

その匂いに引き寄せられるように歩を進めると、そこにあつたのは移動販売式のホットドッグ屋だった。

「へえ、こんなところにホットドッグ屋があつたのか…うん？あれは…」

ふと、店の近くにいる少年が目に入った。

その少年は遊戯王VRAINSの主人公、藤木 遊作…その人だった。

「えくと、遊作だつたよな…こんなところで会うなんて奇遇だな！」

「お前は…誰だっけ？」

近くにいた遊作に声を掛けると思った通りの反応が返ってきた。

まあ、そりやそうなるよな…何だかんだで遊作と話すのってこれが初めてだし…

「ああ、一応自己紹介しておく、俺は神薙 侑哉…よろしくな！」

「神薙か、よろしくな」

「いらつしやい！あれ、遊作の友達か？」

俺と遊作が簡単な自己紹介をすませると、店の奥から一人の男性が姿を現した。

あれ？この人見たことあるような…

「草薙さん、神薙とは今話したばかりで、友達じゃない…」

「そうか…せっかく遊作にも友達が出来たのかと思つたのにな」

そうだよ、草薙さんだよ！思い出した！

というか、何かデジャブを感じるんだけど…どこかでこれに似た場面を見たことが…

「えつと、草薙さん…初めまして、遊作のクラスメイトの神薙 侑哉です、よろしくお願いします」

「随分と礼儀正しいんだな、こちらこそよろしくな！」

こうして、一通り挨拶を済まして、ホットドッグへと目を向ける。

「いやあ、本当にうまそうだな…」

「すみません、ホットドッグひとつ下さい！さつきから美味しそうな匂いがしてて、すごい食べたいんですが」

「はいよ！すぐにできるから待っていてくれ」

「それじゃ、その間遊作と話しでもしてますね」

「俺はそう言っつて、遊作がいる方へと歩を進めた。」

「遊作はこの店にはよく来るのか？」

「まあな」

「へえ、そうなのか」

「このホットドッグうまそうだもんな…っつて、そんな理由なわけもないか、確か草薙さんは遊作の協力者らしいし、それでこの店によく来るんだろうな。」

「それはそうと、遊作ってデュエルするのか？」

「ああ、するにはするがそれがどうかしたか？」

「じゃあさ、俺とデュエルしようぜ！遊作とデュエルしてみたいしき！」

「断る」

「ええ!? 即答かよー!」

「…ここは普通、受けてたつところじゃないの!？」

「おい、遊作…デュエルぐらい受けてやれば良いじゃないか」

「草薙さんは遊作を諫めながら、今できたばかりであろうホットドッグを渡してくれた。」

「もつと言っつてやっつてくださいよ！草薙さん…後、ホットドッグありがとうございます…お代は？」

「いや、お代は結構、そいつは俺の奢りだ！」

「本当ですか！ありがとうございます！それじゃさつそく頂きます！」

「草薙さんにお礼を言いつつ、ホットドッグを口に運ぶ。」

「口に入れた瞬間、パリッとジューシーなソーセージの味が広がり、挟んであるパンと絶妙なハーモニーがまた美味しい。」

「何これ、めっちゃうまい！今まで食べてきたホットドッグの中で一」

番だよ！

「なあ、データストームって知ってるか？」

俺がホットドッグの美味しさに感動していると、草薙さんがふと、そんなことを言った。

「データストーム？聞いたことがないな…」

「俺も聞いたことないな…何なんですか？そのデータストームって」

俺と遊作が疑問符を浮かべていると、草薙さんがデータストームについて話してくれた。

「昔、LINK VRAINSにはデータストームって呼ばれる風が吹いていたらしくてな、そこでスピードデュエルってのが行われていたらしい」

スピードデュエルか…確かアニメでそれが出るって聞いたな…あれか？デュエルリンクスのルールでやるデュエルなのか？

「データストームには未知のモンスターが潜んでいて新世界が広がっているって話した、遊作もそんなものに出会えばデュエルを楽しめるようになるかもな」

「風に乗ってのデュエル、未知のモンスター…！絶対楽しいって、それ！一回やってみたいぜ！」

「ほら、こんなふうになー！」

草薙さんが、俺の方を指差しながら遊作にそう言った。

多分、スピードデュエルがああのと乗りながらやるデュエルなんだろうな…ルールはやっぱりデュエルリンクスみたいな感じか？

まあ、この際なんでも良いや！早くやりたいな…そのデュエル。「すまないと思ってるんだ、遊作を巻き込んで…」

「良いんだ、草薙さん…俺が自分の意思で決めたことだ、俺はあんたの弟と俺の過去を奪ったやつらに復讐する！」

俺がスピードデュエルについて心を踊らせていると、遊作と草薙さんのそんな会話が聞こえてきた。

なるほどな、何かデジャブを感じると思ったら、遊戯王ラボの最終回でこのシーンを見たからか。

このシーンを見て、遊戯王VRAINS楽しみだなあなんて思っ

いたら、気づけば遊戯王VRAINSの世界に来てたんだっけ…

それにしても、復讐…か

「ふう、ごちそうさまでした！ホットドッグ、すごい美味しかったです！また来ますね」

「ああ、また来てくれ！」

「はい、また来ますよ…あつ、そうだ遊作！」

「何だ？」

俺は遊作の方を向いて、こう言葉を紡いだ。

「俺はお前の過去に何があつたのかは知らないし、復讐をやめろとは言わない、でも…デュエルを復讐の道具としてしか見れないのは悲しいと思うんだ…だからさ、デュエルを楽しめる時は全力で楽しもうぜ！」

デュエルっていうのは元々楽しいものだ、そりゃ、負けたら悔しいし、先行制圧されて何も出来ずに負けたらとてつもなくへこむけど…自分のデッキが応えてくれて、自分の理想の動きが出来たらすごく嬉しいし、自分の好きなモンスターや戦い方で勝てたときの喜びは言葉に出来ない。

遊作にもそういう喜びや楽しさを知ってほしい…だからこそ、草薙さんも遊作にデュエルを楽しんでほしいって思ってるんだろうな…

「んじゃ、また学校でな！遊作！」

「あ、ああ…」

俺はそう言って、帰路へとついた。

「不思議な奴だったな…あいつ」

「ただの、デュエルバカにしか見えなかったが…」

「そうかもな、でも、良い友達になれそうじゃないか」

「草薙さん、まだそんなこと言ってるのか」

「お前もいつか、あいつみたいにデュエルを楽しめるようになるよ
いな」

「……………神薙 侑哉か」



「ただいま〜!」

「お帰りなさい、侑哉」

遊作達と別れ、家へと戻って来ると花恋が出迎えてくれた。

「ねえねえ、今日の夕飯はなに?」

「帰ってきて早々、夕飯についてかよ…まあ、良いけどさ、今日はちよ
うど卵も玉ねぎもあるしオムライスにしようかなと思ってるよ」

「オムライスかあ〜!楽しみにしてるわね!」

「あんまり期待しないでくれよ…さてと、とりあえず下準備するかな」
自分の部屋に向かい、鞆を置いてリビングへと歩を進める。

まず、玉ねぎをみじん切りにして器に移し、ウインナーを輪切りに
して同じように器に移した。そのまま、その二つにラップをかけて、
冷蔵庫にしまう。

後は米を洗って、ご飯を炊くだけだ…よし、これである程度の準備
はできたな。

「それじゃ、LINK VRAINSに行ってくる!」

「行ってらっしゃい!侑哉」

「ああ!」

そのまま、デュエルディスクにデツキをセットする。

「デツキセット!into the VRAINS!!」



「到着つと…!」

フェードアウトした意識が覚醒すると目の前に見慣れたLINK
VRAINSの景色が広がる。

「さてと、どうするかな…」

とりあえず、デュエルの相手を探そうかな。

俺はそう思い、歩き始めた。

「あ、Phantom!こんなところに居たのね!」

「うん？ブルーエンジェルじゃないか、どうかしたのか？」

「あちこち探してもPhantomが見つからないから探してたのよ」

「へえ、わざわざ俺に会うためにあちこち探してくれたのか？嬉しいな」

「なっ!?ま、まあ…それもあるにはあるけど…」

ブルーエンジェルは少し顔を赤らめながらそう言った。

え、本当に？いつもの調子で言ったけど、いざ面と向かって言われると何か照れくさいな…

「え、えつと…ブルーエンジェル、何か用事があったのか？」

「あ、うん…実はPhantomと話したいことがあって…」

「話したいこと？」

「Phantom、その…良かったら」

少しモジモジしながらブルーエンジェルは俺の方を見てくる。

「今度、私と…で、デートしてくれない？」

「はい？」

「だから、デートしようって言ってるの！何度も言わせないでよ…」

ブルーエンジェルは見るからに顔を赤くして、そう言った。

「えつと、いやそれは嬉しいけどさ…何で急に？」

「ほ、ほら！Phantomに助けてもらった時のお礼がまだだから…」

「お礼？」

お礼を言われるようなことしたっけ俺…?

「初めて、Phantomとデュエルした時に建物から落ちそうになった私を助けてくれたでしょ…」

「ああ…あの時か、別に気にしなくて良いって」

「私が気にするの…それで、どうなの？」

ブルーエンジェルは少し、不安そうな表情を浮かべながら俺に問いかける。

「もちろん！断る理由なんかないって！それで、いつごろここに来ればいいんだ？」

「えつと…会うのはこじやなくて、現実のほうでいい？」

「え…ういや、俺は構わないよ…でも良いのか？俺に正体がバレるってことだよ…」

実際、葵は自分の正体がブルーエンジェルだってことは隠したいんじゃないよ…それなのに何でだ？

それだけ俺のことを信頼してくれてるってことなのかな？それとも、俺の正体がバレてるのか？

いや、まさかね…

「Phantomなら信用できるし、大丈夫よ！それで、今度の日曜日、13時に広場で待ち合わせでいい？」

「オツケー、わかったよ！あ、そうだ…合言葉を決めておこうよ！俺達、お互いに現実の姿とか知らないわけだし」

「ふふっ、私は知ってるわよ…ね？侑哉」

「へっ!?何で俺の名前を…まさか、あ、葵!?」

「正解！」

マジで？俺の正体バレてたの…！何でだ！あれか、やっぱりPhantomの時みたいデュエルしてたからか？

「やっぱり、侑哉がPhantomだったんだ…良かった」

「俺はちつとも良くないけどね…これで、もし俺が全く知らない赤の他人だったらどうするつもりだったんだ？」

俺の正体がバレるよりもそっちの方が問題だろ…

「まあ、Phantomが侑哉だってことはなんとなくわかってたから…」

「なるほどね…ということとはさっきのデートの話し俺の正体を暴くための嘘だったってこと？」

「うんうん、そっちは本当…助けてもらったお礼がしたいのも、現実でデートしたいのも…だから、付き合ってよね…」

葵は、俺の方を見ながら小さく笑みを溢した。

「わかったよ、楽しみにしてる…」

「本当!?ありがとう…日曜日、遅刻しないようにね！」

笑顔でそう言う、ブルーエンジェルを見て思わず笑みが零れた。

「まあ、善処するよ…」

「ふふつ、それじゃあ私今からデュエルしてくるから、ちゃんと見ててよ！Phantom！」

「うん、頑張れよ！ブルーエンジェル！」

嬉しそうに歩き始めた、ブルーエンジェルの後には俺も続いた。

この時の俺はまだ知らなかった、すでに運命の歯車が動き出していることに…

第6話 スピードデュエル

「さてと、ブルーエンジェルのデュエルを見せてもらおうかな……」

今、ブルーエンジェルは建物の上で対戦相手と向かいあっている。

そして、恐らくLINK VRAINSの外で見ているであろう自分のファン達に手を振りながら、俺へと微笑みを見せる。

うん、調子は良いみたいだな。

問題はハノイの騎士がいつ攻撃を仕掛けてくるかだな……

多分、今は時間軸的に見れば第1話といったところだろう……確か、第1話ではハノイの騎士が攻撃を仕掛けてくるはず。

といっても、第1話のあらすじとか遊戯王ラボで見た情報で、俺もそれ以外は知らないんだけどな……

「まあ、とりあえずブルーエンジェルのデュエルを楽しませてもらうかな……うん？あれは……」

俺がそう呟くと同時に空が割れ、中から黒い機械の竜が現れ、その上で腕を組んで乗っている人影が見えた。

「ハノイの騎士……もう来たのか……！思ったより早い登場だな……」

俺は花恋に再現してもらった、ファントム遊矢の伸びる棒を近くの建物に引っ掛け、高跳びの要領でそのまま跳んだ。

そして、そのまま巨大紙飛行機を展開し、その上に乗った。

「ふう、本当によく再現できてるな……花恋に感謝しないとな」

いつも、俺の無茶ぶりに付き合ってくれる花恋に感謝しながら、ハノイの騎士の後を追う。

「何だ、貴様は？ハノイの邪魔をするなら容赦はしない！」

そう言いながら、黒い機械の竜……クラツキングドラゴンで攻撃を仕掛けてくる。

「っと、危ないな！当たったら落ちるだろ！大体、そっちこそ何なんだ？いきなり攻撃仕掛けてきて！」

「貴様には関係のないことだ！」

「聞く耳持たないってわけ……ってあれは！」

ハノイの攻撃をひたすらかわし続けているとブルーエンジェルの

姿が目に入った。

まだ、逃げられてなかったのか？とにかく助けないと！

俺は紙飛行機を乗り捨て、ブルーエンジェルの元へと飛び降りた。

「おっとー…ふう、着地成功つとー！」

「Phantom！無事だったのね…良かった」

「まあ、なんとかかね…そっちも無事で良かったよ」

実際、それなりに高いところから飛び降りたせいで、多少は痛みを感じたが、特に問題はないな。

「さて、それじゃあ逃げるぞ！ブルーエンジェル」

「う、うん…」

俺はブルーエンジェルの手を引きながら、走り出した。

「あ…」

「どうかしたか？」

「な、何でもないわ…」

若干戸惑っている様子のブルーエンジェルを不思議に思いながら、走り続けた。

それにしても、ハノイの騎士ってしつこいな…せめて向こうがデユエルを受けてくれればなんとかなるんだけどな…

「逃がさんー！」

俺がそんなことを考えながら逃げているとハノイの騎士が接近し
てきていた。

「…っ！しょうがない…ブルーエンジェル！」

「え…？」

俺はブルーエンジェルを近くの建物の物陰に連れていった。

「Phantom…どうしたの？」

「ちよつとここに隠れてくれ！あいつは俺が引き付けてみるから」
「待って！それなら私も行く！」

「いや、でも…」

「私が、そんな簡単にやられると思う？」

ブルーエンジェルはどこか、自信満々でそう言い放った。

やれやれ、どこからそんな自信が来るのやら…

「はあ、わかったよ…一緒に行こう」

「ありがとう、侑哉」

「ここではPhantomだよ、葵…それじゃあ行くよー！」
「うんー！」

俺達はそのまま、建物の物陰を飛び出しハノイの前に姿を見せる。

「さあ、こつちだよー！」

「いいえ、こつちよー！」

俺とブルーエンジェルはあちこちに移動しながら、ハノイを攪乱する。

その結果、ハノイは攻撃対称を定められずクラッキングドラゴンに攻撃指示をすることができない。

「これなら、なんとかか…」

「え…」

攻撃をかわし続けていると、突如嫌な浮遊感に襲われた。

そのまま、鈍い痛みが走り自分が転んだのだと自覚した。

「これはまずいな…」

「Phantom！」

近くからブルーエンジェルの心配そうな声が響く。

「まずは、貴様からだ！」

それとほぼ同時に、ハノイの攻撃が目前に迫る。

その攻撃が俺に直撃しようとした、その刹那…

俺は何者かに引っ張られ、ハノイの攻撃を受けずに済んだ。

「ふう、助かったよ…って君は…」

俺を助けてくれた人物には見覚えがあった…まあ、実物を見るのは初めてだったけど。

「俺の名はPlaymaker…ハノイの騎士、お前達の探しているものはここにある」

それは、遊作が変身したplaymakerだった。

「今すぐLINK VRAINSへの攻撃を止めろ！さもなければ、今ここでこいつを…消す」

『ええっ！救世主を人質にするのかよー！』

なぜか、遊作、もとい playmaker のデュエルディスクから
声が聞こえた。

もしかして、謎の AI の声か？ と言えばデュエルディスクの中に入ってたな…

「Phantom! 無事だったのね…良かった」

「ああ、playmaker のおかげでな」

俺のことを心配してくれたのか、ブルーエンジェルの息が上がっていた。

「あんまり心配させないですよ…」

「ごめん、心配かけた…」

俺とブルーエンジェルがそんな会話をしていると、playmaker が話しの続きを始めた。

「この AI はデュエルプログラムに書き換えた、こいつを手に入れたのなら、俺にデュエルで勝つしかない」

「いいだろう！ ハノイの恐ろしさを思い知らせてやる！」

どうやら、デュエルをする流れになったみたいだ。

つまり、playmaker のデュエルを見れるってことか！ 楽しみだな…うん？ あれは…

「playmaker、どうやら相手は一人じゃないみたいだよ」

「どういうことだ？…なに！」

ふと、目を向けた先に居たのは二人目のハノイの騎士、ハノイの騎士 B ってところか…見た目が同じだから区別しにくいな。

「まあ、あつちは俺に任せてくれよ…そつちは頼んだよ！」

「ああ、任せろ」

そう言つて、俺と playmaker はそれぞれの敵とのデュエルへと望んだ。



「さてと、こつちの準備は整ったよ…さつそく始めようか！」

近くの建物へと移動し、ハノイと向かいあう。

その後、突如風が吹き始めた。

「これは…」

「何だ…データの風…?」

そうか、これが草薙さんの言ってたデータストームか！

ということは今から始まるのはスピードデュエル…

そんな風に思考していると、どこからともなく赤と緑のカラーリングのボードがこちらへと飛んできた。

飛び乗れってことか…上等！

俺は直ぐ様ボードに飛び乗り、右へ左へとバランスをとりながら体制を整える。

やばい、これすごい楽しい！

「スピードデュエルか、面白い！」

俺がこの状況を楽しんでいると、ハノイが自分のボードを展開し、そんなことを言ってきた。

この口ぶりからするとハノイはスピードデュエルについて知っているみたいだな…ちよつと待て！俺、かなり不利じゃないか？

まあ、でもこういう状況を覆ってこそそのエンタメデュエリストってもんだよな！

俺はそう自分を鼓舞させて、デュエルへと望んだ。

「それじゃあ始めようか！ハノイの騎士！」

「スピードデュエル!!」

ハノイの騎士LP4000

PhantomLP4000

「私の先行から行かせてもらう！私は手札からハック・ワームを特殊召喚！このカードは相手の場にモンスターが存在しないとき、特殊召喚できる！さらにもう1体ハック・ワームを特殊召喚！」

「さっそく来るか…」

「私はハック・ワーム2体をリリースし、クラッキングドラゴンをアドバンス召喚！」

クラッキングドラゴン攻撃表示（ATK3000）

「いきなりご登場か…面白くなってきた！」

「これこそガリボルバー様から受け取ったカード、このカードがある限り私は負けん！」

「なら、そのカードを攻略するだけだよ！」

「やれるものならやってみるがいい、私はこれでターンエンドだ」

ハノイの騎士LP4000

手札1

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン クラッキングドラゴン攻撃表示（A

TK3000）

伏せなし

Pゾーンなし

PhantomLP4000

手札4

場 なし

伏せなし

Pゾーンなし

序盤からクラッキングドラゴンか…あのカードの効果って地味に厄介なんだよな…

まあ、突破方法がないわけじゃないしなんとかなるか…

「行くよ！俺のターン、ドロロー！」

それにしても、やっぱりこのデュエルはデュエルリンクスとほぼ同じみたいだな…

初手は4枚、メインモンスターゾーンと魔法、罠ゾーンが3つずつ、EXモンスターゾーンを含めても俺が使えるモンスターは4体までか…これはなかなか厳しいな。

しかも、魔法、罨ゾーンもPカードを使ったらそれだけでほとんどが埋まる…このルールは俺のデッキと相性が悪そうだな…

でも、だからこそ面白い！

「今日も俺の可愛いアシスタントに協力してもらおうかな！俺は手札からEMユニを召喚！」

EMユニ攻撃表示(ATK800)

「この瞬間、クラッキングドラゴンの効果発動！相手がモンスター1体のみを召喚、特殊召喚した時そのレベル×200ポイントダウン攻撃力を下げ、下げた数値分だけ相手にダメージを与える！」

EMユニ(ATK800↓0)

PhantomLP4000↓3200

「くっ…でもEMユニの効果を発動するよ！このカードが召喚、特殊召喚に成功した時、手札から仲間のEMを呼べる！俺はEMコンを特殊召喚！」

EMコン攻撃表示(ATK600)

「だが、再びクラッキングドラゴンの効果が発動する！」

EMコン(ATK600↓0)

PhantomLP3200↓2600

本当に、地味に厄介な効果だな…まあ、それでもやるしかないんだけどさ…

「今日も頼んだよ…ユニ、コン！」

そうやってユニとコンに声を掛けると、ふとどこからか視線を感じた。

その視線に目を向けるとブルーエンジェルがジト目でこつちを睨みつけていた。

え、どういうこと!?!なんで睨まれてるんだ？俺はいつも通りデユエルしてるだけだよ！

ユニとコンも俺と同じような感想を持っているのか、捨てられた子犬のような目でこつちを見ている。

うん、とりあえず気を取り直して…

「さらに、コンの効果を発動！このカードとこのカード以外の攻撃力1000以下のEMモンスターを守備表示にすることでデッキからオッドアイズモンスターを手札に加える！俺はオッドアイズ・ペルソナ・ドラゴンを手札に加えるよ！」

EMユニ攻撃表示↓守備表示 (DEF1500)

EMコン攻撃表示↓守備表示 (DEF1000)

「さあ、行くよ！俺はスケール1のオッドアイズ・ペルソナ・ドラゴンとスケール8のオッドアイズ・ミラージユ・ドラゴンでペンデュラムスケールをセッティング！」

これで、レベル2から7のモンスターが同時に召喚可能になった！「揺れる！運命の振子！迫り来る時を刻み、未来と過去を行き交え！ペンデュラム召喚!!来い、俺のモンスター！EMペンデュラムマジシャン！」

EMペンデュラムマジシャン攻撃表示 (ATK1500↓700)

PhantomLP2600↓1800

「そして、ペンデュラムマジシャンの効果発動！自分のフィールドのカードを2枚まで破壊し、破壊したカードの数だけデッキからEMモンスターを手札に加えることができる！俺はペルソナ・ドラゴンとミラージユ・ドラゴンを破壊し、デッキからEMオッドアイズユニコーンとEMシールイールを手札に加える！」

Phantom手札1↓3

「さあ、行くよ！俺はユニとペンデュラムマジシャンでオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！漆黒の闇より！愚鈍なる力に抗う反逆の牙！今、降臨せよ！エクシーズ召喚！現れる！ランク4ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン！」

ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン攻撃表示 (ATK2500)

「何!?エクシーズモンスターだど！」

「その通り！エクシーズモンスターはレベルを持たない、だからクッキングドラゴンの効果は通用しない！」

エクシーズモンスターの登場により、思った以上の動揺を見せるハ

ノイの騎士：

さあ、ここから反撃と行こうか！

「ダーク・リベリオンの効果発動！オーバーレイユニットを2つ使い、相手フィールド上のモンスター1体の攻撃力を半分にし、その数値分だけダーク・リベリオンの攻撃力をアップする！トリーズンデイスチャージ！」

クラッキングドラゴン（ATK3000↓1500）

ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン（ATK2500↓4000）

「バトル！ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンでクラッキングドラゴンに攻撃！反逆のライトニングデイスオベイ！」

ダーク・リベリオンの攻撃がクラッキングドラゴンに命中し、クラッキングドラゴンを破壊した。

「ぐおおお!!まさか、こころも容易くクラッキングドラゴンが…」

ハノイの騎士LP4000—2500=1500

「俺はこれでターンエンド…さあ、どう出てくる？」

ハノイの騎士LP1500

手札1

場 なし

伏せなし

Pゾーンなし

PhantomLP1800

手札3 内2枚（EMオッドアイズユニコーン、EMシールイール）

場 EXモンスターゾーン ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン攻撃表示（ATK4000）

メインモンスターゾーン EMコン守備表示（DEF1000）

伏せなし

Pゾーンなし

「くっ、私のターン！ここでスキルを発動させてもらう！」

「スキル…？」

そうか、これがデュエルリンクスと同じルールなら当然、スキルだつてあるに決まつてる…すっかりそのことを忘れてた。

「スキル発動！ダブルドロ―！このスキルによりデツキからカードを2枚ドロ―する！」

「はあっ!?何だよそのスキル！強すぎないか？」

ノーコストで2枚ドロ―って強欲な壺と同じ効果じゃないか！

インチキ効果も大概にしろ！

「ふっ、これで私の場合は完璧なものになる…まずは魔法カード死者蘇生を発動！このカードの効果で墓地のクラツキングドラゴン等特殊召喚する！」

俺が心の中でそう叫んでいると、さつき倒したクラツキングドラゴンが復活した。

まあ、そういったカードが手札にあるとは思ってたけどな…

「私はカードを1枚伏せて、バトル！クラツキングドラゴンでEMコンを攻撃！」

クラツキングドラゴンの攻撃によりコンが破壊される。

「私はこれでターンエンドだ」

「なら、エンドフェイズに墓地のEMコンの効果！このカードとこのカード以外のEMを除外し、ライフを500ポイント回復する！俺は、ユニとコンを除外してライフを500回復する」

PhantomLP1800↓2300

「俺のターン、ドロ―！まずは、スケール3のEMシールイルとスケール8のオッドアイズユニコーンでペンデュラムスケールをセツティング！そして、シールイルのP効果！相手フィールド上のモンスター1体の効果をターン終了時まで無効にできる！俺はクラツキングドラゴンの効果を無効にするよ！」

「…ぎかしい真似を…！」

「さらに、俺は手札からEMクロバットジョーカーを召喚！そして、ドロクロバットジョーカーの効果が発動！このカードが召喚に成功し

た時、デッキからこのカード以外のEM、魔術師Pモンスター、オッドアイズモンスター、のいずれかを手札に加えることができる！俺が手札に加えるのはオッドアイズ・ファントム・ドラゴン！」

EMドクロバットジョーカー攻撃表示(ATK1800)

よし、これで準備は整った！

「さあ、ここから本番だよ！」

「くくくつ……ははははっ！」

「何がおかしいんだ？」

「お前はここで終わりだ！」

「何言って……ぐつ、何だ……」

ふと、前を見るとデータストームが嵐のように渦巻いて、俺へと接近して来ていた。

「マジか……く、くそっ！うわああ!!」

接近して来ていたデータストームは俺を巻き込みながら渦巻いていった。

ちよつと、さすがにやばいかも……

第7話 オツドアイズイリジョン

目の前の光景に私は思わず息を呑んだ。

Phantomが竜巻のようなものに巻き込まれた光景に…

「嘘…侑哉！」

あんなものに巻き込まれて無事で済むわけがない…

でも、大丈夫よね…いつもみたいなのに、こんなピンチ乗り越えて『お楽しみはこれからだ！』って言うってくれるよね…

「お願い…無事でいて侑哉…」

私は祈るような気持ちでその光景を見つめた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「どわあああ!!く、くそっ！」

データストームに巻き込まれ、ぐるぐると視点が回る、右に、左に、上に…

とにかく、なんとか体勢を立て直さないと…

俺は近くに来た、ボードを掴み、力の限り手を押し込みそれを軸にしてボードへと飛び乗った。

「ふう、なんとか体勢を立て直させたな…それにしても、どうやって脱出すればいいんだ？」

さつきから、体勢をそのまま維持するのがやっとで動くに動けない。い。

パラソルを使ってみるか?…いや、そのままデータストームに巻き込まれて外に放り出されるだけだ…

出るには出れるけど、無事で済むわけがない。

「早いところ、ここから出たいんだけどな…良い方法が思いつかないな…」

『ほう、久しぶりの来客だな…』

「え?」

俺がここから脱出する方法を思考していると、どこからともなく声が聞こえてきた。

何だ、この声…？

『ほう、まだデータストームの声を聞ける人間がいたのか…』

『データストームの声…？何だよ、それ…』

もしかして、この声の主がデータストーム？だめだ、思考が追いつかない…

『まあいい、お前はここから出たいか？』

『そりゃあね、いつまでもここで立ち止まってるわけにはいかないからね』

どうやらこの声の主は俺が脱出できるように協力してくれるみたいだ。

『お前は どうしてここから出たい？』

っと思ったらまだ協力してくれるとは限らないみたいだ。

『それは…：今はまだデュエルの途中だ、それがデータストームに巻き込まれてデュエルが中断になるなんて俺は嫌だ…それに…』

『それに？』

『葵とデートの約束をしてるんでね、こんなところでくたばるわけにはいかないんだよ』

『はははっ…なるほど…：ならばこんなところで油を売ってる暇はないな！』

声の主は愉快そうに笑いながら、そう言った。

何かよくわかんないけど協力してくれるってことか…？

『まあ、そういうこと…：だから、ここから出してくれないか？』

『いいだろう…：それと、これを受け取れ』

そう声が聞こえたと同時に目の前にカードらしきものが姿を現した。

『これはカード？でも、絵柄が無いぞ？』

『どのカードになるかはお前の運次第だ、では機会があればまた会おう…』

『ちよっと待…』

その瞬間、風が吹きはじめ、気づけばさっきまでスピードデュエルを行っていた場所に戻ってきていた。

「バカな！あそこから脱出したのか!？」

「どうやら、そうみたいだね…」

ふと、手元を見てみるとさつきまで絵柄の無かったカードに絵柄が浮かんでいた。

「エンコード・トーカー?」

聞いたことのないカードだな…もしかして、もうちよい後に出るカードなのか?

名前と姿がデコード・トーカーに似てるし、多分、そうだな…:…つて、召喚条件はサイバース族モンスター2体以上!?

俺のデッキで出せないじゃんか!一応サイバースのデッキは持つてるけど、今使ってるのは違うしな…

まあ、とりあえず後で考えるか…

俺はハノイの騎士に向き直り、言葉を紡いだ。

「さあ、行くよ!お楽しみはこれからだ!」

ハノイの騎士LP1500

手札1

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン クラッキングドラゴン攻撃表示(ATK3000)

伏せ1

Pゾーンなし

PhantomLP2300

手札2 内1枚(オッドアイズ・ファントム・ドラゴン)

場 EXモンスターゾーン ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン攻撃表示(ATK4000)

メインモンスターゾーン EMドクロバットジョーカー攻撃表示(ATK1800)

伏せなし

Pゾーン EMシールイール(スケール3)

EMオッドアイズユニコーン(スケール8)

「俺はセツティング済みのPスケールでペンデュラム召喚!! 来い! 俺のモンスター! オッドアイズ・ファントム・ドラゴン!!」

これこそが俺のエースモンスター! 俺の象徴!

現れたオッドアイズはようやく出番かと言わんばかりに咆哮を上げる。

やっぱ、何回見てもかっこいいな…

「今日も頼むよ! オッドアイズ!」

オッドアイズは俺の声に呼応するように頷いた。

「それじゃあ、行くよ! バトルだ! まずは、ダーク・リベリオン・エクスィーズ・ドラゴンでクラッキングドラゴンに攻撃! 反逆のライトニングデイスオベイ!」

「かかったな! リバースカードオープン! 速攻魔法、リミッター解除! このカードの効果で私のフィールド上に存在する機械族モンスターの攻撃力はターン終了時まで倍になる!」

クラッキングドラゴン (ATK3000↓6000)

「何?! によりよってリミッター解除か!」

俺がモンスターを召喚しても伏せカードが発動しなかったから、パルス・ボムじゃなくて攻撃を無効にするカードか、攻撃力を変化させるカードだとは予想してたけど…リミッター解除か…

「反撃しろ! クラッキングドラゴン!」

「ダーク・リベリオン!」

ダーク・リベリオンが破壊され、クラッキングドラゴンの攻撃がそのまま俺に向かってくる。

やばい、あれは当たったらダメなやつだ!

俺はすぐさま、横へとボードをずらし、直撃を避けた。

PhantomLP2300-2000||300

「ふう、危なかった…」

データストームだけじゃなくて相手のモンスターの攻撃が直撃しないように注意しなくちゃいけないのか…これがスピードデュエル…

アクションデュエルよりもアクションしてないか？このデュエル…

…
つて、今はそれどころじゃないな…

さて、どうやって逆転しようかな…：そういえば俺のスキルって何なんだ？とりあえずデュエルデイスクを確認しようかな…

そう思い、デュエルデイスクに目を移すとスキル発動が可能になっていた。

スキル名はオッドアイズイリユージョンか…効果は…：へえ、なかなかおもしろいな！使ってみるか！

「どうした？何もすることがないならターンエンドするんだな」

「いや、まだまだお楽しみはこれからさ！行くよ！スキル発動！オッドアイズイリユージョン！」

「ここでスキルだど!？」

俺がスキル発動を宣言すると目の前に、はてなマークが書かれた巨大なボックスが現れた。

おお、こんな感じなのか！さあ、何が出るかな？

「このスキルは少し特殊でね、5つあるスキルからランダムに選んでスキルが発動するんだ、つまり何が出るかはお楽しみってことさ！」

これが俺のスキル、オッドアイズイリユージョン…ライフが1000以下で俺の場にオッドアイズがいればバトルフェイズ中に発動できる、ランダム性が高いスキルだ。

何が出るかはわからない、まさにエンタメにぴったりのスキルだ。

「さあ、ルーレット、スタート！」

巨大なマジックボックスが様々な色に発光しはじめ、しばらく経って赤色に発光して止まり、ビックリ箱のように爆発した後、赤色の光りがオッドアイズへと降り注いだ。

「スキル発動！赤色の効果は自分のフィールド上のオッドアイズモンスターへの攻撃力はターン終了時まで元々の攻撃力の倍になる効果だ！」

「何だど!？」

オッドアイズ・フロントム・ドラゴン (ATK2500↓5000)

「行くよ！オッドアイズ・ファントム・ドラゴンでクラッキングドラゴンに攻撃！」

「バカめ！攻撃力はクラッキングドラゴンの方が上だ！」

「それはどうかな？」

「何!?!」

「この瞬間、オッドアイズユニコーンのP効果発動！自分のオッドアイズモンスターが相手のモンスターと戦闘を行う時、自分のフィールド上に存在するEMモンスターの元々の攻撃力分だけ戦闘を行うオッドアイズモンスターの攻撃力をアップできる！俺はドクロバツトジョーカーの攻撃力分だけオッドアイズ・ファントム・ドラゴンの攻撃力をアップする！」

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン（ATK5000↓6800）

「攻撃力6800だと!?!」

「行け！オッドアイズ・ファントム・ドラゴン！夢幻のスパイラルフレイム！」

オッドアイズから放たれた炎は渦巻きながら、クラッキングドラゴンへと直撃し、クラッキングドラゴンを破壊した。

「ぐおおっ！」

ハノイの騎士LP1500—800〓700

「この瞬間！オッドアイズ・ファントム・ドラゴンの効果発動！ペンデュラム召喚したこのカードが相手に戦闘ダメージを与えた時、Pゾーンのオッドアイズモンスターの数×1200ポイントのダメージを相手に与える！俺のPゾーンにはオッドアイズユニコーンがいる、よって1200ポイントのダメージを与える！」

「バ、バカな…!」

「お楽しみはこれまでだ！くらえ！幻視の力!!アトミック・フォース!!」

「ぐ、ぐわあああ!!」

ハノイの騎士LP700—1200〓500

ハノイの騎士は断末魔の声をあげながら、消えていった。

ログアウトしたのか…?」

色々と言いたいことがあったんだけどな…まあ、しょうがないか。
俺はそう思い、近くの建物に降りた。

「それにしても、結構キツかったな…スピードデュエル…まあ、楽しかったけど」

データストームに巻き込まれたり、攻撃が直撃しそうになったり…それに、俺のデッキとスピードデュエルの相性が悪かったり…

まあ、それでもスピードデュエルは結構楽しかったな…

「見つけたぜ！playmaker!!」

「うん？」

俺がそんなふう今回のデュエルについて考えていると、ふと、近くからそんな声が聞こえてきた。

この声、どつかで聞いたことがあるような…とりあえず行ってみるか！

俺はそうして、声のする方へと歩を進めた。

「あれ？GO鬼塚じゃないか…それに、playmakerも…」

そこにいたのはGO鬼塚と、俺と同じくハノイの騎士とデュエルをしていたplaymakerだった。

「Phantomか…どうやら、勝ったみたいだな」

「そつちこそ！お疲れさん、playmaker！」

「お前ら、俺を無視してんじゃねえ！さあ、俺とデュエルしろ！playmaker！」

ああ、なるほどね…GO鬼塚がplaymakerにデュエルを申しこんでたつてことか…

GO鬼塚はプロレスラーみたいに筋肉質な男で、ブルーエンジェルと同じカリスマデュエリストの一人だ。

使用デッキはこれまたプロレスラーが元になっているようなモンスター達のデッキ、剛鬼を使用している。

ちなみに、俺と同じエンタメデュエリストで、俺がデュエルするときにはエンタメデュエル合戦をよくやったりする。

「まあ、落ち着こうぜ…これはやったからこそ分かるんだけど、スピードデュエルって結構キツイんだよ…playmakerも多分、疲れ

てると思うぞ?…どうせデュエルするなら万全な状態でやった方が
良くないか?」

「ちつ…! わかった、だが覚えとけよ playmaker! お前は俺
が倒す!」

そう言つてGO鬼塚はログアウトしていった。

今回はやけにあっさり引き下がったな…俺の言い分をわかつてく
れたのか…?

それなら、良いんだけどな…

「一応、礼は言っておく」

「いや、気にしなくて良いって!」

「それじゃあな」

「ちよつと待…」

ちよつと待つてくれ、そう俺が言い終わる前に playmaker
はボードに乗つて、そのまま去つていった。

「どうするかな…これ」

俺は手元のエンコード・トーカーを見ながらそう呟いた。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「居た! 良かった…無事だったのね…」

Phantomを探して、あちこち回っているうちに、ようやくそ
の姿を見つけることができた。

「ブルーエンジェル! まあね、この通り無事だよ」

そうやって、いつものように笑つて Phantomはそう言った。

「本当に良かった…あの竜巻みたいなのに巻き込まれた時はどうなる
ことかと思つたわよ…」

「ごめん、心配かけた…」

「本当よ…! まあ、その後に脱出して『お楽しみはこれからだ!』つて
言つてたのを見たら少し安心したけど」

でも、それでもやっぱり不安で、こうして Phantomを探して
たわけだけど。

「本当にごめん…お詫びと言つちやなんだけど、ブルーエンジェルの

言うこと何でも一つ聞くよ…ああ、もちろん俺のできる範囲でだけど…」

「へっ!? な、何でも?」

侑哉の突然の爆弾発言に思わずそう聞き返す。

「う、うん…俺にできる範囲だけだね」

つ、つまり侑哉に私のしてほしいことをしてもらえるってこと…?

私のしてほしいこと…キ、キスとか…?

いや、いくらなんでもそれは早い気が…

「おーい、ブルーエンジェル? どうかしたのか?」

「な、なに? 侑哉」

「いや、さつきから考えんこでいるみたいだからさ…それに何か顔も赤いしどうかしたのかなって…」

「そ、それは…侑哉に何してもらおうか、考えてて…」

自分でもわかるぐらい、顔が熱くなる。

はあ、どうしよう…さつきから色々想像しちゃって、恥ずかしくて侑哉の方を見れない…

「ねえ、侑哉…この答えはデートの日までお預けで良い?」

「うん? ああ、それは構わないよ…それじゃあ、デートの時までに覚悟を決めとくよ」

「うん…それじゃ、また学校で! デート、楽しみにしてるから!」

「ああ、俺も楽しみにしてる!」

最後に、侑哉とそんな会話をして私はログアウトした。

デートの時の衣装は何を着ていこうかな? 侑哉はどこに連れていってくれるのかな?

侑哉と一緒にならどこでも楽しいと思うけど…

早く、日曜日にならないかな…

私は、日曜日のデートを楽しみにしながら、現実へと戻っていった…

U A 1万突破記念！〜葵の看病〜

「コホッ！コホッ！…ああ、きついな…風邪なんてひいたのいつぶりだ？」

朝起きると、体にとてつもないダルさを感じて一応熱をはかってみると、38℃近くの熱があり、こうしてベッドで寝ている。

「ああ…デュエルしたい、デツキを弄りたいよ…コホッ！」

「ダメ、侑哉は病人なんだから大人しくしてなさい！」

「そりやないよ…花恋…コホッ…コホッ」

そう言っつて、俺の看病をしてくれている花恋に若干文句を言いつつ、大人しくすることにした。

明日には治るかな？というか治ってくれなきゃ困るんだけど…

ピンポーン！

俺がそんなふうにいると、インターホンの音が響いた。

「あら、誰かしら？ちよつと見てくるわね」

「わかった…コホッ、コホッ」

そうして花恋が俺の部屋から出ていった。

それにしてもこんな時間に誰だろうな…

とりあえず、今日のところはゆつくりしようかな…というか今日のご飯どうするかな…

花恋は料理出来ないしな…今日はスーパーで何か買ってきてもらおうかな…

「うん…う」

そんなふうにいると、部屋の前に足音が聞こえてきた。

花恋が戻ってきたのか？

「入って良い？」

「え？あ、うん…どうぞ」

ちよつと待って、今の声って…いや、でもこんなところにいるわけ…

「侑哉、大丈夫？風邪をひいたって聞いたから、心配で来たんだけど…」

部屋に入ってきたのは心配そうな顔をしている葵だった。

「ああ、大丈夫だよ、葵…コホツ、コホツ！」

「本当に、大丈夫？何か欲しいものある？」

「そうだな…って、そういえば葵は何でここに？今、まだ授業中だろ？」

そう、葵の声が聞こえて驚いたのはそれだ…授業中なのにどうして葵がここにいるのか、それが気になっていた。

それ以前に葵に俺の家教えたことあったっけ？

「早退してきたのよ、侑哉が心配だったから」

「え？それって大丈夫…コホツ、なのか…コホツ」

「私よりも自分の心配をしてよ…ほら、ゼリー食べる？一応風邪をひいても食べられそうなものを買ってきたけど」

そう言っつて、葵はゼリーやプリンが入っている袋から無造作にブドウゼリーを取り出した。

「今日は私が侑哉の看病をするから、欲しいものがあつたり、してほしいことがあつたら遠慮なく言っつてね」

「いや、さすがにそれは…コホツ、わ、コホツ…悪いって…葵に風邪が移るかもしれないし」

実際、こうして見舞いに来てくれただけでもありがたいのにさらに看病をしてもらうなんて申し訳なさすぎる…

「大丈夫よ、そうなつたら今度は侑哉に看病してもらおうから！」

葵は少し悪戯っぽく微笑んで、そう言っつた。

「……わかつた、それじゃあ、今日は葵を頼らせてもらおうよ…」
「任せて！」

「ああ！よろしく」

葵とそんな会話をしながら、なんとなくいつも学校でしているやりとりをしているみたいで、安心した。

「そういうえば、葵…ケホツ、俺の家はどうやって知つたんだ？」

「実は、その…」

俺がそう言っつと、葵は少し困つたような表情をしながらこう言っつた。

「侑哉のお義姉さんから電話が来たのよ、それで、その時に家の場所も教えてもらったの」

「え……？」

それを聞いて、すぐさま花恋の姿を探すと部屋の隅っこに座っている姿が見えた。

「てへっ☆」

「てへっ☆じゃないよ！あんたか…義姉さん!!ケホツ、コホツ！コホツ！…」

「侑哉、無理に大声をだしちゃダメよ…咳がひどくなっっちゃうから…」
「ああ、ありがとう葵…ケホツ」

本当はまだまだ色々と言いたいことがあるけど、葵の言う通り咳がひどくなりそうだからやめとこうか…

それにこの状況もそんなに悪くはないしな。

「そうそう、今日は大人しくしてなさい、侑哉…」

「誰のせいだと思って、コホツ…思ってるんだよ…」

「まあまあ…それじゃあ私は下に行くわ、お邪魔するわけにもいかな
いしね…葵ちゃん、頑張つてね！」

「は、はい……！」

葵は俯きながら、そう返事をした。

頑張るって俺の看病のことかな…？というか葵に全部丸投げするのはどうかと思うけど…

俺はそんなことを思いながら、部屋から出ていく花恋を見ていた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「なんというか、ごめんな…ケホツ、ケホツ」

「良いわよ、気にしないで…私が来たくて来たんだから」

侑哉とそんな会話をしながら、先ほど花恋さんに言われた言葉を思い返す。

『葵ちゃん、頑張つてね！』

「〜っ！」

花恋さんの頑張つては多分、看病のことじゃない…だって私がここに来た理由は他にもあるから。



あれは、今日の朝にいつも通り教室で待っていた時だった、いつもその時間に来るはずの侑哉が来ていなくて、珍しく寝坊でもしたのかな、そんなふう zu 思っていた時に侑哉の携帯から電話が掛かってきた。

「もしもし、侑哉？今日はどうかしたの？」

掛かってきたのはビデオ通話じゃなくて普通の電話だったから耳に携帯を当てて電話に出た。

『あく、ごめんね！私は侑哉じゃないのよ』

「え……？」

お、女の人!?侑哉ってもしかして彼女が居たの……?

『私は神薙 花恋、侑哉の姉よ……よろしくね』

「へっ!?は、はいよろしくお願ひします!」

良かったら、お姉さんだったんだ……安心した……でも、何で侑哉のお姉さんが私に電話を?

「私は財前 葵と言います、ところでどうして私に電話を？」

侑哉のお姉さんが私に電話を掛けてきたのが気になって軽く自己紹介をしながらそう聞いた。

『知ってる、侑哉からあなたの話しはよく聞いているから……実はあなたに相談したいことがあってね』

「相談したいこと、ですか？」

『侑哉、今日の朝38℃近くの熱を出しちゃってね……今日は学校に行けそうにないのよ……』

「侑哉が!?じゃあ、今から私がそっちに行きます!」

あ、でも私、侑哉の家がどこにあるか知らない……後で先生に侑哉の家の場所を聞くしかないわね。

『あれ、これはわざわざ言わなくても大丈夫だったかな……実は、相談つていうのは葵ちゃんに侑哉の看病を任せたいなってことだったんだけど……』

「相談つてそれだったんですね……それじゃあ今から行きますね!」

『家の場所は後で送るから……ありがとうね、葵ちゃん！もしかして侑哉から聞いているかもしれないけど私って家事が全然出来ないから、他の人に手伝ってもらいたくて電話したのよ』
「なるほど、そういうことですか……」

だから、花恋さんは私に電話を掛けてきたのね……それにしても、侑哉って花恋さんに私のことをどんなふうに話しているのかな？

すごく気になるわね……後でそれとなく聞いてみようかな？

『それはそうと、ねえ、葵ちゃん』

「何ですか？」

『単刀直入に聞くけど、侑哉のこと、好き？』

「は、はい!?急にどうしたんですか？」

突然、そんなことを聞かれ、思わず声が大きくなる。

『好き、ってことね……』

「は、はい……」

私は少し恥ずかしい気持ちになりながら、正直に思ったことを口にする、隠すことでもないし、いつかは言わなくちゃいけないことだから。

『そうなのね……なら、これはチャンスよ！葵ちゃん！侑哉を落とす大チャンス！』

「そう、なのかな？」

『そうそう……私がそれとなく部屋を出て、二人つきりにするから、後は葵ちゃんが自分でチャンスを掴むのよ！』

「いきなり、そんなこと言われても……」

『大丈夫よ、なんとかなるわ！それじゃあ、待ってるから、またね！』
「ちよつとー花恋さん!?……切れちゃった」

／／／／／／／／／／／／／／／／

「葵、大丈夫か？顔も赤いけど……もしかして、ケホツ、ケホツ……やつぱり俺の風邪がケホツ、コホツ……移っちゃた？」

「へっ!?あ、大丈夫よ……これは侑哉の風邪が移ったわけじゃないから

…」

「…そっか、なら良いけど」

「それで侑哉…何か食べる？」

「そうだな…コホツ、とりあえずさつき袋から出してたブドウゼリーを食べたいな」

「わかったわ…」

侑哉とそんな会話をしながら、さつき取り出したゼリーに手を伸ばす。

花恋さんはチャンスを掴めつて言つてたけど…どうすれば……そうだ！

私はゼリーをあけて、それをスプーンで掬い、侑哉の顔へと近づける。

「ほら、侑哉…口を開けて、食べさせてあげるから」

「え…？いや、それぐらい自分で…コホツ、コホツ！」

「ほら、早く口を開けて…今日は私を頼ってくれるんでしょ？」

多分、今の私は顔が赤くなっている…だって触らなくても顔が熱いのがわかる。

「そう言われると、返す言葉がないよ…それじゃ、お言葉に甘えて…」

「はい、あくん…」

「え、え…？」

「ほら、早く…」

「あ、あくん？」

ちよつと、戸惑いながら口を開けた侑哉にゼリーを食べさせる。

これはちよつと恥ずかしいわね……こういうのってなんか恋人みたい…

侑哉も照れているのか、少し顔が赤くなっている。

まあ、熱で顔が赤くなっているのかもしれないけど…

「さすがに、これは恥ずかしいな…やっぱり、自分で——」

「ダメ、私が食べさせるの…ほら、口を開けて、侑哉…」

侑哉が言い切る前に遮るようにそう言う。

確かに恥ずかしいけど、花恋さんがくれたチャンスが無駄にするわ

けにはいかないもんね…

「はい、あくん…」

「……あ、あくん」

侑哉も観念したのか、さつきよりも自然に口を開けて、ゼリーを食べた。

「はい、もう一口…あくん」

「あくん……なあ、毎回これするの？」

「当たり前でしょ、ほら、あくん」

「もう、どうにでもなれ……あくん」

何だかこういうやりとりってすごく楽しい…侑哉と恋人になったらこんな感じになるのかな？

周りが見たらバカツプルとか言われそうだけど、それでも良いかな？、なんてことを思ってしまう。

「ふふつ、なかなか良い雰囲気じゃない…もう、さつさとくつつけば良いのに……さて、邪魔をしないように下に降りるとしましょうか」

／／／／／／／／／／／／／／／／

「……うくん、あれいつの間にか寝てたのか…」

確か、葵にゼリーとか食べさせてもらいながら色々話してて…

あ、そのうちに寝ちゃったのか…

「うん？」

ふと、ベッドの上から重みを感じて視線を移す。

「すう…すう…」

そこにはベッドにもたれかかるように寝ている葵の姿があった。

「葵も寝ちゃったのか…ずっと俺の看病してくれてたわけだもんな、疲れててもおかしくないな」

それにしても…

葵の寝顔にふと目をやる。

「可愛い寝顔だな…」

そういえば、葵の寝顔って今まで見たことなかったよな…って、そ

れは当たり前か…

「すう…すう…」

「気持ち良さそうに寝てるな…起こさないように気をつけないとな…」

「侑哉…」

「え？今のつて…」

「すう…すう…」

少し、柔らかい表情をしながら葵は俺の名前を呼び、また規則正しい呼吸が聞こえてきた。

どんな夢見てるんだ？俺の名前を呼んだってことは俺が夢に出てるのかな…？

本当にどんな夢なんだ…

まあ、それは良いか。

「葵、今日はありがとな…」

そう呟いて、寝ている葵の髪をそつと撫でる。

葵は少しくすぐったそうにしながらも、どこか嬉しそうに頬を緩ませる。

その反応がとても可愛いくて、もつと撫でていたくなっただけ、さすがに起きてしまいそうだからやめておいた。

「もう少し、寝かせておくか…葵の寝顔も、もつと見ていたいし…」

俺はそんなことを思いながら葵の寝顔を見つめた。

その後、葵の看病の甲斐もあつて、風邪が治った俺が葵の看病をすることになるのだが、それはまた別の話し。

第8話 葵とのデート

「う、うくん…もう朝か…」

眩しい陽ざしに目を覚ます、ハノイの騎士とのデュエルからしばらく経ち、LINK VRAINSではスピードデュエルが流行り始めた。

playmakerもあのデュエルがきっかけで、今や時の人となり、playmakerの偽者までもが出てきていた。

その中で、何故か俺もニュースで大きくとりあげられ、playmakerと共にLINK VRAINSのWヒーローなんて言われていた。

「…つと、起きるかな、いよいよ今日か…楽しみだな」

そう、今日は日曜日、葵と約束したデートの日だ。

さて、俺は何をやらされるのやら…まあ、実際、葵に心配かけたのは事実だし、ちゃんとお詫びしないと。

「葵に楽しんでもらえるかな？今日のデート…」

正直、自信はない…だって女の子とデートするなんて初めてだし…ああ、やばい緊張してきた…

「まあ、やれるだけやるか…」

俺はそんなふうに思いながら、そわそわしながらデートの待ち合わせ時間まで過ごした。



「ちよつと早く来すぎたかな？」

時刻は12時ちよつと前、待ち合わせは13時なのだが何だか待ちきれなくて1時間も前に待ち合わせ場所に歩を進めた。

「こんな時間に葵が来てるわけないよな…待ち合わせ時間より1時間も前なわけだし」

そんなふうに思いながら、待ち合わせ場所へと再び歩き始めた。

「あれ？侑哉？」

「葵!？」

いぎ、待ち合わせ場所に着いてみると、そこには白のワンピースに水色の薄手のカーディガンという服装の葵がいた。

いつもの制服姿と違う、私服の葵の姿はなんだか新鮮で思わず、見とれてしまう。

「おはよう、侑哉!」

「おはよう、葵…」

笑みを浮かべて、そう言う葵に俺も同じく挨拶を交わす。

「どう、かな…?」

葵は少し不安げな表情をしながら俺へとそう尋ねてきた。

多分、服装のこと…かな?

「どうって…えっと、よく似合ってたて可愛いと思うよ…」

上目遣いで尋ねる葵に、そう正直に答える。

実際似合ってるし可愛いと思うしな…

「そ、そう…?あ、ありがとう…」

葵は少し照れたような表情をしてそう言った。

「俺は思ったことを素直に言っただけだよ…本当、よく似合ってるし可愛いよ」

「ちよ、ちよっと…!何度も言わないでよ…は、恥ずかしいから!」

葵は顔を真っ赤にしながら、そう言った。

「ははっ、ごめん…それじゃあそろそろ行こっか!」

「うん…ねえ、侑哉…」

「どうしたの?」

「手、繋がらない?」

「え…?」

葵の突然の発言に思わずそう聞き返す。

手を繋ぐって…いや、まあデートならおかしくないのかもしれないけれどさ…さすがに、恥ずかしいな…

「ほ、ほら…この前何でも言うことをひとつ聞くんて言っただけでしょ!これが私が侑哉にしてほしいこと…」

「あ、ああなるほどね…でも、それで良いの?」

葵は顔を朱色に染めながら小さく頷いた。

「わかったよ…じゃ、じゃあ手、繋ごつか…」

「うん…」

そうして、葵と手を繋ぐ。

繋いだ手が暖かい…その暖かさがなんとなく心地よくて

ずっとこうしていたいな、なんてことを思ってしまう。

そんなふうには俺が思っていると葵がそつと指を絡めてきた。

いわゆる恋人繋ぎというやつだ。

「あ、葵!?!さすがにこれは恥ずかしいって…元の繋ぎ方に戻さないか？」

「ダメ、今日はこのままでもいいさせて…」

「…わかったよ」

「ありがとう、侑哉…」

葵は笑みを浮かべて、そう言った。

本当、そういうのは反則だって…

「今日はどこに連れていってくれるの?」

「うくん、その前に喫茶店でちよつとした軽食でも食べてから行くっか」

「じゃあ、デートするのはその後ね…」

「この状況がすでにデートみたいなものじゃないか?」

「ふふっ、そうかもね…」

そんな会話を交わしながら、喫茶店に向かって歩を進める。

もちろん、手は恋人繋ぎのまま。

この何ともこそばゆい時間が妙に心地よくて、思わず頬が緩んでしまふ。

「どうかしたの?」

「いや、何でもないよ…」

「そっか…ねえ、侑哉」

「うん?」

「デート、期待してるからね!」

「あんまりハードル上げないでくれよ…正直、自信ないんだからさ…」

悪戯っぽい笑みを浮かべながらそう言う葵に少し苦笑しつつそう答えた。

「それじゃあ、早く喫茶店に行きましょう！」

「そうだね…」

そう言つて、さつきよりも少し足早に喫茶店へと歩を進めた。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

「ねえ、侑哉…ここは…」

「うん、遊園地だよ」

「もしかして、今日のデートの場所って…」

「やっぱり、デートといたらこういうところかなって」

喫茶店で軽食を食べ終えた俺達は今日のデート場所である遊園地へと来ていた。

正直、二人でショッピングに行こうか迷ったけど結局は遊園地にすることにした。

「もしかして、嫌だった？」

「うんうん、そういうわけじゃないけど…少し恥ずかしいなって…」

「大丈夫、俺も同じだから…」

実際、俺も少し恥ずかしい…遊園地でデートするということよりも、葵みたいな可愛い女の子とデートすることがなんだか照れくさい。

「そっか、侑哉も同じなんだ…なんか安心しちゃった」

「どういうこと？」

「もしかして、侑哉は今日のデートあんまり乗り気じゃなかったのになって…ちよつと不安だったから」

「そんなわけないって…今日のデートが楽しみでなかなか寝付けなかつたぐらいだよ」

しかも、楽しみにしすぎて待ち合わせ時間よりも早めに待ち合わせ場所に行っちゃったわけだし。

乗り気じゃないわけがない。

「そっか、なら良かった…」

葵は安心した顔をしながら、そう言った。

葵とそんな会話を交わしていると、気づけば遊園地の入場口のすぐそばに着いていた。

「それじゃあ、行こっか！葵！」

「うん……」

葵の手を引きながら、遊園地の中へと入る。

そこには家族で来ている人やカップルで来ている人など多くの人が居て、油断すればはぐれてしまいそうだ。

「葵、はぐれないように気をつけて」

「じゃあ、はぐれないように……」

そう言っつて、葵が体を寄せてくる。

そして、しばらくして腕に柔らかい感触が襲った。

これっつて、もしかして……

「ちよっ！葵!?どうしたんだよいきなり腕に抱きついてきて……」

「侑哉がはぐれないようにっつて言ったのよ?」

「いや、確かにそうだけど……」

何か今日の葵、妙に甘えてきてないか?

まあ、それを可愛いっつて思っつてしまっつ俺もいるんだっつけど……何っついうか、嬉しいな。

「嫌なら、やめるけど……」

「いや、このままで良いよ」

そう言っつて、俺は葵と歩き始めた。

俺の返事を聞いた葵はさっつきよりも少し強っ俺の腕に抱きっついて離さうとしない。

俺達っつて周りから見たらただの恋人同士にしか見えないよな……

まあ、まだ恋人なんかじゃないんだっつけどな。

それにっつても、俺のメンタル持っつかな……

俺はそんなことを思っながら歩き続けた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「楽しかった！次はどれにする?侑哉」

「うーん、そうだな…じゃあ、あれに乗ろう！」

そう言つて、俺は観覧車を指さした。

遊園地に入つて、ジェットコースターに乗り、その後にはメリーゴーランドやお化け屋敷へ行ったりしているうちに気づけば時刻は夕暮れ時になっていた。

葵と電話で話した時もそうだったけど、楽しい時間というのはあつたという間に過ぎてしまう。

本当に不思議だよな…

「どうかしたの？」

葵が俺の腕に抱きつきながらそんなことを聞いてきた。

「楽しい時間つてあつたという間に過ぎるなつて思つてさ…」

「確かにそうね…まだ、1時間ぐらいしか経つてない気がするのにもう夕方だもんね…」

少し、寂しげな表情を浮かべながら葵は俺が思っていることと同じようなことを口にした。

そのことが何となく嬉しくて、思わず舞い上がりそうになったが、さすがに自重して口にはしなかった。

その後も、葵に抱きつかれたまま観覧車の順番がくるまで他愛ない会話を続け、気づけば俺達に順番が回つてきた。

「それじゃ、乗ろうか！」

「うん…！」

観覧車に乗り込み、中の椅子へと葵と隣り合わせで座つた。

観覧車に乗り込んでしばらくして、葵が抱きつくのをやめ、俺と手を恋人繋ぎで繋いでくれた。

そして、そのまま俺へともたれ掛かつてきた。

葵の吐息が聞こえてくるぐらい葵の顔が近くにある。

そんな状況に内心ドキドキしながら葵へと声を掛ける。

「葵…？」

「こうしてみると、私達って恋人同士みたいね…」

「え…!? ちょっといきなりどうしたんだ？」

葵のそんな呟きに思わずドギマギしてしまう。

まあ、確かにそれっぽいかもしれないけどさ…

「こういうのって、恋人みたいだなって思ってる…」

「いや、確かにそうかもしれないけどさ…」

俺達はまだ恋人ってわけじゃないんだよな。

「ね、ねえ侑哉…このまま、本当の恋人に…なってみない？」

「……………え？」

俺がひとりそんなふうには思考していると葵が顔を赤くして、そんなことを言った。

思考が停止する、今の状況がまるで把握できない……………今のままで…
か…

「ちよつと待ってくれ…もしかしてそれって…」

「うん、私は侑哉が好きです…」

「それは友達としてとか、同じ部活の仲間として…？」

「うんうん…恋人として、一人の男の子として侑哉が好き」

わかりきっていたことだった、葵がこういう状況でそんな意味で言ったわけではない。

葵は相変わらず俺にもたれ掛かったままだ。

ただ、俺の手を握る葵の手には少し力が入っていて震えている、多分、俺がどんな答えを出すのか、それが怖いんだと思う。

だから、俺はこう言葉を紡いだ…

「本当は俺から言いたかったんだけどな…」

「え…？それって…」

今度は葵が驚いたような声を上げる。

この言葉を言うのは勇気がある、でも葵はその勇気を出して俺のことを好きだと言ってくれた、なら俺も勇気を出さないといけない。

俺は深呼吸して、さっきの言葉の続きを紡いだ。

「俺も葵が好きだよ…俺と付き合ってくれないか？」

「もちろん…！こちらこそよろしくね…！」

葵の返事は若干涙声で、でも、どこことなく嬉しさが滲んでいて…それを聞いた俺も嬉しくなった。

「侑哉…大好き…！」

「俺も大好きだよ、葵…」

観覧車の中に静寂が訪れる、でも気まずい感じじゃなくて、むしろ心地よい静寂が流れていて、射し込む夕陽はまるで俺達を祝福しているかのようにだった…

第9話 対決！リボルバー！

「このPhantomというデュエリスト、一体何者だ？」

まるで研究所のような空間で一人、男は呟いた。

その空間に写しだされている映像は一人のデュエリストがハノイの騎士とのデュエルに臨んでいる映像…

そのデュエリストはPhantom、LINK VRAINSの中でも高い実力を誇るエンタメデュエリスト。

このデュエリストとハノイの騎士のデュエルのある部分に男は疑問を抱き続けていた。

「何故、スキルを使用せずにデータストームからカードを手に入れることができた…」

その自問自答は何度繰り返し返したところで答えは出なかった。

「また、この映像をご覧になっているのですか？リボルバー様」

「スペクターか…ああ、playmakerも警戒しておいた方が良いでしょう。Phantomには不明な点が多すぎる」

リボルバーと呼ばれた男はPhantomというデュエリストについて、そう呟いた。

「スペクター、このデュエリストについて何かわかったか？」

「いえ、playmakerと同じくLINK VRAINSのログが全て削除されており、私たちの追跡をことごとくかわし、まるで情報が掴めません」

「となると、Phantomも凄腕のハッカーということか…」

「恐らくは…」

「わかった、PhantomがLINK VRAINSにログインしてきたら私に知らせろ、私が直接行く」

「かしこまりました」

「スキルを使用せずにデータストームからカードを手に入れることができるデュエリストか…フツ、おもしろい」

誰もいなくなった空間でリボルバーは一人そう呟いた。



「ああ…何か緊張するな…」

いつも通り、誰もいない廊下を歩きながら俺はそんなことを呟いた。

いやいや、何を緊張してるんだ…俺は…いつも通り、いつも通りにするんだ。

…
まあ、いつも通りを意識してる時点でいつも通りじゃないんだけど

俺はそんなことを思いながら、教室の扉を開けた。

「お、おはよう…葵」

「お、おはよう…侑哉」

教室に入り、いつも通り葵と挨拶を交わす、ただいつもとは違って妙に照れくさかった。

まあ、理由はわかりきっているんだけど…

「ね、ねえ…侑哉…その、私達って…こ、恋人になったのよね？夢とかじゃなくて…」

「う、うん…夢でもなんでもなく、本当にね…」

俺がそう言うと、葵はさつきから赤くなっている顔をさらに赤くさせて俯いてしまった。

「あ、葵…えっと、とりあえずいつも通りにしよう！」

「そ、そうね！いつも通りに…」

そう言いつつも、葵も照れているのか顔は赤いままだった。

「そ、そういえば…侑哉、知ってる？」

「うん？何を？」

「侑哉、かなり話題になってるわよ、LINK VRAINSのWHIーローだつて」

「ああ、それが…何かそんなふうに言われてるらしいな…俺はヒーローなんて柄じゃないんだけどな」

playmakerはヒーローって感じがするけど、俺にヒーローなんてものは合わない気がする…

俺はしがたいエンタメデューエリストに過ぎないし…それに俺はただ、俺のデューエルを見ている人達や対戦相手を楽しませたい、それだけだからな…

「そう？私はその思わないけど…」

「え…？」

「少なくとも、私にとって侑哉はヒーローだから！」

葵は少し笑って、そう言った。

「あ、ありがとう…でも俺は葵にそこまでのことをした覚えがないんだけど…」

「ふふっ、気づいていないだけで、侑哉は何度も私を助けてくれてるわよ…」

「そ、そうなのか…？」

「うん…！」

葵はそう言って、俺に微笑んでくれた。

葵のそんな顔を見ると、不思議と心が落ち着いて、なんとというか嬉しくなってくる。

「何か、そんなふうに言われると照れるな…まあ、とりあえずありがとな、葵…」

「私は本当のことを言っただけよ」

「そ、そっか…」

俺は少し気恥ずかしさを覚えながら、葵とそんな会話を交わした。

その後も、いつものように授業が始まるまで葵と他愛ない会話を続けた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「であるからして…」

授業の担当の教師が授業の内容を説明している。

正直、めんどくさいな…というか勉強が好きな人なんているのか？

いや、中にはそういう人もいるかもだけどさ…

「侑哉、今授業なんかめんどくさいとか思ってるでしょ?」

「ギクツ!よくわかったな…」

「侑哉がわかりやすいだけよ」

「そんなにわかりやすいかな?」

俺がそう言うのと、葵は肯定するように頷いた。

え、まじか…デュエリストとしてそれって結構問題なんじゃ…いや、デュエルの時は大丈夫なはず…

「財前さんの言う通り、侑哉君ってわかりやすいですよね」

「ところで、何で葉山さんが侑哉の隣に…?」

俺がそんなことを思っていると、俺の左の席に座っている美月が葵の意見に賛成するようにそう言った。

「どこの席に座ろうと、私の勝手じゃないですか」

「葉山さんの席はここじゃないでしょ?」

「何を言ってるんですか?特に席は決まっていなかったと思いますけど?」

「だとしても、わざわざここに来る必要はないわよね?」

えっ、何これ?喧嘩してるの?何故に?

俺がいくつもの疑問符を浮かべている中、葵と美月の口論(?)はまだまだ続いてた。

「あのく、二人供?俺を間に挟んで喧嘩するのやめてくれないか?」

「侑哉(君)は黙ってて!!」

「あ、はい…」

どうやらまだまだ続くみたいだな…誰か、何とかしてくれ…

「あれですか?侑哉君は私のもの、みたいな独占欲ですか?」

「そういうわけじゃないわよ…ただ、侑哉と私はこ、恋人だし…侑哉が、いくら知ってる人とはいえ他の女の子と仲良くしてるのを見るのはいい気分はしないから…」

葵は顔を赤らめながらそう言った。

というか、言っちゃって大丈夫なのか?いや、隠すことでもないんだけど…

「え?侑哉君と財前さん付き合ってたんですか?」

「そ、そうよ……ね？侑哉」

「うん…」

葵に尋ねられ、そう言葉を返す。

「な、なるほど…いつかはくつつくとは思っていましたが、まさかこんなにも早くくつつくとは…」

思いのほか、驚いていない様子で美月はそう口にした。

あれ？誰にも言っていないはずなただけだな…

「ハノイだー！ー！」

俺がそんなことを思っていると、突然大声でそう叫ぶ声が聞こえてきた。

というか、この声、島か…

ちなみに島はデュエル部に所属していて、悪いやつじゃないんだけど…ちよつと性格がな…

「LINK VRAINSにハノイの騎士が出たんだよ！」

ハノイがLINK VRAINSに!?タイミング悪いな…というか、島の奴、授業中に何見てるんだよ…

それにしても、参ったな…ハノイってことは間違いなく遊作もLINK VRAINSに行くよな…これはどう考えても罠だよな。

遊作が負けるとは思わないけど、俺もハノイには聞きたいことがあるしな…よし、決めた！

「葵、ノート取りお願いして良いか？」

「侑哉…もしかしてLINK VRAINSに行く気？」

「うん、ハノイには聞きたいことがあるしね…お願い！埋め合わせはちゃんとするからさー！」

「しようがないわね…じゃあまたデートに連れていってくれるなら良いわよ…」

俺がそうお願いすると、葵は笑みを浮かべながら、それを引き受けてくれた。

「ありがとう、葵が楽しめるようなデートプランを考えておくよ！」

「うん…楽しみにしてる！」

「そんじゃ、行ってくるよ！」

俺はそう言っつて、教室から出た。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「よし、着いたな…さて、どうなってる?」

教室を出て、屋上からLINK VRAINSにログインしてきた俺は、デュエルが行われていそうな場所に目を向けた。

「何だ、これ…? 檻か? しかもplaymakerとデュエルしてるのって、GO鬼塚じゃないか…」

ということはGO鬼塚がplaymakerを誘き出すためにハノイに変装してたつてことか…

「ここからじゃ、二人のデュエルが見えないな、せつかくだし見ていこうかな」

俺はそう思っつて、歩き始めた。

「お前がPhantomだな?」

俺が歩き出すと同時に、目の前にヘルメットのような仮面を被っている男が現れた。

「人に名前を聞く前に自分から名前を名乗るべきじゃないか?」

「これは失礼した、私の名はリボルバー…ハノイの騎士のリーダーと言えはわかるか?」

「ハノイの騎士のリーダー?」

そうか、どつかで見たことあると思っつたら…この人、思いつきリボルバーじゃないか!

嘘だろ!?!こんなに早く敵のリーダーとデュエルすることになるなんて…

「ハノイの騎士のリーダーが俺に何の用?」

「Phantom、お前にデュエルを申し込みに来た」

「デュエルなら大歓迎だよ! それにここであんたを倒せば、ハノイの騎士の悪事を止めることが出来そうだしね」

それにしても、リボルバーが俺にわざわざデュエルを挑んできたのは何でだ…?

まあ、何であれデュエルを断る理由はないな…それにリボルバーからは強者の風格みたいなものを感じるし、楽しいデュエルになりそう

だ。

「では、始めようか！ルールはマスターデュエルで良いな？」

「ああ、もちろんさ！いくよ！リボルバー！」

「デュエル!!」

「先行は私がもらう！私は1000LPを払い手札から永続魔法、ドラゴノイドジェネレーターを発動！このカードの効果で私の場にドラゴノイドトークンを1体特殊召喚する！さらにもう1体ドラゴノイドトークンを特殊召喚！」

リボルバーLP4000→1000≡3000

ドラゴノイドトークン×2攻撃表示(ATK300)

「そして、私はドラゴノイドトークン2体をリリースして、クラッキングドラゴンをアドバンス召喚！」

クラッキングドラゴン攻撃表示(ATK3000)

「さっそくお出ましか…まあ、なんとかなるだろ…」

もしかして、俺やplaymakerが戦ったハノイの騎士の使っていたクラッキングドラゴンはリボルバーからもらったのかな？

「私はカードを2枚伏せてターンエンド、この瞬間、ドラゴノイドジェネレーターの更なる効果を発動！ターン終了時に相手は自分の場にドラゴノイドトークンを特殊召喚しなければならない！私はこのターン、2体のドラゴノイドトークンを特殊召喚した、よってPhantom、お前の場にドラゴノイドトークンを2体特殊召喚！」

「そんな効果が…俺はドラゴノイドジェネレーターの効果でドラゴノイドトークンを2体特殊召喚…」

「この瞬間、クラッキングドラゴンの効果が発動する！」

ドラゴノイドトークン×2(ATK300→100)

PhantomLP4000→(200+200)≡3600

リボルバーLP3000

手札1

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン クラッキングドラゴン攻撃表示(ATK3000)

伏せ3 内1枚ドラゴノイドジェネレーター

Pゾーンなし

PhantomLP3600

手札5

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン ドラゴノイドトークン×2 攻撃表示(ATK1000↓300)

伏せなし

Pゾーンなし

「いくよ！俺のターン、ドロー！最初から飛ばしていくよ！Here we go!! It's a show time!!俺はスケール1のオッドアイズ・ペルソナ・ドラゴンとスケール8のオッドアイズ・ミラーージュ・ドラゴンでペンデュラムスケールをセッティング!!」
「来るか、ペンデュラム召喚…」

「これでレベル2から7のモンスターが同時に召喚可能！揺れる運命の振り子!!迫り来る時を刻み、未来と過去を行き交え!!ペンデュラム召喚!!来い、俺のモンスター達!!EMセカンドンキー、EMペンデュラムマジシャン、そして、オッドアイズ・ファントム・ドラゴン!!」

EMセカンドンキー攻撃表示(ATK1000)

EMペンデュラムマジシャン攻撃表示(ATK1500)

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン攻撃表示(ATK2500)

「ペンデュラムマジシャンの効果とセカンドンキーの効果を発動！まずはセカンドンキーの効果で、デッキからEMギッターバッタを墓地に送る！そして、ペンデュラムマジシャンの効果！俺はドラゴノイドトークン2体を破壊し、デッキからEMドクロバットジョーカーとEMレインゴートを手札に加える！」

「ドラゴノイドトークンを処理しつつ、手札を補充したか…なかなか

やるな」

「そいつはどうも…さらに俺は手札からEMドクロバットジョーカーを召喚！ドクロバットジョーカーが召喚に成功した時、デッキからこのカード以外のEM、魔術師Pモンスター、オッドアイズモンスターのいずれかを手札に加えることができる！俺はEMバリアバルーンバクを手札に加える！」

「だが、それと同時にクラッキングドラゴンの効果が発動する！」

EMドクロバットジョーカー攻撃表示(ATK1800↓1000)

PhantomLP3600↓2800

「ぐっ…い！」

ほんと、厄介だよなクラッキングドラゴンの効果って…それにしても、本来の持ち主なだけあって、クラッキングドラゴンの効果を使いこなしてるな…

リボルバー…強いデュエリストだな…まあ、相手が誰であれ俺は俺のデュエルを貫くだけだ！

「俺はドクロバットジョーカーとセカンドンキーでオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！漆黒の闇より！愚鈍なる力に抗う逆逆の牙!!今、降臨せよ！エクシーズ召喚！現れるランク4、ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン!!」

ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン攻撃表示(ATK2500)ORU2

「やはり、来たかエクシーズモンスター！」

「さあ、いくよ！ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンの効果発動！ORUを2つ使い、相手フィールド上のモンスター1体の攻撃力を半分にし、その数値聞だけ攻撃力をアップする！トリイズンデイスチャージ！」

クラッキングドラゴン攻撃表示(ATK3000↓1500)

ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン攻撃表示(ATK2500↓4000)

「バトル！ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンでクラッキング

ドラゴンに攻撃！反逆のライトニングデイスオベイ!!」

ダーク・リベリオンの攻撃がクラッキングドラゴンに命中する、これが通れば2500のダメージを与えられるけど…

「畏発動！ガードブロック！このカードの効果により戦闘ダメージを0にし、デッキからカードを1枚ドローする！」

やっぱり、そういうカードがあるよな…

「続けて、オッドアイズ・ファントム・ドラゴンでダイレクトアタック！夢幻のスパイラルフレ임!!」

「畏発動！ガードブロック！このカードの効果で再び戦闘ダメージを0にし、1枚ドローする！」

まさかガードブロックが2枚伏せてあるとは…これはちよつと予想外だな。

「なら、ペンデュラムマジシャンでダイレクトアタック！」

「さすがに、これは受けるしかないな…」

リボルバーLP3000—1500||1500

「やるな、リボルバー…さすがはハノイの騎士のリーダーってところか」

「フツ、お前もなPhantom…クラッキングドラゴン程度では相手にもならんか…」

「まあ、まだデュエルは始まったばかりだ、どうせなら楽しいデュエルにしようぜ！俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

リボルバーLP1500

手札3

場 なし

伏せ1（ドラゴノイドジェネレーター）

Pゾーンなし

PhantomLP2800

手札2（EMレインゴート、バリアバルーンバク）

場 EXモンスターゾーン ダーク・リベリオン・エクシーズ・ド

ラゴン攻撃表示 (ATK4000)

メインモンスターゾーン オッドアイズ・ファントム・ドラゴン
攻撃表示 (ATK2500)

EMペンデュラムマジシャン攻撃表示 (ATK1500)

伏せ1

Pゾーン オッドアイズ・ペルソナ・ドラゴン (スケール1)

オッドアイズ・ミラーージュ・ドラゴン (スケール8)

第10話 エース対決!

「私のターン、ドロー!」

リボルバーLP1500

手札3↓4

場 なし

伏せ1 (ドラゴノイドジェネレーター)

Pゾーンなし

PhantomLP2800

手札2 (EMレインゴート、バリアバルーンバク)

場 EXモンスターゾーン ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン攻撃表示 (ATK4000)

メインモンスターゾーン オッドアイズ・ファントム・ドラゴン攻撃表示 (ATK2500)

EMペンデュラムマジシャン攻撃表示 (ATK1500)
伏せ1

Pゾーン オッドアイズ・ペルソナ・ドラゴン (スケール1)

オッドアイズ・ミラーージュ・ドラゴン (スケール8)

さあ、どう出てくる?今のところは俺の方が有利に見えるけど、向こうの手札はそれなりにあるしな…

「フツ、すっかり場が崩されてしまったな…まずは、盤面を整えるか、私はゲートウェイドラゴンを召喚!」

ゲートウェイドラゴン攻撃表示 (ATK1600)

「ゲートウェイドラゴン?どんな効果を持つてるんだ?」

さっきのドラゴノイドジェネレーターもそうだけど、知らないカードが多いな…

まあ、当然といえば当然なんだけど。

「ゲートウェイドラゴンの効果発動!レベル4以下の闇属性・ドラゴ

ン族モンスターを手札から特殊召喚できる！私はスニツフイングドラゴンを特殊召喚！」

スニフイングドラゴン攻撃表示（ATK800）

「さらに、スニツフイングドラゴンの効果！このカードが召喚、特殊召喚に成功した時、デッキからスニツフイングドラゴン1体を手札に加えることができる！」

リボルバー手札2↓3

同盟モンスターを手札に加える効果か…手札補充にもなるしデッキ圧縮にもなる、結構いい効果を持つてるな…

というか、もしかしてこれって…

「現れるがいい、我が道を照らす未来回路！」

そう言つて、リボルバーは空に現れたサーキットへと入つていった。

「来るか？リンク召喚…」

「アローヘッド確認、召喚条件はレベル4以下のドラゴン族モンスター2体！私はスニフイングドラゴンとゲートウエイドラゴンをリンクマーカーにセット！サーキットコンバイン！リンク召喚！現れる、リンク2！ツイントライアングルドラゴン！」

ツイントライアングルドラゴン LINK2（ATK1200）リンクマーカー左／下

「さらにツイントライアングルドラゴンの効果発動！このカードがリンク召喚に成功した時、ライフを500ポイント払うことで墓地のレベル5以上のモンスター1体をこのカードのリンク先に特殊召喚できる！私は墓地のクラッキングドラゴンを特殊召喚！」

リボルバーLP1500↓1000

クラッキングドラゴン攻撃表示（ATK3000）

「クラッキングドラゴンを復活させたか…でもこれで終わりじゃないんだろ？」

「その通りだ、さらに私は魔法カード、クイックリボルブを発動！このカードの効果でデッキからヴァレットモンスター1体を特殊召喚できる！来い、マグナヴァレットドラゴン！」

マグナヴァレットドラゴン攻撃表示（ATK1800）

「ヴァレット…？また、見たことのないカードだな」

ヴァレット…弾丸とかそういう感じの意味だったよな。

多分、あれがリボルバーのデツキなんだろうな…どういうデツキなんだ？

「最も、クイックリボルブの効果で呼び出したモンスターはターン終了時に破壊されるがな…だが…」

「リンク素材にすれば問題ないってことか…なるほどね」

「そういうことだ、再び現れるがいい、我が道を照らす未来回路！アローヘッド確認、召喚条件は効果モンスター3体以上！私はLINK2のツイントライアングルドラゴンとクラッキングドラゴン、そしてマグナヴァレットドラゴンの3体をリンクマーカーにセット！サーキットコンバイン！リンク召喚！閉ざされし世界を貫く我が新風！

LINK4、ヴァレルロードドラゴン！」

ヴァレルロードドラゴンLINK4（ATK3000）リンクマーカー左／右／左下／右下

すごいな、この威圧感…これがリボルバーのエースモンスターか…というかトポロジックボマードドラゴンがエースってわけじゃないんだな…

まあ、それはそうとして…

「めっちゃ格好いいな!!そのドラゴン!!」

「…随分と楽しそうだな、普通こういう局面になったら楽しんでいゝる余裕などないと思うが…」

「そうか？敵のエースモンスターの登場だけ？自分のエースモンスターと相手のエースモンスターとの戦いってすごい楽しいと思うけどな」

実際、主人公とライバルのエースモンスター同士の戦いって見る方も楽しいしな…遊戯と海馬、遊星とジャックのデュエルとかな…

その内ヴァレルロードとファイアウォールのぶつかりあいと見えるのかな…

「フツ、面白いデュエリストだ…ならば簡単に終わってくれるなよ、お

前の言うエースモンスター同士の戦いとやらはまだ出来てはいないのだからな」

「当然！」

「行くぞー！バトル！」

「バトルフェイズに入る前にオッドアイズ・ファントム・ドラゴンを対象に手札のレインゴートの効果を発動！このカードを墓地に送ることで、このターン、オッドアイズ・ファントム・ドラゴンは戦闘、効果で破壊されない！さらに、手札からEMモンスターが墓地に送られたことにより、墓地のEMギツタンバッタを特殊召喚できる！蘇れ、EMギツタンバッタ！」

EMギツタンバッタ守備表示（DEF1200）

「なるほど、では改めてバトルフェイズに入る！ヴァレルロードドラゴンでダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンに攻撃！」

「ダーク・リベリオンよりも攻撃力が低いのに攻撃か…何かあるな…異発動！針虫の巣窟！このカードの効果でデッキからカードを5枚墓地に送る！」

デッキからカードを5枚墓地に送る…落ちたカードは……うん、悪くない。

「そんなことをしても意味はない！ヴァレルロードドラゴンの効果発動！このカードが戦闘を行う時に発動する、戦闘を行うモンスターをこのカードのリンク先に置き、コントロールを得る！」

「コントロール奪取効果!?厄介な…」

ダーク・リベリオンが俺の場から消え、リボルバーの場に移動する。「くつ、ダーク・リベリオンが！後で絶対返してもらおうからな！」

「そのためにはまず、このターンを乗り切ることだな…」

ヴァレルロードドラゴンでEMペンデュラムマジシャンに攻撃！「リボルバーがそう言うとな、ヘルメットが黒いヘルメットへと変わった。」

な、何だ？ヘルメットが変わった…？

「エネルギー充填ヴァレルモードチェンジ！ターゲットロックオン！対閃光防御最終セーフティ解除！くらえ！天雷のヴァレルカノン！」

その言葉と共に、ヴァレルロードドラゴンからミサイルのようなものが放たれ、ペンデュラムマジシャンに直撃した。

「ぐ、ぐわあああ!!」

PhantomLP2800↓1300

ヴァレルロードの攻撃の余波により、大きく後ろに飛ばされる。

やばい!このままじゃ思いっきり地面にぶつかる!なんとかしないと…

「っ!オッドアイズ!悪いけど頼む!」

俺の呼び掛けに応えるようにオッドアイズは咆哮をあげ、落下しそうになる俺を受け止めてくれた。

「助かったよ、ありがとなオッドアイズ!」

俺はオッドアイズの頭を撫でながら、そう呟いた。

「バカな!?!モンスターが自らの意思でデュエリストを助けたというのか!」

「そんなに驚くことか?まあ、大抵の人がそういう反応をするんだけど…やっぱり、珍しいのか…」

ARC-Vでは結構普通にモンスターに乗ったりしてたけどな…

「…フツ、やはりPhantom、お前は面白い!」

「何かよくわかんないけど、楽しんでくれているみたいだね!エンタメデュエリスト冥利に尽きるよ!」

「さあ、続けるぞ!ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンでオッドアイズ・ファントム・ドラゴンに攻撃!反逆のライトニングデイスオベイ!」

ダーク・リベリオンの攻撃がオッドアイズへと迫る、仮に戦闘で破壊されなくても、ダメージは受ける、このままじゃ負ける…けど

「簡単には終わらないよ!俺は手札のバリアバルーンバクの効果!このカードを墓地に送ることで、この戦闘で発生する戦闘ダメージを0にできる!」

バリアバルーンバクがダーク・リベリオンの攻撃を防ぎ、俺とオッドアイズを守ってくれた。

「そうこなくてはな…私は、カードを1枚伏せてターンエンドだ!」

「この瞬間、EMギッタンバッタの効果発動！このカードを墓地へ送り、墓地のレベル3以下のEMモンスターを手札に加えることができる！俺は墓地のEMレインゴートを手札に加える！」

Phantom手札0↓1

「…なるほど、ギッタンバッタとレインゴートを使った無限ループコンボか…そのコンボが続く限り、オッドアイズを戦闘、効果では破壊できない…厄介なコンボだ」

「マジか、もう気付いたのかよ…すごい観察眼だな」

まさか、こんなにあっさり気付かれるなんてな…リボルバー、やっぱりただ者じゃない。

「まあ、だからこそ面白いんだけど…さあ！今度は俺の番だ！行くよ！」

リボルバーLP1000

手札1 (スニツフィングドラゴン)

場 EXモンスターゾーン ヴァレルロードドラゴンLINK4 (ATK3000) リンクマーク左/右/左下/右下

メインモンスターゾーン ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン攻撃表示 (ATK4000) ヴァレルロードの左下でリンク

伏せ2 (内1枚ドラゴノイドジェネレーター)

Pゾーンなし

PhantomLP1300

手札1 (EMレインゴート)

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン オッドアイズ・ファントム・ドラゴン攻撃表示 (ATK2500)

伏せなし

Pゾーン オッドアイズ・ペルソナ・ドラゴン (スケール1)

オッドアイズ・ミラーージュ・ドラゴン (スケール8)

「俺のターン、ドロロー！まずは、手札補充と行こうかな俺は手札から魔法カード、カップオブエースを発動！コイントスを1回行い、表が出れば俺が2枚、裏が出れば相手がカードを2枚ドロローする！」

俺はポケットからコインを取りだし、そのコインを指で弾いた。

弾かれたコインは宙を舞い、そのまま吸い込まれるように掌に落下した。

「…よし！表だ！カップオブエースの効果でデツキからカードを2枚ドロロー！」

Phantom手札1↓3

「大したものだ、使いにくいドロソースをこうも簡単に使いこなすとは…」

「まあ、こういうカードを使いこなしてこそそのエンタメデュエリストつてもものだからね！そんじやいくよ！俺はセッティング済みのペンデュラムスケールでペンデュラム召喚！来い！俺のモンスター！エクストラデツキからEMペンデュラムマジシャン！」

EMペンデュラムマジシャン攻撃表示(ATK1500)

「ペンデュラムマジシャンの効果！俺はペンデュラムマジシャンを破壊し、デツキからEMオッドアイズユニコーンを手札に加える！」

Phantom手札3↓4

「さらに、俺は手札から魔法カード、ペンデュラムフュージョンを発動！このカードの効果で、Pゾーンのカードで融合召喚を行う！」

「Pゾーンのカードで融合召喚だど！」

「俺はオッドアイズ・ペルソナ・ドラゴンとオッドアイズミラーージュ・ドラゴンを融合！現れる！疾風纏いし迅雷の竜！オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン!!」

オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン守備表示(DEF3000)

「この瞬間、オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴンの効果発動！このカードが特殊召喚に成功した時、相手フィールド上の表側攻撃表示モンスター1体を持ち主の手札に戻す！宣言通り、俺のダーク・リベリオンは返してもらおうよ！」

ボルテックス・ドラゴンが竜巻を発生させ、ダーク・リベリオンは

その竜巻に吞まれ、俺の元へと戻ってきた。

「お帰り、ダーク・リベリオン……さらに、俺はスケール2のEMドラミングゴングとスケール8のEMオッドアイズユニコーンでペンデュラムスケールをセッティングする！これで準備は整った！行くよ！バトル！オッドアイズ・ファントム・ドラゴンでリボルバードラゴンに攻撃！」

「攻撃力の劣るモンスターで攻撃か……」

「分かっているかもしれないけど、この瞬間、ドラミングゴングの効果が発動するよ！このカードの効果でオッドアイズ・ファントム・ドラゴンの攻撃力を600ポイントアップする！」

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン (ATK2500↓3100)

「くらえ！夢幻のスパイラルフレイム！」

「ヴァレルロードドラゴンの効果発動！フィールド上の表側表示モンスター1体の攻撃力と守備力を500ポイントダウンできる！私はオッドアイズ・ファントム・ドラゴンの攻撃力と守備力を500ポイント500ポイントダウンさせる！そして、この効果の発動に対して相手はカードの効果が発動できない！」

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン (ATK3100↓2600)

「そんな効果まであるのかよ!?!」

「これで、ヴァレルロードドラゴンの攻撃力がオッドアイズ・ファントム・ドラゴンを上回った、迎撃せよ！ヴァレルロード！天雷のヴァレルカノン！」

オッドアイズとヴァレルロードの攻撃がぶつかり合い、わずかな差でヴァレルロードの弾丸がオッドアイズへと迫る。

「俺は墓地の幻影死槍〈ファントムデスピア〉の効果を使う！このカードは自分の閥属性モンスターが戦闘で破壊されるとき、代わりに墓地のこのカードを除外できる！」

「だが、ダメージは受けてもらう！」

「ぐっ……！」

PhantomLP1300↓900

「まさか、そんな効果までもってるなんてね……」

チエーンできない攻守を下げる効果…ボルテックスの効果も発動できないな…しかも、フィールド上ってことは自分のモンスターに対しても使えるってことか。

まあ、そんなことをしてどんなコンボができるのかはわからないけど…って、待てよ…もしかしてヴァレットってそういうデツキなのか？

攻撃力が下がったら何かしらの効果が発動する、みたいなの…まあ、警戒しておいた方が良さな。

「俺はこれでターンエンド…バトルフェイズが終了したことでドラミングコングの効果も終了し、攻撃力が元に戻る…」

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン (ATK2600↓2000)
どうやら、ヴァレルロードの効果は永続的なものらしいな…厄介な効果が多いモンスターだぜ。

リボルバーLP1000

手札1 (スニツフィングドラゴン)

場 EXモンスターゾーン ヴァレルロードドラゴンLINK4
(ATK3000) リンクマーカー左/右/左下/右下
メインモンスターゾーンなし

伏せ2 (内1枚ドラゴノイドジェネレーター)
Pゾーンなし

PhantomLP900

手札1 (EMレインゴート)

場 EXモンスターゾーン オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン
守備表示 (DEF3000)

メインモンスターゾーン オッドアイズ・ファントム・ドラゴン
攻撃表示 (ATK2500↓2000)

伏せなし

Pゾーン EMドラミングコング (スケール2)

EMオッドアイズユニコーン (スケール8)

第11話 決着、リボルバー戦！

リボルバーLP1000

手札1 (スニツフイングドラゴン)

場 EXモンスターゾーン ヴァレルロードドラゴンLINK4
(ATK3000) リンクマーク左/右/左下/右下

メインモンスターゾーンなし

伏せ2 (内1枚ドラゴノイドジェネレーター)

Pゾーンなし

PhantomLP900

手札1 (EMレインゴート)

場 EXモンスターゾーンオッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン
守備表示 (DEF3000)

メインモンスターゾーン オッドアイズ・ファントム・ドラゴン攻
撃表示 (ATK2500↓2000)

伏せなし

Pゾーン EMドラミングコング (スケール2)

EMオッドアイズユニコーン (スケール8)

「私のターン、ドロロー……まさか、これほどの実力者とはな」

「そつちこそ……相当強いデュエリストじゃないか、ハノイの騎士の
リーダーを張ってるだけあるよ」

素直に思ったことを口にする。

実際、リボルバーは本当に強い、戦略もそうだけど俺のレインゴ
トとギツタンバツタの無限ループコンボを一瞬で見破るほどの観察
眼も持っている。

それに、常に余裕たっぷりであるで追い詰めた気がしない……ほん
と、さすがの一言に尽きるよ。

「フツ……さあ、続きを始めるでしょう、まずは伏せカードを使う！ 畏発
動！ リビングデットの呼び声！ このカードの効果で墓地のモンス

ター1体を攻撃表示で特殊召喚する！私は墓地のマグナヴァレットドラゴンを復活させる！」

「そうはさせない！オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴンの効果発動！1ターンに1度このカード以外の魔法、罠、モンスターカードの効果が発動した時、EXデッキに表側表示で存在するPモンスターをデッキに戻すことで、その発動を無効にし破壊する！俺はオッドアイズ・ミラーージュ・ドラゴンをデッキに戻し、リビングデットの発動を無効にして破壊する！」

ヴァレットモンスターの効果がわからない以上、復活させるのはまずい：多分、ヴァレルロードの効果に反応する効果だとは思うんだけど…

「ほう、そんな効果を持っていたのか：だが、その効果は1ターンに1度しか使えない、このタイミングで使って良かったのか？」

「ヴァレットモンスターは多分だけど、ヴァレルロードドラゴンの攻守を下げる効果に反応して発動する効果があるんじゃないか？じやなきやわざわざ復活させる必要はない気がするしな」

「フツ、正解だ：ヴァレットモンスターはリンクモンスターの効果の対象になった時、発動する効果を持っている」

「やっぱりか：攻守を下げる効果に反応するわけじゃなかったけど、ほとんど思ってた通りだ。」

「ただ、どんな効果を持っているかはさっぱりわからないんだよな：まあ、そのうちわかるか。」

「ヴァレットモンスターの効果を見抜くとは：さすがはPhantomと言ったところか」

「随分と評価してくれてるみたいだね、光栄だよ」

「当然だ、私をここまで追い詰めたデュエリストなのだからな…：だが、今のお前の行動は無駄になる…」

「どういうことだ？」

「今、見せてやろう：まずはスニッフィングドラゴンを召喚！このカードの効果でデッキから3枚目のスニッフィングドラゴンを手札に加える！そして、スニッフィングドラゴンを除外し、手札からレッ

ドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを特殊召喚！」

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン攻撃表示（ATK280）

「ここでレダメ…なるほど、そういうことか」

確かにさっきの俺の行動は無駄になるな…まあ、相手にカードを使わせたと考えようか。

俺はそう前向きに考えて、リボルバーの動きに目を向けた。

「私はレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンの効果を発動！手札、または墓地のドラゴン族モンスターを特殊召喚できる！私は墓地のマグナヴァレットドラゴンを特殊召喚！」

マグナヴァレットドラゴン攻撃表示（ATK1800）

「早速お出ましか、さて、どんな効果を持つてるんだ？」

「今、見せてやる！ヴァレルロードドラゴンの効果発動！私は、マグナヴァレットの攻撃力と守備力を500ポイント下げる！そして、この瞬間マグナヴァレットの効果発動！このカードを対象とするリンクモンスターの効果が発動した時、このカードを破壊する」

「自壊した…？」

ただ自壊するだけ、なわけないよな…

「そして、その後フィールドのモンスター1体を選んで墓地へ送る！私はオッドアイズ・ボルテックス・ドラゴンを墓地へ送る！」

「嘘だろ!？」

対象をとらない墓地送り効果かよ！強すぎないか!？」

「このままバトルといきたいところだが…」

「手札のレインゴートの効果！オッドアイズ・ファントム・ドラゴンにこのターンの破壊耐性を与える！そして、手札からEMモンスターが墓地へ送られたことで墓地のギッターバッタを特殊召喚！」

EMギッターバッタ守備表示（DEF1200）

「やはり、そうくるか…では改めてバトルといこう！ヴァレルロードドラゴンでオッドアイズ・ファントム・ドラゴンに攻撃！天雷のヴァレルカノン！」

「くっ…墓地のSR三つ目のダイスの効果発動！墓地のこのカード

を除外し、攻撃を無効にする！」

ヴァレルロードの攻撃がオッドアイズへと迫る、その間に三つ目のダイスが現れ、オッドアイズを守ってくれた。

「ならば、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンでオッドアイズ・ファントム・ドラゴンに攻撃！」

さすがにこれは防げないか…

「ぐわあああー！」

PhantomLP900↓100

「フツ、またしのいだか…私はこれでターンエンドだ…そして、この瞬間破壊されたマグナヴァレットドラゴンの効果が発動する！デッキからこのカード以外のヴァレットモンスターを特殊召喚できる！私はオートヴァレットドラゴンを特殊召喚！」

オートヴァレットドラゴン攻撃表示（ATK1600）

「リクルート効果まであるのかよ…厄介だな」

でも、これでヴァレットデッキの特徴がわかったな。

ヴァレルロードの効果で自身を破壊し、何かしらの効果が発動して、ターン終了時に別のヴァレットをリクルートする…まさに弾丸を補充するみたいに。

そうやって相手を妨害しながら展開する…そういうデッキか…

「本当ならこの瞬間にギッタンバッタの効果を発動したいところだけど、ここはあえて発動しないでよくよ」

「ほう、無限ループコンボを自ら捨てたか…何を狙っている？」

「ま、それは見てのお楽しみさ…いくよ！俺のターン、ドロー！」

リボルバーLP1000

手札1（スニッフィングドラゴン）

場 EXモンスターゾーン ヴァレルロードドラゴンLINK4（ATK3000）リンクマーカー左／右／左下／右下

メインモンスターゾーン レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン攻撃表示（ATK2800）

オートヴァレットドラゴン攻撃表示（ATK1600）

伏せ1（ドラゴノイドジェネレーター）
Pゾーンなし

PhantomLP100

手札0↓1

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン オッドアイズ・ファントム・ドラゴン攻撃表示（ATK2500↓2000）

EMギッターンバッタ守備表示（DEF1200）

伏せなし

Pゾーン EMドラミングゴング（スケール2）

EMオッドアイズユニコーン（スケール8）

さて、こっからどうしようかな…とりあえず、まずは手札補充からだな。

「俺は手札から魔法カード、強欲で貪欲な壺を発動！デッキトップから裏側でカードを10枚除外し、カードを2枚ドロウする！」

Phantom手札1↓2

「勝負に出たか、このままペンデュラム召喚をされても面倒だ、処理するとかヴァレルロードドラゴンの効果発動！私はオートヴァレットドラゴンの攻撃力と守備力を500ポイント下げる！この瞬間、オートヴァレットドラゴンの効果発動！このカードを破壊し、フィールド上の魔法、罫カードを1枚を墓地へ送る！」

「なっ!?今度は魔法、罫カードを除去する効果か…」

「その通りだ、私はEMオッドアイズユニコーンを墓地へ送る！」

「くっ…」

やばいな…これじゃあペンデュラム召喚出来ない、だけど可能性を繋げることはできる。

「だが、万策尽きたというわけではなさそうだな」

「当然、お楽しみはこれからさ！俺はさらに魔法カード、貪欲な壺を発動！俺は墓地のEMバリアバルーンバク、セカンドンキー、レイン

ゴート、オツドアイズ・ボルテックス・ドラゴン、ドクロバットジョーカーの5体をデッキに戻し、2枚ドロロー！」

Phantom手札2↓1↓3

ドロローしたカードに目をやる。

「これなら…！だけどその前にちよつとした準備をしないとね、俺は手札からピットロンを召喚！」

ピットロン攻撃表示（ATK200）

「そのカードは?!」

「さあ、いくよ！現れる、希望を照らすサーキット！アローヘッド確認！召喚条件は通常モンスター1体！俺はピットロンをリンクマーカーにセット！サーキットコンバイン！リンク召喚！現れる！リンク1リンクスパイダー！」

リンクスパイダーLINK1（ATK1000）リンクマーカー下
「Phantom、お前もサイバースを使うのか!」

「Playmakerだって使っていたんだ、俺が使ってもおかしくないさ」

正直、サイバースを使うかどうかはギリギリまで悩んだ…でも、せっかく手に入れたエンコード・トーカーを活用しない手はないし、個人的に使ってみたくて少しだけサイバースを組み込んだ。

「まさかPlaymakerの他にサイバースを使う者がいるとはな…面白い！どこまでも私を楽しませてくれるな、Phantom！」
「そいつはどうも…なら、もっと楽しませてあげるよ！再び現れる！希望を照らすサーキット！アローヘッド確認！召喚条件はモンスター2体！俺はオツドアイズ・ファントム・ドラゴンとEMギツタンバッタをリンクマーカーにセット！サーキットコンバイン！リンク召喚!!現れる！リンク2プロキシードラゴン！」

プロキシードラゴンLINK2（ATK1400）リンクマーカー
左／右

「まだまだ、いくよ！三度現れる、希望を照らすサーキット！」

「三回連続のリンク召喚だ?!」

「アローヘッド確認！召喚条件はサイバース族モンスター2体以上！

俺はリンク1のリンクスパイダーとリンク2のプロキシードラゴン
をリンクメーカーにセット！サーキットコンバイン！リンク召喚！！
現れる！！リンク3！エンコード・トーカー！！」

エンコード・トーカーLINK3(ATK2300)リンクメーカー
上／下／右下

「エンコード・トーカー……なるほど、お前がデータストームから手に
入れたカードはそれか」

「まあね……あつ、そうだった！あんたに聞きたいことがあるんだけ
ど……」

「聞きたいこと……？言ってみろ」

「聞いてくれるのか……そんなじゃ、遠慮なく……なあ、データストームって
喋るのか？」

相変わらず、要領の得ない質問の仕方だなと自分でも思うが聞きた
い内容がそれだからしょうがない。

俺がそう質問すると、リボルバーはわずかに驚いた表情をしなが
ら、こう口にした。

「データストームが喋るだど？そんな馬鹿なことが……いや、待てよ
……Phantom、お前はまさかリンクアクセスの持ち主なのか？」

「リンクアクセス……？何だよそれ」

「私も詳しくは知らないが、リンクアクセスの持ち主はデータストー
ムの声を聞き、そこに潜むモンスターと心を通わせることができる
聞いたことがある」

「へえ、そうなのか……じゃあ俺がデータストームからカードを手に入
れられたのは……」

「恐らく、リンクアクセスの力だろう……だが、リンクアクセスの持ち主
はすでに存在していないはずだが……Phantom、やはりお前
に謎が多いな」

「ははっ、確かにね……」

リンクアクセスか……そんな言葉聞いたことないな……というかリン
クアクセスの持ち主は存在しないってどうということなんだ？

まあ、後で考えるか……今はデュエルに集中だ。

「さて、それじゃあそろそろ再開しようかな…俺はスケール6のEMオッドアイズ・シンクロンを空いているPゾーンにセッティング!」
「だが、それで出せるモンスターはレベル3〜5まで、どうするつもりだ?」

「こうするのさ!俺は手札から魔法カード、ペンデュラムターンを発動!このカードは自分、または相手のPゾーンのカード1枚をスケール1〜10の好きなスケールに変更できる!俺はオッドアイズ・シンクロンのスケールを6から8に変更する!」

EMオッドアイズ・シンクロン(スケール6↓8)

「これでレベル3〜7のモンスターが同時に召喚可能!今1度揺れる、運命の振り子!迫りくる時を刻み、未来と過去を行き交え!ペンデュラム召喚!!来い!俺のモンスター達!!EXデッキから、EMペンデュラムマジシャン!そして、オッドアイズ・ファントム・ドラゴン!!」

EMペンデュラムマジシャン攻撃表示(ATK1500)

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン攻撃表示(ATK2500)

「いくよ!バトル!まずは、ペンデュラムマジシャンでヴァレルロードドラゴンに攻撃!そして、この瞬間、エンコード・トーカーの効果発動!このカードのリンク先のモンスターが自身より攻撃力の高いモンスターと戦闘を行う時、そのモンスターは戦闘では破壊されずダメージも受けない!そして、戦闘を行ったモンスターの攻撃力だけエンコード・トーカー、またはリンク先のモンスターの攻撃力をアップできる!俺はオッドアイズの攻撃力をヴァレルロードの攻撃力分アップする!」

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン攻撃表示(ATK2500↓5500)

「攻撃力5500!?!」

「お楽しみはこれまでだ!オッドアイズ・ファントム・ドラゴンでヴァレルロードドラゴンに攻撃!夢幻のスパイラルフレ임!!」

渦巻く炎がヴァレルロードへと直撃し、そのままヴァレルロードを破壊した。

「ぐ、ぐわあああつ!!」

リボルバーLP1000↓1500

「ふう、なんとか勝ったか…」

キツかったな…もう少して負けるところだった。

まあ、でも…

「楽しいデュエルだったよ!リボルバー!」

「こちらもなかなか楽しませてもらった、次は勝たせてもらおうぞ…」

リボルバーは体を起こし、そう言った。

「こつちも簡単には負けないよ!また機会があればデュエルしようぜ!」

「フツ、望むところだ…」

リボルバーはそう言つて、消えていった。

それにしても、強かったなリボルバー…あつ、そういえば…

「結局、リボルバーがなんで俺にデュエルを申し込んだのかはわからなかったな…まあ、とりあえず葵にノート取りを任せたままだし、ログアウトするか…」

俺はそう呟いて、ログアウトした。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「う、うくん…」

フェードアウトしていた意識が徐々に覚醒していき目の前に見慣れた屋上の景色が広がった。

「あ、侑哉…やっとなんて戻ってきたのね」

それと同時に葵の声が聞こえてきた。

「葵!?!お前、いつの間に?」

「侑哉がなかなか戻ってこないから心配で見に来たのよ」

「そうなのか…そういえば今つて何時?」

葵の話しを聞く限り、けっこう長い間ログインしていたみたいだしな。

「もうお昼休みよ、長い間ログインしてたみたいだけど何かあったの？」

「えっ!? もうそんな時間なのか? 弁当持ってこないと!」

「ふふっ、慌てなくてもちゃんと持ってきてるわよ、はい、侑哉!」

「ありがとう、葵……って、あれ?」

葵に渡された弁当箱は俺のいつも使っている弁当箱と、可愛らしい布に包まれた弁当箱が2つあった。

「なあ、これって……」

「うん、私が作ったの……侑哉の為に」

葵は少し頬を赤らめながら、そう言った。

「葵が作ってくれたのか! ありがとうな……それじゃありがたく頂くよ!」

俺はそう言って、葵の作ってくれた弁当を開けた。

弁当の中身は唐揚げや、卵焼きといったおいしそうなおかずや、おにぎりが入っていた。

「おお、すごいおいしそうだな! それじゃあさっそく頂きます!」

そう言って、おかずを口に運ぶ。

「ど、どう……?」

「……これおいしいよ! 葵って料理上手なんだな!」

不安そうに尋ねる葵に、そう、素直な感想を口にした。

「あ、ありがとう……侑哉……」

「お礼を言うのはこっちの方だよ! ありがとうな、葵!」

「う、うん……」

俺がそう言うと、葵は照れくさそうにそう言った。

葵とそんな会話を交わしながら、弁当を食べ続けて、あつという間に葵の作ってくれた弁当と俺の弁当の2つを食べ終わった。

「ふう、お腹いっぱいになったよ……午後の授業大丈夫かな? 寝る自信しかないよ」

「そんな自信はいらないわよ……まあ、侑哉が寝たら起こしてあげるから、安心して」

「うん、ありがとうな……極力寝ないようには気をつけるよ」

「授業も真面目にね？」

「うっ…わかってるよ…」

やれやれ、痛いところをついてくるな…まあ、真面目に受けるかな…

その後も、葵と他愛ない会話を続け、昼休みは過ぎていった。



——とある空間

「まさかPhantomがあれほどの実力者とはな…」

Phantomとのデュエルを終えたリボルバーが一人そう呟く。

「Phantomの実力を量るためにあのデュエルを行ったが、予想以上の成果を得られたな…」

あのデュエルによって得られた成果は予想以上に多かった、Phantomの実力を量るといふ本来の目的という意味でも、Phantomに対するひとつの疑問が解消したという意味でも。

しかし…

「リンクアクセスか…父さんの話しによればその力の持ち主はすでに存在していないはずだが…」

だが、現にPhantomはスキルを使用せずにデータストームからカードを手に入れていた、それは紛れもない事実だ。

「何であれ、もう一度Phantomとデュエルする必要があると思うだな…」

リボルバーは一人そう呟いた、再び来るであろうPhantomとデュエルに心を踊らせながら…

第12話 お家デート

「今日は色々ありがとな、葵！」

「気にしないで、私がやりたくてやったことだし…」

授業とデュエル部の活動も終わり、葵と一緒に帰路に着く。

今日は本当に葵に世話になりっぱなしだ…ノート取りも任せちゃったし、手づくりの弁当まで作ってくれた。

ああ…この埋め合わせは本当にしつかりしないとな…

「どうかしたの？侑哉」

「いや、今日の埋め合わせはきっちりしないとなって、思ってた…」

「そんなに気にしなくても良いわよ…」

「葵が気にしなくてもこつちが気にするんだよ」

「そう…じゃ、じゃあこうしない？その、良かったら…今日は私の家に来ない？」

「え…？」

葵の提案に思わず聞き返す。

「ほ、ほら！放課後デートみたいなの…そういうことしたいなって…」

葵は頬を朱色に染めながらそう言った。

「放課後デートか…そうだね、そうしょつか！」

「ありがとう、侑哉…それじゃあ、行きましようか」

そう言っつて、葵はそつと俺の手を握ってくる。

俺はそれに応えるように、葵の手を握り返し、葵の家へと歩を進めた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「お、お邪魔します…」

「そんな遠慮がちに入らなくても…初めて来るわけじゃないんだし…」

「まあ、そうなんだけどさ…」

確かに葵の家には何度か入ったことはあるから、遠慮する必要はないんだけどさ…何か遠慮しちゃうんだよな。

でも、葵も遠慮しなくても良いって言ってるし、そうさせてもらおうかな…

「さあ、上がって!」

「それじゃ、お言葉に甘えて…」

葵に促され、家の中へと上がる。

「アオイちゃん、オカエリナサイ」

家になると、葵の家のロボットが出迎えてくれた。

そういえば、初めて葵の家に来たときはこのロボットが出てきてびっくりしたっけ…

「ユウヤクン、イラッシヤイ、ユックリシテイッテネ」

「おお!俺のことを出迎えてくれてるのか」

前に来たときは特に出迎えなんてされなかった気がするけど…色々とおアップデートされたのかな?

俺はそんなことを思いながら、部屋のソファへと腰掛けた。

「待ってて、今お茶を入れるから」

「ありがとう、葵…」

そういえば、葵と付き合ってから初めて家が上がってるんだよね…何か不思議な感じだな。

前に来たときはそんな風に感じなかったのにな…やっぱり、環境が変わったからかな?

「お待たせ、侑哉!」

「お、ありがとう!」

俺がそんなことを思っていると、葵が麦茶を持ってきてくれた。

葵の持ってきてくれた麦茶を手に取り、そのまま口へと運ぶ。

「ふう、麦茶ってこんなおいしかったっけ?」

「喉が乾いてたんじゃない?そういう時って飲み物もおいしく感じるし…」

「確かに、そうかもな…」

まあ、単純に葵と一緒にいるからかもしれないけど…

俺がそんなことを考えていると、葵が俺の肩へともたれ掛かってきた。

「ねえ、侑哉…こういうのってお家デートって言うのかな？」

「…言うんじゃないか？実際、家でデートしてるわけだし…」

「やっぱり、そうよね…お家デートか、こういうデートも悪くないわね」

「そうだね、じゃあ今度は俺の家でやってみる？お家デート…」

「うん、やってみたい…でも、花恋さんもいるし、大丈夫かな？」

「まあ、姉さんのことだから邪魔はしれないと思うけど…」

ただ、俺と葵のやりとりをこっそり見て、葵が帰ってからひたすらからかってくる可能性があるな。

…それはちよつと勘弁してほしいな…まあ、俺が気にしなければ良いだけか。

「それじゃあ、決まりね！」

「ああ、そうだね！」

俺の家でデートか…帰ったら部屋をキレイに片付けておかないとな。

といつても、そんなに散らかってるわけじゃないし、多少は楽かな？まあ、キレイにしておくに越したことはないな。

「ねえ、侑哉…ちよつとこつちを見てくれない？」

「うん？ああ、別に構わないけど…」

葵にそう促され、隣に顔を向ける。

「急にどうし…んっ!？」

突如として口元に柔らかい感触が襲い、目を閉じている葵の顔がすぐ近くにあることに気付いた。

え?!?どういう状況？何がどうしてどうなったの!?!もしかして、キスされたのか…?？」

「あ、葵!?!いきなりどうしたんだ？」

「どうしたって…侑哉にき、キスしたの…」

俺の質問に葵は顔を真っ赤にしながらそう答えた。

やっぱり、キスされたのか…やばい、さつきから心臓がバクバクしてる。

これは反則だって、葵…

「もしかして、嫌だった?」

「いや、全然嫌じゃないよ…不意打ちだったからちよつと驚いてさ…いや、ちよつとどころじゃないな、すごく驚いた」

多分、今、俺の顔も真っ赤になってる…すごい顔が熱いし…

「そう…なら、良かった…」

「それじゃあ、今度はこつちから…」

「え…?…んっ!」

今度は俺の方から、葵の唇にキスをする。

「さっきのお返しだよ…ああ、でもこれ結構恥ずかしいな…」

「うん、確かに…でも、何か嬉しいな…だってこれが私のファーストキスだから…」

「そうだったのか…それは俺としても嬉しいかな」

俺は少しそっぽを向きながら、そう呟いた。

「ふふっ、侑哉…大好き…」

「俺も大好きだよ、葵…」

俺の照れが混じった言葉を聞いた後、葵はまた俺の肩へともたれ掛かってくる。

そうして、そのままそつと手が触れた。

俺はその手を握り、そつと指を絡めてその手を握った。

「……………」

「……………」

静寂が辺りを包む、でも嫌な沈黙じゃなくてずっとこうしていたい…そんなことを思うぐらいに心地が良かった。

「侑哉、その…良かったら、何だけど…」

「うん?…どうしたんだ?」

「今日、家に泊まっていかない?」

「……………はい?」

「だ、だから!今日は私の家に泊まっていかない?」

「え?!いや、構わないけど…どうしたんだよ急に」

「侑哉と今日は離れたくないなって…思ってる…」

それは今まさに俺が思っていたことと似ていて、思わず笑みが零れ

た。

「…わかったよ、それじゃあ今日は葵の家に泊まらせてもらうよ」

「ありがとう、侑哉…」

葵は安心したような表情をしながら、そう言った。

「そういうえば、泊まり用の服とか一切持ってきてきてないんだけど、俺…」
「大丈夫よ…こんなこともあろうかと思つて、侑哉の着られそうな服を用意しておいたから！」

「お、おう…」

何というか、準備が良いな…いつの間にも用意してたんだ？

まあ、ありがたいっちゃ、ありがたいか。

「あ、そうだーちゃんと姉さんに連絡しとかないと…ちよつと待つてくれ」

「わかったわ…」

俺は、そう言つて席を立った。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「というわけで、今日は葵の家に泊まるから」

『なるほどね、葵ちゃんも大胆ね！侑哉に自分の家に泊まつていてほしいなんて』

「はいはい、それよりもそつちは大丈夫なのか？」

『大丈夫、侑哉は心配性ね…こつちのことは良いから葵ちゃんと思う存分イチヤイチヤしてきなさい！』

「イチヤイチヤしてこいつて…まあ、良いや、それじゃあそろそろ葵のところに戻るよ」

『わかったわ！侑哉、葵ちゃんを襲つたりしないようにね！』

「そんなことしないから!!ほんと、姉さんは…」

『ごめんごめん、それじゃあね！』

そう言つて、花恋は電話を切つた。

やれやれ、相変わらずだな花恋は…さて、葵のところに戻るかな。

俺はそう思い、葵のところに向かって歩を進めた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「……………」

「……………」

「~~~~~っ!!」

言っちゃった!!侑哉に私の家に泊まらないかって言っちゃった!!

侑哉が席を立ててしばらくして、私はさっき言ったことを思い出して、赤面していた。

侑哉と今日は離れたくなくて、泊まらないかって言っちゃったけど…侑哉に変に思われてないかな?

「もし、そうだったら立ち直れない…」

私がそんなふう一人で落ち込んでいると、花恋さんへの連絡を済ませたのか、侑哉が部屋に戻ってきた。

「お待たせ、葵…姉さんも泊まって良いってさ」

「そ、そう…なら良いんだけど…」

「どうかしたのか?何か元気ないみたいだけど」

「そう、見える?」

「うん…」

どうやら、侑哉にはお見通しみたいね…私もわかりやすいのかな?もし、そうだったら私も侑哉のことは言えないわね。

「…急に泊まっていかないか、なんて言われたから侑哉が嫌がってるんじゃないかって気になって…」

「うん?何で嫌がるんだ?」

「え…?」

「だって、好きな人と一緒に居られるのに嫌がる奴なんかいないだろう…それに俺も葵ともっと一緒に居たいって思ってたし」

侑哉はさも当然のようにそう言った。

そのことが何だか嬉しくて、思わず笑みが零れた。

侑哉はきつと、ただ思ったことを言っただけなんだろうなあ…でも、それが私にとっては嬉しくて、さっきまで落ち込んでいたのが馬鹿みたいに思えてくる。

「ふふっ、ありがとう、侑哉…やっぱり侑哉は侑哉ね」

「ん?そんなの当たり前だろ…俺は俺なんだからさ」

「うん…ねえ、侑哉…」

「どうかしたのか？」

「今日はたっぷり甘えさせてもらっても良い？」

「…ああ、構わないよ」

「ありがとう…：それじゃあ、まずは一緒に買い物に行こ！今日は侑哉もいるから夕飯の材料も買ってこないといけないし」

「そうだな…：さすがに泊めてもらって、何もしないわけにはいかないし、今日の夕飯は俺が作るよ」

「侑哉の料理…：食べてみたいわね、何にするの？」

「それは店に行ってから決めるよ、それじゃあ、行こうか！」

「うん…：！」

侑哉とそんな会話を交わしながら、スーパーに向かう準備を進める。

今日は侑哉ともっと一緒に居られる、そのことを嬉しく思いながら

…

第13話 お泊まりフェイズ

「さて、今日の夕飯は何にするかな…葵は何が食べたい？」

「そうね…無難にカレーとか？」

侑哉とスーパ―に入り、そんな会話を交わしながら、店内を歩く。

「カレーか…それが無難かな、それじゃあ早速材料を買いに行こうか！」

「うん…！」

そう言って、侑哉と一緒に再び歩き始めた。

本当に侑哉と一緒に居られるのね…何か夢みたい…

「葵、どうかしたのか？」

「何でもない…」

「そっか、それなら良いけど…」

侑哉はそう言って、近くの食材を手取る。

「ついでに、他にも何か買っていく？」

「うん、そうだな…適当なお菓子とかを買っていいこうか！」

「良いわね…でも食べ過ぎると太っちゃいそうだからあんまり買いきかないようにしないと…」

「確かに、それは言えるな…」

「実際、最近ちよつと太ってきてる気がするし…」

「そうか？葵は充分スタイル良いと思うけどな…」

「そ、そう…？」

「うん、スタイル良いと思うよ！まあ、でも油断してたら駄目だしな…葵は偉いよ、そんなふうを考えられるなんてさ」

「あ、ありがとう…」

何だか急に照れくさくなって、思わず侑哉から視線を逸らした。

相変わらずこういうことを平然と口にするんだから…

私はそんなことを思いながら、侑哉と買い物続けた。



「ふう、買い物終了っ…」

買い物が終わわり、店を出るなり両手に買い物袋を持ちながら、侑哉がそう呟いた。

「袋、一つ持つわよ」

「いや、大丈夫だよ…ありがとな葵」

私を氣遣っているのか、侑哉は変わらず両手に買い物袋を持ったまま歩を進めていた。

「良いから、ほら貸して…このままじゃ侑哉と手、繋げないし…」

「へっ!? あ、葵…?」

「今日はたっぷり甘えさせてくれるんでしょ?」

「まあ、それを言われちゃ返す言葉がないよ…それじゃ、お言葉に甘えて…」

侑哉はそう言つて、軽い方の買い物袋を私に手渡した。

そうして、空いた侑哉の左手をそつと握る。

それに応えるように侑哉は強く手を握り返してくれた。

「なあ、もしかして家に着くまでこのままなのか?」

「当たり前でしょ、もしかして照れてるの? 侑哉…」

「まあ、そりゃあね…」

侑哉は少し照れくさそうにそう言った。

「そう言う葵はどうなんだよ?」

「私は…うん、私も照れくさいかな…ただ…」

「ただ?」

「それよりも嬉しさの方が大きい…かな…」

「…そっか、ならこのままの方が良いな」

「うん…」

侑哉とそんなふうに会話を交わしながら、家に向かって歩を進める。

こんな何気ないやりとりが妙に嬉しくて、ずっとこうしていたい、そんなことを思った。

勢いで侑哉に泊まらないかと言ってしまったけど、結果的には良かったのかな…?

「何か楽しそうだな、葵」

「…侑哉と一緒に居られると思うと嬉しくて」

「お、おう…何かそう言われると照れるな…」

「ふふっ、今日は一日中付き合ってもらおうからね？」

「…わかったよ」

そう言つて、侑哉は握っている手に指を絡めてそつとその手を握つた。

私はその手を握り返し、いわゆる恋人繋ぎのまま家に向かって、歩き続けた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ふう、ごちそうさまでした！」

「ごちそうさま！侑哉、作ってくれてありがとう…！」

「こちらこそ！葵が手伝ってくれたおかげでいつもより楽に作れたよ」

「それなら良かった…それじゃあ、器は私が洗っておくわね」

「ああ、よろしく…」

そう言つて、葵は器を持ってキッチンに向かった。

葵と買い物から帰ってきてしばらくして葵に手伝ってもらいながらカレーを作り、今に至る。

何だかこうしていると、早いもので結婚生活ってこんな感じなんだろうかと思ってしまう。

…つて、それはいくらなんでも気が早すぎだろ…何考えてるんだ、俺は…

まあ、そんなことを考えてしまうくらいに葵のことが好きってことなんだろうな…ああ、何か急に恥ずかしくなってきた…

「とりあえず、デツキ編成でもしようかな」

俺は恥ずかしさを隠すようにデツキを取りだし、デツキ編成を始めた。

やっぱり、気分を落ち着かせるにはカードを弄るのが一番だよな。

「デツキ編成してるの？」

俺がデツキ編成をしていると洗いものを終わらせた葵がそう声を

掛けてきた。

「うん、まあね…ちよつと使ってみたいカードがあつてさ」

「使ってみたいカード？」

「これなんだけど…」

「これつて…!？」

俺が見せたカードに葵は驚きの声を上げた。

まあ、そんな反応をして当然だ…だつて今俺が見せたカードは…

「そう、サイバース族のカードだよ」

「これつて、playmakerしか使えないカードじゃないの？」

「いや、そういうわけじゃないと思うよ、現に俺がサイバースのカードを持つてるわけだし…」

「侑哉がデータストームから手に入れたサイバースのカードは知つてたけど、他にも持つてたのね…」

葵には一応データストームからエンコード・トーカーのカードを手したことは教えてある、もちろん、データストームが喋ったことは言つていない。

「どこで手に入れたの？」

「それは……」

どうする、言うべきか？

俺は別の世界から来て、その世界に居たときに手に入れたつて…と
うか何で俺は今のタイミングでサイバースをデツキに組み込もう
と思つたんだよ！

こんなの怪しまれるに決まつてるじゃんか！

……でも、良い機会かもしれない、葵に隠し事をしたままにいるの
は何か違う気がするし……よし、決めた！

「なあ、葵…聞いてくれ…俺は」

そうして、俺は葵に自分が別の世界から来た人間でその世界に居た
ときにサイバースを手に入れたことを話した。

「…というわけなんだ、黙つててごめんな」

「…ふふつ、もしかして侑哉、そんなこと気にしてたの？」

「えっ…!？」

俺が話し終わると葵はクスツと笑って、俺の方を見つめていた。

「そんなことって…俺は別の世界の人間だ、なんて話し衝撃的な真実だと思っただけ…」

「確かに驚いてるし、信じられない話しだと思うけど…侑哉は嘘をつくような人じゃないって知ってるから」

「それは嬉しいけど…驚いたって言ってる割には反応薄いよな…」

「だって、私にとって侑哉は侑哉だから…別の世界の人とか、そんなことは関係ない…侑哉は私の大好きな人に代わりはないから…」

そう言っつて、葵は俺に少し照れが混じった微笑みを見せてくれる。

そんな葵を見てみると不思議と心が落ち着いて、俺はここに居ていいんだって、そう思えた。

「ありがとな、葵…おかげで気が楽になったよ」

「ふふっ、どういたしまして！ほら、デツキ編成するんでしょ？私も手伝うわよ」

「そうだね…それじゃあ葵にも手伝ってもらおうかな」

そう言っつて、俺は持つてきていたサイバースを広げ、葵と一緒にデツキ編成を再開した。

「そういえば侑哉、どうして今サイバースをデツキに組み込むことにしたの？」

「実は、今日LINK VRAINSにログインした時にハノイのリーダーにデュエルを挑まれてさ…」

「ハノイの!?それって大丈夫なの？」

「まあ、なんとか勝ったから大丈夫だよ…ただ、何で俺にデュエルを挑んできたのかはわからないままだけどね…」

まあ、でも単純に俺の実力を測るためだったって可能性が高そうだし、そこまで気にする必要はないか…

「なるほど、だから今日は長い間LINK VRAINSに居たのね…」

「そういうこと…」

葵とそんな会話を交わしながら、デツキ編成を続ける。

その間に葵と色々と会話をし続け、気付けばあつという間にデツキ

編成が終わっていた。

「まあ、こんなもんかな…ありがとな、葵…」

「どういたしまして…あ、侑哉、ちよつと待ってて！」

「どうしたんだよ、急に…」

「いいから、ここで待ってて！」

「わ、わかった…」

葵は俺にここで待つように言い残して、走っていった。

急にどうしたんだ？うくん…まあ、待つように言われてるし言われた通りにするか。

俺がそんなことを思っていると、しばらくして葵が戻ってきた。

「侑哉…良かったらこれ、使って…」

そう言つて、葵は俺にカードを手渡した。

「これは…アカシックマジシャン？へえ、こんなリンクモンスターがいるんだ…これを、俺に？」

「うん…侑哉のデッキに相性も良いだろうし、私は使わないから…」

「確かに相性が良さそうだな…ありがとな、葵！ありがたく使わせてもらおうよ！」

俺はそう言つて、アカシックマジシャンのカードをデッキへと入れた。

「喜んでくれたみたいね、良かった…それじゃあ、そろそろお風呂にしましょうか」

「お風呂か…葵が先に入ってきて良いよ」

「私は後で良いから、侑哉が先で良いわよ…」

「そつか…じゃあお言葉に甘えて、先に入らせてもらおうよ」

俺はそう言つて、歩き始めようとして、立ち止まった。

「ところで、お風呂場ってどこだっけ…？」

「ふふっ…！侑哉つて変なところで抜けてるわね…」

葵はそう言つて、微笑みながら俺をお風呂まで案内してくれた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ふう、葵がいなくてこんなに暇なんだな…」

お風呂から上がった俺は一人そう呟いた。

というのも、上がってから特にすることがなくてただボーツと時間を過ごすことが多かったからだ。

「はあ、暇だ、とにかく暇だ…デツキ編成も終わったしな…早く、出てこないかな…葵」

さて、どうしたもんかな…

とりあえず、もう一度デツキを見てみようかな。

「お待たせ！侑哉」

俺がデツキを弄ろうとすると葵がお風呂場から出てきた。

「葵！いやあ、噂をすればなんとやらって本当なんだな…」

「私のこと、噂してたの？」

葵は俺にそう尋ねながら、俺の隣に座った。

「うん…早く、葵が出てこないかなってちようど思ってたさ…まさか、本当に出てくるとは思ってたよ」

「ふふっ、そうだったのね…もしかして、寂しかった？」

「まあ、寂しくなかったと言えば嘘になるかな…」

「そ、そう…何か嬉しいわね…」

まさか、そんなふうに言われるとは思っていなかったのか葵は少し照れくさそうにそう言った。

「ねえ、侑哉…」

葵は俺の名前を呼びながら、そつと俺の肩にもたれ掛かる。

そして、そのまま俺の手を握った。

シャンプーの良い香りが全体に広がり、紅潮した葵の顔が目に入る。

葵のその表情はお風呂から上がったばかりのせいか妙に色っぽく感じた。

「どうかしたのか？」

内心、ドキドキしながらできるだけ平然を装って葵にそう尋ねた。

「今度は侑哉の家に泊まることになるわね…ちゃんと準備しとかないと」

「何で泊まる前提なんだよ…まあ、良いけどさ…でも葵の兄さんに許

可を貰わなくて良いのか？」

「そこは何とかするから大丈夫！」

「そっか…なら、大丈夫かな…？」

少し、不安だけど葵には何か考えがあるみたいだし、ここは葵に任せるか…

それにしても…

「お家デートか…何か楽しみになってきたよ！」

「私も！いつ侑哉の家でお家デートする？」

「もう決めるのか？」

「こういうのは早く決めた方が良いの！」

「そういうもんかね…じゃあ——」

葵とそんなふうに会話を交わしていると、気付けばもう寝る時間になっていた。

「もうこんな時間か…本当に楽しい時間ってあつという間にすぎるな…」

「……………」

「葵？」

「すー…すー…」

「寝てるのか…」

規則正しい呼吸が聞こえ、隣を見てみると葵の寝顔が目に入った。やっぱり、何度見ても可愛い寝顔だな…さすがに起こすのは悪いし、しばらくはこのままにしておくか…

俺はそう思っ、近くにあつた毛布を俺と葵の体に掛けた。

「…侑哉…大好き…」

「え…？」

「すー…すー…」

一瞬起きたのかと思つたが、どうやら寝言だったみたいだ。

好きな人の夢に自分が出てくるのは嬉しいけど、それと同時に恥ずかしくもなるな…

「お休み、葵…俺も大好きだよ…」

俺はそう言って、そのまま深い眠りに落ちていった。

第14話 姉弟のひととき

「おい遊作、これを見てみる」

「どうしたんだ？草薙さん」

「これは、今日のお前とGO鬼塚とのデュエルの時にたまたま撮れた映像なんだが…」

そう言つて、草薙さんがその映像を映し出した。

「これは!? Ai (アイ) の記憶にあつたハノイのリーダー！確か、名前はリボルバー…」

そこに映されていたのはハノイのリーダーとそれに対峙する一人のデュエリストの姿…そのデュエリストには見覚えがあつた。

「リボルバーとデュエルしてるのはPhantomか…？何故Phantomとリボルバーがデュエルを…」

「わからない…この映像も途中までしか撮れていないせいとどっちが勝つたのかもわからずじまいだ」

草薙さんの言つた通り、映像は二人がデュエルを開始するところで途切れてしまつていた。

だが、この映像の通りならPhantomとリボルバーは確かにデュエルを行ったことになる。

「…Phantomに話しを聞く必要があるそうだな、もしかしたらハノイの騎士について何か知っているかもしれない」

「ああ、そうだな…」

Phantomはハノイの騎士なのか？いや、その可能性は低いだろう、もしPhantomがハノイの騎士の一員ならわざわざ味方と戦う必要はない。

だとしたら、あいつも何かしらの理由でハノイに狙われているのか？

…どちらにせよ、直接Phantomに話しを聞くしかないな。

俺はそう考え、デツキの調整に向かつた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ほら、侑哉！早く！私、先に行っちゃうわよ！」

「いや、姉さんは道知らないだろ！先に行つたって迷うだけだと思っ
けど…」

「それもそうね…それと侑哉！また姉さんって呼んでるじゃない！」

「…花恋、なんかテンション高くないか？」

「だって久しぶりに侑哉とお出かけできるのよ？最近、葵ちゃんにか
まけてばかりで私に構ってくれないから尚更よ…」

そう言つて、花恋は頬を膨らませた。

その仕草が可愛く思えて、思わず笑みが零れた。

「あ、そうだ葵ちゃんと思ひ出したけど、葵ちゃんはいつ頃家に泊まり
にくるの？」

「うん、今度の休みの日に泊まりにくる予定だよ」

「そうなの、楽しみね！ところで侑哉…葵ちゃんとどこまでいったの
？キスぐらいはした？」

「え…うん、まあ一応は…」

「へえ、良かったじゃない！このこの…！」

花恋はそう言いながら、からかうように肘でつついてくる。

何だろう、何か腹立つ…まあ、花恋なりに喜んでくれてると思つて
良いのかな…？

「さつきまで最近、構つてくれないとか言つてふてくされてたのに一
気に元気になったな」

「まあ、それはもちろん不満だけど、それと同じくらいに侑哉と葵ちゃ
んを応援してるのよ…」

「そ、そっか…あ、そろそろ着くよ」

「へえ、ここがそうなの」

「そう、このホットドッグがすごいおいしいんだよ！」

そう、今回の目的地は草薙さんの経営しているホットドッグ屋さん
だ。

俺がこここのホットドッグがおいしいと話していたら花恋が、私も行
きたい！と言ひ出して二人で行くことになった。

「お、いらつしやい！」

「こんにちは、草薙さん…今日も買いにきましたよ」

「神薙もすっかり常連さんだな…お、その美人な人はお前の彼女か？」

草薙さんがからかうようにそう聞いてくる。

端から見たらそう見えるのか…まあ、俺と花恋は似てないからそう見えてもおかしくないのか…

「ははっ、違いますよこの人は俺の姉です」

「初めまして、侑哉の姉の花恋です…このホットドッグがおいしいと侑哉から聞いて、ここに来たんです」

「そうだったんですか、随分と仲が良かったので、てっきり恋人同士なのかと…」

「そうでしょう！よく言われるんですよ」

「いや、言われたことないだろ！」

「…侑哉と私ってよく恋人同士に間違えられて困ってるんですよ」

俺のツツコミを見事にスルーして、花恋はそう続けた。

意地でも恋人同士によく間違えられる、ということにしたいらしい。

まあ、それで気が済むならそれで良いか…

「まあ、そういうことしておくよ…そういえば草薙さん、遊作は来るのか？」

「ああ、向こうにいるぞ」

草薙さんが指を指したところに目をやるとホットドッグを食べている遊作の姿が目に入った。

俺はそのまま、遊作の方へと歩を進めた。

「よっ！遊作、調子はどうだ？」

「神薙か…調子は普通だ」

「そっか、まあ、体調が悪いわけじゃなさそうで何よりだよ」

「侑哉のお友達？」

俺と遊作が挨拶を交わしていると、花恋がそんなことを言った。

「初めまして、神薙のクラスメートの藤木 遊作です」

「遊作君ね、初めまして侑哉の姉の花恋です…よろしくね！」
「よろしくお願ひします…」

花恋の自己紹介にそう言葉を返しながら遊作は軽くお辞儀する。
遊作って意外と礼儀正しいんだな…って意外は失礼だな。

俺がそんなことを思っていると、花恋はホットドッグを注文しに草薙さんの所へと歩いていった。

「まさか、お前に姉が居たなんてな」

「まあ、話してないし知らないのも無理ないよ」

「それもそうだな…：そういうえば神薙、お前はPhantomを知ってるか？」

「え？いや、知ってるには知ってるけど…それがどうかしたのか？」

「一人のデュエリストとして興味がある…Phantomについて知っていることを教えてくれ」

「Phantomについてか…」

いきなりそう質問され、思わず考え込む。

まさか俺がPhantomだと言うわけにもいかないしな…：それにしても、Phantomについて知りたいなんて急にどうしたんだ？

本当にただの興味なのか、それとも…

「どうかしたのか？」

「…いや、教えるにしても何かから教えようかなと考えててさ…」

「なるほど…：別にそこまで深く考えなくても良いぞ」

「そうだな…：まず、Phantomはペンデュラムを主軸にしているエンタメデュエリストだ」

遊作が何を考えているかはわからないけど、とりあえず話してみるか…

俺はそう思い、話しを進めることにした。

「ペンデュラム召喚か…：珍しい召喚方法を使うんだな」

「言うほど珍しくはないと思うけど…：まあ、スピードデュエルの時は圧倒的に不利だと思うけどね」

実際、スピードデュエルの時は相当キツイんだよな…：ま、そういう

のも含めて面白いんだけどさ。

「確かにスピードデュエルだとペンデュラムを使って戦うとなると、相当不利だな…それでもあの強さとは…Phantomはかなりの実力者みたいだな」

「…そうだね…後、Phantomの情報としては——」

その後もPhantomの情報を遊作に話した。

といっても、そこまで深い情報は話さずにネットで書かれていた情報を遊作に話した。

まさか、花恋や美月に見せられたPhantom、もとい俺のネット上の情報がこんなところで役に立つとは…

「…と、まあこんな感じかな、ただ、ネットの情報とかだから正しいとは限らないけどな」

「いや、十分だ…教えてくれてありがとう」

「…遊作が俺にお礼を言った？明日は槍でも降るんじゃないか？」

「お前は俺を何だと思ってるんだ…俺だって礼ぐらいは言うぞ」

「悪い悪い…遊作がお礼を言ったところを見たことなかったから、驚いてさ」

実際かなり驚いたが、よくよく考えたらLINK VRAINSで初めて会った時も俺がGO鬼塚を説得したことに對して「一応礼は言っておく」って言ってたっけ…

「まあ良い…そういうえば神薙、お前に聞きたいことがあるんだが…」

「聞きたいこと？何だよ」

「お前は以前、こう言っていたな…復讐をやめろとは言わない、だけどデュエルを復讐の道具としか見れないのは悲しい、デュエルを楽しむ時は全力で楽しめ、と」

「ああ、確かにそう言ったけど…それがどうかしたのか？」

「お前は何故、復讐をやめろとは言わなかったんだ？普通は復讐をやめろと言うと思うんだが…」

「聞きたいことってそれか…」

確かに世間一般的には復讐は悪いことだもんな、疑問に思うのも無理ないか…

俺としても復讐なんかしない方が良いとは思うしな。

「まあ、確かに復讐するなんて聞いたら普通はそういう反応だよな：ただ、実際自分の大切なものを奪われたら俺だって復讐に走るかもしれない、だからやめろとは言わなかったんだよ」

俺がもし大切なものを何者かに奪われたらそいつを許せる自信はない：どんなことをしても追い詰めてやる、そんなふうに考えるかもしれない。

まあ、結局のところその時になってみないとわからないんだけど：「そうか…」

「それに、俺が復讐をやめろと言ったって薄っぺらく聞こえるだけだろうし：やっぱ、そういう言葉ってその人の経験とかがあるからこそ重いんだと思うんだよ」

俺はそこまで誰かに憎しみを抱いたこともないし、復讐をしたことだってない、そんな俺が復讐をやめろと言ったってそれは絶対に遊作の心には響かない。

「まあ、流石に逆恨みで復讐をするやつは論外だけど：そもそもそれは復讐とは呼ばない気がするし」

「……フツ、お前は変わった奴だな」
「え？そうか？」

俺がそう聞き返すと遊作は肯定するように頷いた。

そんな変わってるかな？そういうえば、リボルバーにも面白いデュエリストだとか言われたな…

まあ、気にしないで良いか。

「この話しはとりあえず終わりにして……俺とデュエルしようぜ！」
「…断る」

「やっぱりか：予想通りっちゃ予想通りだけどさ」

「そもそも、何故今のタイミングでデュエルなんだ？」

「単純にデュエルしたかったからだけど？」

「…フツ、お前は本当に変わった奴だな」

遊作は呆れた表情を浮かべながら苦笑混じりにそう言った。

「侑哉！ホットドッグ出来たわよ！」

「うん、今行くよ！……それじゃあ、そろそろ俺は行くよ、またな、遊作！」

「ああ、またな……侑哉」

「……？ああ！」

最後の言葉は小さくて聞き取れなかったが、遊作に帰りの挨拶をして、花恋の元へ歩を進めた。

「待たせて悪かったな、神薙……」

「気にしてませんよ、でも確かに遅かったですね……どうかしたんですか？」

「実は、草薙さんと話し込んだのよ、そのせいで作業が遅れちゃって……」

俺の質問に花恋がそう答えた。

「なるほどね……草薙さん、迷惑かけてすみません……」

「いや、こっちも色々と話せて楽しかったから気にするな」

そう言って二人そろってクスクスと俺を見ながら笑っている。

一体何なんだ？何の話ししてたんだ……

「それじゃあ、帰りましょうか！」

「ちよっと待って！何の話してたんだよ！」

「侑哉には可愛い彼女が居て、仲が良いって話しよ！」

そう言って、花恋は急に走り出した。

「な!?待てよ、姉さん！何、話してんだよ!!」

そう言って、俺は全速力で走り出した。

結局、家につくまで追いかけてこは続き、俺も花恋もくたくたになかった。

草薙さんの作ったホットドッグは疲れているせいもあっていつもよりもさらに一層おいしく感じられた。

第15話 決戦！Phantom対playmaker

「まさか、こんなに早くお前と戦えるとは思わなかったよplaymaker！」

ここ、LINK VRAINSでは今まさに誰もが注目するデュエルが行われようとしていた。

「お前には聞きたいことがあるからな…」

playmaker対Phantom、このデュエルは多くのデュエリストが注目するには十分だった。

「まあ、理由は何であれこうしてplaymakerとデュエルできるんだ、ワクワクしてきたよ！さあ、playmaker、楽しいデュエルにしようぜ！」

「行くぞ！Phantom！」

「スピードデュエル!!」

こうして、戦いの火蓋が切って落とされた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

—————
数時間前

「そういえば、Phantomさんとplaymakerってどつちが強いんですかね？」

「急にどうしたんだ？」

学校の昼休み、いつも通り屋上で、俺と葵と美月の3人で昼食をとっている、美月が藪から棒にそんな話しを始めた。

「ほら、ネットとかでどつちが強いのかって議論が行われているじゃないですか」

「あんまり、そういうのは見ないからよく知らないんだけど…」

正直、ネットでどんな議論が行われているようと興味ないんだよな…
というか、今ネットではそんな議論が行われているのか…

「そんなのPhantomに決まってるじゃない」

俺がそんなことを考えていると、葵がそう即答した。

「ですよー！私もそう思いますー！」

美月も葵と同じく即答で、自信満々でそう口にした。

なんというか、嬉しいような恥ずかしいような…葵の場合は俺がP h a n t o mだつて知つててそう言つてくれてるわけだから…

嬉しくないわけがない。

「侑哉君はどう思いますか？」

「え、そこで俺に振る？」

「私もそれは聞きたいわね…侑哉はどう思う？」

「葵まで!？」

まさか、葵にまで聞かれるとは…

うくん、実際どうなんだろうな…録画したplaymakerのデュエルを見た感じだと、結構強い印象があるけど…

「うくん…まあ、実際に戦つてみないことにはわからないんじゃないか？どっちが強いかなんてことはさ」

「確かに、そうかもね…」

「そうですね…はあく、今日あたりにP h a n t o mさんとp l a y m a k e rのデュエル見てみたいですね」

「そんな上手くいくとは思えないけどな…」

その後も二人と他愛ない会話を交わしながら、昼休みは過ぎていった。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「さて、帰るかな」

デュエル部の活動も終わり、葵と一緒に帰路に着く。

「ねえ、侑哉…今日は侑哉の家まで一緒に帰っても良い？」

「うん？いや、別に構わないけど…葵の家とは反対方向じゃないか？」

「そうだけど…侑哉と、もつと話していたいし…」

葵は頬を少し赤らめて、そう呟いた。

「俺も葵と話していたいし、良いよ」

「ありがとう…」

そうして、葵と一緒に歩き始める。

なんというか、葵と一緒に俺の家まで帰るって、変な感じだな…
まあ、悪い気はしないけどさ。

「そういえば、侑哉はどう思っているの?」

「何を?」

「playmakerと侑哉、どっちが強いかってこと」

「ああ、そのことか…さつきも言ったけど、実際に戦ってみないことにはなんとも言えないかな…ただ」

「ただ?」

「playmakerは見た感じ結構強そうに見えるから、デュエルしたらすごく楽しそうだな、とは思うな」

「ふ〜〜くん、そう思うんだ…」

俺が思ったことを口にする、なぜか葵にジト目で睨まれた。

「え?何か変なこと言ったか…俺?」

「別に…」

葵はそう言っ、プイツとそっぽを向いてしまった。

何か怒らせちゃったのかな?

まあ、そんな態度をしながらもさつきまでと同じように一緒に帰っているんだから、おかしいことこのうえないけど…

「まあ、でも…」

「ん?」

「playmakerがどれだけ強いかわからないけど、葵が見てくれるなら、負ける気がしないかな」

「〜っ!」

「あ、葵?何かさつきから顔が赤いけど、大丈夫か?」

もしかして、また怒らせちゃったのか?いや、でも怒らせるようなことは言った覚えが…

「侑哉って、さっさとそういうこと言うわよね…」

「え?」

「何でもない…」

「気になるだろ、教えてくれよ!」

「教えない」

そう言う葵の声はどこか弾んでいて、嬉しそうだった。
まあ、正直、気になるけど葵も嬉しそうだし別に良いかな。
俺は葵のそんな姿を横目に見ながら、そんなことを思った。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「到着つと、さて、今日は誰とデュエルしようかな…」

葵と一緒に俺の家に帰り、今日の夕飯の準備を済ませてからLINK VRAINSにログインしてきた俺はデュエルの相手を探すために歩き始めた。

「あ、Phantom! やっぱり来てたのね」

「よっ、ブルーエンジェル! ……って言ってもさつきも会ったばかりだけだよ」

「確かにそうね、でもこうしてLINK VRAINSでも一緒に居られるのは嬉しいかな」

そう言っつてブルーエンジェルは俺の腕に抱きついてくる。

「何か、侑哉とこんなふう歩いているのって不思議な感じね…」

「確かにLINK VRAINSではあんまり、こういうのをしたことがなかったな…」

現実では、お家デートをしたり、そのまま葵の家に泊まつたりしてのにな……って、待てよ……もし、泊まつた時に葵の兄さんが帰ってきてたら今頃結構な修羅場になってたんじゃ…

まあ、今さら気にしてもしょうがないか…

「どうかしたの? 侑哉」

「いや、何でもないよ…それよりもデュエルしないか?」

「良いわよ! ルールはどうする?」

「じゃあ、スピードデュエルにしようぜ! 葵とスピードデュエルしたことなかったしよ」

「確かにそうね、じゃあスピードデュエルにしましょうか!」

「そこなくっちゃ!」

俺と葵はそんな会話を交わしながら、歩き続けた。

「見つけたぞ、Phantom!」

「え？」

葵と歩き続けていると、ふと聞きおぼえのある声が聞こえてきた。

「あなたは…」

「playmaker！これは驚いたな…というか、俺に何か用でもあるのか？」

「ああ、お前に聞きたいことがある」

俺に聞きたいこと？一体なんだ…

「お前は以前ハノイのリーダーとデュエルしていたな…それは何故だ？」

「いや、確かにデュエルしたけど…何で知ってるんだ？」

「質問に答える、何故ハノイのリーダーとデュエルしていた？そして、その時に何を話していた？」

playmakerは真剣な表情をして俺にそう尋ねる。

質問が増えている気がするが、さすがに今それを口にするのは野暮ってmondだよな…

それにしても、どこで情報を手に入れたんだ？まあ、考えられるとしたら草薙さんしかいないけど…確かに俺もPhantomについて遊作に教えたが、このことは話していない。

そう考えると、草薙さんが俺とリボルバーのデュエルをどつかで見たたのかもしれない…

「質問に答えるつもりはないということか…ならば、Phantom、俺とデュエルしろ…俺が勝てばお前には俺の質問に答えてもらう」

何か、いきなりデュエルすることになってるんだけど…まあ、でもplaymakerとデュエルできるチャンスだ…断る理由はないな。

「何かよくわかんないけど、デュエルなら大歓迎さ！受けて立つよ！ちなみに俺が勝った場合は俺の頼みを一つ聞いてもらうよ」

「良いだろう…ルールはスピードデュエルで良いな？」

「ああ、それで構わないよ…それじゃ始めようか！」

俺がそう言うと、playmakerはそそくさとスピードデュエルの準備を始めた。

それを見て俺もスピードデュエルの準備をしようとすると、ふと、後ろから服の裾を引っ張られた。

「どうしたんだ？葵？」

「侑哉…」

「え…？」

瞬間、頬に柔らかい感触が襲った。

キスされたとすぐにわかると同時に顔が赤くなる。

ほんと、そういうのは反則だって…葵

「侑哉、頑張つてね！」

「…ああ！もちろんさ！」

笑みを浮かべながら、俺を応援してくれた葵にそう答え、スピードデュエルの準備を進めた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「まさか、こんなに早くお前と戦えるとは思わなかったよ playmaker！」

「お前には聞きたいことがあるからな…」

「まあ、理由は何であれこうして playmaker とデュエルできるんだ、ワクワクしてきたよ！さあ、playmaker、楽しいデュエルにしようぜ！」

「行くぞ！Phantom！」

「スピードデュエル!!」

Phantom LP4000

VS

playmaker LP4000

「俺から行かせてもらうよ！俺のターン、俺は手札から『クリバンデット』を召喚！」

クリバンデット攻撃表示 (ATK1000)

「そして、カードを1枚伏せてターンエンド…この瞬間、クリバンデッ

トの効果発動！このカードをリリースしてデッキからカードを5枚めくり、その内の魔法、罠カードを1枚手札に加え、それ以外を墓地に送る」

めくったカード

螺旋のストライクバースト

幻影騎士団シャドーベイル

幻影騎士団シャドーベイル

ピットロン

EMバリアバルーンバク

「俺は螺旋のストライクバーストを手札に加えるよ！さあ、play maker、君のターンだよ」

「俺のターン、ドロロー！俺は手札から『リンクスレイヤー』を特殊召喚！このカードは俺の場にモンスターがいないとき手札から特殊召喚できる！」

リンクスレイヤー攻撃表示（ATK2000）

「さらに、俺は手札から『ドラコネット』を召喚！そして、ドラコネットが召喚に成功にした時、デッキ、または手札からレベル2以下の通常モンスターを守備表示で特殊召喚できる！俺はデッキから『ピットロン』を特殊召喚！」

ピットロン守備表示（DEF2000）

さすがはplay maker：サイバースの理想的な初手だな。

ということは…次にplay makerが取る行動は…

「そして、現れる！未来を導くサーキット！」

「っ！やっぱりそうくるよな…」

「アローヘッド確認！召喚条件は通常モンスター1体！俺は『ピットロン』をリンクマーカーにセット！サーキットコンバイン！リンク召喚！！現れる！リンク1、『リンクスバイダー』！」

リンクスバイダーLINK1（ATK1000）リンクマーカー下
「そして、『リンクスバイダー』の効果！このカードがリンク召喚に成功した時、このカードのリンク先に手札からレベル4以下の通常モンスターを特殊召喚できる！俺は『ピットロン』を特殊召喚！」

ピットロン守備表示 (DEF2000)

ほんとにつくづく、理想的な動きだな…スターターデッキでの戦い方のお手本みたいだ…

「再び現れる！未来を導くサーキット！アローヘッド確認、召喚条件はサイバース族モンスター2体！俺は『ピットロン』と『ドラコネット』をリンクマーカーにセット！サーキットコンバイン！リンク召喚！！現れる！リンク2、『リンクバンパー』！！」

リンクバンパーLINK2 (ATK1400) リンクマーカー上／左

「リンクバンパー…？」

またまた知らないカードだ…というか便利だなリンクバンパー、エクストラリンクをしやすくなるカードだ…

「さらに、今1度現れる！未来を導くサーキット！アローヘッド確認、召喚条件は効果モンスター2体以上！俺はリンク1の『リンクスバイダー』とリンク2の『リンクバンパー』をリンクマーカーにセット！サーキットコンバイン！リンク召喚！！現れる！リンク3、『デコードトーカー』！！」

デコードトーカーLINK3 (ATK2300) リンクマーカー上
／左下／右下

「来たか…！デコードトーカー…」

『デコードトーカー』はリンク先のモンスターの数×500ポイントアップする、デコードトーカーのリンク先には『リンクスレイヤー』がいる、よって『デコードトーカー』の攻撃力は500ポイントアップする！パワーインテグレイション！」

デコードトーカー (ATK2300) ↓2800)

「カードを1枚伏せて、バトルだ！デコードトーカーでダイレクトアタック！デコードエンド！！」

「そうはいかないよ！俺は墓地の幻影騎士団シャドーベイルの効果！俺がダイレクトアタックを受ける時、墓地のこのカードをモンスターとして特殊召喚できる！来い、シャドーベイル！」

幻影騎士団シャドーベイル守備表示 (DEF300)

「クリバンデットの効果で墓地に送られたカードか…ならば、シャドーベイルを攻撃！デコードエンド!!」

デコードトーカーの攻撃がシャドーベイルに命中し、そのままシャドーベイルは破壊された。

「くっ…破壊されたシャドーベイルは除外される」

「次だ、リンクスレイヤーでPhantomにダイレクトアタック！流星斬破!!」

「罨発動！幻影騎士団ウロングマグネリング！このカードは相手の攻撃を無効にし、その後、このカードをモンスター扱いで攻撃表示で特殊召喚できる！」

幻影騎士団ウロングマグネリング攻撃表示（ATK0）

「また、モンスターとして扱う罨カードか…俺はこれでターンエンドだ」

『デコードトーカーの攻撃力は2800で伏せカードもある、なかなか良い滑り出しだなplaymaker様』

「ああ、確かにそうだが…このターンで俺達は1ポイントも相手のライフを削れていない…それにまだPhantomはペンデュラム召喚を行っていない…勝負はまだまだこれからだ」

PhantomLP4000

手札3（内1枚 螺旋のストライクバースト）

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン 幻影騎士団ウロングマグネリング攻

撃表示（ATK0）

伏せなし

Pゾーンなし

playmakerLP4000

手札1

場 EXモンスターゾーン デコードトーカーLINK3（ATK2800）リンクマーカー上／左下／右下

メインモンスターゾーン リンクスレイヤー攻撃表示(ATK2
000)デコードトーカーとリンク

伏せ1

Pゾーンなし

第16話 ペンデュラム対サイバース

「いくよ！俺のターン、ドロー！」

Phantom LP4000

手札3↓4

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン 幻影騎士団ウロングマグネリング攻

撃表示(ATK0)

伏せなし

Pゾーンなし

playmaker LP4000

手札1

場 EXモンスターゾーン デコードトーカーLINK3(ATK2800)リンクマーカー上/左下/右下

メインモンスターゾーン リンクスレイヤー攻撃表示(ATK2000)デコードトーカーとリンク

伏せ1

Pゾーンなし

「俺は手札から永続魔法、幻影死槍《ファントムデススピア》を発動！そして、俺は幻影騎士団ウロングマグネリングの効果発動！このカード及び他の幻影騎士団、または、幻影魔法、罠カードを墓地に送り、デッキからカードを2枚ドローする！」

Phantom手札4↓3↓5

「そのモンスターにそんな効果が…」

「まだまだいくよ！俺はさらに魔法カード、螺旋のストライクバーストを発動！このカードの効果でデッキからレベル7のオッドアイズモンスターを手札に加えることができる！俺は『オッドアイズ・ファントム・ドラゴン』を手札に加える！」

「来るか…！」

「そう焦るなよ、もうちよつと準備するからさ…俺はさらに『EMドクロバットジョーカー』を召喚！」

EMドクロバットジョーカー攻撃表示(ATK1800)

「ドクロバットジョーカーが召喚に成功した時、このカード以外のEM、魔術師Pモンスターまたはオッドアイズモンスターを手札に加えることができる！俺はデッキから『EMペンデュラムマジシャン』を手札に加える！」

これで準備は整った！

「Here we go!! It's a show time!!俺はスケール3の『EMオッドアイズライトフェニックス』とスケール8の『EMオッドアイズユニコーン』でペンデュラムスケールをセッティング！揺れる、運命の振子！迫りくる時を刻み、未来と過去を行き交え!!ペンデュラム召喚!!来い、俺のモンスター達!!『EMペンデュラムマジシャン』、そして、『オッドアイズ・ファントム・ドラゴン』!!」

EMペンデュラムマジシャン攻撃表示(ATK1500)

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン攻撃表示(ATK2500)

「来たか…ペンデュラム召喚！」

「まだまだいくよ！現れる、希望を照らすサーキット！アローヘッド確認、召喚条件はトークン以外の同種族のモンスター2体！俺はペンデュラムマジシャンとドクロバットジョーカーをリンクマーカーにセット！サーキットコンバイン！リンク召喚!!」

さつそく使わせてもらおうよ、葵…！

「現れる！リンク2、アカシックマジシャン!!」

アカシックマジシャンLINK2(ATK1700)リンクマーカー上/下

「ペンデュラム召喚からのリンク召喚か…！確かにペンデュラムはいくつもの召喚方法と相性が良い…ペンデュラムを巧みに使いこなし、相手を翻弄する…これがPhantomか！」

「驚くにはまだ早いよ！『アカシックマジシャン』がリンク召喚に成功した時、このカードのリンク先のモンスターを全て手札に戻せる！

『アカシックマジシャン』は『デコードトーカー』のリンク先に召喚されている、よってデコードトーカーを手札に戻す!」
「なに!？」

アカシックマジシャンによりデコードトーカーがEXデッキに戻り、playmakerの場にはリンクスレイヤーと伏せカードだけになった。

「まさか、デコードトーカーのリンクマーカーを利用してくるとは…
Phantomはかなりの実力者だな」

『感心してる場合かよ!この攻撃を喰らったらヤバいつて!』

「狼狽えるな、まだ手はある」

何かplaymakerが誰かとしやべってるな…もしかして、
デイスクの中のAIと話してるのか。

とりあえず、ターンを進めるか…

「カードを1枚伏せて、バトル!『オッドアイズ・ファントム・ドラゴン』で『リンクスレイヤー』に攻撃!夢幻のスパイラルフレイム!!」
「この攻撃をそのまま受けるわけにはいかない!罨発動!ダメージダイエツト!このカードの効果によりこのターン俺の受けるダメージは全て半分になる!」

「なるほどね…だけどダメージが半分になるだけでこの攻撃は止められないよ!行け!オッドアイズ!」

オッドアイズから放たれた渦巻く炎がリンクスレイヤーへと迫り、そのままリンクスレイヤーを破壊した。

playmaker LP4000↓3750

「さらに、この瞬間、『オッドアイズ・ファントム・ドラゴン』の効果発動!ペンデュラム召喚したこのカードが相手に戦闘ダメージを与えた時、Pゾーンのオッドアイズの数×1200ポイントのダメージを与えろ!喰らえ!幻視の力、アトミックフォース!!」

俺のPゾーンにはオッドアイズユニコーンとオッドアイズライトフェニックスがいる、本来なら2400のダメージなんだけど…

「ダメージダイエツトの効果で俺へのダメージは半分になる!」

Phantom LP3750↓2550

「やっぱり、ダメージダイエツトは良いカードだね…でも、まだ俺の攻撃は終わってないよ! 『アカシックマジシャン』でダイレクトアタック!」

「ぐっ…!」

playmaker LP2550↓1700

「さすが、playmaker…簡単には勝たせてくれないか…俺はこれでターンエンド!」

Phantom LP4000

手札0

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン オッドアイズ・ファントム・ドラゴン攻撃表示(ATK2500)

アカシックマジシャンLINK2(ATK1700)リンクマ

カー上/下

伏せ1

Pゾーン EMオッドアイズライトフェニックス(スケール3)

EMオッドアイズユニコーン(スケール8)

playmaker LP1700

手札1

場なし

伏せなし

Pゾーンなし

とりあえず、盤面は崩したな…さあ、どう出てくる?

「俺のターン、ドロ―!」

手札1↓2

「さあ、playmaker!どんな戦略を魅せてくれるんだ?」

「慌てるな、すぐに見せてやる…俺は手札から魔法カード強欲で貪欲な壺を発動!デッキトップから裏側でカードを10枚除外し、2枚ド

ロー！」

手札2↓1↓3

まずは手札補充か…というかこの局面でドロソを引くとか、さすがはplaymakerだな…

「さらに、俺は手札から『 balanサーロード』を召喚！」

balanサーロード攻撃表示 (ATK1700)

「そして、balanサーロードの効果発動！ライフを1000ポイント払うことでこのターン、通常召喚に加え一度だけ、サイバースモンスターを召喚できる！」

playmaker LP1700↓700

「召喚権を増やすサイバースだつて…!?!」

何それ、めちやくちや良いカードじゃんか…！balanサーロードのレベルは4だから、ランク4のエクシーズも出しやすい…

しかも増えた召喚権でさらなるリンク召喚も狙える…ぜひとも俺のデッキに欲しいカードだな。

それに、playmakerのライフが1000を下回つたつてことは…

「そして、balanサーロードの効果により俺はさらに『サイバースガジェット』を召喚！さらに、サイバースガジェットが召喚に成功した時、墓地のレベル2以下のモンスターを特殊召喚できる！甦れ、『ピットロン』！」

ピットロン守備表示 (DEF2000)

「来るか…！」

下準備を済ませたplaymakerはデータストームへと突入していく。

いよいよ見れるのかplaymakerのストームアクセス…！

くうく、楽しみだぜ！

…つて、ちよつと待てよ…こつちからじゃデータストームの中で何が起きてるのかわからなくないか？

／／／／／／／／／／／／／／

Phantomは強いデュエリストだ…ここまで戦つてよくわ

かった。

俺達がPhantomに勝つにはデータストームから逆転のカードを引くしかない!

「スキル発動! ライフが1000以下の時、データストームからランダムでカードを1枚、EXデッキに加える!」

『風を掴め! playmaker!』

「はあああっ!!」

データストームの中のカードにアクセスする。
手をかざし、文字通り風を掴む。

『今だ!』

「ストームアクセス!!」

カードを入手し、そのままデータストームを抜けると、そこにはとても楽しそうな様子のPhantomの姿があった。

「おお! 何かわかんないけど、すごいカッコいいな! くそっ…できればデータストームに入って見たかったな…」

俺に逆転の一手を引かれたかもしれないというのにとっても楽しそうな表情をしているPhantomの姿に、どこかのデュエルバカが重なった。

侑哉みたいな奴だな…本当にデュエルが大好きなのがこっちにまで伝わってくる。

「ふっ…」

「どうかしたのか?」

「いや、お前によく似た奴を思いだしてただけだ」

「へえ、俺に似た人か…その人とは気が合いそうだね!」

「ああ、多分気が合うと思うぞ…さあ、続けるぞ、Phantom」

「ああ! 来い!」

／／／／／／／／／／／／／／／／

「現れる、未来を導くサーキット!」

さあ、playmakerは何を引いたんだ? 俺の知らないリンク

モンスターか？それとも俺の持つてるリンクモンスターか？どちらにせよ楽しみだ。

「アローヘッド確認、召喚条件はサイバース族モンスター2体以上！俺は『サイバースガジエット』と『 balanサーロード』、そして、『ピットロン』をリンクマーカーにセット！サーキットコンバイン、リンク召喚！！現れるリンク3、『エンコードトーカー』！！」

エンコードトーカーLINK3（ATK2300）リンクマーカー上／下／右下

「エンコードトーカー……なるほどね、こんなこともあるのか……」

まさか、playmakerもエンコードトーカーを引くなんて……すごい偶然だな。

「さらに、サイバースガジエットが墓地へ送られた時、ガジエットトーカーを特殊召喚できる！来い、ガジエットトーカー！」

ガジエットトーカー守備表示（DEF0）

「さらに俺は手札から魔法カード、貪欲な壺を発動！墓地の『サイバースガジエット』、『balanサーロード』、『ドラコネット』、『リンクスレイヤー』、『リンクスパイダー』の5枚をデッキに戻し2枚ドロ！」

手札1↓0↓2

「リンク召喚するだけじゃなく、手札補充までこなすなんてな……さすがはplaymakerつてところかな？さあ、どう出てくる？」

「俺は手札の『バックアップセクレタリー』を特殊召喚！このカードは自分のフィールドにサイバースモンスターがいる時、手札から特殊召喚できる！」

バックアップセクレタリー攻撃表示（ATK1200）

「そして、現れる未来を導くサーキット！アローヘッド確認、召喚条件はサイバース族モンスター2体！俺は『バックアップセクレタリー』と『ガジエットトーカー』をリンクマーカーにセット！サーキットコンバイン、リンク召喚！現れるリンク2、『フレイムアドミニスター』！！」

フレイムアドミニスターLINK2（ATK1200）リンクマーカー左／右下

「フレイムアドミニスター…？どんな効果を持つてるんだ？」

「フレイムアドミニスターの効果、このカードが存在する限り、自分のフィールドのリンクモンスターは攻撃力が800ポイントアップする！」

「な…!?」

エンコードトーカー（ATK2300↓3100）

フレイムアドミニスター（ATK1200↓2000）

リンクモンスター限定とは言え、永続的に攻撃力をアップすることができるのか…サイバースとかなり相性が良いな。

俺も欲しいな…うくん、でも俺が新しいサイバースモンスターを手に入れるにはデータストームから手に入れるしかないからな…

まあ、運がよければ手に入るか。

俺はそう考え、playmakerの行動に集中した。

「俺はカードを1枚伏せて、バトルフェイズに入る！まずは『フレイムアドミニスター』で『オッドアイズ・ファントム・ドラゴン』に攻撃！この瞬間、『エンコードトーカー』の効果発動！このカードのリンク先のモンスターが自身より攻撃力の高いモンスターと戦闘を行う場合、そのモンスターは戦闘では破壊されずダメージも受けない」

初見の人が見たら、まず無意味にしか思えない攻撃だけど、効果を知ってる俺からするととてつもなく厄介だ。

「さらに、戦闘を行った相手のモンスターの攻撃力をこのカード、またはこのカードのリンク先のモンスターに加える！俺は『エンコードトーカー』に攻撃力を加える」

エンコードトーカー（ATK3100↓5600）

「攻撃力5600…いやれやれ、味方なら心強いけど敵だったら厄介だな…」

でも…だからこそ面白い！

「バトルだ！エンコードトーカーでアカシックマジシャンに攻撃！ファイナルエンコード！」

「そう簡単にはやらせないよ！毘発動！『ハーファンブレイク』！このカードはフィールド上のモンスター1体を対象に発動できる！この

ターン対象のモンスターは戦闘では破壊されず、そのモンスターとの戦闘で発生するダメージは半分になる！これでアカシックマジシャンは破壊されず、ダメージも半分になる！」

エンコードトーカーの攻撃がアカシックマジシャンに迫り、シャボン玉のようなものがその攻撃からアカシックマジシャンを守った。

「ぐっ……！」

Phantom LP4000↓2050

「くっ、半分も削れなかったか……俺はこれでターンエンドだ、この瞬間、エンコードトーカーの攻撃力は元に戻る」

エンコードトーカー(ATK5600↓3100)

Phantom LP2050

手札0

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン オッドアイズ・ファントム・ドラゴン
攻撃表示(ATK2500)

アカシックマジシャンLINK2(ATK1700)リンクマーカー上/下

伏せなし

Pゾーン EMオッドアイズライトフェニックス(スケール3)

EMオッドアイズユニコーン(スケール8)

playmaker LP700

手札0

場 EXモンスターゾーン エンコードトーカーLINK3(ATK2300↓3100)リンクマーカー上/下/右下

メインモンスターゾーン フレイムアドミニスターLINK2(ATK1200↓2000)リンクマーカー左/右下

伏せ1

Pゾーンなし

第17話 新たな力

「やるね、playmaker! なかなか魅せてくれるじゃないか!」
「お前こそ、まだまだ本気じゃないんだろ?」

「ああ! お楽しみはこれからさ!」

「……何か嫌だな」

楽しげにデュエルをしているPhantomとplaymakerを見ながらそう呟く。

侑哉がデュエルを楽しむのはいつものことだし、デュエルを楽しんでいる侑哉は好きだけど…

その目に映っているのが私じゃないのがどうしようもなく嫌だった。

「はあ、私ってこんな重い女だったかな…」

きつと、侑哉だからなんだ…私がこんなふうに嫉妬したりするのは。

侑哉は、こんな私でも好きでいてくれるのかな?

「あ…」

私がそんなことを思っていると、侑哉と目が合った。

そして、私に気づいた侑哉はいつもみたいに優しい笑顔を見せてくれた。

その笑顔を見ていると自然と笑みが零れた。

侑哉がちゃんと私を見てくれた、それだけで嬉しかったから……でも、それと同時に侑哉にはもつと私を見てほしい、そんな独占欲にも似た感情が沸き上がってきてしまう。

「……今は侑哉を応援しよ!」

その黒い感情を振り払うようにそう呟き、再び二人のデュエルを観戦した。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「いくよ! playmaker! 俺のターン、ドロ!」

Phantom LP2050

手札0↓1

場 EXモンスターゾーン なし

メインモンスターゾーン オッドアイズ・ファントム・ドラゴン攻撃表示(ATK2500)

アカシックマジシャンLINK2(ATK1700)リンクマーカー上/下

伏せなし

Pゾーン EMオッドアイズライトフェニックス(スケール3)

EMオッドアイズユニコーン(スケール8)

playmaker LP700

手札0

場 EXモンスターゾーン エンコードトーカーLINK3(ATK2300↓3100)リンクマーカー上/下/右下

メインモンスターゾーン フレイムアドミニスターLINK2(ATK1200↓2000)

伏せ1

Pゾーンなし

さて、まずは手札補充からかな…

「俺は手札から魔法カード、カップオブエースを発動！このカードはコイントスを行い、表なら俺がデッキからカードを2枚ドロウでき、裏なら相手が2枚ドロウできる」

「運まかせのドロウソースか…」

「まあね…でも、こういうカードを使いこなしてこそそのエンタメデューリストだからね！」

俺はそう言いながら、コイントスを行った。

指で弾いたコインは空中で円を描きながら、手のひらに吸い込まれ

る……恐る、恐る手のひらに吸い込まれたコインに目をやる。

「……よし！表！よつてデッキからカードを2枚ドロ―する！」

手札1↓0↓2

ふう、助かった……ここで裏が出てたらやばかった。

「さらに、手札から魔法カード、強欲で貪欲な壺を発動！デッキトップから裏側でカードを10枚除外し、2枚ドロ―！」

手札2↓1↓3

よし、これで準備は整った。

「さて、playmaker……今度は俺が魅せる番だよ！」

「何をするつもりだ？……まさか!？」

「そのまさかだよ！いくよ、お楽しみはこれからだ!!」

俺はそう言葉を紡ぎ、データストームの中へと突進していく……凄まじいデータの嵐に曝されながら奥へと進んでいき、そのままなんとか体勢を立て直した。

「ふう、相変わらず体勢を立て直すのに苦労するな……ここ」

『誰かと思えばお前か……今日は随分と来客が多いな』

「playmakerも来たもんな、確かにいつもより来客は多いかもね」

『全くだ……それで今日はどうした？またデータストームに巻き込まれたのか?』

少し、からかうようにデータストームの主はそう呟いた。

「ははっ、今回は違うよ……自分の意思でここに来たんだ」

『自分の意思で、か……大方、私に聞きたいことがあるといったところか……』

「ああ、その通りだ……まあ、playmakerが魅せてくれたから、今度は俺が魅せる番だと思ったからでもあるんだけど、一番の理由は……」

俺は一度そう言葉を区切って、言葉が続けた。

「一番の理由は、葵が見てるから、かな……葵が見てくれているのに簡単には負けられないからね」

それに、葵と目が合った時何か様子が変わった気がするから……俺の気のせいなら良いんだけど。

まあ、どっちにしても俺のすることは変わらない……俺の、俺と player のデュエルで観客を、そして、葵を楽しませる！それだけだ。

『ククッ、どうやらお前の行動原理は葵という少女のため、というのがほとんどのようだな』

「まあね……葵は俺の大切な人だから……」

『フッ、まあお前たちの惚気話はまたの機会に聞かせてもらおうとして、私に聞きたいこととは何だ？』

「惚気話って……まあ、それは良いや……あんたはリンクアクセスって知ってるか？俺がこんなふうにデータストームの声を聞けるのはそれのおかげらしいんだけど……」

『リンクアクセス……聞いたことがないな、確かにお前のようにデータストームの声を聞くことができる人間に会ったことはあるが、そんな名称とは知らなかったな』

「そっか……」

データストームの主も知らないか……うくん、本当に謎が多いな、この能力。

『さて、そろそろお前をここから出すとしよう、このカードを受けとれ』

そう言っつて、データストームの主は俺の手元にカードを送った。

そのカードはエンコードトーカーの時と同じく白紙だった。

「なるほどね、どんなカードになるかは俺の運次第か……」

『当然だ……さあ、そろそろデュエルに戻れ……また機会があればその時はお前達の惚気話を聞かせてもらおうとしよう』

「いちいち掘り返さないでくれよ……まあ、次に会う時までを考えておくよ」

俺は最後にそう言っつて、データストームから抜け出した。

そこでさつき手に入れたカードに目をやる。

「なるほど、これはなかなか汎用性が高そうなカードだな……」

「スキルを使用せずに、データストームからカードを手に入れたのか!?」

『そんなのありかよ!?』

俺がデータストームから出てくると、playmakerが驚きの声を上げた。

「Phantom、お前は一体…」

「ただの、しがないエンタメデユエリストだよ……さあ、いくよ! 現れる希望を照らすサーキット! アローヘッド確認、召喚条件はトークン以外のモンスター2体以上! 俺はリンク2のアカシックマジシャンとオッドアイズ・ファントム・ドラゴンをリンクマーカーにセット! サーキットコンバイン、リンク召喚! 現れる、リンク3! トライゲートウィザード!!」

トライゲートウィザードLINK3 (ATK2300) リンクマーカー上/右/左

「さらに、俺は手札からサイバースガジェットを召喚! そして、サイバースガジェットが召喚に成功した時、墓地のレベル2以下のモンスターを特殊召喚できる、俺はピットロンを墓地から特殊召喚するよ!」

サイバースガジェット攻撃表示 (ATK1400)

ピットロン守備表示 (DEF2000)

「サイバースだど!」

『マジか!? ストームアクセスに似たことができるだけじゃなくてサイバースまで持ってんのかよ!』

俺がサイバースを使うと、playmakerはさつきと同じかそれ以上の驚きの声を上げた。

まあ、そりやそうなるよな…目の前で自分と同じサイバースのカードを使う奴がいるんだもんな…

実際、俺がサイバースを使えることは葵と花恋以外の人には言っていないしな。

いや、リボルバーも知ってるか…デユエルした時にサイバースを使ったしな。

「まさか、お前がハノイに狙われているのはサイバースを使っているからか……?」

「さあね、実は俺にもよくわからないんだ……まあ、でもとりあえず今はデュエルを楽しもうぜ! 話しは決着がついてからでも遅くないだろう?」

「フツ、それもそうだな……来い! Phantom!」

「それじゃあ遠慮なく、再び現れる希望を照らすサーキット! アローヘッド確認、召喚条件はモンスター2体! 俺はサイバースガジェットとピットロンをリンクマーカーにセット! サーキットコンバイン! リンク召喚! 現れる! リンク2プロキシードラゴン!!」

プロキシードラゴンLINK2(ATK1400)リンクマーカー
左/右

「そして、サイバースガジェットが墓地に送られたことによりガジェットトークンを特殊召喚!」

ガジェットトークン守備表示(DEF0)

「なるほど……サイバースのカードをよく使いこなしている……あいつの言った通り、Phantomはいくつものカードを使いこなせるらしいな」

『だから感心してる場合かよ! さつきから思ってたけどよ……お前、このデュエルを楽しんでるだろ?』

「……そうかもしれないな」

「どうやら、なかなか楽しんでもらえてるみたいだね! でもまだまだお楽しみはこれからさ! 俺はトライゲートウィザードの効果発動! このカードが2体以上のモンスターと相互リンク状態の時、フィールド上のカード1枚をゲームから除外できる!」

「くっ、俺の場のエンコードトーカーのリンクマーカーを利用したのか……!」

「そういうこと! 俺はトライゲートウィザードの効果で君の場のエンコードトーカーを除外するよ!」

トライゲートウィザードの効果によりplaymakerの場合からエンコードトーカーが除外された。

それにしても、やっぱり汎用性が高いなこのカード…召喚条件も緩い方だし相互リンクしているモンスターの数次第で強力な効果を発揮できる。

スピードデュエルだから完全に効果を使えるわけじゃないけど、それでも十分すぎるぐらいだ。

「さあ、まだまだいくよ！三度現れる、希望を照らすサーキット！アローヘッド確認、召喚条件はサイバース族モンスター2体以上！俺はプロキシードラゴンとガジェットトーカーをリンクマーカーにセツト！サーキットコンバイン！リンク召喚!!現れる！リンク3、エンコードトーカー！」

エンコードトーカーLINK3(ATK2300)リンクマーカー上/下/右下

「エンコードトーカー…やはりお前も持っていたか」

「へえ、俺がエンコードトーカーを持つてるってわかってたのか？」

「ああ」

「一応聞いておくけど…どうしてわかったんだ？」

「理由は3つある…1つ、お前は以前、ハノイの騎士とのデュエルでデータストームに巻き込まれていた、その時にサイバースのリンクモンスターを手に入れていた可能性が高い」

「2つ、お前は俺と同じくサイバースを使用していた…だから俺と同じリンクモンスターを使ってもおかしくはない」

「そして、3つ目…お前は俺がエンコードトーカーを召喚した時、そこまで大きな反応を見せなかった…まるでエンコードトーカーについて最初から知っていたかのような…だから、お前もエンコードトーカーを持っている可能性が高いと考えた」

「…なるほど、さすがはplaymakerってところかな？」

まさか、今のデュエルの情報からそこまで考えているとは……相手のわずかな反応も見逃さない、これがplaymakerか…！

「良いね！ワクワクしてきたよ！さあ、続けようか！俺はセッティング済みのペンデュラムスケールでペンデュラム召喚！再び現れる！オッドアイズ・ファントム・ドラゴン!!」

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン攻撃表示（ATK2500）
現れた幻影の竜が咆哮を上げる、その咆哮はいつもよりも大きく、まるで俺の心に呼応しているようだった。

「ははっ、オッドアイズも気合いが入ってるみたいだね！それじゃあいくよ！俺はオッドアイズ・ファントム・ドラゴンでフレームアドミニスターに攻撃！夢幻のスパイラルフレーム!!」

これが決まれば俺の勝ちだけど、playmakerが何の対策もしていないわけがない…さあ、どうくる？

「ただで通すわけにはいかない！毘発動、破壊輪！このカードの効果でフィールド上のモンスターを1体を破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージをお互いに受ける！俺はトライゲートウィザードを破壊する！」

「なっ…!?!」

破壊輪だつて？しかもこの効果ってエラツタされる前の効果じゃないか……何でエラツタされる前のカードがあるんだ？

「……………いや、今はそれよりも…」

「引き分け狙いつてわけか…」

「今の状況では引き分けに持ち込むしかないからな」

「……………次は勝たせてもらうよ！playmaker!」

「…望むところだ」

playmakerがそう言い終わると同時に、すさまじい爆発音が響き、俺達はその爆風に吹き飛ばされた。

「ぐっ、ぐわああああ!!」

「うわああああ!!」

playmaker LP700↓LP0

phantom LP2050↓LP0

／／／／／／／／／／／／／／

「…ふう、強かったなplaymaker…」

playmakerとのデュエルに決着が着いた後、またデュエルをしようとplaymakerと約束し、近くの建物に降りたつていた。

それにしても…まさか、エラツタ前の破壊輪を使われるとは思わなかったな…この世界の破壊輪はエラツタ前の効果なのか？

「あ、侑哉ー！」

俺がそんなことを思っていると、俺に駆け寄ってくるブルーエンジェルの姿が目に入った。

「葵…playmakerは強かったよ、まあ、楽しいデュエルだったけどね！」

本当にplaymakerは強かった、というより皆強いんだよな…葵もGo鬼塚も。

まあ、だからこそワクワクするんだけどさ…

「そう？実質、playmakerの負けだと思っけど」

「え、なんで？」

俺は葵の言葉にそう質問する。

というか、若干棘がある言い方に聞こえたのは俺の気のせいかな？

「だって、あの状況じゃplaymakerは引き分けに持ち込むのがやつとつて感じに見えたし…だから、実質、侑哉の勝ちだと思っ」

「そ、そうか？まあ、だとしてもちやんと決着は着けるつもりだよ…」

「大丈夫、侑哉の手を患わせなくても私がplaymakerを倒すから…」

「葵…？」

何か様子が変わらないか？あの時も様子が変わったし…やっぱり何かあったのか？

「あのさ、葵…」

「どうかしたの？」

「何かあったのか？デュエル中、お前と目が合った時も何か様子が変わったし…俺で良ければ相談に乗るけど」

「…ふふっ！心配してくれてるの？」

「そりゃあね…で、どうなんだ?」

俺がそう尋ねると、葵は悪戯っぽい笑みを浮かべて

「大丈夫!心配してくれてありがとう、侑哉…」

と言った。

「そっか、なら良いんだけどさ…:それじゃあ、そろそろログアウトしようか!」

「そうしよっか!それじゃあまた明日…侑哉!」

「うん…また明日!」

俺と葵はそう言葉を交わして、ログアウトした。

とりあえず、葵が「元気そう」で良かった…:俺の考えすぎだったか?

俺はそんなことを思いながら意識を手放した。

UA3万5千突破記念！お家デート 侑哉編

「侑哉、片付けは終わった？」

「うん、今終わったよ…これで大丈夫かな？」

家の掃除を一通り終わらせ、ソファに腰掛ける。

思ったよりも掃除をする箇所が少なく予定よりも早く終わった。

「いよいよね！あ、安心して邪魔はしないから！思う存分イチャイチャしてて良いわよ！」

「はいはい、わかったよ…」

相変わらずだな、花恋は…まあ、俺も楽しみなのは間違いないけど。ピンポーン！

俺がそんなことを思っていると部屋にインターホンの音が響いた。

「ちよつと、出てくるよ…」

「うふふ、行ってらっしゃい！」

花恋はニヤニヤしながら、俺に玄関に行くように促した。

わかつちやいたけど、からかう気満々じゃないか……とりあえず、気にしないようにしましょう。

俺はそう考え、玄関に向かって歩を進めた。

「いらっしやい！葵！」

「うん、お邪魔するわね…侑哉！」

そう、今日は葵が俺の家に来る日…前に葵と約束したお家デートの日だ。

／／／／／／／／／／／／／／

「侑哉の部屋に入るのって久しぶりな気がするわね」

「まあ、確かにそうかもな…そういえばこの部屋で葵に看病してもらったっけ…」

「そうそう、それで今度は私が風邪を引いて、侑哉に看病されることになったのよね…」

「うん、あの時は大変だったよ…あ、そのベッドに座ってゆつくりしてて…何か飲み物持ってくるよ」

「うん、ありがとう！」

侑哉は気にしないで良いよ、と言って下に降りていった。

「それにしても…侑哉って几帳面なのね」

侑哉の部屋はきちんと整理整頓されていて、ところどころにカードの束が置かれていた。

何と言うか、侑哉らしい部屋って感じがする。

「そう言えば、このベッドって侑哉が使ってるやつなのよね…」

……って、ダメよ！そんなことしたら変態にしか思われないわよ！
いや、でも侑哉がいない今しかチャンスがないし…

ちよつとベッドに入るぐらいなら大丈夫よね？

結局、欲望には抗えずベッドの中に潜りこんだ。

「ふあああ……！」

何だろう、これ……ベッドから侑哉の匂いがしてすごく落ち着く。

何だか侑哉に抱きしめられてるみたい…

「侑哉…ふふっ！」

「お待たせ、葵……？どうしたんだ、ベッドに潜りこんで…」

「ふえっ!?ゆ、侑哉！い、いつからそこに？」

「えっと、ついさっきだけ……本当にどうしたんだ？葵」

もしかして侑哉に見られた？ど、どうしよう…

「えっと、侑哉…これは、その…侑哉のベッドが気持ち良さそうだったから、ちよつと寝てみたくなって…」

我ながら、苦しい言い訳だと思う…こんな嘘、誰も信じるわけ……

「なるほど、そうだったのか…それで寝心地はどうだった？」

「え…？えっと、すごく気持ち良かった…」

「そっか、それは良かった…あ、麦茶ここに置いてくよ」

「う、うん…ありがとう」

もしかして侑哉、今の嘘を信じちゃったの…？それとも分かかって、あえて黙っていてくれてるのかな？

……とりあえず、麦茶を飲もう。

私はベッドから起き上がり、侑哉の持つてきてくれた麦茶を口に運

んだ。

「ふう…おいしい」

「確かにおいしいな…そう言えば、葵の家でお家デートした時もこうやって麦茶を飲んだな」

「そ、そうね…：：：そういえば、前に来た時もあったけど侑哉っていつぱいカードを持つてるけどどれくらい持っているの？」

「まだ完全に落ち着かない心を落ち着かせるために、そう話題を振る。」

「うーん、数えたことはないけど千枚ぐらいはあるんじゃないかな？」

「千枚も!?…でも、確かにそれだけあれば侑哉が色んな戦術をデッキに組み込めてるのも納得できるわね」

侑哉はデュエルの時にデッキの内容が変わっていることがある。

「といっても全体的な変化ではなく、一部のカードを入れ替えることで、戦術のバリエーションを増やしている。」

そして、その様々な戦術を手足のように使いこなせるから侑哉は強い。

「まあ、そうだね…まだまだ見せていない切り札もあるし、当分はネタ切れにならないと思うよ」

そう楽しそうに話す侑哉を見て、思わず笑みが零れる。

「侑哉って本当にデュエルが大好きなのね…」

「まあ、そりゃあね…小さい頃からずっとやってたしな」

「私とデュエルだったらどっちが好き？」

「えっ?!急にどうしたんだ?」

侑哉を少しからかうつもりでちよつと意地悪な質問をする。

侑哉は少し慌てたような反応をした後で、こう言った。

「…葵、だな…確かにデュエルも大好きだけど葵のことはもつと好きだからな」

「そ、そう…あ、ありがとう…」

ちよつとした冗談だったのに真面目に答えられてしまい、何だか恥ずかしくなって顔をそむけた。

本当に、侑哉ってズルい…：：：でも、私はそんな侑哉が大好きなのよ

ね。

「ふふっ……！」

「葵……？何で笑ってるんだ？」

「私はやっぱり、侑哉のことが大好きなんだなって、思ってた……」

「そ、そっか……何か照れるな……」

侑哉は少し照れくさそうに、そっぽを向きながらそう言った。

でも、それも少しの間だけで侑哉はすぐに私の方に向き直った。

「俺も、大好きだよ……葵」

瞬間、唇に柔らかい感触が襲った。

「侑哉……いきなりは反則よ……」

キスされた、そう理解するのに時間は掛からなかった。

多分、今の私は顔が真っ赤になっていると思う……だって触らなくても顔が熱いのがわかる。

「葵には言われたくないな、普段は葵の方が不意打ちでキスしてくるだろう？これはちよつとしたお返しだよ……」

「なら……」

そう言って、今度は私の方から侑哉にキスをする。

「これで、また侑哉にお返しでキスしてもらえるわね……」

私は侑哉をからかうようにそう言った。

けれど、そう言いつつ内心では恥ずかしい気持ちでいっぱいだった。

でも、そんな恥ずかしささえも心地良かった。

「……やれやれ、葵には敵わないな」

私が言った言葉に侑哉は苦笑しつつ、そう呟いた。

「ねえ、侑哉……今度は不意打ちとかじゃなくてちゃんとしたキスをしてくれない？」

「……うん、わかったよ……それじゃあ葵、こっちは向いて」

「う、うん……」

侑哉に促されるまま、顔を向ける。

「侑哉……」

「葵……」

お互いの名前を呼び、そのままキスを交わす…それはほんの少しの時間のはずなのにとても長く感じられた。

「これからもよろしくね…侑哉…」

「もちろん！こちらこそよろしくな…葵」

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ふう、美味しかった！さすがは侑哉、料理上手ね！」

「シチュー作ったただけだな…まあ、口にあったなら良かったけどさ…葵はどうだった？美味しかったか？」

「うん！美味しかったわよ！」

「そ、そっか…なら良かった」

葵の一言にホツと胸を撫で下ろす。

もし、これで不味いとか言われたら心が折れるところだったな…

葵とゲームをしたり、デュエルをしたりしている間に気付けば夕方になっていた。

それで慌てて夕飯の用意をして、今に至る。

夕飯の用意は葵も手伝ってくれたおかげでそこまで苦労せずにするんだ。

まあ、途中で花恋に『こうして見るときながら夫婦みたいね！』と、からかわれて二人して赤面してしまったけど…

「葵ちゃん、お風呂が沸いたみたいだけど先に入ってきたら？」

俺が皿洗いをしながらそんなことを思っていると、花恋が俺の隣で皿洗いの手伝いをしてきている葵にそう声を掛けた。

「今は侑哉の手伝いをしているので、後で大丈夫です！」

「気を遣わなくて良いって、後もう少して皿洗いも終わるから、葵は先に入っても大丈夫だよ」

実際、後は俺一人でもできる量しか残っていないから葵に無理に気を遣わせることもないしな…

「ありがとう、侑哉…それじゃあお言葉に甘えて先に入らせてもらおうわね」

葵はそう言って、エプロンを外してお風呂場へと歩を進めた。

「葵ちゃんのエプロン姿似合ってたわね」

「うん、すごく似合ってた……って、何言わせんのさ!」

葵が出ていったの見計らって、そんなことを呟く花恋に思わずそう言い返す。

「というかあまりにも自然に聞かれたせいで普通に返してしまった……まあ、今さら遅いけど。」

「その後も花恋と他愛ない会話を交わし、気付けば皿洗いも終わっていた。」

「さて、と何しようかな……」

「そういえば侑哉、葵ちゃんはどこで寝るの? 言っておくけど私の部屋はなしだから……」

「えっ? 花恋の部屋にしようと思ってたんだけどダメなの?」

「当たり前でしょ、これは私なりの気遣いよ……侑哉が葵ちゃんと思う存分イチャイチャできるようにね!」

「……」

「えっと、つまり花恋は葵を俺の部屋で寝かせると……そう言いたいわけか。」

「いや、俺は構わないけど……葵が嫌がるんじゃない?」

「それはないわよ! これは断言できる!! 絶対に大丈夫!!」

「お、おう……」

「すごい剣幕で俺に詰め寄る花恋に思わずたじろぐ。」

「……ここまで必死に言うなら大丈夫、なのか……?」

「わかったよ、葵は俺の部屋に泊めるよ」

「それでよし! ところで侑哉、聞きたいことがあるんだけど……」

「聞きたいこと? 何だよ?」

「そろそろ侑哉と葵ちゃんの馴れ初めを聞きたいんだけど……」

「俺、今から布団を用意してくるよ、葵が俺の部屋で寝るなら自分の布団を用意しなきゃいけないし」

「俺がそう言っただけで立ち上がろうとすると、花恋に思いつきり引っ張られてしまった。」

「逃がさないわよ! さあ、いいから話さない!」

「だが断る！」

「話してくれないとデュエルディスクに爆弾仕込むわよ？」

「爆弾!？」

いや、さすがにそれはシャレにならないって……しかも、花恋ならそれができそうで怖い。

しょうがない……ここは大人しく話すか。

「わかった、話すよ……」

「ありがと！じゃあさっそく侑哉と葵ちゃんの出会いについて話して！」

「俺と葵が初めて会ったのはLINK VRAINSで俺がブルーエンジェルにデュエルを申し込んだときだな」

「そういえば初めてLINK VRAINSに行ったときにブルーエンジェルとのデュエルが楽しかったって言ってたわね……なるほど、その時に」

花恋は少し納得したように頷きながら、そう言った。

「そうそう、それがきっかけでよくブルーエンジェルと話すようになったんだよ……それから学校で葵と出会って一緒にデュエル部を作って、それで一緒に居る時間がどんどん増えていったんだよな……」

そして、葵と恋人になって、俺にとって一番大切な人になったんだよな。

「侑哉って、本当に葵ちゃんのことが好きなのね……ねえねえ侑哉は葵ちゃんのどんなところが好きになったの？」

「ここで言わなきゃダメなのか？」

「当たり前じゃないの！ほらほら、言ってみなさいよ、このこの！」

花恋はテンションが高くなっているのか、肘で俺をつつきながらそんなことを言った。

何でこんなにテンション高いんだよ……やっぱり女の人ってこういう話しが好きなのか？

正直恥ずかしいけど話すしかないか……

「そうだな……まずは笑顔が可愛いところ、かな……葵の笑った顔ってすごく可愛いんだよ、その笑顔を見ると何だか嬉しくなってさ、もつと

この笑顔を見ていたって思うんだ……」

「……葵ちゃんが聞いたら赤面間違いなしの発言ね……それで、他には？まさかそれだけじゃないでしょ？後、それを話す前にブラックコーヒーを入れてね」

「何故にブラックコーヒー？まあ、良いけどさ……ちよつと待ってて」

俺はそう言っつて、いつの間にか用意されていたコーヒーをカップに注いだ。

本当にいつの間にも用意してたんだ？

俺はそんなことを思いながら花恋にコーヒーを手渡した。

「ありがと、それじゃあ続きを話して！」

「えっと、他には優しいところとか、意志が強いところかな……葵って意志が強いというか頑固というか……」

「そうなの？」

「そうだよ……ハノイの騎士が攻めてきた時に俺が囹になるから隠れて言っただけけど、私も行くって聞かなくてさ……」

「へえ、そんなことがあったの……それで侑哉はどうしたの？」

「手伝ってもらったよ……正直、危ない目に遭わせたくはなかったけど、葵を信じて頼ろうと思ったから」

それにあのまま俺が隠れていると言っつても多分聞かなかつただろうし。

「葵は、優しくって意志が強くて、頼りになって、それと同じくらいに脆いところもあって……そんな葵の色んなところを知るたびに……一緒に居たくなくて……もつと好きになっていったんだよ……」

「……」

俺が言い終えると、花恋が無言でブラックコーヒーを飲み干した。

「……あれ？今さら思ったけど俺、今とんでもなく恥ずかしいことを言わなかつたか？」

うわああああ!! 自覚したらめっちゃ恥ずかしくなってきた！

「……そういうことをさらつと言えるなんて……我が弟ながら恐ろしいわね……葵ちゃんが羨ましいわ」

「うう……穴があつたら入りたい……」

羞恥心から、思わず顔を両手で覆う。

それと、ほとんど同じタイミングで俺に向かって何かを抱きついてきた。

「えっ、葵…？」

抱きついてきたのは葵だった…シャンプーの良い香りが広がり、お風呂から上がったばかりのせいかな頬がほんのり赤くなっているのが目に見えてわかる。

え？どういふことだ…何で急に抱きつかれてるんだ？

ま、まさか…！

「なあ、葵…もしかして今の話聞いてた？」

俺がそう尋ねると葵は肯定するように頷いた。

ま、マジか…今話したこと全部聞かれてたってこと!?

すごい恥ずかしいんだけど！どうしようもともに顔を合わせられない…

「まさか、葵ちゃんが聞いていたなんて……とりあえず、私は邪魔者みたいだから失礼するわね！それじゃあ侑哉…ごゆっくり！」

「ちよ、ちよつと待って！この雰囲気なんとかしてよ！」

俺のそんな叫びはとどかず、花恋は一目散に部屋を出ていった。

「……ちなみにどこから聞いてたんだ？」

「…花恋さんが侑哉に私のどこを好きになったのかって聞いたところから…」

「そ、そっか…さすがに恥ずかしいな…」

そこからか…まあ、でもあれは本心だし嘘をついてるわけじゃないから、問題はないんだけど…

やっぱり恥ずかしいな…

「侑哉…」

「えっ、葵…」

葵に腕を引っ張られ、体勢が崩れる…そのまま葵を押し倒すような体勢になる。

え？どういう状況だ、これ…とりあえず、体勢を戻さない
とーーーーー

「私は侑哉になら、何をされても良いわよ」

体勢を戻そうとする俺に葵がそんなとんでもないことを口にした。

「葵!? どうしたんだ? 急に、そんなこと言うなんて…」

「侑哉が悪いのよ…あんなこと言われたら誰でも嬉しくて舞い上がっちゃうわよ…」

恥ずかしそうに目を反らしながら葵はそう言った。

…つまり、俺が言った言葉が嬉しくて、こんな状態になったってことか…何か嬉しいような、恥ずかしいような…

「私も侑哉が大好き…優しくて、頼りになって、でも、ちよつと抜けるところもあって…デュエルを心から楽しんでる侑哉が…大好き」

「そして、私を財前 葵という一人の女の子として見てくれた、侑哉が大好き…」

「葵…俺も愛してるよ」

葵の顔が徐々に近づいてくる、やがて葵の吐息が間近に聞こえるぐらいに近くなる。

そして、そのまま……

「そういえば忘れ物をしちゃったのを忘れて…たわ…ね

……」

その後、花恋が部屋に入ってくる音が聞こえた。

しばらくの静寂、そんな静寂の中で花恋が声を上げた。

「ぐ、ぐ、ぐごめんね!! まさか、そんなことになってるなんて思わなかったから!! 私、邪魔者みたいだから失礼するわね!! 本当にごめん!!」

そう言って、花恋はまたまた一目散に部屋から出ていった。

その後、急に恥ずかしくなってお風呂に入りに行ったが、心臓の鼓動の早まりは治まってくれず、結局夜もなかなか寝つけなかった。

第18話 デュエル部によるこそ

夢を見ていた、私にとっては悪夢と言っている。

目の前に居るのは、playmakerや葉山さん、そして花恋さん達に囲まれている侑哉の姿。

その侑哉の目には私は映っていないくて、声を掛けても何も返事が返ってこない。

そして、そのまま何処かに消えていってしまった。

「……待って！侑哉……」

「行かないで！」

目を覚ますと、そこには見慣れた私の部屋の景色が広がっていた。

「はあ……はあ……ゆ、夢？」

私のさつきまで見ていたものは夢だったの……？

「……夢で良かった……でも、なんであんな夢を……」

考えても答えは出なくて、結局はただの夢だと結論づけた。

「……侑哉に電話してみようかな」

こんな朝早くに電話に出てくれるかはわからないけど、今は侑哉の声が聞きたい……

私はそう思って、侑哉へと電話した。

『葬か？こんな朝早くにどうしたんだ？』

私が電話を掛けてから、しばらくして侑哉の思ったよりもはっきりした声が聞こえてきた。

その声を聞いただけで、なんだか気持ちが悪くなる。

「おはよう、侑哉……もしかして起きてた？」

『うん、なんか急に目が覚めてさ……今さら寝る気も起きなくて、デツキを眺めてたよ』

「ふふっ、侑哉らしいわね……」

『そうかな……？それでどうしたんだ？何かあったのか？』

「特に何も……何となく侑哉の声が聞きたくなって……」

『そっか……特に問題がないなら良いけどさ……何か悩みがあるなら相談してくれよ』

「うん、ありがとう…侑哉」

侑哉はきつと私に何かしらの悩みがあることに気づいているんだと思う。

それでも、無理に聞き出さずに私から話すのを待っていてくれている。

「…：実は、嫌な夢を見たの」

『嫌な夢ってどんな？』

「侑哉が私のそばから居なくなっちゃう、そんな夢を見たの…」

『なるほどね…』

侑哉は納得したようにそう呟いて、言葉を続けた。

『俺は葵が見た夢の内容について具体的にはよくわからないけど、俺が葵のそばから居なくなるなんてことはないよ』

そう言う侑哉の声は優しく、聞いているだけで何だか安心できた。

「…ありがとう、侑哉…おかげで元気になった！」

『それなら良かったよ…それじゃあ、せっかくこうやって電話してるんだしもう少し話そっか！』

「うん…！」

その後、侑哉と朝食を食べるまで他愛ない会話を交わした。

／／／／／／／／／／／／／／／／

『おい、遊作』

「何だ？」

『財前葵が来るまでここで待つつもりか？』

「当然だ」

授業が終わり、財前葵が現れるのを待っているとAiが不満げな声を漏らした。

俺だって、好きでこんなことをしているわけではない。

昨日、草薙さんとブルーエンジェルの正体は俺と同じ高校に通う財前葵だと突き止め、その兄はSOLテクノロジー社のセキュリティ部長である財前晃だということも突き止めた。

そして、彼女から情報を引き出すことができればハノイの騎士の糸

口を見つけることができると考えたのだが…

『なかなか来ないな、もう帰ったんじゃないのか?』

「お前は財前葵を探すことに集中しろ」

『へいへい、分かりましたよ』

しぶしぶといった感じで、A iがそう口にした。

確かにA iの言った通り、財前葵がすでに帰宅している可能性もある。

まあ、その時はその時で考えるところ。

『お、見つけたぞ!財前葵だ!』

「見つけたのか?」

俺が財前葵が帰宅した可能性について考えていると、A iの声が聞こえた。

噂をすればなんとやら、というやつか。

『おう!あそこに居るぞ…うん?財前葵の隣に居るのって…』

A iの言う方向に目を向けると、そこに居たのは財前葵と…

「あれは、侑哉か?」

財前葵と楽しげに会話している黒髪の少年、神薙侑哉の姿だった。

『あの二人って仲良いんだな、あんな楽しそうに会話してるし』

「確かにそう見えるな…とりあえず、後を追うぞ」

そうして、後をつけていると、ある部屋の前で止まった。

「うん?」

そして、何を思ったのか侑哉が後ろを振り返った。

「まずい!」

侑哉が振り返るのを見て慌てて近くの物陰に身を潜める。

「どうかしたの?侑哉」

「今、誰かが見てた気がして…うくん気のせいか?まあ、良いや、とりあえず中に入ろっか!」

「そうね…」

「ふう…なんとかやり過ごしたか」

『危ないところだったな』

侑哉達が中に入ったことを確認し、物陰から出て部屋の前へと歩を進める。

「DUEL CLUB…?」

そう呟くと同時に、目の前の扉が開かれた。

そこに居たのはさつき部屋に入っていた侑哉だった。

「…あれ?遊作じゃんか!どうしたんだ、扉の前でボーっとして…もしかして、入部希望?それなら大歓迎だよ!」

「いや、俺は…そういえばここは何かの部室なのか?」

「ああ、ここはデュエル部の部室だよ」

「デュエル部…ああ、ここ、デュエル部の部室か」

「そうそう!立ち話もなんだし良かったら見学していけば?」

目をキラキラさせながら、侑哉はそう言った。

侑哉には悪いが、俺はデュエル部に入りに来たわけではない。

そう思い、断ろうと口を開こうとすると…

『ああ、そうさせてもらおうよ!』

「なっ…!」

「やったぜ!おーい、みんな、見学者が来たよ!!」

俺、いや正確に言えば俺の声を真似たA iの言葉を聞いた侑哉はさつきよりもさらにテンションを上げて部屋へと戻っていった。

「お前…!」

『ふん!』

反省の色はなしか…しかし、こうなってしまうてはどうしようもない。

俺はそう考え、デュエル部の部室に入っていた。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「そういえば、侑哉と藤木君って知り合いだったの?」

「うん、行きつけの店でよく会ってさ…そこから仲良くなったんだよ」

「ふ〜くん、そうなんだ…」

「いや、何で俺をジト目で睨み付けるのさ…」

「教えない」

「……今度一緒にその店に行く？その店のホットドッグ、すごい美味しいんだよ！葵も気に入ると思う」

「…そうね、それじゃあ一緒に行きましようか！もちろん、侑哉の奢りでね！」

「はいはい、わかったよ」

「何ですか!!この茶番!!イチャイチャするなら別のところでしてくださいよ!!」

侑哉と財前の会話に、一人の少女がそうツツコミにも似た叫びをあげる。

確か、葉山って言ったっけ……その意見に賛成だ。

目の前の何とも言えない雰囲気は俺ですらわかるほど甘い。

「なあ、島……」

「ああ、お前の言いたいことはわかるぜ、藤木……でもいちいち気にしてたら身がもたねえぞ」

「あ、ああ……」

どうやら、この部ではこれはよくある光景のようで、部長の細田さんは気にせずミーティングを始めようとしている。

侑哉に半ば強引に見学に参加させられて、互いに軽く自己紹介をした後に急にこんな雰囲気になってしまい、正直、困惑している。

『あれだな、リア充爆発しろ！って奴だな』

「お前は少し黙っている」

周りに聞こえない程度の声でAiを黙らせる。

幸いにもミーティングが始まっていたため、俺達の声に耳を傾ける人物はいなかった。

……それにしても

目の前には財前のデッキ調整に付き合っている侑哉の姿……その表情はとても楽しげで、それにつられていのか、財前もとても楽しげな表情をしていた。

本当に仲が良いな、この二人……もしかして、侑哉に頼まれれば、財

前葵は意外と簡単に情報を教えてくれるんじゃないのか？

：いや、止めておくか、そもそも侑哉がそんなことを許すとは思えないしな。

あいつとは最近知り合ったばかりだが、誰かを裏切るような人間じゃないというのにはわかつているつもりだ。

「：別の方法を考えるか」

俺のそんな呟きは他の誰にも聞こえず、消えていった。

第19話 兆し

「ふう、今日も楽しかったわね…」

デュエル部の活動が終わり、家に帰ってきた私はそう言葉を溢す。ただ、今日見学に来た藤木君と侑哉が何故か仲が良かったことは驚きだったけど。

ある意味、そのおかげで侑哉とデートの約束ができたから、それはそれで良かったかな、と個人的には思っている。

「テレビでも見ようかな…」

そう言って、何気なくテレビをつけると、兄さんがマスコミから色々質問されているニュース画面が目に入った。

その内容としては、この前のGo鬼塚とplaymakerのデュエルはSOLテクノロジー社が仕組んだという噂があるが実際のところ、どうなのか?という内容だった。

「兄さんも大変ね」

テレビの電源を切り、そのままベッドへと歩を進めた。

「……侑哉」

ベッドに横になりながら、彼の名前を呼ぶ。

家に帰ってきたというのに考えるのは侑哉のことばかり、侑哉と明日はどんなことをしようか、とかどんな会話をしようか、とか挙げればキリがない。

「ちよつと電話してみようかな…侑哉も家に帰ってきてるだろうし」

そう思い、携帯を取り出すと、着信音が響いた。

「…兄さん?何の用かしら…とりあえず出ましようか」

少し、怪訝に思いながら電話に出ると、画面に兄さんが映し出された。

「どうかしたの?兄さん」

『葵、お前は何が不満なんだ』

「え…?」

『いつまでアイドルごっこを続けるつもりだ』

「……」

なるほど、つまり兄さんは私に説教をするために電話を掛けてきたってことね…

そうになると、大体話しの内容がわかってしまう…：多分スピードデュエルは危ないから止めろとかそういう内容の電話だと思う。

「心配しなくてもわかってるわよ、兄さん」

『そうか、なら良い…』

「それじゃあ、切るわね」

『ああ…』

最後に兄さんはそう言って、通話を終わらせた。

兄さんには悪いけど、私はブルーエンジェルを辞めるつもりはさらさらでない。

だって、私のデュエルを見てほしい人がいるから。

もちろん、観客の人達にも見てほしいけど、それよりも侑哉にもっと私のデュエルを見てほしい。

……だから

「playmaker、あなたは私が倒す…！」

我ながら、酷い嫉妬だと思う。

でも、この黒い感情を抑えることは出来なかった。

「into the VRAINS…」

見ていてね、侑哉…

私は心の中でそう呟きながら、意識を手放した。

／／／／／／／／／／／／

「playmaker、私とデュエルしなさい！見てるんでしょ！隠れてないで出てきなさい！」

「葵の奴、急に何言ってるんだ？」

画面に映されたブルーエンジェルの姿を見ながら、そう呟く。

playmakerにデュエルを申し込んでいるのか？…：そういうえば、この前…

『大丈夫、侑哉の手を患わせなくても私がplaymakerを倒すから…』

って、言ってたな…もしかして、それでか？

「…ちよつと様子を見に行くか、花恋…留守番頼んで良いか？」

「葵ちゃんの所に行くんでしょ、良いわよ」

「ありがとう、それじゃあ行ってくるよ！デッキセット、into the VRAINS!!」

俺はそう宣言して、LINK VRAINSへと向かった。

「…さてと、葵を探さない」と

LINK VRAINSに来て、さっそく葵を探すために走り出す。

確か、葵が映っていたのはこっちの方向のはずだ！

俺は葵の映っていたであろう方向に全力で走る。

走って、走って、走って…そこでもうやくブルーエンジェルの姿を見つけた。

「ブルーエンジェル！やっと見つけた！」

「あれ？Phantom…どうしてここに？それに私は何でこんなところ…」

「え…？もしかして、覚えてないのか？」

「確か、playmakerにデュエルを申し込んで…結局、playmakerが出てこなくて、それで…あれ？その後、どうしたんだろ？」

葵が困惑の表情を浮かべながら、そう言った。

どうやら、葵はplaymakerにデュエルを申し込んだところまでは覚えているらしい…ただ、その後の記憶がないってことか。

どういうことだ？誰かが葵に何かしたってことなのか？

「…まあ、とりあえず元気そうで良かったよ、ちよつと心配だったからや」

「ふふっ、心配してくれてありがとう…侑哉」

「どういたしまして……とりあえず、一安心したよ！それじゃあ、また明日な！葵」

「うん…！また明日、侑哉！」

俺はそう言って、ログアウトした、ある不安を胸にかかえながら：

「お帰りなさい、侑哉…思ったより早かったわね」

「うん…ちよつと気になることがあってさ」

「気になること？」

「なあ、花恋…デュエルディスクを介してその人の記憶に干渉することって可能か？」

「え…？何言ってるの、侑哉」

俺の突然の発言に花恋が驚きの声を上げる。

まあ、当然の反応だよな…俺だってこんなこと聞かれたら驚くし。

「いや、実はさ…」

俺はさつき葵と話した時のことを花恋に説明した。

「なるほど、それでさつきの質問をしたのね」

「そういうこと…もしかして葵の記憶を誰かがいじったのかもしれないから、一応聞くだけ聞いておこうと思ってさ」

「なるほどね…とりあえず、さつきの質問の答えを返すと、現実ではま
ず不可能よ」

「やっぱ、そうだよな…俺の考え過ぎか…って現実ではってことは…」

「さすがは侑哉、察しが良いわね！そう、多分だけどLINK VRA
INSでなら可能よ」

「そう、か…じゃあやっぱり誰かが葵の記憶をいじったのか？」

「それはわからないわ…ただ、とんでもない科学力を持っていること
だけは確かね」

「確かにそれは間違いないな…」

記憶をいじるなんて真似はとてもしゃないが、普通の人にはできるよ
うなものじゃない。

考えられるとしたら、ハノイの騎士かSOLテクノロジーか……ど
ちらかと言えばハノイの騎士の方が確率としては高いな。

「…とりあえず、花恋はLINK VRAINSでデュエルディスク
を介して、アバターの中に侵入できるプログラムを作ってくれ」

「了解！任せて、ちやちやつと完成させるから！」

「頼りにしてるよ！花恋！」

俺はそう花恋を激励し、キッチンへと向かった。
さて、今日の夕飯は気合い入れて作らないとな！
俺はそう決意して、夕飯を作り始めた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「あのさ、葵…」

「どうかしたの？侑哉」

「そんなに抱きつかれると動きにくいんだけど…」

朝食を終えて支度をしていると、葵が俺の家に迎えに来てくれた。
俺としても葵と一緒に登校できることは嬉しいから、喜んでOKし
ただんだけど…

その後急に腕に抱きつかれ、今に至る。

まあ、嫌ではないから、これ自体は別に良いんだけど。

「もしかして、照れてる？」

「まあ、そりゃあね…それにデート以外でこういうことをやるのって
何か新鮮な気がしてさ」

「確かにそうかもしれないわね…毎日、こうして登校する？」

「うーん、さすがに俺のメンタルが持たないから、たまにで良いかな」
毎日、葵に抱きつかれて登校する…嬉しいけど、俺の理性が持つか
不安だ。

「なら、しょうがないわね…」

そう言つて、葵はさらに体を密着させてくる。

ちよっ！待って！本気でメンタルがやばいって！

「ふふっ、放さないわよ、侑哉…」

俺が心の中で格闘している最中、葵はふと、そんなことを呟いた。
何か今日の葵は妙に甘えてきてるな…まあ、嫌ではないし、むしろ
嬉しいくらいなんだけど…

昨日のこともあるし、ちよっと不安だな。

俺はそんなことを思いながら、歩き続けた。

「あれ？侑哉と財前か」

「うん？お、遊作！おはよう」

歩き続けていると遊作と出くわし、そのまま挨拶を交わす。

まさか、こんな時間に遊作と出くわすとはな…正直、驚いた。

「ああ、おはよう…お前達は何というか…平常運転だな」

遊作は少し微妙な表情をしながらそう言った。

「まさか遊作にまでそういう認識をされているとは…」

「違うのか？」

「いや、確かにそうかもしれないけど…」

まあ、デュエル部のみんなは俺と葵が付き合っているのを知ってるから、そんな風に思うのも当然かもしれないな。

「侑哉…いつまで藤木君と話してるの？」

「え…？」

ふと、葵の声が聞こえて目を向けるとそこには頬を膨らませて、むくれている葵の姿があった。

え？何その表情、すごい可愛いんだけど…

「あ、うん、ごめんごめん…それじゃあ学校でな遊作」

「あ、ああ…」

そう最後に言っ、俺は歩き始めた。

その時に葵がすごい遊作を睨み付けてたけど、何でなんだ？

／／／／／／／／／／／／／／／／

「なんで授業ってこんなにめんどくさいんだろう」

「そんなこと言ってないで集中しなさい」

「わかってるよ…」

授業が始まって少しして、俺が授業についての文句を口にすると、葵にそう注意された。

結局、あの後学校に着くまでずっと葵に抱きつかれたまま歩き続けることになり、着いたところには精神的にかなり疲れた。

しかも、途中で遊作にバッタリ会ってしまい、すごい微妙な表情でこつちを見られる始末。

「……………」

…それにしても、こうして見ると甘えてきていること以外はいつも通りの葵に見えるな…

やっぱり俺の考えすぎなんだろうか？

俺がそんなことを考えながら、葵の様子を見ていると葵が携帯を取り出しているのが見えた。

メールでも来たのか？でも一体誰が…

「すみません、体調が優れないので保健室に行ってきたんですけどいいですか？」

「え…？」

俺がメールの送信者について考えていると、葵が手を上げてそんなことを言った。

多分、体調が優れないというのは嘘だろう…さっきのメールが何かしら関係しているに違いない。

「それじゃあ、俺が葵を保健室に連れていきますよ」

俺がそう言いながら立ち上がると、担当の先生は意外とすんなり許可してくれた。

それに、何とかというか生暖かい目線をこちらに向けていた。

「えっと、とりあえず行こっか…葵」

「うん…」

俺はそう言って、葵の手を引きながら教室を後にした。

「さて、事情を説明してくれないか？」

教室を後にして、しばらく進んだところで葵にそう質問する。

「やっぱり、侑哉に嘘はつけないわね…」

そう言って、葵は携帯の画面を俺へと見せてくる、そこに書かれていたのは…

『今なら相手になってやる。playmaker』…なるほどね」

「今からplaymakerとデュエルをしてくるわ…だから見ていてね、侑哉…私は絶対に負けないから」

葵はそう言って、走り去っていった。

「……悪いな、葵…ただ見ているだけなんて俺にはできないよ」

だって、さつきから嫌な予感がするんだ…今行かないと取り返しのつかないことになる、そう頭の警鐘が鳴り響いて止まらない。

俺は、はやる気持ちを抑えながら葵の向かった所へと走り出した。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「はあ、はあ…どこだ？」

葵の後を追いかけてLINK VRAINSにログインしてきた俺は葵を探してあちこち走り回っていた。

「はあ、はあ、はあ…あれは？」

しばらく探し続けていると、playmakerとブルーエンジェルの姿が目に入った。

幸いにもまだデュエルは始まっていないようで、二人は睨み合っていた。

「やっと見つけた!!ふう、なんか最近ずっと走ってばかりな気がするな…」

「…Phantom!どうしてここに?」

俺の姿を見た葵が驚きの声を上げる。

まあ、そりやそうか…葵は俺がここに来るとは思っていないはずだしな。

「なんとなく嫌な予感がしてね…居ても立ってもいられなくてさ…ごめんな」

「Phantom…」

葵に謝罪の言葉を伝え、playmakerに向き直る。

「playmaker、状況の説明をしてもらって良いか？」

「ああ、わかった」

そうして、playmakerから今の状況について説明してもらった。

今回のデュエルはplaymakerのデュエルディスクに入っているAi（名前はアイらしい）によって仕組まれたことだということと、そして、Ai曰く葵のデッキにハノイの気配を感じるという話を聞き、大体の状況説明は終わった。

「なるほどね…ブルーエンジェルの様子が変だったのはやっぱりハノイの騎士が絡んでいたのか…」

「やっぱり、ということはお前はハノイの騎士が絡んでいるという可能性を考えていたのか？」

「うん…確証はなかったけど、その可能性が高いとは思ってた…まさか、本当にそうだとは思わなかったけど」

そうになると、花恋の言った通りとんでもない科学力を持っているのか、ハノイの騎士は…

「…悪い、playmaker…このデュエルは俺にやらせて欲しい」

「…本気か？ブルーエンジェルのデッキにはハノイのカードがある、何が起きるかわからないぞ」

「ああ、構わない…もし、ブルーエンジェルがハノイに何かされたんだとしたら、俺はあいつを助けない！」

「…わかった、そこまで言うなら止めはしない」

「ありがとう、playmaker…もし俺が負けたら後は頼んだよ…ま、負けるつもりはないけどね」

俺はそう言って、デュエルディスクを操作する。

そして、出てきた画面からカードを数枚選択する、このデュエルディスクは花恋のおかげで現実のカードをLINK VRAINSに持ってくる事ができるようになっている。

つまり、デュエルする直前にデッキ編成が可能になるというわけだ。

本当に花恋ってすごいよな…多分、ああいう人のことを天才って呼ぶんだらうな。

俺はそんなことを思いながら、先ほど選択したカードをデッキへと加える。

「お待たせ、ブルーエンジェル！さあ、俺とデュエルしようぜ！」

「ちよっと待って！私はあなたとデュエルしにきたわけじゃないわ！」

「まあまあ、俺に勝てたらplaymakerとデュエルして良いか

「らさ…それに…」

「それに？」

「それに…正直、ブルーエンジェルとスピードデュエルしたいんだよ！ほら、ブルーエンジェルとは一度もスピードデュエルしたことないしさ…この前だつて何だかんだでできなかつたし…」

「確かに、そうね……わかつた、そのデュエル、受けて立つわ！」

「そうこなくっちゃ！それじゃあさっそく始めよう！」

俺がそう言うのと同時にデータストームが吹き荒れ、俺と葵のボードがどこからともなく飛んできた。

そして、それに飛び乗りバランスを整える。

「さあ、いくよーブルーエンジェル！」

「スピードデュエル!!」

第20話 絶望

「みんな〜！いつちやうよろ〜！」

ブルーエンジェルが恐らく、現実世界でこのデュエルを見ているであろうファン達にそう声を掛ける。

「いよいよか…さて、気合い入れないとな…トリックスターは一瞬でも気を抜けばすぐにやられる。」

「私の先攻！私は手札からフィールド魔法、『トリックスターライトステージ』を発動！さらにこのカードの効果でデッキからトリックスターモンスターを手札に加える！私は、『トリックスターリリーベル』を手札に加える！」

まじか…相変わらずとんでもない引き運だな。

「さらに、トリックスターリリーベルはドロー以外の方法で手札に加わった時特殊召喚できる！おいで！トリックスターリリーベル！」

トリックスターリリーベル攻撃表示（ATK800）

「さらに、私は手札から『トリックスターキャンディナ』を召喚！さらに、キャンディナの効果でデッキからトリックスターカードを手札に加える！」

トリックスターキャンディナ攻撃表示（ATK1800）

手札に加えたのは多分トリックスターリンカーネーションだろうな…というか葵の引き運って本当にすごいな。

「まだまだいくわよ！手札の『トリックスターマンジュシカ』の効果！私のフィールドのトリックスターモンスターを手札に戻し、このカードを特殊召喚できる！私はキャンディナを戻して、マンジュシカを特殊召喚！」

トリックスターマンジュシカ守備表示（DEF1200）

「さらに、私は手札から魔法カード、『トリックスターハルシネーション』を発動！手札のトリックスターキャンディナの効果を無効にし、特殊召喚できる！ただし、攻撃力は半分になる、戻ってきて！キャンディナ！」

トリックスターキャンディナ攻撃表示（ATK1800↓900）

「そして、その後お互いにカードを1枚ドロ―する！」

「くっ…！」

Phantom手札4↓5

ブルーエンジェル手札1↓2

「Phantomならこの後、どうなるかわかってるわよね？」

「ああ、よくわかってるよ…マジユシカの効果で俺の手札にカードが加わる度にその枚数×200のダメージを与え、さらに、ライトステージの効果で追加で200ダメージを与える…だろ？」

「正解！よってPhantomに400ポイントのダメージを与えるわ！」

「くっ…！」

Phantom LP4000↓3600

この地味バーンが効くんだよな…しかもリンカーネイションがあることも考えると、けっこうキツいな。

それに、この状況…

「さあ、役者は出揃ったわ！最初から飛ばしていくわよ！」

「くるか！」

「現れて、夢と希望のサーキット！アローヘッド確認、召喚条件はトリックスターモンスター2体！私は『トリックスターキャンディナ』と『トリックスターリリーベル』をリンクマークにセット！サーキットコンバイン、リンク召喚！出てきて！LINK2、『トリックスター・ホーリーエンジェル』！」

トリックスター・ホーリーエンジェルLINK2(ATK2000)
リンクマーク左下／右下

「さっそく出てきたか…さすがはブルーエンジェルだね！やっぱり、お前とのデュエルは楽しいよ！」

「そ、そう…？ありがとう…」

ブルーエンジェルは少し、照れたような表情をしながらそう言った。

「わ、私はカードを2枚伏せて、ターンエンド！」

ブルーエンジェル LP4000
手札0

場 EXモンスターゾーン トリックスター・ホーリーエンジェル
LINK2 (ATK2000) リンクマーカ―左下／右下
メインモンスターゾーン トリックスターマンジュシカ守備表示
(DEF1200)

伏せ2

Pゾーンなし

フィールド魔法 トリックスターライトステージ

Phantom LP3600

手札5

場なし

伏せなし

Pゾーンなし

「俺のターン、ドロー！」

「この瞬間、マンジュシカの効果で200ダメージよ！」

「させないよ！手札から速攻魔法、『月の書』を発動！このカードの効果でマンジュシカを裏側守備表示にする！」

月の書の効果により、マンジュシカが裏側守備表示になった。

これでマンジュシカの効果は使えないはずだ。

「くっ…さすがはPhantomね…でも、ただではやられないわ！
罠発動！『トリックスターリンカーネーション』！このカードの効果でPhantomの手札を全て除外し、除外した枚数と同じ枚数のカードをドローさせる！」

「ファッ!?ザナドゥー！」

思わず変な叫び声をあげてしまう。

俺のそんな叫びはむなしく消え、容赦なく手札が除外され、新たに手札に5枚のカードが加わる。

嘘だろ、オッドアイズペルソナドラゴンとオッドアイズミラージュ

ドラゴン、そして、ドクロバットジョーカーがあああ!!

いや、わかつてはいたけどね…でも、これはかなりキツいつて…

「その様子だとよほど良いカードを除外されたみたいね…まあ、ある意味狙い通りだけど…Phantomならきつと理想的な初手を引き込んでいる、そう信じてたから」

葵は少し、悪戯っぽい笑みを浮かべながらそう言った。

…さすがは葵だな、俺のことをよくわかってる…だからこそ、ダメージを与えられなくても、リンカーネイションを使ったってことか。

「…確かにその通りだよ、さすがとしか言い様がないね…まあ、でもこういう状況を覆してこそそのエンタメデュエリストつてもんだからね！」

俺は自分を鼓舞するようにそう言葉を紡いだ。

「ふふっ、そうこなくっちゃ！もつと私を楽しませてよね、Phantom！」

「ああ、お楽しみはこれからさ！俺は手札からSR《スピードロイド》バンブーホースを召喚！さらに、このカードが召喚に成功した時、手札からレベル4以下のスピードロイドを特殊召喚できる！来い！『SR三つ目のダイス』！」

SRバンブーホース攻撃表示 (ATK1100)

SR三つ目のダイス守備表示 (DEF1500)

「さあ、いくよ！俺はレベル4のバンブーホースにレベル3の三つ目のダイスをチューニング！神速の翼、光となりて天地を照らせ！シンクロ召喚！現れる、レベル7！『クリアウイング・ファスト・ドラゴン』!!」

クリアウイング・ファスト・ドラゴン攻撃表示 (ATK2500)

「シンクロ召喚!?使えるとは思っていたけど、まさか本当に使ってくるなんて…」

「そういうえば、シンクロ召喚はまだ見せたことがなかったっけ…まあ、そのおかげで驚いてくれたわけだから取って置いた甲斐があるつてもんだね！」

それにしても、こうして見てみるとクリアウイングってキレイなモンスターだな…まあ、それはクリアウイング系のシンクロモンスター全部に言えることかもしれないけど。

「さあ、まだまだいくよ！俺はクリアウイング・ファスト・ドラゴンの効果発動！ターン終了時までEXデッキから特殊召喚された相手モンスター1体の効果を無効にし、攻撃力を0にする！俺はホーリーエンジェルの効果を無効にし、攻撃力を0にする！」

トリックスター・ホーリーエンジェルLINK2（ATK2000
↓0）リンクマーカー左下／右下

「ホーリーエンジェルの攻撃力が…これがPhantomのシンクロモンスター…！」

「俺はカードを1枚伏せて、バトル！クリアウイング・ファスト・ドラゴンでトリックスター・ホーリーエンジェルに攻撃！神風のストライクスマッシュャー!!」

「畏発動！『ハーフアンブレイク』！私はホーリーエンジェルを対象にこのカードの効果を発動！これにより、ホーリーエンジェルはこのターン、戦闘では破壊されず、ダメージも半分になる！」

「やっぱり、そういうカードはあるよな…でもダメージは受けてもらうよ！」

クリアウイングの攻撃がホーリーエンジェルに向かっていき、その攻撃からホーリーエンジェルを守るように泡のバリアが現れ、攻撃を防いだ。

「っ…！」

ブルーエンジェル LP4000↓2750

「俺はこれでターンエンド！この瞬間、ホーリーエンジェルの攻撃力は元に戻る…」

トリックスター・ホーリーエンジェルLINK2（ATK0↓2000）リンクマーカー左下／右下

ブルーエンジェル LP2750

手札0

場 EXモンスターゾーン トリックスター・ホーリーエンジェル
LINK2 (ATK2000)
メインモンスターゾーン セットモンスター(トリックスターマン
ジュシカ)

伏せなし

Pゾーンなし

フィールド魔法 トリックスターライトステージ

Phantom LP3600

手札2

場 EXモンスターゾーン クリアウイング・ファスト・ドラゴン
攻撃表示(ATK2500)

メインモンスターゾーンなし

伏せ1

Pゾーンなし

「私のターン、ドロロー！まずはマンジュシカを反転召喚！」

トリックスターマンジュシカ攻撃表示(ATK1600)

「さらに、魔法カード、『カッポオブエース』を発動！このカードの効
果でコイントスを行い、表なら私がデッキからカードを2枚ドロローで
き、裏なら相手が2枚ドロローできる！」

「ブルーエンジェルもカッポオブエースを使うのか……」

「Phantomがよく使ってるカードだから、私も使ってみようか
なってるって……それに、こういうカードを使いこなしてこそそのエンタ
メデュエリスト、でしょ？」

「確かにそうだとは思っているけど……ブルーエンジェルはエンタメ
デュエリスト、というよりはアイドルデュエリストじゃないか？」

「どっちも似たようなものよ、それにこういうカードを使った方が、観
客のみんな、それに……Phantomが楽しんでくれるかなって……」

葵は少しはさしほかしそうに目を逸らしながら、そう言った。

まさか、そんな理由で使ってくれてたなんてな……正直、嬉しいな。

「そっか、ありがとう……さき、さあコイントスをしよう！」

「そ、そうね！」

俺に促され、葵がコイントスを行う、その結果は表だった。

「結果は表！よって私はデッキからカードを2枚ドロロー！」

ブルーエンジェル手札1↓0↓2

「……っ!!何だこの感じ……」

葵がカードをドロローするのと同時に、嫌な感覚に襲われる。

「何……今の？」

どうやらそれは葵も同じらしく、困惑の表情を浮かべていた。

まさか……ハノイのカードか？確かにそれならこの感覚についても納得できる。

……だとしたら、早いとこ対処しないといけないな。

俺がそんなことを思っていると、葵は気持ちを切り替えるためか首を左右に振り、ターンを進めた。

「……私は手札から魔法カード、『地割れ』を発動！このカードの効果で相手フィールド上の攻撃力が一番低いモンスター1体を破壊する！私はクリアウイング・ファスト・ドラゴンを破壊！」

「なら、その前にクリアウイングの効果を発動するよ！クリアウイングの効果でホーリーエンジェルの効果を無効にし、攻撃力を0にする！」

トリックスター・ホーリーエンジェルLINK2（ATK2000
↓0）リンクマーカー左下／右下

「その効果は相手のターンでも発動できるのね……でも、地割れの効果でクリアウイングは破壊されるわ！」

地割れの効果により、クリアウイングが破壊される。

「くっ……でもこの瞬間、クリアウイングの効果発動！このカードが破壊された時、このカードをPゾーンに置くことができる！」

「そんな!?もしかしてクリアウイング・ファスト・ドラゴンはPモンスターでもあるの?」

葵が驚きの声を上げる、確かにPモンスターであり、シンクロモンスターでもあるクリアウイングは珍しいカードだもんな。

「でも、これでPhantomの場からモンスターは居なくなつたわね！いくわよ！まずはトリックスターライトステージの効果発動！Phantomの場の伏せカード1枚をこのターン使用できなくなる！」

「なら、その発動に対して畏発動！『強欲な瓶』！このカードの効果でデッキからカードを1枚ドロウする！」

Phantom手札2↓3

「この瞬間、マジュシカの効果で200ダメージを与え、さらにライトステージの効果で追加の200ダメージを与える！」

「ぐっ…」

Phantom LP3600↓3200

「まだまだいくわよ！私は墓地の『トリックスターリンカーネイション』の効果を発動！墓地のこのカードを除外することで墓地のトリックスターモンスターを特殊召喚できる！蘇れ、『トリックスターリール』！」

トリックスターリール攻撃表示（ATK800）

「また、厄介なカードが出てきたね…」

さて、どうしたもんかな…

「バトル！まずはトリックスターリールでダイレクトアタック！」

ここは、通すか…

「ぐっ…」

Phantom LP3200↓2400

「さらに、ライトステージの効果で追加で200ダメージよ！」

「本当に、相変わらず鬼畜なデッキだね…」

Phantom LP2400↓2200

「そして、リールが戦闘ダメージを与えた時、墓地のトリックスターモンスターを手札に加えることができる！私は『トリックスターキャンディナ』を手札に加える！」

ブルーエンジェル手札1↓2

「そして、マンジュシカで Phantom にダイレクトアタック！」
「墓地の三つ目のダイスの効果！このカードを除外し、攻撃を一度だけ無効にする！」

俺とマンジュシカの間に三つ目のダイスが出現し、攻撃を遮つてくれた。

ふう、なんとか首の皮一枚繋がったか…やっぱり最初の除外が効いてるな。

「やっぱり、簡単にはいかないわね…私はこれでターンエンドよ」

ブルーエンジェル LP2750

手札2 (内1枚 トリックスターキャンディナ)

場 EXモンスターゾーン トリックスターホーリーエンジェル
LINK2 (ATK0↓2000) リンクマーカー左下/右下

メインモンスターゾーン トリックスターマンジュシカ攻撃表示
(ATK1600)

トリックスターリリーベル攻撃表示 (ATK800)

伏せなし

Pゾーンなし

フィールド魔法 トリックスターライトステージ

Phantom LP2200

手札3

場なし

伏せなし

Pゾーン クリアウイング・ファスト・ドラゴン (スケール4)

「俺のターン…」

さて、ここからが本番だな…葵の手札にハノイのカードがあるとしたら、ここで対処しなくちゃならない。

そのために、ここであのカードを引く！

「ドロー！」

ドロウしたカードを恐る恐る確認する、そこには俺の望んだカードがあつた。

…最高のタイミングだ！

「この瞬間、マジュシカの効果とライトステージの効果で合計400ポイントのダメージを与える！」

「くっ…」

Phantom LP2200↓1800

再び、バウンドダメージを受けて、ライフは2000を切ったか…まあ、望み通りのカードを引けたからよしとしよう。

このカードを使えば、葵を助けられるかもしれないからな。

でも、まずその前に…

「俺は手札から魔法カード、ブラックホールを発動！このカードの効果でフィールド上のモンスターを全て破壊する！」

フィールドに巨大な黒い渦が現れ、フィールド上のモンスターを全て破壊した。

「この土壇場でそんなカードを…！やっぱりPhantomは強いわね！」

「ありがとう…でも本番はこれからだよ！俺はカードを1枚伏せて、手札から魔法カード、『エクステンジ』を発動！」

「エクステンジ…？」

「このカードは、お互いに手札を公開し、相手の手札から好きなカードを1枚、自分の手札に加えるカードなんだ…要するに相手と自分の手札のカードを1枚ずつ入れ替えるカード、かな」

「そんなカードがあつたなんて…」

葵は初めてエクステンジのカードを見たのか、驚いたような表情をしていた。

まあ、確かにあんまり使ってる人は見たことないしな、知らなくてもおかしくないか…

「さて、ブルーエンジェルの手札を見せてもらおうよ」

俺と葵は互いに手札交換をするために、距離を縮める。

そして、葵の手札を確認するとそこには…さつきりりべルの効果

で手札に加えたキャンディナと：

「ダークエンジェル？」

見るからに禍々しいオーラを放つ、1枚のカードがあった。

これがハノイのカードか…！見るからにとんでもないカードだな。だって、見ているだけで嫌な気配が直に伝わってくる。

「…俺はダークエンジェルを手札に加えるよ！さあ、次はブルーエンジェルが選ぶ番だよ、といつても俺の手札は1枚しかないけどね」
俺はそう言っつて、葵に手札を見せる。

「ちよつと待って…このカードはPhantomの…」

「そう、俺のエースモンスター…オッドアイズ・ファントム・ドラゴンだよ」

「何で、このカードを？」

「まあ、ちよつとしたエンタメデュエルの仕込み、みたいなもんだよ…」

そうは言うものの、俺としてもオッドアイズを手放すのは気が引ける。

でも、葵を助けられるかもしれないなら、俺はそれに賭ける…それにもし、俺に何かあったとしても葵に預けてあるなら安心だしな。

それに、一応オッドアイズをこっちに戻す手段は用意してあるしね。

「…私は、オッドアイズ・ファントム・ドラゴンを手札に加えるわ」

俺が何かを狙っているのがわかったのか、葵は俺の手札からオッドアイズを自分の手札に加えた。

さて、これでとりあえずは安心かな？

自分の手札のダークエンジェルを見ながら、少し、安堵する。

これで、少なくとも葵には被害が及ばないはずだ…さて、後は…

「さらに俺はさつき伏せたカードを発動！『闇の誘惑』！このカードの効果でデッキからカードを2枚ドロし、その後手札の闇属性モンスター1体を除外する！」

俺は、そう言っつてデッキからカードを2枚ドロする。

「そして、俺は手札のダークエンジェルをじよが……うつ！」
ダークエンジェルを除外しようとした、その刹那……嫌な感覚が全身を駆け巡る。

何だ、今の……？

「Phantom……？」

「……俺はダークエンジェルを除外する！」

気を取り直し、今度こそダークエンジェルを除外する。

「……だ」

「ぐわあああ!!」

突如として、全身に電撃のような痛みが走る。

な、何、が、起こっ、て……

「Phantom！」

最後に俺を心配する葵の声が聞こえ、俺は意識を手放した。

第21話 受け継がれる力

「ぐわああああ!!」

Phantomとブルーエンジェルのデュエルを観戦していると、Phantomの叫び声が響き渡り、思わず目を疑う。

「一体何が起こった?」

『多分、ハノイのカードを使ったせいだな』

俺の疑問に答えるようにAiがそう答える。

「待て、Phantomはハノイのカードをコストに使用しただけだぞ…それだけで…」

『それだけ強力ってことだろうな、その証拠に今、Phantomのハノイの気配がどんどん強くなってる』

確かに、それは俺も感じていた…だから、Aiの言っていることは本当なんだろう。

だが、今の俺達には何もできない…

「今はこのまま、見ているしかないのか…」

／／／／／／／／／／／／

「Phantom!」

目の前で苦しそうに声を上げる侑哉にそう声を掛ける。

それでも、侑哉から返事は返ってこなかった。

どうして? 何で、こうなっちゃったの?

確か…私のデッキにいつの間にか入っていたあのカードを侑哉がコストとして使ったから、急に侑哉が苦しみだして…

……なら、今、侑哉が苦しんでいるのは…

「私の…せいだ…私のせいで侑哉が…!」

「…じゃない」

「え…?」

「お前のせいじゃない…!」

私の小さな呟きに思わぬところから返事が返ってきた。

「Phantom…? 大丈夫なの?」

「うん…見ての通り、ピンピンしてるよ…ははっ」

そう言つて侑哉は力なく笑つた。

どう見ても大丈夫には見えない…私を心配させないために笑みを浮かべているのかもしれないけど、とても辛そうに見える。

「無理しないで…」

「ははっ…まあ、そうしたいのはやまやまだけど…」

そう呟いて、また辛そうな顔をする。

「…時間切れかもしれない」

「え…？どういうこと？」

侑哉の呟いた言葉に思わず聞き返す。

時間切れ…？一体何が…

「後は、頼んだよ…葵」

侑哉は私にだけ聞こえる声でそう言つて、糸の切れた人形のように動かなくなつてしまった。

「Phantom…？」

「…俺は、カードを1枚伏せて、カードカードを召喚、そしてカードカードをリリースして2枚ドロ―！そして、このまま強制的にエンドフェイズに移行する…さあ、お前のターンだ、ブルーエンジェル」

しばらくして、再び動き始めた侑哉がとつた行動はデュエルの続行だった。

何で…？これ以上続けたら侑哉が壊れちゃうかもしれないのに…それに、いつもの侑哉と様子が違う。

侑哉はあんなに淡々とデュエルしない…いつも楽しそうにデュエルをするはず…

まるで人が変わったみたい…まさか!?

「…誰かに操られてる？」

原因は間違いなくあのカードだ…あのカードのせいで侑哉が…！

もしかして、侑哉の言っていた時間切れって…自我がたもてなくなる、ってこと？

「どうした？いつまで考えごとをしている」

「…っ！私のターン、ドロ―！」

ブルーエンジェル LP2750

手札2↓3(内2枚、トリックスターキャンディナ、オッドアイズ・
フアントム・ドラゴン)

場なし

伏せなし

Pゾーンなし

フィールド魔法 トリックスターライトステージ

Phantom LP1800

手札2

場なし

伏せ1

Pゾーン クリアウイング・ファスト・ドラゴン(スケール4)

とにかく、今は早くこのデュエルを終わらせないと！

待ってて、侑哉…絶対に助けるから！

「私は『トリックスターライトステージ』の効果を発動！Phantomの伏せカードをこのターンの間発動できなくする！」

「なら、その発動に対してリバーズカードを発動させてもらう、永続罫、『ペンデュラムスイッチ』！このカードの効果でPゾーンのモンスターを1体特殊召喚できる！」

「Pゾーンのモンスター…まさか!？」

「ご名答、俺はPゾーンの『クリアウイング・ファスト・ドラゴン』を特殊召喚する！」

クリアウイング・ファスト・ドラゴン攻撃表示(ATK2500)

「そんな…！」

再び現れた、白き竜に思わず驚きの声を溢す。

まずいわね…今の私の手札にクリアウイングを倒せるカードは侑哉から渡されたオッドアイズだけ…

しかも、ペンデュラムスイッチがある限り何度でもクリアウイング

は蘇る。

「くつ、私は手札から『トリックスターキャンディナ』を召喚！そして、キャンディナの効果で…」

「手札の『エフェクトヴェーラー』の効果！このカードを墓地へ送り、キャンディナの効果を無効にする」

「キャンディナの効果まで…」

キャンディナのサーチ効果まで無効にされるなんて…でも、まだチャンスはある。

「なら、私は手札から魔法カード、『強欲で貪欲な壺』を発動するわ！デッキトップから裏側で10枚除外して2枚ドロウする！」

ブルーエンジェル手札2↓1↓3

「…このカードは…」

このカードなら、運が良ければこのターンで決められるかもしれないわね。

「良いカードは引けたのか？」

「そうね…上手くいけばこのターンであなたを倒せるわ！」

「それは、楽しみだな…では、見せてもらおうか」

そう言つて、侑哉は少し笑みを浮かべる。

…もしかして、少しだけど元の侑哉に戻りつつあるのかもしれない。

なら、私のやることは一つ…このまま侑哉を助ける！

「私は手札から魔法カード、『手札抹殺』を発動！お互いに手札を全て墓地に送り、墓地に送った枚数だけデッキからカードをドロウする！」

「ちっ…！」

お互いに手札を墓地に送り、デッキからカードをドロウする。

侑哉は良いカードを墓地に送られたのか、少し残念そうな表情をしている。

問題はこれからね…ここで、狙い通りのカードを引けるかどうか…それに懸かっている。

私は侑哉みたいに、狙い通りのカードを引けるほどの引き運を持つ

ている訳じゃない…まあ、そんなこと言ったら、侑哉が『葵…それ本気で言ってる?』、とか言いそうだけど。

「ふふっ！」

侑哉とのやりとりを想像するだけで、何だか楽しくなってくる。

それと同時に、不思議と心が軽くなる…きつと何とかなる、そんな気がしてくる。

私はそんな風に思いながら、デッキからカードを引いた。

「……これなら！さあ、いくわよ、Phantom！お楽しみはこれからよー！」

「…うっ！くっ…俺は…」

私の言葉に侑哉がわずかに反応を見せる。

やっぱり、元の侑哉に戻りつつあるんだ…なら、後は最後の一押しをするだけ。

「私は手札から魔法カード、『死者蘇生』を発動！このカードの効果で墓地のオッドアイズ・ファントム・ドラゴンを特殊召喚する！」

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン攻撃表示（ATK2500）

二色の眼の竜が現れる、いつもは侑哉と一緒に戦い、どんな時でも必ず侑哉が召喚していた…まさに、侑哉を象徴するモンスター。

「お願い、力を貸して！侑哉を助けるために！」

オッドアイズは私の声に応えるように咆哮を上げた。

「オッドアイズ…！ぐっ、ぐわあああ!!お、俺は…俺、は…」

「Phantom…さらに、私は手札から魔法カード、『受け継がれる力』を発動！このカードの効果で私は『トリックスターキャンディナ』をリリースして、その攻撃力分だけオッドアイズの攻撃力をアップする！」

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン攻撃表示（ATK2500↓
4300）

これで終わらせる！

「バトルよー！オッドアイズ・ファントム・ドラゴンでクリアウイング・ファスト・ドラゴンに攻撃！夢幻のスパイラルフレイム!!」

私の思いを込めた攻撃はクリアウイングを破壊し、侑哉のライフを

0にした。

Phantom LP1800↓0

「Phantom!」

デュエルを終えて、力なく地面に落下していく侑哉を慌てて助け出し、近くの建物に寝かせる。

「侑哉…お願い!起きて!」

そして、今だに、眠ったまま目を覚まさない侑哉に必死に声を掛ける。

でも、どれだけ声を掛けても体を揺らしても反応がなかった。

「ブルーエンジェル!そこをどけ!」

「playmaker!?!」

私が侑哉に声を掛けていると、playmakerがどこからともなく現れた。

『ハノイのプログラムは俺が喰う!』

そんな声がデュエルディスクから聞こえたかと思うと、ディスクから怪物のような姿をした何かか姿を現した。

「これは…?」

一瞬、何が起こったのかわからずに放心していると、その怪物のような姿をしたものはディスクにもどっていった。

「ねえ、Phantomはどうなったの?」

正直、気になることは色々とおあるけど、今は侑哉の安否の方が心配だったから、そう尋ねた。

「…俺にもわからない、ハノイのプログラムは確かにこいつが喰った…それでも目を覚まさないとなると何か別の原因があるのかもしれない」

「そんな…じゃあどうすれば…」

playmakerの言葉に、心が折れそうになる。

…侑哉が目を覚まさない?そんなのって…

「ねえ、侑哉…お願いだから目を覚まして…!」

「侑哉…だど?!」

『おいおい、それって…!』

playmakerが何かを言っているが、まるで耳に入っていない。

そんなことを気にしている余裕なんて今の私にはない。

どうすれば…どうすれば侑哉を助けられるの？

そんなことばかりが頭の中で渦巻いていたから。

『playmaker!これ以上はヤバいぞ!』

「くっ…ログアウトする!」

「あ…そうだ、まずはログアウトしないと…」

playmakerのログアウト宣言を聞いて、ようやく現実へと引き戻される。

まずは、ログアウトして侑哉を病院に連れて行かなきゃ…

「その前に侑哉を安全な場所に連れて行かなきゃ…」

侑哉をここで寝かせたままなのはさすがに危ない…私はそう考えて、歩き始めた。

特別編 初詣に行こう！

「明けましておめでとう!!」

「う、うん…明けましておめでとう、花恋」

朝起きて、下に降りてすぐに花恋の大きな新年の挨拶が響く。

今日は1月1日、今日から新年の始まりだ。

まあ、でも…ここまで大声で挨拶されるとは思ってたな。

俺がそんなふうにいると、花恋が言葉を続けた。

「何か元氣ないわね…嫌な夢でも見た？」

「いや、別にそういうわけじゃないよ…花恋がすごくテンションが高くてびっくりしただけ」

「新年の始まりよ?テンションを上げなくてどうするの!」

「お、おう…」

本当に何なんだ?このテンションの高さは…まあ、ある意味花恋らしいから良いか。

俺はそんなふうにいるながら、朝食の準備を進めた。

／／／／／／／／／／／／／／

「ふう、美味しかった!侑哉は本当に料理が上手ね!ちなみに、おせちは作ってくれた?」

「いくらなんでもおせちを作る暇はなかったから、買ってきたよ」

「そっか、ならしようがないわね…あ、そうだ、侑哉…ちよつと待って」

花恋はそう言って、部屋へと向かっていった。

どうしたんだ?花恋のやつ…

そんなことを思いながら、しばらく待っていると部屋から花恋が出てきた。

「どう…?」

俺にそう聞く、花恋は黒を基調とした晴れ着を身に纏っていた。

その晴れ着は花恋の栗色の長い髪とも合っていて、素直に似合っているなと思った。

「あ、うん…似合ってるよ」

「あれ、もしかして見惚れてた？」

「いや、それは…：うん、見惚れてた、かな？」

「照れちゃって、可愛いわね！侑哉…」

そう言つて、花恋は俺の頭を撫でてきた。

「ちよっ！花恋？」

「もっとうしてあげようか？」

「いや、良いって！」

ピンポーン！

「あ、誰か来たみたいだね…ちよっと出てくるよ」

誰かはわからないけど、良いタイミングで来てくれた。

俺は足早に玄関に向かい、扉を開けるとそこには…

「あ、侑哉…明けましておめでとう！今年もよろしくね！」

青を基調とした晴れ着を身に纏っている葵の姿だった。

その晴れ着は葵によく似合っていて、思わず見惚れてしまう。

「どうかした？侑哉…」

「あ、いや…よく似合つてて可愛いなって思つてさ…」

「そ、そう？ありがとう…」

葵は少し照れくさそうに、目をそらした。

そんな仕草も可愛くて、少しからかいたくなつたけどやめておいた。

だって、葵とこうして会えただけで嬉しかったから。

「ていつー！」

「いたっ…！何すんのさ、花恋！」

「うるさい、新年早タイチャイチャしてんじやないわよ！」

頬を膨らませながら不機嫌そうに花恋はそう言った。

あれ？いつもの花恋なら逆にからかいそうなものなのにどうしたんだ？

「えっと、明けましておめでとうございます…花恋さん」

「明けましておめでとう、葵ちゃん…まさか、葵ちゃんも晴れ着だとは思わなかったわ」

「はい…せっかくだし晴れ着にしてみようかなと思って…それに、侑哉にも見て欲しかったから…」

そう言つて、葵は少し頬を赤く染めていた。

「そっか…えっと、ここはありがとう、で良いのか？」

「お礼を言うことじゃないわよ…でも、ありがとう侑哉…」

「はい、ストップ！イチヤイチャするのはここまでにして初詣に行くわよー！」

「え…？」

唐突な葵の発言に思わずそう聞き返す。

「ほらー早く準備しなさい！侑哉」

「わ、わかったよ…悪いな葵、ちよつと待つててくれ」

「うん…」

俺は葵にそう言つて、準備をしに部屋へと戻った。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「あのさ、二人共…」

「うん…？」

「どうかしたの？」

俺が尋ねると、上から花恋、葵の順番でそう呟いた。

「その…二人して抱きつかれるとうまく歩けないんだけど…」

そう、今の俺は花恋と葵に抱きつかれている。

あの後、準備をし終えて、初詣に行く途中で花恋と葵の二人に抱きつかれ、今に至る。

というのも、歩いていたら急に花恋が抱きついてきて、それに乗じて葵にも抱きつかれて、こうなってるわけなんだけど…

「またまた、そんなこと言つて、本当は嬉しいんでしょ？」

「いや、確かに嬉しくないと言えば嘘になるけど…」

実際、悪い気はしていない…ただ、俺の精神衛生上良くない。

何だろう、すごいデジャヴを感じるんだけど…気のせいかな？

「あれ？侑哉君じゃないですか？」

「うん？あ、美月！明けましておめでとうー！」

「明けましておめでとうございます！侑哉君、それに財前さん…とこ
ろで、それはどういう状況なんですか？」

俺が妙なデジヤヴを感じていると、美月が怪訝な表情を浮かべなが
らそう聞いてくる。

まあ、そんな顔をするのも無理はないか…

「実はさ…」

そう、間を置いて、俺は美月にここに至るまでの経緯を説明した。

「…というわけなんだ」

「…ズルいです…」

「は？」

「私も侑哉君に抱きつきたいです！」

「え？ちよつと待って！どうしてそうなるんだ!？」

いや、本当に何でそうなるんだ？

「そうよ…どうして葉山さんが侑哉に抱きつくの？侑哉は私の恋人な
んだから！」

「私も侑哉のお姉ちゃんだし、抱きついても問題ないわよね」

「いや、花恋、それは違う気が…というか、二人して力入れないで！

色々と当たってるし…痛いよ」

両方から柔らかい感触が襲い、それと同時に鈍い痛みが襲う。

まあ、嫌な痛みじゃないから良いんだけど…俺の理性が持つかが心
配だな。

「そんなの関係ありません！私も侑哉君に抱きつきたい、その気持ち
があれば充分ですよ！」

「うん、とりあえず落ち着こうか…」

何というか、やたらとみんなテンションが高いんだけど…何でなん
だ？

…はあ、今日は色々と疲れそうだな…ははっ…

俺はそんなふうにいるながら、神社に向かって歩き始めた。

／／／／／／／／／／／／／／

「ふう、ようやく着いた…」

そうため息をつきながら、列に並ぶ。

あの後、結局、美月には後ろに抱きつかれたら本格的に歩けなくなりそうだからと説得して、とりあえず近くを

歩くということで納得してくれた。

まあ、葵と花恋は腕に抱きついたままなんだけどな。

しかも…

〈見ろよ、あいつ…あんなに可愛い娘を3人も侍らせてるぜ〉

〈くそっ！リア充爆発しろ！〉

〈あの子達仲良いのね…〉

…なあにこれ？

周りの視線が色々と痛いんだけど…いや、中には生温かい視線を向けている人もいるけどさ。

何だろうこのギャルゲーみたいな展開…いや、気にしたら負けだな。

俺はそう考え、歩き続けた。

「見て！侑哉…色々と屋台が出てるわよ」

「確かにそうだな…葵は何か食べたいものとかある？」

「そうね…リングォ飴とか食べてみたい」

「私はチョコバナナが食べたいです！」

「私はたこ焼きかな？」

「いや、美月と花恋には聞いてないんだけど…まあ、良いか…それじゃあ、お参りすませたら買いに行こうか」

俺がそう言うと、3人共元気よく返事を返してくれた。

それにしても、3人共晴れ着なのに俺だけ普通の服ってすごい違和感があるな…

ちなみに、美月の晴れ着はピンクを基調とした晴れ着で、美月の明るさをそのまま表しているような感じがした。

それに、髪型もいつものショートポニーではなく髪を下ろしている、少し新鮮だ。

「うーん、俺も晴れ着とか着てくるべきだったかな…」

「そう？別に気にしなくても良いと思うけど…」

「葵ちゃんの言う通りよ、侑哉はそのままでも十分カッコいいから！」
「花恋さん、私の言おうとしたことを言わないでください！」

葵と花恋が俺を挟んで言い合いをしている。

いや、本当にどうしよう…

「そろそろ順番ですから二人共侑哉君から離れてください！このままじゃみんなお参りできませんよ！」

俺がこの状況をどうしようかと頭を悩ませていると、美月が助け船を出してくれた。

美月、ナイス！

思わず心の中で美月にサムズアップする。

美月の言ったことが本当だとわかったのか、二人共しぶしぶといった感じで俺から離れた。

「ありがとう」

口の動きだけで、美月にそう伝えようと、それに答えるように、どういたしましたして、と口の動きだけで返してくれた。

そうして、俺達の順番が回ってきてきつそくお参りする。

まあ、何をお願いするかはもう決まってるけどな。

俺は自分のお願いを心に思い浮かべながら、参拝をした。

／／／／／／／／／／／／／／

「さあ、おみくじ引くわよー！」

「大吉が出ると良いんですけど…」

お参りが終わり、花恋と美月はおみくじの前でそんな会話を交わしている。

おみくじか…俺も後で引いてみるかな。

「…侑哉、ちよつと来て」

「葵…？」

俺が後でおみくじを引いてみようかと考えていると、葵に後ろから袖を引っ張られた。

「良いから、早く来て…」

「…わかった」

葵に促されるまま、歩き始める。

そして、そのまま歩き続けていると、ふと葵が立ち止まった。

「葵、どうかしたのか？」

「侑哉…」

そう呼ぶと同時に葵に抱き寄せられ、唇が触れあった。

葵の唇の柔らかい感触が襲い、キスされたとすぐにわかった。

「やっと、二人きりになれた…」

そう言って、葵は照れくさそうに俺を見つめる。

確かに、今日は花恋や美月も居て葵と二人きりになる機会がなかつ

た…だから、葵は…

「何かごめんな、葵…」

「謝らなくても良いわよ…でも、その代わり…」

そう言って、葵は俺の手にそっと手を絡めてくる。

「もう少しだけで良いから、二人きりで居させてくれない？」

葵は頬を赤くしながら上目遣いでそう聞いてきた。

本当にズルいな、葵は…そんなふうに見つめられたら断れるわけがない。

まあ、元々断るつもりなんてないけどな。

「うん、構わないよ…それじゃあしばらく二人で色々回ろっか！」

「うん…！」

そんなふうにご話を交わして、葵と恋人繋ぎをしながら一緒に歩き始めた。

「そういうえば、侑哉は何をお願いしたの？」

「ここで言わなきゃダメか？」

「言いたくないなら無理には聞かないけど…」

「…これからも葵と一緒に居られますように、ってお願いした」

「え…！」

俺の言葉に、葵がそんな声を漏らす…

その表情はどこことなく嬉しそうに見えた。

「葵の方は？」

「私も侑哉と同じよ…これからも侑哉と一緒に居られますようにって

…」

そう言つて、葵は嬉しそうに笑つた。

まさか、葵も俺と同じお願いごとをしてたなんてな…何か嬉しいな。

「二人して、同じ願いごとをしてたなんて不思議な気分だな…」

「ふふっ！確かにそうね…」

「…なあ、葵」

「どうかした？」

「来年もこんなふうに初詣に行こうな」

「うん…！」

葵はそう言つて、笑つた。

やっぱり、葵には笑顔が似合うな…今年もこんなふうに葵の笑顔が見れたら良いな。

俺はそんなことを思いながら歩き続けた。

第22話 侑哉救出作戦？

「……侑哉」

「葵ちゃん、大丈夫？」

花恋さんが心配そうに私にそう尋ねてくる。

私達の今いる場所は病院：あの後、侑哉を安全な場所に連れて行った後、ログアウトして侑哉の様子をすぐに確認した。

すると、やっぱり、侑哉はぴくりとも動かなくて、すぐに病院へと連絡した。

そして、その時に偶然、屋上にやってきた藤木君に手伝ってもらい、今に至る。

まさか、花恋さんと藤木君が知り合いだとはおもっていなかったけど……

でも、よくよく考えたら藤木君は侑哉とも知り合いだったわけだから花恋さんと知り合いだったとしても不思議じゃない。

「葵……！」

私がそんなふうここに来るまでの経緯を思い出していると、声が聞こえてきた。

「兄さん……」

「葵、無事か？」

「何とか……」

「そうか、良かった！」

兄さんの安堵したような声が響く……私の事を心配していたからこそその言葉……でも、今はその言葉に苛立ちを覚えてしまう。

だって、その言葉は侑哉のことを無視しているから……兄さんはSOシテクノロジー社で私と侑哉のデュエルを見ていたはず……なら、私よりもまずは侑哉のことを心配してほしい。

そうじゃないと、花恋さんにも失礼だ……

「……兄さん、悪いけど帰ってくれない？」

「何故、そんなことを言うんだ！私はお前の事を心配して……」

「ごめんなさい……でも、今は兄さんと話す気分になれないの……」

「…わかった、それじゃあ私は先に帰るとしよう」

「ありがとう、兄さん」

「…いいや、私の方こそ配慮が足りなかった…すまなかつたな、葵…」
兄さんはそう言つて、病院から去つて行つた。

少し強く言い過ぎたかな…でも、このまま兄さんと話していたら、もつと酷いことを言つてしまいそうだったしこれで良かったかもしれない。

「…葵ちゃん、良かったの？お兄さんを追い返して…」

「はい…あのまま話し続けたら間違ひなく喧嘩になつてましたから」
「そう…」

花恋さんはそう言つて、俯いていた。

それにしても、喧嘩か…少し前の私からは考えられないわね。

思えば、前の私と兄さんは普通の兄妹とは程遠かつた気がする…
侑哉と出会つていなかったら、今ごろこんな風に普通の兄妹みたいになれていなかったかもしれない。

「…侑哉…」

そう、名前を呼んで実感する…侑哉の存在が私の中でどれほど大きなものだったのか。

「葵ちゃん、もしかして責任を感じてるの？」

「…責任を感じてるか…？そんなの当たり前じゃないですか…」
「……………」

「だって、私のせいだから…私のせいで侑哉が…！」

花恋さんの言葉に感情が爆発する…涙が頬を伝い、流れてゆく。

私が、あのカードの存在に気づいていたら侑哉はあんなことにならずに済んだかもしれない、そう思うと後悔せずにはいられない。

「葵ちゃんのせいじゃないわ…侑哉もそう言つてたんでしょ？」

「確かに、そう言つてました…でも、そんな簡単に割りきることなんてできません…」

涙を拭いながら、そう言う私に花恋さんは言葉を続ける。

「確かにそうかもね…なら、責任を感じたままでも良いわ、ただ…侑哉が目を覚ました時は笑顔で出迎えてあげて」

「笑顔で、ですか…」

「そうそう、侑哉は葵ちゃん笑顔が大好きだからきつと喜ぶわよ?」

「そ、そう、かな…?」

花恋さんの言葉に、少し恥ずかしくなって思わず目をそらす。

「うんうん、やっと暗い表情以外の表情が見れたわね」

「え…?」

「ずっと暗い表情ばかりしてたから…やっと暗い表情以外が見れて良かったわ」

「あ…」

確かに侑哉が意識不明になってからずっと暗い表情だったかもしれない。

花恋さんはそれに気づいて…

「ありがとうございます…」

「良いのよ…あ、ちなみに侑哉が葵ちゃん笑顔を見たがってるだろう、って思ったことは本気よ…まあ、言わなくてもわかってるだろうけど…」

「…っ!そ、それは…」

恐らく花恋さんはお家デートの時、私が侑哉と花恋さんの会話を聞いていたことを言っているんだろう。

あの時、侑哉が言っていたことを思い出して、思わず頬が熱くなる。

「いや、あの時は驚いたわよ…侑哉と葵ちゃんがあんな事を…」

「それ以上は言わないください!思い出したら恥ずかしくなってきましたから!!」

「ごめんごめん…少しからかいすぎたわね…でも少しは元気になったみたいね」

「まあ、確かに少しは気が楽になりましたけど…」

確かに少しは元気になった気がする。

「それなら良かったわ…あ、先生が出てきたわね」

そう言って、花恋さんは集中治療室から出てきた先生へと駆け寄っていった。

「私も行かないと…」

私はそう呟いて、花恋さんの後を追いかけた。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

「原因不明…ですか？」

「はい、身体検査を行ったのですがどこにも異常は見当たりませんでした…」

「なら、どうして侑哉は目を覚まさないんですか!!」

先生の説明を聞いて、思わずそう声を荒げる。

「葵ちゃん、落ち着いて…」

「で、でも…」

「…もう一度、精密検査を行ってみますので状況がわかり次第、ご連絡します」

そう言つて、先生はどこかへ行つてしまった。

「侑哉…」

部屋のガラス越しに眠っている侑哉の姿を見る。

どうして…？何で侑哉が…

そんなことばかりが頭に浮かんでしまう。

本当なら私がああなっているはずだった…でも、侑哉が助けてくれたから、私はここにいる。

…何だ、結局は私のせいじゃない…

侑哉がこんな目に合っているのは…

「葵ちゃん、もしかして自分がああなれば良かったって思ってるの？」

「え…？」

「だとしたら、それは大きな間違いよ…もし、葵ちゃんがあんなふうになつてたら今頃、侑哉の方が今の葵ちゃんみたいになつてたわ」

「それは…!」

確かに、もし侑哉が私の立場だったら私と同じように考えてくれたかもしれない。

自惚れかもしれないけど、侑哉ならそうしてくれる気がする。

「…どうしたら侑哉を助けられるんでしょうか？」

「それは、私の方で考えてみるわ……そして、私の侑哉に手を出したことを後悔させてやるわ……！」

「ちよつと待つてください……最後のは聞き捨てなりません、侑哉は私の恋人です……！」

「そこには反応するのね……葵ちゃんつて意外と独占欲が強い方？」

「そう、かもしれませぬ……こんな時まで嫉妬しちゃうぐらいですから……」

自分で言つて、嫌になつてくる……本当に私つて重い女……

「そう……まあ、とりあえず侑哉を助ける方法がわかつたら連絡するわ！それじゃあまたね！」

花恋さんはそう言つて、病室から出ていった。

私もそろそろ帰ろうかな……

「……やつぱりもう少しだけ……侑哉の側に居たいな……」

私はギリギリまで侑哉の側に居ることにして、近くのソファに腰掛けた。

もしかしたら侑哉が目を覚ますかもしれない、そんなことを思いながら。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「さーて、どうしましょうか……」

葵ちゃんにああは言つたけど、正直、手詰まりなのよね。

そもそも侑哉があんな状態になつている原因すらわからないから対処のしようがないのよね。

考えられる可能性としては……

「やつぱり、電腦ウイルスかしらね……」

侑哉の身体に特に異常がないんだからそれぐらいしか考えられないわよね。

電腦ウイルスは簡単に言えば、アバターに潜んで現実の身体を蝕むウイルスのこと。

まさか、そんなものが現実存在しているとは思つていなかったけど……

「いや、あの人なら可能かもしれないわね……」

ある一人の人物のことが頭に浮かぶ…でも、あの人はもうすでに…
「いや、今はそんなことを考えている場合じゃないわね…侑哉を助ける方法を考えないと」

「パソコンウイルスを除去する方法…一番良い方法はパソコンウイルスを作った人間に除去プログラムを渡してもらおうことだけど…」

「…渡してくれるわけじゃないわね」

「…でも、渡してくれたら苦労しない…」

「…そうなるよ、自分で除去するしかないわね。」

「…そうだ！侑哉に頼まれてたプログラム…あれが使えるかもしれないわね…
いわね…」

「…そう思うよ、すぐに侑哉に頼まれていたプログラムを開く。」

「…まだ、作成途中だけど完成できれば、アバターの中に潜むパソコンウイルスを除去できるかもしれない。」

「…後は、どうやってウイルスを除去するか…それが問題ね」

「…除去プログラムを作るのは、いくらなんでも無理だし…考えろ、考えるのよ、私！」

「…もし、侑哉ならどう考える？」

「…いつも私には思い付かないような発想を見せてくれる侑哉なら…」

「…侑哉なら…きつと発想を逆転させる。」

「…発想を逆転させる…そうさ！…ウイルスを除去できないなら、書き換えちゃえば良いのよ！」

「…そうと決まれば、さっそく始めないと！」

「…私はそのまま思い付いたアイデアを形にしていく…」

「…少し時間が掛かりそうだけど、これなら侑哉を助けられるかもしれない！
ない！」

「…私はそんなふうに思いながら作業を続けた。」

第23話 希望

「……はあ」

誰もいない教室で一人、そうため息をつく。
その教室はいつもの教室じゃない…だって、いつもならこの時間に
来ているはずの侑哉が居ない。

あの後、結局、ギリギリまで侑哉の側に居たけど侑哉が目覚めるこ
とはなかった。

でも、そんな状況でも、もしかしたらと期待してしまう自分が居た。
本当は、侑哉はとづくに目が覚めていて私をからかう為に眠ったふ
りをしていて…学校に行けばいつも通りに、『おはよう、葵！』、なん
て、声を掛けてくれるって…

……そんなこと、あるわけないのに…

私がそんなことを思っている間にも時間は過ぎていく、いつもなら
侑哉と他愛ない会話を交わして、そして、朝のホームルームが始まる
…

そんな当たり前の日常が今の私には存在しない。

「侑哉…あなたの声、聞きたいよ…いつもみたいに学校で一緒に過
ごしたいし、デートだってしたい…」

だから、早く戻って来て…!

私のそんな呟きは誰にも聞こえずに消えていった。

ホームルームの後に授業が始まったけど、まるで頭に入ってこな
い、頭の中は侑哉のことばかりで授業に集中することなんて、まるで
できなかった。

侑哉が居ないだけで、こんなにも私の世界は色褪せてしまう…当た
り前の日常がなくなるのはこんなにも苦しいものなんだって、改めて
思い知った。

…今日はもう帰ろう、それで侑哉の様子を見にいこう。

私は、そう思っただけで先生に早退することを伝えて教室を出た。

途中で葉山さんに呼び止められたけど、今日はもう帰ることを伝え

て、その場を後にした。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「うくん、どうしましょ…この状況…」

授業が終わり、今は放課後、いつもならデュエル部の活動をしているところなんです…

「皆さん、元気がないですね…」

理由は言わずもがな、侑哉君が居ないからです。

いつもなら、侑哉君のデュエルしようぜ！、の一言がきっかけで活動が始まるんですが、今はその侑哉君が居ない…

それに、財前さんも早退しちゃいましたし…デュエル部に活気がないのかもしれないかもしれません。

いつものように、侑哉君と財前さんのイチャイチャを見せつけられて、私がそれにツツコミを入れる、なんて光景も今のデュエル部にはありませんし…

普段はそのイチャイチャに対して、若干イライラすることもありますが、今の状況に比べたら…むしろその方が良い気がしますよ…

財前さんに元気がなかったのは間違いなく侑哉君に何かあったから…Phantomさんとブルーエンジェルのデュエルの時、明らかにPhantomさんの様子がおかしかった。

きっと、財前さんもそれを見たからこそ、あんなに落ち込んでいるんだと思う。

まあ、Phantomさんの正体が侑哉君だったことは私と財前さんぐらいしか気づいていないでしょうけど。

「なあ、葉山…」

「どうしたんですか？藤木君」

「侑哉がいないとこんな静かなものなのか？」

私がそんなふうに考えていると、藤木君にそう声をかけられた。

「そうですね…いつもは侑哉君がきっかけで活動が始まるぐらいですから…」

「そうか…」

そう呟いて、藤木君は押し黙ってしまふ。

「あの、もしかして何か知っているんですか？」

「知っているって、何が？」

「侑哉君のことです…何か知っているなら教えてください！」

「…あいつは」

「あいつは？」

私がそう聞き返すと、藤木君は真剣な表情をしてこう言った。

「あいつは…ちよっと体調を崩しているらしい、でもすぐに治るって言うってたから、そこまで心配しなくても大丈夫だ」

「そ、そうですか…なら、良いんですけど…」

藤木君のその言葉に少しだけ、周りの空気が和らいだ気がする。

今の藤木君の言葉が嘘か本当かはわからなかったけど今は本当だと信じることにした。

…侑哉君はすぐに戻ってくる、そう信じたかったから。

侑哉君、早く元気になってくださいね…

私はそう願いながら、デュエル部の活動を再開した。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「……はぁ」

自分の部屋で何度目かわからないため息を溢す。

結局、家に帰ってきたところで何かが変わるわけでもなく、こうして一人でただボーっとしている。

侑哉の様子を見に行きたいのに、心のどこかでそれを拒否してしまう。

多分、見に行っても何も変わっていないのが怖いんだ…侑哉がもしかしたら二度と目を覚まさないかもしれない、そう思うと怖くてたまらない。

「侑哉…あ、そういうえば…」

あるカードのことを思い出し、デュエルディスクの中のカードを見る。

そのカードはオッドアイズ・ファントム・ドラゴン、侑哉のエースモンスター…

「…結局、返せてなかったわね…このカード」

本当はすぐに返すべきだったけど、侑哉を助けることに夢中で、返す暇がなかった。

「侑哉の目が覚めたら、ちゃんと返そう…目が、覚めたら…」

そこまで言って、また心が沈む…

もし、侑哉が目覚めなかったら…？二度と話せなくなってしまうたら…？

もしそうだったら、私は…

「…っ！電話？」

ふと、電話の着信音が響き、慌てて電話の相手を確認する。

「花恋、さん…？」

その着信者の名前を見て、すぐに電話に出る。

花恋さんが電話を掛けてきたってことは…

「もしもし！花恋さん、侑哉を助ける方法がわかったんですか！」

『ちよ、ちよつと落ち着いて、葵ちゃん…ちゃんと説明するから…』

「あ、すみません…花恋さん…」

『良いわよ、気にしないで…それで、電話した理由だけど…葵ちゃんの言う通り侑哉を助ける方法が見つかったわ』

「本当ですか!？」

『本当よ、それで今からこっちに來れる？できれば家で説明したいんだけど…』

「はい！すぐに行きますー！」

『そ、そう…わかったわ、それじゃあ待つてるから』

花恋さんは少し困惑したような声でそう言って、電話を切った。

花恋さんとの通話を終えて、すぐに準備を始める。

さつきまで、悲觀的になっていたのが嘘みたいに活力が湧いてくる。

侑哉を助けられる、そう思うだけで体が軽くなってなんでも出来るような気がしてくる。

そして、そんなことを思っていると、いつの間にか侑哉の家に着い

ていた。

「花恋さん！侑哉を助ける方法を教えてください！」

「葵ちゃん、嬉しかったのはわかるけど、せめてインターホンぐらいは押して欲しかったわ…」

私が勢いよく家の扉を開くと、目の前に呆れたような表情をしている花恋さんの姿があった。

「まあ、なんとなくこうなりそうだったから鍵を掛けてなかったんだけど…」

「…すみません、つい…」

「良いわよ、それじゃあ着いてきて」

私は花恋さんに促されるまま、着いていった。

「それで、花恋さん…侑哉を助ける方法って？」

「まあ、とりあえずそこに座って、ちゃんと説明するから」

「はい…」

花恋さんは私に近くのソファに座るように促し、説明を始めた。

「侑哉を助ける方法としては、まずLINK VRAINSに居るアバターの内部に侵入、そして、アバターの内部から電腦ウイルスを見つけ次第それを除去する、という方法よ」

「電腦ウイルス…？何ですか、それ…」

「簡単に言うと、アバターの内部に潜んで現実の体を蝕むウイルスのことよ…侑哉の体に異常がなかったのもそのせい」

「アバターの方にウイルスがあったから、現実の侑哉には何の異常もなかった…そういう事ですか？」

私がそう言うと、花恋さんは肯定するように頷いた。

でも、アバターの内部にウイルスがあるならどうやってウイルスを除去するの？

「アバターに侵入するプログラムなら、もう完成しているから、特に問題はないわ…」

「え…？」

私の疑問に答えるように花恋さんがそう言い、思わず間抜けな返事を返してしまう。

「まあ、元々侑哉に頼まれていたプログラムを形にただけだから、そこまで時間は掛からなかったんだけどね…」

「ちよつと待つてください、侑哉が頼んだんですか?」

「そうよ、葵ちゃんが playmaker にデユエルを挑んだ時があつたでしょ?」

「は、はい…ありましたけど…」

「…その後の葵ちゃんの様子がおかしかったから、誰かが葵ちゃんに何かしたんじゃないかって、侑哉は考えたみたい…だから、それを確かめるために…」

「花恋さんにそのプログラムを作るように頼んだ…」

「そういうこと…」

知らなかった、侑哉がそんなことを考えていてくれてたなんて…

未だにあの時のことは思い出せないけど、今はそんなことより侑哉が私の為に行動してくれていたことが嬉しかった。

「まさか、そのプログラムを侑哉を助ける為に使うことになるとは思っていなかったけど…」

花恋さんは少し悲しげな表情をしながら、そう言った。

「花恋さん…」

「…さて、続きを話しましょうか」

「はい、お願いします!」

「…次にウイルスを除去する方法だけど、私達は電腦ウイルスの除去プログラムなんてものは持っていない、だから、正攻法で除去するのは難しいわ」

「それじゃあどうするんですか?」

「…ウイルスを書き換えるのよ、いわゆるリプログラミングね」

「リプログラミング…?」

聞きなれない単語に首を傾げる。

「詳しい説明は省くけど、要するにウイルスを別のもの書き換えて、除去するのよ」

「…えっと、話しについていけないんですが…」

「そうね…ゲームのセーブデータをイメージしてもらえば良いかもしれないわね」

「ゲームのセーブデータですか…」

「元々あったセーブデータにセーブするとデータが上書きされるでしょ？それと同じように電腦ウイルスに別のものを上書きして、電腦ウイルスを除去する、要はそんな感じね」

「なるほど、なんとなくわかりました…」

本質的には少し違うのかもしれないけど、花恋さんの説明のおかげでなんとなく理解することができた。

「まあ、とにかくそうすることで侑哉の電腦ウイルスを除去するのよ…ただ、少し問題があるの」

「問題？」

「このプログラムは電腦ウイルスを、デュエルウイルスに書き換えるものなの…まあ名前から察してくれてるかもしれないけど、デュエルに勝てば侑哉のウイルスは除去できるけど、負ければ逆に自分がウイルスに感染してしまうっていうウイルスね」

「つまり、リスクが高いってことですか？」

「ごめんね、本当は無害なものに書き換えるようにしたかったんだけど、時間がなかったの…」

花恋さんは申し訳なさそうにそう言った。

でも、私からすれば十分すぎるくらいだ…だって

「…デュエルに勝てば良いんですよ？それなら私でも何とかかなります」

「…葵ちゃんなら、そう言ってくれると思ってたわ…ちなみに一応言っておくけど、私の作ったプログラムはろくに検証が出来ていない…本当に上手くいくとは限らない…それでもやる？」

花恋さんが私の覚悟を試すようにそう聞いてくる。

———そんなのとっくに決まってる。

「やります…侑哉はいつも私を助けてくれた…だから、今度は私が侑哉を助けてみせる！」

「…わかった、そこまで言うなら止めないわ…：…葵ちゃん、侑哉のこと頼んだわよ！」

「任せてください！侑哉は絶対に私が助けます！」

「ありがとう…：それじゃあさっそく葵ちゃんのデュエルディスクにプログラムを転送するわ」

そうやって、花恋さんは私のデュエルディスクをパソコンへと繋ぎ、作業を開始した。

待っててね、侑哉…：すぐに助けに行くから！

私はそう決意しながら、花恋さんの作業が終わるのを待った。

第24話 君臨する霸王竜

「遊作、どうだった？」

「財前葵は早退していた…一応デュエル部にも顔を出したが、有益な情報は得られなかった」

「そうか…」

デュエル部の活動を終えて、戻ってきた俺は草薙さんにそう報告した。

「草薙さんの方は？」

「神薙の運ばれた病院にハッキングをして、カルテを見つけた」

『それって、犯罪じゃん！』

「ハッキングは全て犯罪だ」

Aiの問いかけにまったく悪びれた様子を見せずに、草薙さんはそう答えた。

俺としても、何を今さら言ってるんだという感じだったため、気にせず草薙さんの見つけたカルテに目を通した。

「このカルテを見た限りだと侑哉の身体には何の異常も見当たらないな」

「そうなんだ、身体に異常がないのに神薙は目を覚まさない…これはどういうことだろうな？」

『もしかして、電脳ウイルスかも…』

俺達が侑哉が目を覚まさない原因に頭を悩ませているとAiがそんなことを呟いた。

「電脳ウイルス…？」

『アバターに潜んで現実の体を蝕むウイルスのことだ…まあ、そんなとんでもないものが作られてると思っただけだな…』

「そんなものが…」

草薙さんが少し驚いたように声を上げる。

「電脳ウイルスを除去する方法はあるのか？」

『多分、このウイルスを作ったのはハノイの騎士だ…だから、除去プログラムもハノイの騎士しか持ってないだろうぜ』

「つまり、ハノイの騎士から除去プログラムを奪いとるしかないということか…」

「だが、どうする？遊作…仮にハノイの騎士が除去プログラムを持っているにしても、手掛かりがないぞ」

草薙さんの言う通りだ、ハノイの騎士が除去プログラムを持っていることがわかったところで、それでどうなる？

手掛かりがない以上、それを見つけたことは難しい。

「誰か、電腦ウイルスについて知っている人物が居れば…」

俺がそう呟くと同時にLINK VRAINSの中継映像が流れた。

『Playmaker、どこかでこの映像を見ているんでしょ？』

「ブルーエンジェル…！」

その映像に映った人物を見て、思わずそう声を上げる。

『Phantomについて聞きたいことがあるの…今回はちゃんと来てもらうわよ！理由はわかるわよね？』

「……………」

恐らく、ブルーエンジェルが俺に聞きたいことはPhantomの症状についてだろう…あいつがあんな状態になったんだ、ブルーエンジェルが俺にそのことについて聞きたいと思うのも当然だ。

「おい、まさか遊作…！」

『ブルーエンジェルの所に行くつもりか？…罨かもしれないぜ』

「例え罨だとしても、俺は行く…一つ、あいつがあんな状態になったのは俺にも責任がある…だから、俺にはあいつを救う義務がある」

「二つ、財前葵は電腦ウイルスについて何か掴んでいる可能性がある…もしかしたら、電腦ウイルスを除去する方法がわかるかもしれない」

「そして、三つ目…あいつは俺の仲間だ…だからこそ、絶対に助ける」

「遊作、お前…今」

「…それじゃあ行ってくる」

「ああ、行ってこい！遊作」

草薙さんの言葉を聞き、デュエルディスクを持っていきLINK

VRAINSにログインする為の準備を整える。

「デツキ、セット！into the VRAINS!!」

その言葉と共に、俺はLINK VRAINSにログインした。

「まさか、遊作の口から仲間なんて言葉が出るなんてな…これも神薙の影響か…まあ、とにかく一歩前進、だな…」

／／／／／／／／／／／／／／／／

「来たわね、playmaker…」

playmakerの姿を見つけ、そう呟く。

花恋さんの作業が終わった後、すぐにLINK VRAINSにログインしてplaymakerを呼び寄せた。

どうしても確認したいことがあったから。

「Phantomについて聞きたいことは何だ？」

「その話しをする前に場所を移すわ…着いてきて」

「…ああ」

そうして、私はplaymakerを侑哉のいる所まで案内した。

「Phantom…!」

playmakerが寝ている侑哉の姿を見て、そう声を上げる。

「…それで、playmaker…あなたに聞きたいんだけど」

「…何だ？」

「あなたが私に電腦ウイルスを仕込んだの？」

私がplaymakerを呼び出した理由、それはこのことを確かめるため。

これで、もしplaymakerが私に電腦ウイルスを仕込んだのだとすれば、私は許せそうにない…

「…違う、お前に電腦ウイルスを仕込んだのはハノイの騎士だ…Phantomもそう考えていた、だからこそお前を助ける為にあいつは戦った」

「Phantomが……でも、あなたの言っていることが本当だとは限らないわ!」

「確かに証明する方法はない……だが、信用してもらおうしかない……」
そう言うplaymakerは真剣な表情をしていた。

その表情は嘘をついているようには見えない……それに何より、さつき侑哉の姿を見た時にplaymakerは心の底から侑哉を心配しているように見えた。

「……本当にあなたじゃないのね?」

「ああ……」

「……わかった、一応信用しておくわ」

結局、私はplaymakerを信じることにした。

「playmakerじゃないとすると、やっぱりハノイの騎士が……?」

「その通りだ、お前に電腦ウイルスを仕込んだのは我々だ」

「誰!」

後ろから声が響き、慌てて振り返る……そこには白の装束を身に纏っている仮面の男の姿があった。

「お前は……リボルバー!」

「リボルバー……!?ハノイの騎士のリーダーの?」

リボルバー……、確か前に侑哉が戦った——

「何故、リボルバーがここに……」

「お前からイグニスを回収するために決まっている……さあ、イグニスを渡せ!」

「……あなたが私に電腦ウイルスを仕込んだ、張本人ということ?」

「……ん?フツ、もしそうだと云ったら?」

リボルバーは少しも悪びれた様子もなくそう答えた。

「……ここであなたを倒す!Phantomの為にも!」

「……残念だが、貴様に用はない、用があるのはplaymakerだけだ……まあ、もしPhantomにデュエルを申し込まれたら、受けて

たつつもりだったがな」

しかし…その後には付け加えてリボルバーは言葉が続ける。

「まさか、手札の交換などという方法で電腦ウイルスを引き離すとはな…ククツ、これだからこの男は面白い…そういう男だからこそ、Phantomとはもう一度デュエルをしたかったのだが…」

実に残念だ…リボルバーは最後にそう呟いた。

「…さて、どうする？playmaker、デュエルを受けるか？」

「当然だ！」

「そうこなくてはな…もし、お前が勝てばこの除去プログラムをやろう…ただし、私が勝てばイグニスを渡してもらおう！」

「除去プログラム…それがあればPhantomを助けられるということか…良いだろう、このデュエル受けて立つ！」

「どうやら、playmakerとリボルバーがデュエルをすることになったみたいね。」

「なら、私は私の出来ることをしないと…！」

「…playmaker、ここはあなたに任せるわ」

「ああ、任せろ…Phantomを助ける為にも必ず勝つ」

「私の方でもPhantomを助けられるか、試してみるわ…」

「何か方法があるのか？」

「一応ね…」

「そうか…なら、そっちは任せる」

「そうやってplaymakerはリボルバーに向かって歩を進める。」

そして、そのまま決戦の舞台へと向かっていった。

「私も行かないと…」

侑哉の側に駆け寄り、すぐにプログラムを起動させる。

「これで侑哉を助けに行けるはず！」

侑哉…待っててね、今助けに行くから！

私はそう決意し、侑哉のアバターへと入って行った。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ここが侑哉のAvatarの中…」

気がつく、目の前には広い電子空間が広がっていて、ここが侑哉のAvatarの中だとなんとなくわかった。

『葵ちゃん、どうやら成功したみたいね』

「花恋さん？通信できるようになったんですか？」

『ええ、それじゃあ葵ちゃん、今居るところから真っ直ぐ進んで……その場所にウイルスが居るわ』

「はい、わかりました」

花恋さんに案内してもらい、真っ直ぐ進んでいく。

『葵ちゃん、一つ忠告しておくわ…』

「忠告ですか？」

『多分、ウイルスが使ってくるデツキは侑哉が使用しているデツキになると思う…つまり、侑哉と戦うことに等しいわ』

「侑哉のデツキを…でも、侑哉本人が使っているわけじゃありませんし、私でも何とかなると思えますよ」

実際、侑哉のデツキは侑哉にしか使いこなせないと思う…仮に侑哉のデツキを使われたとしても私は侑哉のデツキを知っている、だから簡単には負けない。

『…実はね、侑哉があまり使いたがらないデツキがいくつかあったの…侑哉曰く、強いデツキではあるけど極力使いたくない、そんなデツキらしいわ』

「それってどういう——」

どういうデツキ何ですか？、そう聞こうとした瞬間、目の前にもかにもウイルスらしきものが入った。

「これが、電腦ウイルス…！」

『そのようね…さっそくりプログラミングして！』

「はい—」

花恋さんに促され、カード状のプログラムを手取る。

そして、そのプログラムを目の前のウイルスに投げ入れる。

すると、ウイルスはみるみる形を変えて人の形に変化し、左腕には

デュエルディスクが装着されていた。

「どうやら、うまくいったようね……後はデュエルに勝つだけ！いくわよー！」

「デュエル!!」

ウイルス LP4000

VS

ブルーエンジェル LP4000

「ククツ、さあ始めようか！最凶のエンターテイメントを！」

「か、花恋さん…ウイルスってこんなふうに喋るものなの？」

『…多分だけど使用しているデッキの影響を受けているんだと思うわ……と、なると相手の使っているデッキは……葵ちゃん、気をつけて！』

「わかりました……いくわよ！私のターン！私は手札から『トリックスターキャンディナ』を召喚！そして、キャンディナの効果で……」

「手札のエフェクトヴェーラーの効果発動！このカードを墓地に送り、キャンディナの効果をターン終了まで無効にする！」

「そんな……！」

この前もエフェクトヴェーラーによってキャンディナの効果を止められた……そうになると、相手の使っているデッキは侑哉のいつものデッキ？

いや、そうとは限らないわね……まずは、様子を見ましようか。

「私は手札からフィールド魔法、『トリックスターライトステージ』を発動！このカードの効果でデッキから『トリックスターマンジュシカ』を手札に加える！」

「さらに、手札の2体のマンジュシカの効果発動！キャンディナを手札に戻して、2体のマンジュシカを特殊召喚！」

トリックスターマンジュシカ守備表示 (DEF1200) ×2

「私は、カードを2枚伏せてターンエンド！さあ、あなたのターンよ！」

ウイルス LP4000

手札4

場なし

伏せなし

Pゾーンなし

ブルーエンジェル LP4000

手札1（トリックスターキャンディナ）

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン トリックスターマンジュシカ守備表示

（1200）×2

伏せ2

Pゾーンなし

フィールド魔法 トリックスターライトステージ

「私のターン、ドロロー！」

「この瞬間、2体のマンジュシカの効果発動！あなたに合計400ダメージ！」

ウイルス LP4000↓3600

「さらに、ライトステージの効果で追加の400ダメージ！」

ウイルス LP3600↓3200

「この程度のダメージなど、取るに足らん！」

「まだよ！罨発動！『トリックスターリンカーネイション』！このカードの効果で相手の手札を全て除外し、除外したカードと同じ枚数のカードをドロローさせる！」

「ほう…」

リンカーネイションの効果により、相手の手札が除外され、新たにカードが手札に加わる。

これで、2体のマンジュシカの効果で大ダメージを与えられるはず。

「そして、マンジュシカの効果！手札に加わったカードの数×200のダメージを…」

「手札のハネワタの効果を発動！このカードを墓地に送りこのターン、私の受ける効果ダメージを0にする！」

また、防がれた…このウイルス強い！

「これで、思う存分展開できる…私は手札から『EMドクロバットジョーカー』を召喚！このカードの効果によりデッキからこのカード以外のEM、魔術師Pモンスター、オッドアイズモンスターのいずれかを手札に加える！私は『オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン』を手札に加える！」

「オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン…？」

聞き覚えのない名前前のカードに思わずそう呟く。

やっぱり、いつもの侑哉のデッキじゃない…じゃあ今相手が使っているのは…

「花恋さん…さっき言ってたデッキってどんなデッキなんですか？」

『私も詳しくは知らないけど、霸王竜ってカードが切り札らしいの…多分、相手もその霸王竜の召喚を狙ってると思う…』

「霸王竜…」

一体どんなモンスターなの…

「さらに我は手札から魔法カード、『強欲で貪欲な壺』デッキトップから裏側で10枚除外し、2枚ドロー！」

ウイルス手札4↓3↓5

「そして、我はスケール3の『相克の魔術師』とスケール8の『相生の魔術師』でPスケールをセッティング！揺れる！魂のペンデュラム！虚空に描け、漆黒のアーケ！」

ペンデュラム召喚!!現れる！我が僕のモンスター達よ！手札から『EMセカンドンキー』、そして『オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン』!!」

EMセカンドンキー攻撃表示(ATK1000)

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン攻撃表示（ATK2500）
現れた二色の眼の竜は侑哉のエースモンスターであるオッドアイズ・ファントム・ドラゴンによく似ていた。

「セカンドンキーの効果により、デッキからEMモンスターを手札に加える！我は『EMレインゴート』を手札に加える…そして！セカンドンキーとドロバットジョーカーでオーバーレイ！漆黒の闇より！愚鈍なる力に抗う反逆の牙！今降臨せよ！エクシーズ召喚！！現れる、ランク4！『ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン』！！」

ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン攻撃表示（ATK2500）

「ダークリベリオン…！」

「まだ驚くのは早いぞ…見せてやろう！霸王竜の力を！『相克の魔術師』のP効果！ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンはこのターン、ランクと同じレベルを持つモンスターとしてエクシーズ召喚の素材にできる！」

「エクシーズモンスターを素材にエクシーズ召喚…!?!」

そんなカードが…!?!エクシーズモンスターに重ねてエクシーズ召喚するカードは知っているけど、エクシーズモンスターにレベルを与えるカードなんて聞いたことがない。

「その通りだ…さらに、『相生の魔術師』のP効果！ダークリベリオンのランクを他のモンスターのレベルと同じにする！我は『オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン』のレベル7と同じにする！」

ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンランク4→7

「来る…！」

『葵ちゃん、気をつけて！』

「我は、『ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン』と『オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン』でオーバーレイ！二色の眼の竜よ、深き闇より甦り、怒りの炎で地上の全てを焼き払え!!エクシーズ召喚!!現れる、ランク7！災い呼ぶ烈火の竜！『霸王烈竜オッドアイズ・レイジング・ドラゴン』!!」

霸王烈竜オッドアイズ・レイジング・ドラゴン攻撃表示（ATK3

000)

現れたのは二色の眼を持つ赤き竜、その姿は怒りや憎しみを体現しているようだった。

「これが、霸王竜……！」

「さあ、いくぞ！オッドアイズ・レイジング・ドラゴンの効果発動！オーバーレイユニットをひとつ使い、相手フィールド上の全てのカードを破壊する!!さらに、破壊したカードの数×200ポイント、攻撃力をアップする！」

「全て!?!なら、その前に罠発動!『ダメージダイエット』!このカードの効果でこのターン受けるダメージを半分にする!」

「そうこなくてはな…だが、お前の場の他のカードは全て破壊される!破壊するカードの合計は3枚、よってオッドアイズ・レイジング・ドラゴンの攻撃力は600ポイントアップする!」

霸王烈竜オッドアイズ・レイジング・ドラゴン攻撃表示 (ATK3000↓3600)

「くっ…!相手の場のカードを全て破壊した上に攻撃力が上昇する効果まで…」

これは、ダメージダイエットがなければかなりの大ダメージを受けていたかも知れないわね。

「ククッ!まさか、オッドアイズ・レイジング・ドラゴンの効果がこれだけだと思っているのか?」

「どういう意味?」

「ならば教えてやろう、オッドアイズ・レイジング・ドラゴンは1ターンに2回攻撃できる…」

「2回攻撃…!?!」

1ターンに2回攻撃できるということは…もし、ダメージダイエットがなければ、今ごろ私は…

「では、バトルといこう!オッドアイズ・レイジング・ドラゴンでダイレクトアタック!!憤激のデストラクションバースト!!」

オッドアイズ・レイジング・ドラゴンの攻撃が私へと向かってくる、そしてそのまま私へ攻撃が直撃した。

「あああああつ!!」

ブルーエンジェル LP4000↓400

「…がつ!くつ…うう…」

攻撃が直撃し、そのまま吹き飛ばされ、地面に叩きつけられる。

『葵ちゃん、大丈夫?』

「はあ…はあ…大丈夫、です…」

痛む体を起こし、花恋さんにそう伝える。

「ほう、まだ立つ気力が残っていたか…」

「当然、よ…まだ私は負けてない…侑哉を、絶対に助け…」

目の前の景色が歪んでいく、そして、体に鈍い痛みが走る。

倒れた、そう理解するのに時間はかからなかった。

侑哉を、助けないと…こんなふうに、倒れてる場合じゃ…

「…ゆ……う……や」

そうして、私は意識を手放した。

第25話 VS 霸王烈竜

「……い……」

声が聞こえる。

「……お……い」

その声は変わらず私に言葉を掛けてくる。

一体、誰が…？

「葵！目を覚ませ！」

「…っ！」

今度のはつきりとその声が聞こえ、慌てて起き上がる。

「やっど、目が覚めたか…良かった…」

「…え？侑哉…？」

起き上がった私の目に入ったのは、今まさに私が助けようとしていた人物、侑哉だった。

正確にはアバター姿の侑哉だけど、そんなことはどうでも良かった。

「…私は夢でも見てるの？」

「夢なんかじゃないと思うよ…多分だけどね」

「でも、侑哉は！」

？
 電脳ウィルスのせいで目を覚ましていないはず…それがどうして？

「俺もよくわかんないんだよね…葵とのデュエルが終わって真っ暗な空間に居たと思ったらいつの間にかここに居て、倒れている葵を見つけたんだ」

侑哉は自分でも何が起きたかわからないといった様子でそう言った。

その顔も仕草も声も、私はずっと求めていたもので…会いたくて仕方がなかった侑哉そのものだった。

「もしかして、偽物とか思われてるのか…まあ、今の状況なら仕方ない——」

「侑哉!!」

「…へっ!? あ、葵…? いきなりどうしたんだ?」

侑哉の腕を引つ張り、思いつきり抱きしめる。

侑哉は少し驚いたような声を上げながら、戸惑いながらも私のことを優しく抱きしめてくれた。

「侑哉…良かった、生きててくれた…」

「まあ、まだ完全に復活したわけじゃないけどね…でも、今、この瞬間ぐらいは葵との時間を楽しんでも良いよな…」

「侑哉…」

そう呟き、侑哉を抱き寄せる…そして、そのままキスを交わす。

何だかこんなことをするのは随分と久しぶりのような気がする…
侑哉が意識を失ってからそんなに経っていないのに。

「何だか不思議な感じ…」

「ああ、それは何となくわかるかも」

「ねえ、もう少しこのままでも良い?」

「もちろん…構わないよ」

「ありがとう、侑哉…」

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ふう…」

「侑哉、大丈夫?」

「あ、ああ…大丈夫だよ、ちょっと疲れたけど…」

「ごめん、侑哉に会えて舞い上がっちゃって…」

侑哉は少し疲れたような声で大丈夫だと言って笑った。

ちよつと舞い上がりすぎたわね…気をつけないと。

「そういえば、葵はどうやってここに?」

「それは、侑哉が花恋さんに頼んでたプログラムを使って…そうよ
! 私、まだデュエルの途中で…」

私はオツドアイズレイジングドラゴンの攻撃を受けて…それで…
!

「えっと…葵、状況を説明してくれないか?もしかしたら葵の助けに

なるかもしれないし」

「うん…実は…」

侑哉に促され、ここに来るまでの経緯を説明した。

「…なるほどね、まさか葵を助ける為のプログラムが、俺を助ける為に使われるなんてな…」

「花恋さんも同じ事を言ってたわ…：…そういえば、侑哉はあのデツキをあまり使いたがらないって聞いたけど、どうして？」

「うーん、あのデツキは確かに強いんだけど、俺のやりたいデュエルとは少し違うっていうか…：まあ、本気で叩き潰したい相手には使うかもしれないけど…」

侑哉は困ったようにそう言った。

なんとなく侑哉の言っていることはわかる気がする…：あのデツキはエンタメと言うよりは蹂躪に近いデツキだと思うし…

確かに侑哉のやりたいデュエルとはほど遠いかもしれない。

「そういえば、葵…その髪はどうしたんだ？」

「え…？」

侑哉にそう聞かれ、自分の髪を見てみると、いつものブルーエンジェルの髪型ではなく、髪を下ろしている状態になっていた。

あの攻撃を受けた時にほどけたのかな？

「変、かな…？」

「いや、そんなことないさ…：こんなふう髪を下ろしている葵も新鮮で可愛いよー！」

「そ、そう…？あ、ありがとう…」

照れくさくなって、思わず目を逸らす。

本当に侑哉は…：こういうことをさらっと言うんだから。

「…侑哉はこっちの髪型の方が好きだったりする？」

「うーん、そう言われると返答に困るんだけど…：今の髪型もいつもの髪型も好きだからさ…」

侑哉は少し照れくさそうに、そう呟いた。

「ふふっ、ありがとう…侑哉」

「俺は思った事を言っただけだよ…：そ、そういえば葵はデュエル中だったんだよな…戻らなくても大丈夫なのか？」

「…そうね、戻らないと…でも、もう少し侑哉と一緒に居たい…」

だって、やつと侑哉とこうして話すことができたから…侑哉と一緒に居ることが出来るから。

「そっか…なあ、葵…」

「どうかした？」

「お前は何を怖がっているんだ？」

「…っ！私は何も怖がってなんか…」

「強がらなくても良いよ…：それとも俺の気のせいかな？まあ、それなら良いんだけど…」

「…：…」

「葵？」

そつと、侑哉に私の体を預ける。

侑哉の体から体温が伝わる、それは安心する温かさで、とても心が落ち着いた。

「…侑哉の言う通り、私、怖いよ…もし、デュエルに負けてしまったら侑哉を助けられなくなる…：そうなたら二度と侑哉とこんなふうに話したりできなくなるかもしれない…：そう思うと怖くて堪らない…」

私が負けても playmaker が勝てば侑哉を助けることができるかもしれない…でも、playmaker が絶対に勝てる保障なんてない。

「そっか…でも、大丈夫だよ！葵なら絶対に勝てるから…」

「どうして、そう言い切れるの？」

私がそう尋ねると、侑哉は笑みを浮かべてこう言った。

「何度もデュエルしてきたからな…：葵の実力は俺が一番よくわかってるつもりだよ…：それに…」

「それに？」

「きつと、俺のカードが葵に力を貸してくれる…：だから、大丈夫だよ！」

侑哉はそう言つて、私に真つ直ぐな目を向けてくる。

はつきりとした根拠なんて侑哉にはない…でも、何故か不思議と安心した。

ああ、そうか…私、侑哉にこう言ってもらいたかったんだ…はつきりとした根拠なんかなくても、侑哉に私なら勝てるつて言つて欲しかったんだ。

「…ありがとう、侑哉…おかげで元気になった!」

「そっか、それなら良かった…」

「待つてね、侑哉…私は絶対に勝つてみせるから!」

「ああ、待つてるよ…ああ、そうだ!葵」

「どうかした?ゆう——んっ!」

侑哉の方を振り返ると、唇と唇が触れあつた。

「不意打ちはズルいわよ…侑哉」

「葵にだけは言われたくないな…」

そう言つて、侑哉は少し照れくさそうに笑つた。

侑哉とこんなふうにあ話をするのが楽しくてしようがない。

「ねえ、侑哉…現実世界に戻つたらさっきの続きをしよう?」

「うん、さっきの続き…?」

侑哉は少し考え込んでいるような様子で、そう呟いた。

「えつと、葵…それはもしかして…」

「それじゃあ、行つてくるわね!」

「ちよつ、葵!」

侑哉は慌てたようにその声を掛ける。

私はそれを聞きながら、さつきまでデュエルをしていた場所を思い浮かべる。

そして、そのまま意識がその場所に向かつている感覚に襲われる。あのウィルスは確かに強い…でも、不思議と負ける気がしない。さつきまで、怖がっていたのが嘘みたいに活力が溢れてくる。

待つてね、侑哉…私は絶対に勝つて、侑哉を助けてみせるから! 私はそう再び決意しながら、ウィルスとのデュエルに戻つていった。

「行っちゃったか…結局、この空間についてもよくわからなかったな…まあ、でも葵と一緒に居られたわけだから良かったかな…」

／／／／／／／／／／／／／／／／

「う…ん…」

『葵ちゃん！良かった目が覚めたのね！』

花恋さんの声が聞こえ、そのまま起き上がる。

『大丈夫？何回呼び掛けても反応がなかったから、心配したのよ！』

「はい！もう大丈夫です！」

『それなら良かったわ…葵ちゃんの身に何かあったら侑哉に顔向けできないわ…』

花恋さんは本当に私のことを心配しているような声でそう言った。

「花恋さん、心配してくれてありがとうございます…でも、大丈夫です

！今の私は負ける気がしません！」

『もしかして、侑哉に会えたの？葵ちゃん…』

「えっ…！どうしてわかったんですか？」

『やっぱりね…葵ちゃんがこんな元気になるなんて、そんなことができるのは侑哉ぐらいなものだし…』

花恋さんは納得したようにそう言った。

「いつまで話しているつもりだ？」

目の前のウイルスは少し不満そうな表情をしながら、そう言った。

その言葉にすぐに気を引き締める。

そうだ…まずは、デュエルに勝たないと…！

「まあ良い…我はカードを1枚伏せて、ターンを終了する、この瞬間、オッドアイズレイジングドラゴンの攻撃力は元に戻る」

ウイルス LP3200

手札1 (EMレインゴート)

場 EXモンスターゾーン 霸王烈竜オッドアイズ・レイジング・ドラゴン攻撃表示 (ATK3600↓3000)

メインモンスターゾーンなし

伏せ1

Pゾーン 相克の魔術師（スケール3）

相生の魔術師（スケール8↓4）

ブルーエンジェル LP400

手札1（トリックスター・キャンディナ）

場なし

伏せなし

Pゾーンなし

フィールド魔法なし

「私のターン、ドロロー！」

「この瞬間、罨発動！『ペンデュラムスイッチ』！このカードの効果で、Pゾーンの…」

「なら、それに対して手札から速攻魔法、『魔力の泉』を発動！このカードの効果であなたのフィールドに表側表示で存在する魔法、罨カードの数だけデッキからカードをドロローできる！私はデッキから3枚のカードをドロロー！」

ブルーエンジェル手札2↓1↓4

「そして、その後私のフィールドの表側表示の魔法、罨カードの数だけ手札を捨てる、私は手札を1枚墓地へ送るわ」

ブルーエンジェル手札4↓3

「私のPゾーンのカードを利用して、大量にドロローしたか…だが、ペンデュラムスイッチの効果は止められん！このカードの効果により、Pゾーンの相克の魔術師を特殊召喚する！」

相克の魔術師攻撃表示（ATK2500）

ペンデュラムスイッチ…本当に厄介なカードね…でもそのおかげでドロローする枚数が増えたから、むしろ良かったかもしれないわね。さらに、私は魔法カード、『手札抹殺』を発動！お互いに手札を全て

墓地に送り、同じ枚数のカードをドロウする！」

「ちっ……！」

ウィルスはそう舌打ちをし、手札を全て捨て同じ枚数のカードをドロウした。

これで、レインゴートは使えなくなった……後はあのカードを引くだけ！

「……さらに、魔法カード『カップオブエース』を発動！コイントスを行い、表なら私が、裏なら相手がカードを2枚ドロウする！」

私はそう言って、コイントスを行う。

「結果は……やった！表！よってデッキからカードを2枚ドロウ！さらに、魔法カード、『強欲で貪欲な壺』を発動！デッキトップから裏側で10枚除外し、2枚ドロウ！」

ブルーエンジェル手札2↓1↓3↓2↓4

『侑哉も少し引きそうなくらいのドロウ連打ね……葵ちゃん、絶好調すぎるわ……』

「そうですね、侑哉成分をたつぷり補充しましたから！」

『ちよつと待つて葵ちゃん……侑哉成分って何？一体侑哉に何したのよ……そもそも葵ちゃんってそんなキャラだった？』

花恋さんが困惑したようにそう聞いてくる。

「まあ、色々とありまして……とにかく、今はデュエルに集中しないと！」

『え、ええ……わかったわ』

花恋さんはさつきと同じように困惑した様子で、そう呟いた。

「さあ、いくわよ！私はスケール1の『オッドアイズ・ペルソナ・ドラゴン』とスケール8の『オッドアイズ・ミラーージュ・ドラゴン』でPスケールをセッティング！」

「ペンデュラム……だと!?!」

ウィルスが驚いた様子でそう声を上げる。

ここに来る前に、花恋さんに頼んで侑哉のカードを何枚かデッキに入れさせてもらった……

侑哉も多分、それがわかっていて自分のカードが私に力を貸してく

れるって言ったのかな。

「…いくわよ！ペンデュラム召喚！来て！『オッドアイズ・ファントム・ドラゴン』!!」

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン攻撃表示（ATK2500）

「オッドアイズ・ファントム・ドラゴン…！」

「さらに、私は墓地の『トリックスターリンカーネーション』の効果発動！墓地のこのカードを除外して墓地の『トリックスター』を特殊召喚できる！私は『トリックスターキャンディナ』を特殊召喚！」

トリックスターキャンディナ攻撃表示（ATK1800）

「だが、そのモンスター達では私のモンスターを倒すことはできんぞ」

「それはどうかしら？」

「何…？」

「私は手札から魔法カード、『トリックスターブーケ』を発動！このカードの効果でキャンディナを戻し、キャンディナの攻撃力だけ『オッドアイズ・ファントム・ドラゴン』の攻撃力をアップする！」

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン攻撃表示（ATK2500↓4300）

「攻撃力4300…！」

「いくわよ！バトル！オッドアイズ・ファントム・ドラゴンで『霸王烈竜オッドアイズ・レイジング・ドラゴン』に攻撃！夢幻のスパイラルフレーム！」

ウィルスLP3200↓1900

「ぐああああ!!ぐつ、だが私のライフはまだ残っているぞ！」

「いいえ、これで終わりよ！あなたが取るに足らないと言ったダメージがあなたを倒す決め手になる！」

「どういう意味だ？」

「こういうことよ！オッドアイズ・ファントム・ドラゴンの効果！ペンデュラム召喚したこのカードが相手に戦闘ダメージを与えた時、Pゾーンのオッドアイズカードの数×1200ポイントのダメージを与える！Pゾーンのオッドアイズカードは2枚、よって2400ポイントのダメージをあなたに与える！」

「何…!?!」

「喰らいなさい! 幻視の力、アトミックフォース!!」

「ぐああああ!!」

ウイルス LP1900 ↓ 500

「勝った…これで侑哉を助けられる…」

デュエルを終えると、目の前のウイルスが消えていった。

『葵ちゃん、お疲れ様…後はアバターから出れば侑哉が目を覚ましているはずよ!』

「なら、早く出ましょう! どうやって出れば良いんですか?」

『LINK VRAINSからログアウトするのと同じやり方で大丈夫よ』

「わかりました!」

そう言って、私はすぐにログアウトした…目を覚ました侑哉に会えることを楽しみにしながら。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ん……はっ! 侑哉は?」

目を覚ますと、目の前には眠っている侑哉の姿があった。

どうやら、元の場所には戻れたみたいだけど…

「侑哉、起きて! お願いだから!」

その声を掛けたが、反応がなかった。

嘘……もしかして、失敗したの? 電脳ウイルスを除去できなかったの?

心がどんどん沈んでいくのがわかる…せつかく、助けられたと思っただのに…

「うん…?」

「え…?」

「あれ、葵…そっか、俺は…うつ、体の節々が痛いな…」

私が諦めそうになっていると、侑哉が目を覚まし、体を起こした。
「侑哉!!」

「ちよつ、葵！く、苦しい…」

「侑哉!!侑哉!!夢じゃないわよね?侑哉がここに居るのつて!」

「う、うん…夢じゃないよ、というか本当に苦しいよ…し、死ぬ…」

「ご、ごめん!侑哉…」

侑哉の一言に我に帰り、慌てて距離をとる。

「大丈夫?侑哉…」

「あ、うん大丈夫…ちよつとびつくりしたけど…」

侑哉はそう言つて、微笑んでくれた。

言わないと、侑哉に言いたかつたことを…それも、とびっきりの笑顔で。

「…お帰りなさい、侑哉…!」

色々な感情が混ざりあつて上手く笑えたかはわからないけど…侑哉は私の顔を見て、少し笑みを浮かべながらこう言った。

「ああ、ただいま…葵!」

第26話 バトルロワイヤル

「侑哉…本当に良かった!」

「葵のおかげだよ、ありがとう…」

「…うん、でも…」

「でも…?」

「結局、私は侑哉に守られてばかりだった…今回のデュエルだって侑哉が居てくれなかったら、今頃私は…」

目が覚めた侑哉に、そう言葉を溢す。

実際、侑哉のカードがあったから…あの時、侑哉が私を励ましてくれたから、私はあのデュエルに勝つことができた。

「それは違うよ!」

「え…?」

「葵は、俺を助けに来てくれたじゃないか…色々リスクだってあつたはずなのに…それでも葵は来てくれた、充分、俺を守ってくれてるじゃないか…」

侑哉は私の目を真っ直ぐに見つめながら、少し笑みを浮かべてそう言った。

「むしろ、今回は葵が居てくれたから俺は今こうしてここに居る…ありがとうとな、葵…俺を助けてくれて」

「侑哉…!」

侑哉の言葉を聞いて、感情が爆発する。

さつきと同じように、侑哉へと思いつきり抱きつく。

また、侑哉に苦しいとか言われるかもしれないけど、今は何よりもこうしていたい…侑哉の存在を感じていたい。

「葵…苦しいって…」

「嫌…侑哉ともっとこうしてきたいの…」

「…わかったよ、でも少し力を緩めてくれないか?そうじゃないと俺が葵を抱きしめられないからさ」

「うん…」

そう言って、力を少し緩めると侑哉は私を抱きしめてくれた。

「侑哉…大好き」

「俺も大好きだよ…葵」

『二人共、いつまでイチャイチャしているつもり?』

侑哉と抱き合っていると、花恋さんの声が響いた。

でも、そんななお構い無しに私は侑哉を抱きしめ続ける。

『ちよつと葵ちゃん!侑哉から離れてよ!』

「嫌です、花恋さんの方こそ、今すぐ通信を切ってください…侑哉と二人きりが良いので」

『…ねえ、侑哉…葵ちゃん、何か様子が変わじやない?』

「確かにそうかもしれないな…葵、どうかしたのか?」

侑哉が心配そうな表情をしながら、私にそう尋ねる。

「…だって、侑哉が目を覚ましてこうして一緒に居られるのが嬉しくて…」

「葵…」

「…だから、誰にも邪魔させない…!侑哉との時間は誰にも…!」

『侑哉!葵ちゃんがヤンデレ化してる!何とかしなさいよ!』

「え、え?いや何とかしろと言われても…:そうだ、葵」

侑哉が慌てたように、私の名前を呼ぶ。

それにしても、心外ね…私は別にヤンデレじゃない、ただ、侑哉ともう少しようしていただけ…:花恋さんでもこの時間を邪魔するのは許さない。

「現実世界に戻ったら、デートに行かないか?」

「デート…嬉しいけど、侑哉はまだ病院に居るからすぐには行けないわよ…」

「もちろん、俺が元気になってからだよ…:デートの途中で倒れたりしたら台無しだからね…:それで、葵はどこか行きたいところとかある?」

「行きたいところ…:私は侑哉と一緒になら、どこでも良いかな…」

侑哉の質問にそう答える。

実際、私は侑哉と一緒に居られるならどこでも良い…:だって、侑哉とならどこに行っても、きっと楽しいと思うから。

「そっか…なら、葵が喜びそうなデートプランを考えておくよ」

「うん、楽しみにしてる！あ、そうだ！侑哉にこれを返さないよ…」

そう言っ、私はデッキから数枚のカードを手に取り、そのまま侑哉の手に握らせる。

それは、侑哉の目が覚めたら返そうと思っていたオッドアイズ・フロントム・ドラゴン…そして、侑哉のデッキの中心であるPモンスター達。

「やっぱり葵のデッキに入ってたんだな…」

「うん…ごめんね、勝手にカードを借りちゃって…」

「いや、良いさ…葵は俺と一緒に戦おうとしてくれたんだろ？」

「それは、そうだけど…」

「なら、責める理由なんてないよ…むしろ、そんなふうに思ってくれて嬉しいよ！」

侑哉の心から言葉に嬉しくなる…そして、それと同時に侑哉への想いが溢れてくる。

ああ…今日はダメだ、侑哉への想いを抑えきれそうにない…でも、別に良いわよね、自分の想いに正直になっても。

「侑哉…」

そう呟いて、侑哉をそのまま押し倒す。

「えっと、葵…大丈夫か？何か目がとろんとしてるぞ…それに、ちよつと頬が赤いような…熱でもあるのか？」

「ふふつ、熱なんかないわよ…でも、ありがとう…侑哉」

「ちよつ、葵!?!…んむっ！」

少し動揺した様子の子の侑哉にキスをする。

何度も何度も侑哉の存在を確かめるように、深く、長く…

「…んっ…！はっ…！はっ…侑哉…！」

「んぐ…！ちよつ…葵…はっ…ストップ…」

「侑哉…！」

「チエストオオオ!!」

突如として、そんな声が響き、それと同時に頭に鈍い痛みが走った。

「いた！誰…？今、私の頭を叩いたのは…」

「私よー！」

その声はさつきまで通信していた人の声で、LINK VRAIN Sには来ていないはずの人だった。

「あれ？花恋さん…どうしてここに？」

「どうしてここに、じゃないわよ！葵ちゃん…今の状況わかってる？」
「え…？」

花恋さんの言葉に、さつきまで自分がしていた行動を振り返る。

確か、自分の感情を抑えきれなくて…侑哉を、押し倒して…それで

…

「あ…あ…！」

そこまで思い出して、頬が熱くなってくる…

私…侑哉に何てことを…

チラツと侑哉の方に目をやると、侑哉は少し困ったような表情を浮かべていて、その頬を赤くしていた。

「ごごご、ごめんね！！侑哉！私…どうかしてた！！本当にごめんね！！」

慌てて侑哉と距離を取り、目を逸らす。

うう、穴があったら入りたい…

「いや、そこまで謝らなくても良いって…別に嫌だったわけじゃないし…ただ、かなりびっくりはしたけどな」

「侑哉…」

「はいはい、ストップ！全く、そういうことを言うから葵ちゃんに襲われるのよ」

「え？俺のせいなのか…それよりも大丈夫なのか？花恋…アバターを作ってるわけじゃないからリアルな姿のままなんじゃ…」

私が未だに侑哉から目を逸らしていると、侑哉が花恋さんにそう尋ねる。

「ああ、これ？特に問題ないわ…それよりも葵ちゃんが暴走したままの方が色々問題があるわよ…まあ、侑哉ならそんな葵ちゃんも許容できそうだけど…」

「うん？最後の方がよく聞き取れなかったんだけど…何て言ったんだ？」

「…侑哉は気にしなくて良いわ、それより——」

「ちよつと待ってくれ花恋…あれは何だ？」

花恋さんが侑哉に何か言いかけると同時に侑哉が視線を外に移動するように促した。

侑哉に促され、外を見てみると巨大なデータストームが発生していた。

「あれは、データストーム…？何であんな巨大なデータストームが…」「わからないわ…」

「ねえ、侑哉…何だかこつちにデータストームが向かってきてない？」

「え…？」

侑哉がそう呟くと同時に、データストームが侑哉を巻き込んでしまふ。

「侑哉！…っ！絶対に侑哉を連れてなんて行かせない！」

「葵ちゃん！ダメ！」

侑哉を巻き込んだデータストームに近づこうとすると、花恋さんに引き止められた。

「離して！侑哉が…！」

「侑哉ならきつと大丈夫よ！だって、あの侑哉なのよ？きつと、すぐに帰ってくるわよ！だから…今は信じて待ちましょう…」

「……わかりました」

正直、侑哉のことが心配で仕方がないけど今の私には何もできない…

「侑哉…お願い、無事でいて…」

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「どわあああ!!」

データストームに巻き込まれ、体が色々な方向にぐるぐると回る。

やれやれ、せつかく戻れたと思ったたら今度はデータストームに巻き込まれるとは…

「くっ……！」

何とか体勢を立て直し、Dボートへと飛び乗る。

「ふう…随分と手荒いお出迎えだね…」

『すまん、急を要する事態が起きたのでな』

「あの巨大なデータストームのことか？」

『その通りだ…だが、説明している暇はない、後は当事者達から話しを聞いてくれ』

「当事者達…？それって——」

playmakerとリボルバーのことか？そう聞こうとした、その瞬間、データストームが急激に速度を上げた。

「ちよっ、速いってー！」

『飛ばすぞー！』

「うわああ!!」

そのまま、高速でデータストームが進み続ける。

やばいな…ちよつとでも気を抜いたら、外に放り出されそうだ。

俺は必死に体勢を立て直し続け、目的地に辿り着くまで待った。

『着いたぞーでは、後は任せたー！』

そう言っただデータストームの主は俺を巨大なデータストームの中に放り投げた。

「え!?ちよっ…うわああ!!」

巨大なデータストームに放り投げられ、上からそのまま落下していき、思わず目を瞑る。

「……ん？あれ、俺、浮いてる？」

いつまでも痛みが襲って来ず、目を開けると体が空中に浮いていて、ゆっくりと下へと移動していた。

「それにしても、データストームの中心ってこんな感じなんだな…風が少しも吹いていないし…台風の目みたいなものか」

俺がそんなふうに周りの景色を見ると、向かい合っている二人の人物が目に入った。

「Phantom…！ブルーエンジェルの方は上手くいったようだな」

「ああ、ブルーエンジェルのおかげでこの通りさ！playmakerも除去プログラムを手に入れるためにリボルバーと戦ってくれたんだろ？ありがとなー！」

「…俺は、責任を果たしにきただけだ…」

『またまた、素直じゃねえな…あいつは俺の仲間だから絶対に助ける、とか言ってたくせに』

「お前…！」

playmakerのデュエルディスクからAiがからかうような声が聞こえ、思わず笑みが零れた。

仲間、か…友達まではいってないけどかなり進歩したな…

「まさか…：電腦ウィルスを除去したのか!？」

俺がplaymakerと仲良くなれたことに感動を覚えていると、リボルバーが驚いたような声を上げた。

まあ、そりゃ驚くよな…：電腦ウィルスは多分、リボルバーの持っている除去プログラムでしか除去できないはずだったもんな。

「まあ、一応ね…：荒療治だったから体の節々が未だに痛いけど…」

「一体どうやって…：だが、好都合だ、お前とも決着を着けねばならないと思っていたところだ」

「そうだな…：俺もお前とはもう一度デュエルしたいと思ってた…：それで、どうする？playmakerともデュエルしなきゃいけないだろ？」

さすがに、俺とplaymakerを1人ずつ相手していくのは無理がある気がするしな。

「Phantom、これは俺の戦いだ…：お前は俺とリボルバーのデュエルを見ている」

「…フツ、ならばバトルロワイヤルルールでのデュエルはどうだ？」

「…なるほどね、確かにそのルールなら俺達全員でデュエルができるな」

「バトルロワイヤルルールか…：良いだろう、そのルールでデュエル

を受けてやる」

playmakerも納得したようで、バトルロワイヤルルールでデュエルを行うことに決まった。

まさか、ここでバトルロワイヤルルールでデュエルすることになるなんてな。

…良いね！ワクワクしてきた！

「では、始めるとしよう！」

「デュエル!!」

第27話 天火の牢獄

「花恋さん、どうですか？」

「…ダメね、通信が繋がらない」

「そんな…！」

データストームに侑哉が巻き込まれ、何とか今の侑哉の様子を知るために通信したが、まるで通信が繋がらなかった。

「…私、あのデータストームに飛び込みます！そうすれば侑哉の様子を知ることができるはずですよ！」

「落ち着いて、葵ちゃん…手段がすべてなくなったわけじゃないわ」

「え…？何か手があるんですか？」

「もちろんよ！ちよつと待ってて…」

自信満々にそう言い切った花恋さんは何かの作業を始めた。

「……これでよし！」

「何をしたんですか？」

「まあ、見てなさい」

花恋さんがそう言うと同時に、目の前に映像が映し出される。

そこには、向かい合っている3人の人物が映っていて、今まさにデュエルが始まろうとしていた。

「侑哉…！それに playmaker とリボルバー…！3人でデュエルをするつもりなの？…いや、それよりもどうして映像が…？」

「侑哉のデュエルディスクに小型カメラを仕込んでいたのよ…分離可能のね、ちなみにステルス機能も付いてるから侑哉もそれ以外の人にも多分気づかれないわ」

「なるほど…でも、いつの間になんなものを仕込んでいたんですか？」

「侑哉がああプログラムを作ってほしいと私に頼んだ時に…ついでにデュエルディスクのアップデートをしたのよ、その時にね」

「…そうだったんですか、でも何でそんなことを？」

「侑哉を監——守るためよ…侑哉に何かあつたら大変じゃない」

「今、監視って言いかけてませんでしたか？」

「え!?!あははっ、そんなこと言っていないわよ…！」

花恋さんはごまかすようにそう言ったけど、絶対に嘘だ…目が泳いでるし。

これは後で侑哉に教えてあげないといけないわね…でも、とにかく今はこのデュエルを見ておかないと。

「頑張つて、侑哉…」

私はそう呟いて、侑哉達のデュエルを観戦し始めた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「デュエル!!」

リボルバー LP4000

VS

playmaker LP4000

VS

Phantom LP4000

「Phantom、気を付ける…リボルバーはお前が来る前にカードを追加していた」

「カードの追加…? 一体どんなカードを追加したんだ?」

「それはわからない…だが、警戒しておくに越したことはない」

「わかった…気を付けるよ」

playmakerがそう言うんだ…多分、強力なカードなんだろうな…

それに、バトルロワイヤルルールと言っても俺とplaymakerの標的はリボルバーだ、つまり2対1の状況とほとんど変わらない。い。

それなのに、このルールを提案したということは何かしらの勝算があるに違いない。

まあ、とにかく警戒しておくに越したことはないな。

「私からいかせて貰おう! 私は手札からフィールド魔法、『天火の牢獄』を発動!」

リボルバーがカードを発動すると、巨大な鳥籠のようなものが現

れ、俺達を閉じ込めた。

「何だ？このカード…これがリボルバーが追加したカードか…？」

少なくとも、前にリボルバーとデュエルした時にはこんなカードはなかった…となると、これが追加されたカードか。

「一体どんな効果があるんだ…」

「このカードは自身の効果以外では破壊されず、お互いにフィールド上に存在する最もリンクマーカーの多いリンクモンスターよりリンクマーカーが少ないリンクモンスターをリンク召喚することができず、リンクモンスター以外は攻撃することができない」

「なっ…!?!」

厄介なカードだな…少なくとも俺にとつては。

俺のデッキの軸はペンデュラムカード、それに融合、シンクロ、エクシーズといったカード達…リンクモンスターも入ってはいるが、playmakerみたいにリンクモンスターが軸というわけじゃない。

「…いつも以上にキツそうだな、今回のデュエル…」

「フツ、Phantom…お前にとつてはなかなか厄介なカードだろう？」

「確かにな…でも、そういう状況を覆ってこそそのエンタメデュエリストつてもんさー!」

「…そうこなくてはな!」

リボルバーはそう言つて、ターンを進めた。

「私は、『ゲートウェイドラゴン』を召喚!さらに、モンスター効果を発動する!このカードの効果により、手札から『スニッフィングドラゴン』を特殊召喚!」

ゲートウェイドラゴン攻撃表示(ATK1600)

スニッフィングドラゴン攻撃表示(ATK400)

「さらに、スニッフィングドラゴンが特殊召喚に成功した時、デッキからもう1体スニッフィングドラゴンを手札に加える」

リボルバー手札2↓3

「現れる！我が道を照らす未来回路！アローヘッド確認、召喚条件はトークン以外のレベル4以下のドラゴン族モンスター2体！私は『ゲートウェイドラゴン』と『スニツフィングドラゴン』をリンクマーカーにセット！サーキットコンバイン！リンク召喚！現れる、リンク2、『ツイントライアングルドラゴン』!!」

ツイントライアングルドラゴンLINK2（ATK1200）リンクマーカー右ノ下

「さらに、リンク召喚に成功したことにより、『弾帯城壁龍』《ベルトリンクウォールドラゴン》を特殊召喚！『天火の牢獄』の効果により、守備力が300ポイントアップ、さらに、このカードが特殊召喚に成功した時ウォールカウンターを2つ置く」

弾帯城壁龍守備表示（DEF2100↓2400）ウォールカウンター×2

「カウンターを乗せるモンスターか…一体どんな意味があるんだ…？」

「弾帯城壁龍の効果！お互いにこのカードに置かれているカウンターの数よりリンクマーカーが多いモンスターをリンク召喚できず、リンクモンスター以外は攻撃できない！」

「また、厄介なカードを…！」

このカードによってさらに、ロックが強化された…つまり、天火の牢獄と組み合わせることでリンク召喚できる範囲が狭められ、しかもリンクモンスター以外の攻撃を封じる…強力なロックコンボの完成ってわけか。

「Phantomの言うとおり、厄介なロックコンボだな…」

「お前もそう思う？」

「ああ」

まあ、playmakerにしても厄介なコンボだよな。

リンク召喚の範囲が狭められるのは、リンクモンスターを主軸にしているplaymakerにとっては結構キツイ気がするし。

「私はこれでターンエンドだ！さあ、どちらから来る？」

「よし、それじゃ俺から——」

「俺のターン、ドロロー！」

playmaker手札5↓6

「ちよつ！playmaker!？」

「すまない…だが、ここは俺からいかせてくれ」

「…はあ、わかったよ」

「まずはplaymakerからか…良いだろう…この瞬間、弾帯城壁龍の効果により、ウォールカウンターを1つ乗せる」

ウォールカウンター×3

「カウンターが増えた…これでLINK3までのリンクモンスターを召喚できるようになったか…」

なるほど…スタンバイフェイズにカウンターが増えるのか。

それにしても…何か引つ掛かるな、このリボルバーの戦略……ロツクする目的もあるんだろうけど、それと同時にリンクモンスターを並べさせようとしてる感じがする。

天火の牢獄にはリンクモンスターを並べさせることで発動する効果でもあるのか？

…まあ、とりあえず今はplaymakerの行動を見るか。

「俺は手札から『リンクスレイヤー』を特殊召喚！このカードは自分のフィールドにモンスターがいない時、特殊召喚できる！」

リンクスレイヤー攻撃表示（ATK2000）

「さらに、俺は『バックアップセクレタリー』を特殊召喚！このカードは自分のフィールドにサイバー族モンスターが居るとき、特殊召喚できる！そして、俺は『スタックリバイバー』を通常召喚！」

バックアップセクレタリー攻撃表示（ATK1200）

スタックリバイバー攻撃表示（ATK100）

「現れる！未来を導くサーキット！アローヘッド確認、召喚条件はサ

イバース族モンスター2体以上！俺は『リンクスレイヤー』、『バックアップセクレタリー』、『スタックリバイバー』の3体をリンクマーカーにセット！サーキットコンバイン！リンク召喚！現れる、リンク3！『エンコードトーカー！！』

エンコードトーカーLINK3（ATK2300）リンクマーカー上／下／右下

「さらに、スタックリバイバーをリンク召喚の素材とした時、このカード以外にリンク素材として墓地へ送られたレベル4以下のサイバース族モンスターを特殊召喚できる！蘇れ！『バックアップセクレタリー』！」

バックアップセクレタリー守備表示（DEF800）

「さつそく、現れたか…この瞬間、弾帯城壁龍の効果！リンク召喚に成功した時、このカードに置かれているウォールカウンターを2つ取り除く」

ウォールカウンター×3↓1

「…バトルロワイヤルルールでは最初のターンは誰も攻撃することはできない、俺はカードを1枚伏せてターンを終了する」

「ようやく俺の出番か…それじゃ俺のターン、ドロロー！」

Phantom手札5↓6

「この瞬間、弾帯城壁龍のウォールカウンターが一つ乗る」

ウォールカウンター×1↓2

これでリンク召喚できるモンスターはLINK2まで…でも、リンク召喚したところで今の状況は変わらない…さて、どうしたもんかな。

「まあ、とりあえずやれることをやるしかないな…俺は手札から『EMドクロバットジョーカー』を召喚！このカードが召喚に成功した時、デッキからこのカード以外のEM、魔術師Pモンスター、そして、オツドアイズモンスターのいずれかを手札に加える！俺は『オツドアイズ・ペルソナ・ドラゴン』を手札に加える！」

EMドクロバットジョーカー攻撃表示（ATK1800）

「さらに、永続魔法、『補給部隊』を発動！そして、フィールド魔法、『天空の虹彩』を発動するよ！」

俺がカードを発動すると、上空に虹彩が現れた。

天空の虹彩を使うとこんな感じになるのか…キレイだな。

「…おっと、見とれてる場合じゃなかった！俺は天空の虹彩の効果を発動！このカード以外の表側表示のカードを破壊することでデッキからオッドアイズカードを手札に加えることができる！俺はドクロバットジョーカーを破壊し、『オッドアイズ・ミラーージュ・ドラゴン』を手札に加える！」

ドクロバットジョーカーが破壊され、デッキからカードが手札に加わる。

「さらに、ドクロバットジョーカーが破壊されたことにより、補給部隊の効果で1枚ドロー！」

Phantom手札6↓4↓6

「ほう、必要なカードをサーチし、さらにカードをドローしたか…やるな」

「まだまだここからだよ！俺はスケール1の『オッドアイズ・ペルソナ・ドラゴン』とスケール8の『オッドアイズ・ミラーージュ・ドラゴン』でペンデュラムスケールをセッティング！」

さて、ここからペンデュラム召喚を——ちよつと待て、今の状況でEXモンスターゾーンって使えるのか？

いや、多分無理だよな…あれ、やばくないか今の状況…

とりあえず、エンコードトーカーのリンクマーカーを利用するしかないな。

「揺れる、運命の振り子！迫り来る時を刻み、未来と過去を行き交え！ペンデュラム召喚！来い、俺のモンスター達！EXデッキから『EMドクロバットジョーカー』、手札から『EMペンデュラムマジシャン』、『ジャンクシンクロン』、そして、『オッドアイズ・ファントム・ドラゴン』！！」

EMドクロバットジョーカー攻撃表示 (ATK1800)

EMペンデュラムマジシャン攻撃表示 (ATK1500)

ジャンクシンクロン攻撃表示 (ATK1300)

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン攻撃表示 (ATK2500)

「ペンデュラムマジシヤンの効果！ペンデュラムマジシヤンを破壊し、デッキから『EMレインゴート』を手札に加える！」

Phantom手札1↓2

「さらに、レベル4のドクロバットジョーカーにレベル3のジャンクシンクロンをチューニング！その美しくも雄々しき翼翻し、光の速さで敵を討て！シンクロ召喚！現れる、レベル7！『クリアウイング・シンクロ・ドラゴン』!!」

クリアウイング・シンクロ・ドラゴン攻撃表示 (ATK2500)

「ほう、シンクロ召喚か？ブルーエンジェルとのデュエルで見たシンクロモンスターとはまた違ったシンクロモンスターだな」

「まあね、これも俺の切り札の1つさ！さて、とりあえずカードを1枚伏せてターンエンドだよ！」

リボルバー LP4000

手札2 (内1枚スニッフィンングドラゴン)

場 EXモンスターゾーン ツイントライアングルドラゴンLINK2 (ATK1200)

メインモンスターゾーン 弾帯城壁龍《ベルトリンクウォールドラゴン》守備表示 (DEF2100↓2400) ウォールカウンタ×2

伏せなし

Pゾーンなし

フィールド魔法 天火の牢獄

playmaker LP4000

手札2

場 EXモンスターゾーン エンコードトーカーLINK3 (ATK2300) リンクマーカー上/下/右下

メインモンスターゾーン バックアップセクレタリー守備表示(D
EF800)

伏せ1

Pゾーンなし

Phantom LP4000

手札1 (EMレインゴート)

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン クリアウイング・シンクロ・ドラゴン攻
撃表示(ATK2500)

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン攻撃表示(ATK2500)

伏せ2 (内1枚補給部隊)

Pゾーン オッドアイズ・ペルソナ・ドラゴン(スケール1)

オッドアイズ・ミラーージュ・ドラゴン(スケール8)

フィールド魔法 天空の虹彩

第28話 消失するサイバース

「私のターン、ドロー！」

リボルバー LP4000

手札2↓3 (内1枚スニッフィングドラゴン)

場 EXモンスターゾーン ツイントライアングルドラゴンLINK2 (ATK1200) リンクマーク下/右

メインモンスターゾーン 弾帯城壁龍(ベルトリンクウォールドラゴン)守備表示(DEF2100↓2400)ウォールカウンタ×2

伏せなし

Pゾーンなし

フィールド魔法 天火の牢獄

playmaker LP4000

手札2

場 EXモンスターゾーン エンコードトーカーLINK3(ATK2300)リンクマーク上/下/右下

メインモンスターゾーン バックアップセクレタリー守備表示(DEF800)

伏せ1

Pゾーンなし

Phantom LP4000

手札1(EMレインゴート)

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン クリアウイング・シンクロ・ドラゴン攻撃表示(ATK2500)

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン攻撃表示(ATK2500)

伏せ2 (内1枚補給部隊)

Pゾーン オッドアイズ・ペルソナ・ドラゴン (スケール1)

オッドアイズ・ミラージユ・ドラゴン (スケール8)

フィールド魔法 天空の虹彩

「この瞬間、ベルトリンクにウォールカウンターを一つ乗せる」

「残念だけど、そうはさせないよ！クリアウイングの効果発動！レベル5以上のモンスター効果が発動した時、その発動を無効にして破壊する！さらに、破壊したモンスターの攻撃力だけクリアウイングの攻撃力をアップする！」

「何!？」

「いくよ！ダイクロイツクミラー！」

クリアウイングの効果により、ベルトリンクが破壊され、フィールド上から居なくなった。

これで、ロックコンボの一部は突破できた：後は天火の牢獄を何とかできれば…

「…ベルトリンクの攻撃力は0、よってクリアウイングの攻撃力は上昇しない：でも、これでロックコンボの一部は崩したよ！」

「フツ、さすがだな：まさかこうも早い段階でベルトリンクが破壊されるとは…」

リボルバーは、まるでこうなることを予測していたかのように、余裕の笑みを浮かべていた。

「こうなるって予測していたのか？」

「ああ、そう予測していた：だが、まさかこうも早い段階とは思っていなかったがな」

リボルバーはそう言いながら、楽しそうに笑った。

「さあ、続けるぞ！私は手札から魔法カード、『カップオブエース』を発動！対象とする相手はPhantom、お前だ」

「…リボルバーも『カップオブエース』を使うのかよ！」

いや、葵はまだわかる…正直、相手にドロ―させてもトリックスターにとつてはそこまでデメリットはないしな。

リボルバーの場合は相手にドロ―させちゃったらデメリットしかない気がするんだが…

俺がそんなことを思っていると、リボルバーがコイントスを行い、表が出た。

「結果は表、よって2枚ドロ―！」

リボルバー手札3↓2↓4

「やはり、このカードは表さえ出れば、強力なドロ―ソースになるな…
Phantomが好んで使用するのも理解できる」

「あはは、俺としてはネタがパクられたみたいで複雑だけどね…」

本当に、みんなカップオブエース使いすぎじゃないか？まあ、俺も他人のことは言えないけどな。

「フツ、ではいかせて貰おう！私は手札から『オートヴァレットドラゴン』を召喚！そして、現れる、我が道を照らす未来回路！アローヘッド確認、召喚条件はトークン以外のモンスター2体以上！私はリンク2の『ツイントライアングルドラゴン』と『オートヴァレットドラゴン』をリンクマークーにセット！サーキットコンバイン！リンク召喚！現れる！リンク3、『スリーバーストショットドラゴン』!!」

スリーバーストショットドラゴンLINK3 (ATK2400) リンクマークー上/下/左

「バトル！『スリーバーストショットドラゴン』で『バックアップセクレタリー』に攻撃！」

「エンコードトーカーの効果発動！リンク先のモンスターが自身より攻撃力の高いモンスターと戦闘を行う時、そのモンスターは戦闘で破壊されず、ダメージも0になる！」

「そうはさせせん！『スリーバーストショットドラゴン』の効果発動！1ターンに1度、ダメージステップ時に魔法、罠、モンスター効果が発動した時、その発動を無効にする！」

「何!?!」

おっと、このままじゃバックアップセクレタリーが破壊されちゃうな……なら、破壊させるわけにはいかないな。

「そうはいかないよ！ 畏れ発動！ 『ハーファンブレイク』！ このカードの効果で『バックアップセクレタリー』に対して発動！ このカードの効果でバックアップセクレタリーはこのターン、戦闘で破壊されず、その戦闘で発生するダメージは半分になる！」

シャボン玉のようなものがバックアップセクレタリーを包み、スリーバーストショットドラゴンの攻撃を防いだ。

「だが、『スリーバーストショットドラゴン』は守備表示のモンスターに攻撃した時、貫通ダメージを与える！」

playmaker LP4000↓3200

「くっ……この瞬間、手札の『インタラプトレジスタンス』の効果発動！ 戦闘ダメージを受けた時、手札からこのカードを特殊召喚できる！ そして、受けたダメージ分だけこのカードの攻撃力をアップする！」

インタラプトレジスタンス守備表示 (DEF2100)

へえ、サイバース版のゴーズみたいなものか……結構、便利なカードだな。

「Phantom……助かった」

「どういたしまして！」

playmakerに礼を言われて、そう言葉を返す。

何やかんや言って、playmakerも俺の事を信頼してくれているのかな……なら、その信頼に応えないとな。

「フィールド上のモンスターを対象として発動するカードによって、playmakerをサポートしたか……まあ良い、私はカードを1枚伏せて、ターンを終了する……」

「俺のターン、ドロロー！ 俺は手札から魔法カード、『サイバースキャットシュ』を発動！ このカードは自分のフィールドに元々の攻撃力と異なるサイバース族モンスターが居るとき、デッキからカードを2枚ドロロー！」

playmaker手札2↓1↓3

『Phantomのおかげで、盤面を整えつつ手札を補充できたな!』
「ああ、そうだな……続けるぞ!俺は手札から『 balanサーロード』を
召喚!そして、現れる!未来を導くサーキット!アローヘッド確認、
召喚条件は効果モンスター2体以上!俺は『インタラプトレジスタ
ス』、『バックアップセクレタリー』、『 balanserロード』の3体をリ
ンクマークにセット!サーキットコンバイン!リンク召喚!現れ
ろ、リンク3『デコードトーカー』!!」

デコードトーカーLINK3 (ATK2300)リンクマーク上
/右下/左下

「さらに、デコードトーカーの効果!リンク先のモンスターの数×5
00ポイント攻撃力がアップする!デコードトーカーのリンク先
にはエンコードトーカーが居る、よって、攻撃力が500ポイントア
ップする!」

デコードトーカーLINK3 (ATK2300)↓2800)リンク
マーク上/右下/左下

「おお!デコードトーカーとエンコードトーカーが並び立ってる!
すっげー!」

良いね、ダブルエースが並んでいる光景ってなかなかないよな……
て、ちよつと待て、天火の牢獄の隠された効果がリンクモンスターを
何体か並べた時に発動するなら……

「playmaker!これは罠だ!」

「何……?」

「この瞬間、天火の牢獄の更なる効果を発動!サイバース族リンクモ
ンスターが2体以上存在する時、お互いの手札・フィールド・墓地の
サイバース族モンスターは攻撃できず、攻撃対象及び効果の対象にな
らず、効果は無効となる!これでサイバース族はいないも同然だ!」
天火の牢獄から光が溢れ、デコードトーカーとエンコードトーカー
の姿が消えていく。

「サイバース族が消えていく……!」

『プレイ……メーカー……俺の意識が消えていく……オレノイシキガ……』

「A i : : ?」

「消え去れ！サイバース！」

そのまま、デコードトーカーとエンコードトーカーの姿が消えていった。

天火の牢獄の効果は完全なサイバースメタか…しかも、A i まで消えたのか…？

…どうやら、天火の牢獄はただのカードってわけじゃなさそうだな。

「くつ…！俺はこれでターンエンドだ…」

「…っ！俺のターン、ドロー！」

Phantom手札1↓2

「さあ、どうするつもりだ？playmakerのサイバースは消え去り、お前の持つサイバースも使用することはできない、この状況でどう天火の牢獄を突破する？」

「まあ、確かに結構厳しい状況だね…でも、どんなカードにだって必ず突破方法が存在する！俺はそれを見つけてみせるよ」

さあ、考えろ！天火の牢獄を突破する方法を！

天火の牢獄は自身の効果以外では破壊されない…でも、それは逆を言えば、自壊効果が存在しているってことだ。

自壊効果って、大抵は特定のカードが存在しなくなった時に破壊されたり、ライフコストが払えなくて破壊されたりとか、ある条件が満たせなくなった時に破壊される効果が多いよな…

天火の牢獄の場合は特定のカードが存在しない時に破壊されるタイプか…？だとしたら、その特定のカードって…

「…そうか！わかったぞ！天火の牢獄を突破する方法が！」

「何!？」

「Phantom…それはどういう方法だ？」

俺の言葉にリボルバー、playmakerがそれぞれ言葉を溢した。

「天火の牢獄はさっきのサイバースメタ効果を発動する時に存在していたサイバースリンクモンスターが1体か、もしくは全てフィールド上に存在しなくなれば破壊されるんじゃないか？」

「…ククツ、フハハハ！全く、お前には驚かされてばかりだ…」

「その反応を見るに正解かな？」

「ああ、その通りだ…先ほどの効果を発動する時に存在していたサイバースリンクモンスターが全て墓地へ送られた時に天火の牢獄は破壊される」

リボルバーは実に楽しそうに、俺の答えに対する回答を述べた。

「どうやら本当に正解だったみたいだな…」

「…だが、仮に天火の牢獄の突破方法がわかったところで今のお前には何もできない」

「確かに、結局はplaymakerに任せることになっちゃうけどね…」

天火の牢獄を破壊する、一番簡単な方法はリンク素材にしてしまうこと。

天火の牢獄の効果はリンク素材にすることは禁止していない…つまりリンク素材にしてしまえばすぐに天火の牢獄を破壊できる…ただ、それにはplaymakerがリンク4のリンクモンスターを持っている必要がある。

だが、playmakerがリンク4のモンスターを持っているかどうかは俺には確かめようがない。

でも、もしplaymakerがあのカードを持っている…天火の牢獄を破壊できるはずだ。

…とりあえず、今は俺に出来ることをするしかないな。

「まあ、とにかくターンを進めるよ…俺は手札から魔法カード、『カツプロブエース』を発動！対象とする相手はplaymaker！」

「なるほど、これでお前はコイントスに成功しても、失敗しても有利にデュエルを進めることができるわけか…」

「そういうこと…さて、結果は…よし！表！よってデッキからカー

ドを2枚ドロロー！」

Phantom手札2↓1↓3

「さらに、天空の虹彩の効果！オッドアイズ・ファントム・ドラゴンを破壊し、デッキから『EMオッドアイズデイズルヴァー』を手札に加える！さらに、『補給部隊』の効果で1枚ドロロー！」

Phantom手札3↓5

「まだまだいくよ！手札から魔法カード、『螺旋のストライクバースト』を発動！このカードの効果でEXデッキに送られた『オッドアイズ・ファントム・ドラゴン』を手札に加える！」

「フツ、ただ破壊するだけではなくリカバリーの手段を用意していたか」

「まあね…さあいくよ！再び揺れる！運命の振り子！迫り来る時を刻み、未来と過去を行き交え！ペンデュラム召喚！現れる！俺のモンスター達！手札から『サイレントマジシャンLV4』、そして、『オッドアイズ・ファントム・ドラゴン』!!」

サイレントマジシャンLV4攻撃表示（ATK1000）

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン攻撃表示（ATK2500）

「さらに、魔法カード、『レベルアップ!』を発動！このカードの効果！自分フィールドのLVモンスターを墓地に送り、そのカードに記されているモンスターを召喚条件を無視して、手札・デッキから特殊召喚できる！デッキから現れる！『サイレントマジシャンLV8』!!」

サイレントマジシャンLV8攻撃表示（ATK3500）

「いくよ！バトル！サイレントマジシャンでスリーバーストショットドラゴンに攻撃！サイレントバーニング！」

「バカな!?天火の牢獄の効果でリンクモンスター以外は攻撃できないはずだ！」

「『サイレントマジシャンLV8』は相手の魔法カードの効果を受けない！よって、天火の牢獄の効果は効かないよ！」

「何だ!?くっ、ならば罠発動！『攻撃の無敵化』！このカードには2つの効果がある、1つはこのバトルフェイズ中、モンスター1体に破壊耐性を付与する効果、もう1つはこのバトルフェイズ中の戦闘ダ

メージを0にする効果だ、私は1つ目の効果を使用し、『スリーバーストショットドラゴン』に破壊耐性を付与する！」

「なるほどね、でも攻撃は止まらない！行け！サイレントマジシャン！」

サイレントマジシャンの攻撃がスリーバーストショットドラゴンに命中する、だが、スリーバーストショットドラゴンは破壊されず、リボルバーにその戦闘の衝撃だけが襲った。

リボルバー LP4000↓2900

「ぐっ…!!魔法カードの効果を受けないモンスターで攻撃してくるとは…！」

「まあ、これも1つの突破方法だよ…俺はこれでターンエンドだ」

リボルバー LP2900

手札2 (内1枚スニツフィングドラゴン)

場 EXモンスターゾーン スリーバーストショットドラゴンL

INK3 (ATK2400) リンクマーク上/下/左

メインモンスターゾーンなし

伏せなし

Pゾーンなし

フィールド魔法 天火の牢獄

playmaker LP3200

手札2

場 EXモンスターゾーン エンコードトーカーLINK3 (AT

K2300) リンクマーク上/下/右下

メインモンスターゾーン デコードトーカーLINK3 (ATK2

300)

伏せ1

Pゾーンなし

Phantom LP4000

手札2 (『EMレインゴート』、『EMオッドアイズデイズルヴァー』)
場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン オッドアイズ・ファントム・ドラゴン攻
撃表示 (ATK2500)

クリアウイング・シンクロ・ドラゴン攻撃表示 (ATK2500)

サイレントマジシャンLV8攻撃表示 (ATK3500)

伏せ1 (補給部隊)

Pゾーン オッドアイズ・ペルソナ・ドラゴン (スケール1)

オッドアイズ・ミラーージュ・ドラゴン (スケール8)

フィールド魔法 天空の虹彩

第29話 降臨する守護竜

「フツ、やはりお前は敵に回したくないな、Phantom…」

「一応實力は認めてくれてるのかな？だとしたら、光栄だね…」

「ああ…認めているとも、ぜひ、我々に協力してもらいたいほどだ」

「ははっ、まさか、ハノイの騎士に勧誘されるとは思わなかったよ」

それにしても、急にリボルバーは何を言い出してるんだ？

俺を試しているのか？

「お前が協力してくれれば、我々にとってもプラスになるはずだからな…どうだ？私と手を組まないか？」

「何…!？」

そう声を上げたのは、playmakerだった。

確かに、リボルバーがこんなことを言うとは俺も思っていなかったけどな。

まあ、でも、ちゃんと答えないとな。

「…うーん、俺はお前が根っからの悪人とは思えないから、きっと何か理由があつてこういうことをしてるんだろうとは思うけど…今は協力できないかな」

「何故だ？」

「だって、お前はまだ俺に全部を話してくれたわけじゃない…お前がどうしてこんなことをしているのか、どうして、サイバーズを憎んでいるのか…とかね…協力するにしてもそれを知らないまままで協力するわけにはいかないよ」

俺がそう言うとりボルバーは満足そうな様子でこう言った。

「…そうではなくてはな」

「断られるってわかってたのにこんなことを聞いたのか？」

「ああ、今1度お前がどういう人間か確かめたくてな…」

なるほど、リボルバーが俺に質問したのはそういう理由か…でも、勧誘自体は本気な気がしたのは俺の気のせいかな？

「フツ、まあ勧誘自体は本気だがな…お前のようなデュエリストが居

れば我々としても助かるからな」

「え…?」

「さあ、デュエルを再開するでしょう！私のターン、ドロロー！」

リボルバー LP2900

手札2↓3 (内1枚スニッフィングドラゴン)

場 EXモンスターゾーン スリバーストショットドラゴンL

INK3 (ATK2400) リンクマーカー上/下/左

メインモンスターゾーンなし

伏せなし

Pゾーンなし

フィールド魔法 天火の牢獄

playmaker LP3200

手札2

場 EXモンスターゾーン エンコードトーカーLINK3 (AT

K2300) リンクマーカー上/下/右下

メインモンスターゾーン デコードトーカーLINK3 (ATK2

300) リンクマーカー上/右下/左下

伏せ1

Pゾーンなし

Phantom LP4000

手札2 『EMレインゴート』、『EMオッドアイズデイズルヴァー』

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン オッドアイズ・ファントム・ドラゴン攻

撃表示 (ATK2500)

クリアウイング・シンクロ・ドラゴン攻撃表示 (ATK2500)

サイレントマジシャンLV8攻撃表示 (ATK3500)

伏せ1 (補給部隊)

Pゾーン オッドアイズ・ペルソナ・ドラゴン（スケール1）
オッドアイズ・ミラージユ・ドラゴン（スケール8）
フィールド魔法 天空の虹彩

「私は『スリーバーストショットドラゴン』の効果を発動する！このカードをリリースし、墓地のリンク2以下のモンスターを特殊召喚する！蘇れ！『ツイントライアングルドラゴン』!!」

ツイントライアングルドラゴンLINK2（ATK1200）リンクマーカー右／下

「さらに、その後手札からレベル4以下のドラゴン族モンスターを特殊召喚できる！私は手札から『スニツフィングドラゴン』を特殊召喚！さらに、スニツフィングドラゴンの効果により、3枚目のスニツフィングドラゴンを手札に加え、そのまま召喚！」

スニツフィングドラゴン攻撃表示（ATK800）×2

何か、俺の反応をスルーして、色々と展開されてるんだが…しかも、この状況って…！

「playmaker、気をつけろ！あいつのエースモンスターが来るぞー！」

「リボルバーのエースモンスター…『トポロジックボマードドラゴン』ではなさそうだが…一体どんなモンスターなんだ？」

「まあ、それはすぐにわかるよ…一つだけ言うとかかなり強力なモンスターだよ、あのモンスターは」

「では、いくぞ！現れる、我が道を照らす未来回路！アローヘッド確認、召喚条件は効果モンスター3体以上！私はリンク2の『ツイントライアングルドラゴン』と2体の『スニツフィングドラゴン』をリンクマーカーにセット！サーキットコンバイン！閉ざされし世界を貫く我が新風！リンク召喚！現れる、リンク4！『ヴァレルロードドラゴン』!!」

ヴァレルロードドラゴンLINK4（ATK3000）リンクマーカー右／左／右下／左下

「来たか……！」

「これが、リボルバーのエースモンスター……！」

とうとう来たか……それにしても何回見てもカッコいいドラゴンだな！

「さらに、私は手札から魔法カード、『強欲で貪欲な壺』を発動！デッキトップから裏側で10枚除外し、2枚ドロー！」

リボルバー手札2↓1↓3

「さらに、私は手札から魔法カード、『スタンピングクラッシュ』を発動！自分フィールドにドラゴン族モンスターがいる時、フィールド上の魔法、罨カードを1枚破壊する！私は『天空の虹彩』破壊する！」

スタンピングクラッシュの効果により天空の虹彩が破壊された。

まあ、天空の虹彩の効果でPゾーンのEM、魔術師、オッドアイズはカード効果の対象にならないから、破壊するなら、天空の虹彩か補給部隊しかないけどな。

「さらに、スタンピングクラッシュの効果によりPhantom、お前に500ポイントのダメージを与える！」

Phantom LP4000↓3500

「ぐっ……！」

「さらに、手札から魔法カード、『クイックリボルブ』を発動！このカードの効果によってデッキから『ヴァレット』モンスターを特殊召喚する！来い！『マグナヴァレットドラゴン』！」

マグナヴァレットドラゴン攻撃表示(ATK1800)

「ヴァレット……？」

「あれが、リボルバーのデッキの中心のモンスター、ヴァレットだよ……その効果は今から見せてくれるはずだよ」

『ヴァレルロードドラゴン』の効果発動！1ターンに1度フィールド上のモンスター1体の攻撃力と守備力を500ポイント下げる！私は『マグナヴァレットドラゴン』の攻守を下げる！」

「自分のモンスターの攻守を下げるだど？」

「この瞬間、マグナヴァレットの効果！このカードはリンクモンスターの効果の対象になった時、破壊される…そして、その後フィールド上のモンスター1体を選んで墓地へ送る！私は『サイレントマジシャンLV8』を墓地へ送る！」

「…っ！やっぱりそうくるか…！」

マグナヴァレットの効果により、サイレントマジシャンが墓地へ送られた。

対象を取る効果じゃないから、クリアウイングの効果も使えないし…本当に厄介だな。

「さあ、いくぞ！バトル！『ヴァレルロードドラゴン』でplaymakerにダイレクトアタック!!エネルギー充填ヴァレルモードエンジン！ターゲトロックオン！対閃光防御最終セーフティ解除！喰らえ！天雷のヴァレルカノン!!」

「ぐああああ!!」

playmaker LP3200↓200

「playmaker!!」

リボルバーがヘルメットのようなものを装着し、ヴァレルロードから巨大な弾丸が放たれる。

それが、playmakerへと直撃し、そのまま後ろに大きく飛ばされた。

「おい、大丈夫か！playmaker！」

「…ぐっ…」

playmakerはそう声を漏らしながら辛そうに倒れた体を起き上がらせた。

「私は、カードを1枚伏せて、ターンを終了する！そして、この瞬間、破壊されたマグナヴァレットドラゴンの効果発動！このカードが戦闘、効果で破壊されたターンの終了時にデッキからこのカード以外のヴァレットモンスターを特殊召喚できる！私は『オートヴァレットドラゴン』を特殊召喚！」

オートヴァレットドラゴン攻撃表示(ATK1600)

「さあ、playmaker…お前のターンだ」

「くっ…俺のターン、ドロー!」

playmaker手札2↓3

さて、どうなるかな…今の状況は一応ほぼ互角…playmakerが天火の牢獄を突破してくれるなら、俺も動けるんだけど…

リボルバーとのデュエルでストームアクセスをplaymakerが使用していないとは思えないし…playmakerがあのカードを持っている可能性は高いはずだ。

ドクン…!

「…っ…何だ今の…」

俺が思考の海に沈んでいると謎の鼓動が聞こえてくる。

ドクン…ドクン、と鼓動が聞こえる…それはまるで早く自分を出せ…そう言っているように思える。

「今のは…まだ、サイバースの火は消えてはいない!」

playmakerもそれを感じたのか、さつきとは明らかに様子が違っていた。

「おい、Ai…まだそこに居るのか?聞こえているか?答えろ、Ai!」

playmakerが自分のデュエルディスクへとそう呼び掛ける。

「まだそこに居るんだろう?だったら、俺に力を貸せ!応えろ、サイバース!俺は手札からフィールド魔法、『サイバネットユニバース』を発動!このカードは自分フィールドのリンクモンスターの攻撃力を300ポイントアップする!」

「今さら、何をしようとサイバースはすでに存在しない!」

「違う!サイバースは消えてはいない、まだここに居るんだ!俺にはその鼓動が聞こえる!」

「その通りだよ!playmaker…早くそいつを出してあげて

よ、きつきから自分を出せって言ってるよ…デコードトーカー達も準備ができてるみたいだしね」

「Phantom、お前…!」

playerが俺の方を見ながら驚きの声を上げた。

そつか、まだplayerにはリンクアクセスのことを話してなかったな…なら、この反応も無理ないか。

「詳しい話しは後ですよ、とりあえず今はデュエルに集中しよう!」
「…わかった、詳しい話しは後で聞かせてもらう…いくぞ!現れる、未来を導くサーキット!アローヘッド確認、召喚条件はモンスター2体以上!俺はリンク3のデコードトーカーとエンコードトーカーをリンクマーカーにセット!サーキットコンバイン!」

「エース2体をリンク素材にするだ?!」

「いくぞ!リボルバー!これがサイバースの新たな可能性だ!リンク召喚!現れる!リンク4!『ファイアウォールドラゴン』!!」

ファイアウォールドラゴンLINK4 (ATK2500↓2800)リンクマーカー上/下/左/右

「おお!!これがサイバースのドラゴンか!カッコいいぜ!しかも、ヴァレルロードまでいるし、これはテンションが上がってくるな!」

ファイアウォール来たああ!カードの状態でもカッコいいけど、実際に見ると更にカッコいいな!

しかも、俺を含めた全員のエースモンスターが揃い踏みだし、これはかなり楽しくなってきたな!

「お前の言った言葉の通りなら、この瞬間、天火の牢獄は破壊される!」

「くっ…!」

ファイアウォールが現れた瞬間、俺達を囲っていた、天火の牢獄が光を放ちながら消えていった。

よし、これで俺も思う存分動けるな。

『うーん…あれ?俺は…』

「ようやく、目を覚ましたか」

『俺、もしかして寝てた?』

「ああ、ぐっすりとな…」

「どうやら、Aiも目を覚ましたらしいな…ということはやっぱり、天火の牢獄にはサイバースを封じる力があるってことか…?」

「一体どこの誰がそんなものを作ったんだ? やっぱりリボルバーが作ったのか…? まあ、それは後で考えよう。」

「俺は、カードを1枚伏せて、ターンを終了する!」

「おっと、俺のターンか、ドロー!」

Phantom手札2↓3

「ついにファイアウォールドドラゴンが来たか…俺も、まだ使っていないカードを魅せるかな。」

「さて、playmakerが魅せてくれたんだ…今度は俺の番だね! まずは、手札から魔法カード、『強欲で貪欲な壺』を発動! デッキトップから裏側で10枚除外して、2枚ドロー!」

Phantom手札3↓2↓4

「さあ、いくよ! 現れる、希望を照らすサーキット! アローヘッド確認、召喚条件はモンスター2体! 俺は『オッドアイズ・ファントム・ドラゴン』と『クリアウイング・シンクロ・ドラゴン』をリンクマーカーをセット! サーキットコンバイン! リンク召喚! 現れる、リンク2! 『プロキシードドラゴン』!」

プロキシードドラゴンLINK2 (ATK1400) リンクマーカー
左/右

「まだまだ、いくよ! 今1度揺れる! 運命の振り子! 迫りくる時を刻み、未来と過去を行き交え! ペンデュラム召喚!! 来い! 俺のモンスター達! EXデッキから、『EMペンデュラムマジシャン』、そして、『オッドアイズ・ファントム・ドラゴン』!!」

EMペンデュラムマジシャン攻撃表示 (ATK1500)

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン攻撃表示 (ATK2500)

「そして、ペンデュラムマジシャンの効果! ペンデュラムマジシャンを破壊し、デッキから『EMオッドアイズ・シンクロン』を手札に加え、さらに、補給部隊の効果でさらに、1枚ドロー!」

「厄介なコンボだな…ここまで手札を補充されるとは…先にあのカードを除去すべきだったか？」

確かに、今のリボルバーの場にはオートヴァレットが居るし、除去できたはずだもんな…もつと、厄介なカードが登場する可能性を考えて、使わなかったのか？

「まあ、それなら遠慮なくいかせてもらうけどね！まずは、手札から魔法カード、『ペンデュラムフュージョン』を発動！このカードの効果で、Pゾーンのカードで融合召喚を行う！俺はPゾーンの『オッドアイズ・ペルソナ・ドラゴン』と『オッドアイズ・ミラーージュ・ドラゴン』を融合！現れる！飢えた牙持つ毒竜！『スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン』!!」

スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン攻撃表示（ATK2800）

「そして、『スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン』の効果！相手フィールド上の特殊召喚されたモンスター1体を選び、そのモンスターは攻撃力分だけこのカードの攻撃力をアップする！俺は『ヴァレルロードドラゴン』の攻撃力分だけスターヴ・ヴェノムの攻撃力をアップする！」

スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン攻撃表示（ATK2800↓5800）

「くっ、対象を取らない効果か…ヴァレルロードはモンスター効果の対象にならないが…対象を取らない効果に対しては無力…！だから、そのモンスターを呼んだということか…」

「まあ、何かしらの耐性はあると踏んでたけどね…上手く行って良かったよ」

それがどんな耐性かはわかっていなかったけどね…それにしても、モンスター効果の対象にならないってことはファイアウォールの効果が効かないか？

まあ、playmakerなら何とかできるかな？

「さらに、Pゾーンに『EMオッドアイズシンクロン』をセット！そし

て、手札から魔法カード、『死者蘇生』を発動！このカードの効果で墓地から『クリアウイング・シンクロ・ドラゴン』を特殊召喚！」

クリアウイング・シンクロ・ドラゴン攻撃表示（ATK2500）
「そして、オッドアイズシンクロンのP効果！自分フィールド上の『EM』、『オッドアイズ』モンスター1体をチューナーとして扱い、そのレベルを1とする！俺は、『オッドアイズ・ファントム・ドラゴン』を選択する！さあ、いくよ！レベル7のクリアウイングにレベル1となった、オッドアイズをチューニング！神聖なる光蓄えし翼煌めかせ、その輝きで敵を討て！シンクロン召喚！！現れる！レベル8『クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴン』！！」

クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴン攻撃表示（ATK3000）

「さらに、手札から魔法カード、『ペンデュラムホルト』を発動！このカードはEXデッキに表側表示でPモンスターが3種類以上存在する時に発動できる！デッキからカードを2枚ドロウできる！ただし、デッキからカードを手札に加えることはできなくなる！」

Phantom手札3↓2↓4

「いくよ！バトル！『スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン』で『オートヴァレットドラゴン』に攻撃！」

「くっ、畏発動！『攻撃の無力化』！！このカードの効果で攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる！」

「やっぱり、さすがに倒しきれないか…俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ…この瞬間、スターヴ・ヴェノムの攻撃力は元に戻る…」

リボルバー LP2900

手札0

場 EXモンスターゾーン ヴァレルロードドラゴンLINK4
（ATK3000）リンクマーカー右／左／右下／左下

メインモンスターゾーン オートヴァレットドラゴン攻撃表示（ATK1600）

伏せなし

Pゾーンなし

playmaker LP200

手札1

場 EXモンスターゾーン ファイアオールドラゴンLINK
4 (ATK2500↓2800) リンクマーカー上/下/左/右

メインモンスターゾーンなし

伏せ2

Pゾーンなし

フィールド魔法 サイバネットユニバース

Phantom LP3500

手札3 (内2枚、『EMレインゴト』、『EMオッドアイズディゾル
ヴァー』)

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン プロキシードドラゴンLINK2 (ATK
1400) リンクマーカー左/右

スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン攻撃表示 (ATK2
800)

クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴン攻撃表示 (ATK300
0)

伏せ1

Pゾーン ライトPゾーンなし

レフトPゾーンEMオッドアイズシンクロン (スケール6)

特別編 バレンタインの甘いひととき

「なあ、これどうしたら良いと思う?」

「……俺に聞かれても困る」

草薙さんの店にやってきて、遊作にそう尋ねる。

その相談内容は目の前に山のように積み重なっているチョコレートについてだ。

今日は2月14日、世間的に言えばバレンタインデーの日だ。

俺とは無縁の日だと思っていたのだが、学校に来て、次から次へとチョコレートを渡され、気がつけばかなりのチョコレートをもらってしまった。

「へえ、神薙……お前モテモテだな」

「いや、別にそういうわけじゃないですよ……多分、義理チョコってやつです」

「いやいや、この量は義理チョコなんてレベルじゃないだろ!」

草薙さんは少し声を荒げながらそう言った。

まあ、確かに義理チョコにしたって量が多すぎだとは思っけど。

はあ……お返しどうするかな……この量を返すのは結構キツイぞ……まあ、このチョコをくれた人達はお返しはいらなくて言ってくれたけど。

そういうわけにもいかないよな……ああ!どうしたら良いんだ!

「……ところでどうして俺に相談しに来たんだ?デュエル部のみんなも居ただろう……」

「いや、それが……相談しようとしたらさ、『お前は俺達の敵だ!!さっさと帰れ!!』って言われてさ……」

「どうしてそうなるんだ?」

「……遊作、それは明らかに神薙が悪いぞ」

「え!?俺のせい?」

「どういうことだ?草薙さん……侑哉はただ、このチョコレートはどうすれば良いか相談しようとしたただけで、侑哉に非はないように思えるが……」

草薙さんの言葉に俺と遊作がそれぞれの反応を返すと、草薙さんが呆れたようにこう言った。

「はあ…お前達は二人揃って、全く…良いか？チョコレートを貰っていない人間からすると大量のチョコレートを貰っている人間がそれをどうすれば良いか、なんて相談にきても嫌みにしか見えないのさ…本人にその気がなくてもな」

「…そういうものなのか？」

「…草薙さんにそう言われると何だかとてもなく申し訳ない気分になるな…明日にでも謝りに行こうかな？」

「止めとけ!!逆効果だ!!」

俺の言動に対して、草薙さんのツツコミにも似た叫びが響いた。

草薙さんがこう言うんだし、止めておいた方が良いな、うん。

「…これは、お前の恋人は気が気じゃないだろうな」

「うっ…そうなんですよね、大量のチョコレートを貰っている間、葵がずっとジト目で俺を睨んで…しかも全然口を聞いてくれなくて…」

「…まあ、そりやそうだろうな…自分の恋人が他の女にチョコレートを貰つてるところなんて見たら嫉妬するに決まってる」

うっ、心にグサツとくるな…俺は葵に色々嫌な想いをさせたんだろうな…なら、謝らないと！

ただ、葵は果たして俺に会ってくれるんだろうか…いや、ここでじつとしてもしょうがないな。

「…そうかもしれません、あの、すみませんけどこのチョコレートをしばらくの間、預かっててくれませんか？今から、行くところがあるので」

「俺達が…？」

遊作が驚いたように声を上げ、俺にそう聞き返した。

「うん…悪いけど頼むよ」

「…わかった、草薙さんもそれで良いか？」

「ああ、それで構わない…神薙、ちゃんと仲直りしてこいよ！」

「ありがとう！二人共！それじゃあ行ってくるよ！」

そう言って、俺は走り出した…大切な人が居る場所に向かって。



「…侑哉」

1人、自分の部屋でそう呟く。

襲ってくるのは後悔の思い、どうして私は変な意地を張ってしまっただらう。

私はただ、侑哉にチョコレートを渡したかっただけなのに…侑哉が色んな女子からチョコレートを渡されるのを見て、嫉妬してしまっただ。

その結果、意地になって侑哉と一切口を聞かなかった…侑哉と話せないのはつらいに決まっているのに。

「侑哉に嫌われちゃったかな…まあ、嫌われてもしようがないわよね…」

でも、もしかしたら…侑哉が私と仲直りしにきてくれるかもしれない、そんなことを期待してしまう。

我ながら侑哉の優しさに甘えすぎだと思う…だから、もし侑哉が来てくれたら私の方から謝ろう。

「よし…そうと決まったらさっそく侑哉に連絡しよう！直接会って、謝りたいって…」

私はそう思って、さっそく侑哉に連絡した。

「もしもし、侑哉？」

『うん？ 葵か…どうしたんだ？』

そう電話越しから聞こえる声は穏やかで、私はそつと胸を撫で下ろした。

「ね、ねえ…侑哉、今どこに居るの？ 今日のこと直接会って謝りたいの…」

『……』

「侑哉…？ やっぱり怒ってる？ 今日のこと…」

恐る恐る侑哉にそう尋ねる…さつきから侑哉から返事が返って来なくて、不安になる。

やっぱり侑哉、怒ってるわよね…もしかしたら、このまま――

『あ、ごめんごめん…葵も俺と同じように考えていたんだなって思ってた…』

「え…?」

侑哉の予想外の返事に思わずそう呟く。

『実は今、葵の家の前に居るんだよ…今日のこと、ちゃんと謝ろうって思ってたよ』

侑哉の言葉に思わず外を見ると、そこには電話を耳に当てながら立っている侑哉の姿があった。

「嘘…待ってて、すぐに行くから!」

そう言って、電話を切り玄関に向かって歩を進める。

玄関まで辿り着いて、ドアを開ける…そこにはいつもと変わらない侑哉の姿があった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「お邪魔します…」

侑哉を促しながら、家の中へと案内する。

そして、そのまま近くのソファーに侑哉を座らせる。

「……………」

「……………」

お互いに沈黙したまま向きあう。

このままじゃいけない…ちゃんと謝るって決めたじゃない!

「侑哉!!」

「お、おう…」

「その、今日はごめんなさい!私、勝手に嫉妬して…侑哉を傷つけた…本当にごめんなさい!」

「…いや、謝るのはこっちの方だよ…葵に嫌な思いさせちゃったよな、ごめん」

「そんな…侑哉は何も悪くないわよ…私が勝手に嫉妬して意地になっちゃっただけで、侑哉が謝ることなんて何もないわよ…」

「…それでも、ごめん…」

実際、侑哉は何も悪くない…私が嫉妬深いせいであんなことになつたはずなのに、侑哉は自分が悪いことをしたと思ってる…

本当に侑哉は優しい…優しすぎるくらいに。

まあ、そんな侑哉だからこそ私は好きになつたんだろうなあ…

「ありがとう、侑哉…」

「えっと…どういたしまして、で良いのか?」

「うん…ねえ、侑哉…」

「どうしたんだ?」

「はい、これ…」

ずつと後ろに隠してあつた、ラッピングされたチョコレートを侑哉に手渡す。

「これって…!」

「バレンタインチョコ…その、チョコレートを作つたのって初めてだから、もしかしたら形が不恰好かもしれないけど…」

「今ここで食べても良いか?」

「もちろんよ…安心して!味見はちゃんとしたから味には問題ないはずだから…」

慌てて、そう付け足すと侑哉は少し笑みを浮かべながらこう言った。

「それは、心配してないよ…そもそも葵が俺の為に作ってくれたってだけでもものすごく嬉しいからさ…」

「あ、ありがとう…侑哉…」

侑哉の反応に恥ずかしくなつて、思わず目を逸らす。

「それじゃあ、さっそく食べさせてもらおうよ!」

「ど、どうぞ…!」

私がそう促すと、侑哉は丁寧にラッピングを剥がしながら、チョコレートを取り出した。

「こ、これは…何か照れるな…」

侑哉の取り出したチョコには大好きと、クリームで書いてあり、自分で改めて見てみると照れくささを感じてしまう。

「それじゃあ、頂きます！」

侑哉はそう言つて、チョコを口に運ぶ。

「…どう？」

「これは…」

「これは…？」

「めちやくちや美味しいよ!!これなら、いくらでも食べられそうだよ！」

侑哉はそう言つて、次から次へとチョコを口に運んでいく。

…良かった、上手く作れたみたい。

「ふう、ご馳走さま!ありがとな、葵！」

「うん…!どういたしまして!…でも、他にもチョコレートを貰つたから、私から貰つてもそこまで嬉しくないわよね…」

「確かに、他の人からもチョコレートを貰ったけど…葵から貰ったチョコレートは他の誰よりも嬉しいよ!!葵のチョコレートを一番最初に食べたかったから、まだ他の人から貰ったチョコレートを食べてないしね」

「え…?」

侑哉の言葉に思わずそう聞き返す。

「だって、大好きな人から貰うチョコレートを一番最初に食べたいって思ったからさ…」

侑哉は少し照れくさそうにそう言った。

「侑哉…」

「あ、そうだ…葵、これ良かったら受け取ってくれないか？」

「え…これって」

侑哉が私に差し出したのは1輪の赤色のバラの花だった。

「前に、海外ではバレンタインデーの日は男の人が送り物を渡すって話を聞いたから、仲直りするためにも何かプレゼントしようって思つて、ここに来る前に花屋さんに行つてきてたんだよ」

まあ、ベタな送り物かもしれないけど、と侑哉は最後に付けたしなから苦笑していた。

「侑哉…!」

気づけば私は侑哉に抱きついていた。

「葵…?」

「ありがとう、侑哉…大好き」

「うん…俺も大好きだよ、葵…」

そう言つて、私達はそつと口づけを交わした。

今日のキスはチョコレートのように甘くて、少し苦い味がした。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ところで、草薙さん…侑哉から預かったチョコレートはどうするつもりだ?」

「俺とお前の二人で食うか…多分、神薙のやつは今日は戻ってこないだろうしな」

「この量を、か…?」

「ああ、元々あいつもこのチョコレートをどうするか、つてことでお前に相談しに来たわけだしな」

「確かに、そうだが…この量は胸焼けしそうだな」

「まあ、余ったら神薙に返せば良いだけだし、問題ないだろう」

「…俺はしばらく、チョコレートはいららないな」

「ああ、そうだな…」

「あれ?草薙さんに遊作君じゃない!」

俺達が侑哉のチョコの処理に頭を悩ませていると、栗色の長い髪の毛の女性が訪ねてきた。

「花恋さん…!いらつしやい!」

「こんにちは…」

「どうも!いつも侑哉がお世話になってます!そういえば、侑哉のこと見ませんでしたか?」

「神薙の奴なら彼女の所に行きましたよ」

「はあ…やっぱりね、本当に葵ちゃんが大好きなのね」

花恋さんは、呆れた表情をしながら、そう言った。

「あ、そうだ…!はいどうぞ!草薙さん!私は料理が苦手なので手作

りってわけにはいかないけど、チョコレートです!」

花恋さんは、そう言っただけで綺麗に包装されたチョコレートを草薙さんに手渡した。

「ありがとうございます!まさか、花恋さんからチョコレートを貰えるとは思っていませんでしたよ!どうだ、遊作:花恋さんからチョコレートを貰ったぞ」

草薙さんはそう言っただけで、嬉しそうどこか得意げな顔を俺に向けてきた。

とりあえず、そのドヤ顔をやめろ!草薙さん:!

そう心の中で叫びながらも、この空気を壊すのは憚られたので、口にはしなかった。

「はい、遊作君にも!」

「え:?:俺にもですか?」

「そうそう!侑哉がいつもお世話になってるから、そのお礼も兼ねて、ね?」

「は、はあ:~それじゃあ頂きます」

俺はそう言っただけで、花恋さんからチョコレートを受け取った。

「えっと、すみません:~ありがとうございます、花恋さん:~」

「良いの良いの!気にしないで!私が渡したくて渡したわけだし」

花恋さんは、そう言っただけで笑みを浮かべた。

わかってはいたことだが、花恋さんはキレイな人だ:~だから、笑った顔が余計にキレイで思わず見惚れてしまう。

:~俺らしくもないな、こんなことを思うなんて。

「それじゃあ、私は帰りますね!」

「はい!またのお越しをお待ちしています!」

花恋さんは、1度俺達にお辞儀しながらそのまま、帰っていった。

「:~お返し、しつかりとしないとな:~」

『あれ?遊作、今ちよっと嬉しそうだったな』

Aiが、からかうようにそうつぶやいた。

「何の話しだ?」

『またまた、あの、キレイなお姉さんからチョコ貰って嬉しかったんだろ?』

「何!?遊作、お前も花恋さんを狙ってるのか?」

「いや、ちよつと待ってくれ草薙さん…何のことだ?」

「くっ…まさか遊作まで…だが、例え遊作でも負けるつもりはないぞ!」

さつきから草薙さんは何を言ってるんだ…確かに、花恋さんはキレイな人だとは思うが、別に好きというわけでは…いや、だが嫌いというわけでも…

「よく分からないな…」

草薙さんが色々と騒いでいるのを聞きながら、俺はそう呟いた。

第30話 鎮魂の竜

「今のところは侑哉達が優勢ですね」

「そうね、久しぶりに侑哉の本気を垣間見た気がするわ」

「え…?」

花恋さんが侑哉を監視、もとい守るために仕掛けておいたカメラの映像を見ながらそんな会話を交わす。

「もちろん、普段から侑哉は全力で戦っているわ…ただ、最大限の本気を出してはいないの」

「それって、どういうことですか?」

「まあ、簡単に言えば侑哉が本気を出したら状況によつてはあれ以上に色々と展開できるってことよ」

「あれ以上に…!?!」

花恋さんの言葉に思わずそんな言葉が漏れる。

侑哉は普段からあんなに強いのに…それでもまだまだ全力を出しきっていないなんて…

「…侑哉はやっぱ強いですね」

—— 私なんかじゃ、到底追いつけないぐらいに。

「…葵ちゃん、自分の事を卑下しないで…侑哉は確かに強いわ、でもそれは葵ちゃんが居るからこそなんだから!」

「私が…?」

「そうそう、侑哉はいつも言ってるわよ、『俺は見ている人達も楽しませたいけど、何より葵を一番楽しませたいんだ!』ってね…だから、葵ちゃんに楽しんでもらえるように色々とデツキを弄ってるみたいよ」

「私の為に…?」

花恋さんの話を聞いて、気恥ずかしさを感じると同時に嬉しくなってくる。

侑哉がそんな事を言ってくれていたのが嬉しくて…私の為にデユエルをしていてくれていたことが嬉しくて。

「…さあ、侑哉を応援するわよ! 葵ちゃん!…まあ、侑哉は私達が見ていることは知らないでしょうけどね」

「はー！」



「私のターン、ドロー！」

リボルバー LP2900

手札0↓1

場 EXモンスターゾーン ヴァレルロードドラゴンLINK4
(ATK3000) リンクマーカー右/左/右下/左下

メインモンスターゾーン オートヴァレットドラゴン攻撃表示(ATK1600)

伏せなし

Pゾーンなし

playmaker LP2000

手札1

場 EXモンスターゾーン ファイアウォールドドラゴンLINK4
(ATK2500↓2800) リンクマーカー上/下/左/右

メインモンスターゾーンなし

伏せ2

Pゾーンなし

フィールド魔法 サイバネットユニバース

Phantom LP3500

手札3(内2枚、『EMレインゴート』、『EMオッドアイズディゾルヴァー』)

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン プロキシードドラゴンLINK2(ATK

1400)リンクマーク左/右

スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン攻撃表示(ATK2800)

クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴン攻撃表示(ATK3000)

伏せ2(内1枚、補給部隊)

Pゾーン ライトPゾーンなし

レフトPゾーン EMオッドアイズシンクロン(スケール6)

「少々厳しい状況だな…まあ、まずは手札補充から始めるか…私は手札から魔法カード、『スクイブドロー』を発動！このカードは自分フィールドのヴァレットモンスター1体を破壊し、デッキからカードを2枚ドローできるカード、私は『オートヴァレットドラゴン』を破壊し、2枚ドロー！」

リボルバー手札1↓0↓2

「さらに、魔法カード、『マークスチャージ』を発動！EXモンスターゾーンに同じリンクのモンスターが2体存在する時、デッキからカードを2枚ドローし、お互いにドローカードを確認する！」

リボルバー手札2↓1↓3

「ほう…これはおもしろいカードを引いた…私がドローしたカードは『リボルブートセクター』と『皆既日蝕の書』だ、そして、私は今ドローした『皆既日蝕の書』を発動する！このカードの効果によりフィールド上の表側表示のモンスターを全て裏側表示にする！守備力を持たないリンクモンスターには無意味だが、それ以外のモンスターを裏側表示にする！」

「それ以外って…俺の場のクリスタルウイングとスターヴ・ヴェノムぐらいなものじゃないか！」

「その通りだ、もう1体の効果はわからないが、恐らくクリスタルウイングはクリアウイングの進化した姿…ならば、その効果はクリアウイングの上位互換のはずだ、厄介なカードは早めに対処しなくてはな」「くっ…！」

皆既日蝕の効果により、俺の場のクリスタルウィングとスターヴ・ヴェノムが裏側になってしまった。

リボルバーの奴、皆既日蝕を持っていたなんてな…これでクリスタルウィングの効果は使えないし、スターヴ・ヴェノムが破壊された時に発動する効果も使えない。

さすがリボルバーってところだな…まあ、だからこそ面白いんだけどね。

「そして、私はフィールド魔法、『リボルブートセクター』を発動！このカードの効果、相手フィールド上のモンスターの数が自分のモンスターの数より多い時、その差分だけ墓地のヴァレットモンスターを特殊召喚できる！対象となる相手はPhantom、お前だ」

「まあ、そうなるよな…」

「お前とのモンスターの差は2体、よって私は墓地の『マグナヴァレットドラゴン』と『オートヴァレットドラゴン』を特殊召喚する！さらに、リボルブートセクターの効果により私のフィールドのヴァレットモンスターの攻守は300ポイントアップする！」

マグナヴァレットドラゴン攻撃表示(ATK1800↓2100)

オートヴァレットドラゴン攻撃表示(ATK1600↓1900)

ヴァレットモンスターを特殊召喚する効果に攻守をアップさせる効果か…！

厄介な効果だな…って、この状況やばくないか？

「私はヴァレルロードの効果発動！私はマグナヴァレットの攻守を500ポイント下げる」

『え!?自分のモンスターの攻守を下げちゃうの?』

「いや、これで良いんだ…あのヴァレットモンスターの効果を発動するにはな」

『どういうことだ?』

「見ていればわかる」

「この瞬間、マグナヴァレットは破壊される…そして、その後、フィールド上モンスター1体を選んで墓地へ送る！私は裏側になっている

クリスタルウイングを墓地へ送る！」

「くっ…まあ、そうくるよな」

やっぱり、マグナヴァレットの効果は強いな…まあ、他のヴァレットモンスターにも言えることだけだ。

「これで厄介なカードは消し去った…バトルだ！『オートヴァレットドラゴン』で『プロキシードドラゴン』に攻撃！」

「そうはさせないよ！手札のオッドアイズディゾルヴァーの効果！自分のモンスターが戦闘を行う時、手札のこのカードを特殊召喚できる！来い、オッドアイズディゾルヴァー！」

EMオッドアイズディゾルヴァー守備表示(DEF2600)

「そして、自分のモンスターはこの戦闘では破壊されない！」

「だが、ダメージは受けてもらう！」

「ぐっ…！」

Phantom LP3500↓3000

「さらに、『ヴァレルロードドラゴン』で『ファイアウールドドラゴン』を攻撃！この瞬間、ヴァレルロードの効果発動！このカードが相手モンスターと戦闘を行う時、そのモンスターのコントロールを得る！ストレンジトリガー！」

ヴァレルロードの効果によりファイアウールドドラゴンがリボルバーの場に出現した。

『俺達のすげえドラゴンが相手のすげえドラゴンに取られた！』

「コントロール奪取効果か…！Phantomの言った通り、ヴァレルロードは強力なモンスターだな…」

「言った通りだったろ？」

「ああ…それよりPhantom」

「どうした？」

「俺にはリボルバーの攻撃を防ぐ手段があるが、それはお前にも影響を与えるカードだ…それを使用しても良いか？」

playmakerは俺の方を見ながらそう尋ねてくる。

俺にも影響を与えるカードか…どんなカードなんだ？」

「…構わないよ、どんなカードを使われても俺は立て直せると思うし」

「…わかった、そういうことなら遠慮なく使わせてもらう」

「作戦会議は終わったか？ではいくぞ！私は、『ファイアウォールドラゴン』で playmaker にダイレクトアタック！」

「そうはさせない！罠発動！『サイバネトリフレッシュ』！相手のサイバースモンスターが攻撃宣言をした時に発動できる！お互いのメインモンスターゾーンのモンスターを全て破壊する！」

「なるほど、メインモンスターゾーンのモンスターを破壊する効果か…！だが、それでは Phantom の場のモンスターも破壊されるぞ？」

「俺は、あいつを信じる…あいつが立て直せると言っていたんだ、なら、きつと大丈夫だ」

なるほど、playmaker が言っていたことはこういうことか…確かに、俺のカードに影響を与えるカードだな…

でも、これならなんとかなる！

「俺は『プロキシードラゴン』の効果発動！自分フィールド上のカードが戦闘、効果で破壊される時、代わりにこのカードのリンク先のモンスターを破壊できる！俺はオツドアイズディゾルヴァーを破壊する！」

これでサイバネトリフレッシュの効果で俺のモンスターが全滅するのは避けられたな。

「さらに、補給部隊の効果で1枚ドロー！」

Phantom2↓3

「くつ、私はカードを1枚伏せて、ターンを終了する！そして、この瞬間、破壊されたマグナヴァレットとオートヴァレットの効果発動！デッキから自身以外のヴァレットモンスターを特殊召喚する！マグナヴァレットの効果で『アネスヴァレットドラゴン』をオートヴァレットの効果で『マグナヴァレットドラゴン』を特殊召喚する！」

アネスヴァレットドラゴン守備表示 (DEF2200↓2500)

マグナヴァレットドラゴン守備表示 (DEF1200↓1500)

「そして、裏側にされたスターヴ・ヴェノムは表側表示となり、表側表

示になったモンスターの数だけ相手はカードをドローできる…よつて、Phantom、お前はデッキからカードを1枚ドローできる」
「それじゃあドローさせてもらうよ」

スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン守備表示 (DEF2000)

Phantom手札3↓4

「サイバネットリフレッシュの効果！エンドフェイズにこのカードの効果で破壊されたサイバースモンスターを元の持ち主の場に特殊召喚する！蘇れ！『ファイアウォールドラゴン』!!さらに、サイバネットユニバースの効果により攻撃力が300ポイントアップする！」

ファイアウォールドラゴンLINK4 (ATK2500↓2800) リンクマーカール上/下/左/右

リボルバー LP2900

手札0

場 EXモンスターゾーン ヴアレルロードドラゴンLINK4 (ATK3000) リンクマーカール右/左/右下/左下

メインモンスターゾーン アネスヴァレットドラゴン守備表示 (DEF2200↓2500)

マグナヴァレットドラゴン守備表示 (DEF1200↓1500)
伏せ1

Pゾーンなし

playmaker LP200

手札1

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン ファイアウォールドラゴンLINK4 (ATK2500↓2800) リンクマーカール上/下/左/右

伏せ1

Pゾーンなし

フィールド魔法 サイバネットユニバース

Phantom LP3000

手札4 (内1枚、『EMレインゴート』)

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン プロキシードドラゴンLINK2 (ATK
1400) リンクマーカー左/右

スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン守備表示 (DEF2
000)

伏せ2 (内1枚、『補給部隊』)

Pゾーン ライトPゾーンなし

レフトPゾーン EMオッドアイズシンクロン (スケール6)

「俺のターン、ドロー!」

playmaker手札1↓2

「それじゃあ、今のタイミングで罠発動! 『ヒーリックギフト』! このカードは相手のライフを8000にすることでデッキからカードを2枚ドローできる! 俺はplaymakerのライフを8000にして、2枚ドロー!」

playmaker LP2000↓8000

Phantom手札4↓6

「Phantom、お前!」

「一応、念のためにね…攻撃してダメージが跳ね返ってきたりしたら、playmakerのライフが一瞬で0になっちゃうかもしれないし」

実際、リボルバーが何のカードを伏せているかわからない以上、ある程度準備をしておいて損はない。

「…礼を言う、これでライフを気にせず戦える! 俺は『サイバネットユニバース』の効果を発動! 自分、または相手の墓地のモンスター1体をデッキに戻す! 俺は俺の墓地の『エンコードトーカー』をEXデッキに戻す!」

エンコードトーカーをEXデッキに戻したか…ということと呼び出す方法があるってことか。

「そして、罨発動！『リコードットアライブ』！自分のフィールド、墓地に存在するリンク3のモンスターを除外し、EXデッキからコードトーカーモンスターを特殊召喚する！俺は墓地の『デコードトーカー』を除外し、『エンコードトーカー』を特殊召喚する！現れる、『エンコードトーカー』!!」

エンコードトーカーLINK3（ATK2300↓2600）リンク
クマーカー上／下／右下

へえ、コードトーカーモンスター限定とはいえ、リンク3のモンスターを除外してEXデッキから呼び出せるのか…俺のデッキに組み込みたいぜ！

そういえば、他のコードトーカーモンスターってどれだけ居るんだろうな…まあ、今はデュエルに集中するか。

「さらに、手札から魔法カード、『破天荒な風』を発動！このカードの効果により、次の自分のスタンバイフェイズまで自分のモンスターの攻撃力を1000ポイントアップする！俺は、『エンコードトーカー』の攻撃力をアップする！」

エンコードトーカーLINK3（ATK2600↓3600）

これで、リボルバーのライフを削りきれれるけど…そう簡単に通してくれるのか？

「俺には絶対に負けられない理由が3つある…1つ、俺はお前達を破滅させ10年前の真実を突き止める。2つ、そして、俺は失った時間を取り戻す。3つ、俺は俺を助けてくれた友を救う」

俺がリボルバーが攻撃を通してくれるかを考えていると、playmakerが決意を語り始めた。

10年前の真実…？10年前に何かあったのか？

もしかして、10年前の事がplaymakerがハノイの騎士に復讐しようとしている理由なのか？

「10年前…3つ…まさかお前は10年前の事件の…」

「そうさ…俺はその復讐の使者だ！」

「ちよつと待ってくれ…10年前の事件って何なんだ？」

俺がそう尋ねると、リボルバーが少し間をあけてこう答えた。

「…そうだな、Phantom…お前とも無関係とは言い難いかもしれんな…」

「え、それってどういう…」

「だが、今はそれを話すわけにはいかん…お前の身の安全のためにもな」

俺の身の安全？ どういうことなんだ…しかも、どうしてリボルバーが俺の身を案じる必要があるんだ？

「これだけは言っておく、お前達は何も真実を知らない…真実も知らぬままSOLテクノロジーに踊らされているのだ！」

リボルバーの声は僅かに震えていて、その声はどこか怒りに満ちていた。

SOLテクノロジーに踊らされている？ いや、正確には多分SOLテクノロジーの偉い人達かな…そいつらが10年前の事件を隠蔽したってことなのか？

ありそうな話しだけど、実際、どうなんだ？

「俺のすることはただひとつ、ハノイの騎士お前達を叩き潰し、全てを知ることだけだ！ いくぞ！ バトルだ！ まず俺は『ファイアワールドラゴン』で『ヴァレルロードラゴン』に攻撃！ テンペストアタック！」

「なるほど、『エンコードトーカー』の効果を使用するためか」

「その通りだ！ 『エンコードトーカー』の効果発動！ このカードのリンク先のモンスターが自身より攻撃力の高いモンスターと戦闘を行う時、そのカードは戦闘では破壊されず、ダメージも受けない！ さらに、戦闘を行った相手のモンスターの攻撃力分だけこのカード、または、このカードのリンク先のモンスターにその攻撃力を加算する！ 俺は『エンコードトーカー』に攻撃力を加算する！」

エンコードトーカーLINK3 (ATK3600↓6600) リンク
クマーカー上／下／右下

「そして、『エンコードトーカー』で『ヴァレルロードドラゴン』に攻撃！ファイナルエンコード！」

これが通ればリボルバーのライフが0になるけど…

「…残念だったな、お前の攻撃は私には届かない！毘発動！『和睦の使者』！このカードの効果により、私のモンスターはこのターン、戦闘では破壊されず戦闘ダメージも受けない！」

「何!？」

エンコードトーカーの攻撃がヴァレルロードに命中したかに思えたが、その攻撃は見えない壁に妨げられ、ヴァレルロードを破壊することができなかつた。

「これでお前の攻撃は終わりだ」

リボルバーのその言葉にplaymakerはフツ、と笑ってこう言った。

「…ああ、確かに俺の攻撃は終わった…だが、Phantomの攻撃はまだ残っている、ここでお前が伏せカードを使ったことで次のPhantomのターンに防ぐ手段がなくなりつつあるはずだ」

「…っ！まさか、playmaker…お前は私に伏せカードを使わせるためにわざと攻撃を仕掛けてきたのか！」

「今の状況では俺1人でお前を倒すことはできない、だが、Phantomと協力すればお前を倒せる」

「playmaker…ははっ、随分と期待してくれてるみたいだね、ならその期待に応えないとな！」

まさか、playmakerがこんなことをしてくれるなんて…なら、ここまでしてくれたplaymakerの期待に応えないとな。

「…フツ、なるほどな…1人では届かなくとも2人ならば届くということか…ならば、私を倒してみせろ…次のお前のターンで！」

リボルバーは俺の方を見ながら、そう言った。

「俺はこれでターンエンド、この瞬間、エンコードトーカーの攻撃力は元に戻る」

エンコードトーカー(ATK6600↓3600)

「悪いが、後は任せたぞ…Phantom」

「良いのか？俺に任せちゃって…」

「…今の状況ではお前に託すしかない…それにお前のことだ、恐らくまだ隠し玉があるんだろ？」

「…まあ、一応ね」

まだ見せていないカードはそれなりにある…それに今の手札には幸いなことにそれを出す方法もある。

「なら、それを見せてみる」

「…ああ！もちろんさ！さあいくよ！お楽しみはこれからだ！俺のターン、ドロー！」

Phantom手札6↓7

さてと、まずはリボルバーの場のマグナヴァレットをどうにかしないとな。

「俺は手札から魔法カード、『月の書』を発動！このカードの効果によりマグナヴァレットを裏側表示にする！」

「そう来たか…ならば、ヴァレルロードの効果発動！『マグナヴァレットドラゴン』の攻守を500下げる、そして、この瞬間マグナヴァレットは破壊され、その後フィールドのモンスター1体を選んで墓地に送る！私は『プロキシードラゴン』を墓地へ送る！」

「くっ…でもこれでマグナヴァレットとヴァレルロードの効果は使わせた！俺はさらに手札から魔法カード、『ペンデュラムパラボックス』を発動！このカードの効果でEXデッキに表側表示で存在する、スケールが同じで名前が異なるモンスターを2体手札に加える！俺は、『オッドアイズ・ファントム・ドラゴン』と『EMオッドアイズディゾルヴァー』を手札に加える！」

Phantom手札6↓5↓7

「Pカードを回収するカードか…！まだそんなカードを持っていたとはな」

「まだまだいくよ！俺はさらに空いているPゾーンにスケール3の

『EMオッドアイズライトフェニックス』をセットし、魔法カード、『ペンデュラムターン』を発動！このカードの効果でオッドアイズシンクロンのスケールを10に変更する！」

EMオッドアイズライトフェニックス（スケール3）

EMオッドアイズシンクロン（スケール6↓10）

これでレベル4〜9のモンスターが同時に召喚可能になった！

「今一度揺れる！運命の振り子！迫り来る時を刻み、未来と過去を行き交え！ペンデュラム召喚!!来い！俺のモンスター達！EXデッキから『EMドクロバットジョーカー』、手札から『EMセカンドンキー』、『EMオッドアイズディゾルヴァー』、そして、『オッドアイズ・ファントム・ドラゴン』!!」

EMドクロバットジョーカー攻撃表示（ATK1800）

EMセカンドンキー攻撃表示（ATK1000）

EMオッドアイズディゾルヴァー攻撃表示（ATK2000）

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン攻撃表示（ATK2500）

「セカンドンキーの効果発動！このカードが召喚、特殊召喚に成功した時、デッキからセカンドンキー以外のEMモンスターを墓地へ送る、俺は『EMギツタンバツタ』を墓地へ送るよ…ま、今はあんまり意味はないけどね」

俺はそう言いながら、デッキからギツタンバツタを墓地へ送った。

「さあ、いくよ！俺はセカンドンキーとドクロバットジョーカーの2体でオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！漆黒の闇より！愚鈍なる力に抗う反逆の牙！今、降臨せよ！エクシーズ召喚!!現れる！ランク4、『ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン』!!」

ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンランク 4 攻撃表示（ATK2500）ORU2

「エクシーズ召喚か…融合、シンクロ、エクシーズ、ペンデュラム、さらにはリンク召喚…このデュエルだけでEXデッキを利用する戦略をここまで使用するとはな」

「ははっ、確かにそうだね：俺もここまで展開できるとは思ってたな
かったよ：でも、まだまだお楽しみはこれからさ！まずは、ダークリ
ベリオンの効果発動！ORUを2つ使い、相手モンスター1体の攻撃
力を半分にし、その数値分だけダークリベリオンの攻撃力をアップす
る！俺は『ファイアウォールドラゴン』の攻撃力を半分にしその数値
分だけアップする！playmaker、力を借りるよ！」

「ああ、構わない」

ファイアウォールドラゴン（ATK2800↓1400）

ダーク・リベリオン・エクシース・ドラゴン（ATK2500↓3
900）

「さあ、ここからもう一工夫だ！俺は手札から魔法カード、『RUM―
幻影騎士団ラウンチ』を発動！このカードは自分フィールド上のエク
シース素材のない闇属性エクシースモンスターとこのカードを素材
にして、同じ属性でランクの1つ高いエクシースモンスターにランク
アップさせる！」

「ランクアップマジックだど!?!」

「俺はダークリベリオンを素材にオーバーレイネットワークを再構築
！煉獄の底より！未だ鎮まらぬ魂に捧げる反逆の歌！永久に響かせ
現れる！ランクアップエクシースチェンジ！来い！ランク5、『ダー
ク・レクイエム・エクシース・ドラゴン』!!」

ダーク・レクイエム・エクシース・ドラゴン ランク5攻撃表示（A
TK3000）ORU2

「ランクアップマジック：：これもお前の切り札のひとつか、フツ：ど
こまでも楽しませてくれる男だ：：」

リボルバーは楽しそうな様子で俺にそう言った。

「そこまで言ってくれるなら、このカードを見せた甲斐があるっても
んだよ！それじゃあ、いくよ！『ダーク・レクイエム・エクシース・
ドラゴン』の効果発動！1ターンに1度ORUを1つ使い、相手モン
スター1体の攻撃力を0にし、そのモンスターの元々の攻撃力分だけ
ダークレクイエムの攻撃力をアップする！俺はファイアウォールドの
攻撃力を0にし、ダークレクイエムの攻撃力をアップする！レクイエ

ムサルベージョン！」

ダーク・レクイエム・エクシーズ・ドラゴン（ATK3000↓5500）

ヴァレルロードドラゴンはモンスター効果の対象にならない、けど、これはバトルロワイヤルルールだ：相手にはPlaymakerも含まれる！

「さあ、いくよ！俺はスターヴヴェノムを攻撃表示にして、バトル！『ダーク・レクイエム・エクシーズ・ドラゴン』で、『ヴァレルロードドラゴン』に攻撃！鎮魂のディザスターデイスオベイ!!」

ダークレクイエムが飛び立ち、翼に力を収束させる、その翼はステンドグラスのように輝いて、その翼に収束させた力をヴァレルロードに向けて放った。

「ぐうう!!」

リボルバー LP2900↓400

「さらに、『スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン』で『アネスヴァレットドラゴン』に攻撃！」

「ぐっ…!」

これでリボルバーの場は空いた！

「お楽しみはこれまでだ！『オッドアイズ・ファントム・ドラゴン』でリボルバーにダイレクトアタック!!夢幻のスパイラルフレイム!!」

オッドアイズから放たれた攻撃は渦巻きながらリボルバーに向かっていき、そして、そのままリボルバーへと直撃した。

「ぐ、ぐああああ!!」

リボルバー LP400↓0

オッドアイズの攻撃により、リボルバーは大きく後ろに飛ばされ、その勢いのまま、岩へとぶつかった。

「ちよっ、大丈夫か？リボルバー！ごめん、やりすぎたかも…」

「…ぐっ、全く…先ほどまで戦っていた相手のことを心配するとはな…本当に変わった男だ…」

リボルバーはそう言つて、苦笑した。

一応、大丈夫…なのか？

まあ、大丈夫なら良いんだけど。

「約束通り、お前達の情報を貰う！」

『俺が食ってやる！』

デュエルディスクからA iの声が聞こえたかと思うと、A iが今まで見たことのない姿をして、リボルバーに襲いかかった。

リボルバーは咄嗟にそれをかわしたが、かわし切れず右腕をA iに食べられた。

「何がどうなってるんだ？」

『全部だ！全部食ってやる！』

A iはそう言って、尚もリボルバーに襲いかかる…だが、その直後、眩い光が辺りに広がった。

「父さん…！」

『グオオオ！動けねえ！』

「くっ、外部からの干渉か…！戻れ、A i！」

『くっそおお！』

悔しそうな声を上げながら、A iはplaymakerのデュエルディスクに戻っていった。

「…何かよくわからないけど、とりあえずは大丈夫になったのか？…

そうだ、リボルバーは!?!」

俺が慌てて、周りを見渡すとリボルバーは謎の光に吸い込まれて、空中に浮いていた。

「約束は守る…受けとれ！」

そう言って、リボルバーは俺に向かってカード状のプログラムを投げてきた。

「除去プログラムだ…恐らく、お前は電腦ウイルスを完全に除去できたわけではない…だが、これで完全に電腦ウイルスを除去できるはずだ」

「そっか、ありがとな！リボルバー！今度戦う時は1対1でデュエルしようぜ！」

「フツ、良いだろう……playmaker、Phantom、今日は私の風は吹かなかったようだ…だが、playmakerお前がその

AIを手に行っている以上、これは始まりのデュエルにすぎない…お前とは、いやお前達とはいずれまた…」

最後にリボルバーはそう言って消えていった。

「始まりのデュエルか……とりあえず、playmaker…まずはお互いに情報を話した方が良いな、色々と気になることもあるし」

「…ああ、そうだな」

そう言つて、playmakerはデュエルディスクを操作し始めた。

「どういうつもりなんだ…？」

「ん？」

俺がそんなことを思っていると、俺のデュエルディスクにメッセージが届いた。

「これって…!？」

「お前の時間がある時で構わない、その場所に来い……ここでお互いの情報を確認する」

「あ、ああ……わかった」

「じゃあな」

そう言つて、playmakerも消えてしまった。

それにしても、この場所に来いって……つまり現実で情報を交換するってことだよな……それって大丈夫なのか？

…いや、俺は大丈夫かはわからないけど……playmakerは多分、身バレはしていないだろうし現実の方が意味安全か。

「…さあて、俺も帰るかな」

葵も心配してるかもしれないしな…

俺はそんなことを思いながら、ログアウトした。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「すみません、父さん…イグニスを奪うことができませんでした」

「さすがのお前でも、あの二人を同時に相手にするのは無理があったか」

「…ですが、次こそは必ずイグニスを奪ってみせます！」

「…ならば、お前に任せよう…だが、万が一イグニスを奪えなかった時は計画を最終段階に進めなければならぬかもしれないかもしれんな…」

「あの計画を、ですか!？」

「ああ、そうだ…：…それにしても、まさかまだリンクアクセスの能力を持っている人間が居たとはな」

鴻上博士はどこか悲しげな様子でそう口にした。

「わかっているな、リボルバー…：Phantomの持つリンクアクセスの力は絶対にSOLテクノロジーに知られてはならない」

「はい、わかっています…」

リボルバーはそう言葉を口にする。

その言葉の奥に様々な感情を抱きながら。

第31話 邂逅

「ふう、何か緊張するな…」

俺は喫茶店の前で誰にも聞こえないぐらいの声でそう呟く。

今日、俺がここに来たのはある人から連絡を受けたからだ…その連絡をしてきた人物が人物だけにこんなふう緊張しているわけなんだけど。

「とりあえず、中に入るか…」

俺はそう言つて、喫茶店の中に入っていった。

「さてと、どこに居るんだ？」

俺は喫茶店に入るなり、辺りを見渡し、俺に連絡をしてきた人物を探した。

そうして、しばらく探していると奥の席にコーヒーを口になっている人物が目に入った。

「…あ、どうも一応初めましてですかね？」

「そうだな、連絡をした時に顔を合わせてはいるがこうして直接会うのは初めてだろう…今日はよく来てくれたね、侑哉君」

「はい、それで話して何ですか？ 晃さん…」

そう、今日俺をここに呼んだのは葵のお兄さんである財前晃、その人だ。

今日の朝方に急に連絡が来て、話しがあると言われてここに来ることになったんだけど…やっぱり、何か緊張するんだよな。

「まあ、そんなに畏まらなくても大丈夫だ…楽にしてくれ」

「は、はあ…わかりました」

晃さんに楽にするように促され、少し体の緊張を解いた。

「今日、君をここに呼んだのは特に深い理由はない…単純に君と一度話しをしたくてね」

「え…？」

晃さんの答えに思わずそう聞き返す。

「もちろん、それだけではないさ…君にお礼を言いたいという、理由もある」

「俺はお礼を言われるようなことはしてない気がしますが…」

「…葵を救ってくれたじゃないか、それも自らの危険も省みずに…だからこそ、お礼を言わせて欲しい、葵を救ってくれてありがとう…」なるほど、晃さんがお礼を言いたかったことはあの時のことか。「単純に葵を助けたかっただけですよ…それに結局は葵に助けられましたし、むしろお礼を言うのはこっちの方ですよ」

「そんなことはない！君が葵を助けてくれなければ、今頃、葵はどうなっていたかわからない…君は自分を過小評価しすぎだ」

俺の返答にそう返す晃さんの様子は真剣そのもので心からそう思っていることが伝わってきた。

「…ありがとうございます、そう言っただけだと気が楽になります」

「私だけではない、葵も同じことを思っているはずだ」

「そう、ですか…それならすごく嬉しいな」

ふと、葵の顔が頭に浮かぶ。

それだけでなんだか笑みが零れてくる…そういえば、葵とのデートについてちゃんと考えないとな、葵はどういうデートなら喜んでくれるだろうか。

「今、葵のことを考えていたね」

俺が葵とのデートについて考えていると、晃さんが少し微笑ましそうにそう言った。

「え…？何でわかったんですか？」

「葵が君のことを考えている時と同じ顔をしていたからだ…安心したよ、君は本当に葵のことを愛してくれているようだ」

そう言っただけ、晃さんは笑みを浮かべた。

「ははっ、何か照れますね…」

「…ところで式はいつ頃挙げるつもりだい？私もできる限りは協力するが？」

「待ってください！いきなり話しが飛びすぎです！」

「今の内に将来設計について考えておくに越したことはないぞ？」

うどそういう事に関心がある協力者も居るからね」

協力者…？ 一体どんな人なんだ…まあ、今は聞かなくても良いか。

「…ところで侑哉君、君は10年前の事件について調べようと思っ
ているのか？」

「…はい、知りたいことがあるので」

リボルバーは10年前の事件に俺も無関係とは言いがたいかもしれないと言っていた…それに、俺の身の安全の為に詳しく事情は話せないとも言っていた。

俺の持つリンクアクセスの力、それが一体何なのか…それを俺は知りたい。

「そうか…だが、無茶はしないでほしい、君が居なくなったら今度こそ
葵は立ち直れなくなってしまう…危険だと判断したらすぐに手を引
くんだ、良いね？」

「…はい、わかりました…約束はできませんが努力はします」

「ああ、頼む…君が意識を失っていた時の葵は見ていられなかった、
その時の葵はまるでこの世界に絶望しているかのようだった、この世
界で生きる意味を失っているそんな顔をしていた」

晃さんは、とても辛そうな表情をしながらそう言った。

その言葉に、胸が痛くなる…実際、葵にはかなり心配をかけ
ちやったからな…もし、俺が葵の立場だったら同じような気持ちにな
るだろうし。

「…葵の中で君はそれほど大きな存在になっているんだ、だから無茶
はしないでくれ」

「…はい」

念を押すように晃さんにそう言われて、そう答えた。

「さて、この話しは…ここまでにするとして…君の話しを聞かせてくれ、
未来の義弟について色々を知っておきたいからね」

「義弟!? いや、確かに葵と結婚すればそうなりますけど…うーん、参っ
たなあ…」

晃さん、いくらなんでも気が早すぎやしないだろうか…そう口にし
たいのをぐつとこらえ、ふと考える。

でも、これってある意味、親公認みたいなものなんじゃないだろうか…それならむしろ喜ばしいことだよな。

うん、そうだよな！

「…まあ、俺の話して良ければお話ししますよ」

「ありがとう」

そう言つて、晃さんは笑みを浮かべた。

その後、俺の好きなものや趣味といった他愛のない会話を交わしながら、時間が過ぎていった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「…ここか」

晃さんとの話しが終わり、playmakerに来るように言われた場所でそう呟く。

その場所は草薙さんのホットドッグの店で、正直、驚いている。

「…来たか」

「あれ？遊作…今日も草薙さんの店に来てたのか」

「…付いてこい」

「あ、ああわかった」

遊作に付いてくるよう促され、その後続く。

そして、そのまま遊作に付いていくと草薙さんの店の中に入った。いった。

「よっ、神薙！」

「草薙さん!?!いや、草薙さんが居ること自体はおかしくないんですけど…ここって本当にホットドッグの店の中なんですか?」

店の中に入ると、何やら色んな機器が並んでいて、とてもじゃないがホットドッグを売っている店の中とは思えなかった。

「まあ、確かにそういう反応になるのも無理はないな…それにしても驚いたぞ…まさか遊作が、ここにお前を連れてくるとはな」

どういう心境の変化だ?と、草薙さんは付け足して遊作の方を見た。

「別に深い意味はない、こいつに正体を明かした方が協力を仰ぎやす

い…そう考えただけだ」

「協力、か…そんな言葉が出る時点で心境が変化してるじゃないか」

「あのく、とりあえず話が見えないんだけど…playmakerの正体は遊作ってことで良いのか？」

話しがあまりに見えなくて、そう口にする。

実際、こうして目の前に居る時点で遊作が正体を明かしてくれているも同然だ。

「ああ、そういうことだ…これからお前に協力を仰ぐときはこっちら連絡する」

「お、おう…そういうえば、どうして俺に正体を明かしてくれたんだ？協力を仰ぐ為とはいえリスクも高そうなんだけど…」

「…確かに、リスクもあるがお前ほどのデュエリストを味方にできるのは大きいからな…それに」

「それに？」

「…いや、何でもない」

「…うまあ、言いにくいなら別に言わなくても良いけどさ」

歯切れが悪そうな遊作にそう言葉を掛ける。

「…さて、情報交換でもしようか…俺も色々聞きたいこともあるし」
「そうだな」

そうして、お互いの知っている情報や経験したことについて、話しあった。

「…なるほど、データストームの声を聞き、その中に潜むモンスターと心を通わすことのできる能力…それがリンクアクセスか」

『なるほどな、だからストームアクセスのスキルがなくてもデータストームからカードを入手できたのか』

「おわっ！急に出てくるなよ…びつくりしたじゃないか…つて、Aiにいつの間にか体ができてるんだけど」

『この前、リボルバーの腕を喰った時にデータが戻ってきたからな、どうだ？カッコいいだろ』

「う、うん…まあな」

遊作のデュエルディスクの上で色んなポーズをとっているAiに
思わず苦笑しながらそう呟く。

本当にAIなのに感情が豊かだな…これが意思を持ったAIって
ことなのか？

まあ、ハノイの騎士が狙っているわけだただのAIなわけない
か。

「…そういえば、遊作の持っているリンクセンスだけ？それってリ
ボルバーも持つてるのか？」

「それはわからない…だが、リボルバーもストームアクセスを使うこ
とができる…それは間違いない」

「そっか…まだまだ謎は多そうだな」

「そうだな…」

お互いに情報交換をして、わかったこともあったけど、まだまだわ
からないことが多いな。

リボルバーがもう少し色々と教えてくれれば良いんだけど…そう
はいかないよな。

それに、遊作も自分の過去については話してくれなかったからな…
まあ、まだ話したくないってことかな。

「まあ、地道に情報を集めていくしかないか…草薙さん、Aiの中に
あったプログラムってどんな感じだったんですか？」

「それが、そのプログラムは特殊なアルゴリズムで構成されていな
…俺達には解読できなかった」

「なるほど…花恋に頼めば何かわかるかもしれないけど、そのプログ
ラムを見ている途中にハノイの騎士に俺達の居場所がバレてもまず
いよな…」

前はそのせいでリボルバーに場所がバレそうになったらしいから
な。

それになにより花恋まで危険にさらすことになるかもしれないし
…うーん、参ったな。

「ダメだ！花恋さんを危険にさらすわけにはいかない！」

「草薙さんの言う通りだ、花恋さんを巻き込むわけにはいかない」

「お、おう…俺も花恋を巻き込むわけにはいかないとは思ってるよ」
すごい剣幕で二人にそう言われ、思わずたじろぐ。

まさか、二人して花恋を巻き込むわけにはいかないと云うなんてな
…うん？待てよ…

「…あのさ、俺を巻き込むのは良いのか？」

「ああ、お前なら簡単にはくたばらないだろうしな」

「え…？」

何か俺の扱いがひどい気がするんだけど…

「ははっ、神薙…悪く思わないでやってくれ、こう言っではいるが遊作
はお前のことを信用しているからこそ、ここに連れてきたんだ」

「そうなのか？」

「……………」

俺が遊作の方を見ながら尋ねると、遊作は黙ったまま視線を逸らし
てしまった。

これは、肯定と捉えて良いのかな？

「…ありがとうな遊作、俺のことを信用してくれて」

「…気にするな、お前に協力を求めるのは俺の為でもある」

「ああ、わかった…」

やれやれ、素直じゃないんだから…まあ、急に遊作が素直になつた
ら、それはそれでちよつと心配になるけどな。

俺はそんなことを思いながら、1日を終えた。

第32話 ショッピングデート

「今日のデート、上手くいくかな…」

「そういえば、今日は葵ちゃんとデートだったわね…ちゃんとデートプランは考えたの?」

「まあ、一応は」

花恋と朝食を食べながら、そう会話を交わす。

「へえ、そうなの…あ、そうそう今日のデートの時にデュエルディスクをつけていってね」

「ん?いや、構わないけど…急にどうしたんだ?」

「ちよつと、試したいことがあって…」

「…また、変なもの仕掛けてないよな?」

花恋には前に俺のデュエルディスクに小型カメラを仕込んでいたっていう前科があるからな。

「だ、大丈夫よ!今回はそんな変なものは仕込んでないわよ!上手くいけば侑哉もきつと驚くから!」

花恋は自信満々にそう言った。

大丈夫なのかな…?まあ、花恋もこう言ってるし多分、大丈夫かな?

「…まあ、一応信じるよ」

「ありがとう、楽しみにしててね!」

「ああ…それじゃあそろそろ行ってくるよ!」

「行ってらっしゃい!」

俺はそんな花恋の声を聞きながら、外へと出ていった。

／／／／／／／／／／／／／／

「おはよう!葵」

「おはよう、侑哉!」

待ち合わせの場所に来た俺は葵にそう声を掛ける。

「あれ?今日はデュエルディスクをつけてるのね」

「うん…花恋が何か試したいことがあるらしくてさ」

「花恋さんが？それって大丈夫なの？」

葵が怪訝そうな顔をしながらそう尋ねる。

まあ、葵がそう思うのも無理はないよな。

「うーん、多分大丈夫だと思うよ…花恋も変なもの仕込んでいないって言ってたし」

「それなら良いけど…ところで、今日はどこに行くの？」

「うん、まずはショッピングモールにでも行こうと思ってるよ」

「ショッピングモールか、良いわね！それじゃあ早く行こ！侑哉！」

葵は楽しそうにそう言いながら、俺の手をそつと握った。

なんというか、こんな風に楽しそうにしてくれると、こっちまで嬉しくなってくる。

「ああ、そうだな！」

そう呟きながら、俺は葵の手を握り返した。

今日のデート、楽しんで貰えたら嬉しいな。

俺はそんなことを思いながら、歩き続けた。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「おつ、いつの間にかショッピングモールに着いてたみたいだな」

「本当だ…ふふつ、やっぱり侑哉と一緒に居ると時間が過ぎるのが早いわね」

「確かに、俺も葵と一緒に居ると時間が過ぎるのが早いな…楽しい時間はあっという間に過ぎるってやつかな…」

「そうかもしれないわね」

葵はそう言いながら、笑みを浮かべた。

待ち合わせ場所からここに来るまでの間に葵と他愛ない会話を交わしているのと、気がつけばショッピングモールに着いていた。

「さてと、葵はどこか行きたいところはある？」

「そうね…あっ！あそこのアクセサリ屋に行ってみても良い？」

「もちろん、良いよ！それじゃあちよつと行ってみようか！」

そう言っつて、俺と葵はアクセサリ屋に歩を進めた。

「へえ、色々あるんだな」

店の中に入ってみると、その中はアクセサリ屋なだけあって、色んなアクセサリが売られていた。

「侑哉、ちよつと待っててね」

「うん？わかった：それじゃあ葵がアクセサリを探している間に俺もこのアクセサリを見ておくよ」

「うん！わかった」

そう言つて、葵は店の中に入っていった。

「さて、俺も店のアクセサリを見てみるか」

そう呟いて、近くのアクセサリに目を向ける。

それにしても、本当に色々あるんだな：せつかくだし、何か買つていこうかな。

「ん？これは…」

ふと、目の前のアクセサリが目に入る。

「へえ、ブレスレットか：しかも、これペアブレスレットつてやつじゃないか？」

目に入ったブレスレットは赤と青のペアブレスレットで、如何にも恋人同士が着けるようなものだった。

「よし、これを買っていくか！」

そう言つて、俺がブレスレットに手を伸ばすと、別の人の手と触れあつた。

「す、すみません！…つて、葵!?!」

「侑哉!?!…もしかして、侑哉もこれを？」

「う、うん…葵にプレゼントしようと思つてさ」

俺がそう言つと、葵はどこか嬉しそうに笑いながらこう言つた。

「私も侑哉と同じよ、これをプレゼントすれば侑哉が喜んでくれるかなつて思つて…」

「ははっ、考えることは同じつてことか…なんというかちよつと照れくさいな」

「うん…」

葵は少し照れくさそうにそう呟いた。

「…よし、それじゃ俺が買ってくるよ!」

「待って、これは私が侑哉にプレゼントしたいの…だから、私が買ってくるわ」

「…そっか、うーん…それじゃあ、お言葉に甘えさせてもらおうよ」

せっかく、葵がこう言ってくれているのにそれを断るっていうのはさすがに申し訳ないしな。

それに、葵が俺にプレゼントを渡したいと思ってくれているのはすごく嬉しいし。

「ありがとう、侑哉!それじゃあ少し待っててね!」

「うん、ここで待ってるよ」

俺がそう言うと、葵は店の中に走って行った。

「お待たせ!侑哉!」

「うわっ!びっくりした…めちやくちや早かったな」

葵が店に入ってから、ものの数分で帰ってきたことに驚きが隠せず、思わずそんな声が零れる。

本当にめちやくちや早いな…まあ、葵との時間が長くなったと思うことにしておこう。

「だって、早く侑哉にプレゼントしたかったから…」

「そっか…ありがとな、葵」

「うんうん…お礼を言うのは私の方よ、侑哉…いつも私のそばにいてくれてありがとう!…大好き!」

葵はそう呟くと同時にそっと俺にキスを交わす…俺もそれに応えるように、より深くキスを交わす。

「俺も大好きだよ、葵」

「侑哉…」

「ブレスレット、今ここで着けても良いか?」

「もちろん!」

そう言って、葵はブレスレットが入っている箱を開ける。

その中にはさつき見たばかりの赤と青のペアブレスレットが入っ

ていた。

俺はその内の赤のブレスレットに手を伸ばし、それを腕に着ける。あ、そうだ左手にはデュエルディスクが着いてたんだった…よし、右手に着けるか。

俺はそうして右手に赤のブレスレットを着けた。

「ふふっ、これで侑哉とお揃いね！」

葵はそう言って、左手の青いブレスレットを見せてくれた。

…そっか、俺が右手にブレスレットを着けてるから、手を握る時にブレスレットが重なるように左手に着けてくれたのかな。

まあ、自惚れすぎかもしれないけど。

「そうだな…ありがとな、葵！すごく嬉しいよ！」

「喜んでもらえたなら良かった…まあ、欲を言えば侑哉をびつくりさせたかったけど」

「確かにある意味、サプライズには失敗したかもしれないね…けどさ、俺は葵が俺にプレゼントをしようと思ってくれたことがすごく嬉しいよー！」

「そ、そう…？」

「ああ！当たり前だよ…自分の大切な人から贈り物を受け取って、喜ばない人なんかいないさ」

実際、大切な人からの贈り物は何だって嬉しいものだしな…

まあ、あまりにもおかしなものを贈られるのは困るだろうけど。

「あ、ありがとう…侑哉」

葵は少し照れくさそうに顔を背けながら、そう呟いた。

「本当に侑哉は…そういうことをサラツと言うんだから…」

「うん？どうかしたのか？葵…」

「な、何でもない！」

「そ、そっか…」

何かすごく葵の顔が赤い気がするんだけど…熱でもあるのかな？

でも、葵が何でもないって言うてるんだし、多分、大丈夫…かな？

まあ、とにかく今は葵とのデートを楽しもう…そして、葵にも楽しんで貰いたいな。

「それじゃあ、次の所に行こっか！」
「うん……」

葵とそんな会話を交わしながら、俺達は次の場所へと歩を進めた。繋がれた手に赤と青のブレスレットが重なる……俺達は繋がれた手を離さないように、お互いの手を強く握った。

／／／／／／／／／／／／／／／

「ふう、色々と回ったな……」

「そうね……大丈夫？侑哉……少し、荷物を持つわよ」

「いや、大丈夫……と言いたいところだけどできれば頼んで良いか？」

「任せて！」

そう言う葵に少しだけ荷物を手渡す。

アクセサリー屋に寄った後、服屋に行ったり、カードショップに寄ったりしながら一緒にお昼を食べて、他の店を色々と回り、今に至る。

「何かごめんな、葵……荷物持ちを手伝ってもらっちゃって」

「気にしないで、私が好きでやってることなんだし……それに……」

そう言って、葵はそつと俺の指に自分の指を絡める。

「こうやって侑哉と手を繋ぎたいし……」

そう言う葵はどこか照れくさそうで、何となくこそばゆい気持ちになる。

「そうだな、俺も葵とこうやって手を繋ぎたいなって思ってた」

だからこそ、葵に少し荷物を持ってもらおうと思ったわけだしな。

うーん、だけど……男としては全部の荷物を持つべきだったかな……いや、変に意地をはっても葵にはすぐに気付かれるか。

「どうかした？」

「いや、何でもないよ」

「そう？それなら良いけど……」

葵とそんな会話を交わしながら歩き続ける。

そんな何でもない時間が心地よくて、ずっとこうしていたいな、なんてことを思ってしまう。

「……あつ、見えてきた！……って、あれ？閉まってる……」

目の前の草薙さんの店を見て、思わずそんな声が漏れる。
葵にも草薙さんのホットドッグを食べてもらおうと思ってたのにな。

もしかして、何か作業の途中とか？

まあ、あり得ない話しじやないよな…遊作達はハッカーだし、自分の情報を他の人に知られないように色々としているのかもしれないな。

「あなた達もこの店のホットドッグを食べに来たの？」

「はい…そうなんですよ」

草薙さんの店が閉まっていることに少し落胆しているとライダースーツを身に纏っているスタイルの良い女性に声を掛けられた。

…それにしても、奇抜な髪型をしてるなこの人…

「この店のホットドッグって美味しいわよね、さつきチリドッグを2つ買ったばかりなのにまた食べたくなってここに来ちゃった」

「…はい、確かにこのホットドッグってかなり美味しいですよ！それだけに残念というか…せつかく葵にも食べてもらおうと思ったのにな…」

「閉まっているなら仕方ないわよ、また今度一緒に来よう？」

「うん、そうしようか…」

今度行くときは草薙さんに店を開けてもらうように頼むか。

遊作に頼めば、草薙さんにも伝わるだろうし。

「もしかして、デート中だった？邪魔してごめんなさいね…それじゃあ、また機会があればどこかで会いましょう」

「…？はい、まあ機会があれば」

「ええ、またね…あなたとは近いうちにまた会える気がするわ…：…それじゃあね！」

ライダースーツを着た女性はそれだけ言って、バイクに乗って走り去ってしまった。

なんとというか、不思議人だったな。

「それじゃ、俺達も行くか！」

「ねえ、侑哉…」

「うん？どうかしたのか？」

「えっと、その……侑哉は胸が大きい人の方が好きだったりする？」

「え……？」

葵の突然の質問に思わずそう聞き返す。

いや、待て……どうしてそんなことを？

もしかして、さっきの人と比べてるのか!?

俺はそんな風に考えながら、今だに赤面している葵を見つめた。

「……いや、俺は別に胸の大ききとかは特に気にしないよ……だって、大事なのは自分がどれだけその人のことを好きかってことだと思おうし」

「……っ！あ、ありがとう……侑哉」

「俺はただ自分の思ったことを言っただけだよ……」

「……そういうのはズルいよ、侑哉……」

「ええ!?!そ、そうかな……？」

俺は、自分の気持ちを正直に言っただけなんだけだな。

「うん……だって、侑哉にとっては何でもない言葉でも私にとっては嬉しい言葉だから……」

葵はさつきよりも顔を真っ赤にしながらそう呟いた。

そんな表情の葵も可愛くて、こっちまで頬が熱くなる。

「えっと、ありがとう……そう言ってくれると嬉しいよ……そ、それじゃ、俺達も行こっか！ホットドッグが食べられなかった代わりに俺が料理を作るからさ！」

「う、うん……！ねえ、侑哉……今日は侑哉の家に泊まっても良い？」

「え……いや、別に構わないけど……晃さんに連絡しなくても大丈夫なのか？」

「もちろん！兄さんも侑哉の家に泊まって来ても良いって言ってたし」

「そ、そうなんだ……」

晃さん……信頼してくれるのはすごい嬉しいけど、それはどうなんだ？

……まあ、葵と1日中一緒に居られるならその方が良いけどさ。

「あ、そういえば……葵の服はどうしようか？」

「服ならここにがあるじゃない！」

そう言つて、葵は手に持っている袋を持ち上げる。

そっか、今日のデート中に大量に服を買ったもんな…それなら服の心配はなさそうだな。

「まあ、これなら問題ないか…後は、夕飯だな…葵は何か食べたいものとかあるか？」

「そうね…できれば侑哉と一緒に作れるものが良いかな」

「俺と一緒に作れるものか…わかった、何か考えてみるよ」

「うん！ありがとう…侑哉」

「どういたしまして」

葵とそんな会話を交わしながら、帰路に着く。

草薙さんのホットドッグが食べられなかったのは残念だったけど、葵と1日中一緒に過ごせるのは嬉しいな。

…さて、今日の夕飯とかも色々と考えないとな！

俺はそんなことを思いながら、歩き続けた。

第33話 潜入！SOLテクノロジー

「悪いな、侑哉…急に呼び出して」

「いや、構わないけどさ…急にどうしたんだ？」

学校が終わり、葵と一緒に家に帰ってからしばらくして遊作から連絡を受けて今に至るわけなんだが…

一体どうしたんだ？ま、遊作に聞けばわかるか。

「着いてきてくれ、お前に頼みたいことがある」

「頼みたいこと…？」

「ああ、詳しくは中で説明する」

遊作はそう言って、草薙さんの車の中に入っていった。

俺はそれに着いていった。

「侑哉か、よく来たな！」

「どうも、草薙さん…それで俺に頼みたいことって？」

「ああ、まずはこれを見てくれ」

そう言って草薙さんはまるで迷路のような地図を画面に映し出した。

「これは…？」

「SOLテクノロジーのマザーコンピュータの模式図だ」

「マザーコンピュータの模式図!? どうやってそんなものを？」

草薙さんの言葉に思わずそう聞き返す。

俺は機械関連に強いわけじゃないが、マザーコンピュータがどんなものかはわかる。

「それに関しては俺から説明する」

「…ああ、頼むよ」

そうして、遊作からマザーコンピュータの模式図を手に入れた経緯を聞いた。

その話しによると、遊作はゴーストガールという女性にデュエルを挑まれ、それに勝ってこの情報をもらったらしい。

しかも、データバンクへの道もゴ丁寧に記していてくれたらしい。

「なるほどな……それにしても遊作とゴーストガールのデュエルは見
たかったぜ……なあなあ、ゴーストガールってどんなデツキを使うんだ
?」

「……そこに食いつくのか……まあ、お前らしいといえはお前らしいが」
遊作は少し呆れたようにそう呟いた。

「それでどんなデツキを使うんだ?」

「……それは、デュエルをする機会があればわかるだろう……今はお前に
協力してもらいたいことについて話すのが先だ」

「おっと、そうだった……それで俺は何を手伝えれば良いんだ?」

まあ、大体察しはつくけどね。

でも、実際に聞いてみないことにはわからないしな……聞いておいて
損はないよな。

「お前ならとづくにわかっているかもしれないが、俺達はSOLテク
ノロジーのマザーコンピュータに侵入するつもりだ……そこで、お前
もその侵入を手伝ってもらいたい」

「まあ、そんなことだろうとは思ってたよ……でも、侵入するなら人数は
少ない方が良いんじゃないか?」

「確かにそうかもしれないが、もし、不測の事態に陥った時に俺1人
は対処しきれない可能性があるからな」

「なるほどね……わかった、俺で良ければ協力するよ!リンクアクセ
スについても何かわかるかもしれないし」

SOLテクノロジーのマザーコンピュータってことは遊作が関
わった10年前の事件はもちろん、俺の持つリンクアクセスについて
も何か情報があるかもしれない。

……ただ、ゴーストガールが仕組んだ罠ということも考えられるし、
警戒しておくに越したことはないけどな。

「こっちは準備ができてるぞ、遊作、侑哉」

どうやら、草薙さんの方は準備ができていらしいな。

『SOLテクノロジーのマザーコンピュータに繋がったぞ、行かない
のか?』

遊作のデュエルディスクからAiが姿を現し、そう言った。

「どうかしたのか？遊作」

考え込んでいる遊作にそう声を掛けると、遊作は少し間を開けてからこう言った。

「1つ、このデータには信憑性がある。2つ、だが、なぜゴーストガールはこのデータを渡してくれたのか。」

『そんなのお前がデュエルに勝ったからに決まってるんだろ！』

「例え、そうだとしても…3つ、ゴーストガールは自分のメリットにならないことをする人間ではない」

なるほど、遊作が考え込んでいたのはそういうことか。

俺はゴーストガールに会ったわけじゃないから、何とも言えないが、遊作が言ってるのは本当なんだろうな。

だとしたら――

「侑哉、お前はと思う？」

「…考えられるとしたら、ゴーストガールにとってはどちらに転んでも構わなかった、ってところかな」

「どういう意味だ？」

「勝つても負けてもどちらでも良かったってことだよ…勝てばAiが手に入るし、もしかしたら、playmakerを味方につけられるかもしれない、負けたら負けたでお前を囚にして、自分達だけが情報を手に入れられるって寸法だよ」

もし、ゴーストガールが遊作の言うように自分のメリットにならないことをする人間じゃないならどちらに転んでも自分のメリットになるようにしていた可能性が高い。

勝った時のメリットは言うまでもないし、仮に負けたとしても、遊作が10年前の事件を調べるためにマザーコンピュータに侵入しようとするのは予測できるし、そもそもそれを考慮したうえでデュエルを挑んできたんだろうしな。

「…なるほどな、全てゴーストガールの思惑通りというわけか」

「ああ、多分な…だけど、行かないことには始まらないだろ？」

「ああ、その通りだ…行くぞ！侑哉！」

「ああ！」

「ゴデツキ、セット！イントウ・ザ・ヴレインズ!!」

／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「ここがマザーコンピュータの内部か…」

「LINK VRAINSとはまた違った雰囲気だね…ところで草薙さん、俺用のplaymakerが掴まっているセグウェイみたいなのやっはないの？」

《悪いな、時間がなくて一人用しか用意できなかった》

「そうですか…：ならしょうがないな」

草薙さんの答えを聞き、playmakerが掴まっているセグウェイのようなものに掴まった。

幸いにもスペースが広く、何とか掴まることができた。

よくよく考えれば、俺とplaymakerの二人分のジャミング装置を作って、しかも二人分のセグウェイの…いや、もうセグウェイで通そう。

とにかくさらにセグウェイを作ってもらなんていうのはさすがに無茶を言い過ぎだよな…：スペースを広くしてもらっただけでも感謝しないとな。

俺がそんなことを思っている間に、草薙さんの案内を受けながら、順調にデータバンクへと近づいていた。

その途中でちよつとした雑談を交わしたり、クリボールがデコイとして発射されたりと、色々とおつたが無事に切り抜けられた。

《もうすぐエリアAを抜けるぞ》

『楽勝じゃくん！このまま一気にゴールまでぶっ飛ばそうぜ！』

「Ai!？お前何言ってるんだよ！それ、フラグってやつだよ！」

『フラグ？何言ってるんだよ、お前…』

Aiがそう言うと同時にどこからともなく、強力なデータストームが吹き荒れてきた。

「これは、データストーム…？」

「ほら、言ってるそばから…：…って、どわああ！何だこのデータストー

ム：思ったより強い！」

強大なデータストームに巻き込まれ、その影響で尻尾のように付いていたジャミング装置が切れた。

不味い！ジャミング装置が切れたってことは……くっ、とりあえず体勢を立て直すか。

俺は自分のDボードを出現させ、それに飛び乗る、playmakerも同じようにDボードを出現させ、それに飛び乗っていた。

「ふう、何とかなつた……大丈夫か？playmaker」

「ああ、だがこの状況は……」

「そうだね……さすがに不味いかもね……うん？playmaker、どうやらお客さんみたいだよ」

何気なく周りを見渡すと、Dボードに乗った2体のロボットが目に入った。

なるほど、見た感じAIデュエリストってところかな……俺達の侵入に気づいて投入されたのか。

幸いなのは、まだ実験段階なのか数がそんなに居ないことだな……これなら俺とplaymakerで対処できる。

「……それじゃあplaymaker、俺はあっちのオレンジ色の奴とデュエルするよ」

「……わかった、俺は残った方の相手をする」

「うん、よろしく頼むよ！」

「フツ、お前に協力してもらって正解だったな……こっちは任せろ！」

「ああ！」

俺はそう言つて、オレンジ色のAIデュエリストを引き付け、別のルートへと誘い出した。

「さあ、楽しいデュエルにしようぜ！」

「侵入者ヲ排除シマス」

「ははっ、AIデュエリストに対してエンタメデュエルをするの初めてだけど、楽しんでくれたら嬉しいかな……さあ、いくよ！」

「スピードデュエル!!」

AIデュエリストB LP4000

VS

Phantom LP4000

さてと、初手はどんな感じかな？

「え…？どうなってるんだ？何か見たことのないカードばかりなんだけど…」

確かに、俺はいつものデッキをセットしたはずなのに。

落ちて着こう、とりあえず、これがどんなデッキか判断しないと。

「えっと、『閃刀姫レイ』：他のカードは魔法カードで閃刀って名前がついてる魔法カードもあるな…デッキの名前としては閃刀姫デッキってところかな？EXデッキは、と…2種類のリンクモンスターが居るな…『閃刀姫カガリ』に『閃刀姫シズク』か…なかなか面白そうなデッキだな」

「ワタシノターン、500ライフポイントヲ支払い、手札ノ『テンタクラスターダークウィップ』ヲ特殊召喚！」

AIデュエリストB LP4000↓3500

テンタクラスターダークウィップ攻撃表示(ATK100)

おっと、デッキを理解するのも大事だけどちゃんと相手の出方も見ないとね。

「ソシテ、手札ヨリ魔法カード、『機械複製術』ヲ発動！コノカードノ効果ニヨリ、自分フィールドノ攻撃力500以下ノ機械族モンスター1体ヲ対象トシ、そのモンスターと同名モンスターヲ2体マデ特殊召喚スル！ワタシハ、デッキヨリ2体ノ『テンタクラスターダークウィップ』ヲ特殊召喚！」

テンタクラスターダークウィップ攻撃表示(ATK100)×3

え!?そのモンスターって機械族だったんだ…どう見ても昆虫族にしか見えないけど。

「サーキットオープン、ワタシハ『テンタクラスターダークウィップ』

3体ヲリンクマーカーニセット！リンク召喚成功、出現セヨ『テンタクラスターノーチラス』」

テンタクラスターノーチラスLINK3（ATK0）リンクマーカー左下／下／右下

何かZONEみたいな見た目のやつが出てきたな。

一体どんな効果を持つてるんだ？

「『テンタクラスターノーチラス』ノ効果発動、コノカードガリンク召喚ニ成功シタ時、手札ノテンタクラスターモンスターヲコノカードノリンク先ニ特殊召喚できる、ワタシハ『テンタクラスターボムサッカー』ヲ特殊召喚」

テンタクラスターボムサッカー攻撃表示（ATK400）

「ソシテ、サラニ『テンタクラスターノーチラス』ノ効果発動、リンク先ノテンタクラスターモンスターヲ破壊スル、コノ瞬間、『テンタクラスターボムサッカー』ノ効果ニヨリ、コノカードヲ破壊シ、相手プレイヤーニ400ポイントノダメージヲ与エル」

「ぐっ……バーンデッキつてことか」

Phantom LP4000↓3600

「ワタシハカードヲ1枚伏セテ、ターンヲ終了スル」

「それじゃあ、いくよ！俺のターン、ドロー！」

Phantom手札4↓5

「コノ瞬間、墓地ノ『テンタクラスターボムサッカー』ノ効果発動、コノカードヲ除外シ、相手プレイヤーニ400ポイントノダメージヲ与エル」

Phantom LP3600↓3200

「墓地からも発動できるのか、厄介だな……」

でも、葵に比べれば大したことないな……葵が相手ならこんな程度じゃすまないからな。

「さてと、まずは…手札から魔法カード、『テラフォーミング』を発動！このカードの効果で、デッキからフィールド魔法を手札に加える！」

これで、デッキの中身を確認できるな…さてと、どれにしようかな。

…このデッキ、ほとんどが魔法カードだ：罨カードも入っているけどほんの少しだ。

しかも、メインモンスターが閃刀姫レイだけか：でも、大体このデッキの特徴はわかったな。

「…俺は、『閃刀空域エリアゼロ』を手札に加えるよ！そして、そのまま発動！そして、カードを1枚セットし、エリアゼロの効果発動！さつき、伏せたカードを1枚を対象として、デッキからカードを3枚めくり、その中に閃刀カードがあれば、手札に加えることができる」
さて、どんなものかな？

めくったカード

閃刀術式アフターバーナー

閃刀起動エンゲージ

閃刀機イーグルブースター

「俺は『閃刀起動エンゲージ』を手札に加える！そして、閃刀カードが手札に加わったことによりさつきエリアゼロの効果で選択したカードは墓地へ送られる」

Phantom手札5↓3↓4

「さらに、手札から魔法カード、『閃刀術式アフターバーナー』を発動！このカードは自分のメインモンスターゾーンにモンスターが居ない時、フィールド上の表側表示のモンスター1体を対象として発動できる、そのモンスターを破壊する！俺は『テンタクラスターノーチラス』を破壊する！」

アフターバーナーの効果により、テンタクラスターノーチラスが破壊される：墓地に魔法カードが3枚以上あれば追加効果もあつただけど…まあ、今は関係ないか。

「さらに、手札から魔法カード、『閃刀起動エンゲージ』を発動！このカードもメインモンスターゾーンにモンスターが居ない時に発動できる！デッキからこのカード以外の閃刀カードを手札に加える！俺は、『閃刀術式ジャミングウェーブ』を手札に加えるよ！さらに、墓地に魔法カードが3枚以上ある時、追加でデッキからカードを1枚ドローできる！」

思っただけで閃刀起動エンゲージって、強すぎないか？しかもそれ以外の閃刀カードも強力な効果を持っている…本当に何なんだろうな、このデツキ。

まあ、今はデュエルに集中しよう！

「そして、今手札に加えた『閃刀術式ジャミングウェーブ』を発動！このカードの効果でフィールド上にセットされた魔法、罠カードを1枚破壊する！俺は君のフィールドにセットされた伏せカードを破壊するよ！」

ジャミングウェーブの効果で伏せカードが破壊される、その破壊されたカードは『魔法の筒』へマジックシリンダーでいった。

魔法の筒なんか伏せてたのか!?危なかったな…まあ、バーンデツキっぽいしあり得ない話じゃないか。

「さて、ようやく準備が整った！真打ちに登場してもらおうよ！俺は手札から『閃刀姫レイ』を召喚！」

その言葉と共に、軍服を着た長い銀髪の少女が現れる…その少女は手に持っていた刀剣を構え、凛々しくフィールドに立った。

閃刀姫レイ攻撃表示(ATK1500)

「力を貸してもらおうよ、レイ！」

「はい、了解です！マスター！」

「ああ、頼む、よ…？え、今喋った!？」

「はい、言葉を発しましたが？それが何か？」

「えつと…俺は幻覚でも見てるのか？」

「大丈夫ですか!?マスター！ちよつとおでこを触りますよ」

そう言っつて、レイは顔を近づけ俺のおでこに触れた。

おでこを触られた感触がある…ってことは実体があるってことか？いや、今はそれよりも…

「ちよつ！顔が近いって！特に異常はないから、大丈夫だから！とりあえず、一旦離れてくれ…バランスが崩れる！」

『す、すみません！』

そう言っつて、レイは顔を赤くしながら、俺から離れていった。

ふう、危なかった…それにしても一体何がどうなってるんだ？

『えっと、改めまして…私は閃刀姫レイ、レイと呼んでください！
まあ、マスターはすでにレイと呼んでくださっています…』

「ああ、よろしくな…えっと、レイ…君はカードの精霊みたいなもの
でことで良いのか？」

『そういうふうには認識してもらって構いません、話すとき長くなるので、
詳しい話しは後でします…マスター、今はこのデュエルに勝利するこ
とを考えましょう！』

「…そうだな…さあ、いくよ！お楽しみはこれからだ！現れる、希望を
照らすサーキット！アローヘッド確認、召喚条件は炎属性以外の閃刀
姫モンスター一体！俺は『閃刀姫レイ』をリンクマーカーにセット！」
『換装！モード選択、閃滅モード！』

そう言葉を紡ぎながら、レイは赤き装甲を纏っていく。

「サーキットコンバイナー！リンク召喚！現れる！リンク1、『閃刀姫カ
ガリ』!!」

閃刀姫カガリLINK1(ATK1500)リンクマーカー左上

「そして、閃刀姫カガリが特殊召喚に成功した時、墓地の閃刀魔法カ
ドを手札に戻す！俺は、墓地の『閃刀起動エンゲージ』を手札に戻す
！そして、そのまま発動！このカードの効果でデッキから『閃刀機
ウイドウアンカー』を手札に加え、さらに1枚ドロロー！」

Phantom手札2↓3↓2↓4

「そして、カガリは墓地の魔法カードの数×1000ポイント攻撃力が
アップする！俺の墓地の魔法カードは5枚、よって、攻撃力が500
ポイントアップする！」

『はああっ!!』

閃刀姫カガリLINK1(ATK1500)↓2000)リンクマ
ーカー左上

「まだまだいくよ！俺はさらに手札から魔法カード、『一騎加勢』を発
動！このカードの効果でカガリの攻撃力を1500ポイントアップ
する！さらに、墓地の魔法カードが増えたことで攻撃力がさらに10
0ポイントアップする！」

『感じます！マスターの力を！はああっ!!』

閃刀姫カガリ（ATK2000↓3600）

「お楽しみはこれまでだ！『閃刀姫カガリ』でダイレクトアタック！」
『目標、駆逐します！せいやあぁ!!』

AIデュエリストB LP3500↓100

カガリがAIデュエリストに斬撃を浴びせ、AIデュエリストのライフが0になった。

「ふう、何とか勝てたな…」

初手を見た時はどうなることかと思っただけな…：それにしても、結局何がどうなってるんだろうな…：まあ、詳しくはレイに聞いてみるか。

『さすがはマスターですね！初めて使うデッキをあそこまで使いこなせる人はなかなか居ないですよ!』

レイはさつきまでしていた装甲を解除し、笑みをうかべながら、そう言った。

「今回は運が良かったただけだよ…：テラフォーミングがなかったら、デッキの内容もよくわからないままだったろうし…：それで、レイ…：詳しく話してくれないか？」

『はい、実は…』

レイはそう言って、自分が誕生した経緯について語り始めた…

第34話 データバンクでの邂逅

「それじゃあ話してくれ…レイ」

『はい、実は…』

「実は…？」

『私は花恋さんによって作られたAIなんです』

「AI…!?カードの精霊みたいなものって言ってなかったか？」

レイの一言に思わずそう聞き返す。

『元々はAIだったと言うべきですかね…以前、花恋さんがデュエルディスクを装着したまま行動してほしいと頼んだ時がありましたよね』

「ああ、葵とのデートの時に…じゃあ、あの時花恋が言った、試したいことって…」

『はい、マスター専用のサポートAIを作ることだったんです…デュエルディスクにAIの基となるものを埋め込み、今までのデュエルのデータを組み込こんだ後で、マスターの行動や、感情をデュエルディスクを通して学ばせようとしたんです』

「なるほどな…」

だから、あの時デュエルディスクをしたままで過ごして欲しいって言ったのか。

花恋がうまくいったら、俺もきつと驚くって言ったのはサポートAIのことだったんだな。

しかも、俺が葵とデートする時にはデュエルデータはもう組み込まれていたのか…いつの間にかそんなことをやってたんだ…まあ、今はそれよりも聞くことがあるな。

「…でも、レイはどうやってカードになったんだ？」

『はい…信じてもらえないかもしれませんが…私は、マスターのことについて知るたびにマスターに…侑哉さんに会ってみたくなりました、それもAIとしてではなく、別の形で…』

レイは少し、照れたような様子でそう言った。

『そこで、考えて考えて、カードになれば良いんだと気づいたんです

！』

「え、どうしてそんな考えに？」

『マスターは、デュエリストです…それなら、マスターの傍にいる為にはカードになるのが一番良い方法だと思っただんです…それにカードになって、召喚して貰えれば、マスターに触れることもできますからね！』

「な、なるほど…：…そういうえば、いつの間にデッキを替えたんだ？」

正直、わからない部分もあるけど、いつの間にデッキが入れ替わったのかも気になるしな。

『それは、マスターがここに来る時に、デュエルディスクにデッキをセットした瞬間に入れ替えました！』

「ここに来る前に入れ替えたのか…でも、何でそんなことを？」

『マスターを驚かせたくて…：…それに、マスターなら初めて使うカードでも必ず使いこなせると信じていましたから！』

レイはそう言っ、笑顔を見せてくれた。

「そつか…：一応ありがとうで良いのかな？」

『えへへ、お礼を言われるようなことじゃありませんよ！』

「まあ、確かにそうかもしれないけど…俺を信じてくれたのは嬉しいからさ！それに、確かにびっくりしたけど、閃刀姫デッキって結構面白いデッキだしね…それを作ってくれたレイには感謝しかないよ」

いきなり、デッキが替わっていたのはさすがに驚いたけど、新しい戦略とか色々試せそうだし、正直、ワクワクしてる。

『マスター…：！ありがとうございます！やっぱりマスターは私の思った通りの人でした！』

そう言っ、レイは勢いよく俺に抱きついてきた。

「ちよっ！レイ！抱きつくなくて…バランスが崩れるってば！」

「おい、Phantom…大丈夫か？」

「playmaker！ちよっど良いところに！何とかしてくれ！」

レイに抱きつかれている状態になっていると、playmakerがやってきた。

「Phantom…その少女は誰だ？そして、その状況は…」

「えっと、実はさ…」

そうして、俺は playmaker にここまでの経緯を簡単に説明した。

「なるほど…とりあえず、このことはブルーエンジェルに報告するか…」

「playmaker!? ちょっと待って！俺の話聞いてた？後、それだけは絶対に止めてくれ！とんでもない誤解を受けるから！」

「フツ、冗談だ…それにしても、まさか、Aiと同じように意志を持ったAIが居るとはな…しかも、Phantomに会うためにデツキを生み出すとは…」

『俺はお前が冗談を言えることに驚いたぜ…そういえば、お前、レイっていうんだろ？宜しくな！』

『はい！よろしくお願いします！』

そんなふうに、レイとAiは会話を交わす…どうやら、仲良くなれたみたいだな。

今、レイは俺のデュエルディスクに入って会話をしている…レイが言うにはさつきみたいに実体化したり、こんなふうにデュエルディスクに入ることもできるらしい。

本人も詳しい理由はわからないと言ってたけど、カードになったことが原因じゃないかと言っていた。

「…そろそろ、目的地に着くぞ」

「そうなのか…よし、それじゃあ気合い入れて行きますか！」

そうして、俺達はデータバンクの中へと入っていった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「へえ、ここがデータバンクの中なのか…」

「ああ、そのようだな…ん？あれは!?!財前！」

「え…?」

playmakerの言葉に思わず視線を向ける。

そこに居たのは、playmakerの言葉の通り、財前晃が居た。晃さんが何でここに？これは完全に予想外だな…

「待つていたぞ、playmaker…そして、Phantom…君のことも」

「俺達を待ち伏せしていたのか？」

playmakerがそう尋ねると、晁さんの後ろから忍者みたいに布で口を覆っているスタイルの良い女性が姿を現した。

『うう…羨ましくなんかいいですよ…』

その女性が出てくると、自分の胸をさすりながらレイがそんなことを口にする。

「あはは…レイもそういうことを気にするんだね…」

なんというか、本当に普通の女の子みたいだな。

まあ、こんなふうに感情が豊かな方がいいよな。

「あら？その女の子、あなたのサポートAIなの？可愛いわね！お人形さんみたい！」

「あはは…ありがとうございます、ところであなたは？」

「そういえば、あなたとは初対面だったけ…私はゴーストガールよ！よろしくね！」

そう言つて、ゴーストガールは笑みを向けてくれた。

実際、口は見えなかったけど目が笑っているように感じたから多分、そうだろう。

「あなたがゴーストガールか…playmakerとデュエルしたつていう」

「ええ、そうよ…ま、結局は負けちゃったけどね」

「よく言うよ…勝つても負けてもどっちでも良かったくせに…勝てば、Aiが手に入るし、負けてもこんなふうにデータバンクに侵入するための準備もできる…だろ？」

「へえ、すごいわね、あなた…そこまで見抜いていたなんて…」

ゴーストガールは感心したようにそう言った。

どうやら、俺の推測は当たってたみたいだ…それにしても、どこかでゴーストガールに会ったような気がするんだよな。

あの奇抜な髪型とか、スタイルとか…あ、そうだ！あの時、ホットドッグ屋で会った人に似てるんだ！

いや、でも…たまたま似た見た目のアバターを使っている全く面識がない人の可能性もあるな…まあ、あの人もちよつと会っただけで、面識があると言えるかは微妙だけど…

「どうしたの？もしかして、私に見惚れちゃった？」

「いや、そういうわけじゃないけど…」

「うっ、そんなふうにあつさり言われるとちよつと傷つくわね…」

「え!?何かごめん…そんなつもりで言ったわけじゃなくて…」

「コホン…二人共、そろそろ良いだろうか？」

俺があたふたしている、晃さんがそれを制するようにそう言った。

「ああ、すみません…」

「いや、構わないさ…君が心の優しい人間だということは知っているからね」

そう言つて、晃さんはplaymakerの方に視線を移す。

「…そろそろ本題に移らせてもらうぞ…財前、お前はここに何が記録されているのか知っているのか？」

「ああ、私も先ほど初めて知ったばかりだ…10年前、SOLテクノロジー社で何が起きたのか…そして、君の身に何が起こったのかも」

SOLテクノロジーが10年前の事件に関わっていたのか…そういえば、リボルバーがSOLテクノロジーが何かをしたみたいなのを言っていたけど、嘘じゃないのかもしれないな。

「君は10年前の事件の被害者の一人だな」

被害者の一人…？10年前の被害者は複数人居るつてことか…だとすると、草薙さんの弟もその10年前の事件の被害者なのかもしれないな。

あ、だからか…だから、遊作と草薙さんは協力関係になったのか…なるほど、何で二人が協力関係になったのか、少しだけわかったな。『こいつら、自分達だけが情報を見て、俺達には教えないとはせこい奴らだぜ！』

「お前がイグニスか？」

『おうよ！俺様がお前達が探しているイグニス様だぜ！今は、記憶が

なくなつて犬みたいな名前と呼ばれてるがそのデータの中には俺の本当の名前もあるんだろ?』

「それはなかったかな」

『ズッコッ!』

「えーつと、ちなみに聞きたいんだけど…リンクアクセスって言葉については何かなかった?」

俺はゴーストガールとAiのショートコントみたいな会話に苦笑しながら、そう尋ねる。

「リンクアクセス…?そんなのはなかったわね…それにしても、何なの?そのリンクアクセスって…」

「いや、知らないなら良いんだ…」

「ふーん…」

それにしても、SOLテクノロジーのデータバンクにもないとする
と、ハノイの騎士がデータを完全に消してることなのかな。

俺の持っているリンクアクセスって結構、やばい能力なのか?

リボルバーも俺の身の安全のためにも、詳しくは話せないって
言つてたし…SOLテクノロジーにバレたらまずい能力なのかもしれ
ないな。

「playmaker、そのAIを引き渡してここは手を引いてくれ
…この事件は世間に明るみにして、必ず真相を追求してみせる」

「一応フォローしておく、晁はリボルバーの一件で失脚したのよ」

「え…?」

『お、妹のために出世を捨てるとは、お兄ちゃん素敵!』

Aiがそんな言葉を口にしてたが、そんなことはどうでも良かつた。

晁さんが失脚…?そんなこと、一言も言つてなかったぞ。

「晁さん…そのこと、葵には言つたのか?」

「いや、言つてない…葵に心配は掛けたくないからね」

「そっか…でも、ちゃんと葵には伝えておいた方が良いよ、晁さんが言
いづらいなら俺が代わりに伝えるし」

「ありがとう、Phantom…葵にもちゃんと伝えるつもりだ…」

それで、playmaker、答えを聞かせてほしい」

「…断る、どんな理由であろうとこの事件を他人に任せるつもりはない
：1つ、この事件は俺自身の手で真実を突き止める。2つ、お前には
関わりのないことだ。3つ、それでも関わるといいうなら俺を従える方
法はわかっているはずだ」

「デュエルか？」

「そうだ、お前が勝てばお前の要求は全て呑もう、俺はお前を信じて、
このAIを置いて姿を消す」

『ええーっ！』

「だが、俺が勝てばお前達はここから立ち去れ」

「君を止める方法はデュエルしかなさそうだな…良いだろう！ここで
君にデュエルを挑む！」

『まくだ、このパターンか』

「デュエル!!」

そうして、playmakerと晃さんのデュエルが始まった。

それにしても、晃さんがデュエルをするとは思わなかったな…一体
どんなデツキを使うんだ？

「ねえねえ、phantom…せっかく、こうして会えたわけだし、私
達もデュエルをしない？」

「え…？いや、デュエルなら大歓迎だけど…急にどうしたんだ？」

ゴーストガールの提案に思わずそう聞き返す。

デュエルなら大歓迎なんだけど、ゴーストガールがそんなことを言
うと、どうしても裏があるように思えてしまう。

「安心して、特に深い意味はないわ…ただ、playmakerと晃の
デュエルを見ているだけじゃつまらないしね、それに一度あなたと
デュエルを試してみたかったのよ！」

「奇遇だね、俺もplaymakerから話しを聞いて、あんたとデュ
エルをしたいと思ってたんだ！」

「ふふっ、そうこなくっちゃ！魅せてもらうわ、LINK VRAIN
S最強のデュエリストと呼ばれているあなたの実力を…」

「えっ？俺、そんな風に呼ばれてるのか？」

「あら？知らないの？あなたは、現LINK VRAINSで最強のデュエリストだって、多くの人がそう言ってるわよ」

「そうなのか…全然知らなかったよ」

俺が最強のデュエリスト、か…俺より強い人なんてたくさん居ると
思うんだけどな…まあ、実際、結構嬉しいし、ここは素直に喜ぼうか。

「それじゃあ、俺達も始めようか！」

「デュエル!!」

特別編 花恋との出会い

「う、うん…」

いつもの目覚まし時計の音に目を覚ます。

「今の時間は…やっぱ！遅刻する！」

時計を見てみると、時間は8時30分を示していて慌てて起き上がり、準備をする。

「…つて、ちよつと待てよ…何か部屋が変わってないか？」

俺は、そう言つて辺りを見渡した。

そうすると、やっぱり部屋がいつも見ていた部屋とは違っていた。

「どうなってるんだ？カードは…良かったちゃんとおった…」

俺は小さい頃から遊戯王が大好きで、高校生になった今でも遊戯王を続けていた。

だから、カードがちゃんとあったことに安堵した。

…それにしても、一体どういうことなんだ？朝起きたら急に部屋が変わってるなんて…

しかも、カードはちゃんとあるし…まるで、俺とカードだけが別の世界に来たみたいだ…

「…もう帰ってきてるかしら」

俺がそんな風に思考していると、そんな声が聞こえてきた。

そして、そのまま部屋の扉が開いた。

「…侑哉？侑哉！お帰りなさい！いつ帰ってきたの？」

そう言つて、部屋に入つて来たのは栗色の長い髪のスレンダーな美少女だった。

「えっと…君は？ごめん、ちよつと状況が掴めてなくて…」

「忘れちゃったの？あなたの姉の神薙花恋よ！まあ、血はつながってないけどね…」

花恋と名乗った少女はそう言つて、照れくさそうに頬をかいた。

「花恋…？」

初めてその名前を聞いたはずなのに、その名前には不思議とどこか懐かしさを感じた。

…俺はこの人に会ったことがある？いや、でも俺の知り合いに花恋なんて人は居ないしな…

「…えっと、とりあえずここはどこか教えてくれないか？」

「今さら何言ってるの？ここは、Den Cityにあるあなたの家よ？」

「Den City!?本当にDen Cityなのか？」

「そうよ、それにしても今日の侑哉は何か変よ…熱でもあるの？」

「あ、いや…そういうわけじゃないんだけど、ちよつと下に降りてくる」

そう言つて、俺は階段を降りて下に行く。

…つて、ちよつと待て…どうして俺は自分の部屋は2階にあるってわかつてたんだ？

俺が元々居た家は2階建ての家ではなかったはずなのに…それに、あの時の俺は花恋が階段を登ってくる音だつて聞こえてなかったし。

「うーん、わからないな…まあ、とりあえず今は状況を確認するのが先だな」

そう考えて、下の階を色々と見てまわることにした。

「…おおーすごいなー」

下の階に降りてまず目に飛び込んで来たのは、窓から見えたDen Cityの景色だった。

「本当に遊戯王ヴェインズの世界に来たんだ…！くうー！ワクワクしてきたよー！」

本当に遊戯王ヴェインズの世界に来たことを実感したせいか、思わずそんな声を上げる。

「…やっぱり侑哉は侑哉ね、それで状況はある程度理解できた？」

「…か、姉さんつて言つた方が良いかな？」

思わず花恋と呼びそうになり、慌てて呼び名を変える。

「うふふー花恋で良いわよ、というかむしろそう呼んでくれた方が嬉しいわ」

花恋はそう言つて、笑みを浮かべた。

「わかった、それじゃあ改めて…花恋、信じられない話かもしれない

けど聞いてくれるか？」

「…わかった、話してみて」

「実は…」

そうして、俺は自分が別の世界からトリップしてきたことを話した。

転生ではなくトリップだと思った理由は単純に死んだ覚えがないからだ…いつもと同じように生活をしていて気づいたらこの世界に居た、だから転生という考えはすぐに消えた。

俺の話しを聞いた花恋は考えるような仕草をして、言葉を紡いだ。

「なるほどね…確かに普通なら信じられない話しだけど侑哉がそう言うなら信じるわ！」

「…そっか、信じてくれてありがとう…でも、意外とあつさり信じてくれたな…どうしてだ？」

「…まあ、侑哉はわかりやすいから嘘だったらすぐにわかるし…それに…」

「それに…？」

「どの世界の侑哉でも私にとっては大切な家族に変わりないから！」

花恋はそう言って、俺に笑みを向けてくる。

その笑顔にもどこか懐かしさを感じて、俺は心から安心することができた。

「ありがとう…そう言ってくれど気が楽になるよ…ちなみに、花恋のことを聞かせてもらっても良いかな？」

「良いわよ、私に話せる範囲なら話してあげる」

「それじゃあ…」

俺はそうして、花恋の話しを聞いた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「なるほど…ありがとう、何か辛いことも聞いちゃった気がするけど…」

「気にしないで、私が話しても良いって思ったんだし」

「そっか…」

花恋の話しを聞いた俺はそう呟いた。

花恋の話によると、俺は元々この家の人間ではなく花恋の両親によつて養子として引き取られたらしい。

そして、その両親は10年前に事故に遭つて亡くなつてしまった。花恋は発明が得意というより、機械全般が得意らしく色々と発明品を作り、特許によつてお金を稼ぎ俺と二人で生活していたようだ。

しかも、AI搭載型の新型デュエルディスクの大元を作つたというのだから驚きだ。

…というか、遊作の使つてたデュエルディスクつて旧型だつたんだな、俺としてはあつちのデュエルディスクの方が好きだけど。

「それにしても、こつちの世界の状況は俺の状況にすごく似てるな」「どういうこと?」

「いや、実は…俺も両親に引き取られてたんだ、まあ、小さい時のことはあんまり覚えてないんだけど…」

両親の話によれば元々俺は孤児院に居て、それをうちの両親が引き取つてくれたらしい。

そうして、俺は神薙の姓を受けた。

「後、10年前ではないけど俺が中学に上がった頃に両親が事故に遭つたんだ…それで」

「…そうだったの、ごめんね、辛いこと思い出させちゃつて…」

「いや、気にしなくて良いよ…俺が勝手に話しただけだからさ…まあ、とにかくそれで何となく状況が似てるなつて思つたんだ…名字まで一緒だし」

「確かにそうね…本当にびっくりするくらい似てるわね…」

花恋はそう言つて、悲しそうな表情を浮かべていた。

俺の話を聞いて、そんな表情になつてしまつたのか、それ以外の理由があるのかはわからない…だけど、この気まずい空気は何とかしないとな。

「…この話しはとりあえず終わりにして、LINK VRAINSに行きたいんだけどデュエルディスクはないかな?」

「デュエルディスク?それなら、とつておきの物があるわよ!」

先ほどの様子からは想像もできないほどの楽しそうな表情をしな

がら、花恋はそう言った。

「ちよつと待ってて！すぐに持つてくるから！」

そう言つて、花恋は近くの部屋に入つて行つた。

「さつきとは大違いだな…でも、ずっと悲しそうな顔をされるよりは良いよな…」

そうして、しばらく待っていると花恋が戻つてきた。

「お待ちませ！侑哉！はい、これ！最近出来たばかりの新型デュエルディスクよ！」

「おお！これがそうなんだ！さつそく着けてみるか！」

そう言つて、デュエルディスクを左腕に着ける。

…何だろう、あんまりしつくりこないな…見た目がデュエルディスクっぽくないからか？

「もしかして、気に入らない？」

俺の様子を見た花恋は俺にそう尋ねる。

「…いや、気に入らないつてわけじゃないんだけど、何かしつくりこなくてさ…旧型デュエルディスクの方を試しても良いか？」

「…ごめん、侑哉…旧型デュエルディスクは家に置いてなくて…」

「ああ、そうなんだ…ならしようがないな」

「…よし！決めた！侑哉、朝ご飯を食べたら一緒にデュエルディスクを買いに行きましょう！」

「それはありがたいけど良いのか？」

「もちろん！」

花恋はそう元気よく答えてくれた。

「ありがとう！それじゃあ朝ご飯は俺が作るよ！ちよつと冷蔵庫の中を見せてもらつて良いか？」

そう言つて、冷蔵庫の中を覗くと飲み物と豆腐と油揚げそして、卵だけが入っていた。

「…思ったよりなにも入ってないな…普段はどんなものを食べてるんだ？」

「あはは…私、家事とかが苦手で、基本的にインスタント系とかコンビ

「二弁当とかで済ませちゃってるのよ」

「な、なるほど……こっちの俺は料理とかあんまりしてなかったのか……一応聞いておくけど、味噌はあるか？これなら味噌汁を作れると思うし」

「二応味噌は買ってあるわ、冷凍庫に入ってるから自由に使って！ご飯はもう炊けているからその辺は大丈夫よ！」

「ご飯は炊けるのか……まあ、とりあえずそれなら安心かな……じゃあ作るからちよつと待っててくれ」

そう言つて、俺は準備を進める。

両親が亡くなってからは、俺は親戚のおばさんに引き取られた。

おばさんとは前から面識があったこともあり、俺のことを快く受け入れてくれた。

その際に、おばさんの負担を少しでも減らすために俺が家事を担当することにした。

そのおかげか今では一通りの家事ならこなせるようになっていた。

まあ、料理自体は割りと小さい頃からできるようになってはいたが。

「よし、こんなものかな……」

そんな風に昔のことを思いだしながら料理をしていると、あつという間に味噌汁が完成していた。

「さて、後は玉子焼きを作つて……よし、完成！」

そう言つて、ご飯と一緒に出来た料理を花恋の元へと運ぶ。

「お待たせ、簡単なもので悪いけど朝ご飯だよ」

「ううん！すごく美味しそう！それじゃあいただきます！」

そう言つて、花恋は料理を食べ始めた。

それに釣られるように俺も料理を食べ始める……うん、我ながらうまくできたな。

「はあ……やつぱり手料理は良いわね！ありがとう！侑哉」

「どういたしまして！そう言ってもらえると作った甲斐があるよ……そういうえば、こっちの俺は学校とかはどうしてるんだ？」

「それなら問題ないわ、侑哉はとつくに中学を卒業して高校も決まっ

「てるから！」

「そうなのか…まあ、それなら大丈夫だな…ちなみに高校の入学式っていつ頃なんだ？」

「確か、3ヶ月ぐらい先だったはずよ…今は1月だから」

「へえー、そうなのか…」

「ということとは、俺はもう一度入学式に参加することになるのか…まあ、こつちに来る前は高校が始まって1ヶ月ぐらいしか経ってないし、そんなに大差はないか。」

「ふう、ごちそうさま！すぐく美味しかったわ！」

「それは良かった…ふう、ごちそうさま！」

「侑哉、おかわりして良い？」

「構わないよ…それじゃあ器を貸してくれ」

俺がそう言うのと花恋が器を手渡してくれた。

その後、花恋がおかわりをして、何気ない会話を交わして、朝食の時間は終わった。

「さて、そろそろ行きましようか！」

「そうだな、案内よろしくな」

「任せなさい！私がちゃんと案内してあげる！」

「ああ、よろしく頼む！」

そうして、俺と花恋は旧型のデュエルディスクを買いに外へと出た。

…それにしても、楽しみだな…早くLINK VRAINSに行つてデュエルがしたい！

やるとしたら、どんなデュエルにしようかな…どうせなら、見ている人達や対戦相手を楽しませるデュエルがしたいな。

ファントム遊矢みたいなエンタメデュエルが一番良いかもしれないな。

俺はそんなふうに、これから先に起きる出来事を楽しみにしながら歩き続けた。

第35話 遊作の闇

「さあ、ゴーストガール！楽しいデュエルにしようぜ！まずは、俺の先攻からいかせてもらうよ！俺のターン！」

『マスター！私達の力で必ず勝利しましょう！』

「あはは…燃えてるな、レイ…心強いよ！さあ、力を貸してもらうよ！」

『もちろんです！』

レイはそう言つて、元気よく返事をしてくれた。

…さて、まずは

「俺は手札から魔法カード、《テラ・フォーミング》を発動！このカードの効果でデッキからフィールド魔法、《閃刀空域―エリアゼロ》を手札に加えて、そのまま発動！」

侑哉手札5↓4

「閃刀…？聞いたことがないカードね、これもあなたの戦術の一つというわけね」

「まあ、このデッキがどういうデッキかは後でわかるさ…そして、俺はカードを1枚セットして《エリアゼロ》の効果発動！今セットしたカードを対象に効果を発動するよ！デッキトップからカードを3枚めくり、その中の《閃刀》カードを1枚手札に加える！」

めくったカード

閃刀起動―エンゲージ

閃刀術式―アフターバーナー

閃刀機―イーグルブースター

「俺は《閃刀起動―エンゲージ》を手札に加え、残りはデッキに戻す…さらに、エリアゼロの効果！めくったカードに閃刀カードがあれば、対象としたカードを墓地へ送る！」

そう言つて、俺は先ほど対象としたカードを墓地へ送る。

墓地へ送られたカード

閃刀術式―ジャミングウエーブ

「そして、さらに手札から魔法カード、《成金ゴブリン》を発動！相手ライフを1000ポイント回復させて1枚ドロロー！」

侑哉手札4↓3↓4

ゴーストガール LP4000↓5000

「あら、私のライフを回復してくれるの？」

「まあ、ある程度の準備をしなくちゃならないからな…これは仕方ないさ」

「ふーん…どんな狙いがあるのかしら？」

「それは見てのお楽しみさ！俺は手札から《閃刀起動―エンゲージ》を発動！このカードは俺のメインモンスターゾーンにモンスターが居ない時に発動できる！デッキから閃刀カードを1枚手札に加える！俺は《閃刀機―ウイドウアンカー》を手札に加える！」

閃刀起動―エンゲージの効果を発動し、デッキからウイドウアンカーを手札に加える。

…だが、もちろんこれで終わりじゃない。

「さらに、墓地に魔法カードが3枚以上あればデッキからカードを1枚ドロローできる！」

侑哉手札4↓3↓5

「なるほど…だから私のライフを回復させてまでカードを発動したわけね…」

ゴーストガールは納得したような様子でそう言った。

「まあ、それもあるかな…さあ、続けるよ！俺はさらに手札から《閃刀姫―レイ》を召喚！」

『お任せください！マスター！』

「ああ、任せるよ」

『はい…』

そう言つてレイは刀剣を構え、フィールドに降り立った。

閃刀姫―レイ レベル4 攻撃表示(ATK1500)

「その子はあなたのサポートAIじゃないの？何でカードになつてるの!?!」

「まあ、それは説明すると長くなるんだけど…簡単に言うとレイはA

「Iでもあり、カードでもあるって感じかな」

「ふーん、興味深いわね…その話し、後で聞かせてくれない？」

ゴーストガールは興味深そうにそう聞いてくる。

「まあ、考えておくよ…さあ、いくよ！現れる！希望を照らすサーキット！アローヘッド確認、召喚条件は水属性以外の閃刀姫モンスター1体！俺は《閃刀姫―レイ》をリンクマーカーにセット！」

『換装！モード選択、刀衛モード！』

レイはそう言いながら、蒼き装甲を纏っていく。

「リンク召喚！現れる！リンク1《閃刀姫―シズク》！」

『マスターは私が守ってみせます！』

閃刀姫―シズク リンク1（ATK1500） リンクマーカー右上

「ありがとう…でも、俺もお前を簡単に倒させるつもりはないよ」

『マスター…！ありがとうございます…』

レイは照れくさそうな表情をしながら、そう言った。

そんなレイの様子に思わず笑みが零れる。

本当に感情豊かだな…頑張って苦しい表情とか悲しい表情をさせないようにはしないと…

「…さあ、続けよう！俺はカードを2枚伏せてターンエンド！そして、この瞬間、《閃刀姫―シズク》の効果発動！デッキから墓地に同名カードが存在しない《閃刀》魔法カードを手札に加える！俺は《閃刀術式―アフターバーナー》を手札に加えるよ！さあ、ゴーストガール！君のターンだ！」

Phantom LP4000

手札3（内1枚、『閃刀術式―アフターバーナー』）

場 EXモンスターゾーン 閃刀姫―シズク リンク1（ATK1500）リンクマーカー右上

メインモンスターゾーンなし

伏せ2

フィールド魔法 閃刀空域―エリアゼロ

ゴーストガール LP5000

手札5

場なし

伏せなし

さて、出だしは上々だな…ゴーストガールの使うオルターガイスト…一体どんなデッキなんだ？

俺はそんなふうに思考しながら、ゴーストガールの行動に注目した。

「私のターン、ドロロー！」

ゴーストガール手札5↓6

(…さて、どう動こうかしら？Phantomはいつも違う戦術を披露しているけれど、デッキがまるごと変わるの初めて見るわね…)「まあ、とにかくやってみるしかないわね…私は手札から《オルターガイスト・マリオネッター》を召喚！」

オルターガイスト・マリオネッター レベル4 攻撃表示(ATK1600)

「そして、このカードが召喚に成功した時、デッキから《オルターガイスト》罨カードを1枚セットできる！」

「罨カードのサーチ効果か！さすがにそれを使わせるわけにはいかないよー！リバースカードオープン！速攻魔法、《閃刀機―ウイドウアンカー》！このカードの効果で、《オルターガイスト・マリオネッター》の効果は無効にする！」

「マリオネッターの効果が！」

「まだまだ！ウイドウアンカーの更なる効果発動！墓地に魔法カードが3枚以上あれば、効果を無効にしたカードのコントロールをエンドフェイズまで得ることができる！」

ウイドウアンカーの効果により、ゴーストガールのフィールドに居たマリオネッターが俺のフィールドに現れた。

…とりあえず、これで少しは優位に立てたか？大抵この手のサーチ

カードはデッキのエンジンになるカードの場合が多いし、できる限りは無力化したいな。

それにしても…罨カードのサーチ効果か、ゴーストガールのデッキは罨カードが中心のデッキなのか？

「厄介なカードね…ただ、おかげであなたのデッキの特徴はある程度掴めたかな」

「俺も君のデッキの特徴がなんとなくわかったよ」

恐らく、ゴーストガールのデッキは罨カードを中心としたデッキだ
と思う…ただ、他のモンスターの効果がまだわからないから確実ではないけど。

「ふーん…まあ、良いわ…私はカードを2枚伏せてターンエンドよ」

「この瞬間、マリオネッターは元の持ち主の所に戻る」

オルターガイスト・マリオネッター (ATK1600↓1100)

「マリオネッターの攻撃力が下がってる？どうということ？」

「シズクの効果さ、シズクには墓地の魔法カードの数×100ポイント相手フィールドのモンスターの攻守を下げる効果があるんだ」

「なるほど、なかなか抜け目がないわね…これで私のターンは終了よ」

Phantom LP4000

手札3 (内1枚、『閃刀術式—アフターバーナー』)

場 EXモンスターゾーン 閃刀姫シズク リンク1 (ATK15

00) リンクマーカー右上

メインモンスターゾーンなし

伏せ1

フィールド魔法 閃刀空域—エリアゼロ

ゴーストガール LP5000

手札3

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン オルターガイスト・マリオネッター レ

ベル4 攻撃表示 (ATK1600↓1100)

伏せ2

「俺のターン、ドロロー！」

侑哉手札3↓4

さて、どうするかな…？

俺がそんなふうには思考を始めようとすると、隣でplaymakerとデュエルしている晃さんの声が聞こえてきた。

「プレイメーカー、恐らく君は葵と同じくらい歳のなんだろう？」

晃さん…？急にどうしたんだ？

突如として、晃さんが話し始め思わず手を止める。

「10年前君に起きた悲劇の辛さは私にはわからない…だが、君を失った日々の辛さなら少しは分かる」

なるほど…晃さんは自分の経験を話して、playmakerを説得するつもりなのか。

俺がそんなことを思っていると、晃さんは自分達の過去について話し始めた。

10年前、葵と晃さんの両親が事故に遭って死んでしまったこと、それ以来葵と二人で生きてきたこと。

そして、葵を守る為に何でもしてきた事…その為に時には危険な事もしてきた事…

その話しは以前、晃さんに会った時にも聞かされた話で、その話しを聞いて俺は何とも言えない感情を抱いた。

…俺も晃さん達と似たような経験をしている…俺の両親も事故に遭って死んでしまった。

ただ、二人と違う点もある…俺は人に恵まれた、実の息子でもない俺を大事にしてくれた両親に、両親が亡くなってから俺を引き取ってくれた親戚のおばさん。

それにこの世界の俺には花恋が居てくれた。

「今、考えたら本当に恵まれてるな…俺は」

「Phantom…？」

ゴーストガールが不思議そうに首を傾げているが、今はそれよりも二人の会話の続きだ…多分、晃さんの言葉は逆効果な気がする…

「あんたに俺の……何が分かるというんだ!!」

鬼のような形相でそう叫ぶ遊作を見て、やっぱりこうなってしまうかと、1人そう思う。

「財前、あんたは多分良い奴なんだろう……だが、あんたは俺を知らない! あんたが知っているのは虚構の世界の俺だけだ!」

遊作の叫びに俺は思わず言葉を失う。

やっぱり遊作の闇は……いや遊作達の闇は深い……きつと今の晃さんの言葉を草薙さんも聞いていたはず、遊作が叫んだように草薙さんも叫んでいたって不思議じゃない。

「Phantom、少し良いかしら?」

「どうしたんだ? ゴーストガール……」

「あなた、晃の言葉が逆効果だということを判っていたの?」

「いや……判っていたわけじゃないさ……勝手にそう思っていただけだよ」

「どうしてそう思ったの?」

ゴーストガールは続けてそう質問した。

「……俺達はプレイヤーじゃないし、10年前に拐われたわけでもない、あんた達は事件の内容を知っているけど経験したわけじゃない……だから、俺達には実際に事件に巻き込まれた人達の気持ちは分からないんだ」

そう、俺達には分からない……当時、その事件に巻き込まれた人達の気持ちはその人達には分からない。

晃さんの話しを聞く限りでは、10年前の事件は何者かが遊作達を拐って何かをしたんだろう……遊作が話してくれないから、何とも言えないが多分そうなんだろう。

だけど、仮に話してくれたとしても、遊作達の気持ちをわかるとは言えない……だって、俺はその経験をしていないから……だから軽々しく分かるなんて言えない。

「……だから、俺は晃さんの言葉は逆効果になるんじゃないかと勝手に思っていたんだ」

「なるほどね……なんとなくだけどプレイヤーがあなたに助けを求

めた理由がわかった気がするわ」

「うん？…どういうことだ？」

「…さあ、今はデュエルを続けましょう！ Phantom、あなたのターンよ」

「あ、ああ…さて、ちよつとこれを使ってみるか！俺は手札から魔法カード、《おとり人形》を発動！」

「おとり人形…？」

俺の発動したカードにゴーストガールはそんな反応を示す。

まあ、知らないのも無理はないな…このカードはけつこう昔のカードだし。

「このカードはちよつと面白いカードなんだ…フィールド上の魔法、罠ゾーンにセットされたカード1枚を対象に発動するカードで、そのカードをめくる…そして、めくったカードが罠カードならそのカードを強制発動する！」

「強制発動…？確かに変わった効果ね」

「そして、そのカードの発動タイミングが正しくない場合はそのカードの効果を無効にして、破壊する！」

「それで私のカードを破壊するつもり？」

「いや、このカードの効果をを使うのは俺の伏せカードさ！おとり人形の効果で、俺の伏せカードをめくる…！伏せカードは《トラップスタン》！このカードの効果で、このターン中このカード以外の罠カードの効果を無効にする！」

おとり人形の効果で俺の伏せカードが強制発動される。

わざわざおとり人形の効果を使って、トラップスタンを強制発動させた理由はトラップスタンの発動に対してカウンター罠等を発動させないためだ。

あくまで、強制発動させるのはおとり人形の効果で、強制発動されたカードに対してはカウンター罠等を発動できないとか、なんとかと聞いたことがある。

まあ、確証はないがやっておいて損はない。

「《トラップスタン》…私のデッキには天敵ね」

「そうだろ？…おとり人形は発動した後、墓地にはいかずデッキに戻る…さあ、いくよ！俺は手札から魔法カード、《閃刀術式―アフターバーナー》を発動！このカードも俺のメインモンスターゾーンにモンスターが居ない時に発動できる！フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を破壊する！俺はマリオネッターを破壊するよ！」

侑哉手札4↓2

アフターバーナーの効果でマリオネッターが破壊される。

「本当は追加効果で伏せカードも破壊できるけど、今回はその効果は使わない…そして、再び現れる、希望を照らすサーキット！アローヘッド確認、召喚条件は炎属性以外の閃刀姫モンスター1体！俺は《閃刀姫―シズク》をリンクマーカーにセット！」

『換装！モード選択、閃滅モード！』

レイはそう言いながら蒼き装甲を解除し、紅き装甲を纏っていく。

「リンク召喚！現れる、リンク1！《閃刀姫―カガリ》！」

『さあ、決着を着けましょう！マスター！』

閃刀姫―カガリ リンク1 (ATK1500) リンクマーカー左
上

「ああ！《閃刀姫―カガリ》の効果発動！このカードが特殊召喚に成功した時、墓地の閃刀魔法カードを1枚手札に加える！俺は墓地の《閃刀起動―エンゲージ》を手札に加え、そのまま発動！このカードの効果でデッキから《閃刀機―イーグルブースター》を手札に加えて、さらに1枚ドロロー！」

侑哉手札3↓2↓4

「そして、カガリの攻撃力は墓地の魔法カードの数×100ポイントアップする…俺の墓地に魔法カードは6枚、よってカガリの攻撃力は600ポイントアップする！」

『はあああ!!』

閃刀姫―カガリ (ATK1500↓2100)

「さらに、手札から魔法カード、《一騎加勢》を発動！このカードの効果でカガリの攻撃力を1500ポイントアップする！そして、墓地に魔法カードが増えたことでさらにカガリの攻撃力が100ポイント

アップする！」

閃刀姫―カガリ（ATK2100↓3700）

『ダメです、マスター…まだ届きません！』

「大丈夫だ、届かせるよ！だけどレイ…お前に負担が掛かるかもしれない…それでも良いか？」

『もちろんです！マスターの為なら！』

レイはそう言って、笑みを浮かべる。

「…わかった、それじゃあいくよ！手札から魔法カード《リミッター解除》を発動！このカードは自分フィールド上の機械族モンスターの攻撃力を倍にする！」

侑哉手札4↓2

『はああああ!!マスター！これなら大丈夫です！』

閃刀姫―カガリ（ATK3700↓7400）

「攻撃力7400!？」

「いくよ！バトルだ！《閃刀姫―カガリ》でゴーストガールにダイレクトアタック!!」

『これで…終わりです!!』

カガリはそう言って、とてつもなく巨大化した刀剣をゴーストガールに振り下ろした。

「レイ！ストップ！寸止めするんだ！」

『え…？わかりました』

そう言って、レイは刀剣をギリギリで止めた。

ゴーストガール LP5000↓2400

「ふう、良かった…いくらVRだとしてもあの攻撃を直接受けるのはまずかったと思うしな…」

モンスターが破壊されてダメージを受けるならまだしも、直接あの攻撃を受けるのは衝撃が凄まじいことになりそうだ。

『確かに、そうですね…』

レイはそう言って装甲を解除し、俺の元に戻ってきた。

「ふう、助かったわ…Phantom…本気で死ぬかと思った」

ゴーストガールはホツとした様子でそう言った。

「いや、それに関しては本当に悪かった…」

「まあ、良いわ…とところでリンクアクセスって結局何なの？」

「今のタイミングでそれを聞くのか？」

いきなりのゴーストガールの質問に、思わずそう聞き返す。

「だってこのタイミングを逃したら、聞く機会がなくなりそうだし…あ、そうだ！良いこと思いついた！」

そう言つて、ゴーストガールは自分のデュエルディスクを操作を始める。

そして、しばらく操作した後でカード状のプログラムを俺のデュエルディスクに投げた。

「ちよっ！何のプログラムを仕込んだんだ？」

「そんなに警戒しなくても良いわよ、私の連絡先を送っただけだから」
「え…？」

そう言われて、デュエルディスクを操作すると確かにそこには、知らない連絡先が追加されていた。

「リンクアクセスについて話す気になったらこの連絡先に連絡してきて」

「…あ、ああ、分かった…話す気になるかは俺次第だけどね」

「まあ、その時はその時で別の方法を考えるだけだしね…：それよりも晁とプレイヤーカードのデュエルも大詰めみたいよ」

「え…！」

ゴーストガールに促され、playmaker達の方へと視線を移す。

playmakerの場合にはファイアウォールドラゴンと発動されている罠カードが1枚、そして、ライフはわずか500…：多分、あの罠カードでファイアウォールを守つて、ライフがギリギリ残つたということなんだろう。

対する晁さんの場には攻撃力3500の猟犬のようなモンスターとメインモンスターゾーンにはトークンが1体、そして、発動されている魔法カードと2枚の罠カード…：恐らくあのリンクモンスターはリンク先のモンスターの数だけ攻撃力を上げる効果を持っているん

だな。

そして、発動されている魔法カードと罠カードで自分のモンスターを守っているって感じか…ただ、効果のわからない罠カードが1枚あるけど、大体そういう流れなんだろうな。

「プレイヤーカー、結構厳しい状況みたいだな…まあ、でもプレイヤーカーのことだ、きっと何とかするんだろうな…」

「晃が圧倒的に有利な状況なのには？」

「確かにそうだね…だけど、たった1枚のカードで逆転が起きることだってあるんだ…そして、プレイヤーカーならそれができる」

「随分と信頼してるのね…プレイヤーカーのこと」

「まあね……さ、二人のデュエルを見ることにしよう！」

俺はそう言いながら、playmaker達のデュエルを観戦し始めた。

第36話 侑哉の記憶

「これは10年という俺の思いがこもったデッキ、必ず俺を真実へと導く…：ドロ―！」

playmakerはカードを引き、そのカードを確認する。

「俺はカードをセットし、ターンエンド」

「どうやら何もできないようだな、だがそれが君の運命なのだろう…：復讐などやめるんだ、私に全てを任せて君は元の生活に戻るんだ、それが君の為だ」

「…復讐をやめろ、か…：あいつとは言っていることが真逆だな…：」

「あいつ…？」

「Phantomだ…：あいつは俺に復讐をやめろとは言わなかった、ただ、デュエルを復讐の道具としか見れないのは悲しい…：だから、デュエルを楽しむ時は全力で楽しめと、あいつはそう言っていた」
「プレイヤーカー…：」

playmakerの言葉に俺は思わずそう呟く。

playmakerの言葉は俺が草薙さんのホットドッグ屋で初めて遊作と会話をした時に俺が言った言葉だった。

その言葉は頭の片隅にでも覚えてくれてれば良いと思っていた言葉で、その言葉を未だに遊作が覚えていてくれるとは思っていなかった。

「彼がそんなことを…：」

「変わった奴だと思った…：世間一般的にはあんたの言っていることの方がまともだろうからな…：だから理由を聞いた、そしたらあいつは自分がもし大切なものを奪われたら、自分だって復讐に走るかもしれない、だから復讐をやめろとは言わなかった…：そう言っていた」

確かに、俺は遊作に理由を聞かれた時にそう答えた。

「それに、自分が復讐をやめろと言ったところで薄っぺらくしか聞こえないだろうから、とも言っていたな…：あいつの言葉を聞いてから、何故かあいつの言葉が頭から離れなかった…：それと同時にあいつと過ごす時間を心地よく感じるようになっていた」

「…何故Phantomがここに居るのがあつと気になつていたが…ようやくその理由がわかつた…君が彼に助けを求めたんだな」

晃さんは納得したようにそう口にする。

「ああ、だがそれ以外にも理由はある…」

playmakerはそう言つて、俺の方に視線を移す。

「あいつなら俺の復讐に最後まで付き合つてくれそうだからな…それに、あいつは簡単にはくたばらないだろうからな」

「お、おい！相変わらず俺に対する扱いひどくないか？」

playmakerの発言に思わずそう返す。

最初は良い感じの言葉だったのに、急にそんなことを言い出すんだもんな。

『いや、お前はまだマシな方だつて…俺なんかいつも黙れとか言われてるんだぜ、それにお前との間に友情などないとか言われたし…』

「お前は少し黙っている」

『ほら！また黙れつて言った』

「あはは…まあ、Aiに比べればマシだと思つておくよ…そういえば、そろそろ話してくれないか？」

「…10年前の事件のことか？」

「ああ、さつきから10年前の事件について話しているけど、そろそろ具体的にどんなことがあつたのか話してくれても良いんじゃないかな？」

playmakerと晃さんのデュエルをすべて見ていたわけではないから何とも言えないが、10年前の事件について色々と話していたみたいだな。

さすがにそろそろ具体的に説明をしてほしい。

『俺も知りたいなプレイヤー様よ、どうせあいつは知ってるんだろ？いずれお前の秘密はバレるんじゃないか？』

「私から話そう、何が起きたのか…10年前、ある事件が起きた、それはロスト事件と呼ばれていたらしい…6人の子供が次から次へと行方不明になつた。ある組織により誘拐されたのだ」

「誘拐…!?ってことは…」

「そう、その被害者の1人が…」

「プレイヤーカーってことか…」

その言葉にゴーストガールは小さく頷いた。

「ということは草薙さんの弟も…しかも、それ以外に後4人ぐらい被害者が居るのか。」

「そういえば、俺の両親が事故に遭ったのも10年前だ…葵と晃さんの両親も10年前に事故に遭ったんだよな、何か関係があるのか？」

「もういい、財前…自分の過去を他人になど語られたくはない」

「そう言っ、playmakerは自分の過去について話し始めた。」

「誘拐された俺達はある場所に1人ずつ監禁された。そこは何もない部屋だった。唯一あるのはVR装置のみ…VRに映るのはデュエル空間だった、そこで俺達はデュエルを強要された」

「デュエルを強要だっ…!?」

「つまり、まだ小さい子どもを誘拐して、監禁して…それでデュエルを強要したっっていうのか？」

「…ふざけてる、首謀者は何でそんなことをしたんだ？」

「そこにあるのは食事と睡眠、そしてデュエルだけだった…毎日がその繰り返し」

「やがてそこでの生活はすべてデュエルで管理されるようになった、デュエルで勝利しなければ食事さえ得られない」

「…何だよそれ…10年前ってことはまだ遊作は5、6歳だぞ…!そんな子どもにそんな生活をさせたって言うのかよ！」

俺の中に怒りにも、悲しみにも似た感情が渦巻く。

「この感情は一体何と呼べば良いんだろう…その答えを俺は持っていない。」

「…とにかく、今は話を聞かないと…そうしないと何も始まらない。」

「いつここから出られるのか、いつまで自分が生きられるのか何もわからない不安の中で俺達はデュエルを続けた」

「くっ…！」

playmakerの言葉に俺はそう眩くしかなかった。

「そこがどこなのか監禁されてどれだけの時間が経ったのか、誰も教えてはくれなかった」

「だが、半年後事件は突然解決した」

playmakerの言葉に晃さんはそう続けた。

「そして君達は救われた、しかし犯人はわからず事件自体が隠蔽されマスコミが騒ぎ立てることはなかった」

「…事件自体が隠蔽されただって？…っ！ぐっ、何だこれ？」

頭が痛い…それに何か映像が、頭に…

「良い？侑哉…あなたはこれを使って早くここから逃げなさい！私も後で行くから！」

頭に流れ込んできた映像は、ある女性が俺を引っ張りどこかに連れて行こうとする映像だった。

「そんな…こんな時に故障!?せめて、侑哉だけでも…！」

そう言つて、映像の中の女性は何かを操作し始める。

「何だ?…これ…こんなことがあった記憶はないぞ…いや、実際起きてはいたが俺が覚えてないだけか?」

それにしても何なんだ?急にこんな映像が流れ込んでくるなんて

…

「よし、これなら何とかかなりそう…待っててね、今作動させるわ」

映像の女性がそう言つて、俺に笑みを向ける。

「ごめんね、侑哉…私も付いていけたら良いんだけど…それは無理みたい…」

そう言つて、映像の女性は俺に顔を近づける。

「またね、侑哉…安心して、あなたがどこに居ようとも私が必ず見つけてみせるから！」

そう言いながら、涙を浮かべる女性の顔は見覚えのある顔だった。

「花恋…?」

俺がそう眩くと同時に辺りの景色が光に包まれる。

「どういうことだよ…どうして泣いてるんだ？俺に一体何があったっていうんだ！」

そんな叫びに映像に映る花恋が答えてくれるはずもなく、そのまま俺は意識を手放した。

／／／／／／／／／／／／／／／／

『マスター…マスター！目を覚まして下さい！』

「…う、うん…あれ？ここは…」

「目が覚めたか、侑哉」

俺が目を覚ますとそこは、データバンクではなく草薙さんの店の中に居た。

「遊作…そうだ！結局デュエルはどうなったんだ？」

『もちろん、俺達が勝ったぜ！』

俺の質問にデュエルディスクからA.iがそう答える。

『それにしても、あの時はビックリしたぜ…お前が急に倒れてさ…』

「倒れた？俺が…？」

『はい、急にマスターが苦しそうに頭を抑えて、そのまま…結局、マスターは遊作さんのデュエルが終わっても目を覚まさなくて…』

レイはそう言って、悲しそうな表情をする。

…どうやら、かなり心配を掛けてしまったみたいだな。

「えっと…ごめん、心配させちゃったな…でも、もう大丈夫だ！この通り元気になったからさ！」

俺はそう言って、元気になったと言わんばかりに腕を軽く回してみせる。

『そうですか…それなら良かったです！』

その様子に安堵したのか、レイは笑みを浮かべてそう言った。

「だから言っただろう、こいつは簡単にはくたばらないと」

『またまた、何だかんだ言ってお前も、侑哉のことを心配してたくせによ…相変わらず素直じゃねえな』

「…黙れ」

「あはは…心配かけて悪かったな」

遊作とAiのいつも通りのやりとりを見ながら、そう謝罪する。

「どうやら遊作にも心配をかけてしまったみたいだな…それにしても、結局あれは何だったんだ？」

あの時、頭に流れ込んできた映像を思い出しながら、そう思考する。

…やっぱり、花恋に聞くしかないよな。

「そういえば、遊作達は今何をしてるんだ？」

『Aiさんが補食したデータを解析しているところですよ、マスター！』

「なるほどな…あのさ、レイ…俺が意識を失っている間の話しを聞いても良いか？」

『もちろんです！お任せください！』

そうして、レイから俺が意識を失っている間の話しを聞いた。

遊作の逆転劇や、ロスト事件が別名ハノイプロジェクトと呼ばれていたこと、晃さんが首謀者のことを何か知っていたことなど、俺が意識を失っている間に起きた出来事を事細かく教えてくれた。

その話しを聞いている途中で、遊作の正体もバレてしまったのかと、一瞬不安になったが、ロスト事件の被害者の情報については国家のSランク保護プログラムによって守られていたらしい。

それは逆に言えば国家ぐるみで隠蔽されたレベルというわけなんだけど。

…それにしても、データベースにもリンクアクセスの情報が無かった…ロスト事件の情報はあったみたいだけど、何でリンクアクセスについては何もなかったんだ？

隠蔽されたロスト事件とデータベースにも情報がなかった、まるで歴史上から完全に消されてしまったかのようなリンクアクセス…俺の持っている能力は俺が思っているよりずっとヤバい能力なのかもしれない。

「草薙さん、これだ！」

「ドクター鴻上…本名、鴻上聖…ハノイプロジェクトを立案実行？」

その会話を聞き、俺もそのデータを見る。

「この男は…SOLテクノロジーの研究者だ！」

「SO Lテクノロジーの研究者…なるほどな、だからこそこの記録が残ってたわけか」

「ああ、そういうことだろうな」

俺と同じ考えなのか、遊作が同意するようにそう口にする。

「ここには鴻上博士が独断で事件を起こしたと書いてある、だが、内部告発により事件がSO Lテクノロジー社に発覚」

「独断、ね…絶対に独断でやったわけじゃなさそうだけどな…大方、SO Lテクノロジー社に責任を押し付けられたってところかな」

草薙さんの言葉を聞き、俺は自分の考えを口にする。

仮に、鴻上博士が責任を押し付けられたとすればリボルバーがSO Lテクノロジーに恨みを持っていて理由もわかるしな。

まあ、もしかしたらそれ以外にもSO Lテクノロジーが鴻上博士に何かした可能性もあるけど。

「…そういえば、事件の目的は何なんだ？」

「それは書いていない…それよりこれは!？」

草薙さんが驚いたような様子でそう口にする。

「鴻上博士は七年前に死んでいる…」

「七年前に死んでいる…だつて?」

どういうことだ? いや、待てよ…何かこれに似たような状況の人間が居たような…

「…そうか、その可能性もあるか…」

「どうした? 侑哉…」

「遊作、草薙さん…もしかしたら、鴻上博士は生きているかもしれない」

「それはどういうことだ?」

俺の言葉に遊作はそう聞き返す。

「生きているって言えるかはわからないけど、鴻上博士は意識をデータ化することでLINK VRAINSで生きているかもしれない」

「意識をデータ化だと…?」

「そんなことができるのか?」

「まあ、あくまで可能性の話しだけどね…」

鴻上博士がSAOの茅場のように自分の精神をネットワーク上に移した可能性もゼロじゃない。

もしくは、リボルバーがそれをした可能性もあるけど…どちらにせよ、その可能性について考えておいて損はない。

「…例えそうだとしても、俺達のやるべき事は変わらない」

「ああ、そうだな…乗りかかった船だ、最後まで付き合うよ！それに、リンクアクセスについてまだまだわからないことだらけだから…その事についてハノイの騎士から聞かなくちゃならないからな」

俺はそう言つて、遊作に笑みを向ける。

「ああ…これからも俺達に付き合ってもらうぞ、侑哉」

「おう、任せてくれ！…って、やばい！もうこんな時間か…！早く帰らないと花恋と、もしかしたら葵にも大目玉を喰らうかも…それじゃあな！遊作！」

「ああ、またな」

「気をつけて帰れよ」

遊作と草薙さんに一度頭を下げ、そのまま二人に見送られながら、帰路についた。

…そういえば、レイについてはどう説明したもんかな…まあ、元々花恋がレイを作ったらしいし、気付けばレイがデュエルディスクに居た、みたいな感じで説明するか？

俺はそんなことを考えながら、走り続けた。

／／／／／／／／／／／／／／

「ただいま！」

「お帰り、侑哉！」

「ああ、ただいま…葵！」

家に帰つてくると葵が俺を出迎えてくれた。

「葵も家に来てたんだな」

「まあね、侑哉に用事があつて来てたの…だって侑哉が電話に出てくれないんだもん」

「えっ…！」

葵にそう言われ、電話を確認すると確かに葵から連絡がきていた。

「ごめん…葵、ちよつと立て込んでさ」

「ふーん…何があつたのかちゃんと説明して」

「えつと…」

さて、どうしたもんか…素直にデータバンクに侵入してたことを言うべきか、それとも誤魔化すか…

いや、葵にはそのうちバレそうだよな…仕方ない、ちゃんと話すか。

「…わかつた、ちゃんと話すよ…花恋も呼んでくれ」

結局、葵に嘘をつくことはできず、データバンクに侵入したことを話すことにした。

「はあ…」

「ちよつ、花恋!?!何で急にため息ついてるんだ?」

葵と花恋にデータバンクに侵入したことと、そこで起きた事について話していると、花恋が急にため息をついた。

「まさか、SOLテクノロジのデータバンクに侵入するなんて…呆れて言葉も出ないわ」

「言葉なら出てるじゃないか…」

「揚げ足取らないの!良い?侑哉!あなたがやったことはすごく危険なことなのよ!一歩間違えたら大変なことになってたわよ?」

花恋が珍しく声を荒げてそう言った。

「うっ…ごめんさい、反省してます」

「…まあ、わかつたなら良いわ…次からは気をつけるのよ?」

「わかつたよ…次からは気をつけるよ」

花恋に怒られ、そう謝罪する。

それにしても、こんな花恋は初めて見たかもしれない…まあ、確かに今回はさすがに不味かつたかもな。

…ただ、俺は花恋と葵に他にも謝らなくちゃならないことがある…確かに、データバンクに侵入したことを話したが、playmakerの正体については話していないし、俺が意識を失った時に見た映像についてもまだ話していない。

「…それにしても、驚いたわ…まさか、侑哉専用のサポートAIを作る

つもりだったのに、そのAIが自分の意志を持って、しかも侑哉のカードになるなんて…私の想像をはるかに越えているわ」

花恋は実体化しているレイに目を向けながら、そう言った。

「ふふん！愛の力が成せる技です！マスターと私は運命共同体ですからね！」

「それは聞き捨てならないわね…」

レイの言葉に葵がそう反応する。

あれ？何か嫌な予感が…

「あのさ…何となく嫌な予感がするから言うけど喧嘩は止めような？」

「…ふふつ、もちろんですよマスター！喧嘩なんかしませんよ…ただ、葵さんに私の方が侑哉さんにふさわしいって言いたいただけですから」

「私もレイと同じよ、喧嘩なんかするつもりはないわ…ただ、侑哉の恋人は私だから運命共同体という言葉は私の方がふさわしいってことをレイに教えようと思っただけよ」

葵とレイはお互いに笑みを浮かべながら、そんな口論のようなものを行っていた。

うん、もう既に喧嘩してるね…葵とレイの間に火花がバチバチ散っているのが目に見えるし。

「まさか、AIに恋をさせるなんて…さすがは侑哉…他にも女の子タイプのAIが居たら侑哉に恋するのかしら？ちよつと試してみたいわね」

「うん、花恋…それは止めような」

花恋の発言にそうツツコミを入れながら、あの時頭に流れ込んだきいた映像について改めて考える。

あれは、間違いなく花恋だった…だとすると、あれはこの世界の俺の記憶…？

「あのさ、花恋…」

「うん？…どうしたの？侑哉」

「…やっぱり何でもない、ごめん、気にしないでくれ」

「そう…？」

結局、俺は花恋にあの時見た映像のことを聞かないことにした。

何故、その事について聞かなかつたのかは自分でもよくわからないが、まだ聞くべきじゃない…そんな気がした。

「さて、夕飯の用意をしないとね！葵、手伝ってくれるか？」

「侑哉…！もちろん！」

葵はそう言って、笑みを浮かべた。

「ま、待ってください！私も手伝います！」

「…これからますます騒がしくなりそうね…まあ、楽しそうではあるけど…」

（侑哉は…まだあの事を知らないのよね…私だけが知っている事実…いずれ全てを話す時が来る）

「…それでも、今はこの瞬間を楽しまないとね！侑哉、今日は私も手伝うわよ！」

「え!?花恋まで…というか花恋って料理できないんじゃない？」

「それはそうだけど、たまには良いじゃない！」

「わ、わかったよ…それじゃあよろしくな！」

そう言って、俺達は夕飯の用意を始めた。

その後、案の定、夕飯の用意の途中で花恋が色々失敗しそうになりいつも以上に疲れることになったのは言うまでもない。

第37話 大切な人

「来たわね、Phantom…さあて、リンクアクセスについて色々聞かせてもらおうよ」

「わかってるよ、まあ、俺の話せる範囲でだけ」

LINK VRAINSでゴーストガールとそんな会話を交わす。俺がゴーストガールとこうして話しているのは、以前、ステージ2がこつちの世界にやってきた時にゴーストガールに色々世話になり、その報酬としてリンクアクセスについて話すためだ。

「それでリンクアクセスって、結局何なの？」

「俺も詳しくは知らないんだけど、リボルバーが言うにはリンクアクセスの能力を持っている人間はデータストームの声を聞き、その中に潜むモンスターと心を通わすことができるらしいんだ」

「えっ!?データストームって喋るの？」

俺の言葉にゴーストガールがそう驚きの声を上げる。

まあ、ゴーストガールの反応も当然といえば当然だな…俺も初めてデータストームが喋った時は驚いたし。

「ああ…実際、何度もデータストームと話してるしな」

「…驚いた、そんなことがあり得るのね…でも、ちよつと待って…仮にあなたがデータストームの声を聞いているとして、どうやってデータストームの声を聞いてもいるの？」

「どうやって…普通に聞いている感じだけど」

「…ねえ、あなたの持つリンクアクセスの力って本当にそれだけなの？」

「実は、俺もそれは気になってた」

もし、仮にリンクアクセスの力がリボルバーの言うようなものなら、確かにすごい能力だとは思うけどここまで情報を消す必要があるのだろうか？

リンクアクセスについての情報があまりにも少ないから、推測するしかないが、この能力には何か俺達の知らない力があるのかもしれない。

「…もしかして、あなたの能力にはデータマテリアルを理解する力が備わっているのかもしれないわ」

「データマテリアルを理解する…？」

「まあ、推測にすぎないけどね…データストームもデータマテリアルの固まりみたいなものだから、それを理解することでプレイヤーカーと同じことができるのかもしれない…待って、仮にそうだとすると…」

ゴーストガールはそう言いながら、考えるような仕草をする。

「ゴーストガール？」

「…Phantom、もし私の推測通りだとしたらあなたの力は間違いないくSOLテクノロジー社に狙われる…いいえ、ハノイの騎士にだって狙われるかもしれない」

「どういうことだ？」

「…リンクアクセスの力にデータマテリアルを理解するような能力が備わっているとしたら、その力を応用することで、データストームの発生源の場所を突き止めることだってできるかもしれない」

「それって…！」

つまり、ゴーストガールが言いたいのは俺の力を使えばサイバース世界の場所がわかるかもしれないってことか？

なるほど、確かにそうだとしたら間違いなく俺はSOLテクノロジーとハノイの騎士の両方から狙われるな…

「…もし、そうだとしたら俺の状況ってかなり不味いな…」

「まあ、これはあくまで可能性の話しただけだね…何にしてもリンクアクセスの力をあまり多用しないことをオススメするわ」

ゴーストガールはそう俺に忠告してくれる。

確かに、リンクアクセスの力を多用すればそれだけSOLテクノロジーとハノイの騎士に情報を与えることになる…そうなったら葵や花恋が巻き込まれてしまうかもしれない。

それに、誠の世界に行ってから目覚めた霸王の力…この力についてもおいそれと使わないようにしないとな。

「…忠告ありがとう、ゴーストガールって抜け目がなくて、狡猾だけ

ど、良い奴だよな」

「それ誉めてるの？それとも貶してる？」

「一応誉めてるつもりなんだけど…とにかくありがとう、忠告通りこの力を多用しないように気をつけるよ！」

俺はそう言つて、ゴーストガールに笑みを向ける。

「まあ、良いわ…それじゃあね、面白い情報をありがとう！何かわかったらまた連絡して！」

「えっ!?ゴーストガールに一々報告するのか？」

「…うふふ！当然！Phantomは私に借りがあるでしょ？その借りはキツチり返してもらわないと！」

ゴーストガールはそう言つて、俺に軽くウインクする。

「あはは、やっぱりあんたに借りを作つたのは失敗だったかも…まあ、でもあんたのおかげで助かったのは事実だしな…しようがない、何かわかったらあんたに連絡するよ」

「ありがとう、それじゃあまたね！」

そう言つて、ゴーストガールはログアウトしていった。

「…本当にちゃっかりしてるよな」

俺はそう呟きながら、ログアウトしていった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「侑哉…？どうしたの？ボーっとしてたみたいだけど」

「あ、ごめんごめん…ちよつと考え事してた」

葵に声を掛けられ、そう答える。

今はちようど昼休みで、葵と美月と俺の3人で屋上で昼食を食べていた。

それでゴーストガールにリンクアクセスについて話した時の事を思い出していた。

その事について思い出していたのは、やっぱりリンクアクセスについてわからないことが多いからだらう。

それに、最近では新しい考え事ができてしまった。

(俺は一体何者なんだ…？リンクアクセスに霸王の力…どうして俺にそんな力があるんだ？)

今まではそこまで気にしたことはなかった…リンクアクセスについては調べていくうちにわかるだろうと思っていたし、霸王の力があつたおかげで助けることができた人が居たから、むしろ霸王の力には感謝したぐらいだった。

だけど、徐々に自分になんでそんな力があるのか、そんな疑問を抱くようになっていった。

「そういえば、侑哉君と財前さんはこの前起きた電波障害のことを知ってますか？」

俺が考え事をしていると、美月がふいにそんなことを口にする。

「電波障害…？」

「この前、一時的にLINK VRAINSの中継ができなくなったんですよ、まあ、しばらく経ってから復旧したので、システムの不具合という結論になったみたいですけど」

「へえー、そうなのか…全然知らなかったよ」

…それって、間違いなく俺がゴーストガールに頼んでやってもらったことだよな…とりあえず、バレてはいないみたいだし、良かったという件事におこう。

「まあ、人間が管理している以上、そういうことが起きても不思議じゃないですよね」

「確かにね…」

さすがに、俺が知り合いに頼んだとは言えるはずもなく、そう返す。

「…侑哉、ちよつと来て！」

「え？急にどうしたんだよ葬…」

葬は俺にその声を掛けながら、俺の手を引く。

そして、そのまま屋上から学校の中へと戻り始めた。

「お、おい！本当にどうしたんだ？」

俺がその声を掛けると葬は少し間をあけて言葉を紡いだ。

「ねえ、侑哉…今からちよつと出かけない？」

「出かけるってどこに？」

「それは行きながら考えるわ！さ、行こー！」

「え？学校はどうするんだ？」

「今日ぐらい休んでも罰は当たらないわよ！」

葵はそう言っつて、笑みを浮かべながら俺の手を強く引いた。

…本当に急にどうしたんだ？まあ、葵と出かけられるのは嬉しいけど。

俺はそんなことを思いながら、葵に促されるまま歩を進めた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「それで、どこに行こうか？」

自分の自転車を押しながら、葵にそう尋ねる。

「そうね…侑哉は行きたいところとかある？」

「そうだな…あ、そうだ！スターダストロードを見にいかないか？」

「スターダストロード？」

「そうそう、何でも稀に海のプランクトンか何かが光って、すごくキレイな景色になるんだつてさ」

この話を聞いたのは花恋からで、最初にスターダストロードと聞いた時にスターダストドラゴンがすぐに頭に浮かんだのを覚えている。

多分、スターダストドラゴンとは何の関係もないんだろうけど。

「まあ、稀にしか見られない現象らしいから、見られるかどうかはわからないけど」

「よし、それじゃあさっそく行こー！侑哉！」

「わかった、それじゃあ葵は後ろに乗ってくれ」

「うん！私を落とさないように気をつけてね」

「落とさないって！」

「ふふっ！冗談よ」

葵はそう言っつて悪戯っぽい笑みを浮かべながら、自転車の後ろに乗った。

「それじゃあ行くか！」

俺は一言そう言っつて、自転車を漕ぎ始めた。

「そういえば、初めてだよな…こんなふう自転車に二人乗りしてどこかに行くのって」

「確かに、そうかもしれないわね…今度からデートに行く時は自転車で行く?」

「それも良いかもな…」

二人で歩きながらデートするのも良いけど、たまにはこんなふう自転車でデートするのもありかもしれない。

まあ、めちやくちや慎重になるかもしれないけど。

「さて、飛ばすぞ!葵、しつかり掴まってるよ!」

「え!?ちよつと侑哉!」

「ははっ!冗談だよ、ゆっくり行こう」

「もう…でも良かった、元気になってくれて」

「うん?どういうことだ?」

葵の呟きに思わずそう聞き返す。

「だって、今日の侑哉何だか様子が変わったから…」

「…そう見えた?」

「うん、元気がなさそうだった…だから気分転換も兼ねて侑哉を誘ったの」

「そうだったのか…」

つまり、葵が急にどこかに出かけようと言ったのは俺を元気づけるためだったってことか。

やれやれ、本当に葵には敵わないな。

「ありがとう、葵…俺を元気づけようとしてくれてたんだな」

「気にしないで、侑哉に元気がないと私まで落ちこんじゃうから…」

「そっか…それじゃあ今回は色々付き合ってもらおうかな?俺の行きたいところや、やりたいことに」

俺はそう言って、葵に笑みを向ける。

そうすると、葵は笑みを浮かべながら頷いてくれた。

「そうと決まれば、さっそく行こう!」

俺はそう言って、目的地へと向かって行った。

スターダストロードを見るにはあまりにも時間が早すぎる…なら、

それまでに葵と色んなところに行こう。

俺はそんなことを思いながら、自転車を漕ぎ続けた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「やったぜ！良いカードゲットー！」

「良かったわね、侑哉！」

「ああ、これでさらにデツキの構築の幅が広がるよ！葵の方はどうだった？」

「私の方はいまいちなな…結局、デツキを強化できるカードは手に入らなかったし」

「そっか…ん？あれは」

俺がふと視線を移すと、そこには見たことのないトリックスターのカードがあった。

「トリックスター・キャロベイン？見たことのないカードだな…しかも、効果がかなり強くないか？」

このカードがあれば葵のデツキがかなり強化できるな。

「あのお、すみません…このカードが欲しいんですけど…」

俺はそう店員の人に言い、そのまま会計をすませた。

「侑哉、どこに行ったの？急に居なくなるから心配したわよ」

「ごめんごめん…ちよつと良いカードを見つけてさ」

「良いカード？」

「はい、これ！葵にプレゼント」

俺はそう言つて、先ほど買ったカードを葵に手渡した。

「これって…！新しいトリックスターのカード!？」

「そうだよ、このカードがあれば葵のデツキをもっと強化できそうだったからさ」

「ありがとう！侑哉！」

葵はそう言つて、俺に勢いよく抱きついてきた。

「ちよつ！葵！く、苦しいって…」

「ぐ、ごめん！嬉しくて…つい」

葵は俺から慌てて離れながら、照れくさそうにそう口にする。

どうやら、喜んでくれたみたいだな…良かった。

「このカード、大切に…！」

葵はそう言って、少し照れくさそうに笑みを浮かべる。

「そうしてくれた方が俺としても嬉しいかな」

せっかく、プレゼントしたわけだし大切にしてくれた方がプレゼント

トした甲斐があるってもんだ。

「…さて、そろそろスターダストロードを見に行こうか！」

「うん…！」

そうして、俺達はそつと手を繋ぎ、歩き始めた。

その後、結局スターダストロードを見ることは出来なかったが、葵のおかげで俺の悩みは解決した。

いや、解決したというよりは受け入れる余裕が出来たと言うべきか。

俺が何者だろうと関係ない、俺は、今こうしてこの世界で生きていて、大切な人達と共に過ごしている…今はそれで充分だ。

「どうかした？侑哉」

「いや、何でもないよ…なあ、葵」

「うん？」

「これからも色々と迷惑を掛けるかもしれないけど、よろしくな」

「うん！もちろんよ！これからもずっと侑哉の側に居るわ…だから」

葵はそう言って、俺に体を預ける。

その体は小刻みに震えていて、俺は葵を強く抱きしめた。

「居なくなったりしないよね…」

「当たり前だよ…葵を置いてどこかに居なくなったりしないさ」

「ありがとう、侑哉…」

そう言って、葵は俺にキスをする。

俺もそれに応えるように、深くキスをする。

夜空の星達は、俺達を祝福するかのように優しい光を放っていた。

第38話 異世界

「……あれ?ここ、どこだ?」

意識が覚醒すると同時に、辺りにたくさんの自然がある、のどかな場所が目映る。

ちよつと待つてくれ…状況が呑み込めないんだけど。

確か、俺は…最近、よく出てくるハノイの騎士をいつも通り倒しに行こうとして、LINK VRAINSに行つたはずなんだけど。

「LINK VRAINSにこんな場所あつたか?」

『マスター?どうかなさいましたか……つて、ここどこですか!』

デュエルディスクから姿を現した、レイは俺と同じような反応をする。

「俺にもわからない…とりあえず、ログアウトしてみるか…」

そう言つて、俺はいつも通りログアウトの操作を進めた。

「嘘だろ…!ログアウトできないぞ……どこのVRMMOだよ…」

『そんな!?私も試してみます!……どうしましょう?マスターの言う通り、ログアウトできません!』

「これは、どういうことなんだ?また異世界に来ちやつたのか?」

『…ダメです、花恋さんにも連絡がつかません…』

「そつか…さて、どうしたもんかな」

花恋に連絡が繋がらないとなると本格的に帰る方法がないぞ…しかも、連絡が繋がらないつてことはここはネットワークから切り離されている可能性が高いな。

多分、ログアウトできないのもそれが原因だ。

まあ、俺達が知らないまったく別の世界に来た可能性もあるけど。

前に誠の世界に行った時は普通に連絡できたけど、それは花恋のアシストがあつたからだしな…今の状況じゃ花恋に頼ることもできない。

「とりあえず、他に人がいないか探すか…」

『そうですね、まずはここがどこなのか把握しないと』

「そうだな」

俺はレイにそう返して、歩き始めた。

「それにしても、のどかな場所だな…こういうところで昼寝をしたら気持ちよさそうだ」

『そうですね…あれ？見てください！マスター！何か小さい生物がこっちに向かってきます！』

「本当だ…うん？あの生物どこかで見たことがあるような…」

そう言つて、俺が視線を移すとその生物は俺達のところにとことくと歩いてくる。

「クリクリンク〜！」

「おお！どこかで見たことあると思つたらクリボーに似てるな！色からしてリンクモンスターっぽいし、リンクモンスターのクリボーなのかもしれないな」

「クリクリンク〜！」

「へえ〜、お前リンクリボーって言うのか！俺はPhantom、よろしくな！リンクリボー〜！」

「クリクリンク〜！」

『あの一、マスター？…自然に会話してますけど…リンクリボーさんの言葉がわかるんですか？』

レイが少し驚いた様子で、俺にそう質問する。

「もしかして、レイはリンクリボーの言葉がわからないのか？」

『わかりませんよ！そんな驚いたような顔で、言わないでください！』

「クリ!?」

『リンクリボーさんまで?!これは私がおかしいんですか？』

レイが若干涙目になりながら、そう口にする。

さすがに、これ以上はかわいそうだな。

「ごめんごめん…多分、俺がリンクリボーの言葉がわかるのはリンクアクセスの影響だと思う…だから、普通は言葉はわからないと思う」
『な、なるほど…私がおかしいわけじゃなかったんですね…安心しました』

レイはホツとした様子で、そう呟いた。

「…さて、人ではないけど一応この世界について知ってそんな奴に会えたし、ここがどこか聞いてみるか」

『そうですね…といつてもマスターしかリンクリボーさんの言葉を理解できる人はいませんけど…』

「ははっ、確かにね…さて、リンクリボー、ここがどこか教えてくれないか？実は、俺達、気付いたらここにいてさ…右も左もわからなくて困ってるんだ」

リンクリボーと視線が合うように体勢を低くし、そう尋ねる。

…それにしても、今の俺って他の人から見たら変な人に見えるそうだな。

まあ、今はそんなことは良いか。

「クリ、クリクリ！クリクリンク！」

「え…!?それって本当なのか？」

「クリ〜！クリクリンク？」

「ああ、頼むよ…」

俺がそう言うと、リンクリボーは嬉しそうな様子で歩き始めた。

そして、俺もリンクリボーの後に続いた。

『えつと…マスター、リンクリボーさんは何て言ってたんですか？』

「…ここはサイバース世界らしい…」

『サイバース世界!?本当なんですか？それ…』

「俺も信じられないよ…でも、リンクリボーは確かにそう言ってた」

実際、リンクリボーが嘘をつく理由もないだろうし多分、ここがサイバース世界なのは本当なんだろう。

でも、何で俺達はサイバース世界に来たんだ？

これもリンクアクセスの影響なのか？

「…とりあえず、リンクリボーがサイバース世界を案内してくれるらしいから、付いて行こう！」

『そうですね！サイバース世界がどんなところなのか気になりますし！』

「ああ、そうだな！」

俺とレイはそんな会話を交わしながら、リンクリボーの後に続い

た。

まだまだわからないことだらけだけど、とにかく今はサイバー世界について知ることが先だな。

俺はそんなことを考えながら、歩き続けた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ホーリーエンジェルでダイレクトアタック！」

ホーリーエンジェルの攻撃によりハノイの騎士のライフが0になった。

「…おかしい、何で侑哉が居ないの？」

ハノイの騎士がLINK VRAINSで暴れているのに、侑哉が居ないのはおかしい…だって、今まで侑哉はハノイの騎士が現れたら絶対に来ていたはずなのに。

「…ログアウトして、花恋さんに聞いてみるしかないわね」

私はそう考えて、ログアウトした。

「…さて、花恋さんに連絡しないと」

私はそう呟きながら、花恋さんに連絡した。

『葵ちゃん？どうかしたの？』

「花恋さん、侑哉に何かあったんですか？」

『え!? LINK VRAINSに行っただんじやないの？』

花恋さんは驚いた様子でそう口にする。

でも、驚いたのは花恋さんだけでなく私もだった。

「LINK VRAINSには居なかったんです…だから、侑哉に何かあったんじゃないかと思って花恋さんに連絡したんです」

『そうだったの…ちょっと待ってて！侑哉の様子を見てくるわ！』

「はい！私も今から、そっちに向かいます！」

『わかったわ！それじゃあまた後でね！』

花恋さんはそう言って、通話を終了した。

「…よし、行こう！」

そう口にして私は出かける準備をして、侑哉の家に向かった。



「花恋さん！侑哉は？」

「葵ちゃん…良いところに来たわね、着いてきて」

私が家に入ると花恋さんが私を出迎えてくれた。

ただ、その表情はとても暗くて、侑哉に何かあったことはすぐにはわかった。

「はい…あ、あの…侑哉はどういう状況なんですか？」

「…侑哉がどこかにログインしているのは間違いないわ…ただ、侑哉のデュエルディスクの位置を調べてみても侑哉が今、どこに居るのはわからなかったの」

「そんな…」

花恋さんの話しを聞いて、思わずそんな声を上げる。

そして、話しをしている内に侑哉の部屋に辿り着いた。

部屋に入ると、目に入ってきたのはデュエルディスクをしながらベッドで眠っている侑哉の姿。

「侑哉…」

その姿を見て、すぐさま侑哉に駆け寄る。

だけど、近くで何度か声を掛けてみたり、体を揺すってもまったく反応がなかった。

「…言ったでしょ、侑哉はどこかにログインしてるって…」

「…でも、一体どこに？」

「考えられる可能性としては、侑哉もアナザーになってしまったというところが考えられるわ…ただ、侑哉がハノイの騎士にそう簡単にやられるとは思えないけど…」

「侑哉がアナザーに…」

確かに、今の侑哉の状態はアナザーになってしまった人達に似ている。

私も侑哉がハノイの騎士にそう簡単にやられるとは思えないけど、ふいをつかれたり、誰かを人質にされて、やられてしまった可能性も充分に考えられる。

…なら、私のやるべきことは一つ。

「…花恋さん、アナザー事件の首謀者について調べてもらえることはできますか？」

「えっ？まあ、少し時間は掛かるけど可能だと思うわ…それよりも葵ちゃん、まさかとは思うけど首謀者を見つけたら、その人物にデュエルでも挑むつもり？」

「…それはわかりませんが、それ相応の報いを受けさせるつもりです」

「…怖っ！ちょっと葵ちゃん…侑哉が心配なのはわかるけど、一旦落ち着いて！まだ、ハノイの仕業と決まったわけじゃないのよ？」

花恋さんが慌てたような様子でそう口にする。

それにしても、心外ね…怖いなんて言われるほどのことは言っていないのに。

「…はあ、わかったわ…とりあえず、アナザー事件の首謀者はこっちで調べてみるわ」

「はい、お願いします！何かわかったら連絡をください！」

「任せておきなさい！…正直、葵ちゃんは怒らせたら怖いし…」

「…？花恋さん、どうかしたんですか？」

「ううん！何でもないわ！とにかくこっちは任せておいて、葵ちゃんは家に帰った方が良いわよ」

「あの、そのことなんですが…しばらくここに泊まっても良いですか？」

「それは構わないけど、大丈夫なの？」

花恋さんは少し心配そうな表情をしながら、私にそう尋ねる。

「大丈夫です！着替えは今から取りにいけますし、兄さんからは侑哉の家なら泊まっても良いって言われていますから！」

「…何というか、親公認みたいな感じなのね、侑哉と葵ちゃんは…もう結婚すれば良いんじゃない？」

「け、結婚!?それは、いつかそうしたいとは思ってますけど…その、まだ、私達は学生だし…そういうことはまだ早いと言うか何と言うか…」

花恋さんの言葉に、思わずタジタジになりながらそう答える。

「ふふっ！わかったわ…さ、早く着替えを取りに行った方が良いわよ」
「は、はい…」

私はそう言っ、恥ずかしさをごまかすように自分の家に向かった。

「本当に侑哉のことになるとおっかなくなるんだから…逆に侑哉との関係について何か言おうと、顔が赤くなるし…葵ちゃんにとっては侑哉が一番なのね」

「…って、それは私やレイちゃんも同じか…やれやれこれだけ多くの女の子に大事に思われてるなんて、侑哉は幸せ者よ…本当に」

「…さて、早いところ侑哉を助ける方法を見つけないとね！」

眠っている侑哉と自分以外に誰もいなくなった部屋で花恋はそう呟きながら、アナザー事件の首謀者について調べ始めた。

第39話 怒りのブルーエンジェル

「えっと…何で俺は囲まれてるんだ？」

周りに居るイグニス達を見ながら、俺はそう呟く。

リンクリボーにサイバース世界を案内してもらっていると、何故か色んな色のイグニス達に囲まれてしまい、今の状況になっている。

「何故、人間がここに…まさか、貴様！ハノイの騎士か!？」

「待て待て！俺はハノイの騎士じゃないって！むしろ、ハノイの騎士と戦っている方なだけど…」

赤色のイグニスに俺はそう返す。

見た目からして、多分、炎のイグニスってところだろう。

「ほう、ではどうやってここに来た？」

「いや、それは俺の方が知りたいぐらいだ…ハノイの騎士を倒しに行こうとして、LINK VRAINSにログインしたはずなのに気付いたらサイバース世界に来てたからな」

「…ふむ、嘘はついていないように見えるな…」

「まあ、リンクリボーも彼の事を気に入ってるみたいだし、悪い人じゃないんじゃない？そういえば、あなたの名前は？」

青色のイグニスが俺にそう尋ねる。

色からして多分、水属性かな？

「俺は、Phantomだ…よろしくな！」

「よろしくね！」

「おいおい、そんな簡単に人間を信用して良いわけ？ハノイの騎士は僕達を消そうとしたんだよ？こいつも僕達を消そうとしたっておかしいくない」

「ちよつと…」

水のイグニスに緑色の、恐らく風属性のイグニスがそう反対する。

実際、風のイグニスの反応はある意味普通の反応だ。

ハノイの騎士はAiのことを狙っていたし、多分、イグニス達を消そうとしているんだろう。

そんな状況では人間を信用できないのも無理はない。

『…さつきから聞いていれば…何ですか！マスターはあなた達を消そうだなんて思っていないません!!それをあなたは!』

「え?!僕?」

『はい!そうです!そこの緑のあなたです!!マスターは私のような者でも受け入れて、仲間だと言ってくれました!それに、デュエル中は私のことを信頼してくれますし、私のことを気にかけてくれます!そんな優しい人なんです!』

風のイグニスの言葉がよほど頭にきたのか、レイが声を荒げてそう言ってくれる。

レイがそんなふうにも思ってくれているなんてな…正直、嬉しいな。

「ありがとう、レイ…そう言ってくれて嬉しいよ…本当にいつもありがとな」

俺はそう言って、レイの頭をそつと撫でる。

『…えへへ、何か照れますね…』

「…レイと言ったか?君も我々と同じ、意思を持ったAIなのか?」

『…そうですね、私の場合は少し特殊で…AIでもありカードでもあるって感じですね』

「なるほど…」

そう言って、炎のイグニスは考えるような仕草をしながら言葉を紡いだ。

「…わかった、君達は元の世界に戻るまでサイバース世界に居ると良い」

「本当か!?助かるよ!」

『ありがとうございます!』

俺とレイはそう言って、炎のイグニス感謝の言葉を告げた。

「やった!それじゃあPhantomは私が面倒を見てあげる!…でも、その前に…」

水のイグニスはそう言って、風のイグニスを睨み付ける。

「ほら、ちゃんと謝りなさいよ!」

「わ、わかったって…その、悪かったよ、ごめん…だけど、僕はまだ君を信用したわけじゃないからな!」

「ああ…それで構わないよ」

「全くもう…まあ、でもとりあえずは良いわ…さあ、Phantom！
着いてきて！色々案内してあげる！」

そう言つて、水のイグニスには俺に着いてくるように促した。

とりあえず、一応受け入れてもらったつてことで良いのかな？

うん、そういうことにしておこう。

俺はそんなふうには思いつながら、水のイグニスの後に続いた。

／／／／／／／／／／／／／／／

「これで一通り案内し終わったかな…どうだった？ Phantom
！」

「ああ、サイバース世界って良いところだな…案内してくれてありが
とな！」

「どういたしまして！」

水のイグニスに色んな所を案内してもらい、サイバース世界のこと
について何となくわかった。

サイバース世界では、イグニス達がそれぞれに役割分担をして、こ
の世界を支えているようだ。

他にもサイバースのカードをたくさん産み出して、みんなで仲良く
暮らしていた。

実際、案内してもらっている途中で見たことのあるサイバースのモ
ンスターや見たことのないモンスターの姿が目に入った。

「そういうえば、良かったのか？サイバースのカード、結構もらっちゃつ
たけど…」

「もちろん！」

「そっか、ありがとう！おかげでかなりデッキが強化できそうだよ！」
『良かったですね！マスター！』

レイはそう言つて、笑みを浮かべた。

「それじゃあ、さっそくデッキ編成といきますか！」

そう言つて、俺はデッキを広げる。

「へえー、これがPhantomのデッキなんだ…何というかすごい
バランスが悪そうなデッキね、色んな戦略が組み込まれてるし…こ

のデッキで戦ったら手札事故が起きそう」

「いや、そうでもないさ…意外と回るよこのデッキ…まあ、カードが俺に力を貸してくれてるおかげかもしれないけどね」

俺のデッキはお世辞にもバランスが良いとは言えない、だけど、いくつもの戦略を組み込んでいるおかげで色んな状況に対応できる。

まあ、俺がいつもそんなふうには戦えているのはカードのおかげだと思っているけど…本当にみんなには感謝しかない。

「ふーん、Phantomってカードに愛されてるのね」

『ふふつ、そうですね…私も含め、皆さんマスターのことが大好きです！だからこそ、マスターに力を貸すんですよ！』

「そうなんだ…それにしてもすごく楽しそうにデッキ編成してるね、Phantom」

「当たり前だよ！見たことのないサイバースのカードを使えるわけだし、そのカードと自分のカードを組み合わせで新しい戦略を組み立てられる…これってすごくワクワクするんだよな」

『マスター！私も手伝いますよ！』

「それなら私も手伝ってあげる！」

レイと水のイグニスが次々と、そう口にする。

「…よし！それじゃあ3人でデッキ編成するとうしよるか！」

俺がそう言うと、二人は笑みを浮かべながら頷いた。

それにしても…本当に何で俺はサイバース世界に來ちやつたんだ？

葵は今頃どうしてるかな…まあ、間違いなく心配はかけてるよな…今すぐにでも帰りたいところだけど帰り方がわからない。

…しばらくはサイバース世界に残るしかないか。

俺はそんなことを思いながらデッキ編成を続けた。



「おはよう、葵ちゃん！昨日はよく眠れた…って、聞くまでもないわ

ね」

「花恋さん、おはようございます…結局、侑哉は目を覚まさせませんでした…」

花恋さんの挨拶にそう答える。

昨日、侑哉の様子を1日中見ていたけど結局、侑哉が目覚ますことはなかった。

「これは、相当参ってるわね…とにかく、葵ちゃん！侑哉のことが心配なのはわかるけど休める時にはちゃんと休まないよ」

「それはそうですけど…そういえば、アナザー事件の首謀者については何かわかりましたか？」

花恋さんの言うことは最もだけど、今は侑哉を助ける方法を見つけない。

「それに関しては大体の目星はついたわ…ただ、それが正しいかはわからないけど」

「本当ですか!?それなら早く教えてください!」

「落ち着いて、葵ちゃん…つて、言っても無駄ね…とりあえず着いてきて」

「はい!」

そう言つて、私は花恋さんの後に続いた。

「それで一体誰がアナザー事件の首謀者なんですか？」

「…教えてあげたいところだけど、詳しい情報を教えることはできないわ…だって今の葵ちゃん、教えたら絶対に殴り込みに行きそうだし」

「うっ…それは否定できません」

実際、否定できない…だって、もし今首謀者の情報を知ったら、多分私は花恋さんの話しも聞かずに首謀者のところに向かうと思う。

「わかったなら良いわ…さて、葵ちゃんにこれから頼みたいことについてだけど…」

「何ですか？」

「恐らく、首謀者は今日の午後にLINK VRAINSにログイン

してくる可能性が高いわ：だから、葵ちゃんにはLINK VRAIN Sにログインしてきた首謀者を倒してほしいの」

「わかりました：でも、首謀者がどこに現れるのか予測できるんですか？」

花恋さんの言葉に思わずそう質問する。

仮に、LINK VRAINSに来る時間帯を予測できたとしても、どこに現れるかまでは予測をすることは難しい。

だから、私は花恋さんに質問した。

「可能よ、アナザー事件の首謀者は多分ハノイの騎士の幹部だと推測できるわ：そして、幹部みたいな立場の人はそうそう目立つようなことはしない、だとすれば人目につきにくく、尚且つ多くの所を見渡せる場所に行く可能性が高い：だから、そういった所に絞って場所を予測していけば、首謀者にたどり着くはずよ」

「な、なるほど：それじゃあ私は花恋さんの予測した場所を回っていけば良いんですね？」

あまりにもあつさりと言われてしまったため、少し戸惑いながらも聞き返す。

「そういうこと！ま、私の予測が外れないとも限らないし、ある程度の範囲は私の作った小型カメラで偵察するつもりだけど…」

「わかりました！絶対に首謀者を見つけましょう！そして、侑哉を必ず助けてみせます！」

「そうね！でも、その前に朝食を食べましょう！侑哉が意識を失っているからお店で買ってきたものになっちゃうけど、何も食べないよりはマシだと思うし」

「それもそうですね…」

私はそう言っ、花恋さんに促されるまま朝食を食べに行った。

：絶対に首謀者を見つけないと：少しでも侑哉が目覚める可能性があるなら、私はそれに懸ける！



「一体どこに……うん？あれはハノイの騎士！」

LINK VRAINSに來た私は花恋さんの予測した場所を一つずつ回っていき、そして、今まさにハノイの騎士を見つけた。

見つけた…絶対に倒す！

「ようやく見つけたわ！ハノイの騎士！私とデュエルしなさい！」

私がそう叫ぶと、私より年上であろう女性がそれに答えるように言葉を紡ぐ。

「まさか、あなたが来るとは思わなかったわ…」

「どういう意味？」

「せっかく、Phantomのおかげで電腦ウイルスに感染せずに済んだのに、自分から感染しに来るなんて」

「何で私が負ける前提なのよ！私は絶対にあなたをぶつ潰す!!Phantomの為にも！」

「どうやら、私がアナザー事件の首謀者だとバレているみたいね…わかったわ、私も自分のしたことには責任を取りましょう」

「ええ、あなたをぶつ潰して、それ相応の報いを受けさせてやるわ！」

私はそう宣言して、Dボードに飛び乗る。

それに続くように、女性のハノイの騎士もDボードに飛び乗った。

「アイドルにお似合いの特別なステージを用意してあげるわ…データゲイル発動！」

「データストームが！これって、Go鬼塚がハノイの騎士と戦った時と同じ…」

前のGo鬼塚とハノイの騎士のデュエルを侑哉と一緒に見ていた時に、今と同じようにデータストームが消えていた。

でも、今はそんなことはどうでも良い。

このデュエル絶対に勝つ！

「スピードデュエル!!」

ブルーエンジェル LP4000

VS

「私の先攻からいかせてもらおうわ！さあ、ファンのみんな！今日は私の新しい戦略を魅せてあげる！」

「新しい戦略…？」

「私はスケール6の『EMギタートル』と同じくスケール6の『EMリザードロー』をPゾーンにセット！」

「EMですって!？」

目の前のハノイの騎士はそんな驚きの声を上げる。

多分、私の戦略の対抗策を考えていたんだと思う…だからこそ、EMが出てきたことに驚いた。

「ギタートルのP効果！もう片方のPゾーンにEMがセットされた時デッキからカードを1枚ドロロー！さらに、リザードローのP効果！自身を破壊することで、デッキからカードを1枚ドロローするわ！」

ブルーエンジェル手札4↓2↓4

「さらに、手札からフィールド魔法、『トリックスター・ライトステージ』を発動！このカードの効果でデッキから『トリックスター・リリール』を手札に加え、さらに、リリールの効果で自身を特殊召喚！ブルーエンジェル手札4↓3↓4↓3

トリックスター・リリール レベル3 攻撃表示(ATK800)

「そして、私は手札から『トリックスター・ヒヨス』を召喚！さあ、さっそく飛ばすわよ！現れる、夢と希望のサーキット！召喚条件はトリックスターモンスター2体！私はリリールとヒヨスをリンクマーカーにセット！サーキットコンバイン！リンク召喚！来て！『トリックスター・ホーリーエンジェル』!!」

トリックスター・ホーリーエンジェル LINK2 (ATK2000) リンクマーカー左下/右下

「そして、リンク素材として墓地に送られたヒヨスの効果！このカードを墓地から特殊召喚するわ！戻ってきて！トリックスター・ヒヨス！」

トリックスター・ヒヨス レベル1 守備表示(DEF0)

「この瞬間、ホーリーエンジェルの効果発動！このカードのリンク先にトリックスター・モンスターが召喚、特殊召喚された時、相手に20ポイントのダメージを与える！」

バイラ LP4000↓3800

「さらに、ライトステージの効果で追加の200ダメージ！」

「くっ…」

バイラ LP3800↓3600

「まだまだいくわよ！手札から魔法カード、『強欲で貪欲な壺』を発動！デッキトップから裏側でカードを10枚除外して2枚ドロ―！」

ブルーエンジェル手札2↓1↓3

「私は空いているPゾーンにスケール2の『EMドラミングコング』をセット！これでレベル3〜5のモンスターが同時に召喚可能！いくわよ！ペンデュラム召喚！来て！私のモンスター！『トリックスター・シャクナージュ』！」

トリックスター・シャクナージュ レベル4 攻撃表示（ATK1400）

「再び現れて、夢と希望のサーキット！召喚条件はトリックスター・モンスター2体！私はヒヨスとシャクナージュをリンクマーカーにセット！サーキットコンバイン！リンク召喚！来て！『トリックスター・スイートデビル』！」

トリックスター・スイートデビル LINK2（ATK2000）リンクマーカー左／右

「この瞬間、ホーリーエンジェルの効果発動！あなたに200ポイントのダメージを与える！さらに、ライトステージの効果で追加の200ダメージ！」

「くっ…」

バイラ LP3600↓3200

「そして、カードを1枚伏せて、ターンエンドよ！」

ブルーエンジェル LP4000

手札0
場 EXモンスターゾーン トリックスター・ホーリーエンジェル
LINK2 (ATK2000) リンクマーカー左下/右下
メインモンスターゾーン トリックスター・スイートデビル LI
NK2 (ATK2000) リンクマーカー左/右
伏せ1
Pゾーン EMドラミングゴング (スケール2)
EMギタートル (スケール6)
フィールド魔法 トリックスター・ライトステージ
バイラ LP3200
手札4
場なし
伏せなし
Pゾーンなし
フィールド魔法なし

第40話 帰還

『おい、見てみろよ！遊作！ブルーエンジェルがペンデュラムを使ってるぜ！』

「そのようだな…まさか、ブルーエンジェルがペンデュラムを使うとは」

これは、さすがに予測できなかった。

だが、考えてみればおかしな話してはない、財前葵は侑哉の恋人だ…ならば、侑哉と同じ戦略を使ってもおかしくはない。

『そういや、ペンデュラムで思い出したけどよ…今日、LINK VR AINSにあいつが来てねえよな』

「侑哉のことか？確かに、昨日もLINK VR AINSに来ていなかったな…あいつがハノイの騎士を野放しにするとは考えにくい…」

そういえば、今日は学校にも来ていなかったな…それに財前葵も来ていなかった…だとすれば、侑哉に何かあったと考えるのが妥当か。

『まさか…侑哉の奴もアナザーになっちゃったとか？』

「…可能性としては0ではないな…だが、あいつがハノイの騎士に遅れを取るとは到底思えない」

あいつほどのデュエリストがそう簡単に敗れるとはとてもじゃないが思えない…なら、アナザーとはまた別の要因でLINK VR AINSに来ていない可能性の方が高いな。

…侑哉のことも気になるが、まずはアナザー事件の首謀者を突き止めるのが先か。

「草薙さん、そっちはどうだ？アナザー事件の首謀者についてわかりそうか？」

「もう少し時間が掛かりそうだ…」

「そうか…」

…このデュエルには興味があるが、早く首謀者を突き止めないと。な。

俺は一度映像へと目を移した後、作業を再開した。



「私のターン、ドロロー！」

ブルーエンジェル LP4000

手札0

場 EXモンスターゾーン トリックスター・ホーリーエンジェル
LINK2 (ATK2000) リンクマーカー左下/右下

メインモンスターゾーン トリックスター・スイートデビル LI

NK2 (ATK2000) リンクマーカー左/右

伏せ1

Pゾーン EMドラミングゴング (スケール2)

EMギタートル (スケール6)

フィールド魔法 トリックスター・ライトステージ

バイラ LP3200

手札4↓5

場なし

伏せなし

Pゾーンなし

フィールド魔法なし

「手札から『ダークマミー・ゾンデ』を特殊召喚！このカードはフィールド魔法が存在する時、特殊召喚できる！そして、その後フィールド魔法を破壊する！」

ダークマミー・ゾンデ 攻撃表示 (ATK700)

ダークマミー・ゾンデの効果によりトリックスター・ライトステージが破壊された。

…なるほど、フィールド魔法を破壊して、私の得意戦略を封じに来たのね。

でも、これで確信した…あの人はEMが入る前の私のデッキに対しての対策しかしていない。

「さらに、『ダークマミー・ゾンデ』を通常召喚！そして、カードを1枚伏せて永続魔法、『王家の神殿』を発動！このカードは1ターンに1度、罨カード1枚を伏せたターンに発動できる！私は『Cーハックウィルス』を発動！自分フィールド上の守備力0の閥属性モンスター1体をリリース、これにより3ターンの間、あなたの守備力2000以下のモンスターの効果が無効となり攻撃力は0となる！」

「だけど、リンクモンスターには守備力がないから効果を受けない！」

「まだまだこれからよ、私はダークマミーモンスターをリリースして手札から魔法カード、『死者縫合』を発動！このカードの効果により自分フィールドにダークマミートークンを3体特殊召喚する！」

ダークマミートークン 守備表示 (DEF0) × 3

モンスターが3体…来る！

「現れよ！我らの未来回路！召喚条件はダークマミーモンスター3体！私はダークマミートークン3体をリンクマーカーにセット！リンク召喚！現れよ、リンク3！『ダークマミー・サージカルクーパー』！」

ダークマミー・サージカルクーパー LINK3 (ATK2400)
リンクマーカー上／右／左下

「そして、スキル発動！フォビドゥン・サージカル・オペレーション！自分の墓地にいるレベル2以下の同名モンスターを2体除外し、そのモンスターと同じレベルの同名モンスター2体をデッキから特殊召喚する！現れなさい、2体の『ダークマミー・シリンジ』！」

ダークマミー・シリンジ レベル1 守備表示 (DEF500) ×

2

「ダークマミー・シリンジがアンデット族のリンクモンスターのリンク先に召喚、特殊召喚した時、効果発動！ダークマミー・シリンジが存在する限りサージカルクーパーは罨カードの効果を受けない！」

「罨カードの効果を受けない…ガチガチにロックしてくるわね」

「さらに、サージカルクーパーの効果！このモンスターの攻撃力はこのカードのリンク先のモンスター1体につき攻撃力が600ポイントアップする」

ダークマミー・サージカルクーパー (ATK2400↓3000)

「バトル！サージカルクーパーでホーリーエンジェルに攻撃！」
「させない！罨発動！『攻撃の無敵化』！このカードの効果でホーリーエンジェルに破壊耐性を付与する！さらに、ドラミングゴングのP効果！ホーリーエンジェルの攻撃力を600ポイントアップする！」
トリックスター・ホーリーエンジェル(ATK2000↓2600)
「でも、ダメージは受けてもらうわ！」
「うっ…！」

ブルーエンジェル LP4000↓3600

ダメージを受けて、バランスを崩しながらも何とか体勢を立て直す。

データストームが無いせいか、いつもよりバランスを保つのが大変ね…だけど、こんなところで負けるわけにはいかない！

「まだまだ勝負はこれからよ！」

「…私はこれでターンエンド！」

ブルーエンジェル LP3600

手札0

場 EXモンスターゾーン トリックスター・ホーリーエンジェル
LINK2(ATK2000)リンクマーカー左下/右下

メインモンスターゾーン トリックスター・スイートデビル LI

NK2(ATK2000)リンクマーカー左/右

伏せなし

Pゾーン EMドラミングゴング(スケール2)

EMギタートル(スケール6)

バイラ LP3200

手札5↓0

場 EXモンスターゾーン ダークマミー・サージカルクーパー

LINK3(ATK2400↓3000)リンクマーカー上/右/左

下

メインモンスターゾーン　ダークマミー・シリンジ　レベル1　守
備表示 (DEF500) × 2

伏せ1 (王家の神殿)

Pゾーンなし

「私のターン、ドロー！私は手札から魔法カード、『カップオブエース』を発動！このカードの効果でコイントスを行い、表なら私が…裏ならあなたがデッキからカードを2枚ドローできる！」

「この状況では、なかなかリスクの高いカードね…果たして上手いくかしら？」

「絶対に表を出してみせる！」

私には侑哉みたいにほとんどの確率でカップオブエースの効果を成功させるようなコイン運はない。

花恋さんは侑哉がおかしいだけだから気にしない方が良いと言っていたけど、今の状況は絶対に失敗できない。

(…侑哉、力を貸して！)

私はそう心で念じながら、コインを弾く。

〈大丈夫だ、葵…きつと上手くいくさ！〉

「え…？侑哉!？」

突如として響いた声に思わず周りを見渡す。

だけど、周りを見渡しても声の主を見つけることができなかった。

私の気のせいだったの…？

でも、あの声は間違いなく侑哉だった…だって、その証拠に今なら何でもできそうな気がする。

そう思いながら、私はそつと手のひらのコインを見る。

「…やった！表よ！よってデッキからカードを2枚ドロー！」

ブルーエンジェル手札1↓0↓2

「このタイミングで成功させるなんて!？」

「…これなら！上手くいけばこのターンで…やってみるしかないわね

！」

「…どうするつもり？」

「それは見てのお楽しみよ！まずは手札から魔法カード、『トリックスター・ブーケ』を発動！スイートデビルをEXデッキに戻して、ホーリーエンジェルの攻撃力をスイートデビルの元々の攻撃力分だけアップさせる！」

トリックスター・ホーリーエンジェル(ATK2000↓4000)

「バトルよ！ホーリーエンジェルでサージカルクーパーに攻撃！そして、この瞬間、ドラミングゴングのP効果！ホーリーエンジェルの攻撃力をさらに600ポイントアップ！」

トリックスター・ホーリーエンジェル(ATK4000↓4600)

これで準備は整った…侑哉、あなたから貫ったカードを使わせてもらうわね！

「私は、手札の『トリックスター・キャロベイン』の効果発動！このカードを手札から墓地に送り、ホーリーエンジェルの攻撃力を自身の元々の攻撃力分だけアップする！よって、ホーリーエンジェルの攻撃力は…」

トリックスター・ホーリーエンジェル(ATK4600↓6600)

「攻撃力6600ですって!？」

「これでとどめよ！ホーリーエンジェル！」

攻撃力が6000を越えたホーリーエンジェルの攻撃によりサージカルクーパーが破壊された。

「…私の負けね」

バイラ LP3200↓400

／／／／／／／／／／／／／／／／

「私の勝ちよ！さあ、あなたにはそれ相応の報いを受けてもらおうわ！」

「わかっているわ…」

「…と言いたいところだけど、今すぐアナザーの被害者の電腦ウィルスを除去して…それで私はあなたを許すわ」

私は倒れているハノイの騎士にそう言い放つ。

本当は一発ぶん殴ってやりたいところだけど…それじゃあ私の気が晴れても侑哉を助けることができない。

…それに

「…Phantomならきつとこう言うと思う」

「なるほどね…だけど、電腦ウイルスについてはもう大丈夫よ」

「どういうこと？」

「空を見て、ブルーエンジェル…」

私はその言葉に促されるまま、空へと目を移す。

すると、空から無数の光が降り注いでいた。

「これは、除去プログラム…？どうして？」

「あなたが私の心を変えたのよ…諦めず、大切な人の為に戦うあなたの姿が…ほら、あなたの大切な人がそこに来てるわよ」

「え…？」

促されるまま視線を移すと、そこにはいつもと変わらない侑哉の姿があった。

「Phantom…！本当にPhantom？」

「良いデュエルだったよ！ブルーエンジェル…」

「Phantom！」

「え、どわああ！」

侑哉の姿を見た瞬間、私の体は自然と侑哉の元へと駆け寄った。

そして、そのまま侑哉へと抱きついた。

「もう…！心配したんだから！」

「わ、悪かったよ…」

「本当にいつもいつも心配ばかり掛けて！」

「…ああ、本当にごめんな…」

そう言つて、侑哉は私を抱きしめた。

それが嬉しくて、私も侑哉をもっと強く抱きしめる。

「お帰り…侑哉！」

「…ただいま！葵！」

／／／／／／／／／／／／／／／／

「…どうやら、一応戻ってこれたみたいだな」

LINK VRAINSから戻ってきた俺はそう呟く。

「それにしても、なんでサイバース世界から戻ってこれたんだ？」

確か、サイバース世界に居る間はログアウトできなかつたはずなんだけど…

確か、サイバース世界でデツキ編成をして、ちよつと眠くなつたから寝て…目が覚めたら何故かLINK VRAINSに居たんだよな。

「そういえば、レイは？」

レイの姿が見当たらず、デュエルディスクを確認する。

だが、デュエルディスクの中にレイの姿が見当たらなかつた。

「レイはまだサイバース世界に居るつてことか…そうになると、俺がログインするとまたサイバース世界に戻る可能性が高いな」

さて、どうしたもんか…

「侑哉！」

「ちよつ!?!葵！」

俺がそんなことを思考していると、部屋の中に葵が勢いよく入ってきて、そのままLINK VRAINSの時と同じように抱きつかれた。

「葵ちゃん、早いわよ…」

「花恋…」

葵の後に続くように、花恋が部屋に入ってくる。

「良かったわ、本当に目が覚めたのね！」

「…そのことについてなんだけど、二人に話しておきたいことがある」

「話しておきたいこと？」

「ああ、実は…」

そう言つて、俺は今までサイバース世界に居たことと、恐らくもう一度ログインしたらサイバース世界に戻る可能性があること等を二人に話した。

「…サイバース世界!? それじゃあ侑哉が目を覚まさなかつたのは…」
俺の話しを聞いた葵は驚いたようにそう口にする。

まあ、俺も未だに信じられないし無理もないか。

「なるほどね…にわかには信じられないけど、侑哉が嘘をついている
ようには見えないし、本当なんでしょうね」

「ああ…多分、リンクアクセスのせいだとは思うけどな…」

「リンクアクセスの力…それで、侑哉はどうするつもりなの?」

花恋が俺にそう尋ねる。

「一応、もう一度ログインするつもりだよ…それで、花恋に俺の場所を
特定してもらって、そのまま外部からログアウトさせてもらおうと
思ってる」

サイバース世界に戻ったら、恐らく自発的なログアウトが不可能に
なる。

だが、外から強制ログアウトさせることは可能かもしれない…た
だ、一つだけ問題がある。

「なるほど、それなら可能かもしれないわ…でも、どうやって侑哉の居
場所を特定するの? サイバース世界がどこにあるかは誰も知らない
わよ?」

「問題はそこなんだよな…」

そう、サイバース世界に戻った後どうやって俺の居場所を特定して
もらうかが問題なんだ。

まあ、Aiがサイバース世界の場所を教えてくれるのが理想的なん
だけど…そんなことしたら、ハノイの騎士やSOLテクノロジーが攻
めてくるだろうしな。

通信機能が使えないことを考えると、俺の居場所を特定するのはな
かなか難しい。

「うーん…とにかく、その方法については私の方で考えてみるわ…侑
哉も何か思いついたら教えて」

「わかった…ありがとな、花恋」

花恋は気にしないで、と一言言って下へと降りていった。

「ねえ、侑哉…サイバース世界にどうしても戻るの？」

花恋が部屋を出てしばらく経って、葵が俺にそう質問する。

「うん…できれば戻りたくはないけどね…でも、葵を助けようとして、LINK VRAINSじゃなくてサイバース世界に行っちゃうのはさすがに困るし」

俺は別にサイバース世界が嫌いなのじゃない、ただ、葵と会えなくなるのは嫌だし、いざ葵を助けようとしてサイバース世界に行くのはさすがに困る。

多分だけど俺がサイバース世界に行ってしまったのには何か理由があるんだと思う…まあ、間違いなくリンクアクセスの力が影響してるんだろうけど。

「ちゃんと帰ってくる？」

「もちろん！俺の帰る場所はここだから…だから、そんなに悲しそうな顔するなって！」

俺はそう言って、葵に笑いかける。

大丈夫だ、そう葵を安心させるように。

「…わかった…私は侑哉を信じる！絶対に帰ってきてね！」

「ああ、約束する…」

俺はそう言って、葵とそっと口づけを交わす。

葵もそれに応えるように、深く、お互いを求め合うように口づけを交わす。

そして、そのまま葵を押し倒すような形になって、変な気分になってしまう。

これは、ちよつとやばい状況じゃないか？

「はっ…はあ、侑哉…このまましちゃう？」

「おい、さすがにそれは…」

「侑哉になら…されても良いし…」

そう言う葵は照れくさいのか頬が紅潮していた。

「…そんなこと言って、俺の自制が効かなくなっても知らないぞ…」

「良いわよ、別に…こんなことを言うのは侑哉だからなんだし…」

上目遣いで、そう言う葵に動悸が跳ね上がる。

…これは、不味いな…本当に自制が効かなくなってしまおう。
でも、葵が勇気を出してこう言ってくれたわけだし…男として応えないわけにはいかないよな。

「…わかった、だけど覚悟しておけ…優しくはできないかもしれない…まあ、努力はするけどさ」

「うん、わかった…できれば優しくしてね?」

「ああ、善処するよ」

こうして、葵と過ごす夜は過ぎていった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「それじゃあ、行ってくるよ!」

「気をつけてね!侑哉!」

「ああ!」

葵に出発の挨拶をして、デュエルディスクをセットする。

「ごめん、侑哉…結局、方法が思い浮かばなかったわ」

「そのことなんだけど、一つ思いついたことがあるんだ」

「どんな方法?」

「これはまだ確証はないんだけど、デュエルディスクのカード転送システムが使えるかどうかを調べてみる…もし、使えたら俺の居場所が割り出せるかもしれない」

俺はサイバース世界に居る時に、まだそれだけは試していなかった。

もし、カード転送システムが生きているならそこから俺の居場所を割り出せるかもしれない。

「なるほど、確かにそれなら…後で試してみるわ!」

「ああ、悪いけど頼んだよ!それじゃあ、改めて…行ってきます!」

「行ってらっしゃい!侑哉!」

そうして、俺は葵と花恋に見送られながらサイバース世界へと向かった。

「行っちゃった…でも、侑哉ならきつと戻ってくるわよね…」

「その通りよ、葵ちゃん…侑哉ならきつと大丈夫よ！」

「そうですよね！」

「…それはそうと葵ちゃん…」

「はい？」

「昨日はお楽しみだった？」

「へっ!?か、花恋さん！急に何を言い出すんですか！」

「ああ、やっぱりそうだったのね…どうりで…」

「か、花恋さん！からかわないでください！」

顔を真っ赤にして、葵が叫んだ言葉は虚しく部屋に響いた。

第41話 再びサイバース世界へ

「…やっぱり、こうなるよな」

意識が覚醒し、辺りを見渡すとそこは見覚えのある風景。

「どうやら、サイバース世界に戻ってきたみたいだな。」

「あ、マスター！ やつと目が覚めたんですね！」

実体化していたレイが、目を覚ました俺を見て嬉しそうにそう口にする。

「そういえば、レイは実体化したままだったな…だから、レイはサイバース世界に居たままだったのか。」

「ああ、ちよつと一時的に現実世界に戻っててさ…」

「現実世界に!? でもどうやって? サイバース世界からはログアウトできなかつたはずですけど…」

レイが困惑した様子で、俺にそう尋ねる。

正直、俺にも原因がわからない…考えられるとしたら…

「そうだな…もしかしたら一時的にサイバース世界と回線が繋がったのかもしれない」

「一時的にですか…でも、どうして急に繋がったんですかね?」

「さあ、俺にもわからないよ…おつと、カード転送システムが生きているか調べないと」

俺はそう言つて、デュエルディスクを操作し始める。

そして、カード転送システムを起動させ、数枚のカードを選択する。

「良かった…どうやらカード転送システムは生きているみたいだ」

「そんなんですか! それなら、後は花恋さんに外部からログアウトさせてもらえば完璧ですね!」

「ああ、だけど…」

「マスター? 何か気になることでもあるんですか?」

「ちよつとな…」

「Phantom、起きてる?」

俺とレイがそんな会話を交わしていると、水のイグニスが俺達のと

ころへと向かってきた。

「ああ、今起きたところ…水のイグニスはどこに行ってたんだ？」

「お腹がすいてるだろうから、食べ物を持ってきたの！私達はAIだからお腹がすいたりはないけど、Phantomは違うでしょ？」

「なるほど、それでか…ありがとな！遠慮なく頂くよ！」

「どういたしまして！」

確かに、いくらアバターとはいえ空腹を感じる。

水のイグニスの配慮には感謝しかないな…それにしても、サイバー世界に食べ物なんてあつたんだな。

…でも、よくよく考えるとサイバー族のモンスターには人型のモンスターも居るし、こういうものがないときさすがに困るか。

「マスター！私にアーンして食べさせてください！」

「いきなりだな！まあ、それぐらいなら別に構わないけどさ…」

「やった！大好きです!!マスター！」

レイはそう言っ、俺に勢いよく抱きついた。

…何というか、最近、こういうのが多いな…俺。

「本当に仲が良いわね…私達もこんなふうに人間と仲良くなれるのかな？」

水のイグニスは俺達の様子を見ながら、そう呟く。

その様子はどこか悲しげだった。

「…何言ってるんだ？もう、人間と仲良くなれてるじゃないか」

「え…？」

「俺とこんな風に会話したり、色々な所に案内してくれたじゃないか…それって、俺と…人間と仲良くなつたことになるんじゃないか？」

「…っ！」

水のイグニスは一瞬、驚いたような表情をして…すぐに嬉しそうな表情へと変わった。

「うん！そうかも！」

「…さて、せっかく持つてきてくれたわけだし、食べるのでしょうか！」

「そうですね！早くマスターに食べさせて欲しいですし！」

「ああ、わかってるよ…ところで水のイグニス、これはレーションか何

「かか？」

「うん、リンクレーションって言うんだけど…もしかして気に入らなかつた？だったら、こっちの果物の方にする？」

「ああ、いやそういうわけじゃないんだ…むしろ、結構美味しそうに見えるからさ」

実際、よく見る非常食とかに比べたら美味しそうに見えた。

「そうか、これはリンクレーションっていうのか…サイバース版の非常食みたいなカードなのか？」

「さて、頂くとしようか…ほら、レイ、アーン…」

「あくん…はむっ…うくん！レーションとは思えない美味しさですね！マスターのアーンが効いてるんですかね！」

「へえ、そんなに美味しいのか…どれどれ」

レイがあまりにも美味しそうに食べるのを見て、俺も同じように食べ物屋を口に運ぶ。

「おお！確かにこれは美味しいな！」

「ふえっ!?マスター…えっと、その、これって…」

（こ、これはいわゆる間接キスというやつなのでは!?マスターは気づいていないみたいですけど…）

「どうかしたのか？レイ」

俺が食べる様子を見て、何故か顔を赤くしながらレイはあたふたしている。

「い、いえ！何でもありません！」

「そうか？なら良いんだけど…」

「はい、大丈夫です！」

レイはそう言っつて、恥ずかしそうに目を逸らす。

俺はそんなレイの様子を不思議に思いながら、食事を続けた。

「ふう、満足満足…ごちそうさま！」

「ご、ごちそうさまでした…」

「そういえば、さつきから様子がおかしいけど、どうかしたのか？レ

イ」

「だ、大丈夫です！そ、それよりマスター！さつき、考え事してましたけど何が気になってるんですか？」

「ああ…実は」

…といつても、これは俺の推測…というか妄想に近いからな…でも、言っておいて損はないな。

俺はそう考えて、自らの考えを口にした。

「サイバース世界に俺達以外の誰かが侵入した可能性があるんだ…」

「まさか…ハノイの騎士!?!」

俺の言葉に水のイグニスはその声を上げる。

「いや、多分それはないと思う…ハノイの騎士はサイバース世界の場所がわからないから、アイ…闇のイグニスを狙ってるわけだしな、プレイヤーが負けない限り、この場所を突き止めるのは無理だ」

プレイヤーが簡単に負けるとは思えないし、ハノイの騎士がサイバース世界に来ることは、ほとんどないと言っている。

そして、それと同様にSOLテクノロジーの可能性も低いだろう…そう考えるとまた別の勢力か、それとも俺と同じように偶然サイバース世界に迷いこんだ誰かか…

「なるほど…でも、マスターはどうして私達以外の侵入者が居ると思っただんですか？」

「…一時的に回線が繋がったからだ…本来サイバース世界の場所は闇のイグニス、そして俺達以外は誰も知らないはずだ…それなのにサイバース世界に一時的に回線が繋がるなんて、おかしいと思わないか？」

まあ、ある意味そのおかげで現実世界に戻れたわけだから、そこは感謝しているが…そういえば、俺は昨日、葵と…

…って！思いだしてる場合じゃない！今は侵入者について考えないと。

「そう言われると確かに変ですね…今の内に手を打っておいた方が良さそうですね」

「それが理想的だな…ただ、これには何の確証もない…レイはともか

く、他のイグニス達が協力してくれるかどうか…」

「私はPhantomを信じる！他のイグニス達もきつと協力してくれるわ！だから、今から皆を説得しに行ってみましょう！」

俺の言葉に水のイグニスが力強くそう返してくれる。

他のイグニスもこんなふうに協力してくれたら良いんだけどな…

まあ、でも…

「…やれるだけやってみるか！よし、イグニス達を説得しに行こう！」

俺がそう言うと、レイと水のイグニスは元気よく返事を返してくれた。

そうして、俺達は他のイグニス達の元へと歩を進めた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「はあ…ダメでしたね、説得…」

「まあ、信じられないのも無理はないけどな…」

俺達は他のイグニス達の元に向かい、説得をした…だけど、結果は見事に失敗だった。

何でも、確証のない情報で動くわけにはいかない…ということらしい。

まあ、確かに確証のない情報で動いて、結局あてが外れてしまつては意味がない…だけど、あらゆる可能性を考慮して行動に移すことで何かを守ることもできる。

正直、人間を信頼するか否かですつと議論するくらいなら俺の話しを聞いてくれても良かった気がする。

「…仕方ない、俺達だけでも何かしらの対策を練るしかないな」

「そうですね…っ！マスター！伏せて！」

「え…どわあー！」

レイが無理やり俺の体を伏せさせる…それと同時に爆発音が響いた。

「何だ？…一体何が…あれは？」

俺が、上空を眺めるとそこには巨大なモンスターの姿があった。

「敵襲です！マスターの言う通り、私達以外にもサイバース世界に侵

入した者が居たようです…」

「なるほど…それにしてもタイミングが良すぎる…誰かが俺達の情報
を洩らしたのか?」

そう考えるとイグニスの中の誰かもしか考られなくなるけど…
まあ、今はそれより…

「水のイグニス、他のイグニスを連れて早く逃げろ!ここは俺達にな
んとかする!」

「そんな!それじゃあPhantom達が…」

「…そのことなら問題ない…俺にはあれを何とかする力がある」

そう言つて、俺は霸王の力を発動する…恐らく、この力を使えば
カードを実体化することができる。

超融合の力しか使ったことがないが、他のカードを実体化させるこ
ともできるはずだ。

あまりにも無謀だが、それ以外に手はない。

「さあ!早く行け!お前達が消えてしまったら、本当にサイバース世
界は終わるぞ!」

「…わかった、Phantom!気をつけてね!!」

水のイグニスは一瞬、躊躇するような表情をした後、そう口にした。

「…ああ、任せておけ…さあ、いくぞ!」

「はい!マスター!」

レイはそう返した後に、紅き装甲を身に纏う。

「…それで良い、頼りにしてるぞ!」

「任せてください!マスターとのイチヤイチャタイムを邪魔する不届
き者は私が成敗します!!」

「あ、ああ…頼んだ」

イチヤイチャタイムつて…まあ、それでレイの士気が上がるなら構
わないけど…さすがに恥ずかしいな。

俺はそんな複雑な感情を抱きながら敵へとデュエルディスクを構
えた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「よし、やっと侑哉の居場所を掴めたわ…後はここからログアウトさせれば…」

そう言って、侑哉をログアウトさせようとする。

「え…？どういうこと？侑哉のデュエルディスクが使用されてる…誰かとデュエルしてるの？」

だとしたら、一体誰と？

…それにしても参ったわね、デュエルディスクが使用されている状態じゃログアウトさせられない。

「とにかく今は侑哉の状況を知りたいわね…通信が繋がるか試してみるか…」

そう言って、侑哉のデュエルディスクに通信を行う。

…くっ、やっぱり繋がらない…一体何が起きてるの？

「何だか嫌な予感がする…早く侑哉の状況を把握しないと！」

私は焦りを感じながら、作業を続けた。

第42話 サイバース世界での激闘

「ダメね…全然通信が繋がらない…どうすれば…」

色々と試行錯誤したけど…どうしようもないわね。」

「葵ちゃんには絶対知らせるわけにはいかないわね…」

葵ちゃんは今、学校に居る…まあ、葵ちゃんは侑哉の側に居るって聞かなかったけど、無理やり行かせた。

こういう状況になったら間違いなく侑哉の所に行くって言うだろうし。

「本当に侑哉と葵ちゃんって似た者同士よね…とにかく何とかしないと！」

そうして、操作を再開しようとするのと突如としてインターフォンの音が響いた。

…え？まさかね？

いやいや、いくらなんでもそれはないはずよね？

私は一抹の不安を抱えながら、玄関へと向かった。

「…どちらさま」

「花恋さん！侑哉の様子はどうですか？」

ドアを開けると、そこには慌てて走ってきたのか、息を切らしている葵ちゃんの姿があった。

うん、わかってたわ…こうなるって…

「えっと、葵ちゃんは どうしてここに？」

「何となく嫌な予感がして…侑哉は大丈夫なんですか？」

何となく嫌な予感がした？嘘でしょ？何、二人はどんなに離れてても心が通じてるの？

テレパシーでも使ってるの？何でこんなにタイミングが良いのよ！

「花恋さん？」

「…ごめんごめん！安心して、侑哉は大丈夫よ！」

…ふう、とりあえず一旦落ち着かないと…色々と問題がありすぎ

て、冷静さを欠いていたわ。

「本当ですか？でも、侑哉の姿が見当たりませんかけど…」

「それは…」

「何かあったんですか？」

「はあ…やっぱりこうなるのね…着いてきて、非常事態発生よ」

「非常事態…？わかりました！」

そうして、私達は玄関から元の部屋へと歩を進めた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

——サイバース世界

「これは予想外だな…サイバース世界に人間が居るとは…」

「どうなさいますか？必要ならボーマンを今すぐにでも…」

「いや、その必要はない…そもそも彼の相手は君達では手に余るだろ

う…彼は普通の人間では到達できない領域に達している」

「では…」

「私自ら、直接彼と戦うつもりだ…挨拶も兼ねてね」

謎の人物は怪しい笑みを浮かべながら目の前の少年にそう告げる。

「さあ、君の力を見せてもらおうか…Phantom」

謎の人物はそんなことを口にしながら、侑哉のことを見下ろした。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「しつこい奴だ…オッドアイズ、頼んだぞ！夢幻のスパイラルフレイム！」

オッドアイズの攻撃が巨大なモンスターへと命中する。

だが、攻撃を受けてしばらくするとすぐに体が再生を始めた。

…こいつ、とんでもない再生力だな…どれだけ攻撃しても、すぐに

回復する。

「マスター…このモンスター、どれだけ攻撃しても復活します…どうしましょうか？」

「ああ、わかっている…」

さつきからオッドアイズとダークリベリオン、クリアウイングとスターヴヴェノム…さらにはスターダストとレイに協力してもらって

いるのにまるで倒しきれない気がする。

他のモンスターを出したいところだが、この力で呼び出せるモンスターは最大で6体。魔法、罠カードは1度使用すると、しばらく使用することができない。

…どうやら、これが覇王の力の特徴みたいだ。

「さて、どうしたものか…」

モンスターを入れ替えたとしても、こいつは倒しきれないだろうし。強力な魔法、罠カードを使えばサイバース世界を巻き込んでしまうかもしれない。

「…ならば、一撃であるのモンスターを倒せる強力なカードで尚且つサイバース世界を巻き込まないカードを使用するしかないか…だがそんなカードは…」

探せばあるかもしれないが、今の俺のデッキにそんなカードはない…仕方ない、別の方法を…

「マスター！デュエルディスクが光ってますよ！」

「何？」

レイにそう促され、デュエルディスクを確認する。

すると、確かにデュエルディスクから光が放たれていた。

「これは…一体」

困惑しつつも、光を放つカードを手につつ…するとカードが銃のような形状に変化する。

「なるほど、これを撃てと言うわけか…良いだろう！」

そう口にし、銃を巨大なモンスターへと向ける。

狙うは一撃必殺、敵の攻撃タイミングに合わせて弾丸を当てる。

「力を借りるぞ！お前達！」

俺の言葉に呼応するように、オッドアイズ達が咆哮を上げる。

「マスター！すごいです！皆さんの力がマスターの銃に集約されていますー！」

「ああ、そのようだな…さあ、いくぞー！」

モンスターの口にエネルギーが蓄積されていき、それに対抗するように銃にオッドアイズ達の力が集約されていく。

「今だ！」

その言葉と共に放たれた弾丸はモンスターへの攻撃をもらともせず、そのままそのモンスターを消し去った。

「ふう、ようやく倒せたか…なかなか厄介だった…ありがとう、みんな…ゆつくり休んでくれ」

俺はそう言っ、カード達をデッキへと戻した。

「やりましたね！マスター！」

「ああ、レイもよくやってくれた…休んでいてくれ」

「大丈夫です！まだまだやれます！」

「そうか…無理はするなよ」

「はい、わかっています！ところでマスター…どうして霸王モードのままなんですか？」

「新手が来ないとも限らないからな…警戒しておくに越したことはない」

確かにあのモンスターは撃破したが、それを操っている誰かがまだ居るかもしれない。

それを考えれば、霸王モードを解除するのは得策じゃない。

——と、そんな風に思考していると

「リンクマジック、裁きの矢《ジャッジメント・アローズ》を発動」
「なっ!？」

何者かが放った言葉と共に、巨大な三つの矢が現れる。

「マスター…下がってください！あれは危険です！」

「わかってる！」

俺はすぐさまデュエルディスクから一枚のカードを取り出す。

できれば使いたくはないが、今は仕方ないか…

「リンクマジック、《霸王の加護》！」

霸王の加護が裁きの矢を防ぎ、攻撃が逸れる。

発動したのは、初めて霸王モードになった時にいつの間にかデッキに紛れていた、リンクマジック。

どうやら霸王モードになると自然とデッキに紛れ込むみたいだな…
…という原理かは知らないが。

「驚いた、まさかリンクマジックまで使えるとは…」

「…貴様が黒幕というわけか」

上空から降りてきた、ローブのようなものを身に纏っている人物にそう口にする。

声からして、恐らく男性だろう…まあ、声を変えている可能性も0ではないが。

「そんなところだ…まさか、サイバース世界に人間が居ると思いいもよらなかつたが」

「それは、こちらのセリフだ…何故、サイバース世界を攻撃した？」

「君が知る必要はない、何故なら君はここで私に敗北するのだからな」
そう言つて、ローブの男はデュエルディスクを構える。

「デュエルか、良いだろう！そのデュエル…受けて立つ！」

「行きましょう！マスター！」

「ああ！」

そう叫ぶと同時に俺もデュエルディスクを構える。

…さて、一体どれほどの実力なのか見せてもらおうとしよう。

「デュエル!!」

ローブの男 LP4000

VS

Phantom LP4000

「私の先攻、私は手札から《リンクスレイヤー》を特殊召喚！このカードは自身のフィールドにモンスターが存在しない時、手札から特殊召喚できる」

リンクスレイヤー レベル5 攻撃表示（ATK2000）
「サイバース族のカードか…」

あいつもサイバースを使うのか…ということはリンクモンスターが中心のデッキか？

いや、そうとも限らないな…サイバースだからといってリンクモン

スターが中心かどうかはわからない。

「さらに、《バックアップ・セクレタリー》を特殊召喚！そして、同じく《サイバース・コンバーター》を特殊召喚！」

バックアップ・セクレタリー レベル3 攻撃表示（ATK1200）

サイバース・コンバーター レベル2 攻撃表示（ATK1000）

ローブの男手札5↓2

「さらに、永続魔法、《冥界の宝札》を発動！これで準備は整った…3体のモンスターを生け贄に捧げる！」

「生け贄だと…?!その言い方は！」

呼ばれるのはどっちだ？三幻神か？それとも…

「現れる、《邪神アバター》！」

3体のサイバースを生け贄に現れたのは、黒い球体状のモンスター。

知っている、邪神アバター…三邪神の内の1体、しかも1番俺にとって厄介なモンスターだ。

邪神アバター レベル10 攻撃表示（ATK?）

「冥界の宝札の効果、2体以上のモンスターをリリースしてアドバンス召喚に成功した場合、デッキからカードを2枚ドロウする」

ローブの男手札0↓2

「さらに、フィールド魔法、《神縛りの塚》を発動！このカードの効果によりレベル10以上のモンスターは効果の対象にならず効果では破壊されない！さらに、永続魔法、《フィールドバリア》を発動！」

「厄介な布陣だな…これはなかなか苦労しそうだ」

「私はこれでターンエンド」

ローブの男 LP4000

手札0

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン 邪神アバター レベル10 攻撃表示

（ATK?）

伏せ2 (冥界の宝札、フィールドバリア)

Pゾーンなし

フィールド魔法 神縛りの塚

Phantom LP4000

手札5

場なし

伏せなし

Pゾーンなし

「俺のターン、ドロー…さて、どうしたものか…」

邪神アバターの攻撃力と守備力はフィールド上で1番攻撃力が高いモンスターの攻撃力+100の数値になる…つまり、戦闘では無敵と言っても過言ではない。

しかも、神縛りの塚の効果により効果の対象にならず、効果では破壊されない、それにフィールドバリアのせいで神縛りの塚を破壊することもできない。

極めつけには、邪神アバターが召喚に成功した場合、俺のターンを数えて2ターンの間、魔法、罫カードの発動できないときた…

「…まあ、とにかくやるしかないな…こういう状況を覆してこそそのエンタメデュエリストというものだ！俺は手札から《閃刀姫―レイ》を召喚！」

『いきます！』

閃刀姫―レイ レベル4 攻撃表示 (ATK1500)

「力を借りるぞ！レイ！」

『はい！お任せください！』

「現れる、絆を紡ぐサーキット！召喚条件は風属性以外の閃刀姫モンスター1体！俺は、閃刀姫―レイをリンクマーカーにセット！」

『換装！モード選択、疾風モード！』

「サーキットコンバイン！リンク召喚！現れる、リンク1！《閃刀姫―ハヤテ》！」

『さあ、いきますよ!』

閃刀姫―ハヤテ リンク1 (ATK1500) リンクマーカー左下
「まだまだいくぞ! 手札のレベル2以下のモンスターを墓地に送り、
《ビットルーパー》を特殊召喚! さらに、墓地に送られた《ドットス
ケーパー》の効果! このカードが墓地に送られた時、このカードの特
殊召喚できる! 蘇れ! ドットスケーパー!」

ビットルーパー レベル4 守備表示 (DEF2000)

ドットスケーパー レベル1 守備表示 (DEF2100)

「そして、再び現れる! 絆を紡ぐサーキット! 召喚条件はサイバース
族モンスター2体! 俺は、《ビットルーパー》と《ドットスケーパー》
をリンクマーカーにセット! サーキットコンバイン! リンク召喚!
現れる、リンク2! 《フレイム・アドミニスター》!」

フレイム・アドミニスター リンク2 (ATK1200) リンクマ
ーカー左/右下

「フレイム・アドミニスターの効果! このカードはフィールド上に存
在する限り、自分フィールドのリンクモンスターの攻撃力は800ポ
イントアップする!」

閃刀姫―ハヤテ (ATK1500↓2300)

フレイム・アドミニスター (ATK1200↓2000)

やっぱり、フレイム・アドミニスターは良いカードだな…それに水
のイグニスからもらった他のサイバースのカードも良いカードが多
い。

…水のイグニスに感謝しないとな。

「だが、いくら攻撃力を上げたところで邪神アバターを上回ること
できない…一体何が狙いだ?」

「こうするのさ! バトル! 閃刀姫―ハヤテで貴様にダイレクトアタ
ック!」

「…なるほど、それが狙いというわけか」

「その通りだ」

今の段階では、邪神アバターを倒す手段を俺は持っていない…なら
ば、プレイヤーに直接ダメージを与えるだけだ。

『ターゲット、ロックオン！喰らいなさい！』

レイがそう宣言すると同時に、ローブの男に攻撃が放たれる。

そして、その攻撃はローブの男へと直撃した。

「ぐうう！やはり、君は大したデュエリストだな…」

ローブの男 LP4000↓1700

「褒め言葉として受け取っておこう…：戦闘を行ったハヤテの効果！
デッキから閃刀カードを1枚墓地へ送る！俺は、《閃刀起動―エン
ゲージ》を墓地へ送る」

俺はそう言つて、デッキから閃刀起動―エンゲージを墓地へ送る。
「俺はこれでターンエンドだ」

ローブの男 LP1700

手札0

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン 邪神アバター レベル10 攻撃表示

(ATK?↓2400)

伏せ2 (冥界の宝札、フィールドバリア)

Pゾーンなし

フィールド魔法 神縛りの塚

Phantom LP4000

手札3

場 EXモンスターゾーン 閃刀姫―ハヤテ リンク1 (ATK1

500↓2300) リンクマーク―左下

メインモンスターゾーン フレイム・アドミニスター リンク2

(ATK1200↓2000)

伏せなし

Pゾーンなし

フィールド魔法なし

第43話 勝利への一手

「侑哉がサイバース世界で戦っている!？」

「そうよ、侑哉は今サイバース世界で誰かと戦っているの…何故かはわからないけど」

花恋さんは焦っている様子でそう口にした。

嫌な予感がして学校から戻ってきて良かった…これで侑哉を助けに行ける!

「…葵ちゃん、言っておくけど今すぐ侑哉を助けに行くことはできないわよ」

「どうしてですか?サイバース世界の場所はわかっているじゃないですか!」

花恋さんの言葉に思わずそう返す。

サイバース世界の場所がわかっているなら、そこに私がログインするのにな、どうして?

「最後まで話しを聞きなさい、今、ログインしたら葵ちゃんも戻ってこれなくなるでしょ?だから、まずは緊急用の脱出プログラムを組むわ…そして、そのプログラムを組み終わった後に、葵ちゃんにサイバース世界に向かってもらおうわ」

「なるほど、だから花恋さんは今すぐに助けには行けないって言うってたんですね…ごめんなさい」

侑哉を助けたい気持ちでいっぱい、早とちりしちゃったわね。

「本当に侑哉のことになると周りが見えなくなるんだから…まあ、私も似たようなものだけど…」

「花恋さん?どうかしたんですか?」

「いえ、何でもないわ…侑哉がこうなったのは私の責任でもあるから、すぐにプログラムを組むわ…待っていて」

「わかりました…」

花恋さんはそう言って黙々と作業を始めた。

…何だろう、何だか今の花恋さんの様子はおかしかった気がする。

確かに侑哉を止めることができなかつたけど…それなら私の責任

でもある…今の花恋さんは何だか別の何かを後悔しているような気がする。

…でも、今は侑哉を助けに行くことが大事よね…後で侑哉と一緒にそれとなく聞いてみようかな。

私はそんなことを考えながら、花恋さんの作業が終わるのを待った。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「私のターン、ドロロー！ふむ…ではこのままバトルに入らせてもらう！」

「いきなりか…」

だが、逆に言えばあいつは今、あれ以上の行動を取れないとも言える。

まあ、あえて動いていないとも考えられるが…

「バトル！《邪神アバター》で《閃刀姫―ハヤテ》に攻撃！今の邪神アバターの攻撃力は閃刀姫―ハヤテの攻撃力2300に+100した数値となる！」

邪神アバター（ATK2400）

邪神アバターが閃刀姫―ハヤテの姿を模したような姿へと変わり、ハヤテへと攻撃を仕掛ける。

『きゃあああ！』

Phantom LP4000↓3900

「くっ！すまない、レイ…」

『…気になさらないでください！それに、私はまだ倒れませんよ！』
そう言っつて、レイはハヤテの装甲を解除し、フィールドに舞い戻った。

閃刀姫―レイ レベル4 攻撃表示（ATK1500）

「装甲を解除して生き延びたというわけか…だが、この瞬間、フィールド魔法、神縛りの塚の効果発動！フィールド上のレベル10以上のモンスターが戦闘でモンスターを破壊し、墓地へ送った場合、破壊されたモンスターのプレイヤーは1000ポイントのダメージを受ける！」

「ぐわあああ!!」

Phantom LP3900↓2900

『マスター!大丈夫ですか!』

「…ああ、大丈夫だ…そっちの方こそ大丈夫か?」

『はい、私は大丈夫です…ただ、あのモンスター、他のモンスターとは何か違います…装甲がなかったら私も危なかったかもしれません…』

「…相手はまがりなりにも邪神だからな…そこいらのモンスター達とは格が違うということだろうな」

それに…邪神アバターもそうだが、神縛りの塚のダメージもかなり大きい…あの男の使っているカード達は本物と同等の力を持っているのか?

「私はこれでターンエンドだ…さあ、君のターンだぞ、Phantom」

ローブの男 LP1700

手札1

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン 邪神アバター レベル10攻撃表示

(ATK?↓2100)

伏せ2 (冥界の宝札、フィールドバリア)

Pゾーンなし

フィールド魔法 神縛りの塚

Phantom LP2900

手札3

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン 閃刀姫―レイ レベル4 攻撃表示(A

TK1500)

フレイム・アドミニスター リンク2(ATK2000)リンクマー

カー左/右下

伏せなし

Pゾーンなし

「俺のターン、ドロー！」

Phantom手札3↓4

…このカードは！これならいけそうだ！

魔法、罠カードは次のターンから発動可能…次のターンからが勝負だな。

「…現れる、絆を紡ぐサーキット！召喚条件は水属性以外の閃刀姫モンスター1体！俺は、閃刀姫―レイをリンクマーカーにセット！」

『いきますよ！換装！モード選択、刀衛モード！』

「サーキットコンバイン！リンク召喚！現れる！リンク1《閃刀姫―シズク》！」

『この身に懸けてもマスターをお守りします！』

閃刀姫―シズク リンク1(ATK1500)リンクマーカー右上

「俺は、カードを2枚伏せてターンエンドだ！そして、この瞬間、シズクの効果発動！墓地に同名カードが存在しない、閃刀魔法カードを1枚手札に加える！俺は、《閃刀術式―アフターバーナー》を手札に加える！さあ、貴様のターンだ！」

Phantom手札4↓2↓3

さて、どう出てくる？

「私のターン、ドロー！私は手札から魔法カード、《サイクロン》を発動！」

「サイクロン!?このタイミングでか…」

もし、あのカードが破壊されたら、逆転が難しくなるぞ…

「さて、何を破壊しようか…決めた、私から見て右の伏せカードだ」

「…！」

サイクロンの効果により、俺から見て、左の伏せカードが破壊される。

そして、破壊されたカードは…

「…破壊された《リ・バウンド》の効果発動！このカードが破壊された

時、デッキからカードを1枚ドロ―!

Phantom手札3↓4

「…外した…いや、そのカードを破壊するように誘導されたのか…私がサイクロンを発動した時、君はその伏せカードに反射的に目を移した…そのせいで私は君が目を移した伏せカードが重要なカードだと錯覚してしまった」

「ある意味、重要なカードだっただろ? まあ、まさかこんな作戦で騙せるとは思っていなかったが」

俺はそう言つて、ローブの男に余裕の笑みを浮かべる。

正直、危ないところだった…この作戦が失敗したらなかなか厳しい状況になっていただろうしな。

「さすがと言つておこう…あまりにも自然な動きだったせいで、騙されてしまった…だが、この攻撃は防げまい! バトルだ! 邪神アバターでフレイム・アドミニスターに攻撃!」

シズクの姿を模した邪神アバターがフレイム・アドミニスターへと攻撃を仕掛ける。

「そうはさせない! これが、邪神アバター攻略への一手だ! リバースカードオープン! 永続罠! 《革命―トリック・バトル》!」

《革命―トリック・バトル》!?

「トリック・バトルの効果! 攻撃表示モンスター同士が戦闘を行う場合、攻撃力の高いモンスターが戦闘で破壊される!」

「何!？」

トリック・バトルの発動により、邪神アターの攻撃をフレイム・アドミニスターが押し返す…そして、そのまま邪神アターを撃破した。

Phantom LP2900↓2500

「ライフはこちらが削られるが…邪神アター、攻略完了だ!」

「くっ! まさか、邪神アターを戦闘で真っ正面から突破してくるとは…これがPhantomの実力か…やはり、君は面白い」

「そいつはどうも…それで、どうするつもりだ? まだ貴様のターンだぞ…」

「…私は手札から魔法カード、《強欲で貪欲な壺》を発動！デッキトップから裏側で10枚除外して、2枚ドロロー！」

ローブの男手札1↓0↓2

このタイミングでドロローカードだと？

「さらに、手札から《サイバース・ガジェット》を召喚！このカードが召喚に成功した時、墓地からレベル2以下のモンスターを特殊召喚できる！蘇れ、《サイバース・コンバーター》！」

サイバース・ガジェット レベル4 攻撃表示（ATK1400）

サイバース・コンバーター レベル2 守備表示（DEF1000）

「サイバースを展開してきたか…」

「さらに、魔法カード、《運命の宝札》を発動！サイコロを振り、出た目の数だけデッキからカードをドロローし、ドロローした枚数と同じ数だけデッキトップからカードを除外する」

「…強力なドロソースだな…さて、どの目が出る？」

ローブの男がサイコロを振り、地面へと転がる…そして、サイコロは3の目を出して止まった。

「出た目は3…よってデッキから3枚ドロローし、3枚カードを除外する」

ローブの男手札1↓0↓3

「そして、私は君の場の革命トリック・バトルを墓地へ送り、《トラップイーター》を特殊召喚！」

「トラップイーターだど!?!」

俺の場の革命トリック・バトルを食らい、トラップイーターがローブの男のフィールドに現れた。

トラップイーター レベル4 攻撃表示（ATK1900）

「そして、魔法カード、《二重召喚》を発動！これにより私はもう一度、通常召喚を行える！さあ、いくぞ！私は3体のモンスターを生け贄に捧げる！現れる！2体目の邪神！《邪神ドレッド・ルート》！」

その言葉と共に、異形の魔物が現れる…その魔物の姿は悪魔と表現するのが正しい気がした。

邪神ドレッド・ルート レベル10 攻撃表示（ATK4000）

「まさか、2体目の邪神まで出てくるとはな…これは、少し不味いかもな」

邪神アバターに続き、ドレッド・ルートまで…あいつのデッキには三邪神全てが入ってるのか？

どちらにせよ、この状況はなかなかに厳しい…だが、それでこそ倒しがあるというものだ。

「冥界の宝札の効果により、2枚ドロ―そして、墓地へ送られた、サイバース・ガジエットの効果によりガジエット・トークンを特殊召喚する」

ガジエット・トークン レベル1 守備表示(DEF0)

「ドレッド・ルートの効果…このカード以外のモンスターの攻守は全て半分となる！」

ドレッド・ルートから闇の波動が広がり、全てのモンスターに影響を与える。

『うっ…何ですか、これ…急に力が…抜けて』

レイはそう口にして、力なく地面へと座り込む。

閃刀姫―シズク(攻撃力2300↓1150)

フレイム・アドミニスター(攻撃力2000↓1000)

「レイ！大丈夫か？」

『大丈夫…です…こんなところで…倒れてなんかいられません！』

「何とか大丈夫そうだな…」

だが、これ以上デュエルを長引かせるわけにはいかないな…デュエルの勝敗以前にレイが持たない。

「…シズクの効果！墓地の魔法カードの数×100ポイント相手のモンスターの攻守を下げる！俺の墓地には閃刀起動―エンゲージがある…よって攻守を100ポイントダウンさせる！」

邪神ドレッド・ルート(ATK4000↓3900)

「ふむ、ではカードを1枚伏せてターンを終了する」

ローブの男 LP1700

手札1

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン 邪神ドレッド・ルート レベル10 攻撃表示(ATK4000↓3900)

ガジェット・トークン レベル1 守備表示(DEF0)

伏せ3(内2枚 冥界の宝札、フィールドバリア)

Pゾーンなし

フィールド魔法 神縛りの塚

Phantom LP2500

手札4

場 EXモンスターゾーン 閃刀姫―シズク リンク1(ATK2

300↓1150)リンクマーカー右上

メインモンスターゾーン フレイム・アドミニスター リンク2

(ATK2000↓1000)リンクマーカー左/右下

Pゾーンなし

フィールド魔法なし

「俺のターン、ドロー!」

Phantom手札4↓5

「俺は手札から魔法カード、《ツインツイスター》を発動!手札を1枚墓地へ送り、フィールド上の魔法、罫カードを2枚破壊できる!俺はフィールドバリアと貴様の伏せカードを破壊する!」

墓地へ送ったカード 閃刀術式―アフターバーナー

ツインツイスターの効果によりフィールドバリアと相手の伏せカードが破壊される。

よし、これで突破しやすくなった…:さあ、反撃といこうか!

「俺は手札から《EMドクロバット・ジョーカー》を召喚!この瞬間、ドクロバット・ジョーカーの効果によりデッキからこのカード以外の《EM》、《魔術師Pモンスター》、《オッドアイズ》モンスターのいずれかを手札に加える!俺は《オッドアイズ・ペルソナ・ドラゴン》を手札に加える!」

Phantom手札3↓2↓3

EMドクロバット・ジョーカー レベル4 攻撃表示(ATK1800↓900)

「そして、俺はスケール6の《EMギタートル》と同じくスケール6の《EMリザードロー》でPスケールをセッティング！そして、ギタートルのP効果！もう片方のPゾーンにEMがセットされた時、デッキからカードを1枚ドロロー！さらに、リザードローのP効果！このカードを破壊し、さらに1枚ドロロー！」

Phantom手札1↓3

「そして、空いたPゾーンに《オッドアイズ・ペルソナ・ドラゴン》をセット！そして、フィールド魔法、《天空の虹彩》を発動！」

天空の虹彩を発動すると同時に、空に美しい虹彩が現れる。

「さらに、天空の虹彩の効果発動！ペルソナ・ドラゴンを破壊し、デッキから《オッドアイズ・ファンタズマ・ドラゴン》を手札に加える！」
「《オッドアイズ・ファンタズマ・ドラゴン》…？何だそのカードは？」
「さあな…それは見てのお楽しみだ…さらに、手札から魔法カード、《強欲で貪欲な壺》を発動！デッキトップから裏側でカードを10枚除外し、2枚ドロロー！」

Phantom手札2↓1↓3

「さらに、フィールド魔法、《チキンレース》を発動！これにより、天空の虹彩は墓地へ送られる…そして、チキンレースの効果発動！1000ライフを払い、カードを1枚ドロローする！」

Phantom LP2500↓1500

「…よし、まだまだいくぞー！ライフを1000払い、魔法カード、《コズミック・サイクロン》を発動！このカードの効果により、《神縛りの塚》を除外する！」

コズミック・サイクロンの効果により、神縛りの塚が除外される。

Phantom LP1500↓500

「さらに、魔法カード、《カップ・オブ・エース》を発動！コイントスを行い、表が出れば俺が、裏が出れば貴様が2枚ドロローする…！コイントスを行う、結果は…よし、表だ！よって、俺がデッキからカード

を2枚ドロウする!」

Phantom手札2↓1↓3

「…ようやく来たか…俺は空いているPゾーンにスケール3の《EMシールイール》をセット!そして、シールイールのP効果!相手フィールド上のモンスター1体の効果をターン終了時まで無効にする!俺はドレッド・ルートの効果を無効にする!」

シールイールのP効果により、ドレッド・ルートの効果が無効にされる。

…これで、俺のモンスター達は元の力を取り戻せる。

『あれ?力が溢れてくる…マスター!今ならいけますよ!』

「…どうやら、元のレイに戻ったようだな…俺のモンスター達の攻撃力は元に戻ったが、ドレッド・ルートにはシズクの効果を受けてもらう!俺の墓地の魔法カードは7枚、よって邪神ドレッド・ルートの守は700ポイントダウンする!」

邪神ドレッド・ルート (ATK4000↓3300)

閃刀姫―シズク (ATK1150↓2300)

フレイム・アドミニスター (ATK1000↓2000)

EMドクロバット・ジョーカー (ATK900↓1800)

「だが、君の場にドレッド・ルートを倒せるモンスターは存在しない…一体どうするつもりかな?」

「…フツ、お楽しみはこれからだ!俺は手札から《オッドアイズ・ファインタズマ・ドラゴン》を特殊召喚!」

「そのカードは!?!」

「このカードはPゾーンにカードが2枚存在し、EXデッキに表側表示でオッドアイズPモンスターが存在する時、手札から特殊召喚できる!さあ、初陣だ!ファインタズマ・ドラゴン!」

その言葉と共に、進化した幻影の竜が現れる…そして、俺の言葉に応えるように咆哮を上げた。

オッドアイズ・ファインタズマ・ドラゴン レベル8 攻撃表示 (ATK3000)

「スケールを無視して、上級のモンスターを呼んだというのか…!」

「オーバースケールペンデュラム！これが俺の新たな力だ！いくぞ！バトル！《オッドアイズ・ファンタズマ・ドラゴン》で《邪神ドレッド・ルート》に攻撃！そして、この瞬間、ファンタズマ・ドラゴンの効果発動！このカードが戦闘を行う時、戦闘を行うモンスターの攻撃力をEXデッキに表側表示で存在するPモンスターの数×1000ポイントダウンする！俺のEXデッキには2体のPモンスターが表側表示で存在している、よって邪神ドレッド・ルートの攻撃力を2000ポイントダウンする！」

邪神ドレッド・ルート（攻撃力3300↓1300）

「…お楽しみはこれまでだ！ファンタズマ・ドラゴン！邪神ドレッド・ルートを打ち倒せ！」

ファンタズマ・ドラゴンの攻撃は邪神ドレッド・ルートへと命中し、ローブの男のライフを0にした。

ローブの男 LP1700↓0

／／／／／／／／／／／／／／／／

「俺達の勝利だ！サイバース世界から出ていけ」

「…今回は私の負けだ、だが次に戦う時はこうはいかない」

「できればもう二度と会いたくはないがな」

「君が拒もうと、再び会うことになる…君がその力を持っている限りな…」

「どういう意味だ？」

俺がそう尋ねると、ローブの男は笑い声を上げながら消えていった。

「何だったんだ？一体…：…ぐっ、さすがに力を使いすぎたか…」

『マスター！大丈夫ですか？』

「ああ、俺は大丈夫だよ…レイの方こそ大丈夫か？」

覇王モードを解除し、レイにそう問いかける。

『はい、私は大丈夫です…でも、マスターが！』

「さつきも言っただろ？大丈夫だよ」

俺はそう言って、レイの頭を撫でる。

『あ…えへへ…って、これでごまかせると思ったら大間違いですよ！マスターはしばらくLINK VRAINSに行くの禁止ですからね！』

「え!?何でだよ!」

『マスターは気づいていないかもしれませんが、今回の戦いでかなりのダメージを受けているんです…これ以上のダメージは現実の体にもまで影響を及ぼします』

「そうなのか…」

確かに、今回は最初の巨大なモンスターと戦ったり、三邪神の内の2体と戦ったり、なかなかハードだったからな…レイの言う通り、かなりのダメージを受けていたかもしれないな。

「…わかった、しばらくLINK VRAINSには行かないように気をつけるよ」

『言い方が曖昧すぎませんか?マスターのことですから、隙についてLINK VRAINSに行く気なんじゃないですか?』

レイはそう言つて俺をジト目で睨み付ける。

「…うっ、返す言葉もないな…わかったよ、おとなしくしてる」

『そうしてください…侑哉さんがいなくなるのは絶対に嫌ですから…』

「ああ、わかったよ…そういうえば、レイって俺のことをたまに名前で呼ぶよな…」

『もしかして、ご迷惑でしたか?それなら、名前で呼ぶのはやめますけど…』

「いや、そういうわけじゃなくて…マスターなんて呼び方じゃなくて、普通に名前で呼んでくれて良いのになって思ったさ」

『へっ!?でも、私はマスターのAIであり、精霊ですし…』

「それがどうかしたのか?」

『え…?』

「何であれ、レイが俺の大切な仲間であることに変わりはないし…それに、マスターなんて呼び方されるのは慣れてないしな」

…うん?待てよ、いつそのこと命令する感じで言った方が良いのか

?

「だけど、このことを命令するのって何か違う気が…まあ、やるだけやってみるか。」

「うーん…そんなじゃ、これは命令だ…レイはこれから俺のことを名前前で呼べー！良いな？」

『マスター…！ふふっ！命令なら仕方ないですね…改めてよろしくお願ひします！侑哉さん！』

レイは嬉しそうに笑みを浮かべながら、そう言った。

「侑哉！やつと見つけた！」

「葵?!どうしてここに？」

俺がレイと会話を交わしていると、葵が俺に駆け寄ってきた。

「花恋さんにサイバーベース世界へ行けるようにしてもらったの…良かった、侑哉が無事で…」

「ああ、なんとかかな…」

『無理しないでください、侑哉さん…無事とは言いがたいじゃないですか』

「そうなの?!なら、早く戻らないと…待ってて!今、花恋さんが作ってくれたプログラムを起動させるから」

そうやって、葵はデュエルデスクを操作し始める。

そして、しばらくしてから球体型のプログラムが出現した。

「これで、ログアウトできるわ…あ、そうだ!ねえ、侑哉…花恋さんの様子が何だか変なの」

「花恋の様子が…?どういうことだ？」

「それはわからないけど…だから、戻ったら花恋さんに聞いてみない?侑哉なら話してくれるかもしれないし」

花恋の様子が変か…いつも変と言えば変だけど、そういうことじゃないよな。

それに、確かに俺も引っ掛かることがいくつかある…何か俺に知られたくないことがある、そんな気がしてならない。

「…わかった、それじゃあログアウトしようか!」

俺の言葉に葵とレイが肯定するように頷いてくれた。

…それにしても…今回、戦った相手は一体何者だったんだ？サイバース世界を襲撃して、一体何が狙いだったんだ…今は考えても答えは出なさそうだな。

イグニス達はうまく逃げきれたんだろうか？まあ、今は逃げきれたと信じるしかないな。

俺はそんなことを考えながら、サイバース世界を後にした。

第44話 リンクアクセス

「葵ちゃん、侑哉の所にたどり着けたかしら…」

多分、サイバー世界に着いたとは思っただけ…侑哉にそろそろ話さないといけないわね。

このままじゃ侑哉は何も知らずに巻き込まれることになる…それだけは避けないと。

でも、本当に話していいの？侑哉があの方のことを知るということは、それだけ他の人に情報が漏れる可能性が高くなるということ。

そうなった時、侑哉を守りきれれるの？

「侑哉！良かった…目が覚めたのね！」

「ああ、ありがとな葵…それにしても、体の節々が痛いな…レイの言う通り、思った以上にダメージを受けてるみたいだな」

私がそんなことを思考していると、侑哉の目が覚めたのかそんな会話が聞こえてくる。

「お帰りなさい、侑哉、葵ちゃん…完全に無事とは言いにくいけど、こうやって戻ってこれて良かったわ」

私は戻ってきた侑哉達に視線を移しながら、そう言った。

「花恋もありがとな、おかげで戻ってこれた…」

「私は何もしてないわ、侑哉が思いついた方法を試しただけよ」

実際、侑哉が思いついた方法のおかげで侑哉の場所を特定できた。

「そうだとしても、ありがとな…本当に感謝してる」

「…そう言ってもらえると嬉しいわね」

「…なあ、花恋…一つ聞いて良いか？」

「良いわよ、何？」

「俺に何か隠していることがあるんじゃないか？もちろん、花恋が俺のことを思っただけ隠していることはわかっているつもりだ…だけど、ここまで隠し事されるとさすがに気になってさ」

侑哉は遠慮がちに私にそう尋ねる。

多分、侑哉も私が隠し事をしてるとなんとなくわかっていただけのかもしれない。

どうすれば…本当のことを話すべき？それとも適当にはぐらかす？

はぐらかされても、多分、侑哉は追及はしてこないと思う…だけど、侑哉の優しさに甘えて侑哉が危険な目に遭ったら？

それは、絶対にダメ…なら、私は…

「…話したくないなら、無理には聞かないけどさ」

「…いや、話すわ…侑哉にいつまでも隠してるわけにもいかないし…だけど葵ちゃん、あなたは聞かない方が良いかもしれないわ」

「どうしてですか？」

「この話を聞いてしまったら、葵ちゃんも危険な目に遭うかもしれないわ…それほどこの話しは重要な話しなの…それでも聞く？」

私は葵ちゃんに視線を移し、そう口にする。

すると、葵ちゃんは覚悟を決めたような顔をしてこう告げた。

「聞きたいです…それを聞けば侑哉のことをもっと守れると思いますし！それに、もし、私が危険な目に遭っても侑哉が助けてくれるって信じてるから…」

「葵…ああ、お前のことは俺が守ってみせるよ！」

葵ちゃんの言葉に侑哉がそう返す。

まあ、こうなるってなんとなくわかってたけど…侑哉と葵ちゃんは本当にお互いに信頼しあっている。

これなら、話しても良いかもしれないわね。

「わかったわ…それじゃあ着いてきて、特別な部屋に案内するわ」

私はそう言っつて、手元のボタンのスイッチを入れる。

すると、部屋の隅の床が開き、地下室への入り口が出現した。

こういう時のために用意していた特別な部屋…あの部屋なら他の人に会話を聞かれる心配はない。

「花恋？…こんなのいつの間…」

「まあ、細かいことは良いの！さ、着いてきて！」

「いや、全然細かいことじゃない気がするんだけど…」

侑哉の当然といえば当然の反応をスルーしつつ、私は地下室へと歩を進める。

そして、侑哉と葵ちゃんが私に続いて、歩き始めた。

「まあ、色々と質問もあるだろうけど、さっそく話すわよ…」

「ああ、頼む…」

さて、何から話そうかしら…まずはそうね…

「…まずは、侑哉の持つリンクアクセスの力について話そうかしら」
「さっそく、一番気になってる話しをするのか…」

「…確か、リンクアクセスの力はデータストームの声を聞き、その中に潜むモンスターと心を通わせることができる能力だったはずじゃ…」
葵ちゃんが考えるような仕草をしながらそう口にする。

そう、その通り…表向きはそういう能力ということになっている。

「確かにそうよ…だけど、それはあくまでリンクアクセスの力の副産物のようなものなの、リンクアクセスの本来の力はそんなレベルのものじゃないわ」

「リンクアクセスの本来の力？それは一体どういう力なんだ？」

「リンクアクセス本来の力、それは…あらゆるネットワークシステムに干渉し、それを自在に操ることができる力なの」

「は？ちよつと待ってくれ！あらゆるネットワークシステムに干渉し、それを自在に操ることができる力？そんなのチートじゃないか！」

侑哉がそんなふうに驚きの声をあげる。

実際、侑哉の言う通りチートという言葉が一番ふさわしい…リンクアクセスの力があれば、どんな機密情報だって手に入れられる。

侑哉がやったようにデータストームを操ることだってできるし、その気になればネットワーク上に存在するあらゆる情報をすべて手に入れることもできる。

他にもどんな強固なセキュリティですら、侑哉にとつてはザルのようなものになるだろうし、挙げていけばキリがない。

「…だからこそ、リンクアクセスの力については絶対にバレてはいけないの…バレてしまったらハノイの騎士やSOLテクノロジーに狙われてしまう…いや、最悪の場合、世界中の色々な組織に狙われるこ

とになるわ」

侑哉の能力は謂わばネットワークの神とも言える能力…そんな強力な能力を欲しがる人間はごまんと居る。

「…なるほどな、リボルバーが俺の身の安全の為にも今は話せないって言うてたのはそういう理由だったのか」

「そういうことよ…もし、あの段階でリンクアクセスについて話していたら、今頃、SOLテクノロジーに情報が渡っていたかもしれないわ」

そうなってしまった時のことは、考えたくもない…本当に良かった、どうやらハノイの騎士の幹部達はリンクアクセスについて他言する気はないみたいね。

「…待つて、花恋さんはどうしてリンクアクセスについてそんなに知っているの?」

葵ちゃんが、恐らく、多くの人が疑問に思ったであろうことを口にする。

「それは…私がリンクアクセスの力について研究していたからよ…」
「えっ!?!」

私の言葉に侑哉と葵ちゃんがハモリながらそう返す。

「…そうね、少し昔話をしましょうか…10年前の私の物語について」
そう言うて、私は話し始める…すべてが始まった10年前の出来事を。

／／／／／／／／／／／／／／

――10年前

「おはよう!みんな!」

「おはよう、花恋」

「おはよう!」

当時、14歳だった私は両親と侑哉、私の4人家族で暮らしていた。昔から発明が得意だったこともあって、よく思いついたものを作っていたりもしたわ。

しかも、その発明がすごいこともあって、周りの人は私を天才少女

だとか、色々と持て囃されていた。

「あれ？侑哉は？」

「侑哉は今、花恋お姉ちゃんみたいに発明するんだって、部屋にこもってるわ…多分、そろそろ来るとは思うんだけど…あ、ほら来たわよ」

「花恋お姉ちゃん！見てみて！」

「うーん、どれどれ？わあっ！すごいじゃない！侑哉！これってデュエルディスク？上手に出来たわね！」

「うん！本当のデュエルディスクとは違うかもしれないけど、頑張って作ったんだ！」

「さすがは侑哉ね！ご褒美にお姉ちゃんがハグしてあげる！ぎゅーっ！」

「えへへ、ありがとう！僕もお返しのでぎゅーっ！」

いつものように、朝が来て、両親や侑哉に囲まれて1日を過ごす、それだけでとても幸せだった…そんな時よ、鴻上博士が私に自分の研究を手伝ってくれないかと勧誘しにきたのは。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「鴻上博士だって！？どういうことだ？何で鴻上博士が？」

「多分、私の噂を聞いて来たんだと思うわ…さっきも言ったけど、当時の私は天才少女と周りから持て囃されていたから、それが鴻上博士の耳に届いたんだと思う」

「…結局、花恋は鴻上博士に協力したのか？」

侑哉は少し、複雑な表情をしながらそう言った。

侑哉は10年前に起こったロスト事件について知っている、だからこそ鴻上博士に私が協力したのだとすれば、それはロスト事件に私が関与したことになる。

だから、侑哉はあんな顔をしているんだと思う。

「安心して、私はロスト事件に関与していないわ…もちろん、最初は人類を救う研究だって聞いて、喜んで研究に協力したわ…だけど、途中でその研究は人類を救うことには繋がらないことに気づいたの」

「そ、そうか……確か、鴻上博士は意志を持ったAIを作ろうとしてたんだよな」

「ええ、そうよ…私達人間にはどうしても寿命というものが存在している、だから、AIを人類の後継種にするつもりだったの…でも、それは間違いだった」

「…人間とAIの争いが起きる可能性が高いからか？」

私の言葉に侑哉がそう問いかける。

さすがは侑哉、理解が早いわね。

「その通りよ、人間は傲慢な生き物だからAIに支配されるなんてことを認めるわけがない…だから、確実に人間はAIを敵視する、そして、人間が襲ってきたらAIもまた人間を敵視してしまう…だから、この研究は誰の為にもならない研究だったの」

しかも、鴻上博士の研究のせいで、色んな人が傷ついた…それに、LINK VRAINSで起こっている争いだって、元を辿れば鴻上博士の研究が原因だ。

本当にクソツタレよね…向こうは罪の意識を少しでも感じているのかしら…今、思えば、鴻上博士を除けばまともな人が多かったし、その人達は罪の意識を感じているかもしれないけど。

「それに気づいていたなら、鴻上博士を止めることもできたんじゃないのか？」

「もちろん、止めたわ…だけど、鴻上博士はその研究に取り憑かれたみたいに没頭していて私の話しをろくに聞いてくれなかった」

「そうだったのか…」

「その結果がこれよ…少し考えれば、こんなことになることは簡単に予測できるのにね…しかも、本人は自分の研究が正しいと思っていたから余計にたちが悪いわ」

一応、リンクアクセスの情報を消していつてくれたのは感謝しているけど…まあ、単純に自分達がリンクアクセスの情報を独占したかっただけかもしれないけど。

「…さて、続きを話すわね…鴻上博士が話しを聞いてくれないとわかった私は、人とAIの争いを止めようと行動を始めたの」

／／／／／／／／／／／／／／

「…やっぱりダメね、全くもって方法が思いつかないわ」

(鴻上博士…あんな、少し考えればわかるようなものもわからないの？このままいけば間違いなく、人間とAIによる争いが起きるのに…)

「やめやめ…とりあえず今は、争いを止める方法を考えないと！」
行動を開始したのは良かったけど、最初は全く方法が思い浮かばなかった…だけど、争いを止める方法を考えている時に気づいたの。

人間とAIの架け橋になるようなものがあれば良いんだって。
それに気づいた私はさっそく、架け橋となるようなものを探し始めた。

そして、その中で私はある資料を見つけたの…そこには、不思議な能力を持った…いえ、正確に言えば持っていた人達について記されていた。

その不思議な能力こそが、私が後にリンクアクセスと名付けた能力だったの。

資料には、子供が解けるはずのないパスワードを解いたことや、気づいたら自分のパソコンにまったく知らない他人の情報が映されていたことなどが記されていた。

ハッキングの技術や、パスワードの解き方を知らない子供がこんなことを起こしたとは考えられず、その資料を書いた人は頭を悩ませていたみたいね。

しかも、その能力を持った子供達には共通していたことがあった。
それは、その不思議な出来事が起きた後は、子供達は強い睡魔に襲われて、眠ってしまう…そして、不思議な能力は子供時代にしか発現しないということだった。

その能力が発現し始めるのは5歳から6歳、そして、9歳の頃には能力が消えてしまう…私が調べた限りでは1番長くて10歳までしか能力は持続していなかったわ。

／／／／／／／／／／／／／／

「ちよつと待ってくれ！おかしくないか？もし、花恋の話しが本当なら、俺がリンクアクセスの能力を持っているはずがないだろ！」

私の話しを途中で遮るように、侑哉がそう叫ぶ。

そう、侑哉の言う通り、本来リンクアクセスの力は最大でも10歳までしか使えない。

私はその資料を見つかるまで、その能力の存在すら知らなかったのも、その能力はごく一部の人達だけに発現し、子供時代にしか能力が発現していなかったせいで、そこまで問題にならなかったからだ。

でも、侑哉は違う…侑哉は今でもリンクアクセスの力を持っている…そして、どうしてそういう状況になったのかはある程度、予測はついている。

「…侑哉、あなたには他の人とは決定的に違うことがあるの…多分、リンクアクセスの力が未だに侑哉にあるのもそのせいよ…」

「どういうことだ？」

「侑哉…あなたはね、異世界の人間なんかじゃないの…あなたは、元々この世界の人間なの」

「それって一体…どういう意味だよ」

「そのままの意味よ…あなたは元々この世界の人間…つまり、あなたが前まで居た世界こそが異世界で、今居るこの世界こそがあなたの本来の世界ということよ」

私の言葉に侑哉は沈黙する。

それも当然といえば当然のこと…だって、侑哉は前まで居た世界が自分の本来の世界だと思っていたんだから。

私は重い沈黙の中、ただ、押し黙ることしかできなかった。

第45話 側に居てくれる人

「どう？落ち着いた？」

「あ、ああ…一応な…」

花恋に声を掛けられ、そう返す。

本当は全然落ち着いてなんかいない…花恋の話しの通りなら、俺は本来遊戯王VRAINSの世界の人間で、前まで居た世界こそが、俺にとつては異世界だったことになる。

それは、俺の今までが否定されたような気がして、簡単に受け入れることができなかった。

「…俺が元々この世界の人間だったなんて、正直、今でも信じられない…」

「無理もないわよ…こんなことを言われて、簡単に受け入れることなんてできないわ…」

花恋はそう言つて、俺に申し訳なさそうな表情を見せる。

「侑哉…：花恋さん、一つ聞きたいことがあるんですけど…」

「言わなくても何となくわかるわ…侑哉が何故、異世界に行ったのかということよね？」

「はい…」

葵が俺の代わりに花恋にそう質問する。

何故、俺が異世界に行ったのか…それに関しては俺も気になっていた。

だけど、今はそんなことを聞ける気分じゃなかった…多分、葵もそれをわかっていて花恋にそんなことを聞いたんだろう。

「侑哉が前の世界に行った理由は、リンクアクセスの力が原因の1つよ…ただ、1番の理由は私が侑哉を異世界に逃がそうと考えてしまったことね」

「花恋さんが侑哉を…？」

「あの時の私は、今、考えればバカなことをしたと思うわ…」

花恋はそう言つて、俺が異世界に行った理由を話し始めた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

私はリンクアクセスについての調査と並行して、鴻上博士の研究について秘密裏に調べていたの。

鴻上博士の研究については嚴重に守られていて、私でもなかなかそのセキュリティを突破できなかった…そんな時よ、何故かそのセキュリティをいきなり突破できていたの。

「どういうこと…?」

私は困惑しながら周りを見渡したわ…すると、そこには侑哉の姿があったの。

「侑哉…どうしてここに?」

「花恋お姉ちゃんが部屋に行ったのが見えたから、着いてきたんだ!」

「そうだったの…」

「ふああ、何か眠くなってきたやつた…お休み、花恋お姉ちゃん…」

侑哉はそう言つて、眠ってしまったわ…その様子を見て私は確信した、侑哉はリンクアクセスの力を持っているって。

だって、あまりにもリンクアクセスの力を持っていた人達と特徴が似ていたから。

だから、私は侑哉を何としてでも守らなくてはいけない…そう思ったの。

そこで思いついたのが侑哉を別の世界に逃がすことだった。

このまま生活をしていけば、侑哉にその気がなくても周りの人達にリンクアクセスの力を持っていることが知られてしまうかもしれない。

いや、リンクアクセスの力を持っていると知られなくても、不思議な力を持っていると思われてしまう…そうしたら、侑哉が危険な目に遭ってしまう…だから、私は侑哉を別の世界に逃がすことを決めたの。

本当にあの時の私は冷静じゃなかったわ、でも、あの時の私にとつてはそれが最善だった。

そこから私は、異世界に行く装置を作り始めた…侑哉と私の二人分をね。

本当は、両親の分も作りたかったけど、あの時の精神状態で両親の

分まで作る余裕が私にはなかった…とにかく侑哉を早く逃がす、それだけしか考えられなかったから。

そうして、超特急で装置を作りあげ、気づけば4ヶ月が経っていた。

／／／／／／／／／／／／／／

「それで、侑哉を異世界に逃がしたんですか？」

「ええ…だけど、そこで問題が発生したの…本当なら私も侑哉と一緒に異世界に行くはずだったのに、いざ、装置を起動させると私の装置だけが故障してしまったの」

「花恋さんの装置だけが!？」

「そう…だから、結局侑哉だけが異世界に行ってしまったの…」

花恋は悲しそうな表情をしながらそう言った。

なるほどな…俺がデータバンクで見たものはその時の記憶だったのか。

「…花恋、一つ聞きたいんだけどさ」

「良いわよ、何でも聞いて…」

「俺がこの世界にトリップ…いや、戻って来た時、俺だって何でわかったんだ？」

「…それは、侑哉が全然変わっていなかったから…それに、侑哉は一度異世界に行った後、何度かこっちに戻って来ていたからよ」

「ちよつと待ってくれ…!何度かこっちに戻って来ていたってどういうことだよ!」

花恋の言葉に俺はそう返す。

「…原理は私にもわからない…だけど、侑哉は1度異世界に行った後、6年間、1年に1回ぐらいのペースでこっちの世界に戻って来ていたの…」

「6年間?俺にはそんな記憶はないぞ」

「それは仕方ないわ、だって、1度戻って来てもすぐに元の世界に戻ってしまっていたから、侑哉からすると夢みたいなものだっただろうし」

「夢みたいなものか…」

そういえば、小さい頃に変な夢を見ていた記憶がある…知らない女

の人と一緒に遊んだり、時にはその人に俺が料理を作ったりした夢を。

あれは、俺がこの世界に一時的に戻って来た時の出来事だったのか。

「…侑哉からすれば夢のようなものだろうけど、私にとっては現実で、侑哉が戻ってくるたびに成長した侑哉の姿が見れて嬉しかったわ」

「それで、俺のことがわかったのか…」

「そういうことよ…そして、多分、未だにリンクアクセスの力を侑哉が持っているのは、何度も世界を行き来している内にリンクアクセスの力を処理できるほどに脳や体が進化したんだと思う」

「それってどういう意味だ？」

「世界を移動するということは、それなりに負担が掛かる…しかも、6年間の間に世界を移動した回数は往復で12回、初めて異世界に行つたことも含むと13回、そして、侑哉が今もう一度この世界に戻ってきたのを含めて14回…それだけ世界を移動していれば、それに耐えられるように脳や体が進化しても不思議じゃないわ」

なるほど、確かにその可能性は高いかもしれない…俺が未だにリンクアクセスの力を持っているのは世界を何度も移動したせいか。

…わかった、確かにリンクアクセスについてはわかった…だけど、気になることが1つだけある。

「花恋さん…リンクアクセスについてはわかりました…だけど、1つだけ確認しても良いですか？」

「何？ 葵ちゃん…」

「…侑哉がまた元の世界に戻る可能性はありますか？」

葵はそう言つて、花恋に視線を移す。

ちようど俺も同じことを考えていた、俺が何度も世界を行つたり来たりを繰り返していたなら、今だつて元の世界に戻つてしまうかもしれない…それが気がかりだった。

「恐らく、それはないと思うわ…今までなら侑哉はすぐに元の世界に戻っていたけど、今は長い時間この世界に居る、だから侑哉が元の世界に戻る可能性は低いわ」

「そうですか…良かった…」

葵が安堵した表情をしながらそう呟く。

それにつられるように、俺もホッと胸を撫で下ろした。

「…と、これが私が侑哉に隠していたことよ…今まで黙っててごめんね」

「…ああ、気にしなくても良いよ…」

花恋は俺の為にこのことを黙っていたんだろうし責めるつもりはない。

「…ただ、あまりにも衝撃的すぎて、簡単には割りきれそうにない。」

「…先に、部屋に戻ってるよ」

「侑哉…」

俺は後ろから聞こえた、葵の心配そうな声を聞きながら地下室から部屋へと戻っていった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「はあ…」

自分の部屋へと戻ってきた俺は、何度目かわからないため息を溢す。

「やっぱり、簡単に受け入れられるわけないよな…」

さつきから、繰り返し花恋の話しを反芻してみても、ため息をつく…それを繰り返してばかりだ。

俺は…

「侑哉…入っても良い？」

俺が思考の海に沈んでいると、葵の声が聞こえてきた。

「ああ、大丈夫だよ」

「…それじゃあ入るわね」

葵はそう言っ、部屋へと入ってきた。

「悪いな、心配かけて…」

「ううん、気にしないで…いきなりあんなことを言われたら、誰でも簡単に受け入れられないわよ」

葵はそう言っ、俺の隣に座る。

「ありがとな…葵」

「私はお礼を言われるようなことはしてないわ…」

「お前が側に居てくれるだけで、俺にとっては嬉しいんだよ」

「…！そ、そう？それなら良かったけど…」

葵は照れくさそうに目を逸らしながら、そう言った。

そんな葵の様子を見て、思わず笑みが零れる。

それと同時に愛しさが溢れてくる…本当に葵が居てくれて良かったと心から思った。

「…ね、ねえ侑哉…」

「どうしたんだ？」

「…正直、私も未だに信じられないけど、花恋さんの話しを聞いて、すごく嬉しかったの…」

「どういうことだ？」

「侑哉が元々この世界の人だって聞いて、嬉しかった…だって、これで侑哉と離ればなれになることはないから…」

葵はそう言って、そっと俺の手を握る。

繋いだ手は温かくて、心がとても落ち着いた。

「たまに、侑哉がもし、元の世界に帰っちゃたらどうしようって思ったことがあって…侑哉と一緒に居られないことを考えたら、怖かった」
「だから、嬉しかったのか…確かに、葵と一緒に居られるのは俺も嬉しいな…」

葵の言葉に俺はそう返す。

花恋が言うには俺が元の世界に戻る可能性は低いらしいし、葵と一緒に居られるなら、俺としても嬉しい。

「そっか、侑哉も同じ気持ちなんだ…良かった！」

そう言って、葵は嬉しそうに笑顔を俺に向けてくれた。

「ああ…仮に戻れる方法があったとしても戻るつもりはないよ…戻るには大切なものが出来すぎたからな」

そう言って、今度は俺が葵に笑顔を見せる。

そうだよな、仮に俺が元々この世界の人間だったんだとしても、そんなことは関係ない。

俺が過ごしてきた時間は紛れもなく本物だし、今はこうして大切な

人達と一緒にこの世界で生きている…大切な日常を過ごしている。

むしろ、これ以上の幸せを望んだら罰があたりそうだな。

「なあ、葵…」

「どうかした？侑哉？」

「愛してるよ」

そうやって、俺は葵と唇を重ねる。

しばらくして、葵から離れると、顔を真っ赤にしながらかんたんと嬉しそうな表情をした葵の顔が目に入った。

「い、いきなりは反則よ…だから、やり直し…もう一度ちゃんとキスしよ？」

「わかった…」

そうやって、俺は再び葵の顔をじっと見つめる。

「侑哉…私も愛してる」

「ああ、俺も愛してる」

お互いにそうやって、俺と葵はもう一度キスをした。

さつきと同じくらい、いや、それ以上に想いを重ねて。

第46話 始動するハノイの塔

それは、いつもと変わらない日のはずだった。

葵や花恋、遊作やデュエル部のみんな…そんな人達と変わらない日常を送っていた。

そんな時だ、それが突如として現れたのは。

「何だよ、これ…塔か？」

「そう見えるわね、でも何でいきなりこんなものが…」

俺と花恋はLINK VRAINSの映像を見ながら、そんなことを口にする。

花恋の話しを聞いてから数日が経ち、いつも通りにLINK VRAINSの中継を見ている時だ、突如として巨大な塔が出現し、LINK VRAINSの建物やログインしていた人達がその塔へと吸い込まれていく姿を目の当たりにしたのは。

最近、葵や花恋、さらにはレイにまでLINK VRAINSに行くことを禁止され、ここ数日は一度もログインできていない。

ただ、遊作からファウストというハノイの三騎士の1人とデュエルしたことは聞いていた。

正直、そのデュエルはすぐ見たかったが葵達に止められてしまった。

まあ、今はそんなことより…

「これは一体どういうことだ？」

「わからない、けどこの塔が完成した瞬間に世界が終わるわ…それだけは断言できる」

「確かにな…詳しい原理はよくわからないが、大量にデータを吸い込んで、塔ができた瞬間にそれを放出することで、ネットワークを壊すみたいな感じか」

詳しく調べていないから何とも言えないが、この推測はあながち間違ではないような気がする。

「いよいよ、ハノイの騎士がイグニスを葬りさるために最終手段に出たってことか…レイ、この塔がどれくらいで完成するかわかるか？」

『はい！少し待っていてください……わかりました！この塔はこのペースでいけば、1時間ごとに塔が一部完成します……このことから、完全に塔が完成するまで約6時間ほど掛かると考えられます』

「6時間か……それまでに何とかしてこの塔を止めなくちゃならないってことか……」

リンクアクセスの力を使えば、止められるか？

リンクアクセスの力はあらゆるネットワークシステムに干渉し、それを自在に操る力だと花恋は言っていた……それならこの塔も止められるかもしれない。

「侑哉、言っておくけどリンクアクセスの力を使って、この塔を止めようだなんて考えないでね」

「……何でだ？リンクアクセスの力を使えば可能じゃないのか？」

「確かに、可能だとは思わ……だけど多分、この塔を止めた後、侑哉が死んでしまうわ」

「俺が死ぬ？……どういうことだ？」

花恋の言葉に思わずそう聞き返す。

「この塔……仮に、ハノイの塔と呼ぶけど、この塔には大量のデータが集まっていると考えられるわ……だから、それに触れた人間はただではままないはずよ」

「確かに、そうかもしれないな……だけど、死ぬまではいかないんじゃないか？」

「……考えてもみて、侑哉がリンクアクセスの力を使えば、その大量のデータが一気に侑哉の頭に流れこんでくるのよ？……そんな普通の人間なら、頭がパンクして脳の機能が停止するわ……いくら侑哉が世界移動によって脳が進化していたとしても、それに耐えられるとは思えない」

「なるほどな……」

確かに、リンクアクセスの力を使うにしても、結局の所俺がハノイの塔をコントロールするには、俺がハノイの塔に集まったデータを1人で処理するしかない。

あの膨大なデータ量を1人で処理するのは、さすがに厳しいかもし

れない。

「だとしたら、別の方法を考えないとな…」

きつと、ハノイの塔を止める方法はあるはずだ…考えろ…まず、ハノイの塔を起動させたのはハノイの騎士で間違いないだろう。

と、すればリボルバーが起動させた可能性が高い…リボルバーは俺とプレイヤーとの決着を望んでいる、だとすると、ハノイの塔を止めるにはリボルバーを倒せば良いのかもしれないな。

「…よし、そうと決まれば…」

俺がそう言うと同時に、インターホンの音が響いた。

「…葵かな？ちよつと出てくるよ」

「わかったわ」

俺はそう言って、玄関へと向かい、そのまま扉を開けた。

すると、そこには思った通り、葵の姿があった。

「侑哉…！LINK VRAINSの様子は見た？」

「ああ、ちょうど見ていたところだよ…とりあえず、上がってくれ」

「うん…それじゃあ、お邪魔するね」

そう言って、葵は家へと上がった。

「花恋、状況は？」

「さつきと変わらないわ…うん？あれ、この人って確か…」

「この人って、AI部隊でハノイの騎士を倒そうとして、負けて…ボロクソ言われてた人じゃないか」

名前は何だっけ…まあ、良いか…それよりもこの人の相手は一体…見たところハノイの騎士なのは間違いないけど。

「あ…負けてる、早くないか？これは敵が強すぎるのか？それとも、こいつが弱いのか？」

俺がそんなことを言っていると、先ほどまでハノイの騎士と戦っていたはずの、男が消えていった。

「これは…LINK VRAINSで起こっていることと同じじゃないか！」

やっぱり、ハノイの騎士の仕業か…

俺がそんなことを考えていると、映像に映ったハノイの騎士が言葉は紡ぐ。

『警告です、今LINK VRAINSにはいれば彼と同じ目に遭います…それでも構わないという方はどうぞご自由に』

とんでもない悪人面をしながら、俺達を挑発するかのようにな。

「行くしかないな…結構休んだし、もうLINK VRAINSに行っても良いだろ?」

「『ダメに決まってるでしょう!!』」

俺がLINK VRAINSに行こうとすると、葵と花恋、レイの3人が同時にそう口にする。

「ええ!?何でだ?ここは行くことを許すところじゃない?」

『ダメです!侑哉さんのダメージは完全に快復したわけじゃないんですよ!それなのにLINK VRAINSに行くなんて…!ダメージでも喰らったら、アウトなんですよ!』

「私もレイと同じ意見よ…今、LINK VRAINSに侑哉が行くのは危険だと思う…」

「私も大体二人と同じ意見よ…まあ、仮にダメージが快復しても行かせるつもりはないけど」

「それは酷くないか?」

「だって、侑哉のことだから無茶しそうだし…」

花恋の言葉に葵とレイは同意するように頷く。

え?俺ってそんなに無茶してるっけ…無茶…うん、してるかもしれないな。

「でも、みんなが戦っている時に俺だけ戦わないってわけにもいかないだろ」

「大丈夫よ!侑哉!私達は絶対に負けないから!」

葵はそう言って、俺に笑みを向けた。

俺を安心させるためかもしれないが、逆にその笑顔に不安を覚えてしまう。

もし、葵が負けて…ハノイの塔に吸収されたら、この笑顔を二度と見られなくなってしまうかもしれない…そう思うと、怖くて仕方がな

い。

「侑哉…」

葵は俺の名前を呼びながら、そっと俺を抱きしめる。

抱きしめてくれた葵の体は温かくて、恐怖が少しだけ和らいだ気がした。

「私なら大丈夫よ…侑哉が待っているのに、負けてなんていられないもん…絶対に戻ってくるわ」

「葵…わかったよ、だけど危険と判断したら無理をしても助けに行くからな？」

「うん、わかった…なら、侑哉に心配をさせないように頑張らないとね！」

葵は笑みを浮かべながらそう言って、俺をさらに強く抱きしめる。

「はいはい、イチヤイチャしてる所悪いけど、そろそろ行った方が良くんじゃない？」

「確かにそうですけど…だけど、もう少しだけ…もう少しだけ侑哉とこうしていて良いですか？」

花恋の言葉に葵が名残惜しそうにそう口にする。

葵も全く恐怖を感じていないわけじゃないんだろう…それも当然だ…負けたら、データになつてあの塔に吸収されるかもしれない…恐怖を覚えるのは当たり前だ。

…なら、俺が背中を押しなさいといけないよな。

「葵…俺はお前を信じてる、だから安心して行ってこい…この戦いが終わったなら、続きをしよう」

「侑哉…」

「安心しろ、俺がいる限りは葵を絶対に守ってみせる！」

「うん…！ありがとう！侑哉！それじゃあ行ってくるね」

葵はそう言って、俺の頬へとキスをする。

俺もお返しとばかりに、葵と唇を重ねる。

「おっふ…見てるこっちが恥ずかしくなるくらいにラブラブね…

まあ、葵ちゃんも元気が出たみたいだし、これで良かったのよね」

花恋の言葉に俺と葵は思わず顔を赤くしつつ、距離を取る。

「そ、それじゃあ改めて…イントウザヴレインズ!!」

そう言つて、葵はLINK VRAINSへと向かっていった。

…さて、俺も自分のできることをしないと。

「…レイ、頼みがある」

『何ですか？侑哉さん』

「葵のことをサポートしてやってほしい…レイが行ってくれればできることも増えるだろうしな」

『なるほど…わかりました！侑哉さんの頼みとあらば仕方ないですね…それに、葵さんと私は目的が一緒ですからね』

「目的…？」

『侑哉さんを守ることです！あなたを守るためなら、私と葵さんは何だつてやってみせます！』

レイはそう言つて、笑みを浮かべる。

「そっか、ありがとな…頼りにしてるよ」

『はい！お任せください！』

そう言つて、レイは葵のデュエルディスクに向かっていった。

…本当に2人には敵わないな…いや、3人か。

俺はそんなことを考えながら、花恋へと視線を移す。

「花恋、大至急作つてほしいものがある、頼んでも良いか？」

「構わないけど…時間はあまりないわよ？」

「大丈夫だ、リンクアクセスの力を使って、時間を短縮する」

「なるほどね、わかったわ！それじゃあさっそく作りましょう！」

「ああ！この戦い、誰一人犠牲は出させない！」

そうして、俺達は作業を開始した。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「何としてでも、リボルバーを倒さないといけないわね」

『そうですね…私達の誰かがリボルバーを倒せば、ハノイの塔は止まります！頑張りましょうね！』

LINK VRAINSに來た直後にプレイヤーカーとGO鬼塚と合流して、今のLINK VRAINSの状況を説明してもらった私はレイとそんな会話を交わしながら、ハノイの塔へと向かってい

た。

ハノイの塔を止めるため、データとなつてハノイの塔へと捕らわれた人達を救うために。

「それにしても、レイが私のデュエルディスクから出てきたのは驚いたわ」

『侑哉さんに葵さんのサポートをお願いされたので：多分、侑哉さんは最悪のケースを想定して私にサポートをお願いしたんだと思います』

「ふふっ！侑哉らしいわね」

そう、侑哉はいつだって皆が助かる道を考え続けてる：例えば、それが自分を犠牲にすることだったとしても。

それは侑哉が優しいからだとわかつてはいるけど、もう少し、自分を大切にしてほしい。

今回だって、まだダメージが残っているのにLINK VRAIN Sに行こうとしていた：だからこそ、今回は私達で何とかしなきゃ！私を何度も救ってくれた侑哉を助けるためにも！

『一応、先ほどプレイヤーさんから聞いた話を侑哉さんに伝えておきますね！まあ、侑哉さんのことですから、ほとんど推測しているとは思いますが』

「確かに、侑哉ならこのハノイの塔を止める方法も、ハノイの塔が完成したら何が起きるかも全部予測してそうね：」

『侑哉さんなら、さらにその先まで予測してる気がしてならないですけど：うん？葵さん、誰か居ます！』

「そうみたいね：：隠れてないで出てきなさい！」

「おや：私の思いが届いたのでしょうか」

「あなたはさっきの：」

そこに居たのは、ここに来る前に侑哉と一緒に見ていた映像に映っていたハノイの騎士だった。

「スペクターです：会うのは二度目ですね、ブルーエンジェル」

「二度目：？」

こんな人に会った記憶は私にはない。

「では、心の奥の扉を開けましょう」

目の前のハノイの騎士がそう言うと同時に、私が電腦ウイルスを仕込まれた時の記憶が甦った。

そうだ…私はあの時、このハノイの騎士からダークエンジェルのカードを受け取った。

「…あなたが私に電腦ウイルスを仕込んだのね！」

「ええ、結局Phantomによって阻止されてしまいました…」

「教えなさい、どうしてあなた達はこんなことを？」

「話しても無駄です、趣味と信念が相容れないのと同じですよ」

「趣味？」

「崇高なる信念を持つ者の考えは、アイドルをやっているような雑魚にはわからないということですよ」

「言ってくれるわね…」

「リボルバー様からこの世界に侵入する者はすべて殲滅しろとの命令を受けています…逃げるなら今ですよ」

「その言葉、そっくり返すわ！私はあなたを倒し、リボルバーを倒す！」

「聞き捨てなりませんね…雑魚が何人来ようともリボルバー様の足元にも及ばない…まあ、Phantomならばリボルバー様と互角かそれ以上に戦えると思えますがね」

「どうしてここでPhantomの名前が出てくるの？」

スペクターの言葉に思わずそう聞き返す。

本当にどうしてこのタイミングで侑哉のことが出てくるの？

「リボルバー様は彼に一目置いていましたからね、私も彼のデュエルを少しばかり観戦してみたのです…彼のデュエルは実に素晴らしかった！あらゆる戦略を使いこなすタクティクスはもちろん、逆転の一手を引き寄せる幸運…この私ですら彼のデュエルには魅了されました！」

そうやって実に愉快そうに、目の前のハノイの騎士は侑哉のデュエルを絶賛する。

この人、色々とダメな気がする…この絶賛だって侑哉が聞いてもあ

んまり喜ばない気がするし。

「それで、デュエルするの？しないなら私はこのまま進ませてもらわ
わ」

「おっと、これは失礼しました…では、始めるとしましょう…」

「デュエル!!」

そうして、私とスペクターのデュエルが始まった。

特別編 夏祭りに行こう！

「…とりあえず準備はこんなものか」

黒の上着を羽織りながら、俺はそう口にする。

…というのも、今日は夏祭りの日で葵と一緒に祭りを見て回るための準備をしていた。

俺の格好は至ってシンプル、白のシャツに黒の上着、そして紺色のジーパンといった格好だ。

シンプルすぎるって？仕方ないだろ、俺はオシャレというのがよくわからないんだ、まあ、花恋が言うには俺は基本的には何でも似合うらしいが。

まあ、俺にはそんな自覚はないけど。

「侑哉！葵ちゃんが来たわよ！」

「わかった、今から行くよ！」

花恋の言葉を聞き、俺は下へと降りていった。

「侑哉！えっと…どうかな？」

下へと降りた俺の目に入ってきたものは浴衣を着た葵の姿だった。

葵の浴衣は水色を基調とした浴衣で所々に花柄の模様があった。

さらには、髪が纏められていて、羽のような形の髪止めがしてあった。

一言で感想を言うと、可愛すぎる。

「あ、ああ！すごく似合ってて可愛いよ！」

「あ、ありがとう…侑哉」

頬を赤らめながら、葵はそう言った。

その顔は反則だろ…やばい、葵が可愛すぎて辛い。

もちろん、いつもの葵も可愛いけど、浴衣姿の葵は新鮮でいつも以上にドキドキしてしまう。

「これは、色々と心配だな…大丈夫かな？俺」

「侑哉？どうかした？」

「いや、大丈夫だよ…それじゃあ行こうか！」

「うん！」

葵は笑みを浮かべながら、そう返事してくれた。

うん、これは本当にやばいかもしれない…

俺はそんなことを思いながら、夏祭りへと向かった。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼

「見て、侑哉！色々とお店が出てるわ！」

「本当だ、確かに色んな店が出てるな…」

葵の言う通り、射的や金魚すくい、型抜きなどの店や焼きそばにたこ焼きといった出店が並んでいて、その店の多さには少々驚かされた。

まあ、祭りならこれぐらいが普通なのかもな…最後にこういう所に行ったのは随分前だから、すっかり忘れていた。

「それじゃあ行こうか！」

俺はそう言って、葵の手をそつと握る。

葵もそれに応えるように俺の手を握り返し、恋人繋ぎの状態になった。

「…葵、俺の側から離れるなよ」

「ふふっ！それじゃあこうしましょ！」

そう言って、葵は俺の腕に抱きついた。

ちよっ！いきなりは心臓に悪いって！

「これなら、離れずに済むでしょ？」

「うん…まあ、確かにな…俺のメンタルが持つかはわからないけど…」
はつきり言って、さつきからドキドキしっぱなしな俺がいる。

普段から葵とはこういうことをしているはずなのに、ドキドキが止まらない。

まあ、全然悪い気はしないけどさ。

「そ、それじゃあまずは射的にでも行くか？」

「良いわね！私、射的は大得意なんだから！」

「そうなのか…それじゃあ勝負してみるか？」

「望むところよ！」

そうして、俺と葵は射的の店へと向かった。

「さて、何を狙おうか？」

「そうね…あ！あれにしない？」

「あれか…オツケー、それじゃああれを狙おう！」

葵が狙おうと提案したのは、オッドアイズ・ファントム・ドラゴンがデフォルメされたようなぬいぐるみだった。

何でファントム・ドラゴンがデフォルメされているのかわからないけど、これはこれで良い気がする。

…もしかして、俺の影響だったりするの？まあ、それならそれでエンタメデュエリスト冥利に尽きるけど。

（これを落として葵にプレゼントしたいな…その為にも上手いこと当てないとね！）

（これを落として侑哉にプレゼントしたいな…その為にもうまく狙わないとね！）

そんなことを考えながら、俺は射的の店主にお金を払い、射的用の銃を受けとる。

もちろん、葵の分のお金も払っている。

「さて、やってみようか！」

そう言つて、俺達は次々にぬいぐるみに向けて、銃を撃つ。

俺と葵の弾は次々とぬいぐるみに命中しているが、なかなか落ちない。

そして、最終的に俺と葵の弾がそれぞれ1発ずつになり、それを放つと同時にそれぞれの弾が同じタイミングでぬいぐるみに命中し、ついにぬいぐるみをゲットできた。

「よし、やったな！葵！」

「うん！でもこの場合は引き分けかな？」

「そうだな…引き分けで良いんじゃないか？」

「そうね…あ、そうだ！侑哉！」

「うん？」

そう言つて、葵に視線を移すと、葵がファントム・ドラゴンのぬいぐるみを俺に手渡してくれた。

「これ…侑哉にプレゼントしようと思って…これを狙ったのも侑哉が喜んでくれると思ったからだし…」

「そっか…まさか、葵も同じことを考えていたなんてな」

「え…？」

「俺も葵にこれをプレゼントしようと思ってたんだ…先を越されちゃったけどな」

俺はそう言っ、葵に笑みを向ける。

さて、どうしようかな？どうせなら葵に受け取ってほしいけど…せつかく、葵がプレゼントしようとしてくれてるわけだしな。

…よし、決めた！

心の中でそう口にし、俺は葵からファントム・ドラゴンのぬいぐるみを受け取った。

「…ありがとな、大事にするよ！」

「侑哉…ありがとう」

「何で葵がお礼を言うんだよ、むしろ、お礼を言うのは俺の方だろ？」
「侑哉が受け取ってくれたのが嬉しくて…ほら、私はいつも侑哉にもらってばかりだから」

葵は嬉しそうに頬を赤らめながら、そう口にする。

やれやれ、そんな顔をされるとこっちまで嬉しくなってくるな。

そんなことを思いながら、俺はやっぱり葵のことが大好きなんだと改めて思った。

「葵…ありがとう、そう言ってくれると嬉しいよ」

「侑哉…」

「それじゃあ、次の所に行こう！せつかく祭りに来たんだ、楽しまないと損だしな！」

「うん…それじゃあ次は…」

そんな会話を交わしながら、俺達は次の店へと向かった。

俺にもらってばかりか…それはちよつと違うな。

…俺の方が葵からたくさんもらってるよ。

俺は俺の腕に抱きついてる葵を見ながら、歩き続けた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「うーん…やっぱり、何か変な気分だな」

「どうかしたの？侑哉」

「ああ…いや、大丈夫だよ」

「そう？それなら良いけど…」

葵と一緒に歩きながらそんな会話を交わす。

…一応、誤魔化したが、今、俺は正直に言う気分があまりよろしくない。

誤解しないでほしいが、葵と一緒に色々な所に行ったり、話したりするのはとても楽しいし、幸せだ。

ただ…周りの男共がうるさい、それだけが気に入くない。

葵と俺の横を男共が通りすぎるたびに、へあの娘、めっちゃ可愛くね？…とかへ彼氏いるのかよ…いなかったら、誘ってただけだな…とか、とにかくうるさい。

実際、葵が可愛いなんてことは俺が一番よく知ってる。

…だけど、自分の恋人が不特定多数の人間にじろじろ見られるのはあまり良い気分はしない。

「葵、ちよつとこっちに来てくれ！」

「えっ…どうしたの？侑哉」

「良いから、ちよつと来てくれ！」

そう言つて、葵の手を引きながらできるだけ人目につかない場所へと移動した。

「ふう、ここなら大丈夫かな？」

「急にどうしたの？侑哉」

「ああ…いや、ここから見える花火が結構キレイだつて聞いたからさ…」

葵に尋ねられ、そう言葉を返す。

とつさに誤魔化したのが、ここから見える花火がキレイだという話しは本当だ…まあ、花恋から聞いただけで俺は見た記憶がないんだけど。

何でも俺が小さい頃に花恋や両親と一緒に来たことがあるらしい

が、異世界に飛んだ影響でその記憶を俺は失っている。

「本当にそれだけ？」

葵がジト目で、そう聞いてくる。

うっ…これはバレてるのかもしれないな…仕方ない、正直に言うとするか。

「まあ、それ以外にも理由はあるよ…」

「どんな理由？」

「その…他の男達に葵がじろじろ見られるのって、あんまり良い気分はしないからさ…」

俺はそう言っつて、思わず恥ずかしくなって目を逸らす。

我ながら自分勝手な理由だと思う。

だけど、そう思っつてしまったんだからしょうがない。

「へえ、嫉妬してくれてたんだ…侑哉」

そう言っつて、葵は少し嬉しそうな表情をする。

「嫉妬…まあ、そうなるのか…」

「ふっ！心配しなくても、私が侑哉以外の人を好きになることはないわよ！むしろ、侑哉が私以外の誰かを好きになることの方が心配よ」

「それはない、断言しても良い…葵以外の人と恋人になることは考えられないよ」

「へっ!?あ、ありがとう…そう言っつてもらえると、嬉しいな…」

葵は耳まで真っ赤になりながら、そう言葉を紡いだ。

そして、そのまま俺にそっつと抱きついた。

「…正直言っつて…今でもまだ不安なの…侑哉がいつか私から離れていっっちゃうんじゃないかって…だって、侑哉の周りには魅力的な女の子がたくさんいるから」

「葵…」

「だから、侑哉が嫉妬してくれて嬉しかったの…だって、それは私のことをそれだけ好きでいてくれてるってことだから」

「そっか…まあ、俺からしたら葵が他の男達にじろじろ見られるのはあまり良い気分はしなかったけどな…だから、独善的なことを言う

と、これからも俺の側から離れるな、これは命令だ……なんてな」
さすがにふぎけすぎたかな……そう思っ、謝ろうとすると、葵が口を開いた。

「ふふっ！言われなくてもこれからも侑哉の側に居るわ……例え、侑哉が異世界に飛んでしまっても私が必ず見つけて侑哉を連れ戻すから」
葵はそう言っ、より強く俺を抱きしめる。

俺もそれに応えるように葵を強く抱きしめる。

「そっか、それなら安心だな……なあ、葵……」

「どうかした？」

「大好きだよ……葵」

「私も大好きよ……侑哉」

そんな風に言葉を交わしながら、俺と葵は口づけを交わす。
それと同時に花火が上がり、辺り一面に光が溢れる。

俺と葵はその花火に祝福されながら、より深くキスをする。

辺りには俺達以外の人の姿はなく、花火の光と音だけが響いていた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「花恋が言っ、た通り、ここから見る花火は確かにキレイだな」

「そうね……花恋さんに感謝しないとね」

葵は俺に体を預けながら、そう呟く。

「ああ、そうだな……」

本当に花恋には感謝しないと……おかげで葵とこんな風にキレイな花火を眺めていられるんだから。

……さて、葵とゆっくり花火を楽しむ為にもさつきから俺達をじろじろと見ているやつらを何とかしないと。

足音からして、人数は3人つてところか……しかも、全員男か……何が目的かは知らないが邪魔はしないでほしいもんだな。

そう思考しながら、俺は携帯を操作をし始める。

「侑哉……？」

「気をつけろ、葵……何人かが俺達を監視してるみたいだ……今から、ちよっとした作戦を始める」

「監視って!?!いつから?」

「そうだな…俺達がちょうど花火を見始めたぐらいだな…すぐに居なくなってくれるかもって期待していたんだけど、そんなことはなかったな」

葵に監視されていることを伝えなかったのも確証を持てなかったからだ、もしかしたら偶然ここを通りかかったただけの人かもしれないからな。

「でも、どうして私達は監視されているの?」

「多分、葵を拐うことが目的なんだと思う…今、動き出していないのも葵が1人になるのを待っているんだと思う…」

「そんな…!」

葵はそんなふうには驚愕の声を上げる。

俺だって、正直言っており得ないと信じたい…だけど、今の状況ではその可能性が最も高い。

幸いにも、向こうは俺達が監視に気づいているとは夢にも思っていない、だから、葵を救う為にも最善を尽くす!

「侑哉…」

そう俺の名前を呼んで葵は俺へとしがみつく。

その体は小刻みに震えていた。

「大丈夫だ、俺が葵を守ってみせる」

そう言っ、葵のことをそつと抱きしめる。

「侑哉…ありがとう」

「ああ、任せてくれ」

俺がそう言くと、葵は安堵した表情で頷いた。

…さて、ある程度の準備は整った…もうしばらく時間を置いて、作戦開始だな。

そうだ、一応念のため…

そうして、今の状況で、できるだけだけの準備をしてから俺は行動を始めた。

「それじゃあ、そろそろ行こうか!葵」

「うん…！わかった！」

葵がそう元気よく返事を返し、そのまま俺の腕に抱きつく。

「葵、悪いけどちよつと離れてくれないか？」

「どうして？」

「良いから！」

「わ、わかった…」

そう言つて、葵は少し名残惜しそうに俺の側から離れた。

そんなの名残惜しそうにしないでなくても良いのにな…だって…

「よつと！軽いな…」

「ふえっ!?ゆ、侑哉!？」

葵は突然の出来事に思わずそんな声をあげる。

それもそうだろう…だって、今の葵は俺に所謂、お姫様抱っこさされている状態だからだ。

「逃げるぞー！葵！しっかり掴まってるよ？」

そう声をかけて、俺は全速力で走り出す。

そのおかげで、すぐにさっきの場所から離れられた。

俺達の逃走に気づいたのか、先ほどまで俺達を監視していた人達が後ろから追いかけてくる声が聞こえてくる。

悪いが、あんた達に付き合っている暇はないんだ…このまま逃げ切らせてもらう！

夏祭りでごった返す人達を次から次へとかわしながら、全速力で走り続ける。

そうして、人混みを抜けて、夏祭りの会場の奥にある神社へとたどり着いた。

「はあ、はあ…ここまで来れば大丈夫かな？」

「侑哉！大丈夫!？」

「ああ…大丈夫、大丈夫…」

そう言いながら、少しずつ呼吸を整える。

さすがに全速力で走るのは疲れるな。

「君達、大丈夫かい!？」

俺と葵が会話を交わしていると、警察官の人が俺達へと声を掛け

た。

声を掛けてくれた人以外にもう1人警察官の姿が目に入り、うまくいったと心の中でガッツポーズをした。

「ここに誰かに追われている人達が居ると、通報を受けて来たんだが…君達のことだったのか」

「はい、そうです…多分、俺達を追ってきた人達がもうすぐここに来ると思います…あ、噂をすればなんとやらですね」

ふと、視線を移すと先ほどまで俺達を追っていた男達が姿を現した。

「ゲエツ！何でここにサツがいるんだよ！」

「ヤツベエ！早く逃げねえと！」

「そうだな、早く逃げねえと！」

そう言つて、男達は逃げようとしたが、ここまで俺達を追ってきたせいで、体力が残っていないようだった。

まあ、それも含めて作戦の内ではあったけど。

そうして、ほどなくして男達は警察官の人の手によつて逮捕された。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「はあ、疲れたな…せっかくの夏祭りだったのにな…まあ、結構祭り自体は楽しめたから良かったけど…葵は大丈夫か？」

「うん、侑哉のおかげでね！そう言えば、結局作戦って何だったの？」

「そうだな、どう説明するかな…とりあえず、まずは、あの監視に気づいた後、俺は花恋にメッセージを送って110番に連絡をしてもらったんだ」

私が作戦について侑哉に尋ねると、侑哉は自分の考えていた作戦を語り始めた。

「ただ、警察に連絡したところですぐに来れるとは限らない、だから、警察に電話する時に花恋に場所を指定してもらおうように頼んだんだ…それがあの神社だ…そうして花恋にそう連絡したら、しばらく時間を置いて、全速力で逃げる…そうすることで、警察が来るタイミンと合わせることにあの男達のスタミナを奪うのを同時にこなそう

と思ったんだ」

結果的にうまくいって良かったよ、と侑哉は後に付け足しながら、苦笑しつつそう言った。

「後は、一応証拠を残すために花恋に俺に仕掛けた小型カメラを送ってもらって、葵からもらったぬいぐるみを葵に預けたってところかな」

侑哉はそう言って、笑みを浮かべた。

すごい：侑哉は全部計算してたんだ：あの男達の行動や警察官が来るタイミングまで：

わかっていたつもりだったけど、侑哉はすごく頭の回転が早い。

：だけど、何よりも侑哉が私の為にそこまで行動してくれたのが嬉しかった。

「ねえ、侑哉：今日は侑哉の家に泊まって良いかな？」

「もちろん、葵なら大歓迎だよ！」

「ありがとう：ねえ、もう一つ我が儘を聞いてもらって良い？」

「それは構わないけど：何だ？」

「えっと、その：侑哉の家に着くまでお姫様抱っこしてほしいな：なんて」

自分で言って恥ずかしくなり、思わず侑哉から目を逸らしてしまう。

「何だ、それぐらいならお安い御用だよ！」

侑哉はそう言って、私をすぐさまお姫様抱っこする。

侑哉にお姫様抱っこされると同時に侑哉の顔が近くなる。

ち、近い！お姫様抱っこされているから当然なんだけど、こういう感じで顔が近くなるのは心臓に悪いわね…

多分、今の私は顔が真っ赤になっていると思う。

ただ、侑哉も同じなのか、照れくさそうに私から目を逸らしていた。

「：そ、それじゃあ帰るか！」

「う、うん…！」

そうして、私達はどこか気恥ずかしさを感じながら帰路へと着いた。

第47話 ブルーエンジェル

「よし、良い感じだな…これならもうすぐ完成できそうだな…ん？レイから連絡が届いてるな…」

作業を続けながら、ふと、デュエルディスクに目をやると、レイからのメッセージが届いていた。

その内容は葵とレイがプレイヤーから聞いた話しの内容だった。

そこには、ハノイの塔が完成したら何が起きるのか、そして、ハノイの塔を止めるにはリボルバーを倒さなければならぬことなど、大体俺の予測通りの内容が書かれてあった。

ただ、一つだけ信じられない内容を見つけて、思わず絶句する。

「…ゴーストガールがハノイの塔に吸収されただっ!?嘘だろ…」

「ゴーストガールが!?どうしてそんなことに…」

「わからない…だけど、リボルバーの仕業の可能性が高いな…くそっ!そこに俺が居れば何とかなっただかもしれないのに…」

そんな風に、自分の行動を後悔する。

そんなことをしても無駄だとわかっていても、後悔せずにはいられない。

「…侑哉、ゴーストガールのことは残念だけど、今は侑哉の考えてくれたプログラムを作成するのが先よ!このプログラムが出来ればゴーストガールのような人がこれ以上増えずに済むんだから!」

「…ああ、そうだな…悪い、花恋…作業を続けよう、これ以上、犠牲を出さない為にも」

「そうこなくっちゃ!さあ、さっさと終わらせましょう!」

「ああ!」

そう言つて、俺は作業を再開した。

／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「私の先攻でいかせてもらいます、私は手札から《サンシード・ゲニウス・ロキ》を召喚!」

サンシード・ゲニウス・ロキ レベル1 攻撃表示 (ATK0)

「現れよ！ 私達の道を照らす未来回路！」

「いきなり、リンク召喚!?!」

「アローヘッド確認、召喚条件は植物族通常モンスター1体！ 私はサンシード・ゲニウス・ロキをリンクマーカーにセット！ サークットコンバイン！ リンク召喚！ 現れよ、リンク1！ 《聖天樹の幼精》（サンアバロン・ドリユアス）！」

聖天樹の幼精 リンク1（ATK0） リンクマーカー下

「聖天樹へサンアバロンは攻撃の対象にされず、リンク召喚したターン、リンク素材にできません」

「攻撃力0：何かあるわね」

『そうですね、その可能性が高いと思われまます…侑哉さんも攻撃力の低いモンスターは厄介な効果を持っていることが多いと言っていました』

レイが私の言葉にそう返す。

…何であれ、警戒しておいた方が良いわね。

私はそう考えながら、デュエルに再び集中した。

「私はカードを1枚伏せて、ターンを終了します…さあ、あなたのターンですよ、ブルーエンジェル」

「私のターン、ドロー！」

ブルーエンジェル手札5↓6

「私は手札から魔法カード、《閃刀術式—ジャミングウェーブ》を発動！ メインモンスターゾーンにモンスターがない時、フィールド上にセットされたカードを1枚破壊できる！ 私はあなたの伏せカードを破壊するわ！」

ジャミングウェーブの効果により、スペクターの場の伏せカードが破壊される。

私がこうして、閃刀カードを使っているのはレイが私のデュエルディスクに来た時に侑哉が閃刀姫のデッキのカードを数枚送ってくれたからだ。

自分は戦えないから、せめてカードだけでもと考えてくれたんだと思う。

…ふふっ！こんな風に信用してくれてるんだから負けるわけには
いかないわね！

「閃刀ですか…これは少々予想外ですね」

「まだまだいくわよ！私は手札から《トリックスター・キャンディナ》
を召喚！そして、キャンディナの効果でデッキから《トリックスター・
ライトステージ》を手札に加えて、そのまま発動！そして、ライトス
テージの効果で《トリックスター・リリーベル》を手札に加えて、リ
リーベルの効果で自身を特殊召喚！」

ブルーエンジェル手札5↓4

トリックスター・キャンディナ レベル4 攻撃表示（ATK18
00）

トリックスター・リリーベル レベル2 攻撃表示（ATK800）

「そして、私はスケール6の《EMギタートル》と同じくスケール6の
《EMリザードロー》でPスケールをセッティング！そして、ギタート
ルの効果によりデッキからカードを1枚ドロロー！さらに、リザード
ローの効果で自身を破壊して1枚ドロロー！」

ブルーエンジェル手札4↓2↓4

「さらに、キャンディナを手札に戻して、手札から2体の《トリックス
ター・マンジュシカ》を特殊召喚するわ！」

トリックスター・マンジュシカ レベル4 守備表示（DEF12
00）×2

「そして、私は手札から魔法カード、《カップ・オブ・エース》を発動
！コイントスを行い、表が出たら私が、裏が出たら、あなたがデッキ
からカードを2枚ドロローする！」

「なるほど…どちらに転んでもあなたにとっては有利に働くわけです
か…困りましたね…」

スペクターは余裕そうな様子でそう口にする。

私はその言葉を無視して、コイントスを行う。

「…結果は表…よって、私はデッキからカードを2枚ドロローする！」

ブルーエンジェル手札3↓2↓4

よし！何だか最近、カップ・オブ・エースの成功率が上がっている

気がする……侑哉のおかげかな？

「さあ、いくわよ！現れて！夢と希望のサーキット！召喚条件はトリックスターモンスター2体！私は2体のマンジュシカをリンクマーカーにセット！サーキットコンバイン！リンク召喚！来て！《トリックスター・ホーリーエンジェル》！」

トリックスター・ホーリーエンジェル リンク2 (ATK2000)
リンクマーカー左下／右下

「ホーリーエンジェル、与えたダメージの分だけ攻撃力が強化される、あなたのエースモンスターですね」

「…有名になりすぎるのも考えものね…続けるわ、私は手札から魔法カード、《死者蘇生》を発動！このカードの効果により、墓地からマンジュシカを特殊召喚する！戻って来て！マンジュシカ！」

トリックスター・マンジュシカ 守備表示 (DEF1200)

「そして、ホーリーエンジェルの効果発動！このカードのリンク先にトリックスターモンスターが召喚、特殊召喚される度に相手に200ダメージを与える！さらに、ライトステージの効果で追加の200ダメージよ！」

スペクター LP4000↓3600

(あれ？今、あの樹のモンスターが揺れた？)

ホーリーエンジェルとライトステージの効果でダメージを与えた時にスペクターの場のモンスターが揺れたように見えた。

「…ホーリーエンジェルの効果！トリックスターモンスターの効果によつてダメージを与えた時、与えたダメージ分だけ攻撃力をアップする！ホーリーブレッシング！」

トリックスター・ホーリーエンジェル (ATK2000↓2200)

「いくわよ！バトル！まずはリリベルでダイレクトアタック！」

スペクター LP3600↓2800

「フフ、この瞬間、《聖天樹の幼精》の効果を発動！ダメージを受けた時、1ターンに1度このカードのリンク先に聖蔓へサンバイン＜リンクモンスター1体をEXデッキから特殊召喚！現れよ！リンク1！聖蔓の守護者へサンバイン・ガードナー！」

聖蔓の守護者 リンク1 (ATK600) リンクマーカール上

「そして、受けたダメージ分だけライフを回復します」

スペクター LP2800↓3600

「だけど、ライトステージの効果は受けてもらうわ!」

スペクター LP3600↓3400

「あなたのデュエルはまさに絵本の通りです…まあ、所々にPhantomの影響がありますがね」

「絵本…?」

「知ってますよ、あなたのネーミングの由来…絵本の主人公ですよね? タイトルはあなたと同じ『ブルーエンジェル』」

「だとしたら何なの?」

「というか、何で私のネーミングの由来を知ってるの? ネーミングの由来は侑哉には話したけど他の人には話したことないのに。」

「ブルーエンジェル、青い天使…私も読みましたが実にいい本です」

「そう言いながら、スペクターは絵本の内容について話し始めた。」

『エンジェルとして生まれながら冷たい心しか持っていない主人公。そんな性格だからいつもひとりぼっち』

『自分では孤独が好きと強がっているがひとりになると寂しさのあまり泣いてばかり…その涙はなぜか紺碧の海のように深く青い』

「まるで財前葵そのものじゃないですか」

「この人…私の正体まで…もしかして侑哉のことも知ってるの?」

『しかし、ある日主人公が悪に襲われた時、仲間のエンジェルに助けられたことから徐々に優しさに目覚めていく』

『目の前に現れる悪を倒すたびに仲間のエンジェルも増えていく』

『そうやって戦うたびに主人公は優しさを手に入れていく』

『だがなぜか悪を倒す時、青い涙を流す。やがて主人公はブルーエンジェルと呼ばれるようになった』

「あなたはそんな主人公に自分を重ねた、周りに溶け込めずいつもひとりぼっちで泣いていた財前葵は青い涙を流すヒロインになろうと思った…そしてそれをリンクヴレインズで実現したかった…そうですよね?」

「他人の過去を暴くのがそんなに楽しい？」

「ええ、ゾクゾクします…なぜなんでしょう」

「かわいそうな人、あなたも絵本と同じね…絵本に出てくる悪と」

「私が？」

「だから絵本と同じように…ううん、違うわね、私のやり方であなたを倒す…このブルーエンジェルが！」

「絵本と同じようではなく、自分のやり方で私を倒すというのですか…フフ、面白い…では見せてもらおうとしましょう、あなたのやり方とやらを…」

「続けるわ！まずは、リリーベルの効果で、墓地のマンジュシカを手札に加える！聖天樹の幼精の効果は1ターンに1度だけ、回復した数値以上のダメージを受けてもらうわ！ホーリーエンジェルで聖蔓の守護者に攻撃！」

「聖蔓の守護者の効果、バトルでのダメージをこのカードにリンクしている聖天樹のリンクマーク1つにつき、800ポイント下げます」

「回復の次はダメージの軽減?!」

「これで1600のダメージが800ポイントになりました…そして、聖蔓の守護者が破壊されたことによりバトルは終了となります」
「ライトステージの効果を忘れてるわよ！ライトステージの効果により、あなたに追加の200ダメージ！」

スペクター LP3400↓2400

まさか、回復効果に加えて、ダメージ軽減の効果まであるなんて…
だけど、これでスペクターのデッキの特徴がわかったわね。

後ろに控えているサンアバロンと、それが生み出すサンバインでダメージを最小限に抑える。

しかもサンアバロンは攻撃対象にならない…守りに徹したデッキ。
でも、思ったよりダメージは通っている…花恋さんと特訓した時はほとんどダメージが通らなかつたから、それに比べれば状況は良い方ね。

「私はマンジュシカを特殊召喚して、リリーベルを手札に戻す」

トリックスター・マンジュシカ 守備表示 (DEF1200)
ブルーエンジェル手札4↓3↓4

「そして、カードを1枚伏せてターンエンド！」

スペクター LP2400

手札3

場 EXモンスターゾーン 聖天樹の幼精 リンク1 (ATK0)

リンクマークー下

メインモンスターゾーンなし

伏せなし

Pゾーンなし

ブルーエンジェル LP4000

手札3 (内2枚、《トリックスター・キャンディナ》、《トリックスター・リリーベル》)

場 EXモンスターゾーン トリックスター・ホーリーエンジェル

リンク2 (ATK2200↓2000) リンクマークー左下/右下

メインモンスターゾーン トリックスター・マンジュシカ レベル

3 守備表示 (DEF1200) ×2

伏せ1

Pゾーン ライトなし

レフト EMギタートル (スケール6)

フィールド魔法 トリックスター・ライトステージ

／／／／／／／／／／／／／／／／

「へえ、やってるやってる…今はスペクターとブルーエンジェルのデュエルかあ…原作通りにいけばブルーエンジェルの敗北なんだろうけど…」

そう言っつて、1人の少女はブルーエンジェル達へと視線を移す。

「だけど、侑哉の影響かはわからないけど、デッキの内容も変わってるし、ブルーエンジェルが勝つかもね」

そう言つて、少女はブルーエンジェルを睨み付ける。

「…ところで、肝心の侑哉はまだ来ないのかな…侑哉の性格だからこの状況を見逃すとは思えないんだけど…」

そう呟いて、少女は自らの愛しい人の姿を思い浮かべる。

「はあ…♪侑哉、早く君に会いたいよ…いつになったら来るのかな？」
(侑哉の性格からすると、この事態を見逃すわけないし、気長に待つてれば来るかな？それとも…)

「ブルーエンジェルをボロボロにすれば出てくるかな？」

そう言いながら、少女は狂気的笑みを浮かべる。

「…なーんてね、さて、侑哉が来た時の為に準備を進めないかね」

そう呟きながら、少女は準備を進める。

愛しい人との再会を夢に見ながら。

第48話 強い思い

「おわっ！な、何だ？」

「侑哉？急にどうしたの？」

「いや、今、ものすごい悪寒が走ってき…」

「悪寒？風邪でも引いたのかしら…」

「いや、多分それはないと思うけど…」

花恋とそんな会話を交わしながら、先ほどの悪寒について考える。

一体何だったんだ…今の…何かやばいことが起きようとしているのか？

「侑哉って、結構モテるから誰かが侑哉のことで色々妄想してるんじゃない？」

「やめろ！そんなことはできれば考えたくないぞ！」

「ふふっ、冗談よ！…そうそう、このプログラムはこんな感じで良い？」

「…ああ、大丈夫だ、後はこのプログラムを複製してっ…よし、これで完成だ！」

花恋が作ったプログラムを複製し、ついにプログラムが完成した。

…これで何とかかなりそうだな…さて、後はリンクヴレイنزに行つて、ちゃんと効果があるか確かめないと。

「リンクヴレイنزに行くつもり？」

「うん、実際にちゃんと効果があるか確かめないといけないからな」

ちゃんと効果があるか確かめないと、いざというときに使えなくなっちゃうからな。

それに今は、一刻を争う事態だ…リスクは少ない方が良い。

「…わかったわ、だけど1つだけ約束して…」

「ああ…それで約束してほしいことって？」

「デュエルが避けられない時以外では絶対にデュエルはしないこと…この約束を守ってほしいの」

花恋は真剣な眼差しで、そう口にする。

レイの話によると、俺のダメージはまだ完全に快復してはいない

らしいし、多分、花恋もそのことについて心配しているんだろう。けど、リンクヴレインズに行ったら、デュエルが避けられない時が来るかもしれない…だから、花恋はこの約束を守ってほしいと言っているんだ。

俺の負担が最小限に済むように。

「…ああ、わかったよ…デュエルが避けられない時以外は絶対にデュエルはしない、約束する…」

「…ありがとう、それじゃあ気をつけてね！」

俺の言葉に花恋は安心したのか、笑みを浮かべながらそう口にする。

「ああ…行ってくる…デッキ、セット！イントウザヴレインズ！」

そうして、俺はリンクヴレインズへと向かった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ふう、大体この辺で良いか…」

リンクヴレインズへ来た後、近くの建物に寄り、そう呟く。

目の前にはハノイの塔に吸い込まれそうになっている建物があった。

「さて、試してみるか…よつとー！」

目の前の建物にカード状のプログラムを投げつける。

すると、その建物は徐々に元の形へと再生した。

「よし、成功だ！これなら仮にハノイの塔に吸い込まれそうになっても、吸い込まれずに済む」

俺の考えたプログラムは、アバターやリンクヴレインズ内の建物を再構築するプログラムだった。

アバターや建物が吸い込まれる時に、量子化しながら消えていくのを見て、量子化する速度よりも早い速度でアバターや建物を再構築し続ければ、ハノイの塔に吸い込まれずに済むんじゃないかと考えて作ったプログラムだったがうまく行って良かった。

…それにしても、リンクアクセスの汎用性の高さには驚きだな。

ここ数日、リンクヴレインズに行けない代わりにリンクアクセスの力がどこまで及ぶのか試してみた甲斐があったな。

まさか、電子機器はもちろん、色んなプログラムを組み合わせて、別のプログラムを作ること可能だとはな。

「…ただ、やっぱり負担が大きいな…：あんまり多用しすぎないように気をつけないとな…」

「やっと思つけた…♪」

俺がリンクアクセスの力について分析していると、突如として、後ろから声が響き、思わず身構える。

すると、そこには丈の短い黒色のドレスを身に纏っている長い紫色の髪に宝石のような紅い瞳を持つ少女の姿が目に入った。

「お前は…？」

「今から君を特別な場所に連れて行ってあげる♪そこでゆっくりお話ししよ？」

「どういうことだ？…うわっ！何だ？」

俺が聞き返すと同時に少女の周りに禍々しいオーラが現れ、気づけば見知らぬ場所に移動していた。

そこは何もない空間で、俺と少女以外には誰も居ない…さらには1つも、建物のようなものも存在していなかった。

「殺風景でごめんね、急いで準備したから何もないんだあ…：本当はもつと色々と用意したかったんだけど」

そう言つて、少女は少し残念そうな表情を浮かべる。

何かよくわからない状況だけど、まずは情報を集めないとな。

「…それより、ここはどこだ？早いところリンクヴレインズに戻らなくちゃいけないんだけど…」

「ここは、私の精霊の力で作られた空間…：外部からは一切干渉できない空間だから、助けを呼ぶこともできないよ」

「精霊の力で作られた空間か…：何で俺をこんな空間に閉じ込めたんだ？」

「さっきも言ったでしょ？君とゆっくり話しがしたいだけ♪」

そう言つて、少女は無邪気な笑みを浮かべる。

普通に見れば、可愛い笑顔だが、この少女からは何か底知れないものを感じて、苦笑いを浮かべてしまう。

「そういえば、まだ名前言ってなかったね！私はダークナイトプリンセス…よろしくね！」

「ダークナイトプリンセスか…俺は」

「Phantomでしょ？知ってる知ってる！」

「俺も有名になったもんだね…それで、ダークナイトプリンセス…そろそろリンクヴレインズに戻って良いか？今は、一刻を争う事態なんだ」

今、リンクヴレインズでは葵達がハノイの塔を止めるために戦っている…せっかく、プログラムが完成したんだ、いつまでもここに居るわけにはいかない。

「…ダメ！絶対に行かせない！ようやく会えたのにこんなすぐにお別れなんて嫌！」

俺がリンクヴレインズに戻ろうとしていると、ダークナイトプリンセスは凄まじい形相でそう口にする。

「…私ね、よくお話しに出てくるお姫様に憧れてるの…このネーミングだってそれが理由だし…いつか、私のことを王子様が迎えに来て、幸せに暮らす…それが私の夢」

そう言つて、目の前の少女は俺へと歩み寄る。

「…Phantom、あなたに私の王子様になってほしいの…他の誰かじゃ嫌…あなたじゃなきゃ嫌なの」

そう言つて、ダークナイトプリンセスは俺のじつと目を見つめる。

「…悪いけど、それはできない…俺のお姫様はただ1人だ…」

そう言つて、俺は自分の想いを伝える。

俺の大切な人は財前葵、ただ1人だ。

もちろん、他の皆も大切だけど、それは仲間としてであったり、家族として大切とかそんな感じだ。

…俺はこの少女のことを知らない、いや、もしかしたら現実で会ったことがあるのかもしれない…だけど、この想いは譲れない。

「…そんなにブルーエンジェルが大事なんだ…」

「…！どうしてそれを知ってる？」

「アハハ、やっぱりそうだったんだ！だったら、こうしない？私とデユ

エルをして勝てたらこの空間からすぐに出してあげる♪その代わり、あなたが負けたら…」

「負けたら…?」

「私の王子様になってね♪本当はこんな強引な手段は使いたくないんだけど、こうしないと君を私のものにできないから…」

笑みを浮かべながら、目の前の少女はそう口にする。

それを見て、先ほどまでとは比べものにならない、妙なプレッシャーを感じてしまう。

この人…所謂ヤンデレという部類の人なのか？

なんというか…随分前にもこんな感じの人と会ったことがあるよ
うな気がするな。

まあ、今はそんなことよりここから先の行動について考えないとな
…正直、デュエルに勝てば万事解決なんだけど、俺の体へのダメージ
を考えるとそれは得策じゃないな。

覇王の力を使って、この空間から脱出することもできるけど、彼女
に俺もカードの精霊の力を使えることがバレてしまう…そうなた
ら後々まずいことになりかねない。

「どうしたの?もしかして私に勝つ自信がないとか?でも、無駄だよ
…ここから脱出するにはデュエルを受けるしかないんだから…そし
て、私がデュエルに勝てば君を私のものにできる…♪はあ…♪最高
!」

そう言っつて、ダークナイトプリンセスは光悦の笑みを浮かべる。

どうやら、彼女の中では俺が負けることになっているらしい。

「…仕方がないか、そのデュエル、受けて立つよ!色々聞きたいことも
あるしね」

「ウフフ…そうこなくっちゃね…私はこのデュエルに勝利して、君を
私のものにしてみせるから」

「そうはさせないさ…さあ、いくよー!」

「デュエル!!」

そうして、俺はダークナイトプリンセスとのデュエルを開始した。



「私のターン、ドロー！」

スペクター LP2400

手札3↓4

場 EXモンスターゾーン 聖天樹の幼精 リンク1 (ATK0)

リンクマーカー下

メインモンスターゾーンなし

伏せなし

Pゾーンなし

ブルーエンジェル LP4000

手札3 (内2枚、《トリックスター・キャンディナ》、《トリックスター・リリーベル》)

場 EXモンスターゾーン トリックスター・ホーリーエンジェル
リンク2 (ATK2000) リンクマーカー左下/右下

メインモンスターゾーン トリックスター・マンジュシカ レベル

3 守備表示 (DEF1200) ×2

伏せ1

Pゾーン ライトなし

レフト EMギタートル (スケール6)

フィールド魔法 トリックスター・ライトステージ

「この瞬間！2体のマンジュシカの効果発動！あなたに400ポイントのダメージを与える！」

スペクター LP2400↓2000

「私がダメージを受けたことにより、聖天樹の幼精の効果！このカードのリンク先に『聖蔓の癒し手』《サンバイン・ヒーラー》を特殊召喚します」

聖蔓の癒し手 リンク1 (ATK600) リンクマーカー上

「そして、受けたダメージ分だけライフを回復します」

スペクター LP2000↓2400

「だけどライトステージの効果は受けてもらうわ!」

スペクター LP2400↓2000

「さらに、聖蔓の癒し手の効果発動、このカードのリンク先のサンアバロンのリンクメーカーの1つにつき、ライフを300ポイント回復します」

スペクター LP2000↓2300

「…ダメージを与えたことでホーリーエンジェルの効果発動!ホーリーブレッツシング!」

トリックスター・ホーリーエンジェル(ATK2000↓2400)

「驚きました…まさか、あなたがここまでやるとは思っていませんでした…これもPhantomのおかげというわけですか」

「だったら何だつて言うの?」

「Phantomは不思議な人間ですね、多くの人々の間をペンデュラムのように行き交い、その人々に大きな影響を与えている」

そう言つて、スペクターは侑哉に抱いている印象について語り始めた。

「あなたや、プレイヤーカー…そして、リボルバー様でさえ彼の影響を受けている…もちろん、この私も例外ではありませんが…」

「何が言いたいのか?」

「なに、私は心配しているんですよ、彼はヒーローすぎる…自分よりも他人を気につけ、敵であるはずの人にまで手を差し伸べる…そのせいで自分自身が傷つくことを厭わない」

「それは…」

「…あなたを電腦ウイルスから救った時もそうです、あなたを救う為に自分から電腦ウイルスに感染した…あなたは何も感じないのですか?あなたを救ったヒーローはあなたを助けるために傷ついた…果たして、これでPhantomの支えになれていると言えるんですか?」

そう言つて、スペクターは意地汚い笑みを浮かべる。

確かに、スペクターの言っていることは正しい…私はいつも侑哉に

助けられてばかりで、自分でも侑哉の支えになれていないと何度も思った。

「だけど、そのたびに侑哉は私が支えになっていると言ってくれた、私が側に居てくれるだけで嬉しいとも言ってくれた。」

「侑哉と過ごす日々は私にとって何よりも大切で、侑哉と同じ時間を過ごすほど、愛しさが溢れて…この幸せな時間がずっと続けば良いなって私は思ってる…だから！」

「確かに、あなたの言う通りかもしれない…でも、だからこそ、今度は私が Phantom を守るって決めたの！だから、私は負けない！あなたを倒して、ハノイの塔も止めてみせる！」

『その通りですよ！葵さん！こんな奴さっさと倒しちゃいましょう！』

「ええ！もちろんよ！」

「なるほど…もうあなたは守られるだけの存在ではないというわけですか…その志、果たせると良いですね…では、続けるとしましょう、現れよ、我らの道を照らす未来回路！私は聖天樹の幼精と聖蔓の癒し手をリンクマーカーにセット！リンク召喚！現れよ、リンク2！聖天樹の精霊《サンアバロン・ドリユアデス》！」

「聖天樹の精霊 リンク2 (ATK0) リンクマーカー左下／右下
「サンアバロンが成長した…！」

「サンアバロンモンスターはこんな風に成長するの？だとしたら後2段階ぐらい進化するかもしれないわね…早いところ決着を着けた方が良いわね。」

「さらに、《サンシード・ゲニウス・ロキ》を召喚！そして、再び現れよ、私達の道を照らす未来回路！召喚条件は植物族通常モンスター1体！私はサンシード・ゲニウス・ロキをリンクマーカーにセット！リンク召喚！現れよ、リンク1！聖蔓の剣士《サンバイン・スラッシュャー》！」

「聖蔓の剣士 リンク1 (ATK800) リンクマーカー下

「このカードの攻撃力はこのカードにリンクしているサンアバロンのリンクマーカー1につき800ポイントアップします、よって、聖

蔓の剣士の攻撃力は1600ポイントアップします」

聖蔓の剣士（ATK800↓2400）

「今までとは違う攻撃的な効果を持つサンバイン……」

「バトルです、聖蔓の剣士でホーリーエンジェルを攻撃……」

「そうはさせないわ！毘発動！《和睦の使者》！このカードの効果で私のモンスターはこのターン、戦闘では破壊されず、戦闘ダメージを受けない！ホーリーエンジェルと聖蔓の剣士の攻撃力は互角……よって、あなたのモンスターだけが破壊される！」

聖蔓の剣士がホーリーエンジェルに斬りかかり、その攻撃が和睦の使者によって防がれ、ホーリーエンジェルが反撃し、聖蔓の剣士が破壊された。

「和睦の使者ですか……ふむ、仕方ありませんね……私はこれでターンエンドです」

スペクター LP2300

手札3

場 EXモンスターゾーン 聖天樹の精霊 リンク2（ATK0）

リンクマーカー左下／右下

メインモンスターゾーンなし

伏せなし

Pゾーンなし

ブルーエンジェル LP4000

手札3（内2枚、《トリックスター・キャンディナ》、《トリックスター・リリベル》）

場 EXモンスターゾーン トリックスター・ホーリーエンジェル

リンク2（ATK2400↓2000）リンクマーカー左下／右下

メインモンスターゾーン トリックスター・マンジュシカ レベル

3 守備表示（DEF1200）×2

伏せなし

Pゾーン ライトなし

レフト EMギタートル (スケール6)

フィールド魔法 トリックスター・ライトステージ

「私のターン、ドロロー！」

ブルーエンジェル手札3↓4

「まずは、空いているPゾーンにスケール3の《EMシールイル》をセット！そして、ギタートルのP効果によりデッキからカードを1枚ドロロー！」

…！これは…まさか、このタイミングで来るなんて…でも、良いタイミングかもしれないわね。

「さあ、いくわよ！私は手札から《トリックスター・キャンディナ》を召喚！そして、キャンディナの効果でデッキから《トリックスター・テンプレーション》を手札に加える！」

ブルーエンジェル手札4↓3↓4

「そして、私は手札から魔法カード、《スマイルワールド》を発動！このカードの効果により、フィールド上の表側表示のモンスターの攻撃力はフィールド上のモンスターの数×100ポイントアップする！」

トリックスター・ホーリーエンジェル (ATK2000↓2500)

トリックスター・キャンディナ (ATK1800↓2300)

トリックスター・マンジュシカ (ATK1600↓2100) ×2

聖天樹の精霊 (ATK0↓500)

「私のモンスターの攻撃力まで上げるとは…一体何を狙っているのですか？」

「今、見せてあげるわ！手札から魔法カード、《トリックスター・テンプレーション》を発動！このカードの効果で元々の攻撃力と異なる攻撃力を持つモンスター1体を手札に戻す！私は聖天樹の精霊を手札に戻すわ！」

「なるほど、攻撃対象にならないサンアバロンの弱点を見つけたというわけですか…ですが、甘い！私は手札の《サンバイン・メイデン》の効果発動！このカードを特殊召喚し、テンプレーションの効果は無効にします！」

フィールドに現れた、サンバイン・メイデンによりテンプティションの効果が無効化される。

「残念でしたね、サンアバロンは未だ健在です」

「それはどうかしら？ まだまだお楽しみはこれからよ！ 《EMシールイール》のP効果！ このカードの効果により、聖天樹の精霊の効果をターン終了時まで無効にする！」

「何?!」

シールイールの効果により、聖天樹の精霊の効果が無力化される。

「これでサンアバロンを倒せる！ 現れて、夢と希望のサーキット！ 召喚条件はトリックスターモンスター2体！ 私はキャンディナとマンジュシカの2体をリンクマーカーにセット！ サーキットコンバイン！ リンク召喚！ 来て！ リンク2！ 《トリックスター・スイートデビル》！

トリックスター・スイートデビル リンク2 (ATK2000) リンクマーカー左/右

「そして、ホーリーエンジェルの効果！ このカードのリンク先にスイートデビルが特殊召喚されたことにより、あなたに200ポイントのダメージを与える！ さらに、ライトステージの効果で追加の200ダメージ！」

スペクター LP2300↓1900

「さらに、ホーリーエンジェルの効果で自身の攻撃力をアップする！ ホーリーブレッシング！」

トリックスター・ホーリーエンジェル (ATK2500↓2700)

「さあ、いくわよ！ バトル！ ホーリーエンジェルで聖天樹の精霊を攻撃！」

ホーリーエンジェルが聖天樹の精霊に攻撃を仕掛け、聖天樹の精霊が破壊され、スペクターのライフを0にした。

スペクター LP1900↓800

／／／／／／／／／／／／／／

「私の勝ちよ！」

「フフ、どうやらそのようですね…リボルバー様、申し訳ございません

…」

そう言つて、スペクターは空に手を伸ばす。

「ブルーエンジェル…あなたに一応礼を言っておきます…最後の攻撃を受けた時、我が母なる聖天樹が笑っているように見えました…あなたは絵本以上にブルーエンジェルでしたよ」

そう言つて、スペクターは柔らかな笑みを浮かべる。

「これもPhantomの影響というのであれば、彼にも礼を言うべきかもしれませんね…フフ、やれやれこんな感傷的になるのは私らしくありませんね」

「スペクター…」

「では、そろそろ行くとしましょうか…」

スペクターは最後にそう言つて、量子となって消えていった。

『スペクターさん…苦手な人ですけど、過去に何かあつてあんな風になつてしまったのかと思うと、少し可哀想な気がしますね…』

「…確かにそうかもしれないわね……うん？花恋さんから連絡が来るみたい、何かあつたのかしら？」

そう呟いて、花恋さんからの連絡に出る。

「花恋さん？何かあつたんですか？」

『葵ちゃん！良かった！ねえ、そこに侑哉は居る？』

「居ませんが……つて、ちよつと待つてください！侑哉をリンクヴレインズに行かせたんですか!？」

『うっ…それに関しては後で説明するから！とりあえず、聞いて！』

「は、はい…」

『リンクヴレインズに侑哉のデュエルディスクの反応が見当たらないの！誰かに拐われたのかもしれない！』

「そんな…！場所はわかりそうですか？」

『時間が掛かるけど、多分、大丈夫だと思おうわ！』

「わかりました！侑哉は私の方でも探してみます！」

『…ううん、それは大丈夫よ！侑哉は私の方で探しておくから、葵ちゃんはハノイの塔を目指して！絶対、侑哉は私が見つけるから！』

そう言つて、花恋さんは慌ただしく通話を終了した。

『葵さん…どうしますか?』

「…侑哉を探しつつ、ハノイの塔を目指しましょう!」

『そうですね、それが良いと思います…おそらく、侑哉さんはこの事態を何とかできる、何かを作りあげたんだと思います、そして、それを私達に届ける為にリンクヴレインズにやって来た…私達に何かを届けるだけならデュエルをする必要もありませんから、花恋さんが侑哉さんをリンクヴレインズに行かせたのも納得がいきます』

「レイの言う通りだとすると、侑哉はどうしてリンクヴレインズに居ないの?」

『花恋さんの言う通りなら、誰かに拐われた可能性があるかもしれませんが…侑哉さんは自分の力を他の人に知られるわけにはいきません…脱出するのが難しい状況なのかもしれません…』

「そんな…! それなら早く助けないと!」

『…とにかく、今はハノイの塔を目指しつつ侑哉さんを探しましょう! もしかしたら、近くに居て、侑哉さんのデュエルディスクの反応だけを消した可能性もありますから』

「そうね…今はそれしかないわよね…」

侑哉…大丈夫よね? 絶対に戻って来るよね…

「侑哉…お願いだから無事でいて…」

私は一抹の不安を抱きながら、ハノイの塔へと走り出した。

第49話 月夜に眠る姫

その少女はごく普通の家庭に生まれ、普通の生活を送っていた。ただ、普通と少し違うのは少女はとても容姿端麗であり、男子の人気者だったことだ。

それが、同性の友人達は気に食わなかったのか、彼女をいじめるようになった。

そして、いじめはどんどんエスカレートしていき、幼かった彼女の心はボロボロだった。

両親を巻き込んではいけないと、相談もできずに一人で苦しんでいた。

しかし、誰も彼女を救おうとはしなかった…そんな、ある日のことだった。

「ねえ、どうかしたの?」

「…別に、何も無いよ」

「じゃあどうして泣いてるの?」

「…!何でも無いってば!」

そう言っつて、少女は逃げ出した。

見知らぬ少年に自分の心を見抜かれてしまったような気がして、とにかくこの場から逃げ出したかった。

少女は走った、ただひたすらに、自分に声を掛けた少年から逃げるために。

「はあ…さすがに着いてきてないよね?」

そう呟いて、少女が振り向くと先ほど声を掛けてくれた少年が息を切らしながら、走ってきていた。

「はあ…はあ…君、足早いね…」

「何でついてきたの?私のはほつといてよ!」

「…確かに、僕は君のこと知らないけど、悲しんでいる人をほつとくならないよ…」

少年はそう言っつて、笑みを浮かべる。

その様子を見て、少女は自分の心が温かくなっていくのを感じた。

「…そうだ、君の名前は？僕はかんなぎ ゆうや…」
「私は…」



(君と出会ってから、私の世界は広がった…君がいたから、今の私はここに居る…侑哉、君にとっては何てことないことでも私はそれに救われた…だから、君以外の人なんて眼中になかった…君さえ居てくれれば何も要らない…だから、君が望まないとしても、私は君を私のものにしてみせる)

「私の先攻、まずは手札から魔法カード、《聖遺物の醒存》を発動！このカードの効果はデッキからカードを5枚見て、その中に《クロラー》、または、《聖遺物》カードがあれば、その内の1枚を手札に加える！そして、加えたカード以外のカードは墓地に送る！」

めくったカード

オルフェゴール・カノーネ

星遺物―『聖槍』

星遺物―『聖杖』

オルフェゴール・プライム

オルフェゴール・デイヴエル

「私は《星遺物―『聖槍』》加えるよ！そして、それ以外のカードは墓地へ送る！」

「星遺物…しかも、聞いたことのない星遺物カードだな…」

それにクロラーというカードも知らないな…まあ、当然といえば当然だけど。

それにしても、あの魔法カードで墓地のカードが増えたな…もしかして、ダークナイトプリンセスのデッキは墓地から起動するタイプのデッキなのか？

「そして、私は《終末の騎士》を召喚！終末の騎士の効果でデッキから閻属性モンスター1体を墓地に送る！私は《オルフェゴール・スケルツオン》を墓地へ送るよ！」

終末の騎士 レベル4 攻撃表示 (ATK1400)

終末の騎士：…やっぱり墓地から起動するタイプのデッキと見て良いかもしれないな…まあ、まだ推測の域を出ないけど。

俺はそんな風に思考しながら、ダークナイトプリンセスの行動を見ることにした。

「そして、墓地の《オルフェゴール・デイヴェル》の効果発動！このカードを除外し、デッキからデイヴェル以外のオルフェゴールモンスターを特殊召喚する！来なさい！《オルフェゴール・カノーネ》！」

オルフェゴール・カノーネ レベル1 チューナー 攻撃表示（ATK500）

「そして、現れなさい！凶演を奏でるサーキット！召喚条件はオルフェゴールモンスターを含む効果モンスター2体！私は《終末の騎士》と《オルフェゴール・カノーネ》をリンクマーカーにセット！サーキットコンバイン！リンク召喚！現れる！リンク2、《オルフェゴール・ガラテア》！」

オルフェゴール・ガラテア リンク2（ATK1800）リンクマーカー 右上／左下

「そして、ガラテアの効果発動！除外されている機械族モンスター1体をデッキに戻すことで、デッキからオルフェゴール魔法、罠カードを1枚セットできる！私はデイヴェルをデッキに戻し、フィールド魔法、《オルフェゴール・バベル》をセットして、そのまま発動！」

フィールドに巨大な塔が現れる、それは名前の通り、バベルの塔のようだった。

：やれやれ、今の所、塔には良い思い出が1つもないんだけどな…さて、それはさておき、このフィールド魔法、何か厄介なカードな気がするな。

バベルと名のつくカードには前にも苦しめられたからな…それに、わざわざサーチしたつてことは重要なカードの可能性が高そうだ。

「まだまだいくよ♪墓地のカノーネの効果発動！このカードを除外し、手札からカノーネ以外のオルフェゴールモンスターを特殊召喚できる！私は手札の《オルフェゴール・デイヴェル》を特殊召喚！」

オルフェゴール・デイヴェル レベル4 攻撃表示（ATK170）

0)

「再び現れなさい！凶演を奏でるサーキット！アローヘッド確認、召喚条件はオルフェゴールモンスターを含む効果モンスター2体以上！私はディヴェルとガラテアの2体をリンクマーカーにセット！サーキットコンバイン！リンク召喚！現れよ、リンク3！《オルフェゴール・ロンギルス》！」

オルフェゴール・ロンギルス リンク3 (ATK2500) リンクマーカー左上/上/右下

「オルフェゴール・ロンギルス：何か、どこかで見たことがあるような……そうだ！ニンギルスに似てるんだ！」

それに、さっきのガラテアはイヴに似てたしな：なら、オルフェゴールデッキは聖杯デッキのカードが基になってるのか。

うん？待てよ：聖杯が基になってるならアウラムも居なきやおかしいよな：もしかして、ニンギルスが闇落ちして、アウラムと敵対したとかか？

『ニンギルスか：その名は捨てた：今の俺はロンギルスだ』

「……なるほどな、これが君の精霊ってことか……」

『そういうことだ……そして、お前がマスターの思い人というわけか……なるほど、確かにお前からは強い光の力を感じる』

そう言つて、ロンギルスは俺を品定めするかのようには観察する。

「きゃ♪もうロンギルスったら、思い人だなんて恥ずかしいよ♪」

ダークナイトプリンスはロンギルスの言葉に照れたようにそう口にする。

……何か色々と変わった人だな。

「……えっと、1つ聞かせてくれないか？」

「良いよ♪何でも聞いて♪」

「君は俺のことを知ってるのか？正直言つて俺は君のことをまるで知らないんだけど」

「……まあ、それはしょうがないよ、今の私はアバターの姿だしね……ただ、1つだけ言えるのは私はあなたのことを誰よりも知ってるよ♪……もちろん財前葵よりね」

この人…葬のことも知ってるのか…一体、何者なんだ。

「それじゃあ、続けるね…さらに、墓地の《星遺物―『聖杖』》の効果！このカードを除外し、除外されているオルフェゴールモンスター1体を特殊召喚できる！私は除外されているカノーネを特殊召喚！そして、三度現れなさい、凶演を奏でるサーキット！召喚条件はオルフェゴールモンスターを含む、効果モンスター2体以上！私はロンギルスとカノーネをリンクマークにセット！サーキットコンバイン！リンク召喚！現れよ、リンク4！《オルフェゴール・オーケストリオン》！」

オルフェゴール・オーケストリオン リンク4(ATK3000)リンクマーク上／右上／左下／下

「いきなりリンク4か…しかも、手札をほとんど消費してないし…これがオルフェゴールか…良いね、ワクワクしてきたよ！」

「はふう…♪そんな楽しそうな顔されたら嬉しくなっちゃうなあ…もっと私に興味を持って、私だけを見て…そして、私を…」

「えつと、ターンエンドか？それなら俺のターンを始めちゃうけど…」
「スルーは酷いと思うなあ…まあ、良いけど…私はさらに墓地のスケルツオンを除外し、墓地のロンギルスを特殊召喚！そして、カードを1枚伏せて、ターンエンドだよ」

ダークナイトプリンセス LP4000

手札2(内1枚、《星遺物―『聖槍』》)

場 EXモンスターゾーン オルフェゴール・オーケストリオン

リンク4(ATK3000)リンクマーク上／右上／左下／下

メインモンスターゾーン オルフェゴール・ロンギルスリンク3(ATK2500)リンクマーク左上／上／右下

伏せ1

Pゾーンなし

フィールド魔法 オルフェゴール・バベル

Phantom LP4000

手札5

場なし

伏せなし

Pゾーンなし

「俺のターン、ドロー！俺は手札からレベル2以下のモンスターを墓地に送り、《ビットルーパー》を特殊召喚！」

ビットルーパー レベル4 守備表示（DEF2000）

「そして、俺は《ROMクラウディア》を召喚！そして、ROMクラウディアの効果で墓地のサイバース族モンスターを手札に加えることができる！俺は《レイテンシ》を手札に加える！そして、レイテンシは墓地から手札に加わった時、特殊召喚できる！来い！レイテンシ！」

ROMクラウディア レベル4 攻撃表示（ATK1800）

レイテンシ レベル1 守備表示（DEF0）

「そして、現れる！希望を照らすサーキット！召喚条件はサイバース族モンスター2体！俺はROMクラウディアとレイテンシをリンクマーカーにセット！サーキットコンバイン！リンク召喚！現れる、リンク2！《フレイム・アドミニスター》！」

フレイム・アドミニスター リンク2（ATK1200）リンクマーカー左／右下

「そして、レイテンシの効果！自身の効果で特殊召喚したこのカードがリンク素材として墓地へ送られた場合、デッキからカードを1枚ドロウする！」

Phantom手札3↓4

「そして、再び現れる！希望を照らすサーキット！召喚条件はサイバース族モンスター2体以上！俺はフレイム・アドミニスターとビットルーパーをリンクマーカーにセット！サーキットコンバイン！リンク召喚！現れる、リンク3！エンコード・トーカー！」

エンコード・トーカー リンク3（ATK2300）リンクマーカー上／下／右下

「なるほど…サイバースも使ってるんだ…さあて、どうしようかな」
「何もないなら続けるよ！俺は手札から魔法カード、《カップ・オブ・エース》を発動！」

「来た！Phantomの得意戦法だ！」

「…得意戦法つて、まあ、良いか…それじゃあコイントスを行う…結果は…よし、表！よつてデッキからカードを2枚ドロロー！」

Phantom手札4↓3↓5

「いつも思うけど、すごい確率だよね…普通、こんなに成功しないでしょ…まあ、それでこそPhantomつて感じもするけど♪」

「まあ、こういうカードを使いこなしてこそそのエンタメデュエリストつてもんだからね！さあ、いくよ！俺はスケール1の《オッドアイズ・ペルソナ・ドラゴン》とスケール8の《オッドアイズ・アークペンデュラム・ドラゴン》でPスケールをセッティング！」

Phantom手札5↓3

「揺れる、運命の振り子！迫り来る時を刻み、未来と過去を行き交え！ペンデュラム召喚！来い！俺のモンスター達！手札から、《EMペンデュラム・マジシャン》、そして、《オッドアイズ・ファントム・ドラゴン》!!」

EMペンデュラム・マジシャン レベル4 攻撃表示（ATK1500）

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン レベル7 攻撃表示（ATK2500）

「そして、ペンデュラム・マジシャンの効果発動！ペンデュラム・マジシャンとペルソナ・ドラゴンを破壊して、デッキから《EMドラミングコング》と《EMオッドアイズ・ユニコーン》を手札に加える！」

Phantom手札3↓1↓3

「そして、自分フィールドのオッドアイズモンスターが破壊されたことで、アークペンデュラム・ドラゴンのP効果発動！手札、デッキ、墓地からオッドアイズモンスターを特殊召喚できる！俺はデッキから《EMオッドアイズ・ディゾルヴァー》を特殊召喚するよ！」

EMオッドアイズ・ディゾルヴァー レベル8 攻撃表示（ATK

2000)

「オッドアイズ・デイゾルヴァーの効果発動！オッドアイズ・デイゾルヴァーとPゾーンのアークペンデュラム・ドラゴンを融合する！現れろ！疾風纏いし迅雷の竜！《オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン》！」

オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン レベル7 攻撃表示（ATK2500）

「ボルテックス・ドラゴンの効果発動！このカードが特殊召喚に成功した時、相手フィールド上の攻撃表示モンスター1体を手札に戻す！俺はオルフェゴール・オーケストリオンを手札に戻す！」

ボルテックス・ドラゴンの効果により、オーケストリオンがEXデッキに戻っていく。

とりあえず、1体は処理したけど、効果がわからない以上警戒はしておかないとな。

「そして、俺はスケール2の《EMドラミングゴング》とスケール8の《オッドアイズ・ユニコーン》で再びPスケールをセットする！」

「それじゃあ、バトルフェイズに入る前に、畏発動！《威嚇する咆哮》！このカードの効果で君はこのターン攻撃宣言を行えないよ！」

「だったら…」

ボルテックス・ドラゴンの効果を発動…そう言おうとして、ふと動きを止める。

本当にこの効果を発動して良いのか？何か誘導されている気がする…

「…いや、やっぱり何もない…俺は手札から魔法カード、《ペンデュラム・ホルト》を発動！EXデッキに表側表示でPモンスターが3種類以上存在している時、デッキからカードを2枚ドロウできる！ただし、このカードの発動後、自分はターン終了時までデッキからカードを加えることができない」

Phantom手札1→0→2

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

ダークナイトプリンセス LP4000

手札2 (内1枚、《聖遺物―『聖槍』》)

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン オルフエゴール・ロンギルス リンク3

(ATK2500) リンクマーカー左上/上/右下

伏せなし

Pゾーンなし

フィールド魔法 オルフエゴール・バベル

Phantom LP4000

手札1

場 EXモンスターゾーン エンコード・トーカー リンク3 (A

TK2300) リンクマーカー上/下/右下

メインモンスターゾーン オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン

レベル7 攻撃表示 (ATK2500)

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン レベル7 攻撃表示 (A

K2500)

伏せ1

Pゾーン EMドラミングゴング (スケール2)

EMオッドアイズ・ユニコーン (スケール8)

(へえ、やっぱり侑哉はすごいなあ…オルフエゴールデッキについては知識がないはずなのに、直感的に感じとったのかな?)

「…やっぱり最高♪Phantom…もつともつと楽しもうね♪」

UAI0万突破記念　　ある世界の物語

これはあり得たかもしれない可能性の物語、果たして、その先に待つのは希望か絶望か…それは誰にもわからない。

では、見届けよう、この可能性の物語を。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「葵ちゃん…入るわよ」

「…入って来ないでください」

「…わかったわ」

そう言って、花恋さんの声は扉から消えていった。

私が今いるのは侑哉の部屋…私の大切な人で、大好きな人の部屋。ただ、目の前に居る侑哉はベッドで寝たまま、目を覚まさない。

どうして侑哉がこんな状態になっているのかというと、ハノイの塔事件の影響だ。

私はプレイヤー達とハノイの塔を止めるために戦った。

侑哉はダメージが快復していなかったから、私や花恋さん、そして、レイの意見でリンクヴレインズに行くのを禁止した。

…だけど、私がスペクターにデュエルで負けたせいで侑哉は私を助ける為にリンクヴレインズへと来てしまった。

そして、私の代わりにスペクターとデュエルをすることになり、結果として侑哉はスペクターに勝利した…でも、そのデュエルのダメージが大きく、現実の侑哉の体にまで影響を及ぼし、侑哉は意識不明の状態になってしまった。

…あの時、私がスペクターに勝っていれば！侑哉はこんな風にならずに済んだのに！

結局、ハノイの塔はプレイヤーによって止められ、ネットワールド世界は救われた…でも、そんなことはどうでも良い。

「…侑哉、あれからもう1ヶ月経ったんだよ…もうすぐ夏休みに入るし、侑哉と色々なところに行きたいな…だから、目を覚まして…」

そう言っても、侑哉は何も返してはくれない…わかつてはいるけど、希望を捨てられない。

いつもみたいなのに、まるで何事もなかったかのように目を覚まして、私に笑いかけてほしい。

心配かけて悪かったって、私を抱きしめて、優しくキスをしてほしい。

「侑哉…侑哉…どうしてこうなつちやつたんだろ…」

気づけば、私の頬には大粒の涙が伝っていた。

感情が抑えきれなくて、涙がとめどなく溢れてくる。

「侑哉…あなたの声が聞きたいよ…笑顔が見たい、料理と一緒に作りたいし、デートだつてしたいよ…まだまだやりたいことがいっぱいあるのに」

もし、あの時、私がスペクターに勝てていたら…そうすれば侑哉は…

もし、あの時に戻れたなら…そんなあり得ない考えが浮かんでくる。

だけど、もし、私に侑哉の持つ霸王の力があればカードの力を使って過去に戻るかもしれない。

そう何度も、もしもの可能性について考えては現実に引き戻される。

結局、どれだけもしもの可能性について考えてもそれはifの世界ではない。

だから、侑哉が目を覚ますことはない、それが現実…

「ううん、違う…まだ、希望を失っちゃダメよね…侑哉は絶対に目を覚ましてくれる」

私はそう自分に言い聞かせるように呟き、侑哉の様子をもう一度見直すことにした。

自分の中の恐怖に抗うように。

／／／／／／／／／／／／／／／／

『葵さん、ずっとあの調子なんですか？』

「そうなの、私が部屋に入ることすら許してくれなかったし」

『そうですよね…私だつて侑哉さんが目を覚まさなくてすごく悲しいですから…葵さんは尚更ですよね』

レイちゃんはそう言つて、悲しそうな表情を浮かべる。

それも当然だ…だつて、今までだつて侑哉は意識を失うことがあつた、でも、短期間で目を覚ますことが多くて私達は心のどこかで侑哉ならすぐに目を覚ますと思つていたのかもしれない。

だけど、今は違う…侑哉はあれから1ヶ月も目を覚ましていない。

それに…

「レイちゃん、また少し体が薄くなつてきたわね」

『はい…多分、侑哉さんが長い間目を覚ましていない影響だと思ひます…もうすぐ私の姿が皆さんから見えなくなるかもしれません』

「そう…それなら尚更、早くあれを作りあげないと…レイちゃん、頼んだものは用意できた?」

『はい、それは用意できました…でもこれでうまくいくんでしょうか?』

「やつてみる価値はあるわ…まあ、確証は持てないけどね」

そう言つて、私はレイちゃんから例の物を受けとる。

…これで侑哉を救えるかもしれない。

だけど、これはあくまで推測に過ぎない…失敗するかもしれない。

それでもやるしかない…侑哉と葵ちゃん…それにレイちゃんを助ける為に。

「それじゃあさつそく取り掛かりましょう!」

そう言つて、私は作業に取り掛かることにした。

希望への道標を示す為に。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「う…ん…あれ?もしかして寝ていたの…」

目を覚ますと、辺りが夕日に沈んでいた。

どうやら、侑哉の様子を見ている内に寝ちやっただみたいね。

「葵ちゃん!ちよつと来て!」

私がそんなふうを考えていると、扉の外から花恋さんの声が響いた。

「何ですか?」

「…良いから、着いてきて!そこで詳しく説明するから」

「え？ちよつと待つてください！」

そうして、私は花恋さんに言われるがまま、部屋から飛び出した。

「一体何ですか？花恋さん…」

「これを見て！」

そう言つて、花恋さんは部屋の中央にある装置を私に見せる。

その装置は、以前、花恋さんが作った異世界に行くことができる装置に似ていた。

「これは…？」

「…タイムリープマシンつてところかしら、これを使えば、侑哉が意識を失う前の時間に跳べるわ」

「え…？それつて本当なんですか!？」

「本当よ……これを作るのは骨が折れたわ、前に作った異世界に行くことができない装置を過去へと跳べるように改良して、それに必要なエネルギーをレイちゃんに集めてもらったの」

「レイに…」

そう呟いて、辺りを見渡すと今にも消えそうなほど姿が見えないレイが目に入った。

「レイ…どうしたの？そんな姿になつて…」

『私はもうすぐ皆さんの目から姿が見えなくなつてしまいます、元々私が実体化できていたのは侑哉さんのおかげですから…』

「そんな…」

「…この装置を作つた後、問題は過去に跳ぶ為のエネルギーをどうするか、それが問題だったの……そして、侑哉の精霊の力を借りることにしたの……だけど、私達じゃ精霊の力を使うことはできない、だからレイに侑哉の精霊の力を集めてもらったの」

「そうだったんですか…」

花恋さんの話を聞いて、そう返すことしかできなかった。

私が失意の底に沈んでいる時に、二人は諦めずに侑哉を救う方法について考えていた……それなのに私は…

「葵ちゃん、これには私達の思いが込められているわ……これは謂わば

私達の希望…そして、この希望を葵ちゃんに託そうと思っっているわ」
「私に…」

「そう…これを使って、この結末を変えるの…これは他の誰でもない葵ちゃんにしかできないことよ」

「私にしかできないこと…」

…これを使えば侑哉を助けられるかもしれない。

侑哉が意識を失う前に戻れる装置…それは先ほど私が想像していた、もしもを実現できるもの。

だったら、私の答えは1つ…

「わかりました、やってみます！少しでも可能性があるなら私はそれに賭けたい！」

「そうこなくっちゃね！それじゃあ葵ちゃん、この装置を着けて」

そう言つて、花恋さんが私に装置を手渡す。

そして、私はその装置を頭に装着する。

「頑張つてね、葵ちゃん…侑哉のことよろしくね」

「任せてください！私は絶対に侑哉を助けてみせます！」

私の言葉を聞いた花恋さんとレイは笑みを浮かべる。

この装置には二人の…ううん、二人と侑哉の精霊達の思いが込められている。

その思いに応えるためにも、私は過去へと跳ぶ。

「それじゃあ、装置を起動させるわ！」

「はい…」

花恋さんが装置を起動させると、視界が揺れた。

そして、徐々に意識が朦朧としてくる。

その感覚はリンクヴレインズにログインする時に似ている気がした。

待つてね、侑哉…あなたを助けて、私はこの結末を変えてみせる！

そう決意したのを最後に私は意識を手放した。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「…はっ…ハ、ハハハ…」

意識が覚醒し、周りを見渡す。

「ここは、侑哉の部屋…そうだ！侑哉は!?」

ベッドの方を見ると侑哉の姿はなかった。

…これは成功したの？

そんなふうを考えていると、扉の開く音が聞こえてきた。

「待たせてごめんね、葵…飲み物とか用意するのに時間が掛かったちゃってさ」

「侑哉…？本当に侑哉なの？」

「何言ってるんだよ、正真正銘、神薙侑哉だよ…寝ぼけてるのか？まだ眠いなら寝てても——」

「侑哉—」

気づけば私は走り出していた。

そして、そのまま侑哉へと抱きついた。

「ちよっ!?危ないって…どうしたんだよ、急に…」

侑哉の声が聞こえる、侑哉の体温を感じる。

たったそれだけのことなのに嬉しくて涙が溢れてくる。

生きてる…侑哉が生きてる。

もちろん未来でも死んではいないんだけど、今みたいに侑哉が生きていると実感はできなかった。

だから、今のこの瞬間が嬉しくて堪らない。

「良かった…本当に良かった…!」

「…よくわからないけど、安心してくれ…俺はここに居るからさ」

そう言って、侑哉は荷物を持っていない右手で私を抱きしめる。

それが嬉しくて、私はついに泣き出してしまった。

普通なら意味のわからない状況なのに侑哉は私が泣き止むまで、ずっと抱きしめてくれた。

「落ち着いたか？」

「う、うん…ごめんね、急に泣き出したりして…」

「いや、別に気にしてないよ…それで、何かあったのか？さっきの葵の

様子、普通じやなかったし…」

侑哉はそう言つて、私のことをじつと見つめる。

…やっぱり、侑哉には敵わないわね。

「…うん…信じられないような話だけど聞いてくれる?」

「もちろん!当たり前だろ?」

「ありがとう…実はね…」

そうして、私はここに来るまでの経緯を侑哉へと話した。

私がスペクターとのデュエルで負けてしまったこと、そして、侑哉が私を助けるためにリンクヴレインズに来て、スペクターとデュエルをして意識不明の状態になったこと。

そして、その結末を変えるために花恋さんの作ったタイムリープマシンを使つて、ここに来たことを話した。

「…なるほどな、時間軸的には明日、ハノイの塔が起動してリンクヴレインズがパニックになるのか…そして、ハノイの塔を止める為の戦いで、葵はスペクターに負けて、俺がスペクターと戦い、意識を失う…そして、その結末を変えるためにタイムリープしてきたと」

「うん、大体そんな感じ…」

「なるほどな…それにしても、やっぱり花恋はすごいな…タイムリープマシンを作るなんてさ…それにレイと他の精霊達にも感謝しないとな」

「っ!…こんな話し、信じてくれるの?」

「そりゃあもちろん信じるさ…葵がこんな嘘をつくとは思えないしな…それに、花恋ならタイムリープマシンぐらい作れそうだしな」

侑哉はそんな言葉を何てことのないように口にする。

そのことが嬉しくて、心の奥が温かくなっていく。

「お、やっと笑ってくれたな…」

「え…?」

「だって、さつきから全然笑つてなかったからさ…まあ、未来でそういう経験をしたなら仕方ないかもしれないけどな…」

侑哉はそう口にして、少し間を空けてから言葉を続ける。

「でも、今の俺はこうしてピンピンしてるし、何も起きちゃいない…だ

「からさ、笑ってくれよ…俺は葵の笑顔が大好きだからさ」
「そう言つて、侑哉は照れくさそうに笑みを浮かべる。
そんな表情を見るのも久しぶりで、もつと色んな表情を見たくな
る。」

もつと侑哉を感じたくなる。

「ねえ、侑哉…」

「どうしたんだ？葵」

「キスしても良い？」

「直球だな…まあ、それぐらいならお安い御用だよ」

侑哉がそう呟くと同時に、私と侑哉は唇を重ねる。

「だけど、私はそれじゃあ満足できなくて、侑哉を感じていたくて…
私は半ば侑哉を押し倒す形でもつと深くキスをする。」

「侑哉…どうかした、の…」

私が侑哉とキスをしていると、扉が開く音が聞こえてきて、思わず
視線を移す。

そこには、放心状態の花恋さんの姿があつた。

「…あ、うん…えつと邪魔したわね…それじゃあ私は戻るから、後は若
い二人で楽しんでね…本当にごめんね!!」

「そう言つて、花恋さんは足早にその場を後にした。」

「……………」

「……………」

「ごご、ごめんね!!侑哉!!私、嬉しくて、つい…」

「…いや、大丈夫だよ!悪い気はしてないしさ…」

「そう、少し照れくさそうな表情をしながら侑哉は言葉を紡いだ。」

「そ、そう…?それなら良いけど…」

「…そ、そうだ!未来を変えるための作戦を考えよう!」

「そ、それもそうね!作戦を考えないと!」

「そうして、お互いに赤面しながら未来を変える作戦を考えることに
した。」

「オホン…えっと、未来を変える方法としてはまず、葵がスペクターに勝つことが前提だ…それに関しては葵のデッキを編成すればなんとかなると思う…スペクターのデュエルについて知っている範囲で教えてくれないか？」

「わ、わかったわ…」

そうして、私はスペクターのデュエルに関して、知っている範囲で侑哉に話した。

「なるほど…サンアバロンのカードを中心とした防御タイプのデッキか…確かに、葵のデッキとは相性が悪いかもな」

「…うん、結局スペクターのライフを削りきれなくて負けちゃった…」
「…なるほどな、だけど逆をいえばサンアバロンの効果を無力化できれば倒せるな…よし、それじゃあ対スペクター用のデッキを考えよう！」

「うん！スペクターに勝って、侑哉を助けるためにも！」

「ああ！そうだな！」

そうして、私達は私がスペクターとのデュエルで得た情報を基にデッキを編成した。

…これならきつと未来を変えられる、侑哉を助けて最悪の結末を変えてみせる！

私はそう強く思いながら、1日を終えた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

——侑哉を助けられる、そのはずだったのに

「嘘でしょ…」

何で？変えられるはずだったのに…侑哉を助けて、最悪の結末を変えられるはずだったのに。

確かに、少しだけ未来を変えられた。

私はスペクターに勝った…だから、侑哉が意識を失う理由はないはずなのに…

「何で侑哉がまた意識を失ってるの？」

何で？どうして？どうしてこうなっちゃったの？

「…タイムリープマシン…花恋さんに作ってもらわなくちゃ…タイムリープマシンでもう1度侑哉を助けにいかなきや…」

助けなきや…助けなきや…タスケナキヤ…

待っててね、侑哉…花恋さんにタイムリープマシンを作ってもらってまた助けに行くから。

何度失敗したって、何度だって助けに行く…未来を変える時が来るまで、何度だって。

だから、待っててね…私の大好きな人。

第50話 脱出

「侑哉…どこにもいないわね」

『そうですね…さつきから探し回っているのに侑哉さんの姿が全然見当たりません…本当にどこに行っちゃったんでしょうか…』

私とレイはスペクターとのデュエルの後、ハノイの塔を目指しつつ侑哉を探していた。

でも、侑哉の姿はどこにも見当たらなかった。

もしかして、侑哉は私達の知らない場所に連れて行かれちゃったの？

…だとしたら、侑哉を見つける方法は…

「あれ？ブルーエンジェルさんですよね？」

後ろから聞こえてきた声に思わず振り返る。

そこには、Phantomと同じようにフード付きのマントに胸のペンデュラム…さらには、Phantomと同じ色のスカートを履いている女の子の姿があった。

「あ、自己紹介がまだでしたね！私はミズキと言います！よろしくお願ひしますね！」

ミズキ!?ということはこの女の子は葉山さん？

知ってはいたけど本当にPhantomの大ファンなのね…って、今はそれどころじゃないわね。

「ミズキさん…今、リンクヴレインズが危険な状態なのは知っているでしょ？早くログアウトした方が良いわ」

「そうはいきません！私がここに来たのは皆さんの力になりたいからです！何か私にできることはありませんか？」

「そうは言っても…」

正直、頼みたいことは確かにある…侑哉を探すのは私達だけでは難しい、だから、葉山さんに手伝ってもらえば侑哉を見つけられる可能性は高くなる。

だけど、それは彼女を巻き込むことになるし…

「もしかして、私の心配をしてくれてるんですか？それなら、大丈夫で

すよ！私はPhantomさんからデツキ構築について色々と教わりましたからデュエルも簡単には負けません！」

『あお：ブルーエンジェルさん、ここはミズキさんの提案を受け入れましょう、私達だけでマスターを探すのは難しいですし』

私と侑哉の正体がバレないように呼称を変えてレイがそう口にする。

「…わかったわ、それじゃあミズキさん、Phantomを探すのを手伝ってくれない？」

「Phantomさんを探す？Phantomさんに何かあつたんですか？」

「実は…」

そうして、私はここに来るまでの経緯についてミズキさんに説明した。

「Phantomさんが誰かに拐われたかもしれない!?大変じゃないですか！」

「そう：だから、あなたにも協力をお願いしたいの：協力してくれる？」

「もちろんです！私のPhantomさんレーダーにかかればどこにPhantomさんが居ても必ず見つけられますよ！」

「Phantomさんレーダー…？」

「その名の通り、Phantomさんがいる所がわかるんです！あ、一応言っておきますけど、けして、盗聴機とかGPSを使って、場所を探すとか犯罪染みたことは一切やってませんからね！」

「え、ええ…わかったわ」

ミズキさんの突然の発言に困惑しつつそう返す。

え？何なのそれ？聞いたことないわよ！

つまり、侑哉がどこに居ても見つけられるってこと？それって、侑哉をいつでも誘惑できるってこと？

…やっぱり、葉山さんは私の一番の敵かもしれないわね。

というか、むしろ私が欲しいぐらいよ…侑哉を見つけられるレー

ダーなんて。

：今度、花恋さんに作ってもらおうかしら。

私はそんな風に今の事態とはまったく関係ないことを考えながら、ミズキさんの後に続いた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「私のターン、ドロー！」

ダークナイトプリンセス LP4000

手札2↓3 (内1枚、《星遺物―『星槍』》)

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン オルフエゴール・ロンギルス リンク3

(ATK2500) リンクマーク上/上/右下

伏せなし

Pゾーンなし

フィールド魔法 オルフエゴール・バベル

Phantom LP4000

手札1

場 EXモンスターゾーン エンコード・トーカー リンク3 (A

TK2300) リンクマーク上/下/右下

メインモンスターゾーン オッドアイズ・ボルテックス・ドラゴン

レベル7 攻撃表示 (ATK2500)

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン レベル7 攻撃表示 (A

K2500)

伏せ1

Pゾーン EMドラミングコング (スケール2)

EMオッドアイズ・ユニコーン (スケール8)

「ねえ、Phantom…あなたは何の為に戦ってるの？」

「うん？何の為に…それは大切な人達を助けるためだけど…それがどうかしたのか？」

「なるほどね…だけど、それってさPhantom自身を救うことにはならないよね?」

「…何が言いたいんだ?」

ダークナイトプリンセスの言葉に思わずそう聞き返す。

「誰かの為に戦うというのは立派な志だと思うよ、だけど、その分だけ君が傷ついたら意味ないでしょ?しかも、1度救われた人間は君が来れば何とかなる…そんな風に期待しちゃうと思うんだよね」

そう言っただークナイトプリンセスは言葉が続ける。

「そして、君はその期待に応える為に、また傷つく…そうやってボロボロになるまで戦うことになって、最後には君は立ち上がれなくなってしまう…そして、君に救われた人間はその姿を見て励ますどころか、勝手な欲望を押し付けて、君をさらに傷つける…私にはそれが我慢ならないの!」

怒りの形相でダークナイトプリンセスはそう口にする。

それは、本当に俺のことを思いやってくれてるように感じた。

…ちよつと、行き過ぎな気がしないでもないけどこの人は悪い人ではないのか?

いや、まだ決めつけるには早いな。

「だから、今すぐサレンダーしてほしいの…君の為にも」

「…? どういうことだ?」

「気づかないとでも思った? 君は私とデュエルを始めた時からずっと疲れたような顔をしてた…無理をしてリンクヴレインズに来たんでしょ?」

確かに、無理をしてリンクヴレインズには来たのは事実だが、そんなに顔に出ていたのか?

「確かに私は君を私のものにしたけれど、ただでさえボロボロな君をさらに傷つけたいとは思ってないもん…だから、お願い、サレンダーして」

「…悪いけどそれはできないよ…ここでサレンダーしたら俺は君のものにならなくちゃいけない…君は根っからの悪人ではないのかも知れない…だけど、俺にとっては葵の居る所が帰る場所なんだ!」

「…侑哉にそこまで想われてるなんて羨ましいなあ…もしかしたら私がそこに立てていたかもしれないのに…」

「…?何を言ってるんだ?よく聞こえないな…」

何か言っているのはわかるんだけど、詳しい内容まではわからないな。

「…わかった、それが君の答えなら私は君を倒して君のことを手に入るだけ…さあ、デュエルを再開するよ!」

「…ああ、望むところだ!」

「私は墓地のデイヴエルの効果!墓地のこのカードを除外し、デッキからオルフェゴール・スケルツオンを特殊召喚!そして、再び現れなさい!凶演を奏でるサーキット!召喚条件はオルフェゴールモンスターを含む効果モンスター2体以上!私はロンギルスとスケルツオンをリンクマーカーにセット!サーキットコンバイン!リンク召喚!現れよ、リンク4!《オルフェゴール・オーケストリオン》!」

オルフェゴール・オーケストリオン リンク4(ATK3000)リンクマーカー上/右上/左下/下

「また来たか…!」

「さらに、墓地のスケルツオンの効果!このカードを除外し、墓地のロンギルスを特殊召喚!」

『はあ!マスターの為に我々は貴様を倒す!』

オルフェゴール・ロンギルス リンク3(ATK2500)リンクマーカー左上/上/右下

「やれやれ…もう復活したのか…」

「そして、私は手札から魔法カード、《ブラックホール》を発動!」

「ブラックホール!?それを使えばそっちの場のモンスターまで破壊されるんじゃないのか?」

「残念だけど、私のモンスターは破壊されないよ…オーケストリオンはリンク状態の時、戦闘・効果で破壊されずロンギルスはリンク状態の時、効果では破壊されない…だから、ブラックホールで破壊されるのは君のモンスターだけ」

「何!?ならボルテックス・ドラゴンの効果を発動!俺はEXデッキの

EMオツドアイズ・デイゾルヴァーをデッキに戻して、ブラックホルの発動を無効にして破壊する！」

ボルテックス・ドラゴンの効果によりブラックホールが無効化される。

くつ：ボルテックス・ドラゴンの効果を使わされた：オルフェゴールにはそんな効果を持っているカードもあるのか。

「そして、私はロンギルスの効果を発動！除外されている機械族モンスター2体をデッキに戻して、相手のリンク状態のモンスター1体を墓地へ送る！私はデイヴェルとスケルツオンをデッキに戻して、君の場のエンコード・トーカーを墓地に送る！」

「そうはさせない！リバースカードオーブン！速攻魔法、《大欲な壺》！このカードの効果は自分及び相手の除外されているカードを合計3枚、持ち主のデッキに戻して、俺はデッキからカードを1枚ドロースする！俺は君のデイヴェルとスケルツオン2体をデッキに戻すよ！」

Phantom手札1↓2

「大欲な壺？まさか、そんな方法で妨害してくるなんて：あはは♪ やっぱり君とのデュエルは最高だよ♪ゆうやあ♪」

「：予想はしてたけど、やっぱり俺の名前も知ってるのか：：本当に何者なんだ？」

「さあね：：だけど、今はデュエルに集中した方が良いよ：：私のターンはまだ終わってないんだから」

「：ああ、そうだな」

「それじゃあバトルフェイズに入るよ！ロンギルスでエンコード・トーカーに攻撃！」

『はああ!!』

ドラミングゴングの効果を知つての攻撃か？：：何かあるな。

「だけど、今は使うしかないか：：ドラミングゴングのP効果！エンコード・トーカーの攻撃力を600ポイントアップする！」

エンコード・トーカー（ATK2300↓2900）

「手札の《星遺物―星槍》の効果発動！リンクモンスターを含むモンスター同士が戦闘を行う時、手札のこのカードを墓地に送り、相手

モンスターの攻撃力を3000ポイント下げることができる!」

「それじゃあ、エンコード・トーカーの攻撃力は…」

エンコード・トーカー(ATK2900↓0)

「さあ、君はこの一撃に耐えられる? 私が見た限りだと1ダメージでも受けたらアウトだと思っただけ?」

「くっ…」

「さあ! ロングルス、エンコード・トーカーを破壊して!」

『これで終わりだ!!』

ロングルスの攻撃が、エンコード・トーカーを貫き破壊する。

そして、そのまま俺へと向かってくる。

「《クリボー》の効果発動! このカードを墓地へ送り、戦闘ダメージを0にする!」

「クリボー…さすがに簡単には通してくれないよね…でも、次はどうするのかな? 今度はオーケストリオンでボルテックス・ドラゴンに攻撃!」

「手札の《EMバリアバルーンバク》の効果! このカードを墓地に送り、この戦闘で発生するダメージを0にする!」

オーケストリオンの攻撃により、ボルテックス・ドラゴンは破壊されたが、バリアバルーンバクが俺の前に現れ、ダメージを0にしてくれた。

「…今の攻撃まで防ぐなんて…うふふ♪でもいつまで持つかな? 私はこれでターンエンド!」

ダークナイトプリンセス LP4000

手札1

場 EXモンスターゾーン オルフェゴール・オーケストリオン

リンク4(ATK3000) リンクマーカー上/右上/左下/下

メインモンスターゾーン オルフェゴール・ロングルスリンク3

(ATK2500) リンクマーカー左上/上/右下

伏せなし

Pゾーンなし

フィールド魔法 オルフェゴール・バベル

Phantom LP4000

手札0

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン オッドアイズ・ファントム・ドラゴン
レベル7 攻撃表示(ATK2500)

伏せなし

Pゾーン EMドラミングゴング(スケール2)

EMオッドアイズ・ユニコーン(スケール8)

「俺のターン、ドロロー！」

Phantom手札0↓1

さて、どうしようか…今のところライフはお互いに削られていない
…だけど、状況的には相手の方が有利。

しかも、俺は1ダメージも受けられない状態だ…

「…とりあえず、やるしかないか！俺はセッティング済みのPスケール
でペンデュラム召喚！来い！俺のモンスター！EXデツキより現
れる！《EMペンデュラム・マジシャン》！」

EMペンデュラム・マジシャン レベル4 攻撃表示(ATK1500)

「そして、ペンデュラム・マジシャンの効果で自身を破壊し、デツキから
ら《EMドロバット・ジョーカー》を手札に加え、そのまま召喚！」
EMドロバット・ジョーカー レベル4 攻撃表示(ATK1800)

「そして、ドロバット・ジョーカーが召喚に成功した時、デツキから
このカード以外の《EM》、《魔術師》Pモンスター、《オッドアイズ》
モンスターのいずれかを手札に加えることができる！俺はEMオツ
ドアイズ・デイズルヴァーを手札に加えるよ！」

Phantom手札1↓2

「でも、それじゃあ私を倒し切れないよ？…どうするの？！」

「こうするのさ！俺は手札から魔法カード、《強欲で貪欲な壺》を発動！このカードの効果で、デッキトップから裏側でカードを10枚除外して、2枚ドロー！」

Phantom手札2↓1↓3

「賭けに出たつてことね…さあ、どんな手で来るの？」

「…俺が引いたのは《守護神官マハード》！このカードをドローした時、このカードを見せることで自身を特殊召喚できる！来い！マハード！」

守護神官マハード レベル7 攻撃表示 (ATK2500)

「ここでマハード!? やっぱり侑哉はすごいね♪惚れ直しちゃったよ♪」

「いくよ！バトル！マハードでオルフェゴール・ロンギルスを攻撃！そして、ドラミングゴングのP効果発動！マハードの攻撃力を600ポイントアップする！」

守護神官マハード (ATK2500↓3100)

「そして、マハードの効果！このカードが闇属性モンスターと戦闘を行う時、攻撃力は倍になる！」

守護神官マハード (ATK3100↓6200)

「さすがにこれを受けるわけにはいかないよね…私は手札の《虹クリボー》の効果発動！このカードをマハードに装備して、攻撃を封じる！」

「くっ…だけど、まだまだお楽しみはこれからさ！フアントム・ドラゴンでロンギルスを攻撃する！そして、オッドアイズ・ユニコーンのP効果！オッドアイズモンスターが攻撃する時、自分フィールド上のEモンスターの攻撃力分だけ戦闘を行うオッドアイズモンスターの攻撃力をアップする！俺はフアントム・ドラゴンの攻撃力をドクロバット・ジョーカーの攻撃力分だけアップするよ！」

オッドアイズ・フアントム・ドラゴン (ATK2500↓4300)

「いけ！オッドアイズ・フアントム・ドラゴン！夢幻のスパイラルフレーム！」

オッドアイズの攻撃がオルフェゴール・ロンギルスへと向かい、そ

のまま直撃する。

『ぐっ…マスター、申し訳ありません』

「きゃああ!!」

ダークナイトプリンセス LP4000↓2200

「この瞬間、ファントム・ドラゴンの効果!ペンデュラム召喚したこのカードが相手の戦闘ダメージを与えた時、Pゾーンのオッドアイズモンスターの数×1200ポイントのダメージを与える!俺のPゾーンにはオッドアイズ・ユニコーンがいる、よって、1200ポイントのダメージを与える!喰らえ!幻視の力、アトミックフォース!」
「うっ…!」

ダークナイトプリンセス LP2200↓1000

「危なかった…もう少しでこのターンで倒されるところだったよ…でも、これで侑哉のターンは終わりでしょ?私の勝てる可能性が高くなったね」

「…いいや、お楽しみはこれからだ!手札から速攻魔法、《瞬間融合》を発動!このカードの効果で俺はオッドアイズとドクロバット・ジョーカーを融合する!現れる!飢えた牙持つ毒竜!スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン!!」

スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン レベル8 攻撃表

示(ATK2800)

「ここで瞬間融合…!」

「そして、スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンの効果発動!このカードが融合召喚に成功した時、相手フィールド上の特殊召喚されたモンスター1体の攻撃力分だけこのカードの攻撃力をアップする!俺はオーケストリオンの攻撃力分だけスターヴ・ヴェノムの攻撃力をアップする!」

スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン(ATK2800↓5800)

「お楽しみはこれまでだ!スターヴ・ヴェノムでオーケストリオンに攻撃!」

スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンの攻撃がオルフェゴ

ル・オーケストリオンが撃破され、ダークナイトプリンセスのライフを0にした。

ダークナイトプリンセス LP1000→1800

／／／／／／／／／／／／／／／／

「はあ…はあ…俺の勝ちだ…」

「…ふふ♪あははははは♪負けちゃったあ…さすがは侑哉だね♪」

「…約束通り、ここから出してもらうぞ」

「だーめ…逃がさないよ、もう私…欲望を抑えきれないよ…力づくでも君を手に入れる♪」

「約束が違うぞ！」

「ごめんね、最初は逃がすつもりだったんだけど…あんなに興奮するデュエルをさせられたら、もう抑えられないよ♪」

そう言つて、ダークナイトプリンセスは俺へと近づく。

やばい、これは本格的にやばい…この人、理性を失ってる。

「Phantomさん！この手に掴まってください！」

「この声は！ありがとう！恩に切るよ！」

そして、俺は差し出された手を掴み、ダークナイトプリンセスの空間から脱出した。

「Phantomさん、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ！とりあえずここから離れるぞ！」

「は、はい！」

そう俺を助けてくれた少女に声を掛け、急いでその場所から離れた。

「ゆうやあ…はあ…♪」

『…マスター、あの少年は逃げてしまったぞ…いつまでそこで、空を切っているつもりだ？』

「はっ…！しまったなあ…絶対、侑哉に引かれたよね…まあ、元から引かれてる可能性もあるけど…まあ、それはさておき、まさかこの空間を見つけることができる人が居るなんてね…さすがに想定外だよ」

『確かに、それには俺も同意だ：精霊の力を感じ取ったのか、それともあの少年の気配を感じ取ったのか：』

「：まあ、どっちにしても厄介だなあ：しかも、女の子っぽいし：早急に排除した方が良いかな？」

『：やめておいた方が良いだろう、ただでさえマスターは彼に良く思われていないのだから、刺激するのは避けた方が良い』

「それもそっか：じゃあ、また侑哉を私の王子様にする方法を考えないかね！」

そう言つて、ダークナイトプリンスは光悦の笑みを浮かべた。

これから起こる出来事に心を踊らせながら。

第51話 殺意

「ふう…助かったよ、ありがとうミズキ」

「いえいえ、気にしないでください！むしろ、Phantomさんの力になれて嬉しかったです」

そう言つて、ミズキは満面の笑みを浮かべる。

「ゆ…Phantom！無事だったのね！良かった！」

「ああ、おかげさまでね…心配掛けてごめん、ブルーエンジェル」

そう言つて、俺はブルーエンジェルに謝罪する。

結局、心配を掛けちゃったな。

…それにしても、彼女は一体何者だったんだ？

俺や葵のことも知っていたし、精霊の力まで使えるなんてな。

もしかして、所謂、転生者みたいな人なのか？

だとすると、俺は前の世界で彼女に会ったことがあるのか？

…ダメだな、あまりにも情報が少なすぎる。

「どうかしたの？Phantom」

「ごめん、ちよつと考え事をしてた…」

「考え事…？」

「ああ、実は…」

「え！ちよつと待つてよ、お母さん！私まだ…Phantomさんの手伝いをしたいのに…」

考えていた内容をブルーエンジェルに話そうとすると、突如として、ミズキから声が響いた。

「ミズキ？どうかしたのか？」

「実は、お母さんから危ないから早く戻つて来なさいってメッセージが届いて…」

「…ああ、なるほどな…」

それもそうだろう、母親からすれば自分の娘がこんな危ない場所に居るんだし、心配するだろうな。

「…わかった、お母さんの元に帰つてあげてくれ…ハノイの塔は俺達が絶対に止めてみせるからさー」

まあ、俺はデュエルできる状態じゃないから、サポートに徹することになるだろうけど。

それでもできることはある…なら、それを全力でやるだけだ。

「Phantomさん…わかりました！私、皆さんのことを信じてます！必ずリンクヴレインズを救ってください！」

「ああ、任せてくれ！」

最後に俺の言葉を聞いて、ミズキはログアウトした。

「さあ、行こうか、葵！」

「…待って、その前に…」

「うん？」

俺がそう聞き返すと、葵はそつと俺へと抱きついた。

「本当に無事で良かった…！本当にいつも無茶ばかりするんだから…」

「悪かった…俺に出来ることをしたかったんだけど、こんな風に心配掛けるなら、おとなしくしていた方が良かったかもな…本当にごめん」

そう声を掛けながら、葵の頭をそつと撫でる。

葵は恥ずかしいのか、頬が赤く染まっていた。

その姿が可愛くて、リンクヴレインズに無理して来た甲斐があったな、なんてことを思ってしまう。

それにしても…本当に、我ながら無茶ばかりしてるな…でも、じつとなんかしていられないしな…まあ、それは葵も似たようなものだけだな。

『イチヤイチヤしてるところ申し訳ないんですけど、私のこと忘れてませんか？目の前でイチヤイチヤされて嫉妬で狂いそうなんです…』
レイがかなり棘のある言い方でそう口にする。

「そうか？いつも通りな気がするけど…あ、そうだ！二人に話したいことがあったんだ…」

「話したいこと？」

「ああ…とりあえず、ハノイの塔に向かいながら説明するよ…」

「わかったわ…それじゃあ行きましょう！」

そうして、俺達はハノイの塔へ再び向かっていった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ダークナイトプリンセス…その人とそんなことがあったのね…」

「ああ…」

俺はハノイの塔に向かう道中で、ここに来るまでの経緯を説明した。

アバターやリンクヴレインズ上の建物を再構築するプログラムを作ったこと、そのプログラムをテストしている途中でダークナイトプリンセスとデュエルをすることになったこと等を二人に説明した。

『それにしても、ダークナイトプリンセス…彼女は一体何者なんでしょう？ 精霊の力を使えたり、侑哉さんや葵さんのことを知っているなんて…』

「それに関しては俺もわからない…だけど、一つ考えられる可能性がある…」

『可能性？ どんな可能性ですか？』

「…俺が前に居た世界から、誰かがこの世界に来たのかもしれない」
「侑哉が前に居た世界から？ 確かにそれなら侑哉のことを知っているのも納得がいくけど…」

『でも実際、そんなことが起こり得るんでしょうか？ 侑哉さんは元々この世界の人ですから、この世界に戻ってきたと考えれば、辻褄も合いますけど…』

「確かに、普通に考えれば有り得ないことだけど…方法はあるにはある…」

「どんな方法？」

「それは……つと、ハノイの塔が見えてきたぞ！」

葵とそんな風に会話を交わしていると、ハノイの塔が見えてきた。

そして、目を凝らして見てみると、Go鬼塚とリボルバーがデュエルをされていて、それをプレイヤーカーが観戦していた。

「プレイヤーカー…これは、どういう状況だ？」

「Phantom…！ それにブルーエンジェルも無事だったか…」

「Phantom、遅かったな…たつた今、Go鬼塚とのデュエルに決着がついた、私の勝利だな」

プレイメーカーに今の状況をリボルバーがそう答える。

鬼塚が負けた？嘘だろ…やっぱり、リボルバーは一筋縄ではいかないな。

俺が鬼塚が負けたという事実には衝撃を受けていると、徐々に鬼塚の体が量子になっていく。

「くっ…まずい！」

その変化に気づいた俺はすぐさまカード状のプログラムを投げつけた。

「プレイメーカー、俺が出来るのはここまでだ」

「Go鬼塚、お前のおかげで奴の手の内を知ることができた」

「フツ、後を頼むぞ、お前達…」

そう言つて、Go鬼塚は消えていった。

「Go鬼塚がデータに…」

「…いや、多分大丈夫だ…消える前に周りのデータの色が正常な色になっていた、Go鬼塚はログアウトできたんだと思う…」

「それなら良いんだけど…」

そう言つて、葵は安堵の声を洩らす。

正直、危なかった…後少し遅ければ、鬼塚はハノイの塔に吸収されていた。

「まさか、ハノイの塔に吸収されないプログラムを作成したとは…さすがはPhantomと言つたところか…」

「そいつはとも…それで、どうするつもりだ？リボルバー…次は誰とデュエルする？」

「そうだな…まずは、Phantom、お前との決着をつけたいところではあるが、万全な状態ではないお前とデュエルしても意味はない」
「…やっぱり、わかっちゃうか…どうやら俺の想像以上に俺の体はやばい状態らしいな」

まあ、正直、結構無茶をしてる感じはするけどな…全く、こんなだから葵達に心配掛けるんだろうな。

「…Phantomは休んで、ここは私がリボルバーとデュエルするわ！」

「いや、お前達は下がっている…これは俺が決着をつけなければならぬ戦いだ」

葵が俺の代わりにデュエルをしようとする、プレイヤーがその口にする。

確かに、これはプレイヤーが決着をつけるべきものかもしれないな…だって、遊作はずっとハノイの騎士を追っていたんだもんな。

「ここは私がデュエルするわ！」

「…ブルーエンジェル、ここはプレイヤーにデュエルさせてあげよう」

「…どうして？」

「ハノイの塔完成まであまり時間はない…何度もデュエルをすれば、その分時間を消費する…それで塔が完成しちゃったら意味がない…それに」

「それに…？」

「…プレイヤーはずっとハノイの騎士を追ってきたんだ、最後の決着ぐらいいはプレイヤーにつけさせてあげたいんだ」

実際、俺はプレイヤーと一緒に戦ってきたし、ロスト事件についても少しとはいえ知ってしまった。

だからこそ、この決着はプレイヤー自身がつけるべきだと思うた。

「…仕方ないわね…わかったわ、ここはプレイヤーに任せる…だけど、あなたが負けたら、その時は私がリボルバーを倒すわ！」

「…まあ、俺のプログラムを使えばある程度時間稼ぎができるし、一戦分くらいは何とかなるか…とまあ、ブルーエンジェルもこう言ってくれたし、リボルバーとの決着をつけてこい！プレイヤー」

「お前達…ああ、任せておけ！」

「…どうやら、誰が戦うか決まったようだな」

「ああ」

「では、決着をつけるとしよう…来い！プレイヤー！」

そうやって、リボルバーはDボードへと飛び乗り、ハノイの塔へと向かっていき、プレイヤーカーもそれに続いた。

「行ったか…葵、ありがとな…プレイヤーカーにデュエルさせてくれて」

「気にしないで、私もそれが良いと思ったただけだから！」

そうやって、葵は俺に満面の笑みを向けてくれた。

「そっか…」

「あれれ？これは邪魔しちやったかな？」

「…っ！お前は…」

ふと、聞き覚えのある声が聞こえて、思わず後ろを振り返る。

そこには、ここに来る前に戦った少女の姿があった。

「ダークナイトプリンセス…！何でここに？」

「ちよつと〜！そんな怖い顔しないでよ…今回は別に戦いにきたわけじゃないのにさ…」

そうやって、ダークナイトプリンセスは怒っていますと言わんばかりに頬を膨らませる。

「あなたがダークナイトプリンセス…！侑哉に何の用？」

「ブルーエンジェルか…あなたには別に話しかけてないんだけど」

そう言いながら、ダークナイトプリンセスは葵を睨み付ける。

そして、そのままさらに言葉を紡ぐ。

「私があるのは侑哉だけだから、あなたはさっさとログアウトすれば？それとも力づくであなたを退場させようか？」

そう口にする、ダークナイトプリンセスからは葵に対する、とてつもない殺意を感じた。

こいつ…本気だ！このまま戦えば、葵の身に危険が及ぶ！

「…っ！望むところよ！」

「待て！葵！やめておいた方が良い」

「どうして!?!」

「あいつの殺気、尋常じゃない…！あれは、完全に葵を潰すつもりだ…

お前もそれは感じているだろ?」

「…そ、それは…確かにそうだけ」

何でかはわからないけど、ダークナイトプリンセスは葵に対して、すさまじいほどの殺気を放っている。

あれは、完全に葵を再起不能にまでしようと考えているレベルの殺気だ…どんな手段に出るかわからない。

「…ダークナイトプリンセス、結局、用件はなんだ? お前は戦うつもりはないと言った、なら、葵を目の敵にせずに、さっさと用件を言ってくれ」

「…はあ、まあ、侑哉に頼まれたら断れないよね…不本意だけど、ブルーエンジェル、あなたにもついでに話してあげる」
「くっ…」

葵は悔しそうにそう口にする。

「実は、侑哉に情報を教えてあげようと思って♪」

「情報…?」

「そうそう♪どうする、知りたい? 知りたいなら教えてあげるよ♪」

情報か…本当に信頼できる情報とは限らないけど、聞く価値はあるか?

「一応、聞いておくけど、その情報を手に入れる為の条件とかはあったりするのかな?」

「…疑り深いなあ、私が侑哉に条件を満たさないと、情報を教えない、なんて意地悪なこと言うと思う?」

「会って、少ししか経っていないけど、お前ならそれぐらい言いそうな気がするんだけど」

「…はあ、随分と警戒されてるね…まあ、とにかく今回は条件とかは特にないよ、単純に侑哉に情報を教えたいだけ」

「そうか…」

「侑哉…この人の言うことなんか信用して良いの?」

葵がそう言って、心配そうに俺の方を見る。

確かに、葵の言う通りだ…正直言って、この人は得体がしれない…根っからの悪人ではないと信じたいけど、本当に、この情報を聞くべ

きなのか？

「もう、しょうがないなあ…なら、これを受け取って！」

「これは？」

「私の知ってる情報♪この情報を見るかどうかは侑哉に任せるから♪それじゃあね！」

そう言つて、俺のデュエルディスクにデータを送り、ダークナイトプリンセスは消えていった。

「…結局、情報って何だったんだ？デュエルディスクにデータが送られてきたから、それを見ればハッキリするのか？」

「わからない…だけど、一つだけわかっていることがある…ダークナイトプリンセスは私達の敵よ…多分、侑哉に渡したデータだって罠だと思ふ」

「まあ、その可能性も0じゃないな…とりあえず、この情報はまだ見るべきじゃないな…」

実際、葵の言う通り、罠の可能性が高いかもしれない…だけど、敵かどうかは判断に困るな。

まあ、葵に対しての殺意は間違いなく本物だ…それだけで俺の敵として認識するには充分だけど。

「まあ、そう簡単に答えは見つかからないか…」

俺はそう呟きながら、プレイヤーカードとリボルバーがデュエルしているであろう場所に目を移し、こう言葉を紡いだ。

「頑張れよ、プレイヤーカード」

第52話 リボルバーとの邂逅

「ふう…終わったか」

リンクヴレインズから戻ってきた俺はそう呟く。

プレイヤーカードとリボルバーのスピードデュエルが引き分けて終わった時はどうなるかと思っただが、俺達の作ったプログラムを使いプレイヤーカード達が戻ってくる時間を稼いだ。

その後、プレイヤーカード達のマスターデュエルが始まり、さつそくそれを見にいったわけだが…一言で言うところすごいデュエルだった。

リボルバー、凄すぎだろ…リンク4のモンスターだけでエクストラリンクとか…あれは圧巻だった。

プレイヤーカードもプレイヤーカードですごい…あの状況から巻き返すんだもんな…ライフ13とか初めて見たよ。

それに、リボルバーがミラーフォースを使いこなしていたことも驚きだった…ミラーフォースってかませみたいない扱いをよく見るけど、やっぱ強いカードだよな。

他にもミラーフォース・ランチャー…まさか、ミラーフォースの専用サポートが出るとは思ってもよらなかった…無限ミラフォできるのってかなり良いよな。

「う…ん」

…とそんな風に、リボルバーとプレイヤーカードのデュエルについて思い出していると、葵の声が聞こえてくる。

「気がついたか…」

「…うん、おはよう…侑哉」

「ああ、おはよう」

目を覚ました葵に、そう言葉を返す。

「終わったのよね…」

「ああ、俺がこの目で見たから間違いない」

実際、俺はプレイヤーカードとのデュエルをすべて見ていた。

デュエル中に遊作が俺の復讐は終わったと言っていたのも覚えてる。

そういえば、柄にもなく遊作が俺にお礼を言ってくれたっけ…俺は特に何もしていないし、お礼を言われるとは思っていなかった。

「…ねえ、侑哉…体は大丈夫？今回のことで結構無茶したでしょ？」

「それに関しては大丈夫だよ…まあ、しばらくはリンクヴレインズには行けないかもしれないけど…」

「そう…それなら良いけど…」

葵は安心したように、そう口にする。

「二人共、お疲れ様…疲れたでしょ？」

「まあ、確かに…あ、そうだ！花恋にも話したいことがあるんだ」

「話したいこと…？」

「ああ、実は…」

そうして、俺はダークナイトプリンセスという名前の少女と出会い、その少女とデュエルすることになったこと…その少女は俺と葵のことを知っていて、葵にとってもない殺意を抱いていること、そして、その少女が俺に情報を渡したことなどを話した。

「…そんなことがあったのね…ダークナイトプリンセス…何者かはわからないけど警戒しておいて損はないわね」

「ああ…一応、俺はダークナイトプリンセスが前に俺がいた世界から来たんじゃないかって仮説を立ててはいるんだけどな」

実際、これはただの仮説だ…もしかしたら、単純に俺と葵について調べただけかもしれないしな。

ただ、そうすると何で俺達について調べたのか、それがわからない…ダークナイトプリンセスの口ぶりから察するに俺と彼女には何かしらの接点があると思って良い。

だけど、その接点がわからないんだよな…だから、一番あり得そうな仮説を立てたわけなんだけど。

まあ、他にも理由はある…ダークナイトプリンセスは精霊の力を使っていた、誠の世界に行った時に俺達の世界では精霊の存在があまり知られていないことがわかっている。

俺のような人間が珍しいタイプなわけだから、そうそう精霊の力を

使える人間はいないだろう。

だから、神様転生みたいな感じで、俺達の世界に転生して所謂、転生特典で精霊の力を使えるようになったのかもしれない。

「まあ、結局は推測の域をでないな…」

…ダークナイトプリンセスか、やっぱり何者かさっぱりわからないな。

俺はそんなことを思いながら、フウ、とため息を吐いた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「…ただいま」

「お帰り、侑哉！葵ちゃんをちゃんと送ってきたみたいね」

「ああ、ちゃんと送ったよ」

ダークナイトプリンセスについて話した後、花恋が葵を家に送るよう提案してきて、それに従うことにした。

晃さんも心配してるだろうし、顔ぐらいは見せておいた方が晃さんも安心できるだろうと思って葵を送ることにしたんだけど…正直言つて、葵とはもうちよつと一緒に居たかった。

まあ、他にも理由はあるんだけどな。

「…それで？葵を家に送らせた本当の理由は何だ？」

「さすがは侑哉…勘が鋭いわね！実は、ある人物から私達に会いたってメッセージが届いたの…ただ、その人物と葵ちゃんを会わせるわけにはいかないから葵ちゃんには家に帰ってもらったの」

「ある人物…？」

「多分、そろそろ来ると思うわ…あつ、噂をすれば」

花恋が話している途中で急にインターホンの音が響き、花恋が玄関へと来訪者を迎えに行く。

そして、その来訪者を家へと招き入れ、俺の目の前に連れてきた。

その人物は一言で言えばイケメンだ…銀色の髪に整った顔立ちをしている青年で、年は多分俺より上だろう。

恐らく、年の差は2、3歳ぐらいか？何となくだけどそんな気がした。

「えつと…どちらさまですか？花恋の知り合いか何かでしょうか？」

全く面識のない人だったこともあり、思わず丁寧な言葉遣いになりつつそう尋ねる。

「そうか、こちらで会うのは初めてだったな…私は鴻上了見…いや、お前にはリボルバーと名乗った方がわかりやすいか」

「…リボルバーだって!?!」

リボルバーって、俺の知ってるリボルバーだよな?じゃあ、俺の目の前に居る人は…

「驚いたよ…まさか、リボルバーと現実で会うことになるとはな…それで、わざわざ俺達に会いに来た理由は何なんだ?あと、花恋とはどういう関係なんだ?」

「そうだな…まず、花恋さんがかつて父の研究を手伝っていたのは知っているな?」

「ああ、花恋から聞いたよ」

「そうか、それで私は花恋さんによく面倒を見てもらっていたのだ」

「ああ、なるほど…そういうことか」

リボルバーの父…恐らく、鴻上博士のことだろう。

花恋は元々鴻上博士の研究を手伝っていたわけだし、その時に面倒見の良い花恋がリボルバーの面倒を見ていたとしても不思議はない。

「私から見た彼女の印象は知的で好奇心旺盛であり、とても面倒見の良い女性だ…そして、容姿端麗ではにかむような笑顔が素敵な女性といったところか…まあ、それは今でも変わらないが」

そう言って、リボルバー、もとい了見は笑みを浮かべる。

うん…?リボルバーってこんな感じだったけ?

「…えっと、リボルバー、とりあえず座って良いぞ…俺達への用件をまだ話してくれてないからな、立ったままというのも話しづらいと思うし」

俺は若干、困惑しつつそうリボルバーに促す。

「そうね、遠慮しなくて良いわよ、了見君」

「では、お言葉に甘えて」

そう言って、リボルバーは近くの椅子へと腰かける。

というか、花恋はリボルバーのことを了見君と呼んでるんだな…

俺はリボルバーという呼び方が定着しているせいで、了見と呼ぶのはなかなか難しそうだ。

「それで俺達への用事って何だ？」

「…その前に聞きたいことがある」

「何だ？」

「お前は私のことを信用するのか？」

「うーん…まあ、確かに色々悪いことはしているけどお前自身は悪い奴ではないと思うし…それに、花恋がお前のことを信用しているわけだから、それなりに信用してるよ…まあ、疑いがないといえは嘘になるけどね」

実際、リボルバーはやっていることは悪いけど、人間性まで悪いとは思えないんだよな。

まあ、俺の勝手な願望なのかもしれないけど。

「そうか…それだけ聞ければ充分だ」

「お、おう…」

「それで、了見君、結局私達に用事って？」

俺達の話しを聞いていた花恋が近くの椅子に腰かけ、そうリボルバーへと尋ねる。

「それは…我々ハノイの騎士とある種の同盟関係を結んでほしい」

「え…？…どういうことだ？」

俺はリボルバーの言葉に思わずそう聞き返す。

「…リンクアクセスについては、花恋さんから聞いているな？」

「あ、ああ…一応は」

「お前のリンクアクセスの力は強大な力だ、それこそお前の力を狙うものはごまんといる…SOLテクノロジーはもちろん、イグニスですらお前の力を狙うだろう」

「イグニスも…でも、それと今回の話しにどんな関係があるんだ？」

俺がそう言うと、リボルバーは少し間をあけて言葉の続きを口にする。

「…お前の力は謂わば、イグニスと人間、双方の希望であり、絶望だ…お前がイグニス側に協力するのであれば人間を支配しようと考える

いるAIの行動により拍車がかかる…人間側に立つのであれば、AIを滅ぼすことは容易いだろう」

「ああ、なるほど…だから希望であり絶望か」

つまり、俺がどちらかの側に立つのであれば、俺が協力する側にとつては敵対する相手を倒すための希望となり、敵対した相手にとつては自らを滅ぼす絶望となるということだと思う。

「だからこそ、我々はお前達を守ることにした、我々としてもリンクアクセスの力が他の勢力に渡るのは避けたいからな…それに」

「それに…?」

「父との約束だからな」

「約束…?」

リボルバーの言葉にそう反応を示したのは花恋だった。

「…父は6人の被験者に対応するイグニスをそれぞれ作り出し、研究は成功した…だが、イグニスがこれから起こす行動について何度シミュレーションを繰り返してもAIによって人類が滅ぼされるという結論に達してしまった」

「なるほどな…それでそうなる前にイグニスを滅ぼそうと考えたわけか…だけど、その結論は花恋がすでに出していて、鴻上博士にもちゃんと忠告していたけど?」

「…その通りだ、だからこそ父はそのことを酷く後悔していた…『もし、私が彼女の忠告を無視しなければこんなことにはならなかった』と、父はそう言っていた」

「ふーん…一応、後悔はしてるんだ…まあ、あんまり信じられないけど」

花恋は鴻上博士が後悔をしているとは思っていないのか、その声はどこか疑っているように聞こえる。

「えつと…それで、それが俺達を守ることに何か関係があるのか?」

「ああ…そのことを後悔していた父はせめてもの償いとして、花恋さんとその家族、友人などを我々の手で守り抜くことを決めた、その為にまず、花恋さんが父の研究の研究員であったことや花恋さんが調べていた研究についての情報を抹消した…私達がリンクアクセスにつ

いて知ったのもその時だ」

「そうだったのか…ありがとうって言った方が良いかな？」

「礼など必要ない、私達が自らの意志で行ったことだ…それに、こんなことで許されるとは思っていない」

「そうか…でも、ありがとな…花恋のことを守ろうとしてくれてさ」

俺はそう言って、リボルバーに感謝の言葉を告げる。

リボルバー達のはたしたことは確かに許されないことかもしれない、だけど、花恋のことを守ろうとしてくれたことについてはお礼を言うべきだと思っただから。

「…気にするな」

「私からもお礼を言わせて、了見君…ありがとう」

「やれやれ…あなたはやっぱり変わってませんね…もちろん、良い意味で、ですが」

「フフ、そう簡単に人は変わらないわよ…それで、結局ある種の同盟関係を結ぶって具体的にどういうことなの？」

「はい、簡単に言えばあなた達が助けが欲しい時には、我々、ハノイの騎士が協力するということです、逆にこちらが助けが欲しい場合はあなた達に手を貸してほしい」

「なるほど、お互いに困った時は助け合おうってことね」

私は別に構わないけど、侑哉はどう思う？」

「俺か？俺は…」

さて、どうしたものか…リボルバー達と協力し合うのは悪くはない…ただ、いくつか疑問点があるな…まずはそれについて聞いてみるか。

「…ハノイの騎士に協力って言っても具体的にどうするんだ？言っておくけど、今回みたいなテロには協力しないぞ？」

「わかっている、そんなことをすればお前達に危険が迫る…だから、協力と言ってもお前達と利害が一致する事以外は手を貸してもらってもりはない」

「利害が一致する事？」

俺はリボルバーの言葉にそう返す。

俺達とリボルバー達の利害が一致する事なんてあるのか？

まあ、とりあえずリボルバーの返答を待つか。

「ああ…例えば、私達やSOLテクノロジー以外の別の勢力が現れた場合などだろう…それが、お前達と私達の倒すべき共通の敵なのだとすれば協力する」

「別の勢力…」

リボルバーの言葉を聞いた俺はサイバース世界で戦った敵のことを思い浮かべる。

あの敵はサイバース世界に攻撃を仕掛けてきた、あのタイミングではハノイの騎士はハノイの塔計画を実行するために動いていただろうから、サイバース世界を襲撃したのはハノイの騎士とはまた別の組織ってことになるな。

後、これは関係ないかもしれないけどダークナイトプリンセスも別の勢力と言えるな…まあ、俺達が狙いっばいけど。

俺はそんなふうにながら、言葉を続ける。

「なるほどな…後は俺はプレイヤー達と行動することが多いけど、それについては大丈夫か？俺はプレイヤー達を裏切るつもりはないからな」

「フツ…わかっている、お前が簡単に誰かを裏切るような人間ならばこんなことを話したりはしない…お前は今まで通りに過ごしてくれば良い」

「そっか…わかった、そういうことなら協力してもらおうよ…よろしくな、リボルバー…いや、了見」

俺はそう言って、了見へと手を差し出す。

了見は一瞬、驚いたような表情をすると、そのまま俺と握手をした。「よろしく頼む、Phantom…いや、お前に習うなら侑哉と呼ぶべきか」

「まあ、呼びやすい方で構わないよ」

「では、侑哉と呼ばせてもらおう…改めてよろしく頼む、侑哉」

「ああ…よろしくな！」

こうして、俺達と了見達の間にある種の同盟関係が結ばれた。

それにしても……これから色々大変なことになりそうだな。

まあ、でもそれと同時に嬉しく思う……こんなふうに遊作と了見もわかりあえる日があつつかきつと来る……というか来てほしいな。

俺はそんなふうに未来への希望を抱きながら、1日を終えた。

第53話 依頼

「はあ…どうしてこうなった…」

リボルバーと協力関係になってから、慌ただしく日常が過ぎていき、気づけば夏休みになっていた。

本来なら、家でごろごろするなり、葬と出かけたりしたいところではあるが、何故か俺はSOLテクノロジー社に呼び出されていた。

遡ること昨日の夜…学校から出された夏休みの課題をさつさと終わらせるために夜更かしをしていたのだが、その時に晃さんから連絡が来た。

なんでも、俺に手伝ってほしいことがあるらしくSOLテクノロジー社に来てほしいとのことだった。

そんなこんなで俺は今、ここに来たわけなんだけど…

「あの、すみません…財前さんに呼ばれてきた、神薙侑哉ですけど…」
「はい、お話しはお伺いしております…近くの席にお掛けになって、お待ちください」

受付の女性が俺の話しを聞いて、近くのソファに座るように促す。俺はその言葉を受けて、近くのソファへと腰かける。

いや、それにしても広いな…さすがはSOLテクノロジー社。

本当に何で俺はこんなところに呼ばれたんだ？

まあ、晃さんが来ればわかることだよな。

俺はそんなふうに考えごとをしていると、しばらくして晃さんの姿が目に入った。

晃さんは俺に気づいたのか、足早に俺のところへと向かってくる。

「やあ、侑哉君、久しぶりだね」

「お久しぶりです、晃さん…それで俺に手伝ってほしいことって？」

「それについては後で話すつもりだ、着いてきてくれ」

「はあ、わかりました」

そう言って、俺は晃さんの後続く。

「すまない、せっかくの夏休みなのに呼び出してしまった」

「いや、構いませんよ…まあ、本音を言えば葬とどこかに出かけたかったですけど」

「ははは…葬にも同じことを言われたよ、君と出かけたかったのに、私のせいで行けなくなっちゃったとね…まあ、侑哉君にしかな頼めないことがあると言ったら渋々納得してくれたが」

「そうだったんですか…」

葵も俺と同じようなことを考えていたんだな…というか晃さんに対して結構辛辣な気がするけど気のせいかな？

「けど、まあ…下手に遠慮するより思ったことをはつきり言えた方が良いか。」

それにしても…結局、俺は何をさせられるんだろうか。

そんなことを考えていると、エレベーターが降りてきた。

そして、エレベーターの扉が開き、俺達はその中へと入っていった。

「それで晃さん、結局俺は何で呼ばれたんでしょうか？」

「…ハノイの塔事件のせいでリンクヴレインズが多大な被害を受けたのは知っているだろう？」

「はい、知ってますが…」

それについてはよく知っている、おかげでリンクヴレインズでデュエルが出来なくて困っているぐらいだからな。

そういえば…プレイヤーカーやブルーエンジェル、G.O鬼塚はリンクヴレインズを救った英雄と呼ばれるようになったな。

何故か、俺の名前もあつてびっくりしたけど…俺は何もしていないんだけどな…強いて言うなら、リンクヴレインズの建物にプログラムをぶつけて、再構築して時間稼ぎをしたぐらいだな。

…うん？まさか、俺が呼ばれた理由って…

「晃さん、もしかして俺が呼ばれた理由って…俺達が作ったプログラムが関係してますか？」

「よくわかったね…確かにそれも理由の一つだよ、今、我が社はリンクヴレインズの復興作業で忙しい、以前の上層部の人間が全員我が社を追い出されて人事異動なども混乱していてね」

おかげで私達は大忙しなんだ、と晃さんは言葉を続けた。

なるほど、確かにそれは大変だな。

「だけど、俺が手伝えることなんて限られてますよ…逆に足を引つ張るかもしれないし」

「安心してくれ君に負担を掛けるつもりはない、これは私達で何とかしなくてはならないことだからね…ただ、リンクヴレインズの復興作業については君の協力がどうしても必要なんだ…協力してくれるかい?」

「…わかりました、どこまでできるかはわかりませんがやるだけやってみます」

「…すまない、ありがとう」

そう言って晃さんは、頭を下げる。

「気にしないでください、俺も早くリンクヴレインズでデュエルしたいですから」

「…そうか、本当にありがとう、侑哉君」

「まあ、失敗しないように善処します」

そんなふうには晃さんと会話を交わしていると、目的の場所に着いたのかエレベーターが停止する。

そして、そのまま扉が開かれ、オペレーターらしき人達が慌ただしく作業をしているのが目に入る。

うわあ、こりやすごいな…確かにこれは猫の手も借りたいぐらいの状況だな。

「現在の状況はどうなっている?」

「ただいま、リンクヴレインズの復興作業中です…ですが進捗はあまりよくありません」

「侵入したウイルスを発見、すぐに除去します」

「わかった、リンクヴレインズの復興作業は引き続き行い、ウイルスをすぐさま除去してくれ!」

晃さんがオペレーターの人達に指示を行う。

す、すご…晃さんは普段こんなことをやってるんだな…これは手伝わえないといけないな。

「…晃さん、問題のあるものをこっちのパソコンに一纏めにできます

か？」

「あ、ああ…可能だが…」

「それじゃあさっそくお願いします！問題のあるものを一纏めにしてくれれば俺がまとめて処理します、後、リンクヴレインズの復興作業がどの程度進んでいるのか教えてくれるとありがたいです」

「わかった…結局、君に負担を掛けることになってしまったな…すまない」

「こんな状況じゃゆっくり、リンクヴレインズの復興作業もできませんからね、仕方ないですよ」

そう言って、俺は目の前のパソコンを操作し始める。

正直言って、不安だけど花恋に色々教えてもらってるし大丈夫なはず…多分、恐らくだけど。

俺はそんなふうに一抹の不安を覚えながら、作業を始めた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ふうー、ようやく一息つける…疲れた…」

ようやく一段落して、晃さんに案内された客間でそう呟く。

はあ、本当に疲れた…オペレーターの人達すごいな…こんなことを毎日やってるわけだもんな。

「お疲れ様、コーヒーでも入れようか？」

「気持ちありがたいんですけど…実は、俺コーヒーが未だに飲めなくて…MAXコーヒーとかなら飲めるんですけど」

「そうか…ではお茶を入れよう」

「…ありがとうございます」

そう晃さんにお礼を言い、軽くけのびをする。

いやー、本当に疲れた…次から次へと問題が発生してそれを処理しつつ、リンクヴレインズの復興作業を進めるために再構築プログラムのストックを流し込んだりと本当に忙しかった。

ただ、その甲斐があったのか、大分仕事が楽になってこうして客間でゆっくりできているわけだ。

「ありがとう、侑哉君…君のおかげで大分負担が減った」

「そう言ってもらえると頑張った甲斐があります」

「それにしても驚いたな、君があそこまでネットワークシステムが得意だったとは…できればこのまま我が社で働いてほしいぐらいだ」

「あはは…まあ、将来の進路の一つとして考えておきます」

「ああ、君が来るのを待っているよ」

そう言つて、晃さんは笑みを浮かべる。

「…それはそうと、復興作業の方はどうですか？」

「ああ、君のくれたプログラムのおかげで、作業は順調に進んでいるよ」

「そうですか…それなら良かったです」

本当に良かった、まさか、葵達を救うために念のため作っておいたプログラムがこんなふう役に立つとは。

「そういえば、他に何か手伝えることはありますか？ここまで来たからにはとことんまで付き合いますよ」

「そうか…では、いくつかアイデアを考えてもらつて良いだろうか？」

「アイデア…？何のアイデアですか？」

「新しくオープンするリンクヴレインズのアイデアだよ、今回君を呼んだのはそのアイデアを考えてもらおうという理由もあつたんだ」

「なるほど…わかりました、ちよつと考えてみます」

新しくオープンするリンクヴレインズのアイデアか…そうだな、俺がやつてほしいことならあるにはあるけど…まあ、とりあえず言うだけ言つてみるか。

「定期的に何かしらのイベントを開催するとか…後、もっと他の人にスピードデュエルを楽しんでもらう為に安全性を強化するとかどうでしょうか？」

「なるほど…スピードデュエルの安全性を強化するのは確かに重要だな…ちなみに、イベントとは具体的にはどんなことをするんだい？」

「そうですね…例えば、デュエルするとポイントが入つて、そのポイントを使って欲しいカードとかと交換できるようにして、そのポイントを大量に手に入れられるイベントを開くとかですかね…後は、大会みたいなものを開くのも面白いと思います」

そんなふう思いついた内容を口にする。

ただ、内容としては誰にでも思いつきそうな内容で我ながら、もう少し別のアイデアはないのかよ、と思わずにはいられない。

でも、晃さんはそうでもないのか、俺の話しを真剣に聞いてくれたいた。

「なるほど…確かにそれは盛り上がりそうだ、ありがとう侑哉君、とても参考になったよ」

「いえ…気にしないでください」

晃さんとそんな会話を交わしていると、ふと、近くの時計が目に入り、その時計の示す時間に思わず絶句する。

「やっぱ…もうこんな時間か…すみません、晃さん、俺はこれで失礼しますー!」

「…うん? そうか、もうこんな時間か…ありがとう、侑哉君、今日は急に呼び出してすまなかつたね」

「いえ、大丈夫です…また、何かあったら連絡してください、俺のできる範囲でなら協力しますから」

「ああ、ありがとう」

俺は晃さんに一度お辞儀をして、部屋から出ていった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ふう、ただいま…」

「お帰りなさい、侑哉!」

「あれ? 葵、家に来てたのか…」

「うん、今日は兄さんの手伝いで侑哉がSOLテクノロジー社に行っていたのは知ってたから、夕飯ぐらいは私が作ろうと思って…」

「そっか、ありがとな…葵!」

「どういたしまして! さ、もうご飯はできてるから早く入って!」

そう言っつて、笑みを浮かべながら葵は俺に家に入るように促した。

まるで、新婚さんみたいなやりとりにとどことなく恥ずかしさがこみ上げてくる。

「あ、そうだ…」

「ん? どうしたんだ?」

俺がそう言うと同時に頬に柔らかな感触が襲ってくる。

「…お帰りのキス、してなかったから…」

葵は顔を真っ赤にしながらそう言った。

やばいな…ただでさえ、恥ずかしいのにさらに恥ずかしくなってきた。

「お、おう…ありがとう」

多分、今の俺は顔が真っ赤になっていと思う。

恥ずかしさが限界突破して、おかしくなりそうだ。

…とりあえず、ご飯を食べにいかないとな。

そう思つてリビングへと向かおうとして、ふと立ち止まる。

「葵、愛してるよ」

「へっ!?!」

俺の言葉に驚いたのか、葵はさらに顔を真っ赤にしながら、そんな声を上げる。

「わ、私も愛してるわ…侑哉」

そう言つて、葵は恥ずかしそうに視線を逸らす。

やばい、これ以上は本当にやばい…葵が可愛すぎてメンタルがやばい。

「そ、それじゃあ、早く夕飯を食べようか!せっかくの料理が冷めちゃうしな」

「そ、それもそうね…今日はオムライスを作つたの…侑哉の口に合えば良いんだけど…」

「オムライスか!俺の大好物だよ!ありがとな、葵」

「そう、それなら良かった…せっかくだし、私が食べさせてあげようか?」

「それは勘弁してくれ…これ以上は俺のメンタルが持たない」

そんな会話を葵と交わしながら、俺達はリビングへと向かった。

いつか訪れるかもしれない未来を思い描きながら。

第54話　　ある世界の物語　続（前編）

それは、いつも通りの日だった、そんないつも通りの日にそれは起こった。

「侑哉！よく聞いて！私は未来からタイムリープしてきたの：明日にはハノイの塔が起動して、侑哉が…」

「うん？急にどうしたんだ？ハノイの塔はとっくにプレイメーカーの活躍で止まったじゃないか：寝ぼけてるのか？」

急にまくし立てるように、俺にタイムリープしてきたと話す葵にそう返す。

「え…？止まった？ハノイの塔はもうないの？でも、私は確かに花恋さんの作ったタイムリープマシンで…」

困惑した様子で、1人でぶつぶつと葵はそう口にする。

…もしかして、ここに居る葵は…：そうだとすれば色々と辻褃は合うな。

「…葵、もしかして、お前は別の世界から来た葵なのか？」

「…多分、そうかもしれない…」

「なるほど、とりあえず、話を聞かせてくれ…」

「うん…」

そうして、葵は自分に起きた出来事に話し始めた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「…と、いうわけなの」

「なるほどな…つまり、お前は俺が意識を失うという未来を変えるためにタイムリープを繰り返していた：だけど、何度やっても俺を助けることができなかった…：そして、またタイムリープをしたらここに居たってことか」

葵の話によると、葵の世界で俺がスペクターと戦い、そのダメージが多すぎたせいで、意識を失ったらしい。

そして、花恋が以前作った異世界へと行ける装置を改造し、タイムリープマシンを作成し、タイムリープを行ってみたみたいだ。

そして、今までに何度もタイムリープを繰り返してきた。

「…なるほど、とりあえず葵がこちらの世界に来た理由はなんとなくわかった」

「どういう理由なの？」

「タイムリープマシンは元々、異世界に行ける装置を改良したものなんでしょう？だとすると、何らかの誤作動が起きて、装置の本来の機能が発揮されて、タイムリープと同時に俺達の世界に来たんだと思う」

「なるほど…どうしたら元の世界に戻れるの？」

「多分、時間が経てば元の世界に戻れると思う…1日か2日ぐらいか…もしかしたら、もつと早いかもしれないな…まあ、どちらにせよ対策を考える必要があるな」

今の葵の状況はシュタインズゲートに酷似している…恐らく、葵の世界では世界線の収束が起きている可能性が高い…このまま帰ってしまうえば、何の対策もできず無限にタイムリープを繰り返すことになるかもしれない。

それだけは避けないとな。

それにしても…あつちの俺は世界線の収束が起きているかもしれないって可能性に至らなかつたのか？

まさか…あつちの俺はシュタインズゲートを知らないのか？でも、そうか…多分、俺もシュタインズゲートを知らなければ、世界線の収束とか考えもしなかつただろうし。

ということとは、世界線の収束を乗り越える方法も知らないってことか…これは少し不味いかもな。

「…まあ、とりあえず…お前がタイムリープで経験したことを教えてくれないか？辛いことを話させることになるかもしれないけど…」

「…うん、わかつた…話すわ」

葵はそう言つて、一度深呼吸をして、語り始めた。

「まず、初めてタイムリープした時は…」

／／／／／／／／／／／／／／／／

「…と、大体こんな感じよ」

「ふむ、なるほど…」

葵の話しを聞きながら、葵がタイムリープした時の経験を図式的に

纏めていく。

そうして、纏めていくにつれて葵が何度もタイムリープを繰り返していることが改めてわかった。

何度も何度も、それこそ気が遠くなるほどに葵はタイムリープを繰り返していた。

「よく、ここまでタイムリープを繰り返せたな…普通なら、心が折れるぞ…」

「じゃあ、聞くけど…もし、侑哉が私と同じ立場なら諦められる？」

「…いや、意地でも葵を助けようと思うよ」

葵の質問に俺はそう返す。

実際、葵と同じ立場になったら俺も葵を全力で助けようと思うと思う。

…さて、葵の話しをここまで聞いた限りだと、やっぱり世界線の収束が起きていると見て間違いない。

ただ、葵が繰り返したタイムリープの中で一つだけ抜け道を見つけた。

それは、一度目のタイムリープの時だ…その時の葵はあつちの俺のアドバイスを受けて、デツキ編成をしてスペクターに勝利している。

そして、重要なのはその後だ…その後、葵は意識を失っている俺を見ている…だけど、その時の俺が誰に意識を奪われたのか、いつ意識を奪われたのか…それを葵は見えていない。

他の世界線では、葵は必ず俺が意識を失う瞬間を目撃している…だけど、最初のタイムリープの時だけは葵はそれを見ていない、だからこそ、今の俺の知る限りではそれ以外に抜け道は見当たらない。

…ふう、とりあえず抜け道は見つけた、後は花恋とレイに頼みごとをしないとな…再びあつちの俺と葵の時間を動かすための下準備だ。

「…葵、聞いてくれ、今さらだけど葵達の世界には世界線の収束が起きているかもしれない」

「世界線の収束…？」

「ああ、簡単に言えば、どれだけ過去を改変しようとしても、結局は一つの結果に収束するってことだ…そっちの状況で言うなら、どれだけ

過去を改変しようとしても、俺が意識を失うという結果に収束するって感じだな」

「そんな…！それじゃあ侑哉を助けることはできないの!?!」

明らかに動揺した様子で葵がそう口にする。

無理もない、だって今の言い方はあつちの俺を救う方法はないと言っているようなものだ…だからこそ、俺は自信を持ってこう口にする。

「…いや、方法はある」

「本当に!?!」

「ああ！もちろんだ！だけど、その前にまずは葵がスペクターに勝利すること、これが重要だ…葵が勝利しない限り、未来は変わらない」

「私が勝利すれば…そうすれば未来は変わるの?」

「確実とは言えないけど、少なくとも可能性は広がる」

「そう…わかった！私、絶対にスペクターに勝ってみせるわ！それで、必ず侑哉を救ってみせる!」

そう言つて、葵はこの世界に来て、初めて自信満々に声を上げた。

その瞳は、希望に満ちていた。

「ああ、頑張れよ…それじゃあ、俺はちよつと準備を進めてくる」

「うん…ねえ、侑哉…」

「どうした?」

「ありがとう…!」

そう言つて、葵は満面の笑みを浮かべた。

その笑顔もこの世界に来てから初めて見せた笑顔で、思わず笑みが零れる。

「どういたしまして!それじゃあ、ここで待っていてくれ」

「わかった!ここで待ってるわね」

「ああ、悪いな…」

そう言つて、俺は部屋から出ていき、外に出る。

そして、そのまま花恋へと連絡する。

しばらくすると、花恋の声が聞こえてきた。

『もしもし?どうかしたの?侑哉』

「花恋、今どこに居る？」

『草薙さんのお店よ、ちょうど今、遊作君に勉強を教えているところ』
「そうだったのか…」

マジか…遊作にちよつと申し訳ないことしちやつたかな？

まあ、でも今は勘弁してもらおうしかないな。

『それで、どうしたの？』

「大至急で頼みたいことがあるんだけど…頼めるか？」

『もちろん！任せて！それで頼みたいことって？』

「実は…」

／／／／／／／／／／／／／／／／

「侑哉達、遅いわね…」

侑哉が準備を進めてくると言つて、どこかへ出掛けた後、花恋さんと侑哉が戻つてきてそのまま、地下の隠し部屋へと移動し、かなりの時間、私は1人で待っていた。

どうやら、侑哉は花恋さんに私のことを話して、私達のことを助けてようとしてくれていたみたいで、思わず笑みが零れた。

別の世界だろうと、やっぱり侑哉は侑哉なんだなって、そんなふうに思ったから。

正直に言つて、いくら私達の世界が大変なことになつていても、こつちの侑哉にとつては関係ないと思うし、迷惑を掛けるのは何だか申し訳ない。

でも…多分、侑哉はそんなことを気にしなくて良いつて言つてくれるんだろうなあ…本当に優しすぎるくらいに優しい。

「悪い、葵…待たせちやつたな」

私がそんなことを思っていると、侑哉が戻ってきた。

ただ、その侑哉の姿に少し違和感を覚えた。

「ううん、気にしないで…とこころで侑哉、何で白衣を着てるの？」
隠し部屋から出てきた侑哉は何故か、白衣を着ていて少し驚いてしまった。

まあ、侑哉の白衣姿もなかなか様になつていてカッコいいけど。

「ああ、ちよつと雰囲気を出すために、花恋が持つていた白衣を借りた

んだ：サイズが合うやつがあつて助かったよ」

「雰囲気：？」

「シユタインズゲートの鳳凰院凶真みたいな感じにしたくてさ：まあ、この世界にあるかはわからないけどシユタインズゲートのアニメは見ておいて損はないと思うぞ、めっちゃ良いアニメだから！」

「そうなんだ：侑哉がそんなにオススメするんだから、本当に良いアニメなのね」

「ああ：と、そういうえば後どれくらいこっちに居られそうなんだ？」

侑哉はそう言つて、私の方を見る。

「：多分、もうすぐ戻るようになると思う：」

実際、侑哉達を待つていた間に何度か意識が引き戻されるような感覚に襲われた、多分もう時間がないんだと思う。

「そうか：まあ、一応こっちでできる準備は全部済ませたからそこは安心してくれ：ただ、俺の考えた方法で確実に成功するかと聞かれたら断言はできない」

「そうなのね：ねえ、侑哉：あなたの考えた方法つてどんな方法なの？」

「それは、すべてが終わつたらわかると思うよ：それまでのお楽しみさ」

そう言つて侑哉はからかうように私に笑みを向ける。

むう：何かはぐらかされた気がする：でも、侑哉のことだから何の考えもなしに動くとは思えないし、きっと何か策があるんだと思う。

なら、私はそれを信じるだけだ。

「あ、そうだ葵：一つ言い忘れてた」

「うん？」

「さつきも言った通り、確実に成功するとは言えない：だけど、もし失敗しても諦めないでくれ：諦めずに挑み続ければ必ず道が見えてくる：まあ、葵に辛い選択を押し付けているように聞こえるかもしれないけどな」

侑哉はそう言つて、申し訳なさそうな表情をする。

本当に侑哉は優しいんだから：これは私達の問題で本来、別の世界

線の侑哉には一切関係ないことだ、むしろ、こうしてこの世界の侑哉に頼ってしまっている時点で私に非がある。

「…そんな顔をしないで、侑哉…私は諦めるつもりはないわ…何度失敗したって何度だってやり直す！諦めたりしない！だから、侑哉…そんな顔をしないで」

「…ああ、そうだな…ありがとう、葵」

「どういたしまして！…っ！そろそろ時間みたい…」

侑哉とそんな会話を交わしていると、再び意識が引き戻されるような感覚に襲われる。

これは、もう抗えない…タイムリミットが来たんだ。

でも、この世界に来て良かった…もしかしたら、未来を変えられるかもしれない、未来を変えることはできないと、諦めかけていた気持ちに再び火が灯った。

別の世界だったとしても、侑哉が無事でいる未来を見ることができた…なら、私達の世界でもその未来にたどり着ける…そんな希望を抱けるようになった。

最後に…単純に侑哉と話すことができたこと、それが嬉しかった。

だから、私は絶対に諦めない…私達を救おうとしてくれたこの世界の侑哉の為にも！

「頑張れよ、葵」

最後に侑哉のそんな声を聞きながら私は意識を手放した。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「…戻ってこれたみたいね」

意識が覚醒すると同時に目に入ってきたのは侑哉の部屋、何度もタイムリープを繰り返したこともあってかその光景をとて懐かしく感じてしまう。

今までのことから考えるに、そろそろ侑哉が部屋に戻ってくる。

「待たせてごめん、葵…飲み物とか用意するのに時間が掛かったっちゃってさ」

そう言っ、侑哉は今までと同じように部屋へと入ってくる。

「気にしないで…ねえ、侑哉…あなたに話したいことがあるの」

「うん？何だ？」

「私は未来からタイムリープしてきたの」

「え……？」

／／／／／／／／／／／／／／

「なるほどな……そんなことがあったのか」

葵から聞かされた話しに俺はそんな言葉しか出せなかった。

葵が俺を救う為に何度もタイムリープを繰り返した事、タイムリープをした時の経験……そして、先ほどまで別の世界の俺からアドバイスをもらっていたことなどを聞かされた。

「うん……あつちの侑哉の話だと、私達の世界には世界線の収束ってやつが起きていて、どれだけ過去を改変しようとしても侑哉が意識を失うという結果に収束するらしいの」

「え!?それじゃあどう頑張っても未来は変わらないのか?」

「ううん、方法はあるって言った……詳しい内容は教えてくれなかったけど、私がスペクターに勝つことが重要だ……私……私が勝つことで可能性が広がるって」

「そうか……」

そう返しながら、俺は別の世界の俺が考えた方法を考える。

葵が勝つことが重要……葵がスペクターに勝った世界は初めて葵がタイムリープを行った時のことが一番に考えられる。

その時の葵はスペクターに勝った後、俺が意識を失って倒れているところを見たんだよな……それじゃあ今までと何も変わらないんじゃない……

ダメだ……別の世界の俺の考えがいまいち読めない……別の世界の俺、頭良すぎだろ。

「ん?メッセージか?」

俺が別の世界の俺の考えを読もうと四苦八苦しているとメッセージが届く音が響く。

届いたのは二つのメール、俺は少し警戒しつつも、一つ目のメールを見る。

部屋を出て

メールを開け

葵にバレずに

書かれていたのは、こんな文章…葵の話しを聞いた限り、考えられるのは別の世界の俺からのメッセージだ…でも、何で葵にバレたらダメなんだ？

まあ、指示を聞いておいた方が良いな…あつちの俺が俺達を救う為に何か手を打っているのかもしれない。

「…悪い、葵…ちよつと知り合いから連絡が来た、すぐに戻るから待っててくれ」

「…うわかった、ここで待つてるわ」

俺は葵にそう断りを入れて、部屋から出ていった。

そうして向かったのは、トイレだ…家の中で一番、誰にも会話を聞かれなさそうな場所はここ以外には思いつかない。

一応、ここに来るまでに葵や花恋がつけてきていないか確認したが、つけてきている様子はなさそうだった。

「よし、もう一つのメールを確認しないと」

俺はそう呟いて、トイレに入り、カギを閉めた。

そして、そのままメールを開く…すると、何かの映像が映しだされる。

所謂ムービーメールだろう、俺は少し緊張しながら、ムービーメールを見つめる。

『初めましてだな、別の世界の俺…このメールを開いているってことは葵から大体の話しを聞いていると思ってるって良いな』

ムービーメールに映し出されたのは何故か白衣を着ている俺の姿…って何で白衣!?別の世界の俺は科学者か何かなのか？

『まあ、俺の格好は気にするな…雰囲気を出したかっただけだからな』その言葉を聞いて、思わずズッコケそうになる。

雰囲気を出したかっただけ…まあ、ある意味俺らしいかもしれないけど。

『話しを戻すぞ、葵から聞いているかもしれないがお前達の世界には世界線の収束が起こっている可能性が高い…このままでは未来を変えられることはできない』

「でも、確か方法があるって葵から聞いたぞ」

『まあ、葵から聞いているだろうけどな…はつきり言う方法はある、お前達は方法を間違えていただけだ…今からその方法について説明する』

「ああ、頼む」

さつきからムービーメールの俺に対して応答する形になってしまっているが、細かいことは後回しだ…今は、別の世界の俺から方法を教えてもらうしかない。

『確定した過去を変えずに結果を変えろ…それがお前達の未来を再び動かすはずだ…葵がタイムリープしてきた中で一つだけ抜け道が存在している…それは葵がスペクターに勝利した時だ、その時の葵は意識を失って倒れているお前を見ている…だが、いつ、誰に、どんな風に意識を奪われたかは見ていない…つまり、葵が勝利した場合に限り、その過去は確定していない』

「うん？よくわからないな…スペクターに勝利したってことは、一度目のタイムリープのことを話しているのはわかるけど、それがどうして抜け道になるんだ？」

『これが抜け道になる理由は、あくまで、このタイミングで確定している過去は意識を失ったお前と、それを見た葵だけだ…わかりやすく説明すると、お前は意識を失ったんじゃない、寝ているフリをしているだけなのに、葵がそれを見て、意識を失ったと勘違いした…そんな可能性もあるということだ』

「…あ、そういうことかー」

わかりやすく説明されてようやく理解できた。

今までの葵は俺が意識を失うのを目の前で見ている…だけど、一度目のタイムリープの時は葵はあくまで意識を失った俺を見ていただけで、意識を失う瞬間を見ていない、つまり、本当に俺が意識を失ったかは確定していない。

そうか…これが確定した過去を変えずに結果を変えることに繋が
るのか…マジで頭良すぎだろ！別の世界の俺！仮に何かしらの元ネ
タがあったにしても、短時間で抜け道を見つけ、しかもその対策を考
える…簡単にできることじゃない。

『…これより、世界を救済する者計画《オペレーションメサイア》の概
要を説明する…確定した過去を変えずに結果を変えろ！ただし、俺達
には未来からの助っ人もいなければタイムマシンだつて持つていな
い…ならば、方法は一つ、お前自身が葵を騙すしかない…方法は問わ
ない、スペクターに勝利した葵にお前が意識を失っていると観測させ
ろ』

「葵を騙すか…なんとなく予測していたけどやっぱりそういう手しか
ないんだな」

『そして、その後1ヶ月の間意識を失っているフリをして葵がタイム
リープをしようとしている所を止める…そうすることでお前達の時
間は再び動き出す』

「俺達の時間が動き出す、か…」

そうだな…俺がハノイの塔で意識を失ってから俺達の時間は止
まったままだ。

そういう意味では、今の俺達は遊作と同じような状態かもしれない
な。

『葵に詳しい概要を説明しなかったのは、葵に知られたらこの作戦そ
のものが成り立たなくなるからだ…ただ、葵にも言ったがこの作戦が
確実に成功するかはわからない、何せ今回みたいなパターンは俺も知
らない…だが』

『少しでも可能性があるなら、俺はそれに懸ける』

『…そうだろう？』

「うん…やっぱりこのメールを送ってきたのは俺だな…別の世界の俺
もこここの俺と大差ないな」

今さらだけど、改めてそんなことを思った。

『それじゃあ健闘を祈るよ、別の世界の俺…世界を欺く最高のエンタ
メ、成功させてくれ…エル・プサイ・コングルウ』

最後に謎の合言葉と共にムービーメールは終了した。

「…ありがとな、別の世界の俺…」

ムービーメールを見た俺はそう言っ、別の世界の俺にお礼を口にする。

もし、別の世界の俺が作戦を考えてくれなければ、何もできずただ、葵を苦しめることになったかもしれない。

だからこそ、俺は礼を言わずにはいられなかった。

ただ、一つだけ気がかりなことがある。

それは、別の世界の俺は1人で何でも背負い込んでしまっていないかだ。

多分、あつちの俺はどの世界の俺よりも頭の回転が早いし、どの世界の俺よりも規格外だ…だからこそ、色んな人から頼りにされ、それに応えようとして、ボロボロになるんじゃないかと不安だった。

まあ、葵や花恋…遊作達も居るし、頼りになる人達はいっぱい居るから心配はないかもしれないけど。

「…とにかく、俺は俺の出来ることをするしかないよな…そうじゃないと、別の世界の俺に申し訳ないもんな！」

俺はそう言っ、気合いを入れ直す。

世界を欺く最高のエンタメ…やってやろうじゃないか！お楽しみはこれからだ！

第54話 　ある世界の物語 　続（後編） 　

「…あつちの俺は大丈夫かな？」

別の世界の俺へとメールを送ってから、しばらくしてそう呟く。とりあえず、俺に出来るのはここまでだ。

後は、あつちの俺次第だ…上手く成功させろよ、神薙侑哉。

「侑哉？もしかして、さっき話してくれた別の世界の私達のことを考えてたの？」

「ああ、上手くいっていると良いんだけど…」

葵に尋ねられそう答える。

あつちの葵が元の世界に戻った後、しばらくして葵が目を覚ました。

葵はここ数時間の記憶が抜け落ちていたらしく、最初は混乱していたが別の世界の葵が来ていた話しをすると、納得してくれた。

「むう…」

「葵？何で怒っているんだ？」

「…別に」

「まさか、別の世界の自分に嫉妬してるとか？」

「……………」

凶星かよ…別の世界の自分に嫉妬か…うん、何とかそういう葵も可愛いと思ってしまう。

あはは…我ながら葵にベタ惚れしすぎじゃないかと思う。

「…心配しなくても、俺が1番好きなのは今、俺の目の前に居る葵、ただ1人だけだよ」

「…本当に？」

「こんな状況で嘘をつく必要はないだろ」

「…っく！侑哉！」

俺の言葉に葵は顔を真っ赤にしながらそう口にする。

やばいな、葵が可愛すぎて、俺の理性が持つか心配になってきた。

…まあ、ともかく頑張れよ、別の世界の俺…こっちはこっちで頑張るからさ。

俺はそんな風に別の世界の俺にエールを送りながら、自分の本能との戦いを続けることになった。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「…そんな…また失敗した…せつかく別の世界の侑哉が力を貸してくれたのに…」

スペクターとのデュエルに勝利した葵は、倒れている俺の姿を見て、そう口にする。

…ごめんな、葵、これも未来を変える為なんだ。

今、まさに俺は意識を失っているフリをしている…：罪悪感が半端ないけど、未来を変える為に必要なことだ。

「…まだ、こんなところで諦めるわけにはいかない！タイムリープマシンを使って、今度こそ侑哉を助けないと…待っててね、侑哉…絶対助けてみせるから！」

葵はそう言って、ログアウトしていった。

うわあああ！罪悪感が半端なすぎるよ！申し訳なすぎで、思わず葵にネタバレしそうになっちゃったぐらいだよ！

『侑哉さん、葵さんがログアウトしましたよ…もう起きても大丈夫です』

「あ、ああ…何というか罪悪感が半端ない」

『あはは、確かにそうかもしれないね…私も最初に聞いた時はびつくりしましたし』

そう言って、レイは苦笑にも似た微笑みを浮かべる。

別の世界の俺からメールを受けとった後、レイに作戦の概要を説明した。

最初こそ、レイは驚いていたが、ムービーメールを見せたら信じてくれた。

そんなこんなで、今に至るわけだ。

『そういうえば、この後はどうするんですか？ログアウトして葵さんに真実を話すんですか？』

「…いや、まだ早い…一ヶ月間、リンクヴレインズにログインして、その後話すよ」

『なるほど…確かに現実世界で1ヶ月も意識を失ってるフリをするのは不可能ですしね』

「ああ、絶対どこかでボロが出るからな…もし、意識を失っていないと葵にバレたら今までの苦労が全て無駄になっちゃうからな」

現実世界で1ヶ月も意識を失ったフリをするのは不可能だ、だけど、リンクヴレインズにログインしている間は現実の俺は意識を失ったままだ。

これが、俺の考えた葵を騙す方法だ。

「この1ヶ月の間はレイ、お前に現実世界とリンクヴレインズを行き来してもらおう事になるけど大丈夫か？」

『はい！お任せください！これは私にしか出来ないことですから！』

そう言つて、レイは笑みを浮かべる。

そんな風に自身満々に言つてくれるなら安心できるな…本当にいつも頼りになるな、レイは…

『そういえば侑哉さん、ハノイの塔の影響でリンクヴレインズを復興させるためにリンクヴレインズを閉鎖する可能性が高いですけど…それはどうするんですか？』

「…さすがに閉鎖を止めることは出来ないから、リンクアクセスの力を使って、俺達専用の空間を作りあげるつもりだ…そして、そこで1ヶ月間過ごす」

俺の持っているリンクアクセスはあらゆるネットワークシステムを自在に操ることができる力だ、その力を使えば、俺達専用の空間を作りあげることにも可能はずだ。

まあ、いくらアバターでも空腹とかは感じるだろうから霸王の力で非常食のカードを出したりして、過ごすしかないな。

はあ、この作戦思ったよりも難しいな…俺がリンクアクセスや霸王の力を持つていなかったら不可能だったぞ…いや、持つていると確信していたからこそ、この作戦を考えたのか、別の世界の俺は。

「…なあ、レイ…あつちの俺の印象ってどんな感じだ？」

『…あちらの世界の侑哉さんですか？そうですね…一言で言うならすごい人ですかね…』

「…うん、俺もそんな感じだ…ただ、正直心配にもなるんだよな…あつちの俺は凄すぎる…それだけに色々と苦労もあるんじゃないかってさ」

『そうですね…なら、今度は侑哉さんがあちらの侑哉さんを助けてあげれば良いんじゃないですか?』

「俺が…? まあ、確かにあつちの俺を助けたい気持ちはあるな…うん、そうだな…こつちの問題が解決したら今度は俺があつちの俺を助けるか!」

『はい! 今度は私達があちらの侑哉さんを助けましょう!』

「ああ!」

まあ、どこまであつちの俺の助けになれるかはわからないけど、助けてもらったお礼をしないわけにはいかないよな。

俺はそんな風に思いながら、1日を終えた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「花恋さん…タイムリープマシンは完成しましたか?」

「もちろんよ…ねえ、葵ちゃん、本当に行くつもりなの?」

そう言つて、花恋さんは心配そうに私を見る。

こうして、花恋さんに心配されるのは何度目だろう…タイムリープを繰り返していたせいで、もう正確な数なんてわからない。

諦めるつもりは毛頭ないけど、後何度繰り返しせば私達の未来は変わるのかな…このまま、永遠に未来は変わらないのかな。

「…ううん! 変えなきゃ! 私は絶対に諦めない!」

そう言つて、再び私は自分を奮い立たせる…必ず侑哉を助ける、それだけを思い続けて。

「…待てよ、葵」

「え…?」

聞き覚えのある声にタイムリープマシンを着けようとした手が離れる。

今の声は…!

「よっ、葵…えつと、ただいま?」

思わず後ろを振り返ると、私はずっと助けようとしていた…ずっと

こんな風に声を掛けて欲しかった大切な人の姿だった。

「侑哉……」

私はそう名前を呼んで、最愛の人を抱きしめる。

目の前が霞んで見えなくなる……ああ、泣いているんだ……私。

そう思うと同時に、涙が溢れて止まらなくなる……とつくに涙は枯れてしまったと思つてた……何度もタイムリープを繰り返して、何度も侑哉の結末を見て、徐々に心が壊れていくのを感じていた。

だから、こうして涙が溢れてきて、ようやく私達の時間が動き始めたんだと実感できた。

「侑哉……おかえり……」

「ああ、ただいま……葵」

そう言つて、侑哉は私を抱きしめて、私が落ち着くまで頭を撫で続けてくれた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「落ちついたか？」

「うん……ありがとう、侑哉……」

「それなら良いんだけど……」

「うう……また泣きそう……」

「え!？」

私の言葉に侑哉がそんな驚きの声を上げる。

しょうがないじゃない! 侑哉とまたこんな風に話せるなんて夢にも思つてなかったんだから!

侑哉が居る……私の目の前に……

「グスン……侑哉……本当に良かった……良かったよお……」

「安心しろつて! ちゃんと俺はここに居るから! だから落ち着け……葵」

「う、うん……わかつてはいるんだけど……やっぱり……嬉しくて……」

ダメだ……また涙が出てきちゃう。

「……お疲れ様、葵……よく頑張ったな……お前が諦めなかったから、別の世界の俺も作戦を考えられたし、その作戦のおかげで俺達の時間は動き出したんだ……ありがとな、葵」

「うん…本当に良かった、諦めなくて良かった…」

もし、どこかで私が諦めていたらこの未来は訪れなかった…でも、そんな風に諦めずにいられたのは侑哉が居たから…諦めそうになった私を侑哉が励ましてくれたから。

「そうだ…結局、葵には作戦のことを話してなかったよな…聞きたいか?」

「…うん!聞きたい…聞かせてくれる?」

「ああ、もちろんだよ!」

そう言葉を返して、侑哉は別の世界の侑哉が考えた作戦について話してくれた。

どうやら、別の世界の侑哉が考えてくれた方法は確定した過去を変えずに結果を変えろというもので、その為に別の世界の侑哉は私を騙す為に意識を失ったフリをするように侑哉へとムービーメールで伝えた。

それを聞いて、別の世界の侑哉が口にしてた言葉についてようやくわかった。

『それは、すべてが終わってからわかると思うよ…それまでのお楽しみさ』

本当にすべてが終わってからわかった…だけど、あえて、あのタイミングで私に話さなかったのは、別の世界の侑哉がムービーメールで言っていた通り、私に計画を知られると、計画そのものが成り立たなくなるからなんだと思う。

だからこそ、私には詳しい説明はせずに侑哉にムービーメールを送った。

「…なるほどね…本当に別の世界の侑哉には感謝しないといけないわね」

「ああ、俺もそう思う…だから、今度は俺達があっちの俺に協力しよう」

「うん、そうね…でも、どうやって協力するの?」

「とりあえず、花恋に別の世界の俺に何かしらのメッセージを送れるようにしてもらおうつもりだ」

「なるほど…確かにそれならこつちからあつちの侑哉達に色々アドバイスが出来るわね！」

「そういうこと！正直、それ以外に俺達に出来ることって思いつかないしや」

「確かにそうかもしれないわね…」

実際、侑哉の言う通り私達に出来ることはそれぐらいしかない。

「ま、この話しはとりあえず終わりにしてっと…今からどこかに行かないか？」

「…今日は良いわ…今日は侑哉と家でゆっくりしたいから…ダメ？」

「いや、それで良いよ…それじゃあ、今日は一緒にお家デートといこうか！」

「うん！」

——こうして、私達の時間を越えた長い旅はようやく終わった。

ようやく動き始めた時間の先に何が待っているのか、それは誰にもわからない…だけど、今はこの幸せを噛みしめたい、そう思った。

「ねえ、侑哉…」

「うん？」

「大好き…この世界の誰よりも、侑哉のことが大好き！」

「…俺も誰よりもお前が大好きだよ、葵」

／／／／／／／／／／／／／／／／

こうして、この世界は一つの結末を迎えた。

所謂、ハッピーエンドという形の結末で。

だが、救われた世界があるならば、救われなかった世界もまた存在する。

「…はあ、嫌な夢を見ちゃったな…」

『マスター、またあの夢を見たのか？』

「そ、別の世界線の夢…いや、財前葵の夢かな…本当に迷惑な記憶…」
そう言つて、少女は心底迷惑そうな顔をする。

その少女はダークナイトプリンセス、神薙侑哉を愛してやまない少

女だ。

「この記憶のせいで、どれだけ私が嫉妬に狂いそうになったことか……まあ、ある意味そのおかげで自我を保てたとも言えるけど」

『まったく、お前という女は……』

ダークナイトプリンセスの精霊である、オルフェゴール・ロンギルスは呆れたようにそう呟く。

「まあまあ、それよりも楽しみだね♪私がいきなり現れたら、侑哉はどんな反応をするのかなあ♪」

『そもそも、あの少年がマスターを覚えているかはわからないがな』

「は？いきなり何を言い出すのかなあ……侑哉が私を覚えていないなんてあるわけないじゃん……♪」

『っ……！』

ダークナイトプリンセスの急激な変化にロンギルスは思わずたじろぐ。

彼女の声音には明らかに殺意があり、それを隠すつもりもなく、笑みを絶やささない。

その光景がとても恐ろしいものに見えて、ある程度彼女のことを知っているロンギルスでさえ、恐怖した。

(……相変わらず神薙侑哉に関することには、過剰に反応を示すな……極力、マスターの地雷を踏まないように気をつけなくては)

『すまなかった……そうだな、マスターを忘れるはずがないな』

「当たり前でしょ？まあ、今回は許してあげる……ふふふ、楽しみだなあ……早く学校が始まらないかな……そうすれば毎日、侑哉のことを見られるのに……」

『マスター、お前は何故、あの少年に執着するんだ？言っておくが、あの少年を悪く言っているわけではない……むしろ、好感が持てる少年だと思っっている……ただ、少し気になった』

「……侑哉が大好きだから……世界で1番大好き……侑哉さえ居てくれればそれ以外は何もいらない！世界が滅びたって良いし、他の人間がどうなろうと知ったことじゃない！侑哉は私の全てで、生きる意味……だから、侑哉を手に入れるためなら、手段を選ばない……世界を敵に回し

たつて良い…侑哉の為なら私は魔王にだつてなつてみせる」

『わ、わかつた…マスターが神薙侑哉に抱いている想いの大きさはよくわかつた』

「そ、そう？ 私からしたらまだまだ語り足りないぐらいなんだけど…まあ、準備もあるし、これぐらいにしておこうかな」

『あ、ああ…』

(あれで語り足りないのか…)

そんな事を思いながら、ロンギルスは自らのマスターの本当の想いは何なのかと思考する。

もちろん、さっきの言葉にも嘘はないのだろう…だが、彼女の根底にあるのはまた別のものである気がしてならない。

思うに、彼女は神薙侑哉に助けてほしいのではないだろうか？

ただ、純粹に自分のことを助けてほしい、それだけが彼女の願いなのだ…彼を自分のものにすることで彼に愛してもらい、自分を救ってほしい…そう思っているのかもしれない。

(…何にせよ、俺はマスターの手助けをするしかない…例え、それが間違っているとわかつていても)

そんな風に思いながら、ロンギルスは自らのマスターに視線を移す。

彼女のことを守る、そう誓うように。

第55話 不穏な影

——とある空間

「来たか、風のイグニス」

「急に呼び出すなんてどうしたんだよ、光のイグニス」

とある空間で、光のイグニスと風のイグニスが邂逅していた。

ある脅威に対抗するすべを考える為に。

「で？何の用？」

「Phantomについてだ」

「…なるほどね、確かに僕達の計画の1番の障害はあいつだよ」

「そうだ、Phantomは普通の人間とは違う…私達、イグニスと同等かそれ以上の力を持っている…それになかなか勘が鋭い」

そう口にして、光のイグニスはサイバース世界を襲撃した時のことを思い出していた。

あの時、サイバース世界にPhantomがやってきて、光のイグニス達の計画に支障をきたした。

彼は、僅かな情報から自分以外の誰かがサイバース世界に侵入したと仮定し、その対策を立てるべきだとイグニス達に提案した。

水のイグニスはその意見に賛成し、炎のイグニスもそれに概ね同意していた。

「あの時はさすがに焦ったよな、僕らの計画がバレちゃったかと思っ
たもん」

「…全くだ、おかげで計画を早めることになってしまった」

そう、Phantomの仮説により、他のイグニス達が彼に協力することになれば、サイバース世界を滅ぼすことが難しくなる、その為、計画を早めるしかなかった。

しかも、計画を早めたにも関わらずサイバース世界への襲撃は失敗したと言っても過言ではない。

Phantomの活躍により、サイバース世界への被害は最小限に抑えられ、イグニス達はそれぞれバラバラに逃げていった。

そのせいで、イグニスの中で嘘を見抜く能力を持つ水のイグニスを

取り逃がすことになってしまった。

その為、すぐに自分達の計画が露呈してもおかしくはない。

「本当に厄介なことをしてくれたよね…Phantomは早いところ消しといた方が良くないんじゃない？」

「…いや、それは難しいだろう、Phantomはカードを実体化する力を持っている…我々がどんな手を用いたとしても、そう簡単にあの男を消すことはできないだろう」

「確かに…」

「…可能ならばあの男を我々の味方にしたいところだが…」

「へえ、面白そうなこと話してるね♪私も混ぜてよ」

「…ッ!!」

背後から聞こえてきた声に2体のイグニスは驚きの声を漏らす。

何故なら、そこには長い紫色の髪に宝石のような紅い瞳を持つ少女が居たからだ。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「何故、人間がここにいる!？」

「その通りだ、この空間は僕達以外は入れないはずだ！」

「うふふ、イグニスって意外と間抜けだよね♪まあ、私の場合はたまたま見つけただけなんだけど…」

私の姿を見て、驚いているイグニス達にそう口にする。

この言葉に嘘はない、私はただロングルスに着いてきたただけだ。

まあ、その結果、イグニス達と会うことが出来たわけだからラツキーかな？

「ねえ！私もあなた達の仲間に入っても良い？Phantomを味方につけるのは大賛成だもん♪」

実際、侑哉を味方につけるのは大賛成…だけど、とてつもなく気に食わないことがある。

「…だけど、風のイグニス…あなたのことは気に食わないよ…Phantomを消すとか、ふざけたことを言わないで!!もし、またPhantomを消すと言ったり、Phantomを貶めることを言ったら…」

——先にあなたを消すからね

私はそう口にして、風のイグニスに冷たい視線を向ける、例えるなら、そう、ゴミを見るような目で：多分、今の私はそういう目をしている。

その証拠に、風のイグニスは怯えた表情を見せている。

へえ、さすがは意思を持ったAIだね：恐怖という感情もすっかり持つてるんだ：なら、もっと恐怖を刻みつけて2度と侑哉の悪口を言えないようにしてあげようかな？

「：と、ところで君は誰だ？」

風のイグニスと同様に少し怯えた表情をしながらも光のイグニスが私にそう尋ねてくる。

「私はダークナイトプリンセスだよ：それで私を仲間に入れてくれるの？」

「：何故、私達の仲間になりたいんだ？」

「：Phantomが大好きだから、私はね、Phantomを私だけのものにしたいの：その為にもまずは邪魔者を排除したい、その為にあなた達を利用しようと思ったの」

「なるほど：だが、私達が君を仲間にすることに何のメリットがある？」

「：私という戦力が手に入ることかな？私はこう見えて結構強いんだよね♪ま、Phantomには及ばないかもしれないけど他の人達には負けない自信があるし」

実際、私は侑哉に負けている：しかもノーダメージで負けちゃったからなあ。

最悪の場合は本気を出すしかないかな：それでも侑哉に勝てるかはわからないけど。

「それに、ぶっちゃけ他の人間がどうなろうと知ったことじゃないし：Phantomが私の側に居てくれれば後は別にどうでもいいから」

私がそう言うと、光のイグニス達は呆気にとられたような表情を浮かべる。

「そんなに意外だった？」

「…ああ、まさか君のような人間が居るとは思ってもいなかった」

「あつそ…それで？」

「…わかった、君を我々の仲間を迎えよう…よろしくな、ダークナイトプリンセス」

「うん、よろしくね♪」

こうして、私は光のイグニス達と手を組むことになった。

ふふふ、偶然とはいえ光のイグニス達と手を組めたのは良かったかな…アニメはハノイレンジャーの回までしか見れてなかったけど、光のイグニス達の様子を見るに人間を支配するつもりみたいだしね。

光のイグニス達を上手く利用できれば財前葵を排除できるかもしれないし、ここで手を組めたのは大きいね♪

…待っててね、侑哉…絶対に君を手に入れてみせるから。

私はそんなことを思いながら、光のイグニス達の空間から抜け出した。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「っ！何だ今の感じ…」

突然、背筋に悪寒が走り、思わずそう叫ぶ。

何だったんだ…今の…何か嫌な予感がするな。

「俺の気のせいだったら良いんだけど…とりあえず、頼みたいものもあるし花恋の所に行くか」

俺はそう呟いて、下の階にいる花恋の元へと向かった。

「どうしたの？侑哉」

「ちよつと頼みたいものがあってさ」

「頼みたいもの？」

「ああ、対イグニス用のプログラムを作ってほしいんだ」

俺のその言葉に花恋は納得したように頷いた。

「葵ちゃんの為ね？」

「ああ…了見がイグニスも俺の力を狙うかもしれないって言ってただ

ろ？それで、俺の力を手に入れる手段として1番考えられるのが葵を人質に取ることだと思っただ」

実際、葵を人質に取られたら俺は敵の要求に従うしかない、だから、そんな最悪の事態に備えて対イグニス用のプログラムを作ってもらふ必要があった。

「なるほどね…わかったわ！任せて！」

「ありがとう、花恋…本当にお前には感謝してもしきれないな」

「気にしないで、私達は家族でしょ？家族が困っていたら助けるのは当たり前よ！これからも頼ってくれて良いからね！」

そう言っつて、花恋は満面の笑みを浮かべる。

その笑顔はとても可愛くて、遊作や草薙さんが好意を持つのも仕方ないなと思わずにはいられない。

「うん？どうしたんだ？」

「…ところで、侑哉」

俺がそんな風に考え事をしてしていると花恋から声を掛けられ、そう聞き返す。

「イグニスに対する対策はそれで良いけど、SOLテクノロジー…もつと言えば人間に対する対策はどうするの？」

「そうだな…ハノイの騎士も力を貸してくれるって言ってたし、人間に対する対策は何とかなるかな…最悪の場合はリンクアクセスの力を使うなり、霸王の力を使うなりして防ぐしかないけど」

俺が常に葵の側に居れば問題はないかもしれないが、さすがに常に葵の側に居られるわけではない…それに、葵に窮屈な思いをさせたくはないしな。

それに、ハノイの騎士と遊作達の助けもあれば大抵のことは何とかなりそうだな。

まあ、俺達だけで解決できる問題は俺達で解決するつもりだけだな。

「確かに了解見君達が協力してくれるならなんとかなるかもしれないわ

ね…まあ、私の方でも方法を考えておくけど」

「ああ、頼む」

「任せて！…：そういうえば侑哉…夏休みの課題は終わったの？」

「…あ、そうだった!!やばい！早く終わらせないと!!それじゃあ、課題をさっさと終わらせてくる！」

「うん！頑張ってるね、侑哉」

「おう！」

そう言って、俺は慌てて部屋へと戻る。

何でそんなに慌ててるんだって？もうすぐ夏休みが終わるのに半分くらい課題が残ってるからだ！

最近はSOLテクノロジー社に行って晃さんの手伝いをしたり、新生リンクヴェインズのテスターを任せられることになって忙しくなってしまった。

その為、今のように慌てているというわけだ。

…って、俺は誰に説明してるんだ…まあ、良いか。

俺はそんな風に心の中で誰に向かってかわからない説明をしながら、課題を終わらせることにした。

第56話 来訪者

「う、うん…もうこんな時間か…」

目覚まし時計の音に目を覚ます。

『お目覚めですか？Phantom、いえ侑哉…』

「ん？…お前は!?水のイグニスじゃないか…どうしてここに？」

目を覚ますと何故かそこにはデュエルディスクの上に座っている水のイグニスの姿があった。

『私には真実と嘘を見抜く力があります…その力であなたの真の姿を見ました。Phantomの真の姿は神薙侑哉、それを知った私はあなたを探してここまで来ました』

「そうだったのか…でも、何で俺を探してたんだ？」

『サイバース世界を守るために戦ってくれたことに対してのお礼と、お願いしたいことがあってあなたを探していました』

「お願いしたいこと？」

俺が聞き返すと、水のイグニスは意を決して言葉を口にした。

『はい…あなたに光のイグニスと風のイグニスを止めてほしいのです』

「どういうことだ？」

光のイグニスと風のイグニス…何でこの二人を…まさか!?

「…まさか、そいつらは人間を敵視しているのか？」

『はい、おそらく何か良からぬことを企んでいるのだと思います』

「人間を支配する、とかか…」

俺が呟いた言葉に水のイグニスは視線が下に向いていて、明らかに落ち込んでいる様子だ。

そういえば、サイバース世界に行った時に会ったけど風のイグニスは人間を嫌っていたな…光のイグニスは何を考えているのかよくわからないやつだったけど。

待てよ…だとしたら、サイバース世界で戦ったやつは光のイグニスと風のイグニスの仲間か？それともイグニス達自身か？

まあ、どちらにせよサイバース世界を襲撃してきたことに変わりはない

ないが。

タイミングが良すぎるとは思っていたが、まさか二人のイグニスが仕組んだことだったなんてな。

「なるほどね、大体わかった…君に協力する、俺としてもそのイグニス達を止めるのは賛成だし」

『ありがとうございます…！』

「気にしなくて良いよ…そういえば、いつまでも水のイグニスって呼ぶのは面倒だな…名前は、そうだな…」

水のイグニスだから、水っぽい名前にしたいな…ウォーター？いや、名前としてはあんまりよくないな…そうだ！

「…決めた！君の名前はアクアだ！」

『アクア…良い名前ですね！ありがとうございます！』

「気に入ってもらえて良かったよ…それじゃあ、これからよろしくな、アクア！」

『はい、よろしくお願いします！』

水のイグニス改め、アクアは嬉しそうにそう言った。

「そういえば、サイバース世界で会った時はもう少し砕けた話し方だったのに何で今は丁寧な話し方してるんだ？」

『実は、こっちが私の素なんです…あの時はあなたが話しやすいように砕けた話し方をしていました』

「そうだったのか…まあ、俺はどちらの話し方でも構わないけどな」

『では、この話し方のままで…』

「わかった…それはそうと、アクア…炎のイグニスと地のイグニスはどうか変わったかわかるか？」

光のイグニスと風のイグニスは人間を支配する為に協力していると考えられるから、多分、同じ場所に居ると思う。

「だけど、炎のイグニスと地のイグニスはどこに居るかは想像もつかない。」

だから、アクアにそう問いかけた。

『それは私にもわかりません…ただ、あなたの力を貸して頂けたら、地のイグニスの居場所はわかると思います』

「本当か!？」

『はい、あなたの持つリンクアクセスの力はあらゆるネットワークシステムを自在に操ることができる力…その力を使えば、地のイグニスを見つげ出すことができるはずです』

「なるほどな…って、ちよつと待ってくれ!何でリンクアクセスの力について知ってるんだ?」

俺は一部の人にしかリンクアクセスについて話していかないはずだが、ハノイの騎士達のように知ることができる人は居るかもしれないが、それ以外では知ることができないはずだ。

あの時、サイバース世界に居たのは俺とレイだけだったよな…まさか!？」

『リンクアクセスの力についてはレイから聞きました』

「マジか…レイのやつ、後で説教してやらないとな…まあ、アクアにいちいち説明せずに済んだわけだしある意味良かったかな…」

それにその時の俺は一時的に現実世界に戻っていたから、レイだけを責めるわけにはいかないな。

「…とりあえず、リンクヴレインズに行つて地のイグニスを見つけ出すしかないな…何か手がかりになるようなものはないか?」

さすがにリンクアクセスの力があつても何の情報もなしに地のイグニスを見つけ出すのは難しい。

そもそも、地のイグニスがネットワーク上に居るのかも怪しい…だから、今は少しでも情報が欲しい。

『…地のイグニスに私はあるカードを託しました…そのカードの反応を辿つていけば地のイグニスの元へと辿りつけるはずです』

「なるほどな…それじゃあさっそく…」

そこまで言つて、今さらながらあることに気づいた。

「…そういえば、まだ朝ご飯食べてないな…悪い、アクア、朝ご飯食べてからで良いか?」

『もちろんです、体調管理は大事ですから』

「ありがとう、それじゃあ朝ご飯食べてくるよ!あ、そうだ…アクアも付いてきてくれ。花恋にも今このことを話しておきたいからさ」

『わかりました』

そうして、俺達は下の階へと向かって行った。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

「あ、侑哉さん！おはようございますー！」

俺達が下に降りると、エプロン姿のレイが目に入った。

「おはよう！レイ…というかいつの間に実体化したんだ？」

「いつも侑哉さんにお世話になってますから、たまには私が朝食を作ろうと思ひまして…それで侑哉さんが寝ている間に実体化しました！」

「そうだったのか…ちなみにレイは料理をしたことがあるのか？」

「…いえ、1度もありません！だけど、レシピ通りにやればうまく作れるはずですから問題ありませんよ！」

「お、おう…頑張れよ」

それって、料理が失敗するフラグじゃないよな？

そんなことを思ったが、楽しそうに料理をしているレイを見て、そんな気持ちはなくなった。

レイの料理か…楽しみにしておくか。

「侑哉、おはようー！」

「おはよう、花恋…ちようど良かった、朝ご飯を食べ終わったら聞いてほしい話があるんだけど良いか？」

「良いけど、何かあったの？」

「ああ、かなり重要な話しだ」

「…わかった、それじゃあ朝ご飯を食べ終わったら聞かせてね」

そう言つて、花恋は俺の目の前の席に座った。

「そういうえば、侑哉…今日は葵ちゃんとイベントをやる日だったわよね」

「ああ、晃さんに頼まれてな…正直、俺と一緒にやらなくても葵だけで充分な気もするけどな」

今日はリンクヴレインズでイベントをやる日で、葵と一緒に司会をやることになっている。

何でもイベントを盛り上げる為に俺の力を借りたいということら

しい。

晃さんからの頼みでもあったし、何より葵がノリノリで俺と一緒に司会をやりたいだったので、司会をやることにした。

「そうかしら？ 侑哉が参加するだけでさらに盛り上がると思うけど？」

「そうか？」

「そうですよ！ 侑哉さんが司会をするなら、もっと盛り上がりますよ！ なんなら私が侑哉さんを大声で応援しましょうか？」

「それはやめてくれ…レイ」

レイが大声で俺を応援してくれることは嬉しくないと言えば嘘になるが、さすがにそれは恥ずかしい。

「…侑哉さんがそう言うなら、デュエルディスクの中からこつそり応援しますね！」

「…はあ、わかったよ…好きにしてくれ」

結局、応援されることに変わりはないのか…まあ、レイの厚意を無下にするわけにもいかないよな。

俺はそんな風に思いながら、朝食ができるのを待つことにした。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「…馳走さまでした」

「どうでしたか？ 侑哉さん」

「ああ、想像以上に美味しかったよ！」

正直、レイがここまで料理ができるとは思っていなかった…これからはレイにもちよくちよく料理を作ってもらおうかな。

「それなら良かったです！ これからも侑哉さんの為に料理を作りますね！」

「ああ、そうだな…ちよくちよく作ってもらって良いか？」

「もちろんです！」

（ふふっ、決まりました！ 私の嫁力がどんどん上がっていますね！ 今の私の嫁力は53万ぐらいはありますよ！ 私が侑哉さんの本当の嫁になる日も近いですね！）

何故か、レイが満足そうな顔をしているが、まあ、嬉しそうだから

良いか。

「そういえば、朝ご飯を食べた後に話したいことがあるって言ったけど…」

「ああ、そうそう…アクア、もう出てきても大丈夫だよ」

『はい、初めまして、アクアです…レイとは面識がありますがあなたと会うのは初めてですね。花恋と呼べば良いでしょうか?』

「あれ?水のイグニスさんじゃないですか!久しぶりですね!」

「水のイグニス…侑哉からサイバース世界に行った時の話しは聞いていたから面識があつても不思議じゃないけど…でも、どうして侑哉の所に来たの?」

「それが二人に話しておきたいことなんだ…アクア、説明をお願いして良いか?俺よりアクアの方が上手く説明できると思うし」

『はい、わかってます…実は』

そうして、アクアは俺に話した内容と同じ内容を二人に説明してくれた。

それを聞いて、花恋は自分の予感が的中してしまった為か表情が暗かった。

「…やっぱり、そうなっちゃったのね…」

「そんなのおかしいですよ!人間とAIは仲良くなれるはずです!侑哉さんと私みたいに」

「そうだな…俺も人間とAIは分かりあえるって信じてる。だから、そのイグニス達を倒すんじゃないかって止めるんだ」

Aiやアクアみたいに人間と共存しようと考えてくれているイグニスだって居る…だから、他のイグニスとも分かりあえるはずだ。

「そうですね!人間とイグニスが仲良くなれるように頑張りますよ!侑哉さん」

「ああ、もちろんだ!」

「…そうね、これは私の責任でもあるし協力するわ」

『ありがとうございます…!皆さん』

俺達の言葉を聞いたアクアはとても嬉しそうにそう言葉を口にした。

「それじゃあ、まずは手始めに地のイグニスを探しましょうか。アクアちゃん、地のイグニスにあげたカードのデータはある？それを基に地のイグニスを探してみるから」

『はい、ここに…ですが、簡単に見つかるでしょうか？』

「安心して、侑哉が戻ってくるまでには絶対に地のイグニスを見つけてみせるわ！」

自信満々に花恋はそう言い放ち、すぐさま作業を始めた。

花恋がこう言ってるなら大丈夫だな…それじゃあ、俺はリンクヴレインズに行くとするか。

「それじゃあ、俺はリンクヴレインズに行ってくるよ」

「あ、侑哉さん、私も一緒にします！」

「ああ、頼んだぞ」

「はい！」

レイは元気よく返事をし、俺のデュエルディスクの中に入った。

「アクア、悪いが少し待っていてくれ」

『わかりました。あなたにとつて重要なことのようにですし、あなたが戻ってくるまで待っています』

「ありがとう…それじゃあ行ってくる！デツキ、セット！イントウザヴレインズ！」

／／／／／／／／／／／／／／／／

「はあ…疲れた」

「お疲れ様、Phantom…紅茶でも飲む？」

「ああ、もううよ」

イベントの司会の仕事が終わり、若干疲れてしまっている俺にブルーエンジェルがそう声を掛けてくれた。

いや、本当に疲れた…イベント開始前の催しで、参加者が俺とデュエルするってなんだよ…聞いてないよ！晃さん！

そのせいで結構な数の人とデュエルすることになり、さすがに疲れてしまった。

まあ、そのおかげで盛り上がったから良かったかもしれないけど。

「Phantom、その…良かったら…私の膝で休む？」

「え？いや、さすがにそれは…」

「良いから！ほら、ゆっくり休んで」

「…わかった、それじゃあ、お言葉に甘えて」

正直、めっちゃくちや恥ずかしかったが、ブルーエンジェルに押しきられてしまい、膝まくらをしてもらうことにした。

「どう…？」

「柔らかくて気持ち良いよ…この枕ならゆっくり休めそうだ」

…って、何言ってるんだ!？俺。

「そ、そう…？それなら良かった…」

そう言っつて、葵は少し恥ずかしそうにしながら笑みを浮かべた。

「…それじゃあ、少し休ませてもらうよ…お休み、葵」

「うん、お休み…侑哉」

そんな会話を交わしながら、俺はゆっくりと意識を手放した。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「あなたは…ダークナイトプリンセス…どうしてここに？」

「久しぶりだね、ブルーエンジェル…今日は侑哉をこっちの仲間に取り入れる為に来たの」

「…ダークナイトプリンセス…だっつて？」

二人の会話に意識が覚醒し、すぐさま立ち上がる。

俺をダークナイトプリンセスの仲間に取り入れる為に来た？どういふことだ？

「おはよう…侑哉…迎えに来たよ」

「迎えに来ただっつて？俺はお前の仲間になるつもりなんてないぞ？」

「知ってる、だから今回はちよつと強引に仲間にするつもり」

そう口にし、ダークナイトプリンセスは葵に手をかざす。

その瞬間、その手に周りの物が吸い込まれていき、葵もその手に吸い込まれそうになる。

「葵！」

俺がそう叫ぶと同時に、葵の周りにシールドが展開され、ダークナイトプリンセスの手に吸い込まれそうになっていたものが、元の位置へと戻った。

「嘘!?無力化された?……あはは、あはははは♪そっか、侑哉は私のこの行動すら予測してたんだ♪さすがだね♪ますます好きになっちゃうよ」

今のは俺が花恋に頼んでいたプログラムか?やっぱり、作ってもらって正解だったな。

「しようがない、今回は撤退するしかないね…じゃあね、また来るから♪」

「待て!」

Dボードに乗って逃げようとしているダークナイトプリンスを俺もDボードに乗って追いかける。

「どうしたの?そんなに私と一緒に居たいの?嬉しいなあ♪」

「違う、お前に聞きたいことがあるだけだ」

「相変わらず、つれないなあ…まあ、そんなところも大好きだけど♪…じゃあ、デュエルしよっか♪私に勝ったら侑哉が聞きたいこと、何でも答えてあげる」

「わかった、そのデュエル受けて立つよ!」

「そこなくっちゃ!それじゃあ、いくよ?」

「ああ!」

「スピードデュエル!!」

第57話 知るための戦い

「スピードデュエル!!」

ダークナイトプリンセス LP4000

VS

Phantom LP4000

「それじゃあ、私の先攻で行かせてもらうね♪私は手札から《ラーの使徒》を召喚!」

ラーの使徒 レベル4 攻撃表示(ATK1100)

「ラーの使徒?今回はオルフェゴールじゃないのか…」

「うん、オルフェゴールデッキには休んでもらってるの♪それよりも、次の私の狙い、Phantomにはわかるんじゃない?」

「ああ、なんとなくだけど…」

ラーの使徒が出てきたということはおそらく、三幻神のいずれかの召喚を狙っているはずだ。

「うふふ♪それじゃあ《ラーの使徒》の効果発動!このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、手札・デッキから《ラーの使徒》を2体まで特殊召喚する!私はデッキから《ラーの使徒》を2体特殊召喚!」

ラーの使徒×3

「そして、スキル発動!《セカンド・サモン》!このスキルはこのデュエル中、私は通常召喚を2回行えるスキルだよ♪」

「通常召喚を2回行えるスキルだと!」

それってこのデュエル中、常に《二重召喚》(デュアルサモン)を使っている状態ってことか!?

インチキ効果も大概にしろ!

「それじゃあ行くよ♪私は《ラーの使徒》3体を生け贄に捧げる!現れて!《オシリスの天空竜》!!」

手札3↓2

ダークナイトプリンセスがそう叫ぶと同時にリンクヴレインズ中が厚い雲に覆われ、その厚い雲から巨大な紅き竜が現れた。

オシリス天空竜 レベル10 攻撃表示(ATK2000)

「すごいな！全身がビリビリするぜ！これが神のカードか：ワクワクしてきたよ!!」

アニメでは見たことがあるけど、こんな風に実物を見るのは初めてだ：良いね、ワクワクするよ！

「えへへ♪その顔が見たくてこのデッキを使ったんだよね♪Phantomは1度も神のカードを召喚してなかったから、神のカードを使ったら喜んでもらえると思って」

「なるほどな：普通のデュエルならもつと喜べただけだな」

ダークナイトプリンセスは根っからの悪人ではないと思う：だから、きつと、葵にあそこまでの殺意を持っているのにも何か理由があるんだと思う。

それを知る為にもこのデュエル、絶対に勝つ！

「：続けるよ、私は手札から魔法カード、《運命の宝札》を発動！このカードの効果でサイコロを振って出た目の数だけデッキからカードをドローし、ドローしたカードと同じ枚数のカードを除外する！いくよ、ダイスロール！」

そう言つて、ダークナイトプリンセスがサイコロを振り、出た目は4だった。

「出た目は4、よつて4枚ドロー！そして、さらに4枚カードを除外するね」

手札2↓1↓5

オシリスの天空竜(ATK2000↓5000)

「やれやれ、本当に強力なドロースーツだよな」

しかも、オシリスは手札の数×1000の攻撃力になるから、今の攻撃力は5000：厄介だな。

「そして、私は手札からフィールド魔法、《神縛りの塚》を発動！これがある限り、フィールド上のレベル10以上のモンスターは効果の対象にならず効果で破壊されない！私はカードを1枚伏せて、ターンエンド」

ダークナイトプリンセス LP4000

手札3

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン オシリスの天空竜 レベル10(ATK
3000)

伏せ1

フィールド魔法 神縛りの塚

Phantom LP4000

手札4

場なし

伏せなし

フィールド魔法なし

「いくよ！俺のターン、ドロー！」

手札4↓5

「その瞬間、私は永続罫、《最終突撃命令》を発動！このカードの効果により、フィールド上の全てのモンスターは攻撃表示になる！」

「何!?!」

最終突撃命令だつて!?!つまり、オシリスの天空竜の効果が確実に発動するってことか。

「やってくれるね…でも、こういう状況を覆ってこそそのエンタメデューリストつてもんさー！」

「うふふ♪さあ、どう突破してくるのかな？」

「いくよ！俺は手札から《EMドクロバット・ジョーカー》を召喚！」

EMドクロバット・ジョーカー レベル4 攻撃表示(ATK1800)

「この瞬間、オシリスの効果発動！相手が攻撃表示でモンスターを召喚・特殊召喚した場合、そのモンスターの攻撃力を2000ダウンさせ、攻撃力が0になった時、そのモンスターを破壊するよ♪喰らえ、召雷弾！」

オシリスの上の口から雷の矢が放射され、ドクロバット・ジョーカーが破壊される。

「くっ…だが、オシリスの効果は召喚を無効にするわけじゃない！よって、ドクロバット・ジョーカーの効果により、デッキから《オッドアイズ・ファンタズマ・ドラゴン》を手札に加えるよ！」

手札5↓4↓5

「ファンタズマ・ドラゴン…そのカードも持ってたんだ」

「さあ、いくよ！俺はスケール0の《オッドアイズ・ファンタズマ・ドラゴン》とスケール8の《EMオッドアイズ・ユニコーン》でペンデュラムスケールをセッティング！」

これでレベル1〜7のモンスターを同時に召喚可能になった…だが、その前にもうひと準備が必要だな。

「俺はさらに、手札から魔法カード、《カップ・オブ・エース》を発動！」

「来たね♪Phantomの十八番！」

「お、おう…そういう認識なのか…とりあえず、コイントスを行う…結果は表！よし、絶好調だな！よって、2枚ドロ！」

手札3↓2↓4

「…もう、《カップ・オブ・エース》がただの強欲な壺になってるね…まあ、こういう所もPhantomの強さの一つだけだね♪」

「それじゃあいくよ！揺れる！運命の振り子！迫り来る時を刻み、未来と過去を行き交え！ペンデュラム召喚！！来い！俺のモンスター達！チューナーモンスター、《チェンジ・シンクロン》、そして、《オッドアイズ・ファントム・ドラゴン》！！」

チェンジ・シンクロン レベル1 チューナー 攻撃表示 (ATK 0)

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン レベル7 攻撃表示 (ATK 2500)

「オシリスの効果！召雷弾！」

「くっ…！」

チェンジ・シンクロン (ATK 0)

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン（ATK2500↓500）

「どういうこと？チェンジ・シンクロンが破壊されてない！」

「もしかして知らないのか？じゃあ、説明するよ…オシリスの効果は相手モンスターへの攻撃力を2000ダウンさせ、攻撃力が0になった場合に破壊する効果だ…つまり、元々、攻撃力が0のモンスターには意味がない」

「…なるほどね、オシリスの効果の穴をついたんだ…さすがだね、侑哉♪さあ、次はどんな手を見せてくれるの？」

「…何だろう、前にどこかで似たような光景を見たことがあるような…いや、今はとにかくデュエルに集中しよう。」

「俺はレベル7のオッドアイズにレベル1のチェンジ・シンクロンをチューニング！集いし願いが新たに輝く星となる！光差す道となれ！シンクロ召喚！！飛翔せよ、《スターダスト・ドラゴン》！！」

スターダスト・ドラゴン レベル8 攻撃表示（ATK2500）

「だけど、オシリスの効果は受けてもらうわ！召雷弾！」

スターダスト・ドラゴン（ATK2500↓500）

「やっぱり、オシリスの効果はかなり厄介だな…だけど、とりあえずオシリスはこのターンで突破できるはずだ。」

「いくよーバトル！スターダスト・ドラゴンでオシリスに攻撃！そして、この瞬間、スターダスト・ドラゴンを対象に、手札から速攻魔法、《シユーンティンク・ソニック》を発動！このカードの効果によりスターダストが戦闘を行う時、戦闘を行う相手のモンスターをデッキに戻すよー！」

シユーンティンク・ソニックの効果によりオシリスがダークナイトプリンセスのデッキへと舞い戻った。

「今度は、対象を取らないバウンス効果!?すごい…すごいよお♪ゆうやあ♪本当にこのターンで突破するなんて…はあ♪本当に君とのデュエルは最高だよ♪」

「お、おう…とりあえず、俺はこれでターンエンドだよ」

妙に光悦の表情を浮かべるダークナイトプリンセスに若干驚きな

がら、俺はターンを終了した。

ダークナイトプリンセス LP4000

手札3

場なし

伏せ1（最終突撃命令）

フィールド魔法 神縛りの塚

Phantom LP4000

手札1

場 EXモンスターゾーン スターダスト・ドラゴン レベル8

攻撃表示（ATK2500↓500）

メインモンスターゾーンなし

伏せなし

Pゾーン オッドアイズ・ファンタズマ・ドラゴン（スケール0）

EMオッドアイズ・ユニコーン（スケール8）

「私のターン、ドロー！うふふ♪もつともつと私を楽しませて♪もつと侑哉を感じさせて♪」

「あはは…まあ、善処はするよ」

思わず、苦笑をしながらそう呟く。

「それじゃあ、いくね♪私は手札から《サイバードラゴン》を特殊召喚！このカードは相手フィールド上にモンスターがいる時、特殊召喚できる！」

サイバードラゴン レベル5 攻撃表示（ATK2100）

「さらに、手札から《幻銃士》を召喚！このカードが召喚に成功した時、自分のフィールド上のモンスターの数まで、《銃士トークン》を特殊召喚できる！私は幻銃士トークンを1体特殊召喚！」

手札3↓2

幻銃士 レベル4 攻撃表示（ATK1100）

幻銃士トークン レベル4 攻撃表示（ATK500）

「モンスターが3体…来るか！」

「その通り♪セカンド・サモンのスキルにより、私はもう1度通常召喚を行える！私は3体のモンスターを生け贄に捧げる！現れて！《オベリスクの巨神兵》!!」

現れたのは、蒼き巨神…その神はオシリスと同等のプレツシャーを放っていた。

オベリスクの巨神兵 レベル10 攻撃表示(ATK4000)

「今度はオベリスクか…これはまたすごいプレツシャーだな…良いね、ワクワクしてきたよ！オシリスの次はオベリスクとの対決か！よし、今度はオベリスクを突破してみせる！」

「うふふ♪でも、その前にこのターンを凌がないとね♪バトル！オベリスクの巨神兵でスターダスト・ドラゴンに攻撃！ゴッドハンドクラッシュャー！」

オベリスクの攻撃がスターダスト・ドラゴンに迫り、そのままスターダスト・ドラゴンを破壊した。

「スターダスト！くっ…手札のクリボーの効果発動！このカードを手札から墓地へ送り、俺の受ける戦闘ダメージを0にする！」

「だけど、神縛りの塚の効果は受けてもらうよ♪レベル10以上のモンスターが戦闘で相手モンスターを破壊し、墓地へ送った場合、そのモンスターのコントローラーに1000ポイントダメージを与える！」

「ぐっ…！」

Phantom LP4000↓3000

「私はこれでターンエンド…さあ、次はどんな風に突破してくるのかな？」

ダークナイトプリンセス LP4000

手札1

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン オベリスクの巨神兵 レベル10 攻

撃表示(ATK4000)

伏せ1(最終突撃命令)

フィールド魔法 神縛りの塚

Phantom LP3000

手札0

場なし

伏せなし

Pゾーン オッドアイズ・ファンタズマ・ドラゴン（スケール0）

EMオッドアイズ・ユニコーン（スケール8）

「三幻神との戦いか…この戦いは滅多にできるものじゃないな！……
本当に、普通のデュエルならもつと楽しめるんだけどな…」

まあ、今も楽しいといえれば楽しいが…普通にダークナイトプリンセスとデュエルをしてみたいな…それができたなら、もつと楽しいデュエルができるはずだから。

俺が勝てば、それも叶うのか？

「…まあ、何にせよこのデュエルに勝つてからだな」

「どうしたの？ターンを進めないの？」

「ああ、いくよ！俺のターン、ドロー！」

俺はそう口にし、デッキからカードをドローした。

彼女に勝利し、彼女を知るために。

第58話 彼女の名

「俺のターン、ドロー！」

ダークナイトプリンセス LP4000

手札1

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン オベリスクの巨神兵 レベル10 攻

撃表示(ATK4000)

伏せ1(最終突撃命令)

フィールド魔法 神縛りの塚

Phantom LP3000

手札0↓1

場なし

伏せなし

フィールド魔法なし

Pゾーン オッドアイズ・ファンタズマ・ドラゴン(スケール0)

EMオッドアイズ・ユニコーン(スケール8)

「まずは、手札から魔法カード《強欲で貪欲な壺》を発動！デッキトツ
プから裏側でカードを10枚除外し、2枚ドロー！」

Phantom手札1↓0↓2

よし、これならなんとかかなりそうだ。

「俺はファンタズマ・ドラゴンのP効果発動！手札を1枚墓地へ送り、
EXデッキに表側表示で存在するドラゴン族Pモンスターを手札に
加える！俺は《オッドアイズ・ファントム・ドラゴン》を手札に加え
る！」

「なるほどね、だけどそれじゃあオベリスクは突破できないよ♪どう
するつもりかな？」

「焦るなよ…お楽しみはこれからさ！俺はファンタズマ・ドラゴンの
効果で墓地へ送った《ドット・スケーパー》の効果発動！このカード

が墓地へ送られた場合、このカードを墓地から特殊召喚できる！甦れ！《ドット・スケーパー！》」

ドット・スケーパー レベル1 攻撃表示 (ATK0)

「そして、現れるよ！希望を照らすサーキット！召喚条件はレベル1モンスター1体、俺はドット・スケーパーをリンクマーカーにセット！サーキットコンバイン！リンク召喚！来い！リンク1、《リンクリボー》！」

『クリクリンク〜♪』

リンクリボー リンク1 (ATK300) リンクマーカー下

リンクリボー、このカードは俺がサイバース世界に行った時にサイバース世界を案内してくれたリンクリボーだ。

リンクリボーは俺のことが気に入ったのか、サイバース世界から現実世界に戻った時に一緒に着いて来てしまったらしい。

まあ、俺としては新しい仲間が加わって嬉しい気持ちが強かったから大歓迎だったが。

「そして、俺はセッティング済みのPスケールでペンデュラム召喚！来い！俺のモンスター達！EXデッキから《EMドクロバット・ジョーカー》、そして手札から《オッドアイズ・ファントム・ドラゴン》！！」

EMドクロバット・ジョーカー レベル4 攻撃表示 (ATK1800)

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン レベル7 攻撃表示 (ATK2500)

「いくよ！バトル！オッドアイズでオベリスクに攻撃！この瞬間、オッドアイズ・ユニコーンのP効果発動！オッドアイズが戦闘を行う時、仲間のEMの力をオッドアイズに加える！俺はドクロバット・ジョーカーの攻撃力をオッドアイズに加えるよ！」

オッドアイズ・ファントム・ファントム (ATK2500↓4300)

「攻撃力、4300!？」

「いけ！オッドアイズ！夢幻のスパイラルフレイム!!」

ドクロバット・ジョーカーの攻撃力を得たオッドアイズ・ファントム・ドラゴンの攻撃がオベリスクの巨神兵を貫き、ダークナイトプリンセスへとダメージを与えた。

「っ！」

ダークナイトプリンセス LP4000↓3700

「さらに、オッドアイズの効果発動！ペンデュラム召喚したこのカードが相手に戦闘ダメージを与えた場合、Pゾーンのオッドアイズモンスターの数×1200ポイントのダメージを与える！喰らえ！幻視の力、アトミックフォース!!」

「きゃあああ!!」

ダークナイトプリンセス LP3700↓1300

「いくよ！ドクロバット・ジョーカーでダイレクトアタック！」

このまま攻撃が決まればこのデュエルは俺の勝ちだが…

「そうはさせない！手札の《速攻のかかし》の効果発動！このカードを手札から墓地に送り、ドクロバット・ジョーカーの攻撃を無効にしてバトルフェイズを終了させるわ！」

ドクロバット・ジョーカーの攻撃を速攻のかかしが無効にし、そのままバトルフェイズが終了してしまった。

やっぱりそう簡単には勝たせてくれないか。

「ふう、危なかった…さすがは侑哉だね♪もう少しでやられちゃうところだったよ」

「できればこのターンで決めたかったけどな…俺はこれでターンエンド」

ダークナイトプリンセス LP1300

手札0

場なし

伏せ1（最終突撃命令）

フィールド魔法 神縛りの塚

Phantom LP3000

手札1

場 EXモンスターゾーン リンクリボー リンク1(ATK300) リンクマークー下

メインモンスターゾーン EMドクロバット・ジョーカーレベル4
攻撃表示(ATK1800)

オッドアイズ・ファントム・ドラゴン レベル7 攻撃表示(ATK2500)

伏せなし

Pゾーン オッドアイズ・ファンタズマ・ドラゴン(スケール0)
EMオッドアイズ・ユニコーン(スケール8)

「私のターン、ドロー！うふふ♪さあ、侑哉：今度は私が君を楽しませる番だよ♪私は手札から魔法カード《貪欲な壺》を発動！私は墓地の3体の《ラーの使徒》と《オベリスクの巨神兵》、《速攻のかかし》をデッキに戻して2枚ドロー！」

ダークナイトプリンセス手札1↓0↓2

「そして、私は侑哉の場のモンスター3体を生け贄に捧げ、《ラーの翼神竜―球体形》を召喚！」

「ここで球体形か…厄介な」

俺の場のモンスターを生け贄とし、丸い太陽の形をしたラーが俺の場に降臨した。

ラーの翼神竜―球体形 レベル10 攻撃表示(ATK0)

「そして、私は手札から魔法カード《所有者の刻印》を発動！このカードの効果でフィールド上のモンスターは全て元の持ち主の場に戻る！帰っておいで♪ラーの翼神竜♪」

「くっ！まずいな…このままじゃ」

「さらに球体形の効果！このカードをリリースして、手札、デッキから《ラーの翼神竜》を召喚条件を無視して攻守を4000にして特殊召喚できる！来て！最後の三幻神、ラー！」

そう言つて、ダークナイトプリンセスは謎の言葉を紡ぎ、ラーは球体形から本来の姿へと変化した。

ラーの翼神竜 レベル10 攻撃表示(ATK4000)

「おいおい、これってヒエラティックテキストか？めちやくちや芸が細かいな。」

「…つと、そんなこと考えている場合じゃないな」

正直、この状況はかなり厳しい。

「まだまだだよ！ラーの効果！ライフを1000ポイント払うことで、フィールド上のカードを1枚破壊できる！私はファンタズマ・ドラゴンを破壊するよ！」

ダークナイトプリンセス LP1300↓300

「くっ…次のターンの動きまで封じてきたか」

「これで決めるよ♪ラーの翼神竜でダイレクトアタック！ゴッドブレイズキャノン！」

「まだまだ！俺は手札の《EMクリボーダー》の効果発動！俺がダイレクトアタックされた時、このカードを手札から特殊召喚し、このカードに攻撃対象を移す！」

EMクリボーダー レベル1(ATK300)

「だけどそれじゃあライフが0になるのは避けられないよ！」

「いいや、そうはならない！クリボーダーの効果！この戦闘で俺がダメージを受ける場合、代わりに俺のライフを回復する！」

「そんな効果が…！」

Phantom LP3000↓6700

「だけど、神縛りの塚の効果は受けてもらうよ！」

「くっ…」

Phantom LP6700↓5700

「私はこれでターンエンド」

ダークナイトプリンセス LP300

手札0

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン ラーの翼神竜 レベル10(ATK4000)

伏せ1（最終突撃命令）

フィールド魔法 神縛りの塚

Phantom LP5700

手札0

場なし

伏せなし

Pゾーン EMオッドアイズユニコーン（スケール8）

「ふう、なんとか耐えきった…」

だが、状況は良くない…最終突撃命令のせいで攻撃表示でしかモンスタ―を召喚できない上に神縛りの塚の効果によりラーの翼神竜は効果の対象にならず、効果で破壊できない。

攻撃力も4000とかなり攻撃力が高いから、ペンデュラム召喚できない今の状況では戦闘で破壊するのも難しい。

効果ダメージを与えるカードを引ければ勝てるかもしれないが、そんなカードはほとんど入っていない。

「…このドローに賭けるしかないな…いくよ！俺のターン、ドロー！」

Phantom手札0↓1

「…まずは、手札から魔法カード《貪欲な壺》を発動！俺は墓地の《EMクリボーダー》、《クリボー》、《チェンジ・シンクロン》、《ドット・スケーパー》、そして《スターダスト・ドラゴン》の5体をデッキに戻して2枚ドロー！」

Phantom手札1↓0↓2

まだ届かないか…なら

「さらに、俺は手札から魔法カード《ペンデュラム・ホルト》を発動！このカードはEXデッキに表側表示でPモンスターが3種類以上いるときデッキからカードを2枚ドローできる！」

Phantom手札2↓1↓3

「よし！今ドローした《守護神官マハード》の効果！手札からこのカードを特殊召喚！頼むぞマハード！」

守護神官マハード レベル7 (ATK2500)

「ここでマハードを引き当てるなんて…でも、今のままじゃラーには勝てないよ?…どうするつもりなのかな?」

「こうするのさ!俺は手札から魔法カード《ゴズミック・サイクロン》を発動!ライフを1000払い、神縛りの塚をゲームから除外!」

Phantom LP5700↓4700

これでラーを守るカードは消え去った…後はこのカードを使うだけだ。

「さあ、いくよ!これが勝利へのキーカードだ!俺は闇属性を宣言し、ラーの翼神竜に《幻惑の巻物》を装備する!」

「私のモンスターに装備魔法?」

「幻惑の巻物の効果は装備したモンスターの属性を宣言した属性へと変化させる!つまり、今のラーの属性は闇属性となる!」

「闇属性…まさか!?!」

「そのまさかだよ、バトル!マハードでラーの翼神竜に攻撃!そして、マハードの効果!このカードが闇属性モンスターと戦闘を行う時、マハードの攻撃力は倍になる!」

守護神官マハード レベル7 (ATK2500↓5000)

「今度こそ決めさせてもらう!いけ!マハード!」

闇属性となったラーへとマハードが迫り、そのままラーを撃破した。

ダークナイトプリンセス LP300↓0

//////

「俺の勝ちだ…さあ、いろいろと聞かせてもらうよ」

スピードデュエルを終え、俺とダークナイトプリンセスは近くの建物へと場所を移動した。

「そうだね…約束だもんね」

「それじゃあ、まずお前の正体を教えてくれ…お前は多分、俺の知り合いないんだろ?それも、前の世界での」

「…そうだよ、私は侑哉のことをよく知ってるし、君の身近に居た…覚

えてない?」

「悪いけどアバターの姿からじゃ想像もできない」

「そっか…」

そう言って彼女は寂しそうに笑った。

その時の彼女の表情に妙に罪悪感を感じてしまう。

「…少しヒントをくれないか?後、もう少しで思い出せそうなんだ」

「本当に!」

「ああ、本当だ」

「そっかあ♪じゃあ…えーっと」

そう言って彼女はこういうヒントを出すか思考を始めた。

というか、デュエルに勝ったのは俺なんだし、普通に本名を聞けば良かったな。

…だけど、これはちゃんと俺が思い出すべきことなんじゃないか?心のどこかからそんな声が聞こえた気がした。

「…それじゃあ、ヒント!私は侑哉と同じ小学校で同じクラスだったの♪って、これってほとんど答えかも」

「同じ小学校…同じクラス…」

そう呟いた瞬間、頭の中の記憶と記憶が繋がる感覚に陥った。

『ねえねえ侑哉君、私とデュエルしようよ!』

『うん、良いよ!じゃあいくよ!○○ちゃん!』

『今日は負けないよ!』

『俺だって負ける気はないよ!』

そうだ、俺はよく彼女とデュエルをしていた…それで彼女はデュエルをする度に俺の繰り出す戦略を見て、すごく楽しそうにしていた。だから、そんな顔を見たかったからデュエルの度に色々な戦略を試してた…今思えばそれが俺のエンタメデュエルの始まりだったのかもしれない。

そうか思い出した!確かあの子の名前は…

「…響音 裕香(ひびね ゆうか)…裕香ちゃん?」

「思い出してくれたんだ!嬉しいなあ♪そうだよ侑哉…私は裕香、響

音裕香だよ」

そう言って、彼女はとても嬉しそうな表情を浮かべた。

第59話 裕香の真実

「侑哉、遅いな…」

侑哉がダークナイトプリンセスを追ってデュエルを始めて、かなりの時間が経った。

デュエルの流れは映像を見て知っている。

まさか、一度のデュエルで伝説のレアカード、三幻神のカードを全て見ることができるとは思ってもいなかった。

今でこそ三幻神のカードはそれなりの枚数生産されているけど、全ての三幻神を一度のデュエルで見られることはほとんどない。

そして、何よりすごいのは侑哉はその三幻神を全て打ち倒し、デュエルに勝利したことだ。

あの手この手を使って三幻神を打ち倒していく侑哉の姿を見て、惚れ直したのは言うまでもない。

「…デュエルはもう終わってるのに、侑哉は一体どこに…」

そういえば、侑哉はダークナイトプリンセスに聞きたいことがあるって言ってた…もしかしたら、今はそれを聞き出しているのかもしれない。

「今は待つしかないわね…」

そうだ、待っている間にサプライズプレゼントを用意しよう。

たまには、私が侑哉を驚かせてみたいし。

私はそんなふうにながら、サプライズプレゼントの準備を始めた。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「まさか、本当に裕香ちゃんなのか？」

「だから、そうだって言ってるでしょ♪」

そう言って、ダークナイトプリンセスこと響音裕香は屈託のない笑みを浮かべる。

その笑顔は確かに、小学生の頃の彼女と変わらない気がした。

ただ、葵にあそこまでの殺気を放っていた姿があまりにも俺の知っている裕香ちゃんとかけ離れていたせいで、いまいち人物像が重なら

ない。

「その顔はいまいち信じられないって顔だね」

「そりゃあな、だって俺の知ってる裕香ちゃんと全然違うし」

「まあ、色々とあったからね…」

「…話してくれないか、お前に何があったのか」

俺は、彼女がなぜ葵にあそこまで殺意を向きだしにしていたのか
ずっと気になっていた。

もし、彼女が葵に殺意を持つようになった決定的な出来事があるなら…それを知れば、何か力になれるかもしれない。

「そうだね…どこから話そうかな…」

「じゃあ、まずはどうやってこの世界に来たのか、それについて聞かせてくれるか？」

「私がこの世界に来たのは所謂転生ってやつだね。侑哉に会いたくて、毎日歩きまわってたら車に轢かれて死んじゃった」

「そんな軽い感じで言うことじゃないだろ…」

まるで、自分が死んだことなんてどうでも良いかのように話す裕香ちゃんに思わずそんな声を漏らす。

「だって、侑哉のいない世界に居たってしょうがないし…それに、転生したおかげでこうして再会できたんだもん♪むしろ、死んで良かったよ」

「…やっぱり、俺の知ってる裕香ちゃんと全然違う…何があったらこんなな歪むんだ？」

「…ねえ、侑哉はさ、まったく知らない他人の記憶が流れ込んできたことはある？」

俺の呟きに答えるように裕香ちゃんはそう口にする。

他人の記憶が流れ込む？そんなことがあるわけ…いや、待てよ…まさか！

俺はその現象について知っている…というより、実際に目の当たりにした。

「まさか、葵の記憶が流れ込んで来たのか？」

「何で知ってるの？このことは初めて話すのに…もしかして、私の心

は侑哉に見透かされちゃってるのかな♪」

「違う…ただ、似たような現象を見たことがあるっただけだよ」

「だけど、あの時はこっちの葵の記憶に流れ込んできたから特に問題はないが、まったくの別の人間に他の人間の記憶が流れ込むというのは異常だ。」

「そもそも、そうなったら流れ込んだ記憶に本人が支配されるんじゃないか？」

「…ちよつと待てよう？なら、今、裕香ちゃんに起きていることは…」
「そこまで理解して、言葉に詰まる。」

他人の記憶が流れ込んでいて、果たして自分を保てていられるものだろうか？いや、多分普通なら自分を保つことはできないだろう。

「その顔…侑哉には私が何でこんなことになったのかももうわかってるんだね…」

「ああ…なんとなくだけどね…裕香ちゃん、君は葵への憎しみと俺との記憶だけを支えに自分を保っているんじゃないか？」

「…そうだよ。だって、そうしないと私がどんどん消えていつちやうもん…!!」

しばらく間が空き、裕香ちゃんはそこに蹲り、嗚咽を零す。

そんな裕香ちゃんを見ていられなくて、俺は思わず駆け寄った。

「裕香ちゃん！ごめん！君がそんな状態だなんて気づかなくて…」

「侑哉…うぐっ!!あああ!!」

「裕香ちゃん!？」

突然、裕香ちゃんが苦しみ出し、悲鳴が響き渡る。

「ゆう…やあ…助けて…私、怖いよ…その内、私が私でなくなっちゃう…!」

「わかってる！必ず助ける！」

「考えろ…！考えろ！あまり時間は掛けていられない…今まで、裕香ちゃんが裕香ちゃんであいられたのは奇跡に等しい…これ以上時間を掛けたら彼女が消えてしまう。」

「なにか…なにかないか…そうだ！リンクアクセスの力なら！」

「幸いにも、ここはLINKVRAINSの中だ…リンクアクセスの」

力で流れ込んだ葵の記憶を取り出せればなんとかなるかもしれない。だが、取り出すまでに裕香ちゃんが持つか…？せめて、記憶を取り出すまで、裕香ちゃんの自我を保つことができないと…なにか、裕香ちゃんが裕香ちゃんであるということを確認させる方法…ある！あるぞ！

でも、この方法は…いや悩んでる暇はないか…ごめん、葵…今だけは許してくれ！

「裕香ちゃん…いや、裕香…今から、キスするけど許してくれ」「ふえっ!?…んっ！…んむっ！…んっ！」

そうして、裕香ちゃんとキスをする。深く、彼女という存在を確かめるように。

もちろん、何の狙いもなくこんなことをしているわけじゃない。

裕香ちゃん…もとい、裕香の自我を保つためには、裕香自身に自分の存在を認識させなくてはならない。

その為には、響音裕香としての強烈な記憶を彼女に植えつける必要がある…だから、こういう手段に出ただけ…正直、罪悪感が半端ない…だが、裕香を助けるためだ、手段は選んでいられない。

「はあ…はあ…俺が今、こうしてキスしてるのは葵じゃない…裕香、お前だ。安心してくれ…俺が必ず君を助けるよ」

俺は1度そう告げて、再び裕香を救う為に行動を開始した。

「花恋さん、侑哉は戻ってきてますか？」

「葵ちゃん、いらっしやい。侑哉はまだログインしたままよ」

LINK VRAINSからログアウトした私は侑哉の家に戻ってきた。

侑哉はログインしたままなのね…なら、ちょうど良いかも。

「花恋さん、侑哉が戻ってくるまでにちよつとしたサプライズを仕掛けてたいんですけど」

「サプライズ…？良いじゃない！さっそく準備しましょう！」

そう言つて、花恋さんは笑みを浮かべる。

「良いんですか？ 侑哉に頼まれたことがあるんじゃない？」

私が家に入った時に花恋さんは何か作業をしていたみたいだし、もしかしたらタイミングが悪かったかなって思っただけけど…大丈夫かな？

「ああ…それに関してはもう終わってるから大丈夫よ。だから、葵ちゃんは心配しなくても良いわ」

「そ、そうですか…」

なんてことのないようにそう口にする花恋さんに、思わずそんな風に返事してしまう。

相変わらず、花恋さんはすごい人ね…侑哉もそんな花恋さんだから、色々頼ることができるかもしれないけど。

「…でも、どういうサプライズにするべきでしょうか…？」

「実は、レイちゃんにも協力してもらつて、侑哉の新しいカードを作っている途中なのよ。葵ちゃんもカードの作成協力してくればありがたいんだけど」

「確かに…それなら侑哉にも喜んでもらえるかも…でも、上手くできるか不安ね…」

「大丈夫よ！ 後少しで完成だからそんなややこしい作業も必要ないし、私もサポートするから」

「…わかりました！ やってみます！」

「よし…それじゃあさっそく始めましょう！ ちなみに、こういうカードなんだけど…どう？ 葵ちゃんの意見を聞かせてくれない？」

そう言つて、花恋さんはカードの画像を見せる。

「PT 《フアントム・シーフ》…？」

「そ、《フアントム・シーフ》。怪盗つて意味のカードよ…イメージとしては侑哉の使う《EM》達の裏の姿つてところね。普段は人々を楽しませるエンターテイメント集団、だけど裏では弱きを助け、強きを挫く正義の怪盗達！ 王道だけど、だからこそカッコいい！ こういうカード達を侑哉が使ったらすごく似合うと思うの！」

「そ、そうですね…わ、私も侑哉に合うと思います…」

花恋さんのテンションの高さに圧倒されつつ、私も同意する。

実際、私も侑哉にこのカード達は合うと思うし。

「そうよね！はあく…早く侑哉がこのカード達を鮮やかに使いこなすところを見てみたいわ！さあ早く終わらせちゃいましょう！」

「は、はいー」

そう返事をして、私は花恋さんと共にカード制作を始めた。

…侑哉、喜んでくれると良いなあ。

／／／／／／／／／／／／／／／／

「ふう…疲れたな…まさか、裕香がダークナイトプリンセスだったなんてね…しかも、別の世界の葵の記憶が流れこんでいて、それが原因であんな風に…ただ、もう裕香が苦しむことはなくなっただろうから、ひとまず安心だ」

結果的に、俺の作戦は成功した…裕香から、葵の記憶を取り除けたし彼女が葵の記憶に苦しめられることはなくなったはずだ。

ちゃんと記憶の整合性を保つための工夫もしたし大丈夫だろう…それにしても、我ながらとんでもないことをしたもんだ。

リンクアクセスの力…本当に汎用性が高すぎるな。

「それにしても、罪悪感がすごいな…いくら裕香を助ける為とはいえ、葵以外の女の子とあんなことを…」

本当に、葵にどんな顔して会えば良いんだか…とりあえず、いつも通りを心がけよう…それで、ちゃんと葵に謝ろう。

「侑哉!!目が覚めた!？」

「うわああ!!び、びっくりした…葵か。どうしたんだ?そんな大声出して」

俺が葵への罪悪感を感じているところに、ご本人が登場し、思わずそんな言葉を口にする。

「あ、ごめんね…ちよつとテンションが上がっちゃって」

「何か良いことでもあったのか?」

「まあね…ほら侑哉、下の部屋に行きましょう」

「あ、ああ…了解」

そう返しながら、葵と一緒に下の部屋に降りる。

階段を下りながら、俺は葵にどのタイミングであの話の切り出すべきか思考する。

そうやって頭を悩ませていると、あつという間に下の部屋に着いてしまい、俺は思考を中断した。

「侑哉さん！お帰りなさい！」

「ああ、ただいま！レイ。花恋もただいま！」

「お帰りなさい。侑哉に頼まれたことは大丈夫よ、無事に終わったわ」
下の部屋に降りてきた俺の目に入ったのは、ニコニコしているレイと花恋の姿。

葵もなんかテンション高かったし、一体なんなんだ？

「そっか…ありがとう。…にしても、どうしたんだ？皆、なんかニヤニヤしてるけど」

「実は、侑哉にプレゼントがあるの！ほら、葵ちゃん！侑哉に渡してあげてー！」

「は、はい！う、受け取って！侑哉！」

顔を赤くしながら、葵が俺にデッキケースを手渡す。

俺はそれを受け取って、葵に了承を得て中身を確認する。

「PT《フアントム・シーフ》!?何だこれ！見たことないカードだ！俺の使ってるEMモンスター達に似てるカードもあるし…どゆこと？」

「それは、私達3人で侑哉の為に作りあげたカード達よ」

「元々、私と花恋さんで作っていたカード達で、葵さんの協力もあって、ようやく完成したんです」

「まあ、ほとんどレイと花恋さんが作ってくれていたから、私はそこまですぐ協力できていたかは微妙だけど…」

その言葉を聞いて、思わず皆に抱きつく。

「侑哉（さん）!?!」

「花恋、レイ、葵…ありがとう！すごく嬉しいよ！」

「侑哉…」

「侑哉に喜んでもらえたなら、私達も頑張った甲斐があるわね」

「そうですね！頑張って良かったです！侑哉さん、さっそく試してみたらどうですか？」

「そうだな…せっかく用意してくれたんだし、試さなきゃ勿体ないよな！」

「じゃあ、私が相手をするわ。PTのカードについての説明も兼ねてね」

「じゃ、じゃあ私は侑哉さんのサポートに回りますね！私もPTカードには詳しいですから」

そんな花恋とレイの提案に俺は頷く。

実際、俺は初めてこのデッキを使うから説明をしてもらえるのはありがたい。

「わ、私は…！侑哉の応援をするわ！」

「ありがとう…葵。お前の応援があれば負ける気がしないよ！」

「侑哉…うん！頑張つてね！」

「ああ…それじゃあ始めよう！花恋！」

「その前に、まずは外に出よっか…さすがに、家の中でデュエルをするわけにもいかないし」

「それもそっか…じゃあ外に出よう」

そう口にして、俺達は外へと歩を進める。

そうして、家の鍵をしっかりと閉めて近くの空き地へと向かう。

到着した空き地に人の姿はなく、居るのは俺達だけだ。

ここなら、確かに周りに気を使わなくても良さそうだ。

「よし、始めよう！」

「ええ！」

「デュエル!!」

そうして、俺と花恋のデュエルが始まった。

第60話 怪盗見参!

「デュエル!!」

侑哉 LP4000

VS

花恋 LP4000

「こうして花恋とデュエルするのは久しぶりだな」

「そうね。久しぶりの侑哉とのデュエル…テンションが上がってきたわよ!」

「そうか…それじゃあさっそく始めよう!先攻後攻はどうやって決める?」

「今回は侑哉の先攻で良いわよ。PTデッキの特徴を早めに理解するためにもその方が良いだろうし」

「わかった!じゃあ、俺の先攻でいかせてもらおう!俺のターン!」

さて、どうやって戦うんだろうなこのデッキ…とりあえず手札を確認するか。

そうして、俺は手札を確認する。

《PTユニ☆コン》

《PTオッドアイズ・マスカレード》

《PTオッドアイズ・ミラー》

《紅の予告状》

《怪盗達の大脱出劇》

「へえ、面白そうなカードがいっぱいだな!レイ、このデッキの基本的な動きって?」

「はい!私にお任せください!PTの動き方は基本的には侑哉さんの使うEMと同じです!豊富なサーチ効果を使って仲間を集めて、協力して相手を倒す…それがPTデッキです!ただ、EMと違うのはPTはその名の示す通り、相手のカードを盗む効果を持つカードが多数存在しています!」

「なるほどな…よし、大体わかった。それじゃあ、いくよ!俺は手札か

ら、《PTユニ☆コン》を召喚！」

PTユニ☆コン レベル4 攻撃表示(ATK1400)

姿を現したのは胸を強調するような黒のタキシードに黒のスカートといった黒を基調とした格好のユニとコン。

EMの時は可愛いというイメージが強かった、ユニとコンだが、フロントムシーフのユニとコンはセクシーというイメージが強い。

「格好が変わるだけで随分イメージが変わるもんだな…つと、続けるよ。ユニ☆コンの効果発動！このカードが召喚、特殊召喚に成功した場合、デッキから《PT》モンスター1体を手札に加えることができる！」

ユニ☆コンの効果を発動し、デッキを確認する。

さて、どれにするかな…色々カードがあるし、悩むな…よし！このカードだ！

「俺は《PTアルセーヌ》を手札に加える！」

「さすが侑哉ね…そのカードを選ぶなんて」

「ああ、どう見てもこのカードはエースモンスターだろうしな…なにせ、アルセーヌといえば怪盗の代名詞だからな。それじゃあいくよ！俺はスケール1の《PTオッドアイズ・マスカレード》とスケール8の《PTオッドアイズ・ミラー》でペンデュラムスケをセッティング！」

セッティングした2枚のカードが天空に現れる。オッドアイズ・マスカレードはドミノマスクのような赤色の仮面、オッドアイズ・ミラーはエメラルドグリーンドラゴンの装飾が施された鏡だった。

「揺れる！運命の振り子！迫りくる時を刻み、未来と過去を行き交え！ペンデュラム召喚!!来い！俺のモンスター！《PTアルセーヌ!!》」

PTアルセーヌ レベル7 攻撃表示(ATK2300)

姿を現したのは黒のシルクハット、左目に掛けたモノクル眼鏡、紅のシャツに白のマントを羽織った青年で、胸にあるペンデュラムが特徴的だった。

というか、これ…もしかして…

「まさか、このカードのモデルってPhantomか?!」

「そうですね！このカードは侑哉さんがモデルです！どうですか？結構再現度が高いと思うんですけど…侑哉さんが怪盗になった姿をイメージして作ったので、私としてはかなりの自信作なんですよー！」

「う、うん…まあ、良いと思うよ…ちよつと恥ずかしいけど」

「恥ずかしがる必要はないわよ！すごくカッコいいもの！葵ちゃんも良いと思うでしょ？」

「はい！すごく良いと思いますー！」

なんか、皆がめっちゃくちゃテンション高いんだけど…まあ、楽しんでもらえてるなら良いけどさ。

「それじゃあ続けるよ！アルセーヌの効果！このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合、デッキから《EM》、《PT》、《オッドアイズ》モンスター、または《閃刀》カードのいずれかを1枚手札に加える！俺は《閃刀使―レイ》を手札に加えるー！」

「閃刀使―レイ!?私、そんなカード作ってないわよ!？」

「フフン！驚きましたか？花恋さん！私がこっそり作っておいたカードです！このためにアルセーヌの効果をつけ足したりもしたんですよ」

「なるほど…どうりで、まったく関連性がなさそうな効果だと思ったよ。まあ、俺としてはありがたい効果だけだね」

「さあ、侑哉さん！私を召喚してくださいー！」

「ああ！《閃刀使―レイ》の効果！このカードはアルセーヌの効果により手札に加わった場合、手札から特殊召喚できる！さあ、出番だ！レイー！」

『はい！お任せくださいー！』

そうして、姿を現したのは黒のワンピースのような制服を身に纏い、美しい金色の髪を靡かせているレイ、その右手にはいつもの赤黒い刀、そして、左手には赤黒い盾が握られていた。

閃刀使―レイ レベル4 攻撃表示（ATK1500）

『我が名は閃刀使レイ…この剣、この盾、この身のすべてはあなたのために…戦士の誇りに賭けてあなたを守りぬきましょう』

「レイ…？キャラ変わってないか？」

『はい…慣れないとは思いますが、今の私はこのようなのです。侑哉さんを守ることに全てを注いだ私と言ったところでしようか…ですから、遠慮なく私をお使いになつてください』

「あ、ありがとう…？なんか、調子が狂うけど今は集中しないと…アルセーヌの効果！1ターンに1度、相手の手札・デッキ、または墓地のカードをランダムに1枚、俺の手札に加える！俺は花恋の手札からカードを1枚頂戴するよ！」

俺が効果を発動すると、アルセーヌがパチンと指を鳴らし、それと同時に花恋の手札から1枚のカードが俺の手札に加わった。

「ガガガシスター…！まさか、花恋…あのデッキを持ってきたのか！」
「そうよ。侑哉のデッキから、使いやすそうなデッキを借りてきたんだけど…駄目だった？」

「いや、構わないけど…ちなみに、体調が悪かったりしてないか？特になんの異常もない？」

「どうしたの急に…とくに体調も悪くないし、異常もないわよ？」

「そっか、それなら良いけどさ…俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド」

侑哉 LP4000

手札2 (内1枚ガガシスター)

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン 《PTアルセーヌ》レベル7 攻撃表示

(ATK2300)

《PTユニ☆コン》レベル4 攻撃表示 (ATK1400)

《閃刀使ーレイ》レベル4 攻撃表示 (ATK1500)

伏せ1

Pゾーン

《PTオッドアイズ・マスカレード》スケール1

《PTオッドアイズ・ミラー》スケール8

花恋 LP4000

手札4

場なし

伏せなし

「私のターン、ドロー！さあ、いくわよ！私は手札から《ゴブリンドバーク》を召喚！ゴブリンドバークが召喚に成功したから、手札からレベル4以下のモンスターを特殊召喚できる！私は《ガガガマジシャン》を特殊召喚！そして、この効果を使った後、ゴブリンドバークは守備表示になるわ」

ゴブリンドバーク レベル4 守備表示（DEF0）

ガガガマジシャン レベル4 攻撃表示（ATK1500）

「レベル4のモンスターが2体!?来るわよ！侑哉！」

「葵がアストラル化してる…！まあ、確かにあのデツキなら、間違いなくエクシーズ召喚が来るだろうな」

「さあ、お楽しみはこれからよ！私はゴブリンドバークとガガガマジシャンの2体で、オーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！エクシーズ召喚!!現れなさい！《No. 39 希望皇ホープ》!!」

No. 39 希望皇ホープ ランク4 攻撃表示（ATK2500）

「ナンバーズ!?そんなエクシーズモンスター、見たことない…!」

「まあ、ナンバーズはエクシーズモンスターの中でも特別なカードだからな…見たことがなくてもしょうがないさ」

ナンバーズに驚く葵にそう声を掛ける。

やつぱり、ナンバーズはそんなに存在を知られていないみたいだな…一応、花恋以外には見せないようにしていたけど、正解だったかもしれないな。

「そして、ホープに《ZW―風神雲龍剣》と《ZW―雷神猛虎剣》を装備！これで、ホープの攻撃力は2500ポイントアップし、さらに、効果の対象にもならないわ！」

No. 39 希望皇ホープ 攻撃力(2500↓5000)

「ゼアルウエポンまで使うのか!? しかも、なかなか厄介な状況だね…」

風神雲龍剣(トルネードブリンガー)に雷神猛虎剣(ライトニングブレード)か…トルネードブリンガーはホープに効果の対象にならない効果を付与し、さらにホープが戦闘で破壊される時に代わりに自身を破壊する効果を持つ。ライトニングブレードはゼアルウエポンを相手の効果で破壊されなくするカード…しかも、ホープが効果で破壊される時に代わりに自身を破壊する効果がある。

そして、ホープ自身にはオーバーレイユニットを消費することで攻撃を無効にする効果があるからな…無敵とまでは言わないけどなかなか鉄壁だ。

「さあ、バトルよ! 希望皇ホープでアルセーヌに攻撃!」

「そうはいかない! レイの効果! レイが居る限り、相手は《閃刀使―レイ》以外のモンスターを攻撃できない!」

「そんな効果が…なら、そのままレイちゃんに攻撃よ!」

『侑哉さん!』

「わかってるさ! 《閃刀使―レイ》が戦闘・効果で破壊される場合、代わりにデッキから《閃刀》魔法カードを墓地へ送ることができる! 俺は《閃刀起動―エンゲージ》を墓地へ送る!」

「そんな効果まで…! だけど、ダメージは受けてもらうわ!」

ホープの攻撃をレイが盾から障壁を作り出して防御する。それにより、レイは破壊を免れる。

だが、その余波は俺に襲いかかり俺のライフを削った。

「ぐわああ!」

侑哉 LP 4000↓500

『侑哉さん!!』

「大丈夫だ…狙い通りだ!」

『ですが…!』

「心配してくれてありがとな…だが、これは勝利への布石だ!」

『…わかりました。あなたがそう仰るなら…』

「…狙い通り…？いくつか候補は考えられるけど、一体何を考えてるのかしら…私はカードを1枚伏せてターンエンド」

侑哉 LP500

手札2 (内1枚ガガガシスター)

場 EXモンスターゾーンなし

メインモンスターゾーン 《PTアルセーヌ》レベル7 攻撃表示
(ATK2300)

《PTユニ☆コン》レベル4 攻撃表示 (ATK1400)

《閃刀使ーレイ》レベル4 攻撃表示 (ATK1500)

伏せ1

Pゾーン

《PTオッドアイズ・マスカレード》スケール1

《PTオッドアイズ・ミラー》スケール8

花恋 LP4000

手札0

場 EXモンスターゾーン 《No. 39希望皇ホープ》リンク

4攻撃表示 (ATK2500↓5000)

メインモンスターゾーンなし

伏せ3 (内2枚《ZW―風神雲龍剣》、《ZW―雷神猛虎剣》ホープに装備中)

「いくよー俺のターン、ドローー！」

手札2↓3

「この瞬間、永続罨発動！《ナンバーズ・ウォール》！このカードが存在している限り、ナンバーズモンスターは効果では破壊されず、ナンバーズ以外のモンスターとの戦闘では破壊されないわ！」

「ナンバーズ・ウォールか…ますます鉄壁になってきたな…だけど、こういう状況を覆ってこそそのエンタメデュエリストつてもんさ！俺は

手札から魔法カード、《逆境の閃き》を発動！このカードは自分の場にアルセーナがいて、ライフが1000以下の時に発動できる！デッキからカードを2枚ドロウする！」

手札3↓2↓4

「よし、これなら！だけど、まずは下準備だ！手札から永続魔法、《紅の予告状》を発動！このカードは、1ターンに1度、3つの条件の内、1つを相手プレイヤーに予告し、その予告を完遂できれば自分フィールドのモンスター1体の攻撃力をターン終了時まで倍にできる！」

紅の予告状を発動すると、フィールドに紅色の紙が出現する。その紙には3種類の条件が書かれていた。

- ・相手の手札からカードを1枚自分の手札に加える。
- ・相手のデッキからカードを1枚自分の手札に加える。
- ・相手の墓地からカードを1枚自分の手札に加える。

「この中で俺が予告するのは、相手のデッキからカードを1枚加えることだ！」

俺がそう宣言すると、紅の予告状が花恋のフィールドに突き刺さる。

これで予告は完了だ…さあ、仕掛けるぞ！

「アルセーナの効果！俺は花恋のデッキからカードを1枚頂戴する！」

そうして、再びアルセーナが指をパチンとならし、花恋のデッキからカードが1枚俺の手札に加わる。

《破天荒な風》か…悪くないカードだ…上手く行けばこのターンで決められるかもしれないな。

「予告を完遂したことにより、紅の予告状の効果が発動する！俺はアルセーナの攻撃力をターン終了時まで倍にする！」

PTアルセーナ（ATK2300↓4600）

「そして、再びペンデュラム召喚!!来い！俺のモンスター！《PT―叛逆の導き手ジョーカー》!!」

叛逆の導き手ジョーカー レベル6 攻撃表示（ATK2000）

姿を現したのは白のドミノマスクにマジシャンのような黒の怪盗

服を身に纏っている青年。その青年は不敵な笑みを浮かべていた。

「『PT―叛逆の導き手ジョーカー』の効果！―ターンに1度、自分のフィールドのモンスターを装備し、そのモンスターの攻撃力分だけこのカードの攻撃力をアップする。俺はアルセーナを装備するよ！」

PT―叛逆の導き手ジョーカー（ATK2000↓6600）

「そして、さらに『破天荒な風』を発動！このカードの効果により、ジョーカーの攻撃力・守備力を次の俺のスタンバイフェイズまで1000ポイントアップする！」

PT―叛逆の導き手ジョーカー（ATK6600↓7600）

「いくよ！バトル！叛逆の導き手ジョーカーで、希望王ホープに攻撃！」

「くっ！まずいわね…ジョーカーの効果は…！」

「ああ！ジョーカーは俺のライフが相手より2000ポイント以上少ない時、バトルフェイズ終了時まで相手のあらゆるカードの効果を無効にする！そして、ジョーカーがアルセーナを装備している時、相手の受ける戦闘ダメージは倍になる！」

「なるほど…あの時、わざとダメージを受けたのもすべてはこの瞬間の為だったのね…さすがは侑哉、この短期間で私達が作ったカードを使いこなしているなんて」

「いや、まだまださ…もつと使いこなせるようになってみせるよ！」

「ええ…いつでも協力するからどんどん頼ってね！」

「ああ…いけ！ジョーカー！ファントムショット!!」

『チエックメイトだ！』

ジョーカーはそう口にし、希望皇ホープに弾丸を放つ。

そして、その弾丸はホープを貫き、花恋のライフを0にした。

花恋 LP4000↓0

／／／／／／／／／／／／／／／／

「いや、面白かった！もう少し試してみたいところだけど、さすがに家に戻らないと不味いか…」

「そうね、そろそろ戻りましょうか。昼食もまだだし…あ、そうだ！葵ちゃんも食べていけない？」

「はい！ぜひ！」

「やったー！侑哉さんのご飯が食べられるんですね！」

「俺が作る前提なのね…というか、レイがいつものレイに戻ってる…まあ、なんか安心したけど…それじゃあ、家に帰ってご飯にしよう！」

そうして、俺達は家に向かって歩を進めるのだった。

そういえば、デュエルに夢中で忘れていたが、葵にはいつ謝ろうか…さすがにこのままってわけにはいかないし。

ああ…どうしよう。

俺は未だに解決できていない問題を考えながら帰り道を歩いていくのだった。